

ー床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー

南田代遺跡

(川辺町)

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





序 文

当センターでは、鹿児島県が行う床上浸水対策特別緊急事業（万之瀬川）に伴って、平成13年度から平成15年度にかけて、川辺郡川辺町に所在する南田代遺跡と古市遺跡の発掘調査を行いました。

この報告書は、南田代遺跡に係る発掘調査の記録です。

鹿児島市権現ヶ尾を水源として、川辺町から金峰町、加世田市を経て吹上浜に注ぐ万之瀬川は、延長36kmで、これまで、幾たびか氾濫を繰り返してきました。

南田代遺跡は、対岸に古市遺跡を見て万之瀬川の右岸、標高約40mの自然堤防上に立地しており、縄文時代早期から中世までの複合遺跡です。縄文時代前期・中期・晩期の土器・石器などの遺物が数多く出土し、また30以上の集石や石斧埋納遺構、磨石集積、剥片集積などの遺構も検出されました。

これらの遺構や遺物は、万之瀬川が氾濫を繰り返しつつも、なお、南田代遺跡をはじめ、流域の人々が豊かな生活を営々と築いてきたことを偲ばせます。

この調査の成果が、別にまとめた古市遺跡の調査記録と併せて、地域研究や埋蔵文化財の啓発普及の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご協力いただいた鹿児島県土木部をはじめ、ご協力をいただいた川辺町教育委員会、そして、調査に従事された地域の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成17年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 木 原 俊 孝

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みなみたしろいせき							
書 名	南田代遺跡							
副 書 名	床上浸水対策特別事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	８８							
編 著 者 名	彌榮久志，平木場秀男，福永修一，石原田高広							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899-4461 国分市上之段1175-1 TEL0995-48-5811							
発行年月日	2005年３月30日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査起因
		市町村	遺跡番号	° ’ ”	° ’ ”			
みなみ た しろ い せき 南 田代遺跡	か ー ご し ま け ん 鹿児島県 か ー わ な べ ぐ ん 川辺郡 か ー わ な べ ち ょ う 川辺町 た ー べ ー た 田部田 あ ー ざ み な み た し ろ 字南田代	462021	27-82-0	31° 53’ 15”	130° 17’ 35”	20010507～ 20010829 20021004～ 20030320 20030506～ 20030527	13,700	床 上 浸 水 対 策 特 別 緊 急 事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
南 田 代 遺 跡		縄文時代 (早期)	集石，磨石集積 石斧埋納 剥片集積 黒耀石埋納 集石		塞ノ神式土器			
		(前期)			轟式土器，曾畑式土器 深浦式土器，石鏃			
		(中期)			阿高式土器，春日式土器 船元式土器			
		(後期) (晩期)			御領式土器 黒川式土器			
		弥生時代 古墳時代 古代 中世			高橋式土器，松木蘭式土器 成川式土器 土師器，須恵器 土師器，青磁			



南田代遺跡位置図

例 言

- 1 本報告書は、床上浸水対策特別緊急事業（万之瀬川）に伴う南田代遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県川辺郡川辺町に所在し、県遺跡台帳の川辺町27-82-0に該当する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県土木部河川課（加世田土木事務所）からの受託事業として鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は、平成13年度から平成15年度にかけて実施し、整理作業は平成16年度に実施した。
- 5 本書の遺物番号は土器、石器ごとの通し番号であり、本文、挿図、図版と一致する。
- 6 出土した石器の実測・トレースの一部は(株)九州文化財研究所に委託した。また、出土土器に付着した煤の放射性炭素年代測定を(株)パレオ・ラボに、出土した炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定を(株)パリノ・サーヴェイに依頼した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
- 8 本書で使用した方位は、すべて磁北である。
- 9 現地調査に関する実測及び写真撮影は、それぞれ各調査年度の調査担当者で行った。
- 10 土器の実測・トレース、遺構図の製図・トレース等は、彌榮久志、平木場秀男が中心となり整理作業員の協力を得ながら行った。
- 11 本書の執筆分担は、第Ⅰ・Ⅳ章第1節・第Ⅷ章第1節を平木場秀男が、第Ⅱ・Ⅲ章を西園勝彦が、第Ⅳ章第2節・第Ⅴ・Ⅵ章・第Ⅷ章第2節を彌榮久志が、第Ⅳ章第3節・第Ⅷ章第3節を福永修一が行った。
- 12 本書に掲載した遺物写真の撮影は鶴田静彦、福永修一、西園勝彦、吉岡康弘が行った。
- 13 本書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い、彌榮久志、平木場秀男が担当した。
- 14 出土遺物及び発掘調査・整理作業に関わる図面・写真等の記録類は、鹿児島県埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の概要と調査経過	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	7
第1節 遺跡の位置と自然環境	7
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	8
第Ⅲ章 遺跡の層位	12
第Ⅳ章 縄文時代の遺構と遺物	15
第1節 検出遺構	15
第2節 出土土器	38
第3節 出土石器	118
第Ⅴ章 弥生時代・古墳時代の遺物	194
第1節 弥生時代の遺物	194
第2節 古墳時代の遺物	198
第Ⅵ章 古代・中世の遺物	201
第1節 古代の遺物	201
第2節 中世の遺物	201
第Ⅶ章 分析・同定	204
第Ⅷ章 発掘調査のまとめ	206
第1節 検出遺構	206
第2節 出土土器	207
第3節 出土石器	212
写真図版	215

挿図目次

第1図 南田代遺跡周辺地形図	2
第2図 確認トレンチ配置図	4
第3図 グリッド配置図	5
第4図 南田代遺跡周辺の遺跡	8
第5図 南田代遺跡地形図	11
第6図 基本土層柱状模式図	12
第7図 遺跡内各地点の土層	12
第8図 土層断面図	13
第9図 遺構配置図	16
第10図 集石1号, 2号, 4号	17
第11図 集石1～4号検出状況	17
第12図 集石3号	18
第13図 集石21号, 24号	19
第14図 集石21号, 24号検出状況	19
第15図 集石25号, 32号, 34号	20
第16図 集石31号, 33号, 35号	21
第17図 集石31号, 34号検出状況	21
第18図 集石30号	22
第19図 集石30号, 33号検出状況	22
第20図 集石9号, 22号, 23号	24
第21図 集石22号, 23号検出状況	24
第22図 集石10号, 11号, 17号, 29号	24
第23図 集石10号, 11号, 17号, 29号検出状況	25
第24図 集石8号	25
第25図 集石18号	26
第26図 集石8号, 18号検出状況	27
第27図 集石12号, 26号	27
第28図 集石13号, 14号, 15号	28
第29図 集石28号	29
第30図 集石12号, 13号, 14号, 15号, 26号, 28号 検出状況	29
第31図 集石16号	30
第32図 集石20号	31
第33図 集石5号, 6号, 7号, 19号, 27号	32
第34図 石斧埋納遺構1号	34
第35図 石斧埋納遺構2号	34
第36図 磨石集積遺構1号	35
第37図 磨石集積遺構2号	35
第38図 黒耀石原石埋納遺構	36
第39図 剥片集積遺構	36
第40図 剥片集中区	37
第41図 縄文時代の土器出土分布図1 (Ⅰ～XXIV)	39
第42図 縄文時代の土器出土分布図2 (Ⅰ～Ⅲ類)	40
第43図 縄文時代の土器出土分布図3 (Ⅳ～Ⅵ類)	41
第44図 縄文時代の土器1 (Ⅰ～Ⅳ類)	42
第45図 縄文時代の土器2 (Ⅴ類)	43

第46図	縄文時代の土器3 (V, VI類)……………44
第47図	縄文時代の土器出土分布図4 (VII類)……………46
第48図	縄文時代の土器4 (VII類①)……………47
第49図	縄文時代の土器5 (VII類②)……………48
第50図	縄文時代の土器6 (VII類③)……………49
第51図	縄文時代の土器出土分布図5 (VII a・VII b・VII c類)……………50
第52図	縄文時代の土器7 (VII a類①)……………51
第53図	縄文時代の土器8 (VII a類②)……………52
第54図	縄文時代の土器9 (VII a類③)……………53
第55図	縄文時代の土器10 (VII b類①)……………56
第56図	縄文時代の土器11 (VII b類②)……………57
第57図	縄文時代の土器12 (VII b類③)……………58
第58図	縄文時代の土器13 (VII b類④)……………59
第59図	縄文時代の土器14 (VII c類①)……………61
第60図	縄文時代の土器15 (VII c類②)……………62
第61図	縄文時代の土器16 (VII c類③)……………63
第62図	縄文時代の土器17 (VII a～VII c類底部)……………64
第63図	縄文時代の土器18 (IX a類)……………65
第64図	縄文時代の土器出土分布図6 (IX類)……………66
第65図	縄文時代の土器19 (IX b類)……………67
第66図	縄文時代の土器20 (IX c類)……………68
第67図	縄文時代の土器21 (IX d類)……………69
第68図	縄文時代の土器22 (IX e類)……………70
第69図	縄文時代の土器出土分布図7 (X類)……………71
第70図	縄文時代の土器23 (X a類①)……………72
第71図	縄文時代の土器24 (X a類②)……………73
第72図	縄文時代の土器25 (X b類)……………75
第73図	縄文時代の土器26 (X c類)……………76
第74図	縄文時代の土器27 (IX類, X類)……………77
第75図	縄文時代の土器28 (XI, XII類)……………78
第76図	縄文時代の土器29 (X III a類)……………79
第77図	縄文時代の土器出土分布図8 (XII, X III a, X III b類)……………80
第78図	縄文時代の土器30 (X III b類)……………81
第79図	縄文時代の土器出土分布図9 (XIV, XV類)……………82
第80図	縄文時代の土器31 (X IV類①)……………83
第81図	縄文時代の土器32 (X IV類②)……………84
第82図	縄文時代の土器33 (X V類)……………85
第83図	縄文時代の土器出土分布図10 (X VI, X VII, X VIII類)……………86
第84図	縄文時代の土器34 (X VI, X VII類)……………87
第85図	縄文時代の土器35 (X VIII類①)……………88
第86図	縄文時代の土器36 (X VIII類②)……………89
第87図	縄文時代の土器37 (X VIII類③)……………90
第88図	縄文時代の土器38 (X VIII類④)……………91
第89図	縄文時代の土器39 (X VIII類⑤)……………92

第90図	縄文時代の土器40 (X IX類, X X類, X X I類)……………93
第91図	縄文時代の土器出土分布図11 (X IX, X X, X X I類)……………94
第92図	縄文時代の土器41 (X X II類①)……………95
第93図	縄文時代の土器42 (X X II類②)……………96
第94図	縄文時代の土器出土分布図12 (X X II, X X III, X X IV類)……………97
第95図	縄文時代の土器43 (X X III類①)……………98
第96図	縄文時代の土器44 (X X III類②)……………99
第97図	縄文時代の土器45 (X X III類③)……………100
第98図	縄文時代の土器46 (X X III類④)……………101
第99図	縄文時代の土器47 (X X III類⑤)……………102
第100図	縄文時代の土器48 (X X IV類①)……………103
第101図	縄文時代の土器49 (X X IV類②)……………104
第102図	縄文時代の土器50 (土製品)……………105
第103図	縄文時代の土器51 (遺構内出土①)……………105
第104図	縄文時代の土器52 (遺構内出土②)……………106
第105図	石器出土分布図1……………119
第106図	石器出土分布図2 (石鏃, 異形石器, ドリル他)……………120
第107図	縄文時代の石器1 (石鏃①)……………121
第108図	縄文時代の石器2 (石鏃②)……………122
第109図	縄文時代の石器3 (石鏃③)……………123
第110図	縄文時代の石器4 (石鏃④)……………124
第111図	石器出土分布図3 (石匙, 削器, 尖頭状石器)……………126
第112図	縄文時代の石器5 (石匙①)……………127
第113図	縄文時代の石器6 (石匙②)……………128
第114図	縄文時代の石器7 (石匙③)……………129
第115図	縄文時代の石器8 (石匙④)……………130
第116図	縄文時代の石器9 (石匙⑤)……………131
第117図	縄文時代の石器10 (石匙⑥)……………132
第118図	縄文時代の石器11 (石匙⑦)……………133
第119図	縄文時代の石器12 (石匙⑧)……………134
第120図	縄文時代の石器13 (石匙⑨)……………135
第121図	縄文時代の石器14 (石匙⑩)……………136
第122図	縄文時代の石器15 (石匙⑪)……………137
第123図	縄文時代の石器16 (石匙⑫)……………138
第124図	縄文時代の石器17 (石匙⑬)……………139
第125図	縄文時代の石器18 (石匙⑭)……………140
第126図	縄文時代の石器19 (石錘)……………142
第127図	縄文時代の石器20 (削器①)……………143
第128図	縄文時代の石器21 (削器②)……………144
第129図	縄文時代の石器22 (削器③)……………145
第130図	縄文時代の石器23 (削器④)……………146
第131図	縄文時代の石器24 (削器⑤)……………147
第132図	縄文時代の石器25 (削器⑥)……………148

第133図	縄文時代の石器26 (尖頭状石器)……………149
第134図	縄文時代の石器27 (楔形石器)……………150
第135図	縄文時代の石器28 (二次加工剥片, 異形石器, 玉)……………151
第136図	石器出土分布図4 (石核, 剥片, ハンマーストーン)……………152
第137図	縄文時代の石器29 (石核①)……………153
第138図	縄文時代の石器30 (石核②)……………154
第139図	縄文時代の石器31 (石核③)……………155
第140図	縄文時代の石器32 (石核④)……………156
第141図	縄文時代の石器33 (石核⑤)……………157
第142図	縄文時代の石器34 (石核⑥)……………158
第143図	縄文時代の石器35 (石核⑦)……………159
第144図	縄文時代の石器36 (石核⑧)……………160
第145図	縄文時代の石器37 (石核⑨)……………161
第146図	縄文時代の石器38 (石核⑩)……………162
第147図	縄文時代の石器39 (石核⑪)……………163
第148図	縄文時代の石器40 (石斧①)……………164
第149図	縄文時代の石器41 (石斧②)……………165
第150図	縄文時代の石器42 (石斧③)……………166
第151図	縄文時代の石器43 (石斧④)……………167
第152図	縄文時代の石器44 (石斧⑤)……………168
第153図	縄文時代の石器45 (石斧⑥)……………169
第154図	縄文時代の石器46 (石斧⑦)……………170
第155図	縄文時代の石器47 (石斧⑧)……………172
第156図	縄文時代の石器48 (ハンマーストーン)…173
第157図	縄文時代の石器49 (磨石・敲石①)……………174
第158図	縄文時代の石器50 (磨石・敲石②)……………175
第159図	縄文時代の石器51 (磨石・敲石③)……………176
第160図	縄文時代の石器52 (磨石・敲石④)……………177
第161図	縄文時代の石器53 (磨石・敲石⑤)……………178
第162図	縄文時代の石器54 (磨石・敲石⑥)……………179
第163図	縄文時代の石器55 (石皿①)……………181
第164図	縄文時代の石器56 (石皿②)……………182
第165図	縄文時代の石器57 (石皿③)……………183
第166図	縄文時代の石器58 (石皿④)……………184
第167図	縄文時代の石器59 (石皿⑤)……………185
第168図	縄文時代の石器60 (礫石器)……………186
第169図	縄文時代の石器61 (剥片①)……………187
第170図	縄文時代の石器62 (剥片②)……………188
第171図	縄文時代の石器63 (剥片③)……………189
第172図	縄文時代の石器64 (剥片④)……………190
第173図	縄文時代の石器65 (剥片⑤)……………191
第174図	縄文時代の石器66 (剥片⑥)……………192
第175図	弥生時代の土器1 (甕①)……………194
第176図	弥生時代～中世の土器出土分布図……………195
第177図	弥生時代の土器2 (甕②)……………196
第178図	弥生時代の土器3 (壺, 高坏)……………197

第179図	古墳時代の土器1 (甕①)……………198
第180図	古墳時代の土器2 (甕②)……………199
第181図	古墳時代の土器3 (壺, 高坏他)……………200
第182図	古代, 中世の土器……………201
第183図	第1節に関連する遺跡等の位置図……………207
第184図	南田代遺跡縄文土器系統一覧表……………211

表目次

第1表	南田代遺跡周辺の遺跡一覧表……………9
第2表	集石集計表……………33
第3表	集石重量組成表……………33
第4表	黒耀石原石埋納遺構計測表……………36
第5表	剥片集積遺構計測表……………37
第6表	剥片集中区計測表……………37
第7表	縄文時代土器観察表1……………107
第8表	縄文時代土器観察表2……………108
第9表	縄文時代土器観察表3……………109
第10表	縄文時代土器観察表4……………110
第11表	縄文時代土器観察表5……………111
第12表	縄文時代土器観察表6……………112
第13表	縄文時代土器観察表7……………113
第14表	縄文時代土器観察表8……………114
第15表	縄文時代土器観察表9……………115
第16表	縄文時代土器観察表10……………116
第17表	縄文時代土器観察表11……………117
第18表	縄文時代石器観察表(1)……………124
第19表	縄文時代石器観察表(2)……………125
第20表	縄文時代石器観察表(3)……………141
第21表	縄文時代石器観察表(4)……………142
第22表	縄文時代石器観察表(5)……………149
第23表	縄文時代石器観察表(6)……………150
第24表	縄文時代石器観察表(7)……………158
第25表	縄文時代石器観察表(8)……………159
第26表	縄文時代石器観察表(9)……………162
第27表	縄文時代石器観察表(10)……………163
第28表	縄文時代石器観察表(11)……………164
第29表	縄文時代石器観察表(12)……………171
第30表	縄文時代石器観察表(13)……………180
第31表	縄文時代石器観察表(14)……………184
第32表	縄文時代石器観察表(15)……………185
第33表	縄文時代石器観察表(16)……………193
第34表	弥生時代～中世の土器観察表1……………202
第35表	弥生時代～中世の土器観察表2……………203
第36表	放射性炭素年代測定および樹種同定結果…204
第37表	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果…205

図版目次

図版 1	南田代遺跡近景 1	下	遺物出土状況 5
図版 2	南田代遺跡近景 2	図版14	上左 轟式土器出土状況
図版 3	上 南田代遺跡近景 3		上右 轟式土器出土状況
	下 土層断面		中左 剥片出土状況
図版 4	上 石斧埋納遺構 2号		中右 剥片出土状況
	中 磨石集積遺構 2号		下左 弥生時代土器出土状況
	下 剥片集積遺構		下右 弥生時代土器出土状況
図版 5	上 黒耀石原石埋納遺構	図版15	上左 成尾英仁氏現地指導
	中左 石斧埋納遺構 1号		中左 灰コラ含土層
	中右 黒耀石原石埋納遺構		上右 調査風景
	下左 石斧埋納遺構 1号		下 南田代遺跡近景
	下右 剥片集積遺構	図版16	出土遺物 1 (縄文土器 I ～ VI b 類)
図版 6	上 集石20号	図版17	出土遺物 2 (縄文土器 VII, VIII a 類)
	中 集石13号	図版18	出土遺物 3 (縄文土器 VIII a 類)
	下左 集石28号	図版19	出土遺物 4 (縄文土器 VIII b 類)
	下右 集石26号	図版20	出土遺物 5 (縄文土器 VIII c 類)
図版 7	上 集石16号	図版21	出土遺物 6
	中 集石18号		(縄文土器 IX a ～ IX e, X a ～ X c 類)
	下 集石 8号	図版22	出土遺物 7 (縄文土器 IX ・ X ～ X III b 類)
図版 8	上左 集石22号	図版23	出土遺物 8
	上右 集石21号		(縄文土器 IX d, X a, X b, XIV, XVIII, XX III 類)
	中上左 集石24号	図版24	出土遺物 9 (縄文土器 X IV ～ X VII 類)
	中上右 集石23号	図版25	出土遺物10 (縄文土器 X VIII 類)
	中下左 集石19号	図版26	出土遺物11 (縄文土器 X X II, X X III 類)
	中下右 集石15号	図版27	出土遺物12 (縄文土器 X X III, X X IV 類)
	下左 集石 6号	図版28	出土遺物13 (石器①)
	下右 集石 5号	図版29	出土遺物14 (石器②)
図版 9	上左 集石27号	図版30	出土遺物15 (石器③)
	上右 集石 7号	図版31	出土遺物16 (石器④)
	中上左 集石11号	図版32	出土遺物17 (石器⑤)
	中上右 集石 9号	図版33	出土遺物18 (石器⑥)
	中下左 集石17号	図版34	出土遺物19 (弥生時代の土器①)
	中下右 集石10号	図版35	出土遺物20 (弥生時代の土器②)
	下左 集石33号	図版36	出土遺物21 (古墳時代・古代の土器)
	下右 集石34号		
図版10	上 集石12号～16号		
	中 集石14号		
	下 集石12号		
図版11	上 集石 3号 1		
	中 集石 3号 2		
	下 集石 3号 3		
図版12	上 遺物出土状況 1		
	下左 磨石集積遺構 1号		
	下右 遺物出土状況 2		
図版13	上 遺物出土状況 3		
	中 遺物出土状況 4		

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部河川課（加世田土木事務所、以下土木部）は、中小河川改修事業（万之瀬川）の計画に基づいて、川辺郡川辺町内において計画した事業に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育長文化財課に照会した。

当該工事の予定地には、周知の遺跡として、古墳時代から中世にかけての遺物が採集されている「古市遺跡」と、その対岸に縄文時代の土器や石器が採集されている「南田代遺跡」が存在する。このことから、土木部、県文化財課、県立埋蔵文化財センターとの協議の結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために古市遺跡では確認調査を、南田代遺跡では詳細分布調査（試掘調査）を行った。調査は川辺町教育委員会が担当した。

平成12年2月1日から平成12年3月21日まで予定地で確認調査をした結果、予定地において古市遺跡、南田代遺跡が確認された。

そこで、県土木部、川辺町教育委員会、県文化財課、県埋蔵文化財センターは再度協議し、古市遺跡、南田代遺跡の現状保存や、設計変更が不可能であることから、記録保存のための緊急発掘調査（本調査）を実施することとなった。

本調査は、南田代遺跡が平成13年5月7日から平成13年8月31日まで10,000㎡を、古市遺跡が平成13年9月3日から平成14年3月25日まで13,000㎡を対象として県埋蔵文化財センターが実施した。

第2節 調査の組織

【平成13年度（本調査）】

事業主体 鹿児島県土木部河川課（加世田土木事務所）
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括

鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 井上 明文
調査企画

鹿児島県立埋蔵文化財センター

	次長兼総務課長	黒木 友幸
〃	調査課	調査課長 新東 晃一
〃	〃	調査補佐 立神 次郎
〃	〃	第一調査係長 青崎 和憲
〃	〃	主任文化財主事 中村 耕治

調査担当者

鹿児島県立埋蔵文化財センター

調査課	文化財研究員	福永 修一
〃	〃	文化財研究員 菅牟田 勉

調査事務

鹿児島県立埋蔵文化財センター

総務課	総務係長	前田 昭信
〃	〃	主 査 今村孝一郎

調査指導

平成13年6月27日

鹿児島県立博物館学芸主事 成尾 英仁

【平成14年度（本調査）】

事業主体 鹿児島県土木部河川課（加世田土木事務所）
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括

鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 井上 明文
調査企画

鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長兼総務課長 田中 文雄

〃	調査課	調査課長	新東 晃一
〃	〃	調査補佐	立神 次郎
		主任文化財主事兼	
〃	〃	第一調査係長	池畑 耕一

調査担当者

鹿児島県立埋蔵文化財センター

調査課	文化財主事	岩澤 和徳
〃	〃	文化財主事 日高 正人
〃	〃	文化財研究員 西園 勝彦
〃	〃	文化財研究員 橋口 亘

調査事務

鹿児島県立埋蔵文化財センター

総務課	総務係長	前田 昭信
〃	〃	主 査 栗山 和己

調査指導

平成15年2月4日

鹿児島大学法学部教授 森脇 広

平成15年2月14日

鹿児島大学法学部助教授 本田 道輝

【平成15年度（本調査）】

事業主体 鹿児島県土木部河川課（加世田土木事務所）
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括

鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 木原 俊孝
調査企画

鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長兼総務課長 田中 文雄



第1図 南田代遺跡周辺地形図

〃	調査課	調査課長	新東 晃一
〃	〃	調査補佐	立神 次郎
		主任文化財主事兼	
〃	〃	第一調査係長	池畑 耕一
調査担当者			
鹿児島県立埋蔵文化財センター			
〃	調査課	文化財主事	宗岡 克英
〃	〃	文化財研究員	上床 真
調査事務			
鹿児島県立埋蔵文化財センター			
	総務課	総務係長	平野 浩二

【平成16年度（整理・報告書作成作業）】

事業主体	鹿児島県土木部河川課（加世田土木事務所）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 木原 俊孝		
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		次長兼総務課長	賞雅 彰
〃	調査課	調査課長	新東 晃一
〃	〃	調査補佐	立神 次郎
		主任文化財主事兼	
〃	〃	第二調査係長	彌榮 久志
整理担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		主任文化財主事兼	
〃	調査課	第二調査係長	彌榮 久志
〃	〃	文化財主事	平木場秀男
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	総務課	総務係長	平野 浩二

第3節 調査の概要と調査経過

【平成13年度】

平成13年5月7日から平成13年8月31日（実働123日）まで、発掘作業員36名で実施した。

平成13年度の調査区域は、新堤防と旧堤防の間約10,000㎡である。調査範囲の絞込みをするため、6×2mのトレンチを20ヶ所設定し、確認調査を実施した。（第2図 T1～T20）その結果、築堤部分を含めた約2,200㎡に遺跡が存在していることを確認した。

そこで、建設予定ラインを基準として東から西方向へ1～33区、南方向へA～H区、北方向へア～セ区までとした10m単位のグリッドを設定し（第3図）、5月24日より全面調査を実施した。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の包含層を人力で掘り下げ、遺構の検出を行った。

調査の結果、縄文時代前期～中期の集石4基が検出された。また、Ⅱa層から弥生・古墳時代、Ⅲ層から縄文時代晩期、Ⅳ層から縄文時代中期、Ⅴ層から縄文時代前期の遺物も数多く出土した。

以下、調査の経過については日誌抄にて略述する。

5月7日	調査開始	表土剥ぎ	トレンチ（T1～T10）設定掘り下げ
5月9日	トレンチ（T11～T17）	設定掘り下げ	
10日	調査グリッド設定		
11日	トレンチ配置図実測		
15日	トレンチ（T18～T20）	設定掘り下げ	
16日	トレンチ掘り下げ、	遺物取上、実測	
24日	掘削部分の全面調査開始		
25日	トレンチ写真撮影後、	埋め戻し	
28日	重機による表土剥ぎ		
6月1日	グリッド設定、	グリッド位置図実測	
4日	B～D－5～9区Ⅱ層	上面検出	
14日	C～E－4～8区Ⅱb層	上面検出	
27日	県立博物館成尾英仁学芸主事	現地指導	
	B～D－5～8区Ⅱa層	掘り下げ	
7月2日	B～D－4～8区	写真撮影、遺物取上	
	B～D－4～8区Ⅲ層	上面検出、地形図作成	
4日	B～C－2～4区Ⅲ層	掘り下げ	
11日	1号集石	検出	
16日	B～E－5～8区Ⅴ層	掘り下げ	
25日	1号集石	実測	
8月1日	調査区全域、	湧水による浸水	
9日	B～C－5～6区Ⅴ層	遺物出土状況撮影	
10日	2号集石	実測	
21日	D－7区東側土層	断面実測	
22日	加世田市立万世小学校	児童発掘体験	
27日	3号集石	実測	
28日	4号集石	実測	
9月10日	B－5～8区北側土層	断面実測	
17日	埋め戻し	終了	
18日	県土木部への引き渡し	終了	

【平成14年度】

平成14年10月4日から平成15年3月20日（実働95日）まで、発掘作業員35名で実施した。

平成14年度の調査区域は、前年度の調査未了部分である万之瀬川下流約6,000㎡を予定していたが、調査範囲の絞込みをするため本調査に先行してトレンチを24ヶ所設定し、確認調査を実施した。（第2図 T21～T44）その結果、新たに万之瀬川の下流に向かって約4,500㎡の範囲に遺跡の存在が確認されたため、総面積10,500㎡を行った。

10月4日より全面調査を実施した。Ⅲ層に縄文時代晩



第2図 確認トレンチ配置図



第3図 グリッド配置図

期から弥生時代前期頃に降灰した灰褐色火山灰（灰コラ）の堆積が一部に見られたので、その上下でⅢa層・Ⅲb層と分けて調査を行った。

調査の結果、万之瀬川の下流域に広がるように24基の集石が検出された。また、3本の打製石斧と2つの剥片で構成され、隙間無く横に立った状態で並んでいた石斧埋納遺構が調査区北側から1基、比較的万之瀬川に近い場所で磨石集積遺構が2基、川岸近くで拳大の黒耀石原石が15個土坑に納められていた黒耀石原石埋納遺構が1基、調査区中央付近から計68個の剥片が直径40～50cmの範囲に納まっていた剥片集積遺構が1基、安山岩剥片の集中が見られた剥片集中区など多様な遺構も検出された。いずれも、Ⅲ層から検出され、遺構全体の半数近くは縄文時代前期の土器を伴っていた。

遺物はⅢa層より縄文時代晩期、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺物が万遍なく出土した。また、Ⅲb層から縄文時代早期、前期、中期、後期の遺物が出土した。特に縄文時代前期の轟式土器は大量に出土し、万之瀬川中流域の縄文時代前期の様相を知る上で貴重な資料であると言える。

以下、調査の経過については日誌抄にて略述する。

- 8月5日 トレンチ予定地表土剥ぎ
- 13日 24ヶ所トレンチ設定（T21～44）、掘り下げ
- 19日 トレンチ掘り下げ、遺物出土
- 9月18日 重機による表土剥ぎ
- 10月4日 全面調査開始
- 7日 カ～ク－29～33区Ⅲ層掘り下げ
- 10日 県土木部と境界杭などの協議
グリッド杭打ち
- 11月6日 イ～キ－29～32区遺物取上
- 18日 調査用取付道路設置
- 28日 オ～ク－25～30区Ⅲ層掘り下げ
- 12月5日 石斧埋納遺構1号検出
- 6日 7号集石写真撮影
- 12日 ウ～オ－26～28区Ⅲ層掘り下げ
- 17日 7号集石実測
- 1月7日 D～F－13～14区Ⅲ層掘り下げ
- 9日 ベルト断面精査、下層（V層）確認
- 17日 A～C－25～29区重機による表土剥ぎ
- 21日 A～ア－26～28区Ⅲ層掘り下げ
- 2月3日 A～ア－26～28区Ⅲ層遺物出土状況撮影
- 4日 鹿児島大学森脇広教授現地指導
- 7日 空中写真撮影
- 10日 9号・10号・11号・17号集石実測
- 12日 19号集石写真撮影・実測
- 14日 鹿児島大学本田道輝助教授現地指導
- 20日 地形図作成、16号・20号集石実測
- 25日 石斧埋納遺構1号実測終了

- 3月4日 D～G－12～17区、B～C－21～23区Ⅲ層掘り下げ、22号・23号集石写真撮影
- 5日 未売地横Ⅲ層掘り下げ、14号集石実測
ポイント釘位置平板実測
- 7日 A、ア～ウ－24～28区Ⅲ層掘り下げ終了
- 11日 剥片集積遺構、剥片集中区写真撮影
- 14日 8号・10号・11号・12号・15号・16号集石実測、一部埋め戻し
- 17日 地形図作成、21号・22号・23号・25号集石実測
- 18日 24号・26号・27号集石実測、調査終了

【平成15年度】

平成15年5月6日から平成15年5月27日（実働14日）まで、発掘作業員31名で実施した。

平成15年度の調査区域は、前年度の調査未了部分であるア～ウ－24～29区周辺の約1,000㎡について調査を行った。

調査の結果、Ⅲ層から4基の集石が検出された。また、6本の磨製石斧で構成された石斧埋納遺構も、同じくⅢ層より検出された。

遺物はⅢ層より縄文時代晩期～中世の遺物が多量に出土した。また、一部に縄文時代早期の塞ノ神式土器の出土も見られた。Ⅲb層から縄文時代前期～中期の遺物が多量に出土した。

以下、調査の経過については日誌抄にて略述する。

- 5月6日 調査開始、アカホヤ二次堆積層掘り下げ
- 8日 グリッド杭打ち、30号集石実測・写真撮影
- 12日 ア～ウ－26～28区掘り下げ、土器集中部写真撮影
- 13日 ア～A－27～28区重機による表土剥ぎ
- 14日 石斧埋納遺構2号写真撮影・実測
砂質部分に新たにトレンチ設定
- 15日 31号集石実測
- 19日 31号、32号集石実測
- 20日 32号、33号集石、石斧埋納遺構2号実測
- 21日 33号、34号集石実測
- 27日 地形図作成、調査終了

【平成16年度】

整理および報告書作成は、平成16年4月6日から平成17年3月11日（実働199日）まで、鹿児島県立埋蔵文化財センターにて整理作業員11名で実施した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

南田代遺跡の所在する川辺町は、北緯31° 23' 15"、東経130° 23' 40" のところにあり薩摩半島南部中央に位置している。県庁所在地である鹿児島市に隣接し、東は加世田市、南は知覧町・枕崎市、北は金峰町に接する。地形的には、東西約8km、南北約22kmで、中央部が狭まる分銅形をし、南北を分けるようにして流れる万之瀬川とその支流周辺に広がる河岸段丘・平野部以外は標高約100mのシラス台地と山岳と溪谷が大勢を占める。特に南部・北部・東部は平地に乏しい。溪谷を流れる小流には八瀬尾の滝をはじめとするいくつかの滝が知られ、万之瀬川に注ぎ水田の形成を促している。町内には四万十層群の中の川辺層群と言われる頁岩や砂岩などの基盤層の存在が知られ、特に八瀬尾の滝付近には蛇紋岩がみられる。

南田代遺跡は、川辺郡川辺町田部田字南田代に位置し、役場のある町の中心部から西へ1.7km離れる。

現在遺跡周囲には水田・畑・豚舎が広がっている。北西へ2km行くと加世田市・金峰町・川辺町の3市町の町境がある。また、2km下流には、古勢滝が形成されている。また、1.5km北東に田上岳、4km北西に中岳を臨み、南田代遺跡はこの田上岳と中岳との間に万之瀬川に向かって広がる扇状地形をした川端の突き出た箇所の対岸の自然堤防上に位置する。

第2節 歴史的環境

南田代遺跡は、以前に現鹿児島大学教授の本田道輝氏や当センター職員の東和幸氏らが多くの遺物を表面採取されており、その中に挾状耳飾りをはじめとする玉類があり注目されていた。また、万之瀬川とその支流の加世田川・大谷川流域には多くの遺跡が知られている。《旧石器時代》

川辺町内の旧石器時代の遺跡では、寺山遺跡をはじめに背野平遺跡、津フジ遺跡、上桑持野遺跡などの遺跡が知られる。これらの遺跡のうち背野平遺跡以外の3遺跡は、南田代遺跡から2kmの範囲内にある。背野平遺跡も万之瀬川へ注ぐ大谷川を臨む位置にある。そのほかにも遺跡の下流域・遺跡の下流で万之瀬川と合流する加世田川流域にはいくつかの遺跡が知られている。《縄文時代》

川辺町内には、縄文時代の遺跡が多く知られている。草創期では鷹爪野遺跡で多くの遺物と共に配石遺構や集石遺構が発見され、早期では前平式土器・押型文土器・塞ノ神式土器などが出土する遺跡が多い。前期では轟式

土器・曾畑式土器が出土している遺跡が数遺跡あり、中期の遺物が出土している遺跡は少ないようである。南田代遺跡から轟式土器・曾畑式土器・阿高式土器などの土器が出土しているが、南田代遺跡の側の廻り淵遺跡からも轟式土器・曾畑式土器が出土している。中期同様に後期の遺物・遺構が出土した遺跡も少なく指宿式土器・市来式土器の出土している遺跡が幾つか知られるのみであり、晩期の遺跡も黒川式土器が出土した遺跡が数例あるのみであるが、南田代遺跡からは晩期の遺物も出土した。これらの遺跡は、万之瀬川とその支流沿いに広がっている。

《弥生時代・古墳時代》

弥生時代になると遺跡数がやや増える。昨年度報告書の刊行された寺山遺跡からは弥生時代中期の環壕の一部が発見されており、古市遺跡からは前期の住居跡が発見された。南田代遺跡より下流域の金峰町・加世田市には高橋貝塚・松木園遺跡・下小路遺跡など多くの遺跡が存在している。

古墳時代は更に遺跡数が増える。古市遺跡からも住居跡や多くの遺物が発見され、万之瀬川川床遺跡や持鉢松遺跡・渡畑遺跡・芝原遺跡・上水流遺跡など万之瀬川改修工事に伴う発掘調査でも多くの成果が上がっている。

《古代》

遺跡周辺の川辺町内では古代の遺跡はあまり知られないが、万之瀬川の支流の流域にある金峰町白檜野遺跡からは蔵骨器の入った石組み墓が発見されており、上記の持鉢松遺跡・渡畑遺跡・芝原遺跡・上水流遺跡からも多くの成果が上がっている。南田代遺跡の北西約3kmの付近には荒平窯跡・中岳山麓古窯跡群がある。金峰町小中原遺跡からは「阿多」と書かれた刻書土器が出土しており、付近が「古事記」,「日本書紀」に出てくる阿多の地に比定されている。

《中世》

中世では、川辺町内には多くの城跡や陣跡をはじめとする遺跡が知られ、金峰町・加世田市の中世の遺跡も万之瀬川を介してある。特に万之瀬川を介在とした物流について近年議論の盛り上がりを見せている。

南田代遺跡の周辺の遺跡をみると万之瀬川とその支流の流域に集中しており、これはどの時代も同じである。このことに川が関係していることは間違いないが、ヒトの交通手段として南田代遺跡まで船を使ったことは考えられない。先に述べたが滝の存在と水量の問題がある。南田代遺跡周辺は現在多くの水量をたたえているが、以前は歩いて対岸に行けたという。



第4図 南田代遺跡周辺の遺跡

第1表 南田代遺跡周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	地形	時代	出土遺物等	
1	南田代	川辺町永田字南田代	微高地	縄文（前・中・晩）・弥生 古墳・古代	竊式、曾畑式、阿高式、黒川式、 挾状耳飾、打製石鏃	平成11・13・14年度調査 本報告書
2	古市	川辺町永田字古市	微高地	弥生・古墳	高橋式、入来式、松木園式、成 川式	平成11・13・14年度調査
3	廻り淵	田部田廻り淵	台地端	縄文（前）	竊式、曾畑式、石匙	
4	黒木山	田部田黒木山	台地	弥生（中）	土器片散布	
5	越ヶ原	田部田越ヶ原	台地	古墳	成川式土器片散布	
6	下仁久田	田部田下仁久田	台地	縄文（早）	前平式	
7	兎ヶ城跡	下山田兎ヶ城	台地端	古墳、中世	成川式散布、中世山城？	
8	津フジ	下山田津フジほか	台地	旧石器～縄文（晩）	細石刃、細石刃核 黒川式	平成13・14年度確認調査
9	永田西	永田西	台地端	縄文（早）	押型文土器片散布	
10	南中野	永田南中野	微高地	縄文（後）～古墳	指宿式、成川式散布	
11	中野迫	永田中野迫	微高地	縄文（後）	指宿式、石斧散布	
12	寺山	永田寺山野	丘陵地	旧石器、縄文（草）、弥 生（中）	台形石器、細石刃核 手向山式、妙見式、石鏃、石匙、 黒髪式、須玖式	平成13・15年度調査本 報告書
13	八幡堀	下山田八幡堀ほか	台地	縄文	土器片散布	平成10年度確認調査
14	矢倉ヶ迫	下山田矢倉ヶ迫	台地	縄文（早）	石坂式、桑之丸式、押型文、打 製石鏃等	平成8年度確認調査
15	供養塚	下山田供養塚	台地	縄文（早）	縄文早期土器、集石遺構	平成7年度確認調査
16	西ノ平	下山田西ノ平	台地	中世	土器片散布	
17	水ヶ元	下山田水ヶ元	台地	弥生（後）～古墳（初）	松木園式、中津野式	平成4・5年度調査
18	荒多	下山田荒多	台地	縄文（早）	塞ノ神式、石鏃、黒耀石片	平成13年度確認調査 平成14年度全面調査
19	荒多迫	下山田荒多迫	台地	縄文	石匙、土器片散布	
20	上桑持野	下山田上桑持野	台地	旧石器～縄文（早）	ナイフ形石器、細石刃、塞ノ神 式	平成13年度確認調査 平成14年度全面調査
21	番屋ヶ尾	下山田番屋ヶ尾	台地	縄文～古墳	石鏃、成川式等散布	
22	答石	下山田答石ほか	山麓	縄文～弥生	土器片散布	平成5・12年度確認調査
23	塘池上	下山田塘池上ほか	台地	弥生～古墳	土器片散布	平成12年度確認調査 平成13年度全面調査
24	土器園	中山田土器園	沖積地	弥生（中）～古墳（初）	入来式、松木園式、中津野式、 打製石斧等	平成11年度確認調査
25	下ノ口	中山田下ノ口	台地	縄文（早）	押型文	
26	勝目城跡	中山田馬場ほか	台地端	南北朝以降	空堀、曲輪、土累等残存	町指定文化財
27	焼山	上山田焼山	台地	縄文（早）	前平式	
28	田中堀	上山田田中堀	台地	縄文（後）	市来式、指宿式等	本田道輝氏調査
29	君野権現洞 穴	上山田君野	山麓		溶岩性の洞穴、縄文時代の住居？	県指定文化財（天然記 念物）
30	栢木馬場	上山田栢木馬場	台地	縄文～古墳	前平式、黒川式、夜臼式、板付 式、石匙等	平成元年度確認調査
31	背野平	上山田背野平	台地	旧石器～縄文（早・晩）	旧石器礫群、剥片尖頭器、集石 遺構、加栗山式等	平成12年度確認調査
32	鷹爪野	上山田鷹爪野	台地	縄文（草）～縄文（中）	隆帯文、配石遺構、集石遺構、 前平式、磨製石鏃、砥石等	平成4・10・11年度調査
33	善積寺跡	上山田松園	山麓	鎌倉～明治	廃仏毀釈で廃寺 座禅石、墓地等残存	町指定文化財（史跡）
34	高田古城跡	高田城ノ平ほか	丘陵地	南北朝以降	空堀残存	
35	高田堀之内 城跡	高田城内ほか	丘陵地	南北朝以降		
36	高田城跡	高田城ノ平ほか	山地	南北朝以降	空堀・大手道残存	
37	大渡	高田大渡	台地	縄文～弥生	土器片散布	
38	九玉	永田九玉	微高地	縄文（早）～古墳	押型式、黒川式、成川式等	平成10年度確認調査
39	金村田	田部田金村田	沖積地	古墳	土器片散布	

40	ムッタンシマ	田部田島	沖積地	縄文（早）	塞ノ神式	
41	羽祢田	田部田羽祢田	台地	縄文（前）	曾畑式，石斧，磨石	
42	田部田城跡	田部田東陣・西陣	台地	南北朝以降	中世山城	
43	平山城跡	平山天神ほか	台地	室町	中世山城	
44	馬越原	平山馬越原	台地	縄文（早）中世	集石遺構，前平式，土師器，白磁，青磁	平成6年度確認調査
45	野間陣ノ尾城跡	野間陣ノ尾	台地	南北朝以降	中世陣跡	
46	山下	古殿山下	丘陵地	平安～鎌倉	青磁，白磁，土師器	平成6年度調査
47	飯倉神社境内	中福良宮飯倉神社境内	微高地	古墳	成川式，土師器	平成10年度確認調査
48	荒平古窯跡	金峰町花瀬荒平	山腹	平安（前）	古窯6基，須恵器（蔵骨器）	古文化談
49	中岳	金峰町花瀬	山麓	平安	須恵器	古文化談
50	上水流	金峰町花瀬	低地	縄文～近世	春日式，深浦式	平成7年度発掘
51	芝原	金峰町松田南	低地	縄文，古墳，古代中世		万之瀬川改
52	渡畑	金峰町松田南	低地	縄文，古墳，古代中世		万之瀬川改
53	持鉢松	金峰町松田南	低地	縄文～中世		平成6年度発掘
54	白檜野 A	金峰町白川		古代	蔵骨器	鹿児島考古
55	上加世田遺跡	加世田市市川畑上加世田2715	河岸段丘	縄文～中世	土器，石器，岩偶，石棒，石斧，ヒスイ	昭和43年10月～44年1月・平成8年3月発掘報告書（3）（4）（13）
56	椿ノ原遺跡	加世田市市村原椿ノ原	台地	旧石器～古墳，中世近世	剥片尖頭器，隆帯文，土器，須恵器，土師器，砥石，石斧，岩偶，敲石	昭和50年5月～

第三章 遺跡の層位

南田代遺跡は、現在、畑地・養豚場として利用されており、耕作や豚舎建設に伴い、一部が削られ層の欠落がみられる箇所が多くあった。また、遺跡の東側・西側とでは様相が異なっている。しかし、田上岳山麓の扇状地的な地形は共通しており、雨水などの流れた流路もみられる層もあった。土質は、東側・西側共にどの層も砂質の強い土壌である。

遺跡の東側（B～H-1～12区、D～H-16～18区）は古市遺跡を対岸に望む位置にあり、西側の万之瀬川側（B～D-22～28区、29～33区）と同じく、アカホヤ火山灰層・その二次堆積土層とその上の層は安定しており、層厚も厚いが、それより下層は砂質土・砂礫土である。

また、アカホヤ火山灰の二次堆積土中に、開聞岳噴出起源の灰コラが赤灰色を呈したブロック状でみられ、その上下から縄文時代晩期や弥生時代前期の遺物が出土した。しかし、灰コラがブロック状であること、遺跡全体で各層が砂質の強い土層であり、雨水などの流水の影響を強く受けていることなどを考慮すると、一概に灰コラの上下で遺物の年代観の序列に言及することは少々危険であり、その一例とみるのが適当かと思われる。（鹿児島大学教授森脇浩氏現地指導所見）

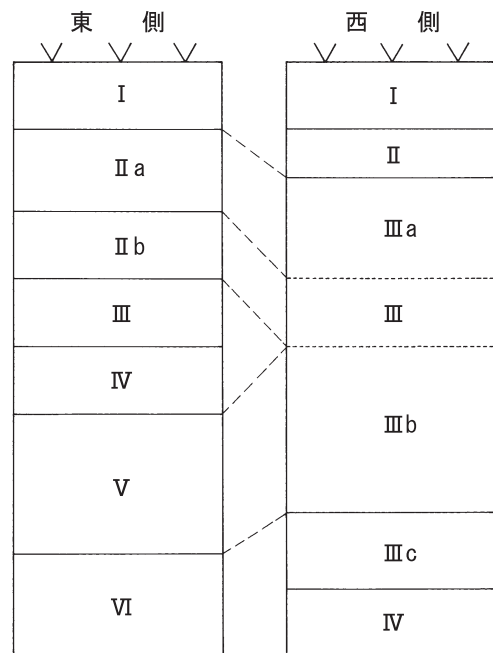
更に、下層は川の水の浸透により確認トレンチの壁が崩落するため確認できなかった。

遺跡の西側（A～セ-17～29区、B～D-16～22区）は、鹿児島県内の台地状の遺跡でみられる土層と変わらない堆積がみられた。しかし、層厚はどの層もさほど厚くない。灰コラの有無は、多くがアカホヤ火山灰の二次堆積土の途中までを欠損し、狭い範囲で確認されたのみである。また、出土遺物も縄文時代前期・中期と、古墳時代が中心であった。

等高線でみると17区より西側は、アカホヤ火山灰層を取り除いたIV層上面での等高線であるが、調査区の北東側と南西側へ下り中心部が一番高く河川の自然堤防状を呈しているようにみえる。

加えて、南田代遺跡の地層は砂層を基盤にする箇所と、鹿児島県内の通常の台地状にみられる地層を基盤とする箇所がみられ、アカホヤ火山灰降灰後安定している。対岸に位置する古市遺跡でも同様の現象がみられ、アカホヤ火山灰降灰前と後では、洪水の起こり方に差があったことも読み取れる。

また、南田代遺跡と古市遺跡とでは、アカホヤ火山灰降灰後の層の堆積は異なっており、出土遺物の時期も異なる。川を挟んで対峙する2遺跡で地層や出土遺物に差のあることは、地形・自然条件などからくる遺跡形成の選択性などを考える上で貴重である。



第6図 基本土層柱状模式図

I 層 表土

II a 層 灰褐色土

(弥生～縄文晩期包含層)

II b 層 灰褐色火山灰層
(灰コラ)

III 層 黄赤褐色土

IV 層 黄色粘質土

V 層 黄色粘質土
(縄文前期～中期包含層)

VI 層 黄褐色土

I 層 表土

II 層 黒褐色土

III a 層 黄褐色土

(中世～縄文晩期包含層)

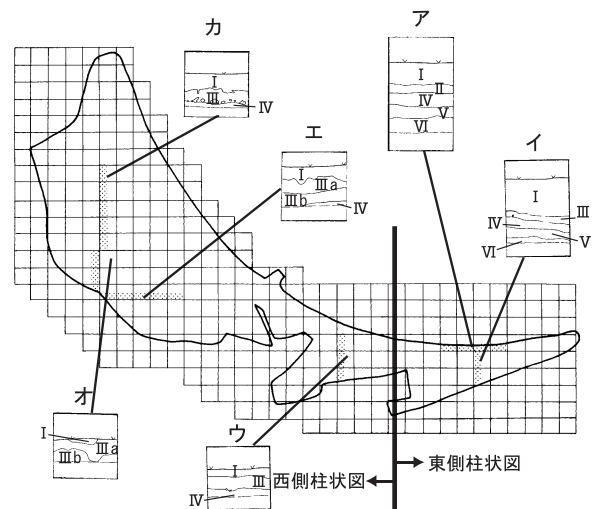
III 層 灰褐色火山灰層
(灰コラ)

III b 層 黄褐色土

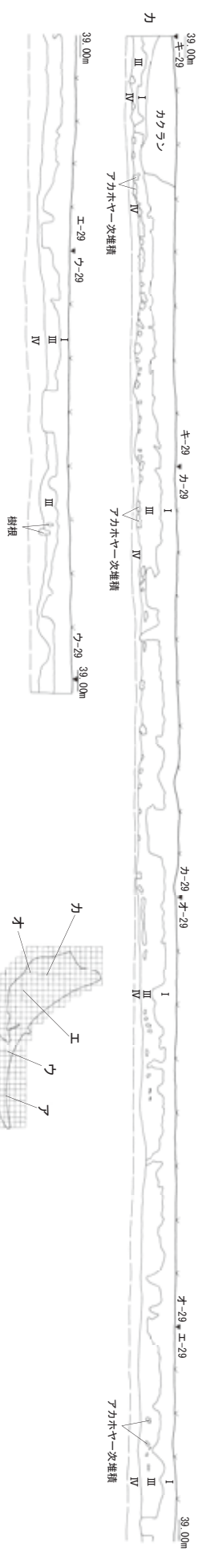
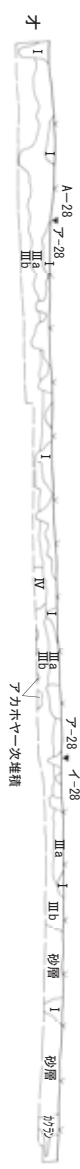
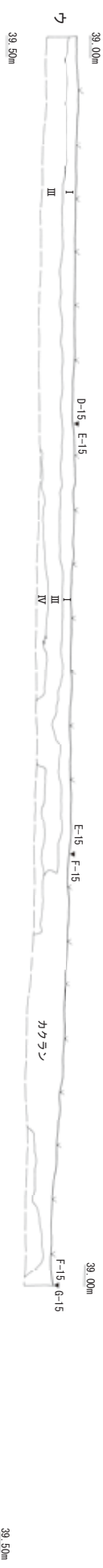
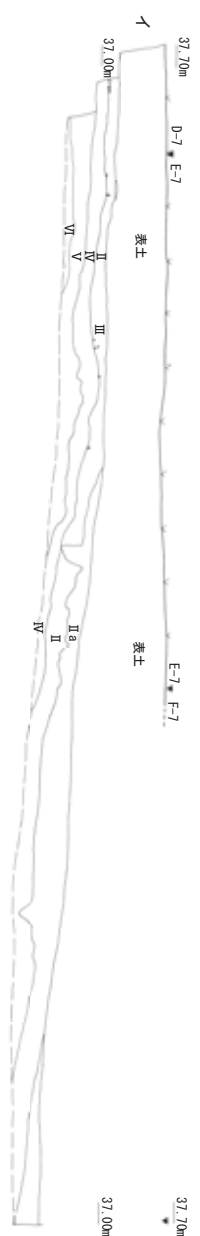
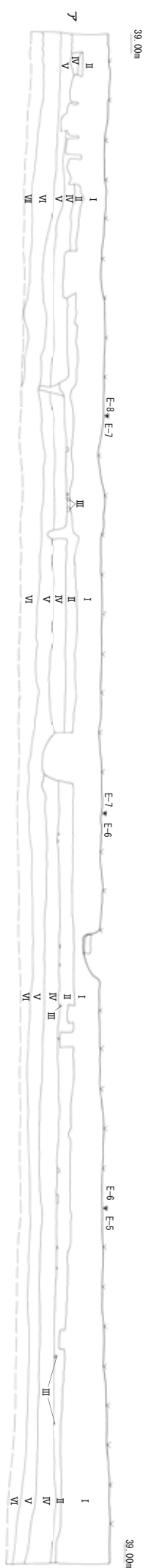
(縄文前期～中期包含層)

III c 層 黄橙色火山灰土

IV 層 明茶褐色土



第7図 遺跡内各地点の土層



第8図 土層断面図

第Ⅳ章 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡の主体となる時代は縄文時代であり、縄文時代早期から晩期までの各時期に渡り大量の遺物が出土している。出土した遺物は、縄文時代前期のものが圧倒的に多く、次いで晩期土器、中期土器、早期土器の割合で多く、後期土器の出土量は少ない。

石器も石鏃、石錘、石匙、楔型石器、石核、削器、磨石、敲石、石皿など多様なものが出土している。時期的に明確な区分はできないが、土器量から判断すると、縄文時代前期～中期のものが大部分であると考えられる。

縄文時代の遺構と考えられるものは、30以上の集石と石斧埋納遺構、磨石集積遺構、黒耀石原石埋納遺構、剥片集積遺構などが確認された。

第1節 検出遺構（第9図）

縄文時代の遺構と考えられるものは、第9図縄文時代の遺構分布図に示したように、集石35基、石斧埋納遺構2基、磨石集積遺構2基、黒耀石原石埋納遺構1基、剥片集積遺構1基、剥片集中区1の計42基であった。

全てⅢ層から検出されているが、縄文時代晩期から弥生時代前期頃に降灰した灰褐色火山灰（灰コラ）の上下でⅢa層・Ⅲb層と分けてみると、縄文時代前期～中期の遺物包含層であるⅢb層から大部分が検出されている。所属する時期が明確でない遺構も少なくないが、13の遺構が縄文時代前期～中期の土器を伴って検出されていることから、あまり時期差のないほぼ同時期（縄文時代前期～中期）の遺構であると思われる。

また、検出された遺構は調査区の西側、万之瀬川に近い自然堤防上にやや集中が見られる。

1 集石（第10～33図）

検出された集石は35基である。分布は調査区東側の川へ向かって緩やかに下る微高地に4基、調査区西側の自然堤防上の丘陵地を中心に31基である。これは、縄文時代前期の遺物が集中して出土している区域とほぼ同じである。

集石は、割と狭い範囲に集中度が強く掘り込みを持つもの（3、11、14、15、21、22、29号）と、比較的広い範囲に散在し掘り込みの見られないもの（1、2、4～10、12、13、16～20、23～28、30～35号）とに大きく分けられる。

以下、本遺跡東側から西側に向かって記述していく。なお、各集石の規模、掘り込み、完形礫、破損礫の個数などは第2表、重量組成は第3表に示した。赤化なしと説明しているものも、肉眼による判断が困難なものも多いので、火を受けている可能性も考えられる。

集石3号（第11図、第12図）

E－5区で検出された。下面に掘り込みが認められ、2×1.6mの範囲に、掘り込み内に礫が集中した部分と周辺に散在した部分からなる。掘り込みの大きさは、径120×80cmのほぼ円形を呈し、深さは25cmである。Ⅳ層の黄褐色土に掘り込まれた掘り込みの底面は炭化物を多く含んでいた。礫総数は205個、石材は安山岩であり、中央部分を中心として火熱を受けたと思われる赤化、または割れたものが半数以上を占めていた。上面は小振りのものが多かったが、底面に近づくにつれてやや小さめの拳大のものが多くなる傾向にあり、重量組成では150g以下がほとんどであった。集石中に縄文時代前期の土器が1点含まれていた。（第103図508）

集石2号（第10図、第11図）

E－6区で検出された。120×65cmの範囲に、大きさ径5～10cm、重量50g以下の小礫が散在した状態で検出された。礫総数は計20個であり、肉眼で赤化したものはあまりみられなかったが、火熱を受けたと思われる破損礫が多く含まれていた。下部に掘り込みは認められない。

集石4号（第10図、第11図）

E－6区と7区の境で検出された。90×50cmの範囲に2つの集まりが確認され、礫総数は計17個である。石材は砂岩が中心であり、径5cm程度の小礫と径10cm以上のもので分けられる。ほとんどの礫に火熱を受けたと思われる破碎や赤化がみられた。下部に掘り込みは認められなかった。

集石1号（第10図、第11図）

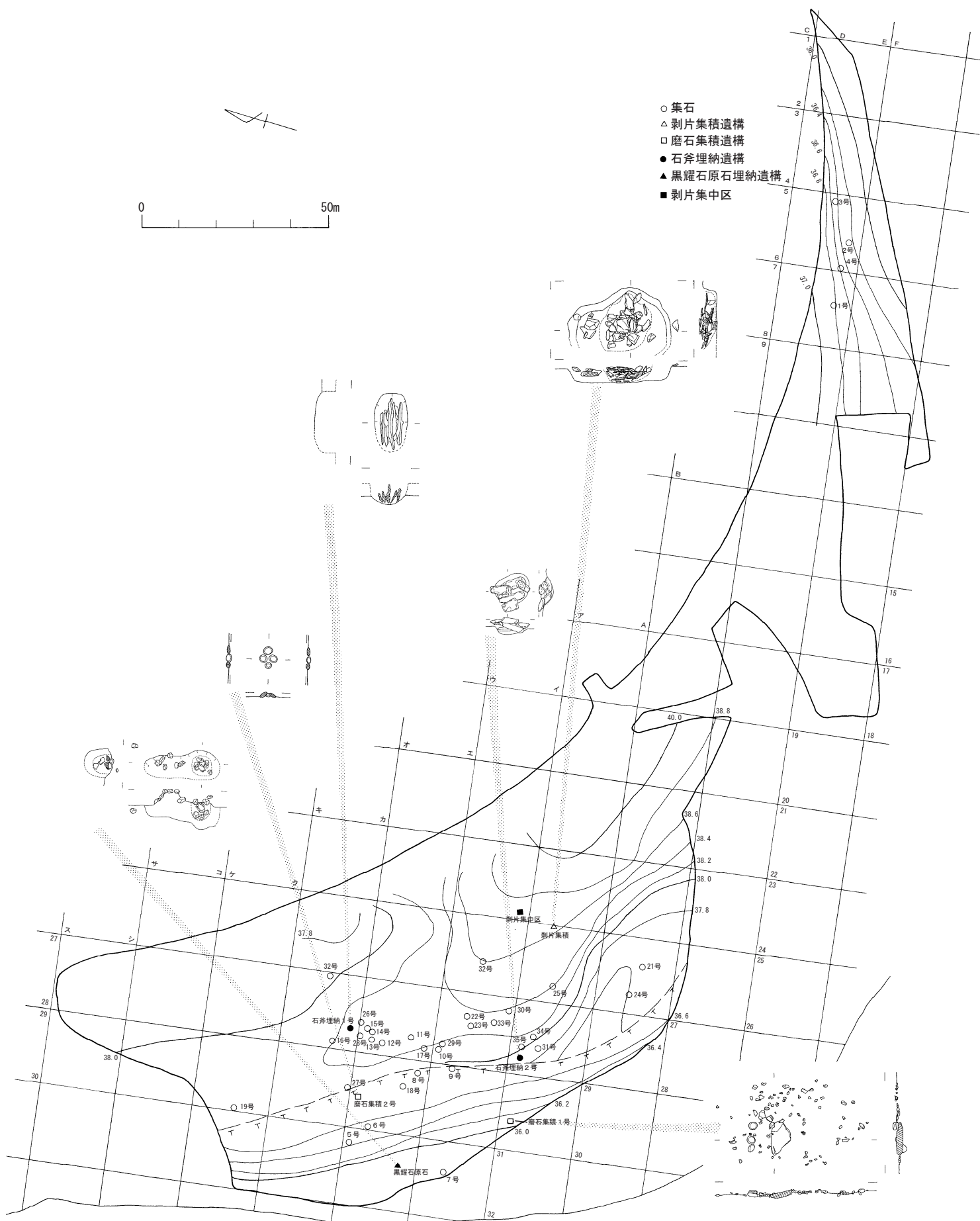
E－7区で検出された。120×65cmの範囲に散在した状態で検出され、まとまりはみられなかった。礫総数は計26個であり、石材は砂岩、安山岩などである。全てが大きさ径10cm未満、重量50g程度の小礫であり、火熱を受けたと思われる破碎や赤化もみられた。下部に掘り込みは認められなかった。ほぼ同レベル上に縄文時代前期の土器が出土していた。

集石21号（第13図、第14図）

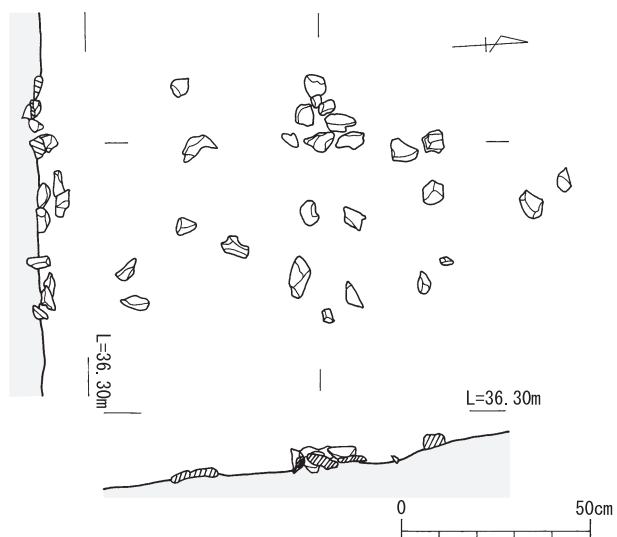
C－25区で検出された。礫のまとまりがあり、掘り込みは埋土の見分けが難しく焼土や炭化物もみられなかったため確認できなかったが、礫の集まり具合から浅い掘り込みを有していたと思われる。掘り込みの大きさは径70×50cmで、深さ15cm程度と思われる。礫総数は110個で、拳大程度のもので構成されている。石材は砂岩が主であるが頁岩や軽石も含まれている。赤化しているものが多く、半数が破損礫である。

集石24号（第13図、第14図）

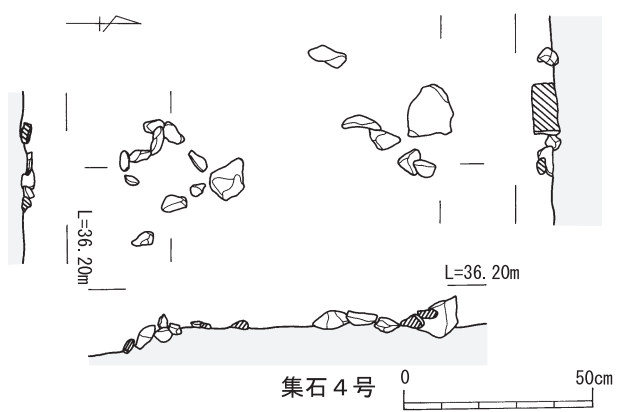
B－26区で検出された。礫総数は107個であり、195×80cmの範囲にやや集まりがみられる場所と散在したところが認められた。大部分が火熱を受けて破碎したと思われる破損礫である。大きさは径5～10cm、重量100g



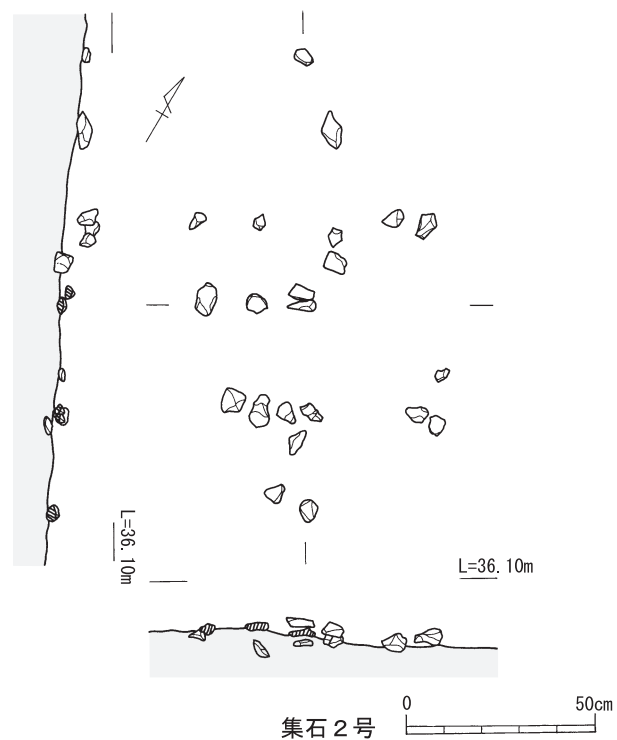
第9図 遺構配置図



集石1号

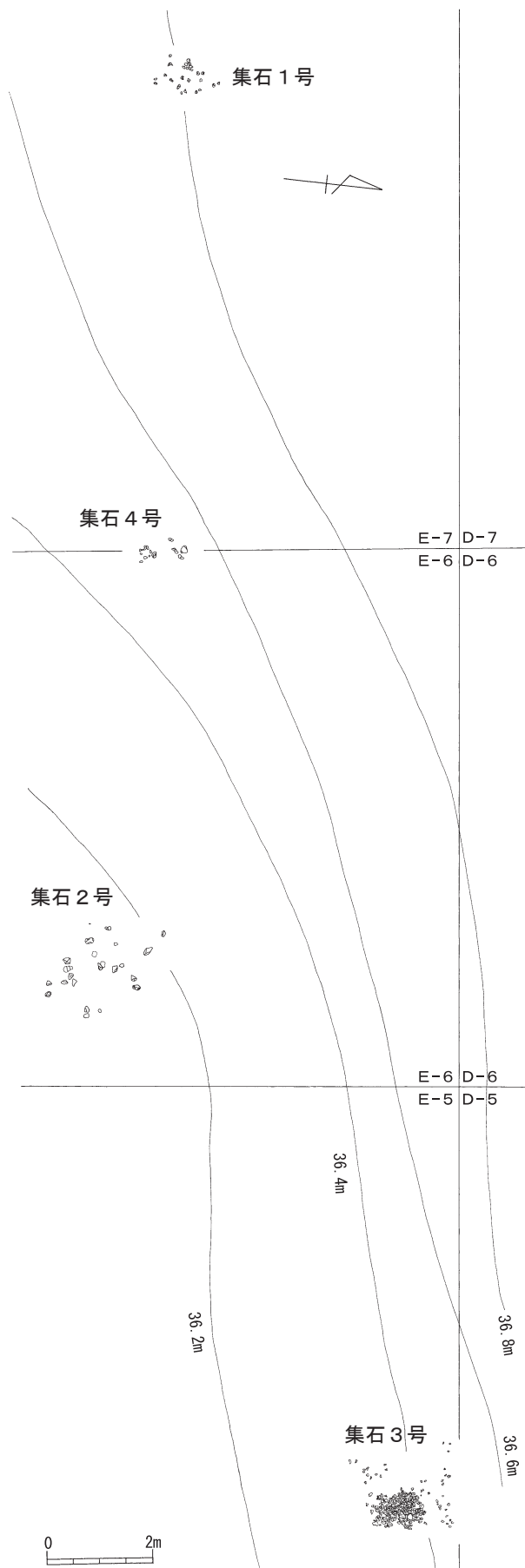


集石4号



集石2号

第10図 集石1号, 2号, 4号



第11図 集石1～4号検出状況

以下の小さいもので、赤化した砂岩も多く含まれている。掘り込みや炭化物などはみられない。

集石25号 (第15図)

ア-26区で検出された。火熱を受けたと思われる破損礫が $1.2 \times 1.1\text{m}$ の範囲に平面的に散在しており、まともりはみられなかった。礫総数は32個であり、大きさは径 $5 \sim 10\text{cm}$ 、重量 $50 \sim 150\text{g}$ が中心で、赤化したものが半数を占める。石材は砂岩、安山岩であるが、軽石も1点含まれていた。周辺及び下面に掘り込みや炭化物等は認められない。

集石32号 (第15図)

ウ-26区で検出された。 $65 \times 50\text{cm}$ の範囲に火熱を受けたと思われる赤化した破損礫のややまとまりがみられた。礫総数は9個と少なく、大きさは径 10cm 程度、重量 150g 前後の礫が主であった。石材は大部分が砂岩であり、掘り込みは認められない。集石中に轟式土器が1点含まれていたことから、縄文時代前期頃のものと考えられる。(第104図 525)

集石34号 (第15図, 第17図)

ア-27区で検出された。 $2 \times 1.4\text{m}$ の範囲に礫が散在していた。礫総数は73個で、石材は砂岩が中心に安山岩、凝灰岩もわずかに含まれていた。火熱を受けたと思われる、赤化し破損した径 5cm 程度、重量 100g 以下の小礫

が大部分を占めていた。下部や周辺に掘り込みは認められない。同レベルにおいて縄文時代前期の土器が出土していた。

集石31号 (第16図, 第17図)

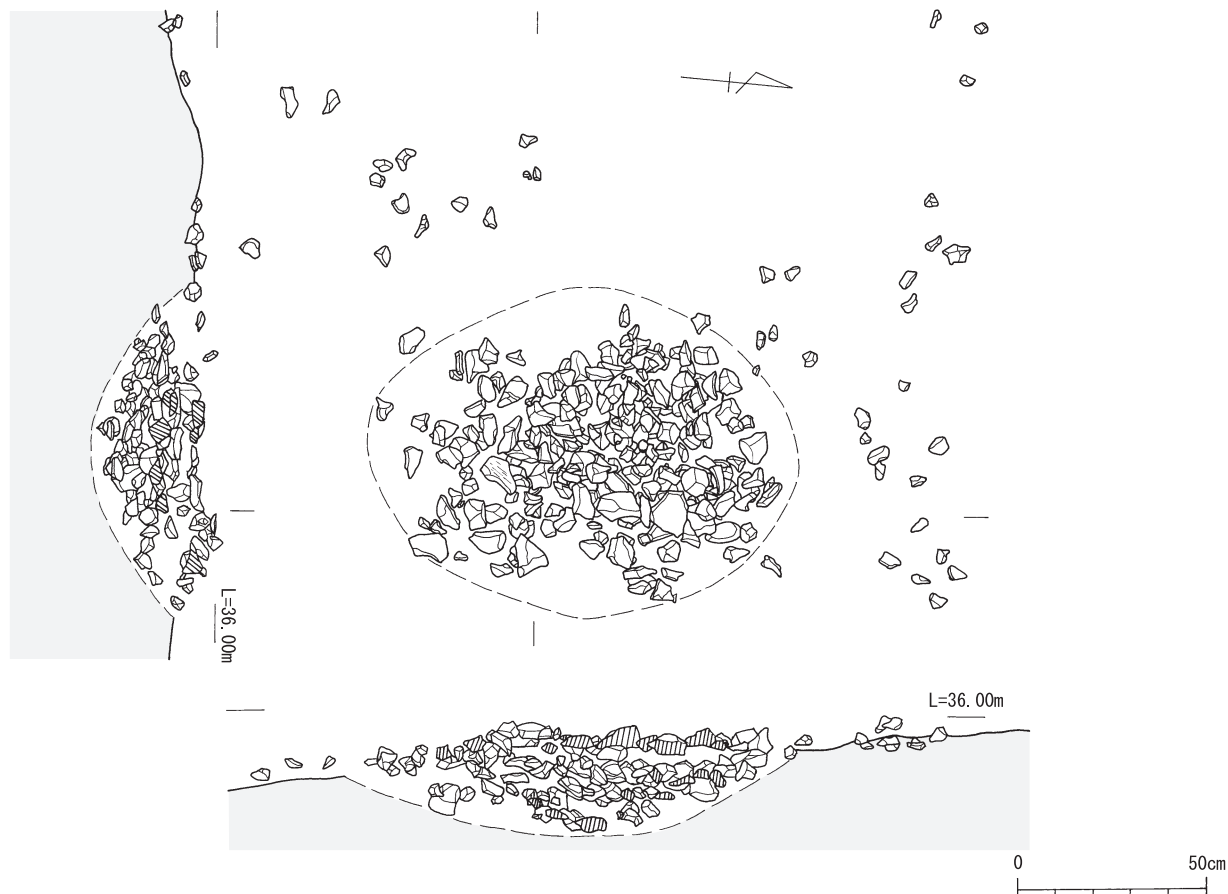
ア-28区で検出された。 $1.6 \times 1\text{m}$ の範囲に礫が散在しており、下位や周辺に掘り込みは認められなかった。礫総数は58個であり、径 $5 \sim 10\text{cm}$ の破損礫と拳大の礫で構成されるが、 100g 以下の小礫が多く大部分を占めた。石材は砂岩、安山岩、凝灰岩であるが、数量的に火熱を受けたと思われる赤化した砂岩が圧倒的に多い。

集石33号 (第16図, 第19図)

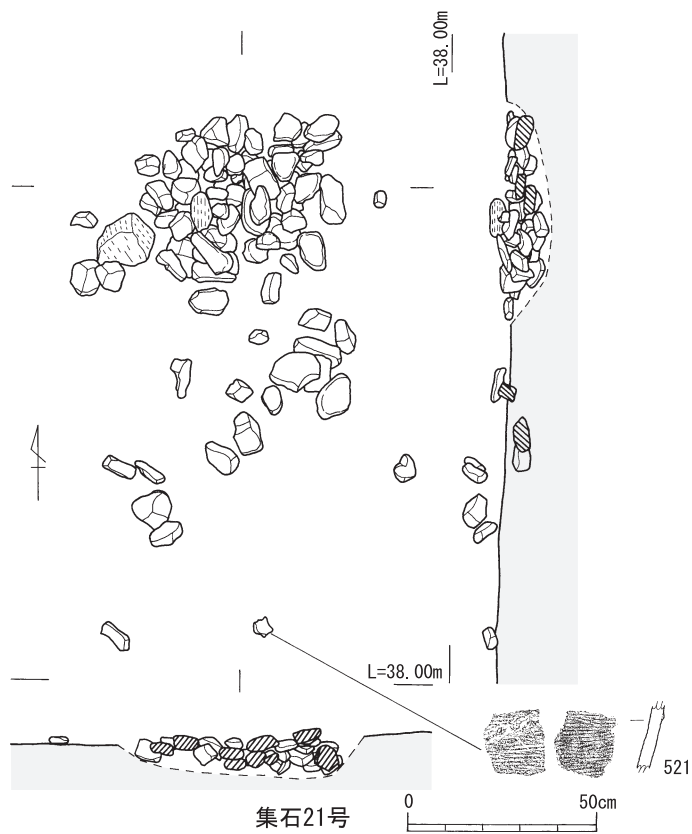
イ-27区で検出された。 $40 \times 40\text{cm}$ の範囲に破損礫のまとまりがみられた。総数は10個と少なく、大きさは径 10cm 程度の拳大、重量 $100 \sim 200\text{g}$ のほぼ同規模の礫で構成されていた。火熱を受けたと思われ、赤化し破損していた。石材は安山岩と砂岩であり、安山岩がやや多い。掘り込みは認められなかった。

集石30号 (第18図, 第19図)

イ-27区で検出された。 $3 \times 2.5\text{m}$ の広い範囲に礫が散在していたが、小さなまとまりが3ヶ所みられた。これらのまとまりは集石として用いられたものの他に、石器製作の過程で生じた剥片も散在していた。礫総数は43個であり、破損礫が大部分を占める。火熱を受けたと思



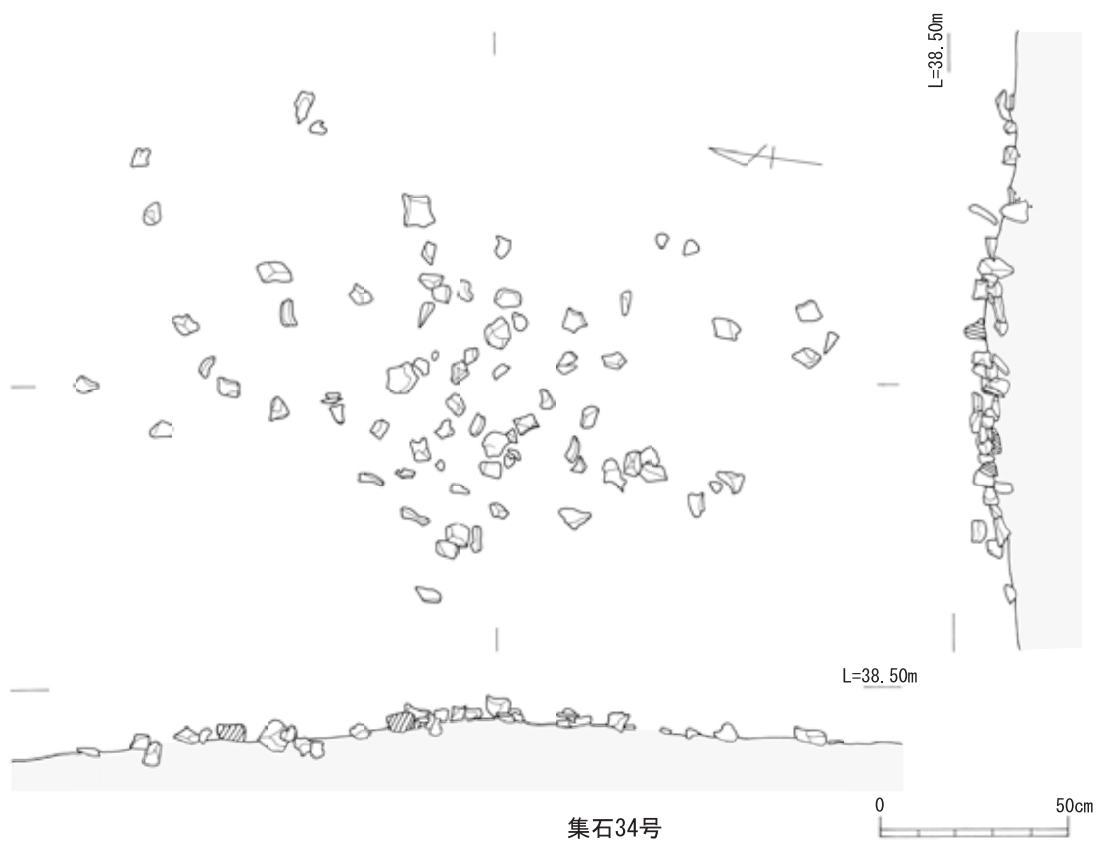
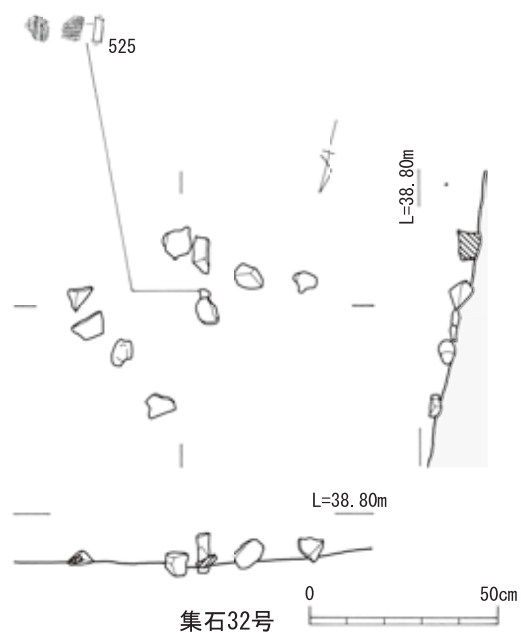
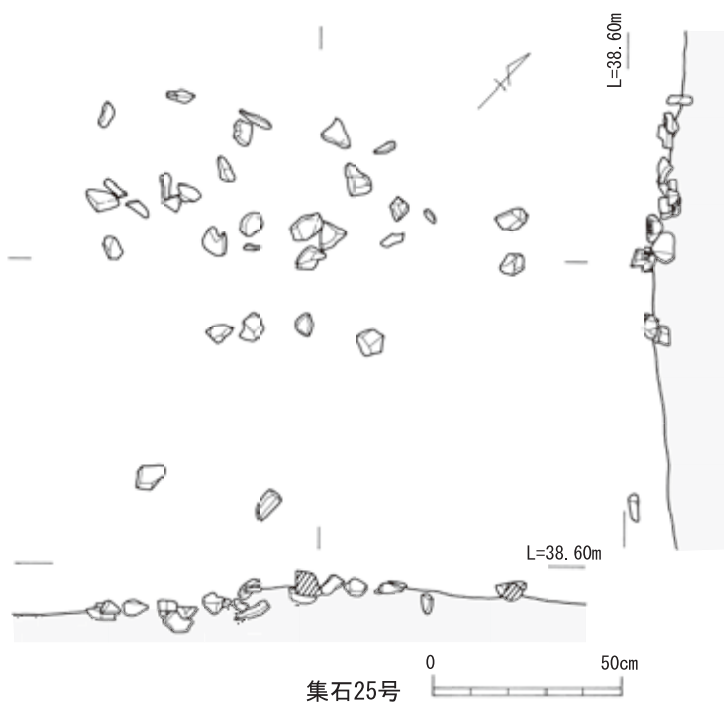
第12図 集石3号



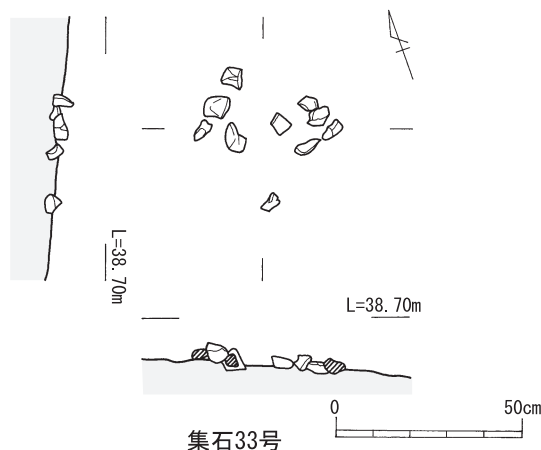
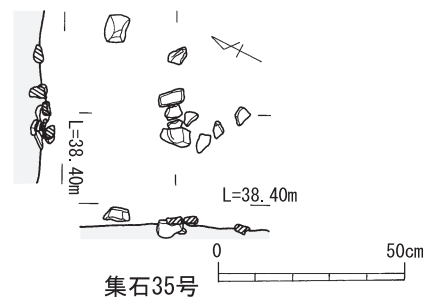
第13図 集石21号, 24号



第14図 集石21号, 24号検出状況



第15図 集石25号, 32号, 34号



第16図 集石31号, 33号, 35号

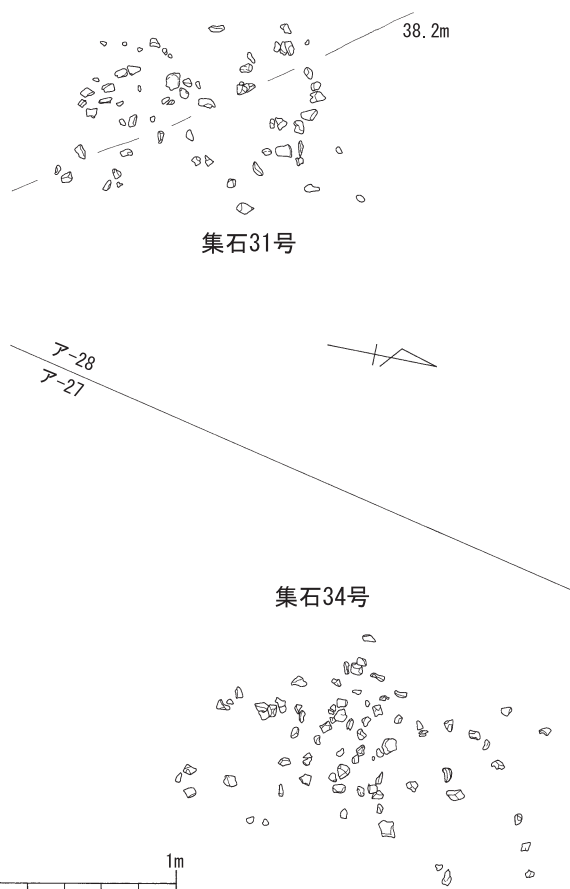
われる礫の赤化が多くみられ、大きさは径5～10cm、重量50～200gのものがほとんどであったが、径15cm、重量400gを超えるものもみられた。石材は赤化した砂岩が中心であり、安山岩、凝灰岩も含まれる。掘り込みはみられない。

集石35号（第16図）

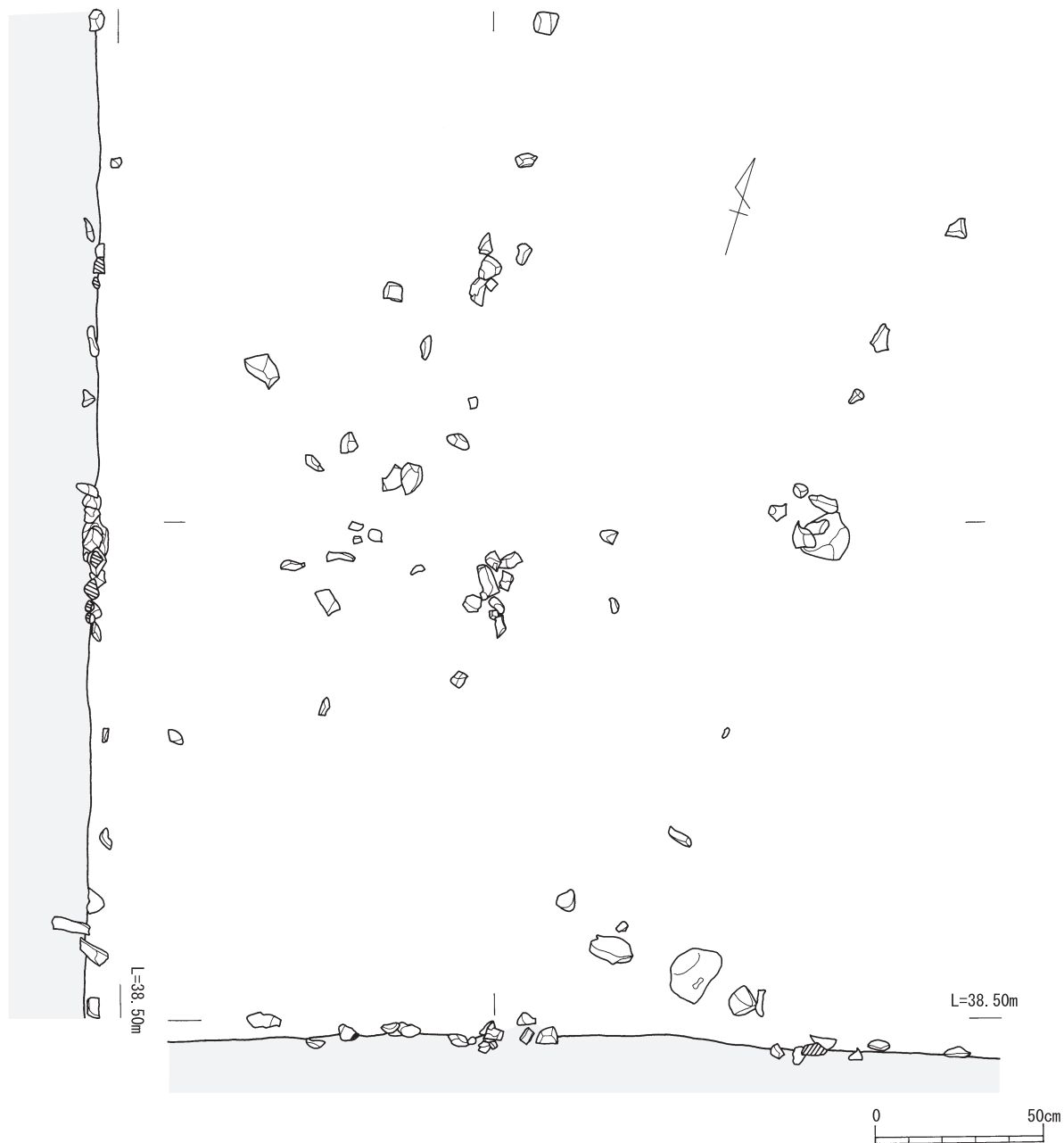
ア-28区、石斧埋納遺構2号の西側に近接して検出された。100×80cmの範囲に礫のまとまりがみられた。礫総数は10個で、大きさは径5～10cm、重量50g程度の角礫のものが主である。石材は砂岩が中心で、火熱を受けたと思われる破碎はあまりないが、赤化がみられた。下部に掘り込みは認められないが、石斧埋納遺構に近接することから、何らかの関連も想像される。

集石22号（第20図, 第21図）

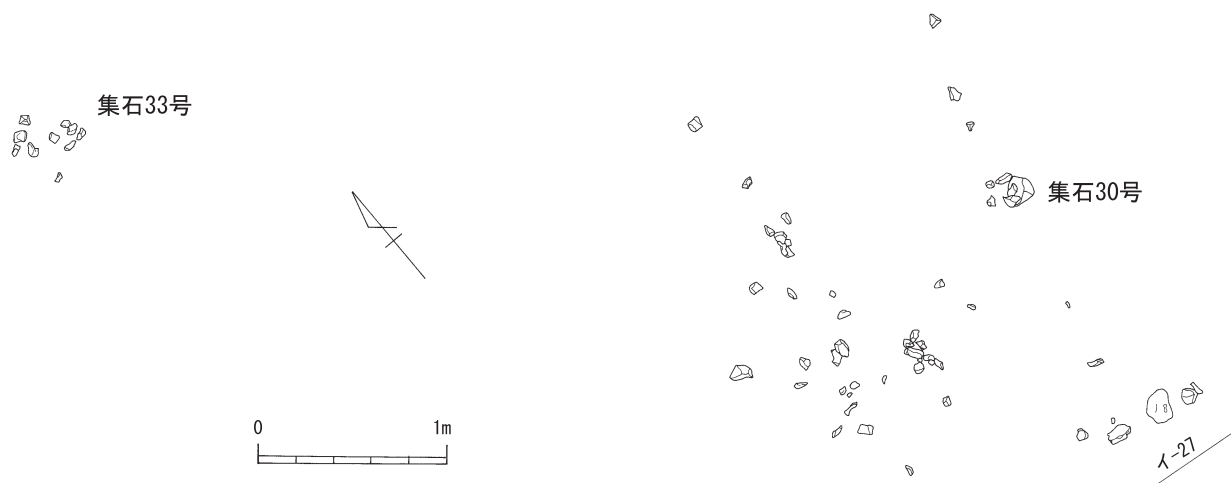
ウ-27区で検出された。礫のまとまりがあり、その下部に掘り込みが認められた。掘り込みの大きさは、径67×57cmのほぼ円形を呈し、深さは13cmである。礫総数は62個であり、15cmを超える重量400g程度の大型のものと10cm以下の重量100～150gの小破片に大別される。火熱を受けて破碎したと思われる破損礫が7割を占め、赤化、黒変しているものが多数みられた。埋土中や掘り込み下部に炭化物が混じり、礫が底面より浮いていることから、複数回使用したと考えられる。また、掘り込みの壁に貼り付けられた礫も2個みられた。



第17図 集石31号, 34号検出状況号



第18図 集石30号



第19図 集石30号, 33号検出状況

集石23号（第20図，第21図）

ウー27区で検出された。礫のまとまりがあり、礫総数は30個と少ないがその下部に掘り込みが認められた。攪乱のため全体の約半分が検出できなかったが、検出された掘り込みの大きさは、径70×30cmのほぼ楕円形を呈し、深さは5cmである。礫の大きさは3～12cm、重量50～400gと不揃いであり、約半数は赤化や割れがみられた。特に掘り込みの底面近くに赤化した礫が集まっており、その下部には炭化物が認められた。

集石9号（第20図）

ウー29区で検出された。60×40cmの範囲の中に礫のまとまりがみられた。礫総数は20個と少なく、径5～10cm程度、重量50～150gの砂岩が中心であり、赤化はあまり見られなかった。火熱を受けたと思われる破損礫も少なく、掘り込みは認められなかった。

集石10号（第22図，第23図）

ウー28区で29号に近接して検出された。85×65cmの範囲にまとまりのある部分と散在した部分がみられた。礫総数は35個で、大きさが径10cm前後のものから約3cmの小礫まで混在しているが、割合としては破碎した小礫が6割以上を占める。掘り込みは確認されなかった。掘り込みのある29号に近接することから29号から破棄された可能性も考えられる。

集石29号（第22図，第23図）

ウー28区で10号に近接して検出された。散在した状態で検出されたが、下面に掘り込みが認められた。掘り込みの大きさは、径50×45cmのほぼ円形を呈し、深さは10cmであるが、掘り込み面はまだ上方にあったと思われる。底面に炭化物があり、礫が掘り込みに沿って残存していた。礫総数は24個であり、約半数が破損礫である。ほとんどが火熱を受けたと思われる赤化、または割れていた。掘り込みのない10号に近接することから、同じ集石だった可能性も考えられる。

集石17号（第22図，第23図）

エー28区で検出された。礫総数は23個と少ないが、65×45cmの範囲にまとまりがみられた。礫に重なりはなく、掘り込みや炭化物もみられなかった。石材は角の取れた径10cm前後の安山岩が多いが、火熱を受けたと思われる赤化や割れが確認され、約半数が破損礫である。重量組成は、100g前後のものが主である。

集石11号（第22図，第23図）

エー28区で検出された。110×60cmの範囲で礫のまとまりがみられた。掘り込みは埋土の見分けが難しく焼土や炭化物もみられなかったことから確認できなかったが、礫の集まり具合から浅い掘り込みを有していたと思われる。掘り込みの大きさは、径40×30cmのほぼ円形を呈し、深さは15cm程度であると思われる。礫総数は53個であり、約半数以上が大きさ径10cm前後、重量50

～150gの破損礫である。石材は砂岩と安山岩で構成されており、火熱を受けたと思われる赤化や割れがみられた。

集石8号（第24図，第26図）

エー29区で検出された。2.8×1.5mの範囲の中に、ほぼ同規模の礫集中地域が2ヶ所認められたが、全体的に礫が東側に傾斜しながら散在した状態で検出された。礫総数は108個であり、ホルンフェルスを石材とする礫のほぼ半分が火熱を受けたと思われる破損礫であり、赤化した礫もみられる。また、径5～15cm程度、重量50～250g程度と異なる大きさの礫で全体が構成されている。掘り込みは認められなかった。集石中に甕式土器が1個含まれていたことから、縄文時代前期頃のものと考えられる。

集石18号（第25図，第26図）

エー29区で検出された。4.7×2.2mの広い範囲に散在した状態で検出され、まとまりはみられなかった。礫総数は計331個と他の集石より圧倒的に多く、本遺跡で最も礫個数の多い集石である。石材は砂岩、安山岩、頁岩などが混在しているが、約5cm程度の破損礫と約10cm程度の完形礫に大別される。数量的には重量100g以下の破損礫が大部分であり、赤化したものも多く認められる。掘り込みは、認められない。集石中に縄文時代前期頃のものと考えられる土器が18点含まれていた。18点中5点について図化した。（第104図S16，517，518，519，520）石器1点も図化した。（第129図S139）

集石12号（第27図，第30図）

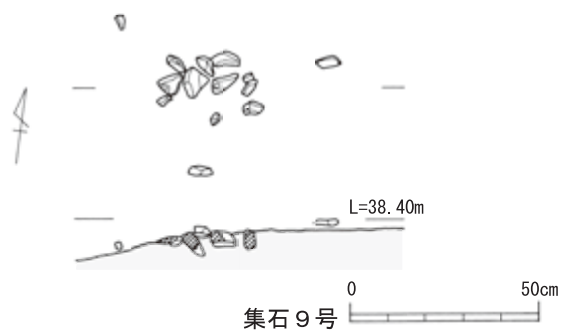
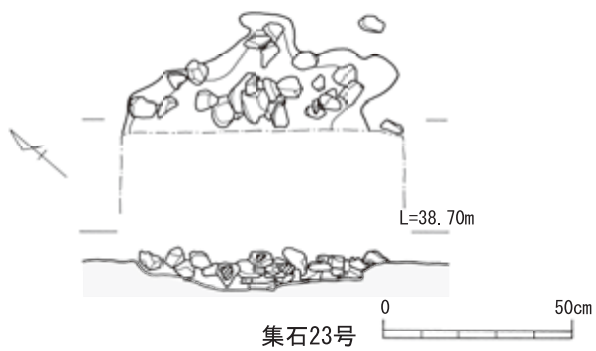
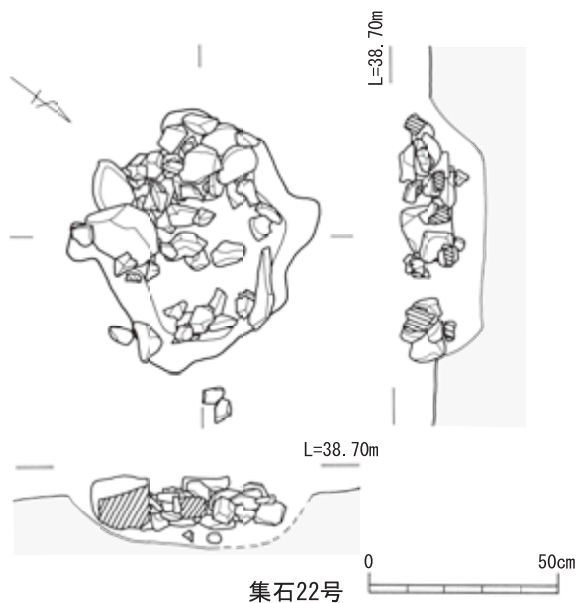
オー28区で検出された。240×85cmの範囲に、礫が集中した部分と散在した部分がみられた。礫総数97個中50個ほどにまとまりがみられ、隙間無く集まっていたが、下位に掘り込みはみられず、炭化物等も確認されなかった。礫は赤化した砂岩が中心であり、安山岩や頁岩、黒耀石なども含まれていた。角の取れた角礫もみられるが、大部分が火熱を受けたと思われる破損礫である。大きさは径10cm以下、重量200g以下のものがほとんどである。集中部と散在した部分の礫の特徴が似ていることから、以前は同じ集石であった可能性も考えられる。集石中に縄文時代前期の土器が4点、石鏃が1点（第108図S46）含まれていた。土器については出土した4点中1点について図化した。（第103図S11）

集石26号（第27図，第30図）

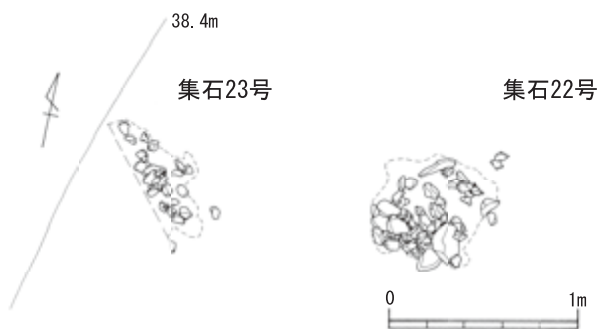
オー28区で検出された。礫総数は21個と少ないが45×40cmの範囲にまとまりがみられた。礫の大きさは径5～15cm、重量300g以下の完形礫が大部分である。石材は安山岩や砂岩が主であり、破損礫はほとんどないが砂岩に火熱を受けたと思われる赤化したものが多い。下部に掘り込みが認められない。

集石13号（第28図，第30図）

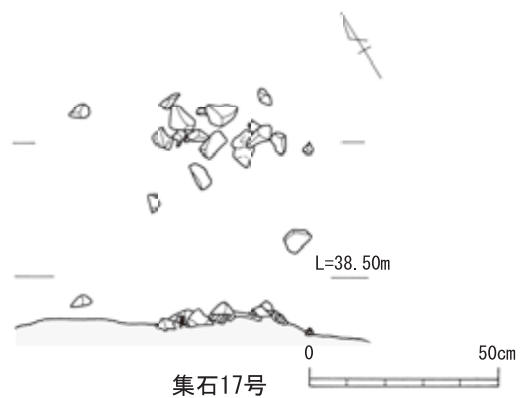
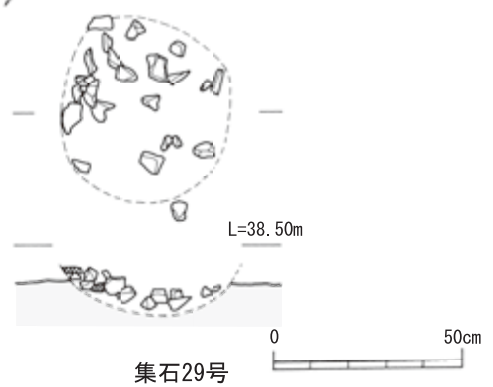
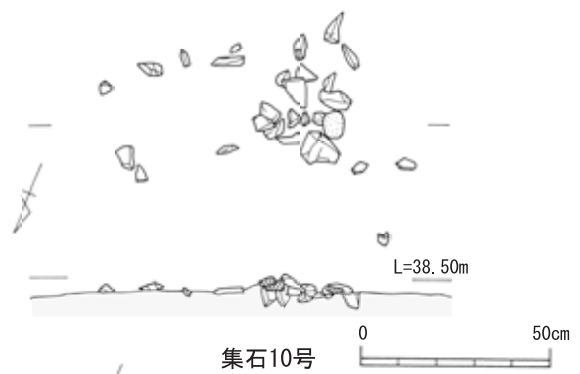
オー28区で検出された。3×1.6mの範囲に広く散在



第20図 集石9号, 22号, 23号



第21図 集石22号, 23号検出状況

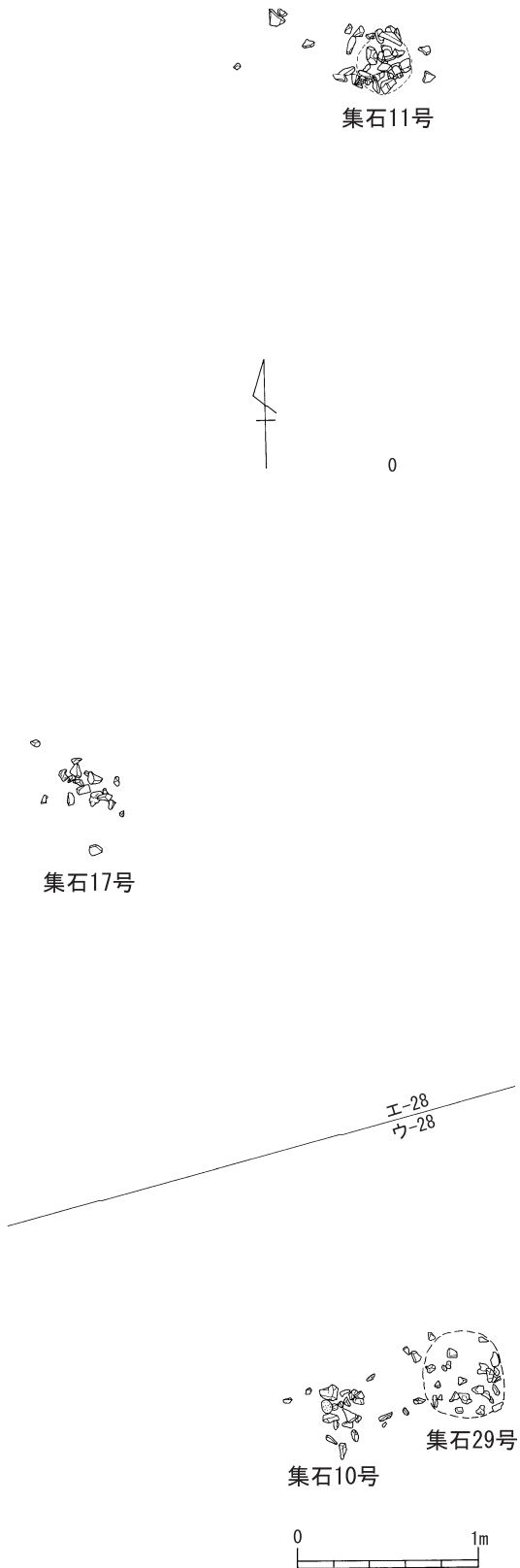


第22図 集石10号, 11号, 17号, 29号

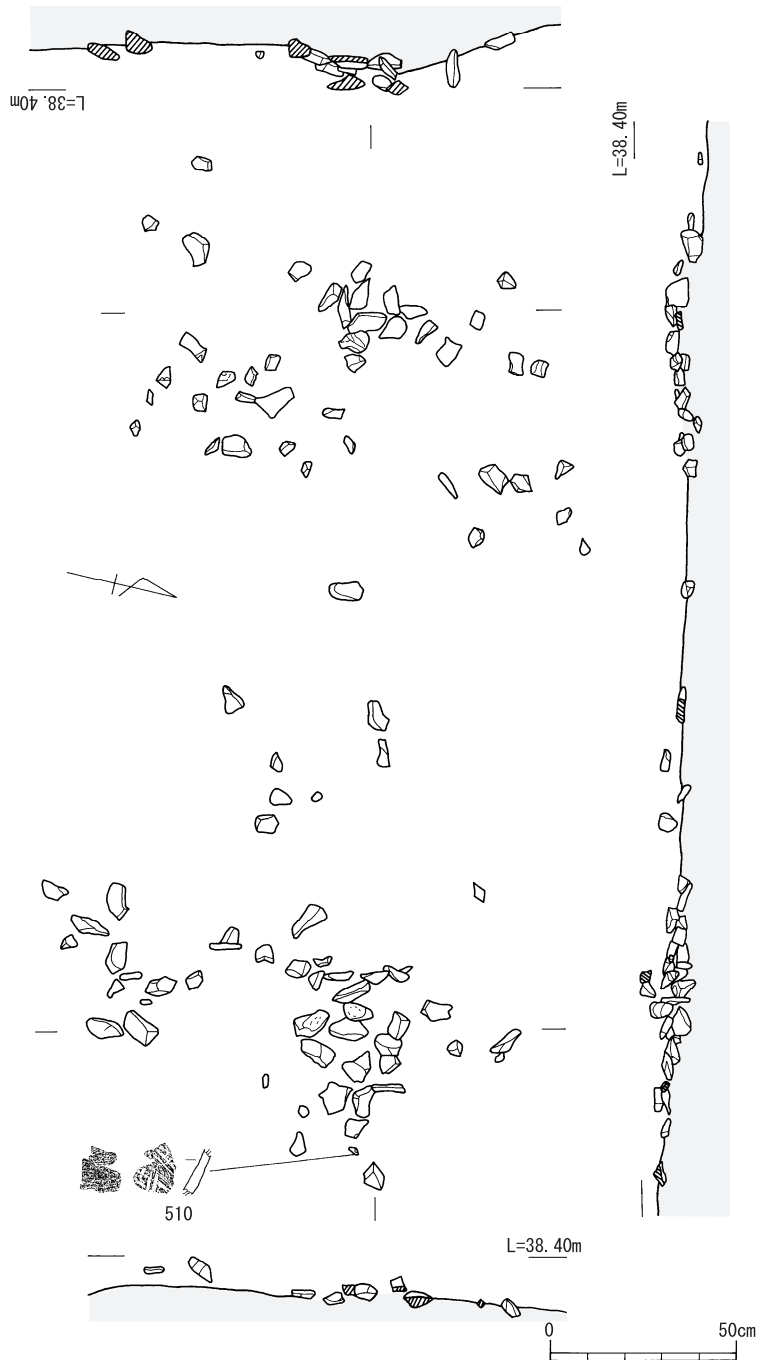
しており、まとまりはみられなかった。礫総数は131個であり、大きさが径5～10cm、重量200g以下の火熱を受けて破碎したと思われる破損礫が大部分を占めるが、500gを超える完形礫も含まれていた。石材は砂岩、安山岩が中心であり、赤化したものも認められた。下位や周辺に掘り込みは認められなかった。集石中に縄文時代前期頃のものと考えられる土器が2点含まれていた。(第103図512, 513)

集石15号 (第28図, 第30図)

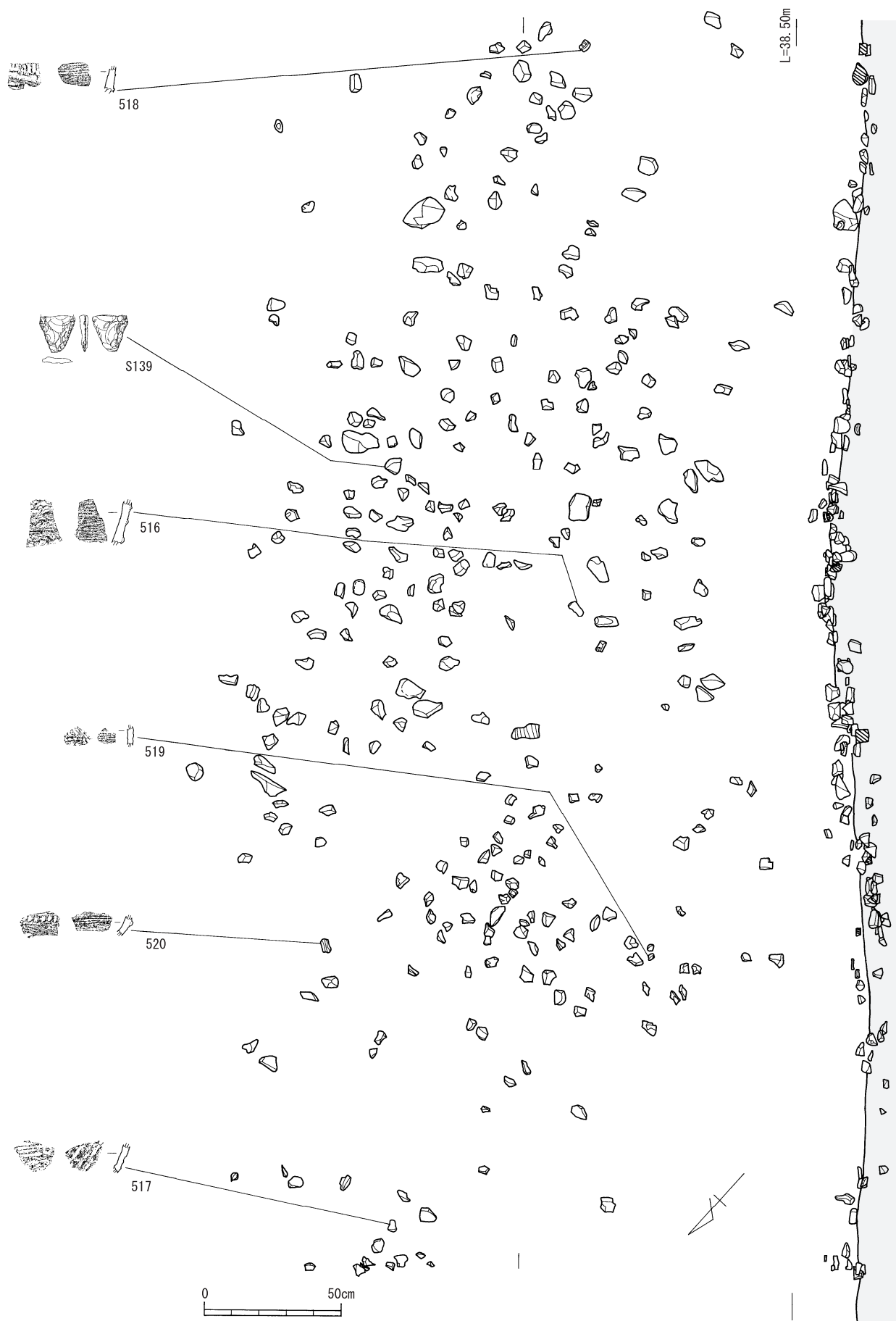
オ-28区で検出された。1.5×1.1mの範囲で礫のまとまりがみられた。掘り込みは埋土の見分けが難しく焼土



第23図 集石10号, 11号, 17号, 29号検出状況



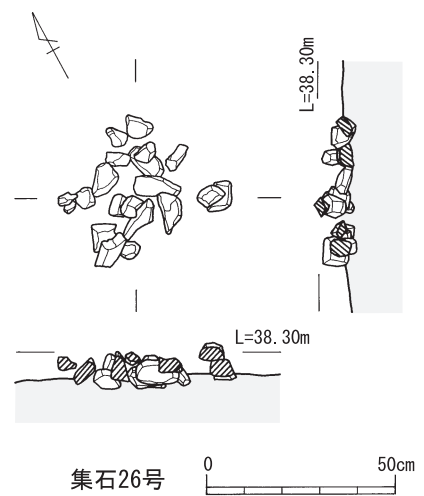
第24図 集石8号



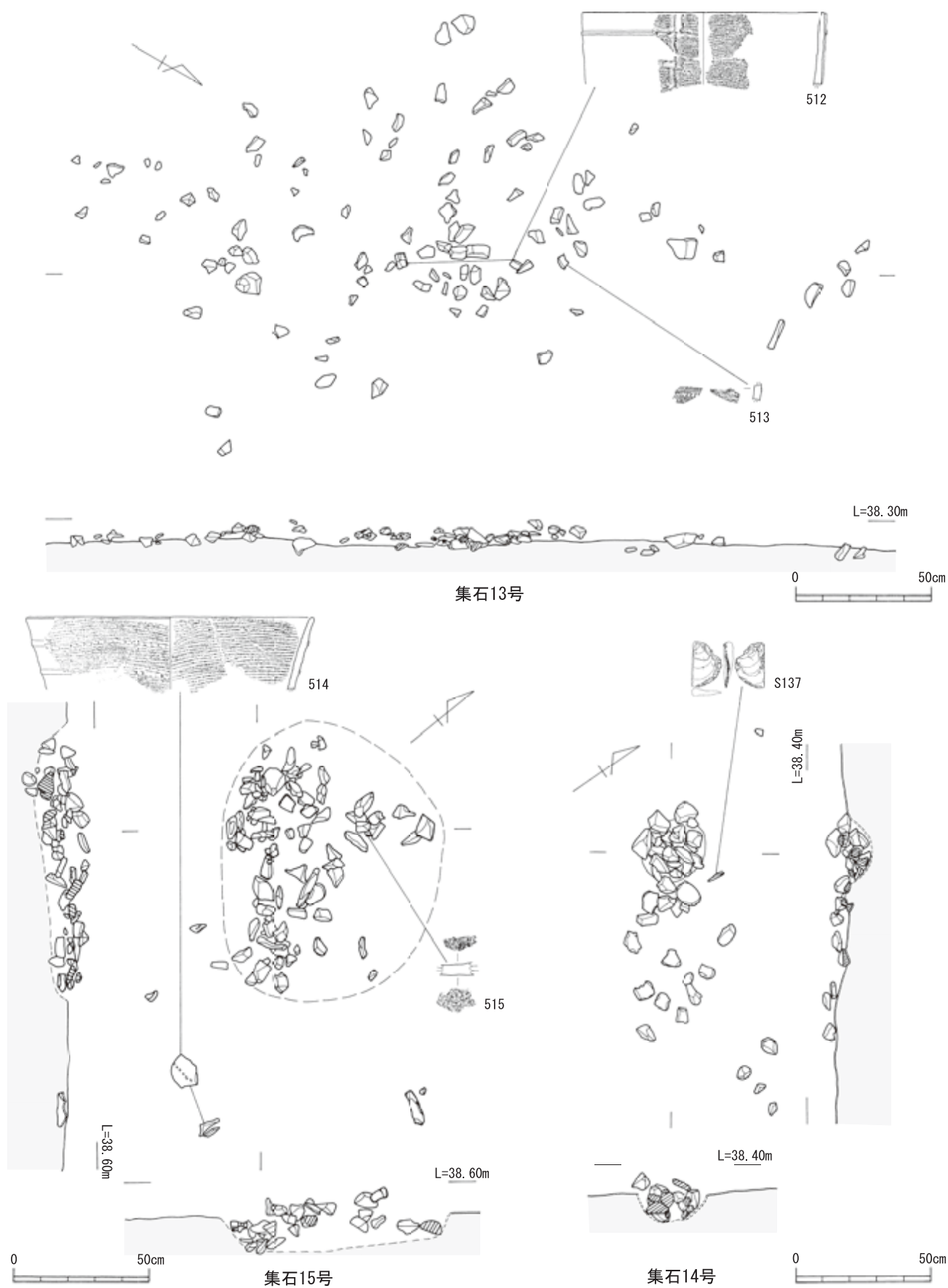
第25図 集石18号



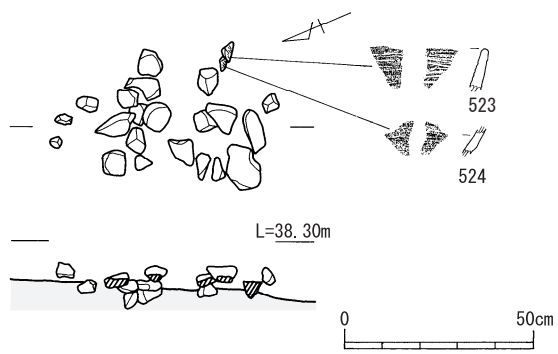
第26図 集石8号, 18号検出状況



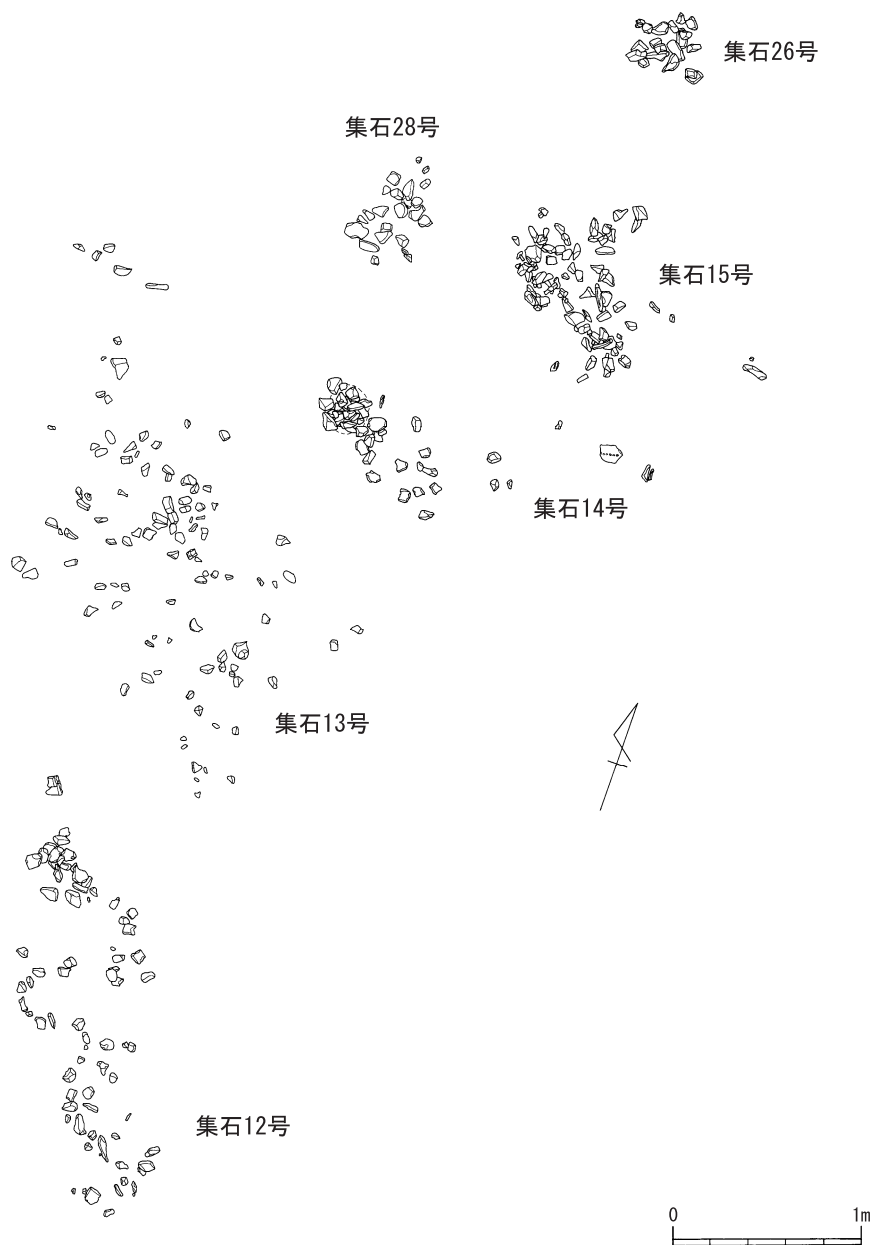
第27図 集石12号, 26号



第28図 集石13号, 14号, 15号



第29図 集石28号



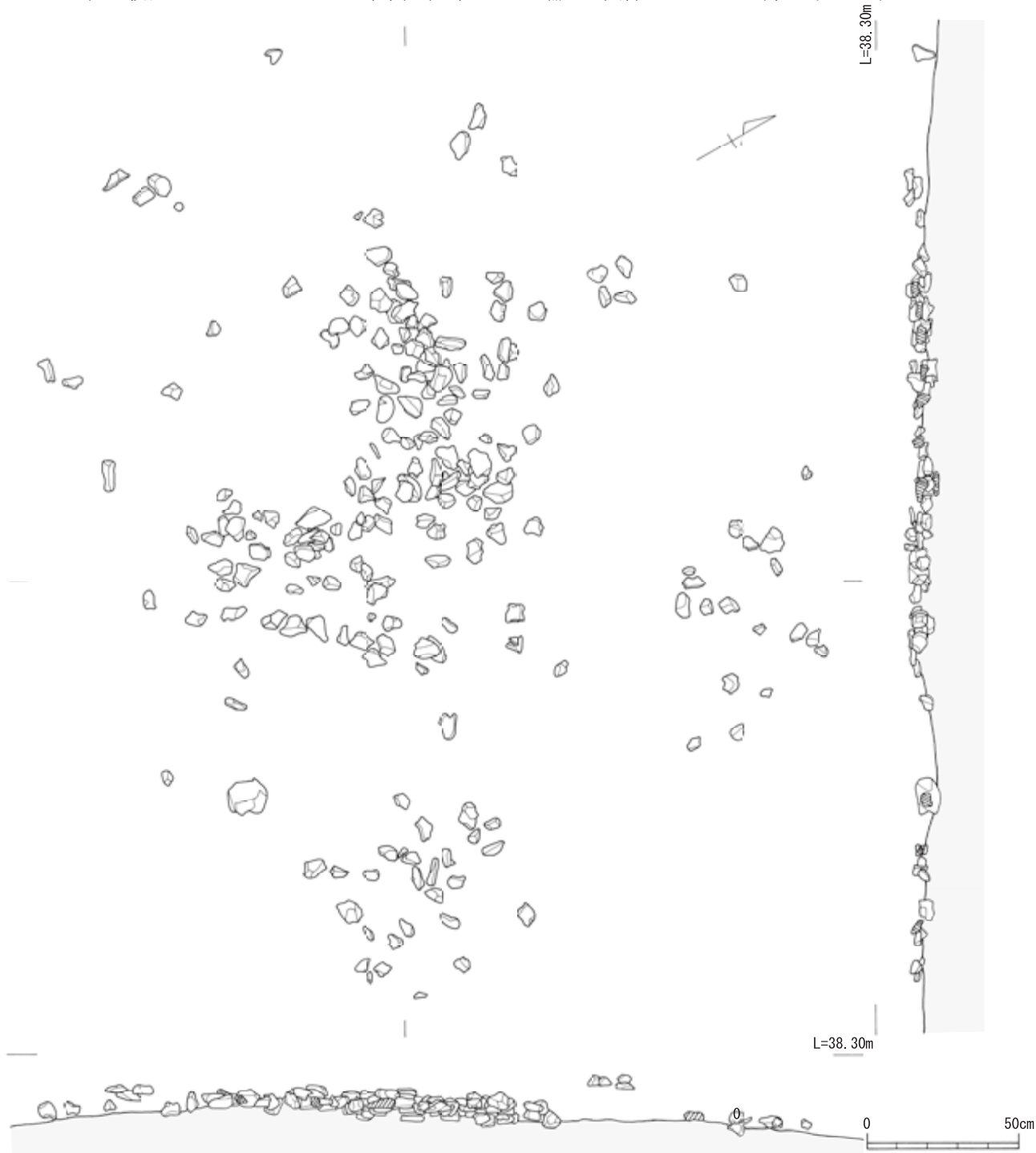
第30図 集石12号, 13号, 14号, 15号, 26号, 28号検出状況

や炭化物もみられなかったことから確認できなかったが、礫の集まり具合から浅い掘り込みを有していたと思われる。掘り込みの大きさは、径90×70cmの楕円形を呈し、深さは15cm程度であると思われる。礫総数は104個であり、大きさ径10cm前後、重量100～250gの角の取れた角礫を中心として構成されていた。火熱を受けたと思われ赤化がみられるが、破損礫の割合は、他の集石より少なく半数以下である。

集石14号（第28図、第30図）

オ-28区で検出された。115×60cmの範囲に、礫が

集中した部分と散在した部分がみられた。集中部の下位に掘り込みがあり、礫が詰まっていた。掘り込みの大きさは、径25×22cmのほぼ円形を呈し、深さは12cmのやや小さめのものである。礫総数47個中25個ほどにまとまりがみられ、上面は散在部分と同レベルである。石材は角の取れた拳大の砂岩を中心に、安山岩や軽石も含まれていた。火熱を受けたと思われる割れた破損礫が半数を占め、赤化したものも多くみられた。散在部分の礫の特徴が集中部分のものに似ていた。集石中に安山岩の石器が1点含まれていた。（第128図 S137）



第31図 集石16号

集石28号（第29図、第30図）

オー28区で15号の北西に近接して検出された。60×40cmの範囲にまとまりがみられ、礫総数は21個と少なかった。大きさが径10cm前後、重量約200gの礫と径約5cm、重量約100gの礫とで構成され、ほとんどが破損礫である。火熱を受けたと思われる礫の赤化がみられ、まとまりのほぼ中心に集まっていた。集石の北隣から轟式土器が3点出土した。ほぼ同レベルであることから縄文時代前期頃のものと考えられる。出土した3点中2点を図化した。（第104図523、524）

集石16号（第31図）

クー30区で検出された。3×2.7mの範囲に広がる散在した部分とそのほぼ中心に約110個のまとまりがあった。礫総数は209個と他の集石より多く、約半数が火熱を受けて破碎したと思われる破損礫である。中には赤化したものも認められた。ほとんどが5～10cm程度の小礫であり、重量組成では100～200gのものが多い。礫同志の重なりはあまりみられず、下位に掘り込みや炭化物等も認められなかった。

集石20号（第32図）

カー27区で検出された。145×85cmの範囲に散在した状態で検出されたが、高低差が大きく上部の礫と下部の礫の差は約20cm程度もある特異な集石である。礫は密集しておらず明確な掘り込みも認められないが、傾斜によって西側に散在していた。礫総数は45個であり、約15cm程度の赤化した円礫が多く含まれ全体の約半数が破損礫である。

集石27号（第33図）

オ、カー29、30区で検出された。100×65cmの範囲にまとまりがみられ、密集した状態であった。礫総数は93個であり、破損礫が大部分を占める。火熱を受けたと

思われる礫の赤化や黒化が多くみられ、大きさは拳大、重量100～200gのものが大部分を占める。下部に掘り込みは認められない。集石中に縄文時代前期頃の土器が1点含まれていた。（第104図522）

集石6号（第33図）

オー30区で検出された。礫総数は80個であり、個数は少ないが、ほとんどが径10cm程度、重量100～200gの完形礫である。100×55cmのやや平坦面の範囲に楕円形のまとまりがみられた。掘り込みは認められないが、火熱を受けたと思われる礫の赤化や割れがみられた。

集石7号（第33図）

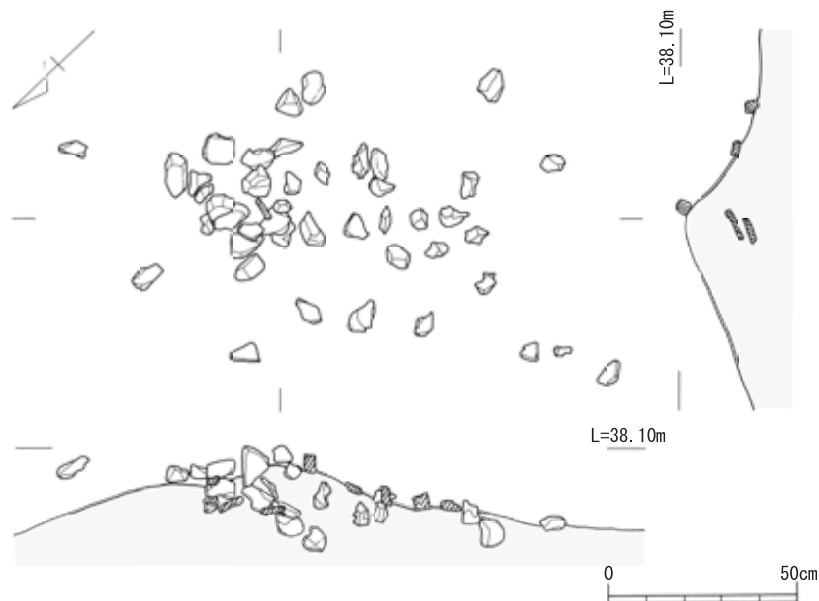
ウー31区で検出された。1.4×1.2mの範囲の中に礫のやや集中した部分と周辺に散在した部分で構成される。礫総数は34個中26個にまとまりがみられ、径5～10cm程度、重量50～150gの赤化した砂岩が中心である。火熱を受けたと思われる破損礫が半数を占め、掘り込みは認められなかった。（第103図508）

集石19号（第33図）

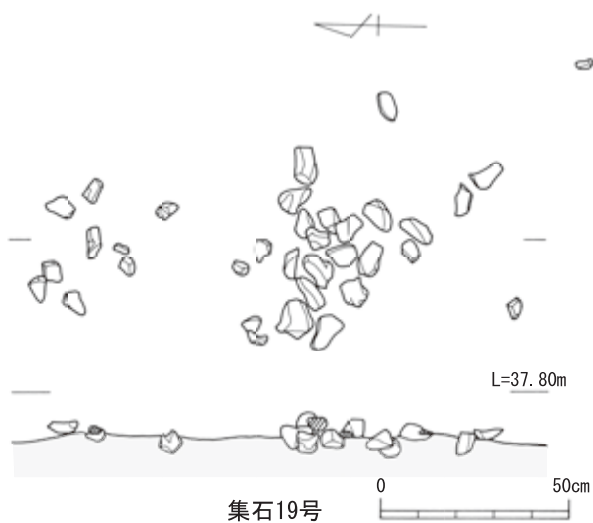
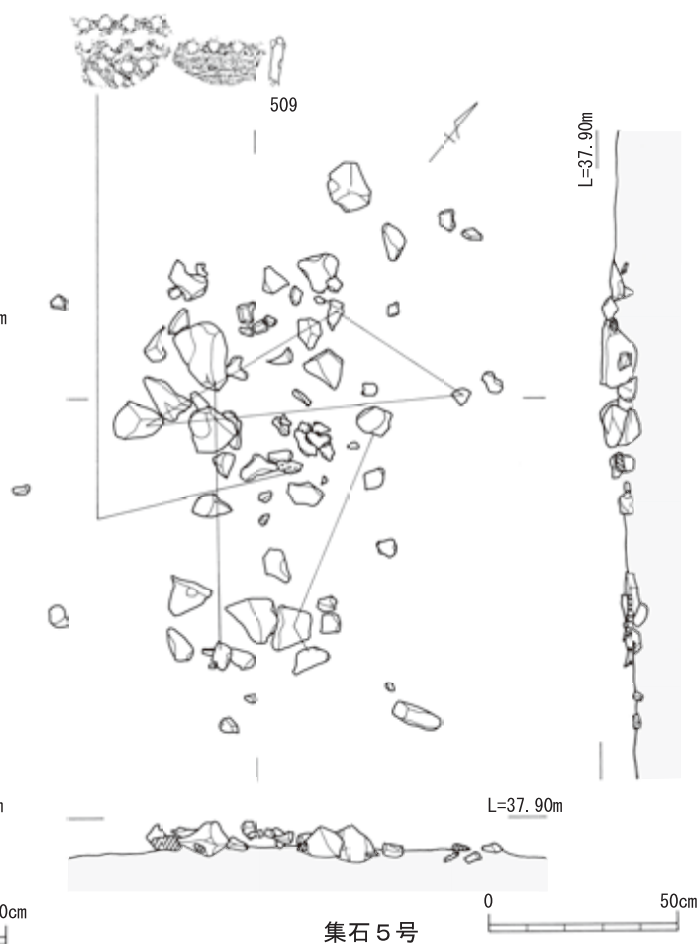
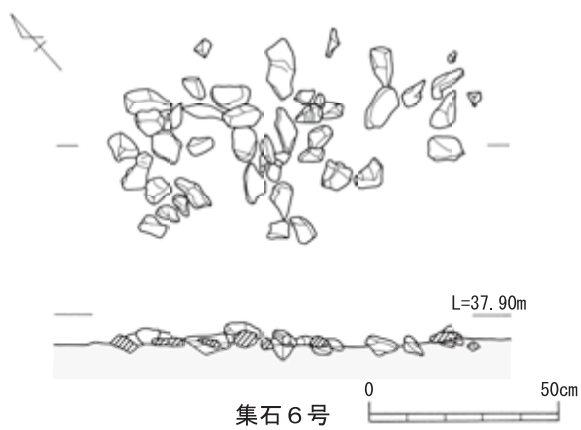
クー30区で検出された。礫総数は37個と少ないが、130×70cmの範囲に集中した場所が認められた。火熱を受けて破碎したと思われる赤化した礫が多く含まれる。下位に掘り込みや炭化物などはみられない。花崗岩の割合が多く、砂岩、安山岩も含まれる。大きさが径10cm前後、重量50～500gまでの大小サイズの異なる礫で構成されていた。

集石5号（第33図）

オー31区で検出された。火熱を受けたと思われる破損礫が1.5×1.3mの範囲に散在していた。礫総数は43個であり、礫の多くは径3～14cmの赤化した砂岩である。中には、破損した径20cm程度、重量1kgを超えるホルンフェルスも含まれていた。掘り込みは認められなかつ



第32図 集石20号



第33図 集石5号, 6号, 7号, 19号, 27号

第2表 集石集計表

名前	検出地点 (グリッド)	規模 (cm) (長径×短径)	掘り 込み	掘り込み規模 (cm) (長径×短径×深さ)	礫総数 (個)	完形礫 (個)	破損礫 (個)
1号	E-7区	120×65	無	×	26	6	20
2号	E-6区	125×65	無	×	20	6	14
3号	E-5区	200×160	有	120×80×25	195	43	152
4号	E-6～7区	90×50	無	×	17	4	13
5号	オ-31区	150×130	無	×	43	3	40
6号	オ-30区	100×55	無	×	80	30	50
7号	ウ-31区	140×120	無	×	34	15	19
8号	エ-29区	280×150	無	×	108	51	57
9号	ウ-29区	60×40	無	×	20	13	7
10号	ウ-28区	85×65	無	×	35	22	13
11号	エ-28区	110×60	有	40×30×15	53	21	32
12号	オ-28区	240×85	無	×	97	26	71
13号	オ-28区	300×160	無	×	131	35	96
14号	オ-28区	115×55	有	25×22×12	47	25	22
15号	オ-28区	140×110	有	90×70×15	104	61	43
16号	カ-28区	310×260	無	×	209	88	121
17号	エ-28区	65×45	無	×	22	11	11
18号	エ-29区	470×220	無	×	331	98	233
19号	ク-30区	130×70	無	×	37	22	15
20号	カ-27区	145×85	無	×	45	17	28
21号	C-25区	140×100	有	70×50×15	110	47	63
22号	ウ-27区	65×55	有	67×57×13	62	18	44
23号	ウ-27区	70×30	無	×	30	23	7
24号	B-26区	195×80	無	×	107	15	92
25号	ア-26区	120×110	無	×	32	2	30
26号	オ-28区	45×40	無	×	21	19	2
27号	オ、カ-29,30区	100×65	無	×	93	15	78
28号	オ-28区	60×40	無	×	21	5	16
29号	ウ-28区	55×45	有	50×45×10	24	10	14
30号	イ-27区	300×250	無	×	43	4	39
31号	ア-28区	160×100	無	×	58	15	43
32号	ウ-26区	65×50	無	×	9	1	8
33号	イ-27区	40×40	無	×	10	0	10
34号	ア-27区	200×140	無	×	73	3	70
35号	ア-28区	100×80	無	×	10	3	7

第3表 集石重量組成表 (単位: g)

名前	～50	～100	～150	～200	～250	～300	～350	～400	～500	～700	～1000	1001～	計
1号	26												26
2号	20												20
3号		195											195
4号													17
5号	17	9	5		4		1	1	1	1	2	2	43
6号	22	14	13	14	6	2	6		2	1			80
7号	3	13	12	5		1							34
8号	21	22	25	21	10	4	2	1	1	1			108
9号	6	6	5	1		1		1					20
10号	11	7	3	4	3	4			1		2		35
11号	9	19	7	7	2	3	1		3	1	1		53
12号	19	23	22	15	5	7	3	3					97
13号	48	39	18	11	5	5	2	1	1	1			131
14号	9	8	16	6	5	1		1	1				47
15号	10	13	25	26	17	7	5	1					104
16号	15	55	71	36	17	8	3	1	2			1	209
17号	5	10	2	3	3								23
18号	135	128	36	18	4	4	2		1	1	1	1	331
19号	3	13	7	3	2	5	2	1	1				37
20号													45
21号	11	20	17	27	15	9	4	3	3	1			110
22号	2	12	16	11	4		3	6	3	3	1	1	62
23号	6	6	5	5	3	2	2	1					30
24号	47	32	7	5	6	2	3	1	1	2	1		107
25号	6	9	10	2	4	1							32
26号	2	3	2	5	2	4	1	2					21
27号	8	25	32	15	4	2	3	2	1	1			93
28号	2	5	4	3	5	1		1					21
29号	3	9	3	7	1	1							24
30号	12	9	8	7	2	1	1	1	2				43
31号	25	19	5	4	2	1	1	1					58
32号		1	4	2			1	1					9
33号		5	3	1	1								10
34号	40	20	5	5	1	1	1						73
35号	7		1		1	1							10

た。集石中に阿高式土器が2点含まれていたことから、縄文時代中期頃のものと考えられる。出土した2点中1点について図化した。(第103図509)

2 石斧埋納遺構 (第34図, 第35図)

調査区西側の自然堤防上の丘陵地で、2基検出された。これは、集石遺構が集中して検出され、縄文時代前期の遺物が多く出土している区域とほぼ同じであり、検出面も同じⅢ層黄褐色土である。

各個別の石器については、第3節出土石器の項で説明を行う。

石斧埋納遺構1号 (第34図)

カ-28区で検出された。掘り込みを有し、打製石斧などが集中して整然と隙間無く並べられた状態で出土したことから、意図的に埋められたものと認識された。掘り込まれたⅢ層黄褐色土と埋土が同じため掘り込み上面は確認できなかったが、深さは比較的浅く、遺物の分だけ掘り込まれたものと思われる。想定される掘り込みは、径17×10cm程度の楕円形を呈し、深さ7～8cmである。中心部には最大長15cmを超える大型の打製石斧を中心に、他2点の製作途中の打製石斧と大型剥片2点の計5点が認められた。5点中S234の剥片とS235の打製石斧は接合した。(第153図 S231～S235)

石斧埋納遺構2号 (第35図)

ア-28区、Ⅲ層で検出された。磨製石斧が多数出土し、下面に掘り込みを有する。1号と同じように、遺物の分だけ掘り込まれたものと思われ、掘り込み上面は確認できなかったが、想定される掘り込みは、径約30×25cm程度の楕円形を呈し、深さ約10cmである。中心部には磨製石斧6点が確認され、5本が北西に向かって同じ方向を向くように置かれ、1本がやや直行気味に置かれていた。(第143図 S211, 第149図 S215, S216, 第150図 S217～219, 第151図 S222) 最大長18cm前後の大型のものが2本、最大長10cm前後のやや小型のものが4本で構成され、6本が重なるように隙間無く置かれていた。6本中5本は完全品であった。西側に隣接して集石35号が同レベルで検出されているが、石斧埋納遺構との関連は不明である。石斧埋納遺構2号周辺で、縄文時代前期の土器が5点出土しており、5点中3点について図化した。(第104図532, 533, 534)

3 磨石集積遺構 (第36図, 第37図)

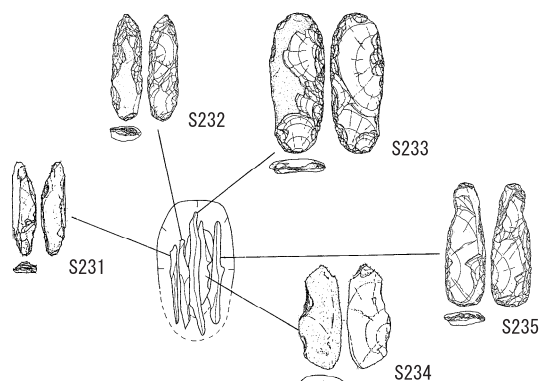
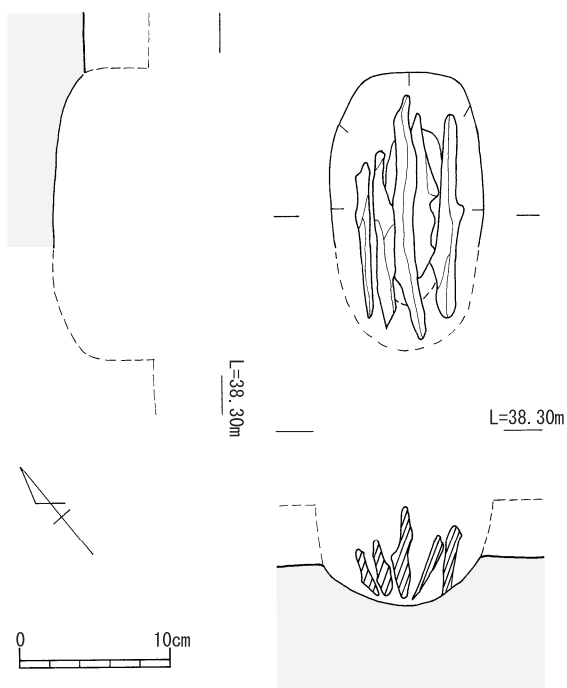
複数の磨石が集まった状態で出土したものを磨石集積遺構として取り扱った。調査区西側の自然堤防上より万之瀬川へ向かって少し下ったところに、2基検出された。これは、集石遺構が集中して検出された場所の西端に近く、縄文時代前期の遺物が多く出土している区域とほとんど出土しない区域のほぼ境目に当たるところであ

る。検出面は縄文時代前期～中期の包含層であるⅢ層またはⅣ層上面である。

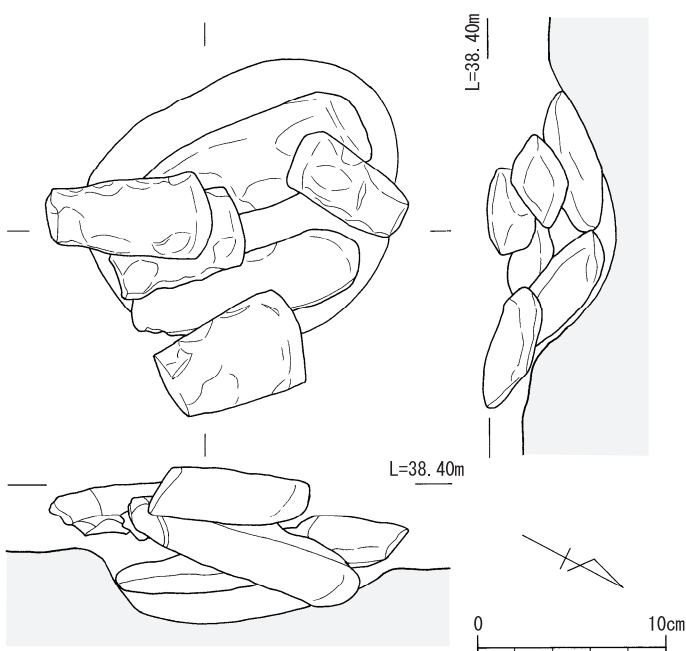
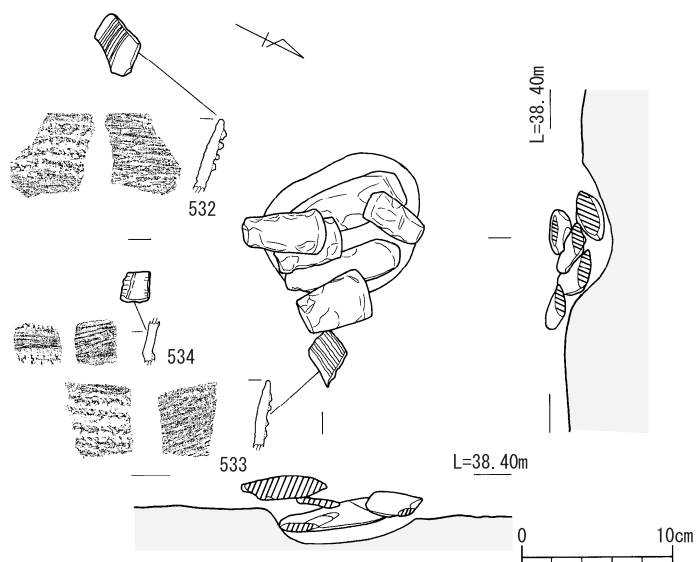
各個別の石器については、第3節出土石器の項で説明を行う。

磨石集積遺構1号（第36図）

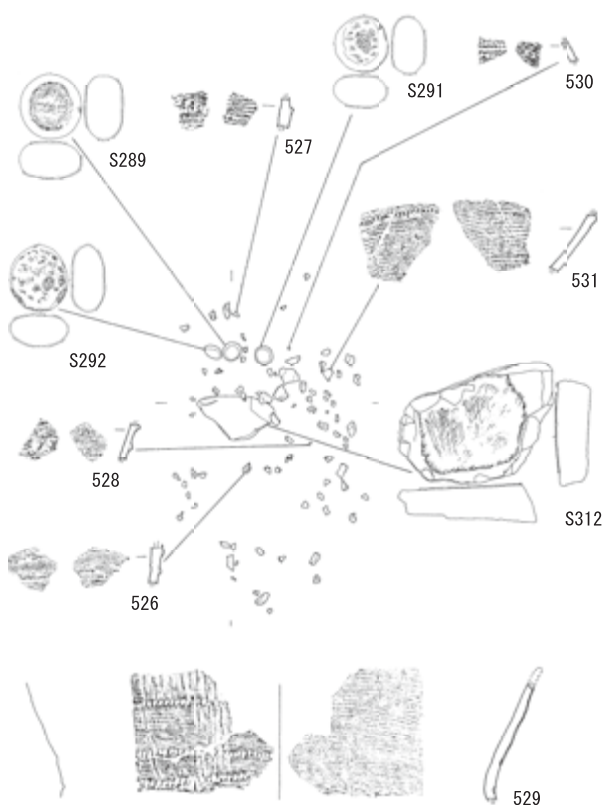
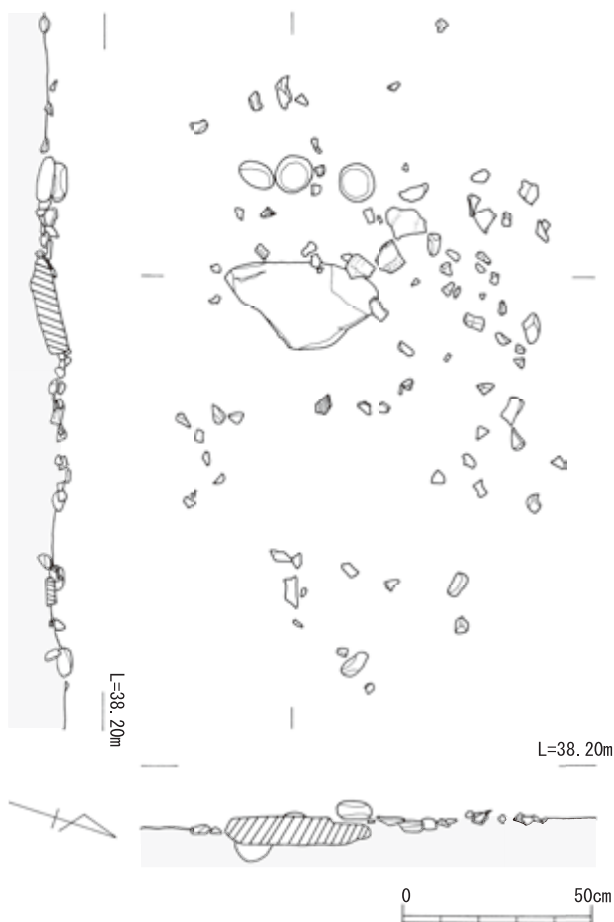
ア-30区、Ⅳ層上面で検出された。磨石を含む大小の石が、1.9×1.2mの範囲に散在していた。磨石4点（第162図 S289～S292）、石皿1点（第164図 S312）、礫56個の計61点で構成されており、ここでは磨石集積遺構として取り扱った。磨石は4個中3個が完形品であり、南北方向に並んで出土した。北側の2個は置かれた状態であり、残り1個はやや直立していた。磨石は径9～10cm、厚さ4～5cm、重量500～700gの円形を呈したほぼ同規模のものである。近接して東側に石皿が磨面を下にして置かれていた。石皿は、35×30cmと大型であり、磨石と同時期に使用されていた可能性が高い。その他の礫は、10cm前後の礫14個と径5cm前後の小礫42個であり、周辺に散在し、まとまりはみられない。小礫は火熱を受けて破碎したと思われる破損礫であり、赤化したも



第34図 石斧埋納遺構1号



第35図 石斧埋納遺構2号

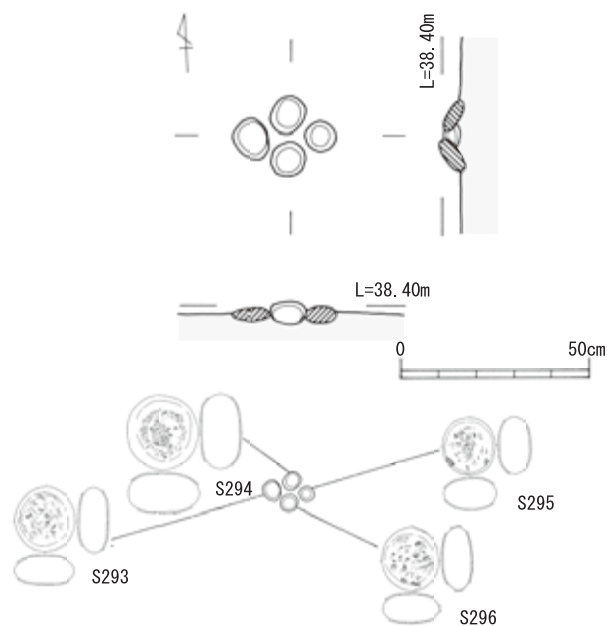


第36図 磨石集積遺構 1号

のも多かった。下位や周辺に掘り込みは認められなかった。遺構内や周辺から計27点の縄文時代前期の土器が出土している。出土した27点中6点について図化した。(第104図526～531)

磨石集積遺構 2号 (第37図)

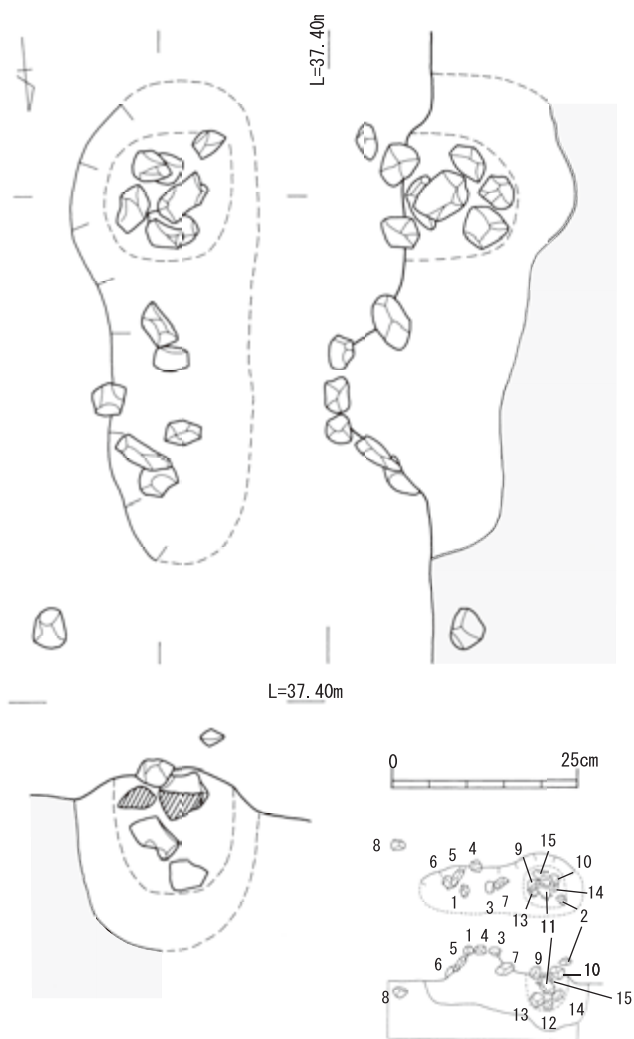
オ-30区, Ⅲ層で検出された。4個の磨石が, 30×25cmの範囲に東西南北方向に1個ずつ近接して検出され, 全体的に見ると菱形を呈していた。磨石同志の重なりはみられない。ほぼ同レベルに平坦面を上下にして置かれた状態で出土しており, 南北方向に置かれた2個は, お互いが中央に向かってやや傾斜していた。磨石は平坦面に磨面があり, 表裏平坦面に敲打痕が残るものである。中には周縁部にも磨面あるいは敲打痕を持つものも含まれる。形態はほぼ円形を呈した平たいものであるが, 大きさは径が約11cm, 重量1.1kgのものから, 径が約8.5cm, 重量550gのものまで様々である。下位に掘り込みは認められず, 遺構内や周辺に土器等の出土はなかった。(第162図 S293～S296)



第37図 磨石集積遺構 2号

4 黒耀石原石埋納遺構 (第38図)

調査区西側の万之瀬川に近い低地部, エ-31区のⅢ層にて検出された。西北九州産のものと思われる黒耀石の原石が65×30cmの範囲に15個まとまって出土した。15個中8個に集中がみられ, 埋土も同じⅢ層のため確定はできなかったが, 掘り込みが推測される。掘り込みの大きさは, 径20×15cm程度, 深さ約20cmと考えられ, 掘り込みの形状や出土状況から, 黒耀石の原石をまとめて袋状のもの, または籠のようなものに入れて埋めた可能性もある。その他の7個は, 近接しているが約15cmの高低差があり中央がやや盛り上がるように出土してい



第38図 黒耀石原石埋納遺構

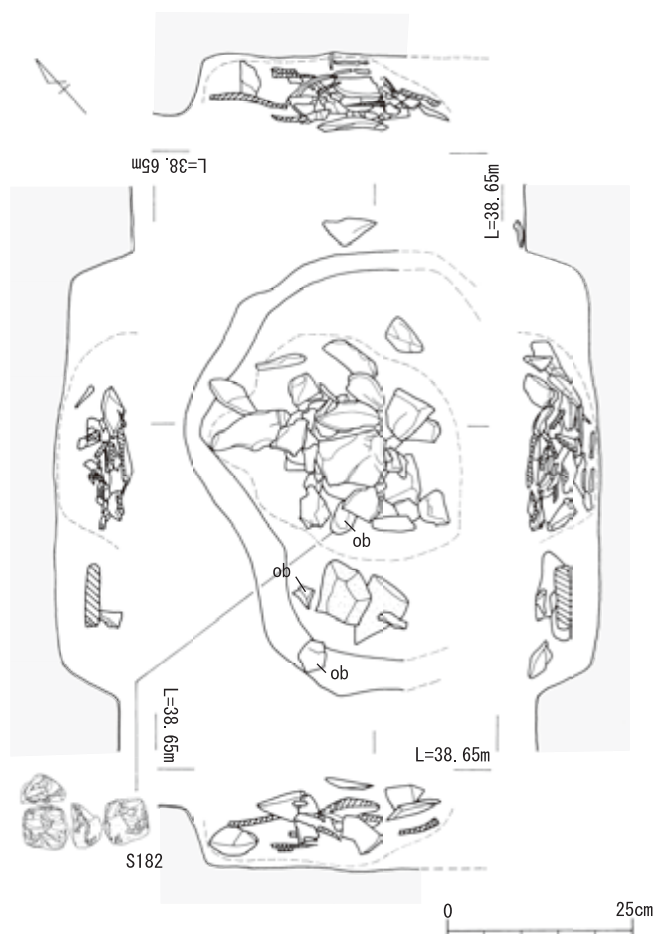
第4表 黒耀石原石埋納遺構計測表

番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	原産地
1	4.0	5.7	4.8	128.9	針尾系
2	3.1	5.4	3.7	55.6	〃
3	4.9	4.8	4.4	88.8	〃
4	3.6	5.0	4.8	112.0	〃
5	3.3	8.9	4.6	134.4	〃
6	5.2	6.1	2.6	92.3	〃
7	4.1	6.5	4.3	130.1	〃
8	4.8	5.5	3.8	104.4	〃
9	3.9	5.6	3.3	84.9	〃
10	3.9	6.4	5.0	115.3	〃
11	3.6	6.4	4.3	112.6	〃
12	4.7	4.7	3.7	90.4	〃
13	5.0	6.1	4.3	145.7	〃
14	4.7	8.2	3.1	110.9	〃
15	5.1	6.1	4.8	168.1	〃

る。この周辺は、樹痕や耕作等による攪乱が激しいことから、同じように攪乱を受けたと思われる。原石は、角が丸みをもつ針尾産と推定され、大きさは平均で最大長4.4cm、最大幅5.5cm、最大厚1.1cm、重量は27.5gである。なお、個別の計測値は第4表に示した。

5 剥片集積遺構（第39図）

ア-25区Ⅲ層で検出された。調査区西側の自然堤防上の丘陵地で、安山岩の剥片65点が浅いボール状に積み重なって出土した。埋土も同じⅢ層のため確定はできなかったが、掘り込みがあったと思われる。想定される掘り込みの大きさは、径35×30cm程度、深さ約10cmと考えられる。剥片の出土状況は掘り込み下面に張り付くように半円球状に重なり、上面に広がって隙間無く積み重ねられていた。掘り込みの形状から、ボール状の籠のようなものに入れられていた可能性も考えられる。剥片は、最大長7.7cm、重量85gのやや大型のものから、最大長2.2cm、重量5gの小型のものまであり、平均して最大長4.3cm、最大幅6.1cm、最大厚4.1cm、重量は111.6gである。風化面や自然面の状況から、濃い灰色、灰色、薄い青灰色、細かい縞模様の入るものと少なくとも4種類に大別される。このことから、異なる4種類程度の安山岩を小さな剥片の状態で1ヶ所に保管していたことを示している。集積内に黒耀石の石核が1点含まれていた。（第140図 S182）掘り込み周辺から出土した砂岩2個、黒耀石2個の計4個は遺構との関連が薄いと思われる。なお、遺物は第183図に、計測値は第5表に示した。



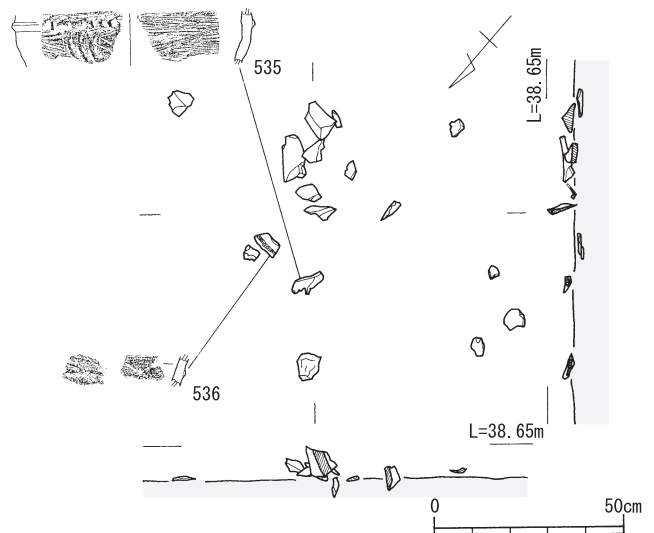
第39図 剥片集積遺構

第5表 剥片集積遺構計測表

番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	その他
1	4.5	6.6	1.2	34.4	安山岩	
2	4.6	4.2	0.7	11.5	〃	
3	3.9	3.8	0.7	8.8	〃	
4	3.7	5.0	1.6	15.6	〃	
5	3.4	3.4	0.6	5.0	〃	
6	4.1	4.8	0.7	18.1	〃	
7	4.8	5.0	1.1	27.7	〃	
8	9.7	8.9	1.6	146.3	〃	
9	5.7	8.7	1.4	48.5	〃	
10	4.4	6.1	1.0	26.6	〃	
11	4.2	5.1	2.8	73.2	〃	原石
12	4.5	5.1	3.0	61.8	〃	〃
13	4.0	6.8	0.9	17.9	〃	
14	5.3	4.7	1.5	34.2	〃	
15	5.1	4.0	0.6	9.7	〃	
16	2.6	3.6	1.8	13.7	黒耀石	針尾系
17	4.1	4.8	2.1	38.2	〃	原石、腰岳系
18	5.8	6.2	1.2	46.2	安山岩	
19	7.1	4.4	1.1	22.3	〃	
20	3.4	4.5	0.9	23.1	〃	
21	4.9	5.8	1.5	23.7	〃	二次加工
22	5.5	6.4	1.1	32.2	〃	
23	5.0	7.7	1.1	40.1	〃	
24	2.9	4.2	1.3	21.8	〃	
25	5.6	7.3	1.2	34.5	〃	
26	5.0	4.7	2.1	56.3	〃	
27	6.2	6.0	1.2	32.9	〃	
28	3.1	2.9	0.6	3.8	〃	
29	5.4	4.7	1.0	13.9	〃	二次加工
30	6.1	7.8	1.0	42.2	〃	
31	3.2	4.7	0.9	10.3	〃	
32	3.3	5.8	0.8	15.2	〃	
33	2.5	2.7	1.3	2.9	黒耀石	腰岳系
34	4.1	7.7	0.9	33.0	安山岩	
35	3.5	5.1	0.6	23.1	〃	
36	3.5	3.8	0.7	5.8	〃	
37	2.9	4.1	0.7	6.6	〃	
38	3.3	3.9	3.1	7.1	〃	
39	3.6	6.0	1.2	62.1	〃	石核
40	5.6	6.3	0.5	24.9	〃	
41	4.0	4.9	1.0	8.3	〃	
42	4.7	11.2	1.0	45.2	〃	
43	4.5	5.7	1.0	20.9	〃	
44	8.3	5.2	1.4	59.2	〃	二次加工
45	5.1	8.4	1.5	55.8	〃	
46	3.0	4.3	1.1	9.4	〃	
47	4.5	6.8	1.4	35.3	〃	
48	3.7	6.6	0.9	18.1	〃	
49	7.7	6.9	1.6	85.0	〃	二次加工
50	2.2	2.8	0.9	5.0	〃	〃
51	5.7	7.2	1.2	3.4	〃	
52	2.4	3.9	0.6	5.8	〃	
53	2.9	4.9	0.8	8.0	〃	
54	4.2	6.2	0.8	16.6	〃	
56	5.3	6.5	0.8	22.9	〃	
57	3.1	4.3	0.5	4.4	〃	
58	3.5	3.5	0.6	6.1	〃	
59	7.2	7.1	4.9	165.2	黒耀石	石核、腰岳系
60	4.2	5.1	3.0	66.0	安山岩	原石
61	5.0	7.5	1.3	48.1	〃	
62	1.8	3.2	0.6	2.4	〃	
63	4.0	6.0	0.5	9.3	〃	
64	3.1	4.1	1.0	9.5	〃	
65	4.0	4.4	0.9	8.4	〃	
66	3.0	4.8	0.6	8.4	〃	
67	3.9	2.7	0.7	5.0	〃	
68	4.6	8.0	1.0	29.9	〃	
69	4.2	5.0	1.1	22.4	〃	
70	6.8	8.9	4.7	336.4	砂岩	熱破砕
71	8.2	9.8	3.2	330.6	〃	〃

6 剥片集中区（第40図）

調査区西側の自然堤防上の丘陵地に、剥片が集中して出土した地点があり、剥片集中区として取り扱った。出土地点は、剥片集積遺構検出地点から10m 北側のイー24区に位置し、同じⅢ層黄褐色土からの出土である。90×80cm の範囲に散在し、中央部にややまとまりがみられた。剥片総数は15点であり、最大長10cm 前後のやや大きいものが4点、最大長6cm 前後のものが5点、最大長4cm 以下の小さいものが6点で構成されていた。石材は、砂岩3点と頁岩12点であり、頁岩は含まれる珪質の違いによりさらに3種類に分かれる。個別の計測値は、第6表に示した。砂岩の2点は接合した。中央部は平坦面に置かれたようにも見えるが、周辺部は5cm 近い高低差や立った状態での出土もみられたが、下位や周辺に明確な掘り込みが確認されないことから、洪水や樹痕による攪乱であると考えられる。同じ場所で縄文時代前期の土器が2点出土した。（第104図535、536）



第40図 剥片集中区

第6表 剥片集中区計測表

番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	その他
1	7.5	7.7	1.7	88.1	砂岩	7と接合
2	4.1	8.9	2.4	47.6	頁岩	
4	4.4	9.5	4.3	131.5	砂岩	
5	4.9	7.3	1.4	30.5	頁岩	
6	6.5	7.2	1.5	45.3	頁岩	
7	8.4	8.8	3.5	185.9	砂岩	1と接合
8	11.8	5.9	2.4	130.7	頁岩	
9	5.5	6.0	1.0	33.0	頁岩	
10	5.4	7.4	1.6	58.6	頁岩	
11	3.1	4.3	0.6	57.0	頁岩	
12	3.6	3.7	0.9	11.5	頁岩	
13	4.7	6.3	2.0	48.7	頁岩	
15	5.1	3.7	1.0	15.6	頁岩	
16	3.1	4.9	0.7	7.9	頁岩	
17	4.8	4.5	1.2	27.1	頁岩	

第2節 出土土器

I～VI類の分布

I類

A-22～カ-30区にかけて舌状に形成されている比高差1mの微高地（中央微高地）の東南側傾斜面に出土している。

II類

上記中央微高地の東南部及び北東傾斜面とC～H-10区微高地（北微高地）の東側傾斜面に分かれて出土している。中央微高地部の出土は散布状態である。

III類

出土記載の遺物は上記中央微高地の東南部傾斜面に出土している。他は、包含層一般取り上げのため出土地点は記載できなかった。

IV類

中央微高地の舌状先端部から、エ～カ-25区～キ～コ-30区に形成されている比高差40cmの微高地（南微高地）南側にかけて出土している。出土状況は散布的である。

V類

この類の出土は大きく2ヶ所に分かれ、D・E-2～8区の北部傾斜地と、南部微高地のA～ケ-25～31区に出土している。南部微高地は、舌状台地上段のア・イ-26・27区と舌状台地先端のカ～ケ-28～31区に分布している。

VI類

南部微高地の舌状台地上段に出土している。

I～IV類の土器

I類（1・2）

1は直に向く口縁部で器形は円筒形土器の深鉢である。口唇部は刻みがあり尖り、内面は段になり、外面は貝殻刺突で文様を付けている。器面は外面が研磨状に内面が丁寧に撫で調整を横方向にしている。焼成は良い。2は直に向く口縁部で器形は円筒土器の深鉢である。口唇部は尖り、外面には刻みがみられる。器面は外面が貝殻条痕で、内面は撫で調整である。焼成は良い。これらは縄文時代早期に位置する土器である。

II類（3～5）

3は深鉢の胴部である。外面の文様は楕円押型文である。内面は丁寧に撫で調整をしている。焼成は良い。4は深鉢の胴部である。外面の文様は縦方向の山形押型文と横方向の刻み目のある突帯である。内面は丁寧に撫で調整をしている。焼成は良い。5は深鉢の胴部である。外面の文様は縦方向の山形押型文である。内面は丁寧に撫で調整をしている。焼成は良い。これらは縄文時代早期の押型文土器である。

III類（6～9）

この類は沈線と連点の組み合わせをもつ文様の土器で

ある。

沈線と連点の組み合わせと細い沈線と連点の組み合わせをした文様を構成している。

6は深鉢で外反する口縁部である。口唇部は平坦で刻み状に連点を施している。外面は3条の突帯に刻み状の連点を施している。また、頸部には2・3条の沈線がみられる。内面は丁寧に撫で仕上げである。焼成は良い。7は外反する深鉢で、外面の文様は3列連点とやや大きめの沈線を斜状に施している。内面は撫で仕上げである。焼成は良い。8は突帯に刻み状の連点を施し、頸部には2・3条の沈線がみられる。内面は丁寧に撫で仕上げである。焼成は良い。9は外反する深鉢で、外面の文様は沈線を斜状に施し、間に連点がみられる。内面は撫で仕上げである。焼成は良い。これらは縄文時代早期に位置する土器である。

IV類（10～17）

この類の文様は刻目突帯と沈線の組み合わせである。

10は深鉢で外反する山形の口縁部である。外面の文様は口唇部に刻目、口縁部に2条の刻目突帯と3条の沈線、頸部に刻目突帯を施している。内面には沈線がみられる。

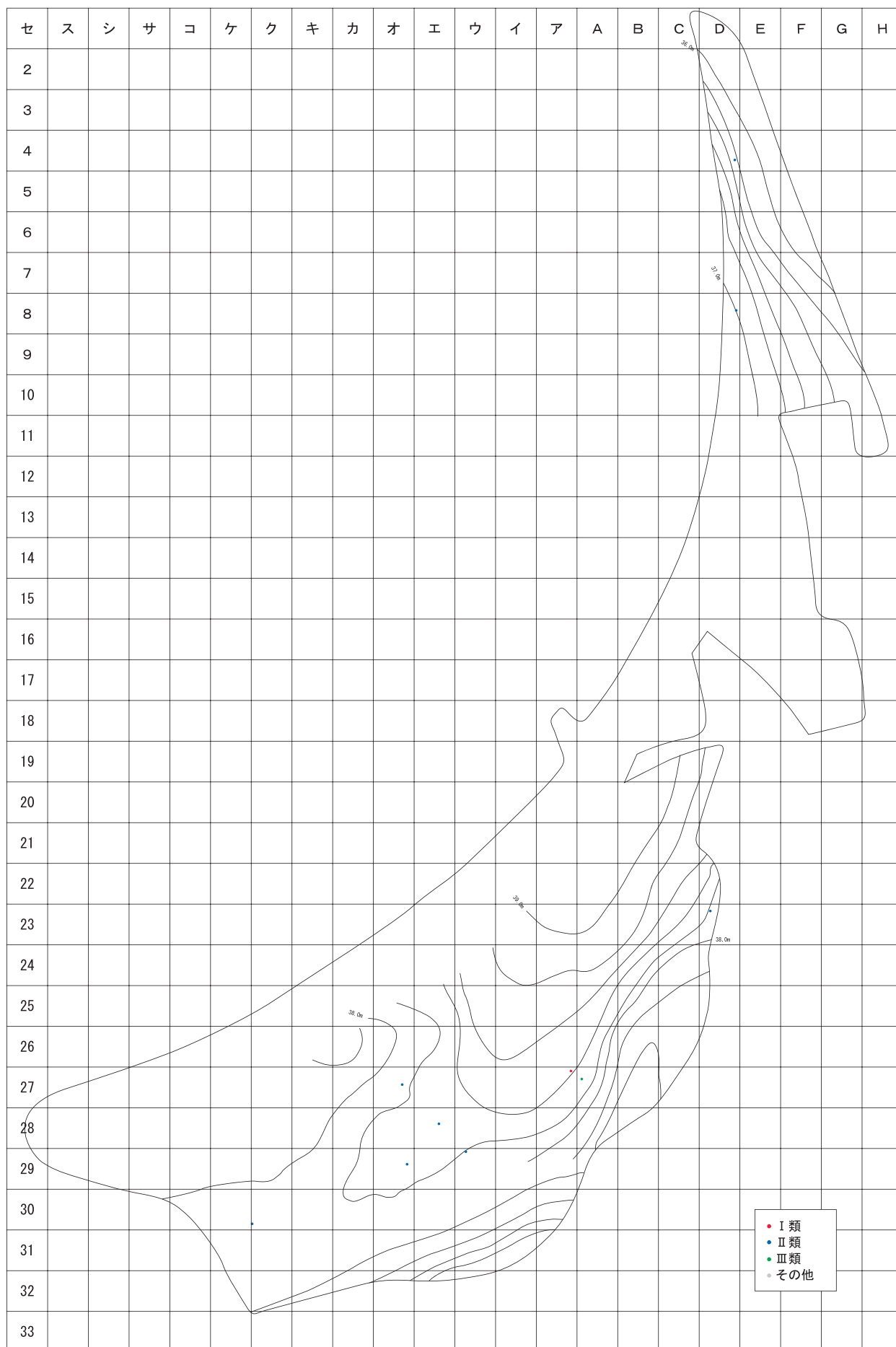
器面は内外面とも丁寧に撫で調整である。11・12は10と類似しているので同一個体と思われる。13・14は頸部で「く」の字に折れる深鉢である。外面には沈線と刻目突帯が頸部にみられる。15は深鉢の底部で平底である。外面には縦方向の撚糸文と横方向の沈線がみられる。内面は丁寧に撫で調整である。焼成は良い。16・17は深鉢の胴部で外面には細い沈線を2・3条で構成した文様を横方向に施している。これらは縄文早期に位置する。

V類（18～38）

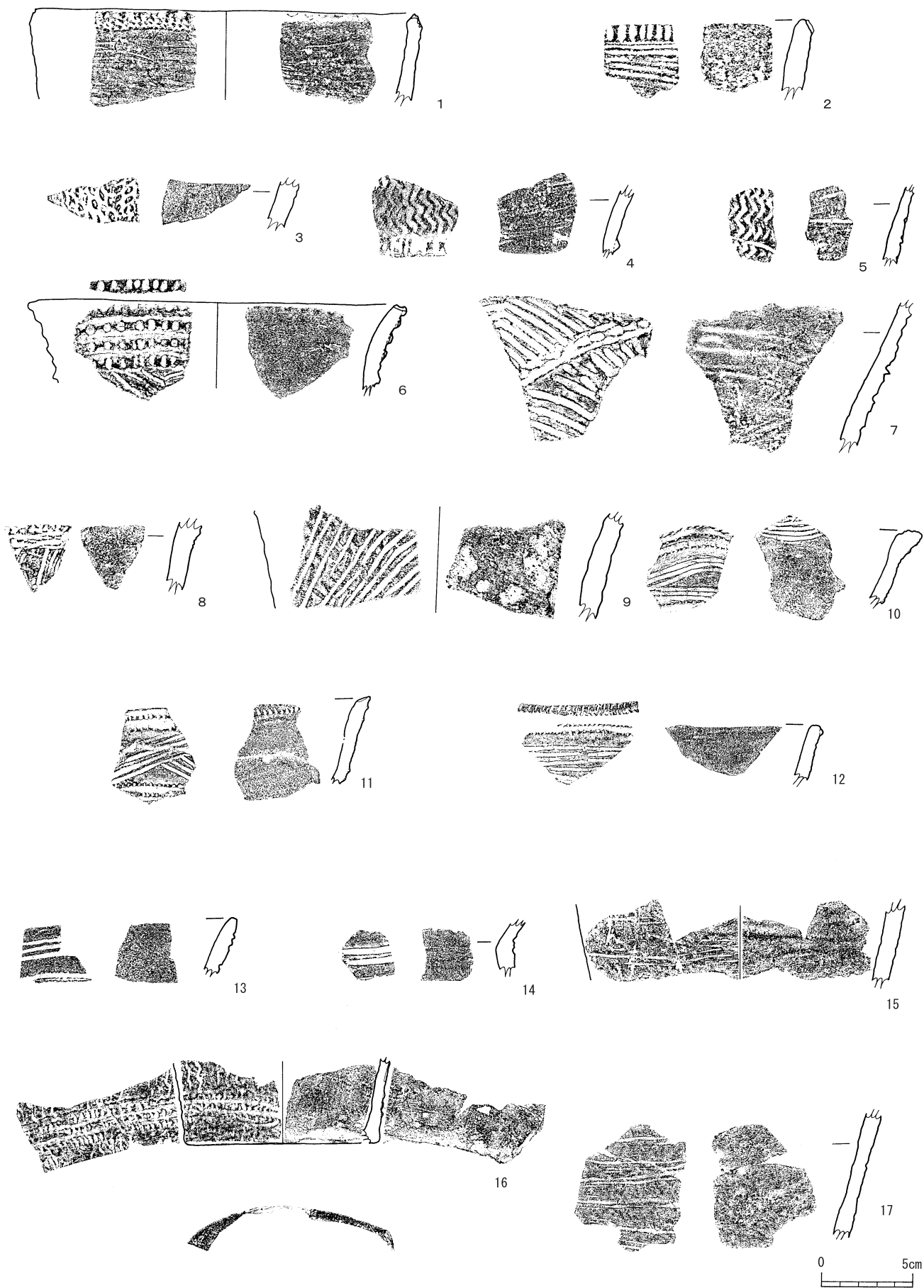
この類は文様が沈線と貝殻刺突連続文の組み合わせである。18は頸部で「く」の字状に口縁部が外反する深鉢である。文様は口縁部に4・5列の沈線を縦方向と斜め方向に交差させ、頸部に貝殻腹縁部による相向弧文を施している。器面は粗い撫で調整で、焼成は軟質である。19は外反する口縁部である。文様は18と類似したものを施している。器面は粗い撫で調整で、焼成は軟質である。20は外反する口縁部である。文様は18と類似したものを施している。器面は撫で調整で、焼成はやや軟質である。21は頸部で「く」の字状に口縁部が外反する深鉢である。部位は頸部から胴部で、文様は沈線と貝殻腹縁部による連続文を押し引き状に施している。22は部位が頸部から胴部で、文様は沈線と貝殻腹縁部による連続文を押し引き状に施している。補修孔も頸部にみられる。23・24・25部位は胴部で、文様は沈線と貝殻腹縁部による連続文を押し引き状に施している。焼成は良くない。26は深鉢の頸部から胴部である。頸部に貝殻刺突連続文を付け、胴部に貝殻腹縁沈線を施している。27は深鉢の胴部であ



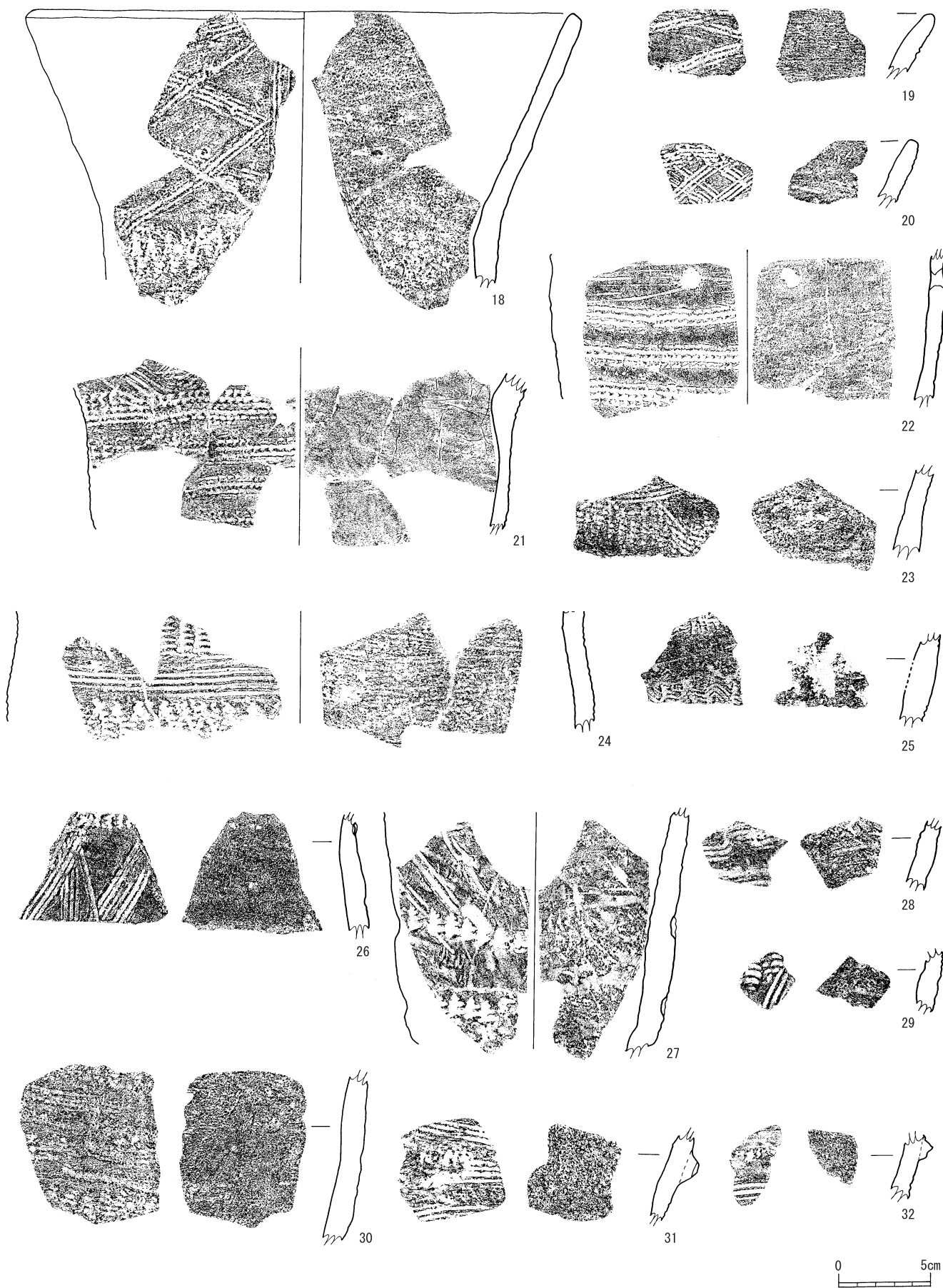
第41図 縄文時代の土器出土分布図1 (I～XXIV)



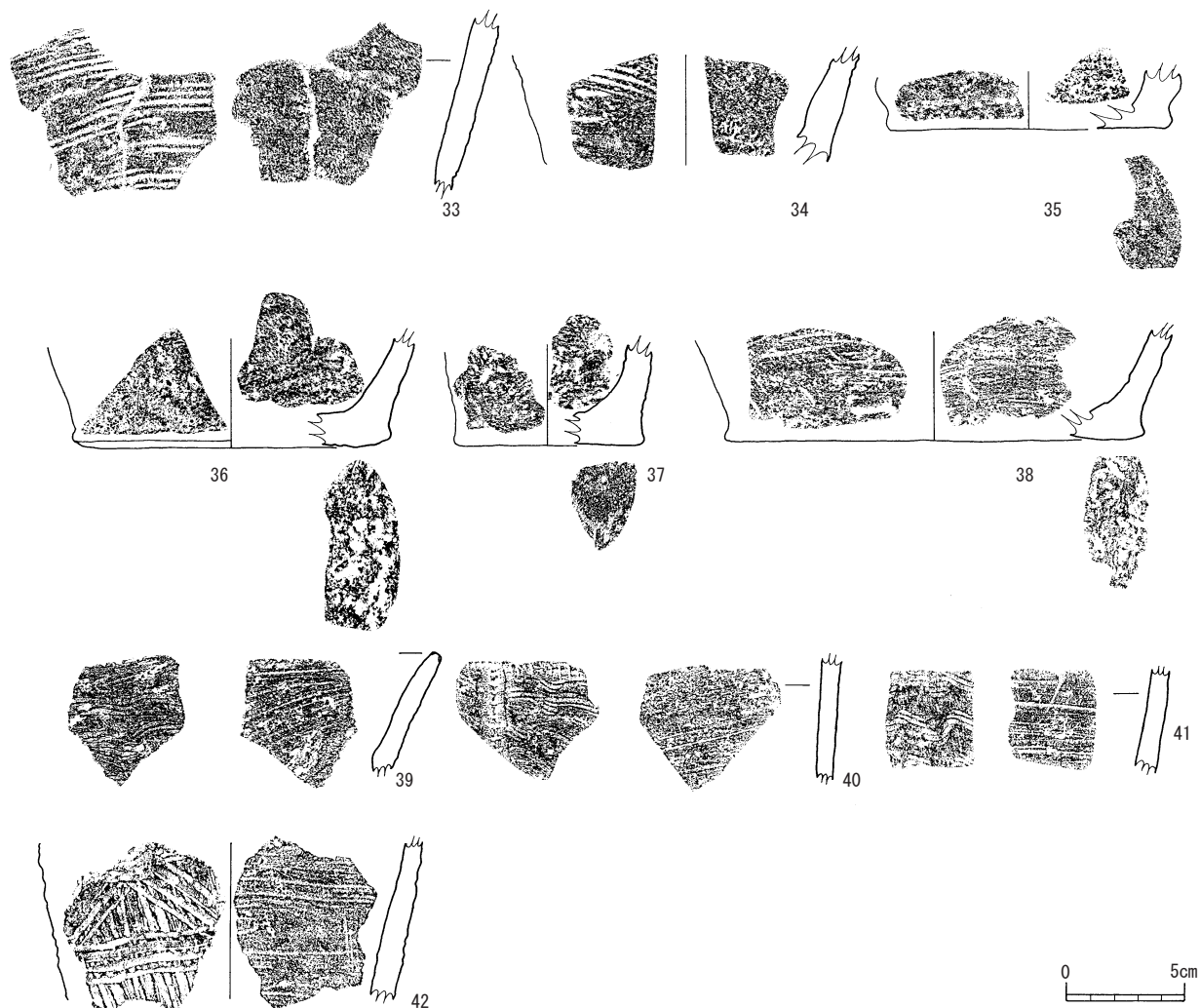
第42図 縄文時代の土器出土分布図2 (I～III類)



第44図 縄文時代の土器（Ⅰ～Ⅳ類）



第45図 縄文時代の土器2 (V類)



第46図 縄文時代の土器3 (V, VI類)

る。粗い条痕状の器面調整に貝殻腹縁刺突文を横方向に施している。焼成は堅くて良い。28・29は深鉢の胴部で、貝殻腹縁による短く曲げた文様を施している。30は貝殻腹縁による文様を横方向に施している深鉢の胴部である。焼成は良くない。31は30と類似しているが丸い瘤がみられる。32は同じく尖った瘤がみられる。33・34は30と類似している。35～38は平底の底部である。器面は粗く焼成も軟質で潰れやすい。これらは縄文時代早期に位置する。

VI類 (39～42)

この類はa類が貝殻条痕を波状に施す39～41と直線に施す42のb類に分けられる。39は直線状に外反する口縁部である。器面は外面が条痕文を波状に、内面は道具による撫で調整をしている。40は直向する深鉢である。外面には波状の条痕文に微隆起突帯の刻目文が縦と横にみられる。内面は道具による撫で調整である。41は直向する深鉢である。外面は波状の条痕文で内面は道具による撫で調整である。42は外向する深鉢である。外面は太めの条痕文に4条痕で縦方向の上に横と斜めに施す。内面

は道具による撫で調整である。これらは文様、色調、焼成などから縄文時代早期末に位置すると思われる。

以上これまでが縄文時代早期の土器である。

VII類

VII類の分布

この類はD・E-6～8区の北部微高地とA～ケ-25～31区の南部微高地に分かれて出土している。北部微高地は決れた傾斜面に散布状で出土した。南部微高地の上段部は散布状で出土している。南部微高地の先端部は南側傾斜面に出土し、特にカー-28・29区に集中している。

VII類の土器 (43～65)

この類は器面が条痕文で調整され、口縁部に刻目突帯を施すもので、中には斜状沈線で菱形文を施したものもある。

43は口径40.5cm、底部欠損状態で21cmの器高を測る深鉢である。器形は胴部から外に開き、口縁部はやや直に立つ形状である。口唇部は平坦面に切り、角が明瞭である。器面は外面が太めの条痕文、内面は上半分が横方

向の条痕文、下半分が道具による横撫で仕上げをしている。文様は口縁部外面に三角断面突帯を2本横方向に巡らし、道具による潰し目を連続に施している。胴部は右上から左下へ2～4本、次に左上から右下に2～4本の沈線を引き菱形文を施している。この土器は厚手の器壁で、焼成は硬めで縄文時代早期の感触がみられる。44の器形は口縁部が直線状に外に開く深鉢である。器面は条痕文の調整を内外面とも斜状に行っている。文様は口縁部外面に三角断面突帯を2条横方向に巡らし、道具による潰し目を連続に施している。45は口縁部が直線状に外に開く深鉢である。器面は条痕文の調整を内外面とも横方向に行っている。文様は口縁部外面に三角断面突帯2本を横方向に巡らし、道具による潰し目を連続に施している。46は口縁部が直線状に外に開く深鉢である。器面は条痕文の調整を内外面とも斜状に行っている。文様は口縁部外面に三角断面突帯1本を横方向に巡らし、道具による潰し目を連続に施している。なお、口唇部にも潰し目跡がみられる。

47は外反する厚手の口縁部で、器面は太めの条痕文で調整をしている土器である。文様は口縁部外面に三角断面突帯を2本横方向に巡らし、道具による刻み目を連続に施している。内面は沈線を数条位の沈線が左上から右下にみられる。48は外反する厚手の口縁部で、器面は太めの条痕文で調整をしている土器である。文様は口縁部外面に三角断面突帯2本を横方向に巡らし、道具による刻み目を連続に施している。内面は沈線を数条位の沈線が右上から左下にみられる。なお、口唇部にも斜め方向の刻み目を施している。49は口径28cm、底部欠損状態で20cmの器高を測る深鉢である。器形は胴部からやや外に開き、口縁部はやや直に立つ形状である。口唇部は平坦面に切り、角が明瞭である。器面は外面が太めの条痕文、内面は上半分が横方向の太めの条痕文、下半分が横撫で仕上げをしている。文様は口縁部外面に三角断面突帯を1本横方向に巡らし、口縁端部と突帯に道具による刻み目を連続に施している。また、口唇部にも刻み目を施している。51は外反する厚手の口縁部で、器面は太めの条痕文で調整をしている土器である。文様は口縁部外面に三角断面突帯2条を横方向に巡らし、道具による刻み目を連続に施している。52は外反する厚手の口縁部で、器面は太めの条痕文で調整をしている土器である。文様は口縁部外面に三角断面突帯2本を横方向に巡ら

し、道具による刻み目を連続に施している。なお、口縁端部にも刻み目を施している。53は直向する厚手の口縁部で、器面は太めの条痕文で調整をしている土器である。文様は口縁部外面に三角断面突帯2本を横方向に巡らし、道具による刻み目を連続に施している。なお、口縁端部にも刻み目を施している。54は直向する口縁部の近くで、器面は条痕文で調整をしている土器である。文様は口縁部外面に三角断面突帯2本を波状に巡らし、道具による刻み目を連続に施している。55は厚手の底部である。この傾きからみれば丸底の可能性が高い。器面は外側が条痕文の上を撫で調整をし、内側が太めの条痕文調整である。この類に入れた理由は、厚手の土器で、青灰色の色調で縄文早期の感触がみられるためである。

56～65は底部である。

56は底部近くである。外面は太目の条痕文の上に細い沈線が縦方向にみられる。内面は撫で調整である。57は丸底気味の尖り底で、厚みがある。器面は外面が条痕文で、内面は道具撫で調整である。58は丸底気味の尖り底で、厚みがある。器面は外面が条痕文で、内面は道具撫で調整である。59は丸底である。器面は外面が条痕文で、内面が撫で調整である。60は底部近くである。器面は外面が条痕文で、内面が撫で調整である。62は丸底気味の尖り底で、厚みがある。器面は外面が条痕文で、内面は道具撫で調整である。63は尖り底近くである。器面は外面が条痕文で、内面は道具撫でと条痕文がみられる。64は丸底の底部近くである。器面は外面が太目の条痕文で、内面が道具撫で調整である。65は尖り底近くである。器面は太めの条痕文で、内外面に施されている。

これらは、尖り状丸底で厚手の土器である。

以上がⅦ類である。

Ⅶ類 (66～183)

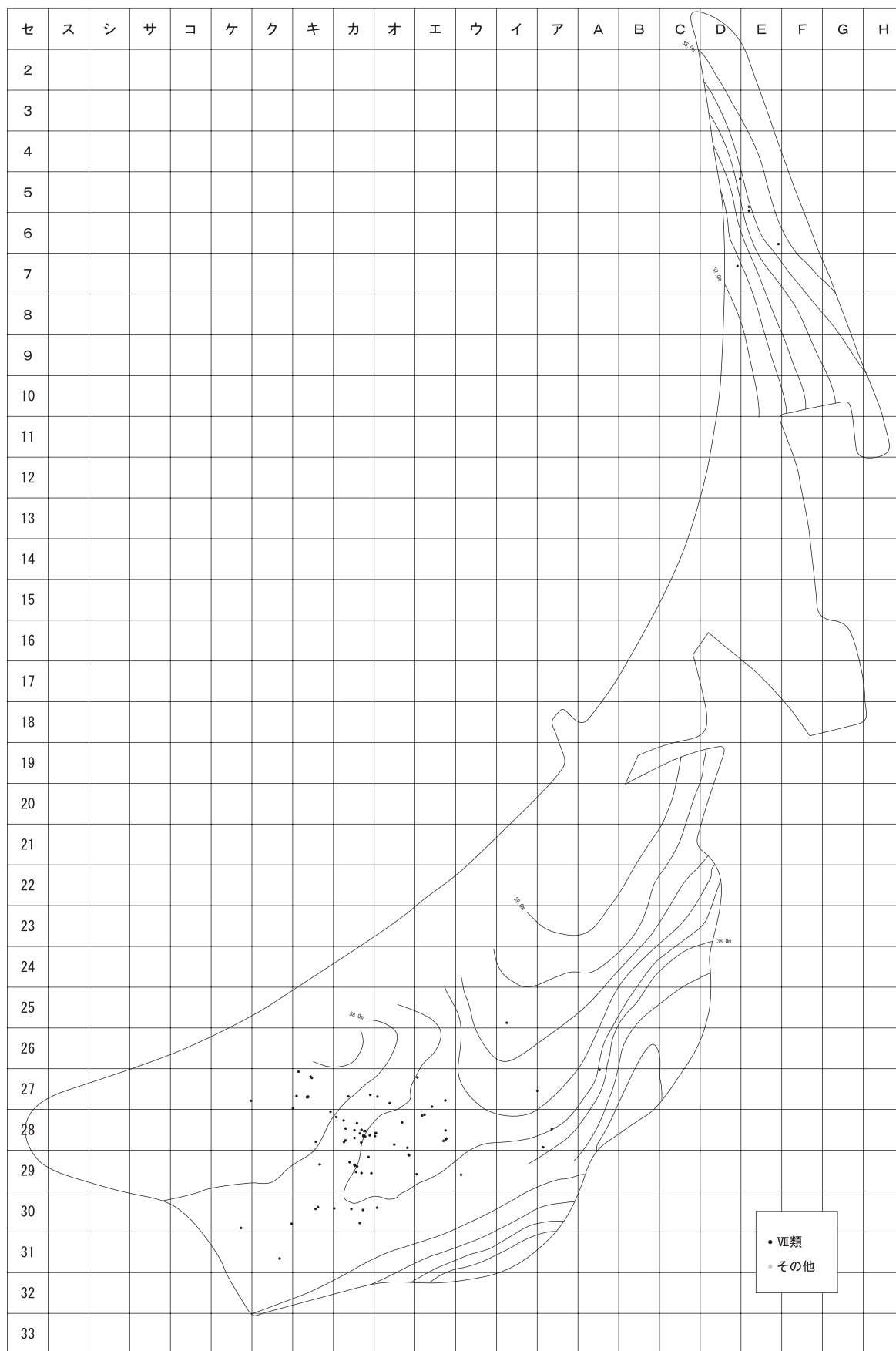
この類はいわゆるミミズバレ突帯文土器と言われるグループである。このグループを本遺跡では次の様に分けた。

Ⅶa類は同形の三角断面突帯を途切れなくミミズバレ状に貼り付けたものと、Ⅶb類は突帯がやや細く突帯にかすれ部や途切れ部がみられるものと、Ⅶc類は突帯が細い三角断面である尖ったものに分けられる。それをa b cの順に分けて説明をする。

Ⅶa類の分布

この分布は、D・E-6～8区の北部微高地とA～ケ-25～31区の南部微高地にみられる。北部微高地の出土は散布程度の分布で傾斜面の抉部にある。

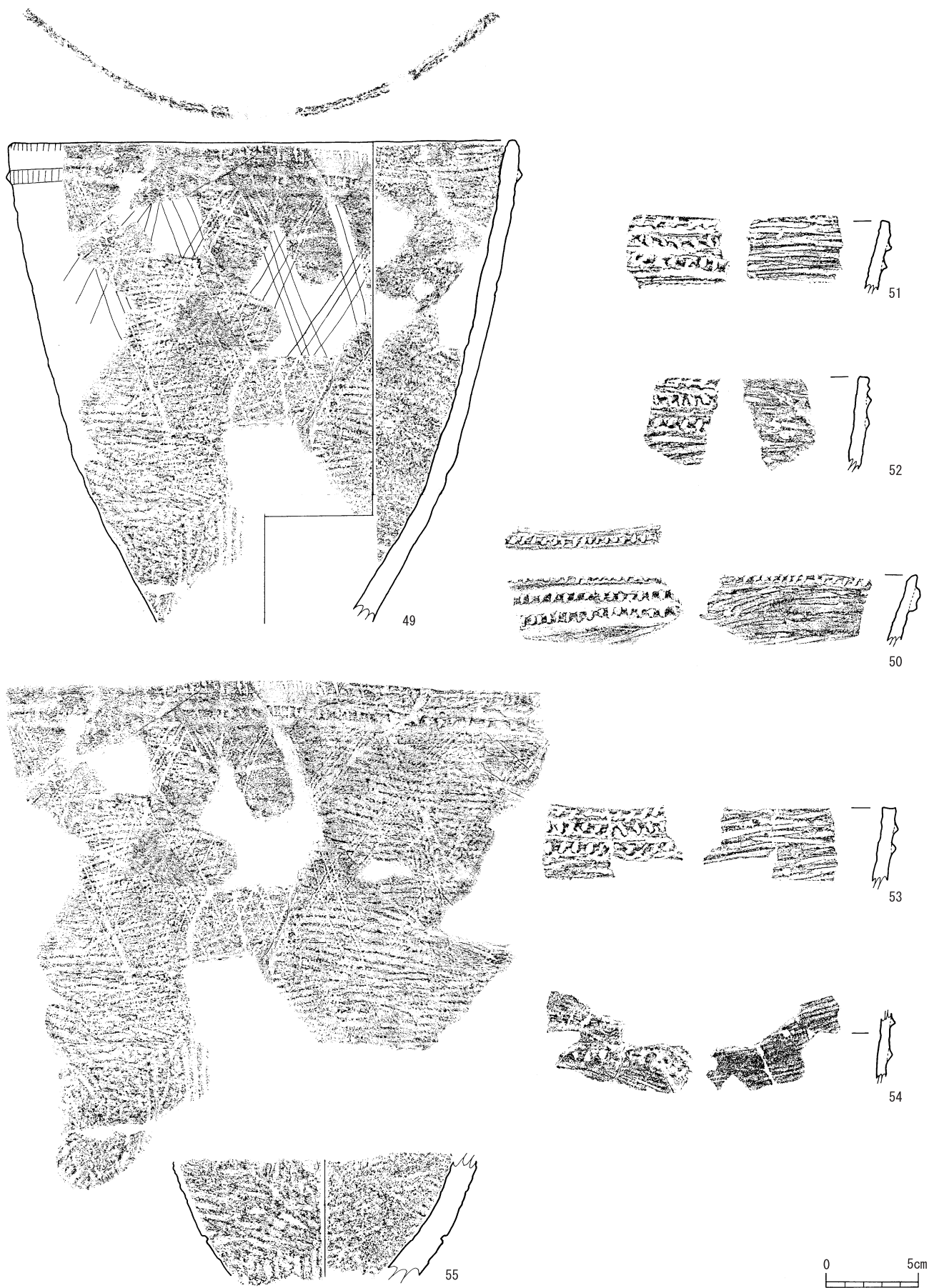
南部微高地は、A・ア-27・28区とウ～キ-26～30区に分かれて出土している。A・ア-27・28区は舌状台地の南傾斜面で2ヶ所に集中して出土している。Ⅶb類とⅦc類との重なりはみられるがⅦc類との重なりが目立っている。ウ～キ-26～30区は、舌状台地先端部に広



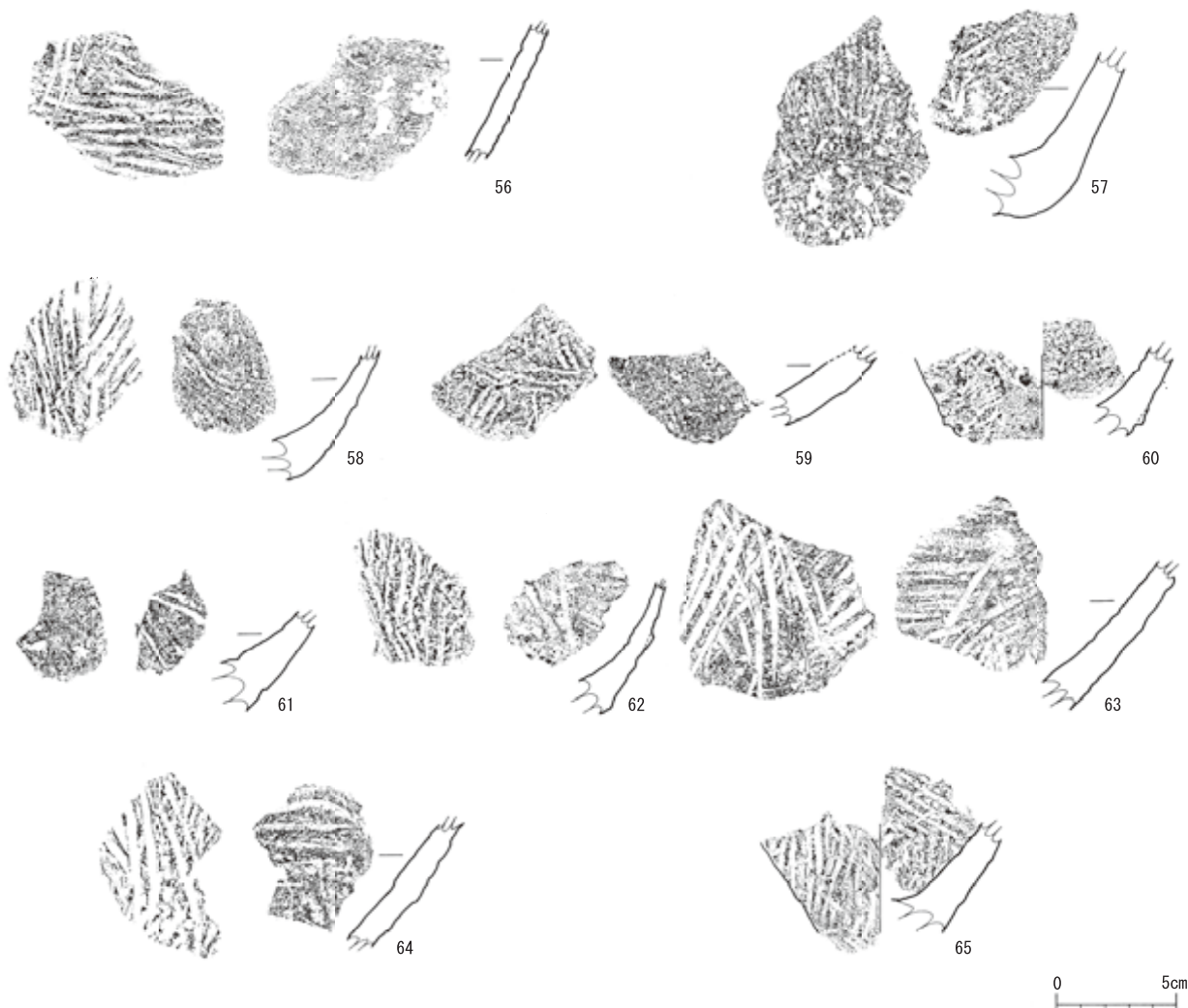
第47図 縄文時代の土器出土分布図4 (VII類)



第48図 縄文時代の土器 4 (Ⅶ類①)



第49図 縄文時代の土器 5 (Ⅶ類②)



第50図 縄文時代の土器6 (Ⅶ類③)

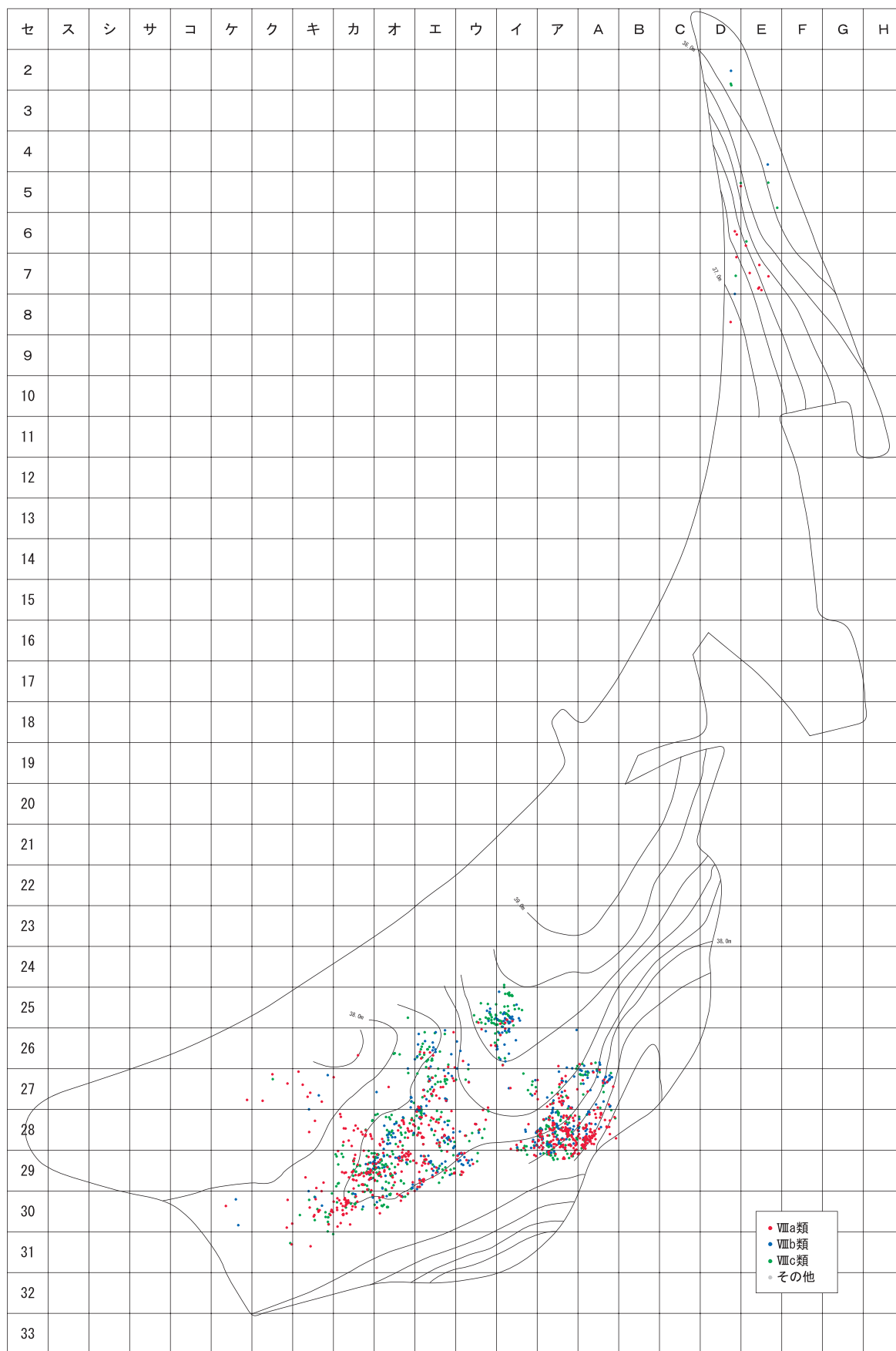
がって分布している。ⅦbとⅦc類との重なりはあるが、Ⅶc類との重なりが目立っている。

Ⅶa類の土器 (66~95)

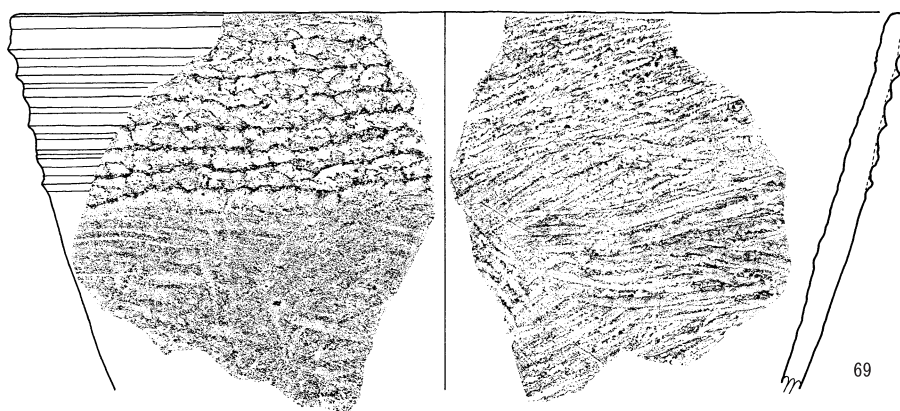
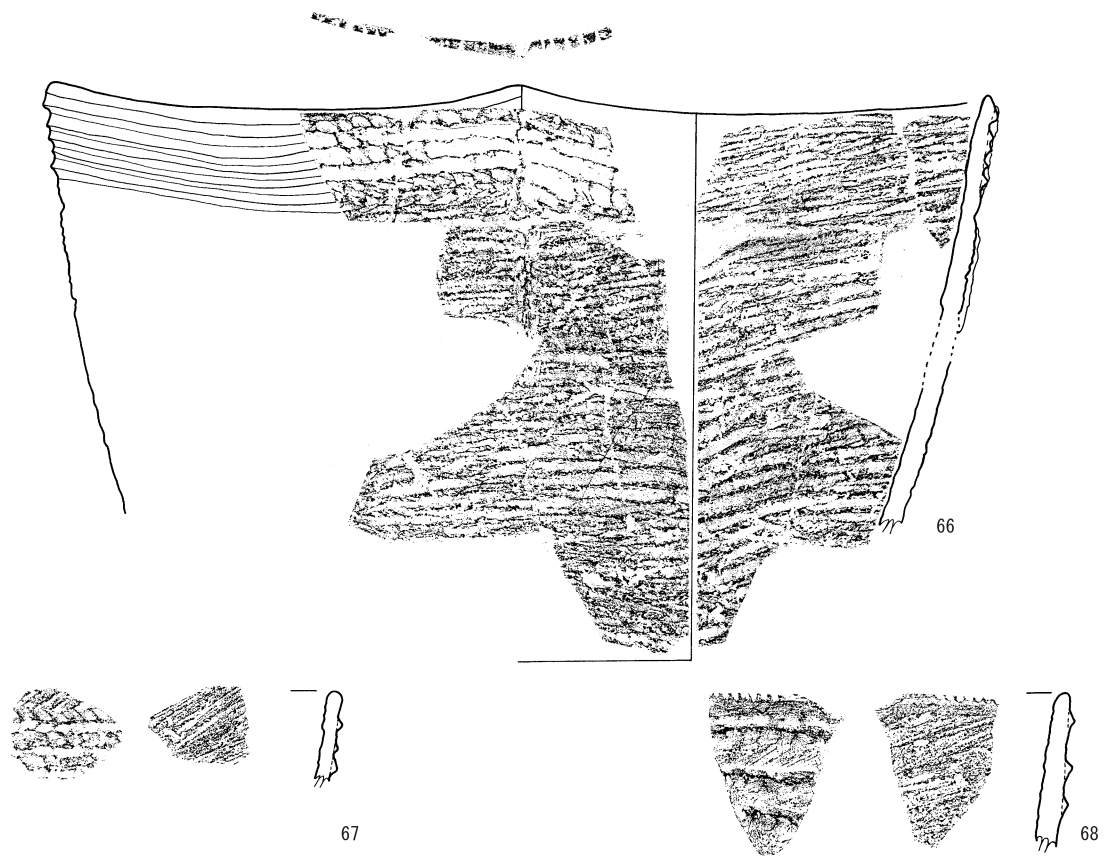
66は口径が36.9cm 底部破損状態の器高が17cmで、胴部から口縁部へ直線状に開く器形の深鉢である。口縁部は水平ではなく部分的に波状を呈する。器面は太目の条痕文を内外面とも横方向に施している。文様は口唇部に刻み目を付け、口縁外部には上下から摘み押しつけて付けた三角断面突帯（以後ミミズバレ突帯）を詰めて5本巡らしている。また、口縁の山部にも縦にミミズバレ突帯を貼り付けている。67は外向する口縁部で、口唇部に刻み目がみられる土器である。文様はミミズバレ突帯の間隔を狭めて3本みられる。内面は道具による撫で調整である。68は外向する口縁部で、口縁端部に刻み目がみられる土器である。文様はミミズバレ突帯がやや間隔をあけ3条みられる。内面は道具による撫で調整である。69は口径が36.2cm 底部破損状態の器高が15cmで、胴部から口縁部へ直線状に大きく開く器形の深鉢である。器面は外面が丁寧な道具による撫で仕上げで、内面が太目の条痕文である。文様は口縁部に7本のミミズバレ突帯

の間隔を狭めて巡らしている。70は口径が34cm 底部破損状態の器高が10cmで、胴部から口縁部へ直線状に大きく開く器形の深鉢である。器面は外面が丁寧な道具による撫で仕上げで、内面が道具による撫で仕上げである。文様は口縁部に6本のミミズバレ突帯を直線状に間隔をやや離して巡らしている。

71は口径が41.0cm 底部破損状態の器高が15cmで、胴部から口縁部へ直線状に大きく開く器形の深鉢である。器面は内外面とも太目の条痕文である。文様は口唇部より少し下がった口縁部に横方向の4本のミミズバレ突帯を巡らし、その下に2本のミミズバレ突帯を垂れ幕吊り下げ状に巡らしている。72は深鉢の口縁部で直向気味に開いている器形である。器面は太目の条痕文を内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔はやや広い。73は深鉢の口縁部近くで直向気味に開いている器形である。器面は太目の条痕文を内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施すが、突帯の間隔は広い。74は深鉢の口縁部近くで直向気味に開いている器形である。器面は太目の条痕文を内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施



第51図 縄文時代の土器出土分布図5 (Ⅶa・Ⅶb・Ⅶc類)

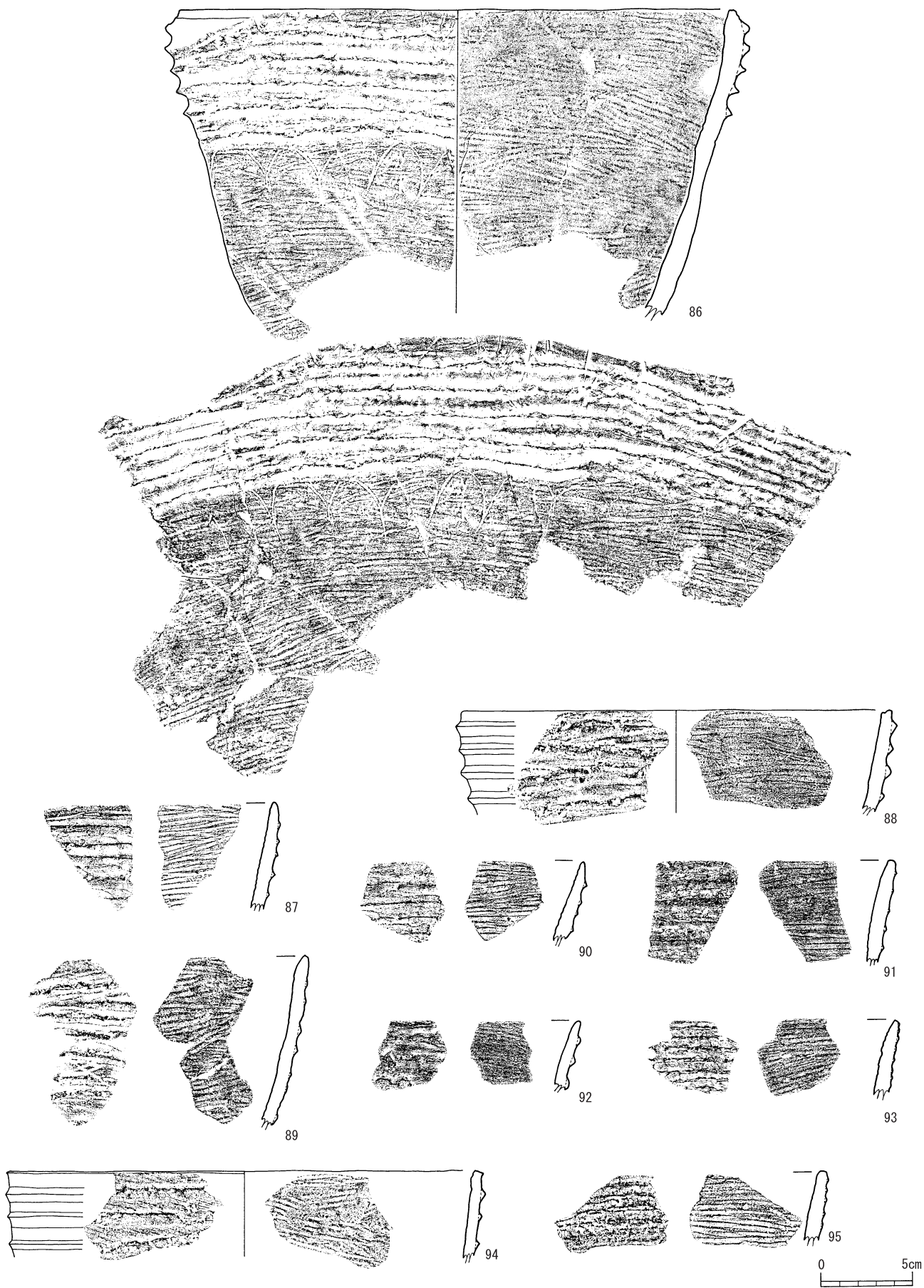


0 5cm

第52図 縄文時代の土器7 (Ⅶa類①)



第53図 縄文時代の土器8 (Ⅶa類②)



第54図 縄文時代の土器9 (Ⅶa類③)

し、突帯の間隔が空いている。75は深鉢の口縁部で直向気味に開いている器形である。器面は太目の条痕文を内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔はやや広い。76は深鉢の口縁部で直向気味に開いている器形である。器面は条痕文を内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔はやや広い。77は深鉢の口縁部で直向気味に開いている器形である。器面は道具撫でによる調整を内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔は狭い。78は深鉢の口縁部で直向気味に開いている器形である。器面は道具撫でを内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施すが、突帯の間隔が空いている。79は深鉢の口縁部で直向気味に開いている器形である。器面は太目の条痕文を内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を斜方向に施すが、突帯の間隔は狭い。80は口径が17.2cmで、口縁部が直向気味に開いている器形である。器面は太目の条痕文を内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔は狭い。81は口縁部が直向気味に開いている器形である。器面は道具撫でを内面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔は狭い。82は口径が25.6cmで、口縁部が大きく開いている器形である。器面は太目の条痕文を内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔は狭い。83は口縁部が外反している器形である。器面は道具撫で調整を内外面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔はやや広い。84は外向する口縁部で、直向気味に開いている深鉢である。器面は道具撫で調整を内面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔は狭い。85は外向する口縁部近くで、直向気味に開いている深鉢である。器面は道具撫で調整を内面に施している。文様はミミズバレ突帯を波状に施し、突帯の間隔は狭い。86は口径が31cm 底部破損状態の器高が17.5cmで、胴部から口縁部へ直線状に開く器形の深鉢である。器面は内外面とも条痕文である。文様は口縁部に横方向の5条のミミズバレ突帯を巡らし、その下に1条の半円連弧沈線文を巡らしている。87は外向する口縁部で、直向気味に開いている深鉢である。器面は条痕文を内面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔は狭い。88は外向する口縁部で、直向気味に開いている深鉢である。器面は条痕文を内面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔は広い。この突帯は簡単に貼り付けたもので整然差がなくかすれ気味に施している。89は外向する口縁部で、直向気味に開いている深鉢である。器面は条痕文を内面に施している。文様はミミズバレ突帯を横や斜方向に施し、突帯の間隔は広い。この突帯は簡単に貼り付けたもので整然差がなくかすれ気

味に施している。そして、突帯が胴部まで下がっている。90は直線状に大きく外向する深鉢の口縁部である。器面は内面に条痕文がみられ、外面に三角断面に尖った突帯を横方向に巡らしている。91は直線状に外向する深鉢の口縁部である。器面は内面に条痕文がみられ、外面に三角断面に尖った突帯を横方向に巡らしている。その突帯の間隔はやや広い。92は直線状に大きく外向する深鉢の口縁部である。器面は内面に条痕文がみられ、外面に三角断面に尖った突帯を横方向に巡らしている。93は直線状に外向する深鉢の口縁部である。器面は内面に条痕文がみられ、外面に三角断面に尖った突帯を横方向に間隔を詰めて巡らしている。94は直線状に外向する深鉢の口縁部である。器面は内面に条痕文がみられ、外面に三角断面に尖った突帯を横や斜方向に巡らしている。その突帯の間隔は広い。95は外向する口縁部で、直向気味に開いている深鉢である。器面は条痕文を内面に施している。文様はミミズバレ突帯を横方向に施し、突帯の間隔は狭い。この突帯は簡単に貼り付けたもので整然差がなくかすれ気味に施している。なお、88・89・91のかすれ気味の突帯はⅧbとの関連性が考えられる。

Ⅷb類

Ⅷb類の分布

この類は、主にA～カ-26～29区の舌状微高地に出土している。ここでは、A・ア-27・28区とイ-26区とエ・オ-26・30区に分かれて出土している。A・ア-27・28区でのⅧaとの重なりはあるがⅧcとの重なりは若干はずれている。イ-26区はⅧaとの重なりはあるがⅧcとの重なりはずれている。エ・オ-26～30区でのⅧa類との重なりはあるがⅧc類との重なりはずれている。

よって、この類はⅧa類との重なりはあるがⅧc類との重なりはない。

なお、北微高地はD-8区に出土している。

Ⅷb類の土器（96～141）

この類はミミズバレが低く細いために突帯が部分的に極細になり切れそうになったり、微妙に付いたり、また、完全に途切れ状態になったりする部分もあるので、ここでは、「カスレ・トギレ微隆起突帯」とし表している。

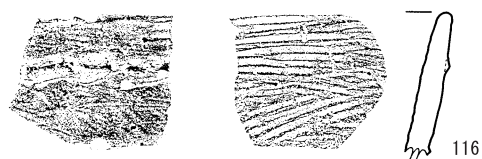
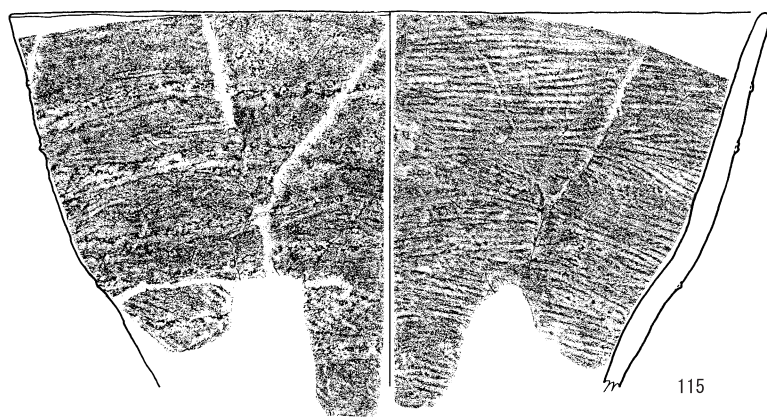
96は口径33.3cm、底部欠損器高10.5cmで胴部から口縁部へ直線状に外開きを呈する深鉢である。器面調整は横方向の条痕文で内外面に施している。文様は口縁から胴部まで全面に細い微隆起突帯を9条施している。その、突帯の上下間隔はⅧa類よりも広い。突帯は細い三角断面で部分的にカスレやトギレがみられる。97は直に向く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。98は口径22.8cmの直に向く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施しているが、内面は下位に撫で調整がみられる。文様は上

下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を二つに分けて横方向に施している。99は直線状に外に開く深鉢の口縁部である。器面は内外面に道具による撫で調整を施している。文様は間隔のある微隆起突帯を横方向に施している。突帯はカスレ・トギレである。100は直線状にやや外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。101は直線状にやや外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は条痕文を施している。文様はカスレ・トギレ微隆起突帯である。102は直線状にやや外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。103は直線状にやや外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。104は直線状にやや外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。105は直線状にやや外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。106は口径18.2cm、底部欠損で器高11cmの小型の深鉢である。器面調整は内外面とも横方向とも条痕文であるが、外面下部は縦方向の撫で調整である。文様は底部近くの胴部に上下間隔の広いカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。この土器は底部近くに突帯があり、口縁部・胴部だけではⅩⅢ a 類に分類されるものである。107は直線状にやや外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。口唇部には刻みがみられる。108は直線状にやや外に開く深鉢の頸部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。109は直線状に外に開く深鉢の頸部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。110は直線状にやや外に開く深鉢の頸部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。111は直線状にやや外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のある7条のカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。112は直線状に外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。113は直線状にやや外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施してい

るが、内面は少しの撫でがみられる。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。114は直線状にやや外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施しているが、内面は少しの撫でがみられる。文様は上下間隔のあるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。115は口径30cm、底部欠損器高15cmで底部と胴部の境で段を付けたもので、胴部から口縁部へ少し内湾状で外開きを呈する深鉢である。器面調整は横方向の条痕文で内外面に施している。文様は口縁から胴部まで全面に細いカスレ・トギレ微隆起突帯を6条横方向に施している。突帯の上下間隔は約3cmと広い。116は直線状に外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約3cm間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。117は直線状に外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約4cm間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。118は直線状に外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様はカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。119は「く」の字状に外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様はカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。120は直線状を呈し、外に開く深鉢の頸部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約2.5cm間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。121は直線状を呈し、大きく外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約4cm間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を斜方向に施している。122は外反する深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約3cm間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を斜方向に施している。123は直線状を呈し、外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約2.5cm間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。124は直線状を呈し、外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約2cm間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。放射性炭素測定では $5835 \pm 30 \text{ y r B P}$ の結果がでている。125は直線状を呈し、外に開く深鉢の底部近くの胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約2.5cm間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。126は直線状を呈し、大きく外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約4cm間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。127は直線状を呈し、外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約2.5cm間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施



第55図 縄文時代の土器10 (Ⅷb類①)



116



117



118



119



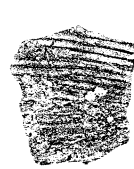
120



121



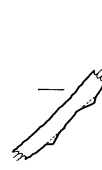
122



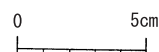
123



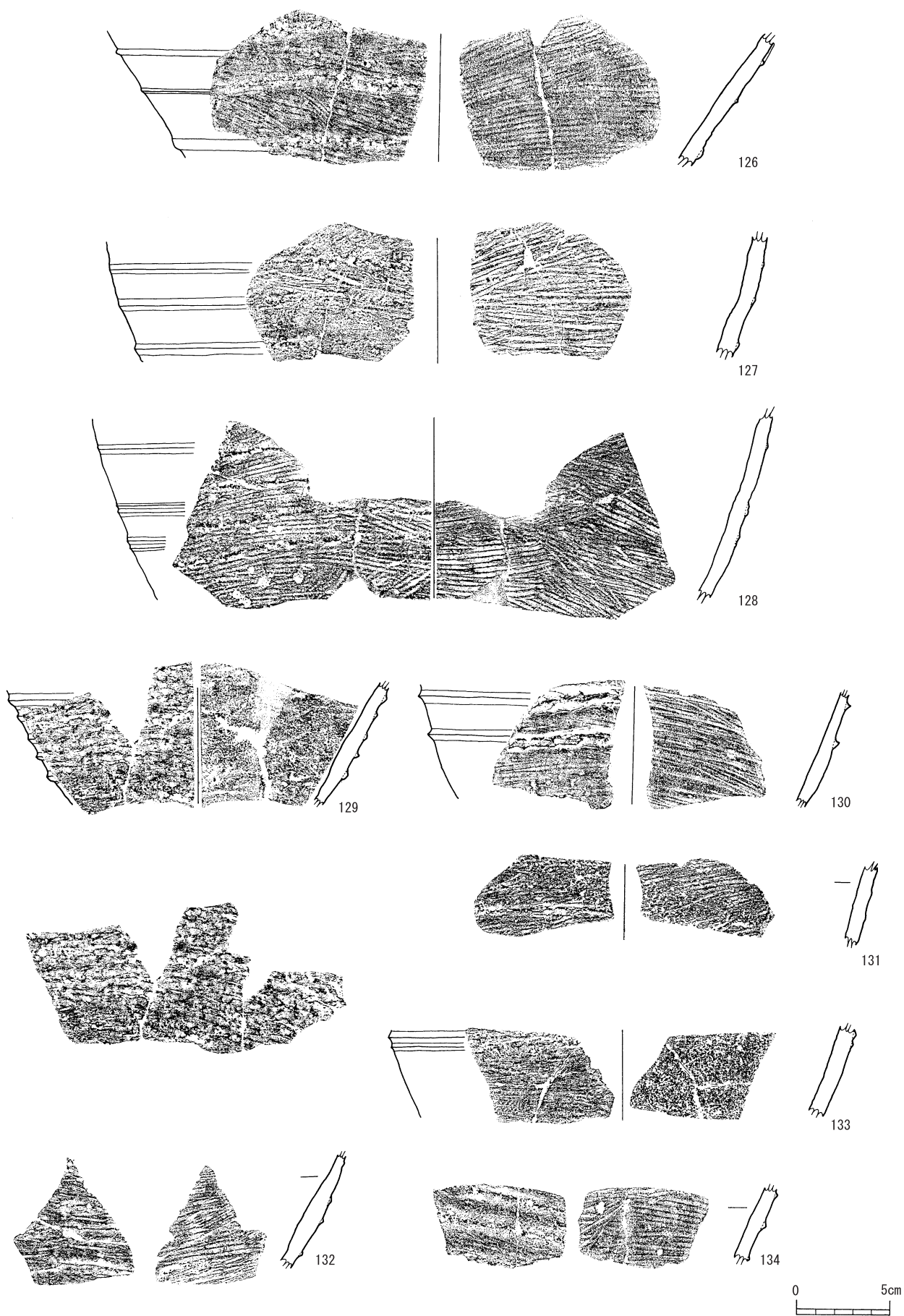
124



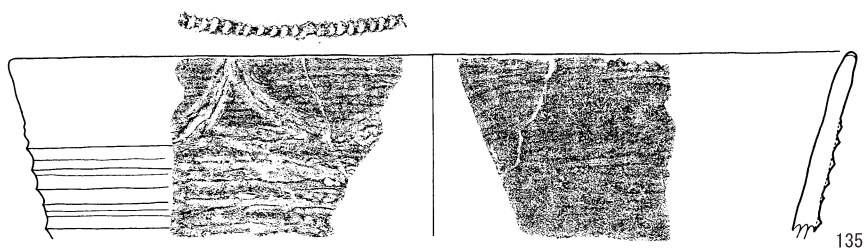
125



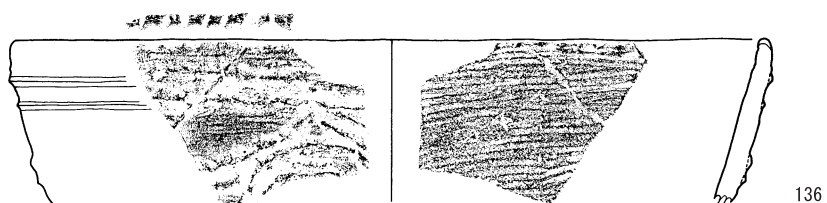
第56図 縄文時代の土器11 (Ⅷb類②)



第57図 縄文時代の土器12 (Ⅷb類③)



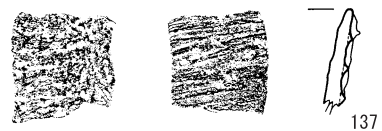
135



136



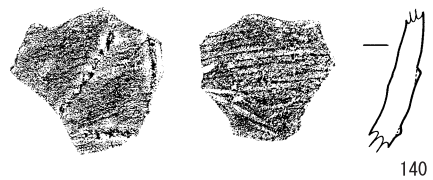
138



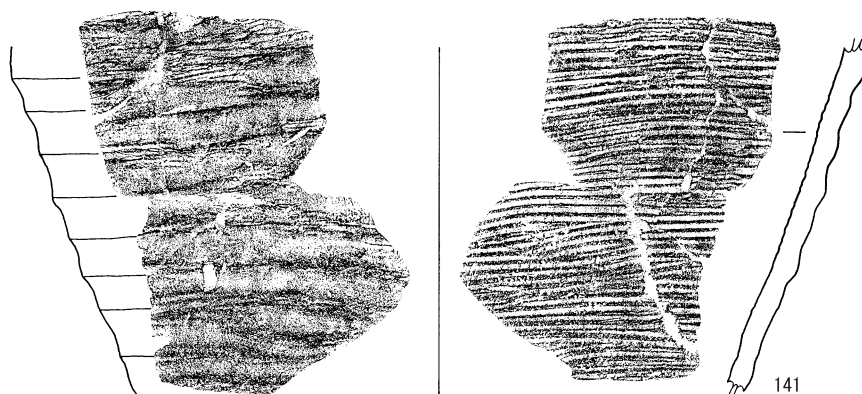
137



139



140



141



第58図 縄文時代の土器13 (Ⅷb類④)

している。128は直線状を呈し、外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約2cm 間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に5条施している。129は直線状を呈し、外に開く深鉢の底部近くの胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約2cm 間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に5本施している。130は直線状を呈し、外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約2.5cm 間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。131は直線状を呈し、外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約1.5cm 間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。132は直線状を呈し、外に開く深鉢の底部近くの胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約2cm 間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。133は直線状を呈し、外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様はカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。134は直線状を呈し、外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約2cm 間隔あるカスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。

135～140はカスレ・トギレ微隆起突帯を縦・横・斜め・円状に施したグループである。

135は直線状を呈し、外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は口唇部に刻み目を付け、口縁部に鋸歯状に近い波状と横方向4条のカスレ・トギレ微隆起突帯を施している。136は内湾状で外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様はカスレ・トギレ微隆起突帯を横・斜め・半円状に施している。137は直線状を呈し、外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様はカスレ・トギレ微隆起突帯を横と縦方向に施している。138は直線状を呈し、外に開く深鉢の頸部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様はカスレ・トギレ微隆起突帯を横・斜方向に施している。139は直線状を呈し、外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は横と円のカスレ・トギレ微隆起突帯を施しているが、上部の突帯間は指撫で状になっている。140は直線状を呈し、外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は三角形にカスレ・トギレ微隆起突帯を施している。

141は直線状を呈し、外に開く深鉢の胴部である。器面調整は内外面に条痕文を施している。文様は約1.5cm 間隔の凹凸を指で作り、カスレ・トギレ微隆起突帯を横方向に施している。

VIII c 類

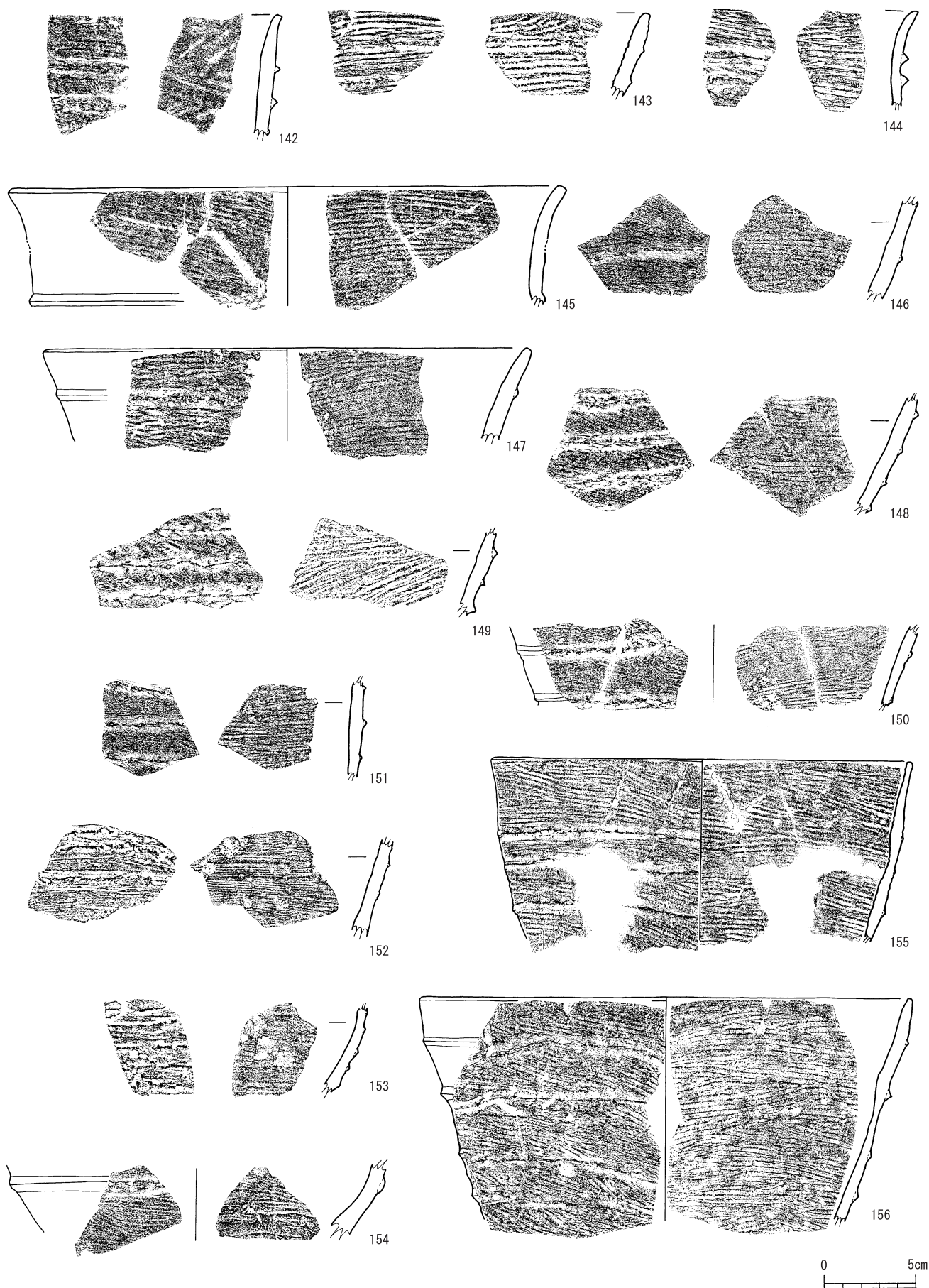
VIII c 類の分布

この類はD・E-2～7区の北部微高地とA～キ-25～30区の南部舌状微高地に出土している。南部はA・ア-27・28区とイ・ウ-25・26区とエ～カ-26～30区に集中して出土している。とくにイ・ウ-25～26区は若干VIII a 類と重なっているが単独に近い出土をしている。また、エ-26区、オ-28区も単独に近い出土状況である。

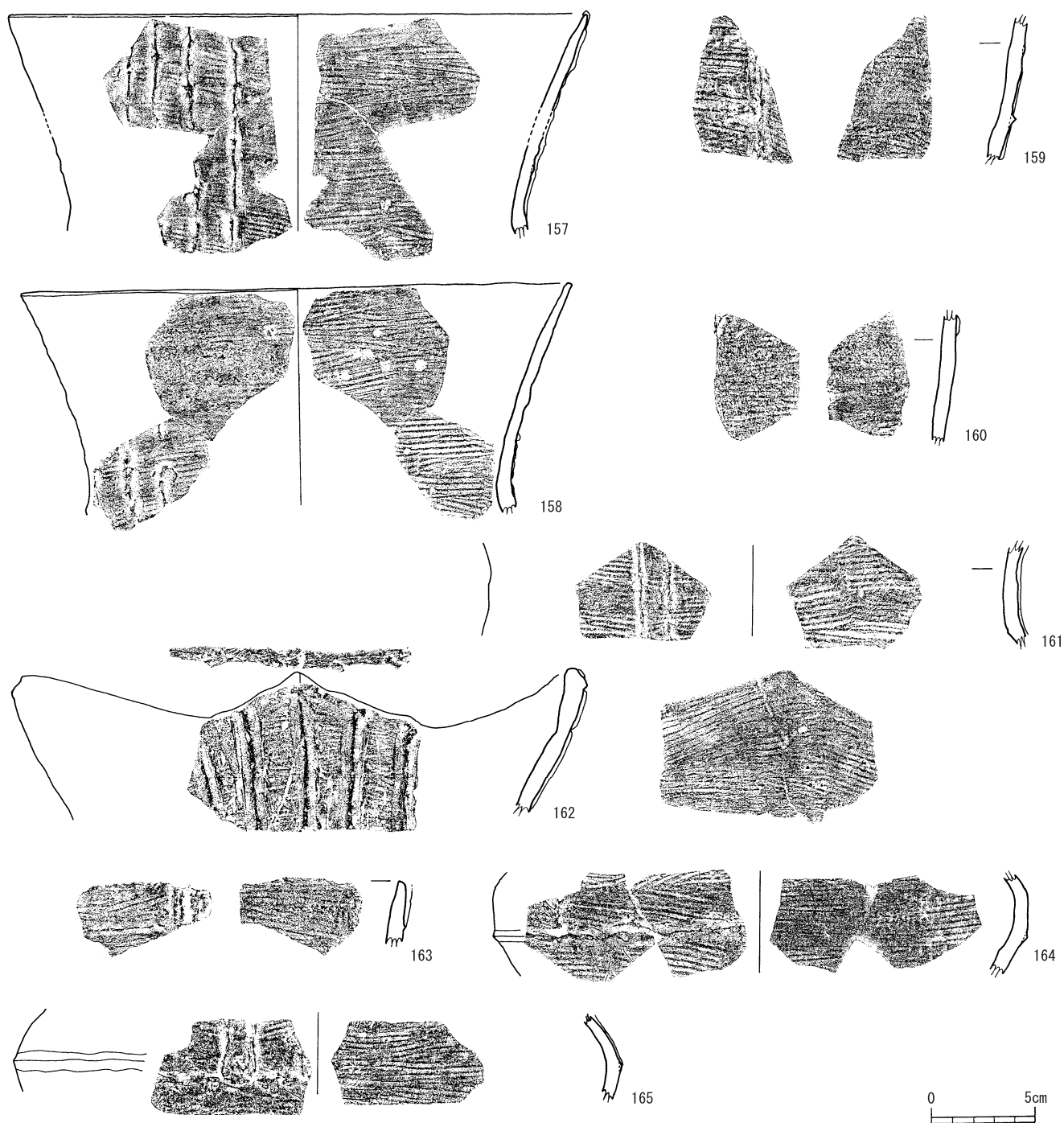
VIII c 類の土器 (142～174)

この土器類は突帯の断面が三角形で先端が鋭く尖ったものを外面に貼り付けているグループである。この突帯をここでは尖り突帯として表現している。このグループは文様の構成がVIII c と類似し突帯を横方向に施した142～156と縦方向に突帯を施した157～174に分けられる。

142は直線状を呈し、やや外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口唇部から3cm 離れた下位の位置に約2cm 間隔で尖り突帯を横方向に施している。143は直線状を呈し、外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口唇部からやや離れた下位の位置に約2cm 間隔で尖り突帯を横方向に施している。144は直線状を呈し、やや外反状に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口唇部から3cm 離れた下位の位置に約1.2cm 間隔で尖り突帯を横方向に施している。145は直線状を呈し、大きく外反状に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口唇部から大きく離れた6cm 下位の位置に尖り突帯を横方向に施している。146は外に開く内湾状の器形をもつ深鉢の胴部である。器面は内外面とも条痕文を施している。文様は尖り突帯を2cm 間隔で横方向に付けている。147は直線状を呈し、大きく外反状に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口唇部から3cm 離れ下位の位置に尖り突帯を横方向に施している。148は外に開く内湾状の器形をもつ深鉢の胴部である。器面は内外面とも条痕文を施している。文様は尖り突帯を3cm 間隔で横方向に付けている。147は外に開く内湾状の器形をもつ深鉢の胴部である。器面は内外面とも条痕文を施している。文様は尖り突帯を1.8cm 間隔で横方向に付けている。150は外に開く直線状の器形をもつ深鉢の胴部である。器面は内外面とも条痕文を施している。文様は尖り突帯を3cm 間隔で横方向に付けている。151はやや外に開く直線状の器形をもつ深鉢の胴部である。器面は内外面とも条痕文を施している。文様は尖り突帯を2cm 間隔で横方向に付けている。152は外に開く内湾状の器形をもつ深鉢の胴部である。器面は内外面とも条痕文を施している。文様は尖り突帯を1.5cm 間隔で横方向に付けている。153は外に開く内湾



第59図 縄文時代の土器14 (Ⅶc 類①)

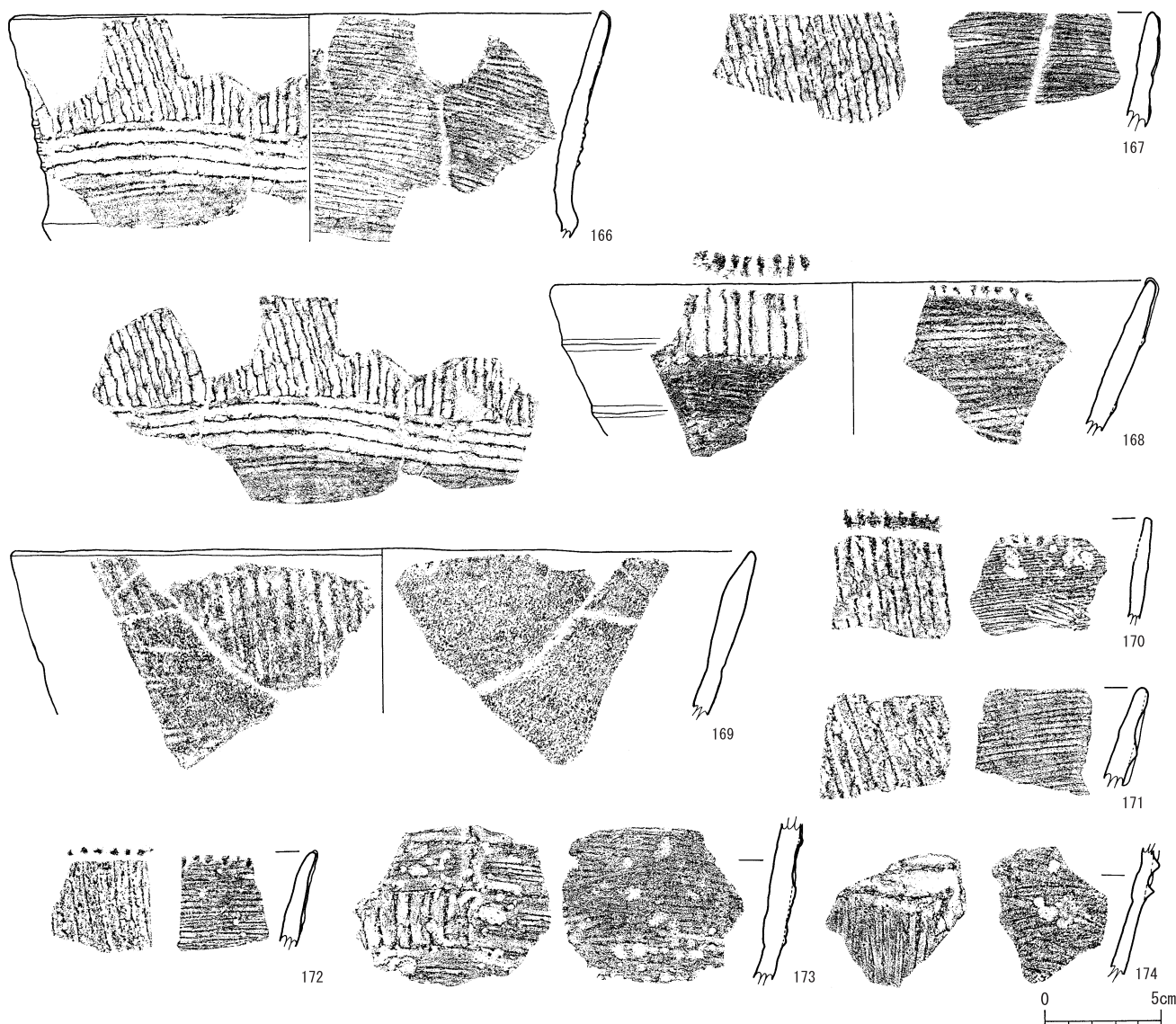


第60図 縄文時代の土器15 (Ⅷc 類②)

状の器形をもつ深鉢の胴部である。器面は内外面とも条痕文を施している。文様は尖り突帯を1cm間隔で横方向に付けている。154は外に開く内湾状の器形をもつ深鉢の底部近くである。器面は内外面とも条痕文を施している。文様は尖り突帯を横方向に付けている。155は口径23.4cm、底部欠損器高10cmで、胴部から口縁部へ直線状に外開きを呈する深鉢である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口唇部から大きく離れた3.5cm下位の位置に細めの尖り突帯を約2cm間隔で横方向に3本施している。156は口径27.4cm、底部欠損器

高13cmで、口縁部は直線状を呈し、大きく外に開く深鉢である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口唇部から大きく離れた約2.5～3cm下位の位置に尖り突帯を2～3cm間隔で横方向に4本施している。また、この土器には口縁部に縦方向の突帯を1条施す。

157～165は締まった頸部から直線状を呈した口縁部が外に開き、胴部が球状に曲がる深鉢の器形で、縦方向の尖り突帯が主な文様のグループである。157は締まった頸部から直線状を呈した口縁部が外に開く深鉢の器形である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様



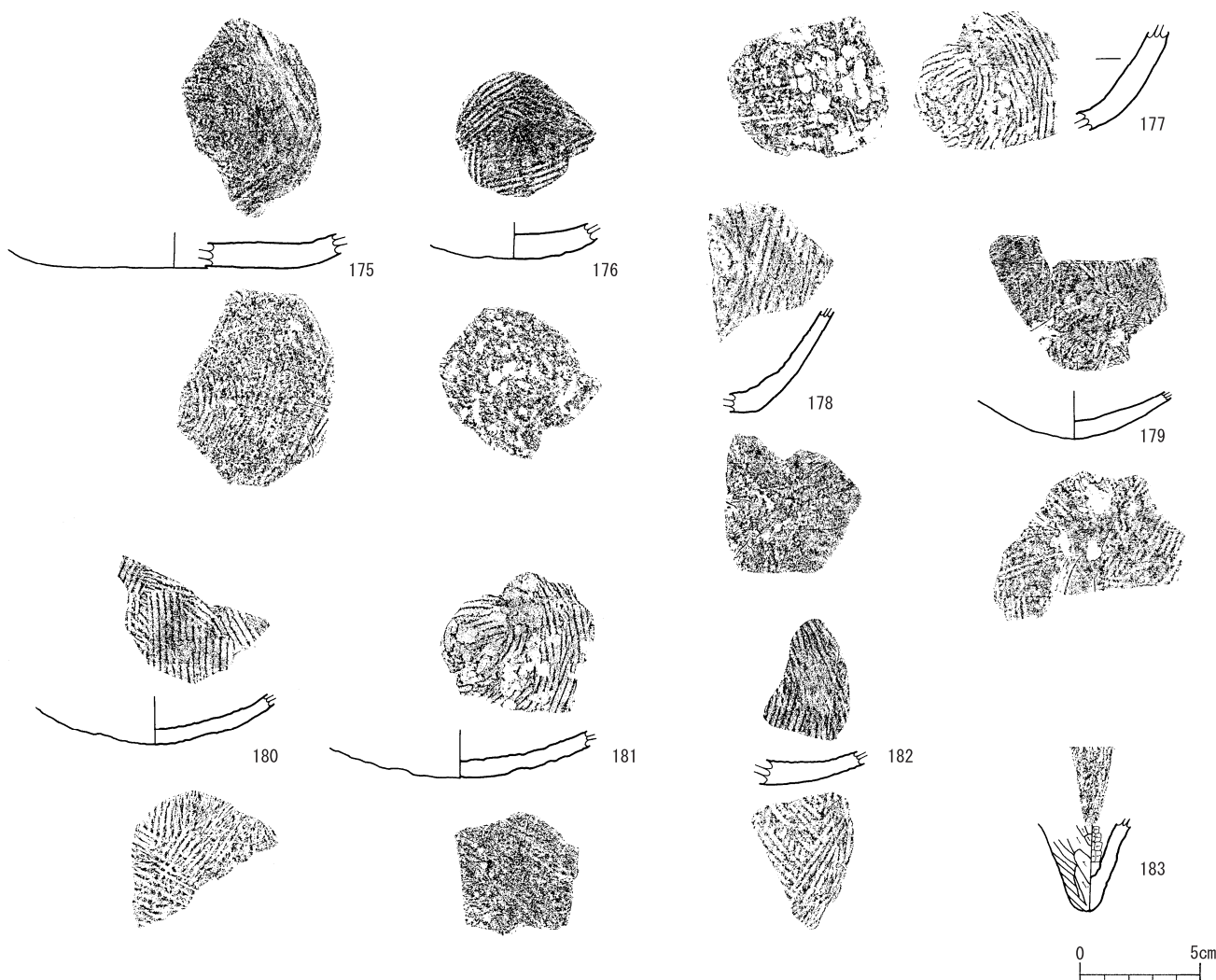
第61図 縄文時代の土器16 (VIII c 類③)

は4本の縦方向の尖り突帯である。158は締まった頸部から直線状を呈した口縁部が外に開き、胴部が球状に曲がる深鉢の器形で、肩部まである。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は3本の縦方向の尖り突帯である。159は外開きの口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は縦方向の尖り突帯を施している。160は年代測定に出した遺物である。この煤を測定した結果 5475 ± 30 y r B P がでている。遺物は外開きの口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は縦方向の尖り突帯を施している。161は頸部で絞られた器形である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は3本の縦方向の尖り突帯を施している。162は波状に呈した口縁部である。器形は頸部から大きく外反し口縁端部で内湾している。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は5本の縦方向の尖り突帯を口唇部まで施している。163は外反する口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は2本

の縦方向の尖り突帯を施している。164は球状の胴部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は1本の横方向の尖り突帯を巡らしている。165は球状の胴部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様はU字状の尖り突帯と1条の横方向の尖り突帯を巡らしている。

166～174は前項の器形で、縦方向の多条尖り突帯や斜状尖り突帯を施すグループである。

166は絞られた頸部から直線状に呈した口縁部が外開きに立ち上がった器形である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口縁上部において縦方向の多条尖り突帯を全面に回し、下部には4条の尖り突帯を巡らしている。167は外に開く口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は縦方向の多条尖り突帯を巡らしている。168は外に開く口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口唇部まで貼り付けた縦方向の短い多条尖り突帯を巡らして



第62図 縄文時代の土器17 (Ⅶa～Ⅶc類底部)

いる。169は外に開く口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口唇部まで貼り付けた縦方向の多条尖り突帯を巡らしている。なお、この土器は器面が全体的に摩耗している。171は外に開く口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は縦方向の多条尖り突帯を巡らしている。172は外に開く口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は口唇部まで貼り付けた縦方向の多条尖り突帯を巡らしている。173は外に開く口縁中部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は2 cm 間隔の横方向尖り突帯の間に縦方向の多条尖り突帯を施している。また、1条の縦方向の尖り突帯もみられる。174は外に開く口縁中部である。器面調整は内外面とも条痕文を施している。文様は多条尖り突帯ではないが尖り突帯2本が山形に施されている。

Ⅶ類底部 (175～183)

Ⅶ類はa～cに分類したが接合したものが無いためまとめて説明する。底部の形態は厚手のもので平底に近い

ものと、薄手のもので尖り底に近いもの、薄手のもので丸底に近いものがある。また、特例として尖り底がある。

175は厚手の深鉢で、径が11cmの平底である。器面は条痕文の上を撫で調整をしている。176は厚手の深鉢で、丸底を呈する。器面は内面が条痕文で、外面が撫で調整である。177は底部の立ち上がり部である。器面の内面は撫で調整で、外面が条痕文に撫で調整をしている。178は底部の立ち上がり部で薄手の平底である。器面の内面は条痕文の上を撫で調整をし、外面は撫で調整をしている。179は薄手の尖り底である。器面は内外面とも条痕文を施している。180は薄手の丸底である。器面は内外面とも条痕文を施している。181は薄手の丸底である。器面は内外面とも条痕文を施している。182は薄手の底であるが中央部に向かって厚みがみられる。器面は内外面とも条痕文を施している。183は小型のもので尖底である。外側の器面には条痕文がある。これはミニチュア形の土器と思われる。

これらの中で器形や調整痕・焼成等でみるとⅦa類に

あたるものは175～177で、他はⅧb・Ⅷc類にあたると
思われる。

Ⅸ類 (184～223)

この類は薄手で刺突文を施すいわゆる山陰系のグループである。a～eに分類した。

Ⅸ類の分布

この類は南部舌状台地上に出土している。この中でA～イ-27～29区とイ・ウ-25・26区とウ～キ-26～31区に分かれて出土している。この分布は、Ⅷc類と重なりがみられる。

Ⅸa類の土器 (184～187)

184は直に向く口縁中部で、横方向に詰めて刺突文を施し、刺突文の上下には沈線がみられる。器面調整は条痕文を内外面に施している。185は直に向く口縁中部で、縦方向に刺突文を施している。器面調整は条痕文を内外面に施しているが、外面は撫で調整を条痕文の上に行っている。186は直に向く口縁中部で、横方向に刺突文を施している。器面調整は条痕文を内外面に施しているが、外面は撫で調整を条痕文の上に行っている。187は直に向く口縁中部で、沈線状に横方向の刺突文を施している。器面調整は条痕文を内外面に施しているが、外面は撫で調整を条痕文の上に行っている。

これらは島根県の西川津遺跡で出土している、刺突文の一部に類似している。

Ⅸb類の土器 (188～200)

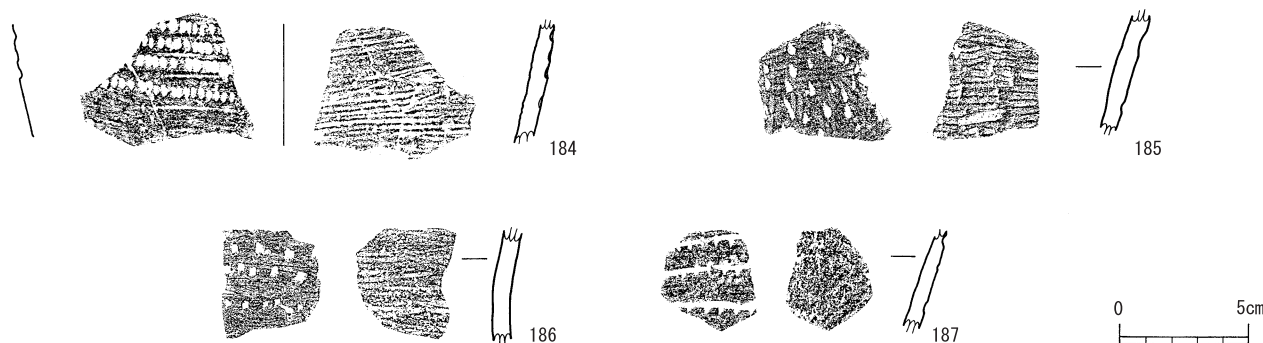
188は丸く張った肩部から頸部が内側に傾いている口縁部である。器面は内外面に条痕文がみられ、その上を撫で調整をしている。文様は口縁部にはなく、頸部に詰まった横刺突文を施している。189は丸く張った肩部から頸部で口唇部の欠損した内側に傾いた口縁部である。器面は内外面に条痕文がみられ、その上を撫で調整をしている。文様は口縁部にはなく、頸部に詰まった横刺突文を施している。190は丸く張った肩部から頸部で内側に傾いた器形である。器面は内外面に条痕文がみられる。文様は口縁部側に横方向の刺突文を付けその下に斜方向の刺突文、その下に横方向の刺突文、その下に斜方向の刺突文で施している。191は丸く張った肩部から口

縁部で内側に傾いている器形である。器面は内面に条痕文がみられ、文様は頸部に詰まった太い横刺突文を施している。192は丸く張った肩部から頸部で内側に傾いた器形である。器面は内外面に条痕文がみられ、その上を撫で調整をしている。文様は口縁部にはなく、頸部に詰まった横刺突文を施している。193は丸く張った肩部から頸部で内側に傾いている器形である。器面は内面に条痕文がみられる。文様は頸部に詰まった太い横刺突文と斜方向の刺突文を施し、肩部には刻み目突帯が横方向にみられる。194は丸く張った肩部から頸部で内側に傾いている器形である。器面は内面に条痕文がみられる。文様は頸部に詰めた太い横刺突文を施し、肩部には刻み目突帯が横方向に文様帯を止めるようにみられる。195は丸く張った肩部から頸部で内側に傾いている器形である。器面は内面に条痕文がみられる。文様は頸部に斜方向の詰めた太い刺突文を施し、肩部には刻み目突帯が文様帯を止めるようにみられる。196は丸く張った肩部から頸部である。器面は内面に条痕文がみられる。文様は頸部に詰めた太い横刺突文を施し、下がった肩部には刻み目突帯が横方向に文様帯を止めるようにみられる。197は丸く張った肩部から頸部で内側に傾いている器形である。器面は内面に条痕文がみられ、文様は頸部に詰めた太い斜刺突文と横刺突文を施し、肩部には刻み目突帯が横方向に文様帯を止めるようにみられる。198は丸く張った肩部から胴部で内側に傾いている器形である。器面は内面に条痕文がみられ、文様は頸部に詰めた太い斜刺突文と横刺突文を施し、肩部には刻み目突帯が横方向に文様帯を止めるようにみられる。199は丸く張った肩部から頸部で内側に傾いている器形である。器面は内外面に条痕文がみられ、文様は頸部に詰めた小斜刺突文を施し、肩部には刻み目突帯が横方向に文様帯を止めるようにみられる。

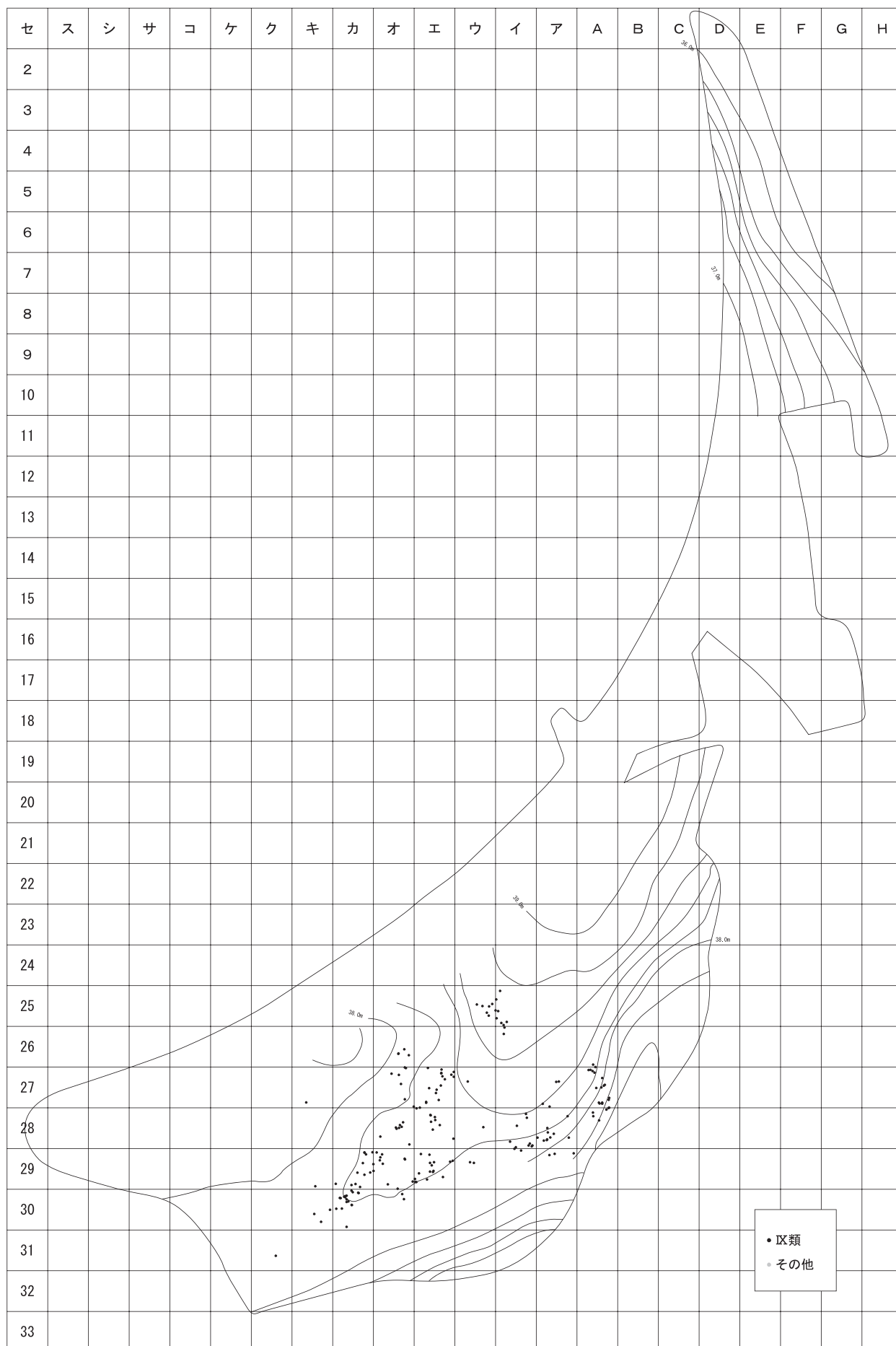
Ⅸc類の土器 (201～212)

この類はⅧc類に縦方向の刻目突帯を付けているものと複数の刻目突帯を施しているものである。

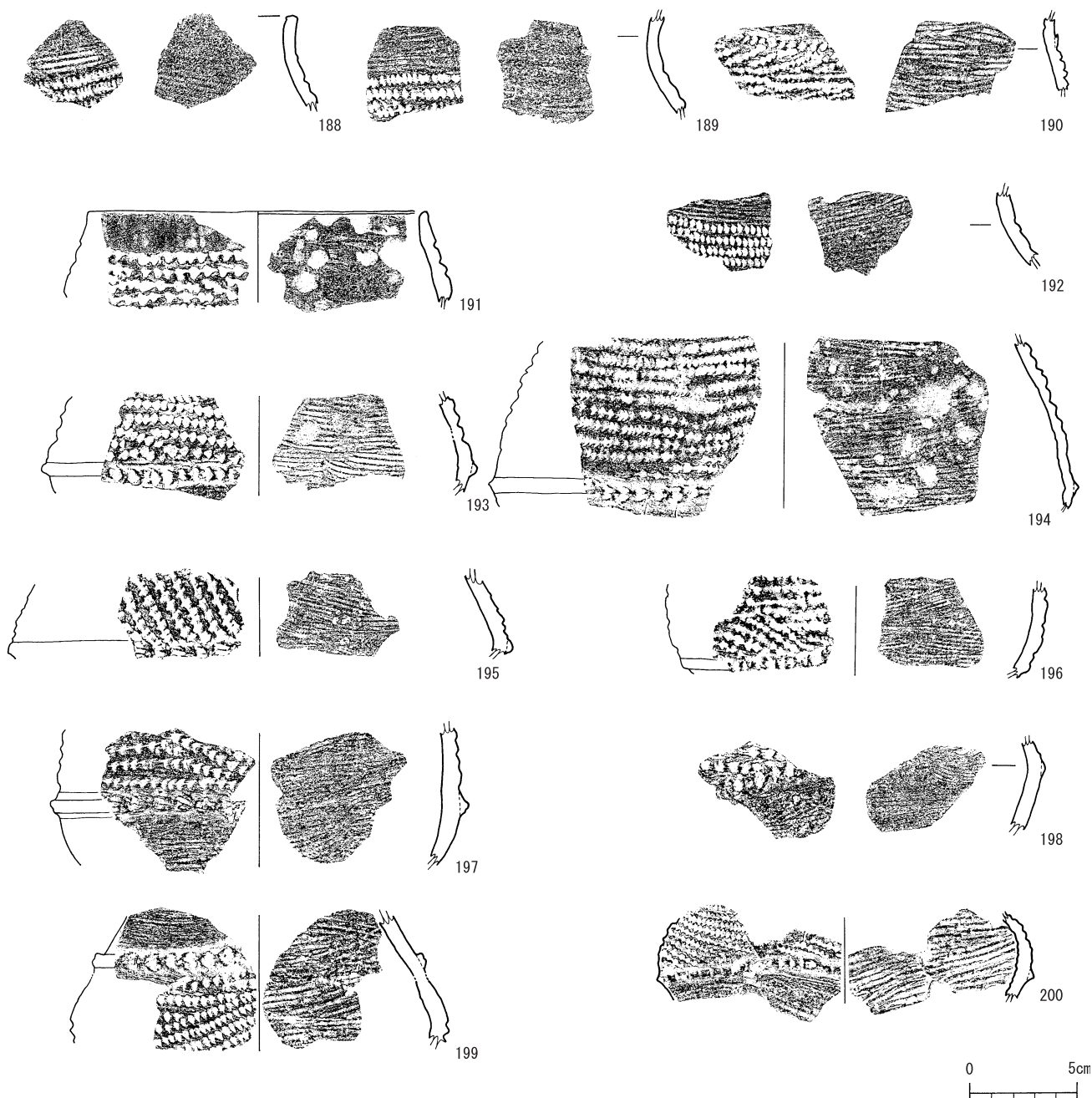
201は丸い胴から頸部が締まり、口縁部は外反する器形の土器である。内外の器面は条痕文の上を撫で調整を



第63図 縄文時代の土器18 (Ⅸa類)



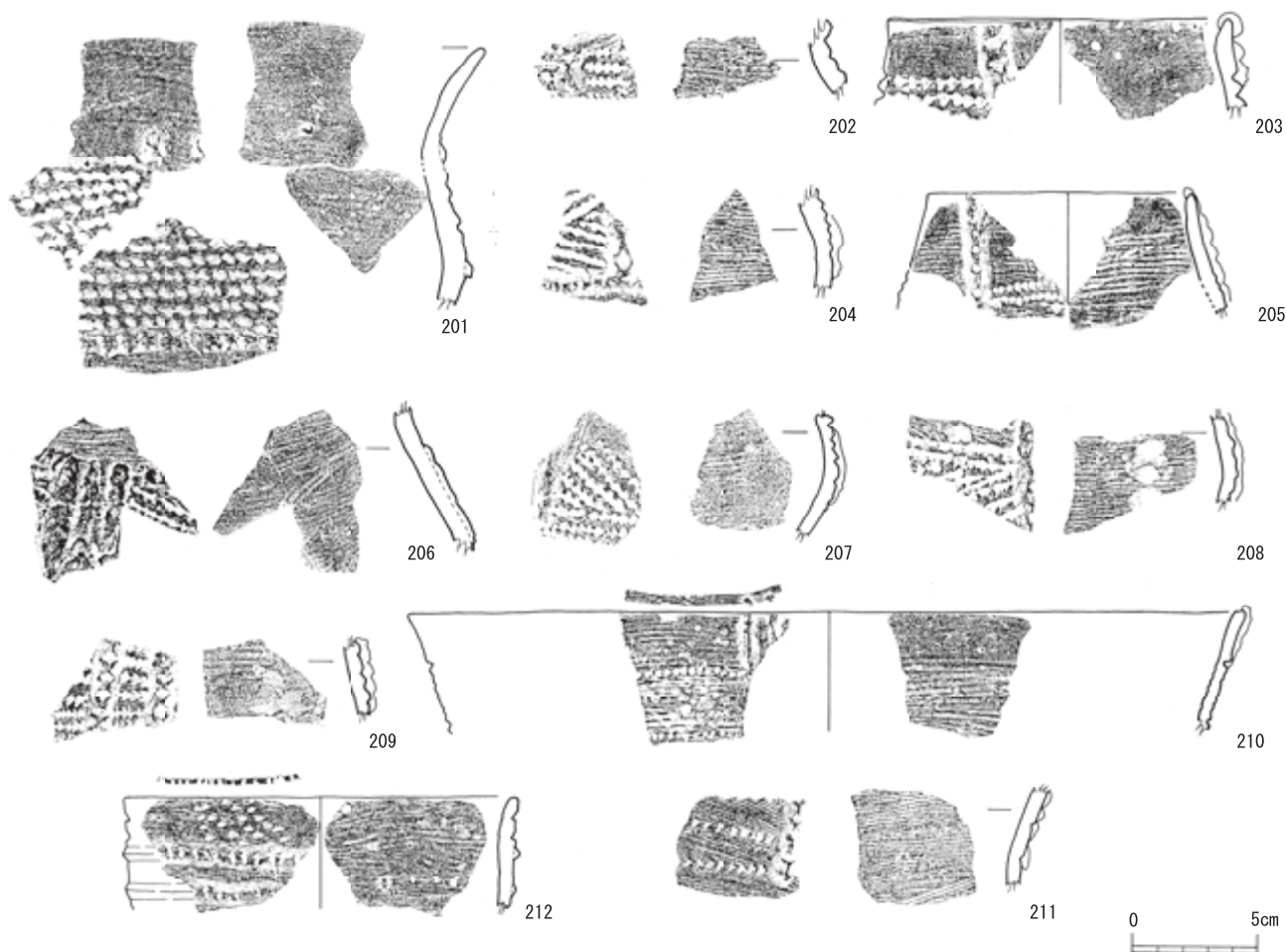
第64図 縄文時代の土器出土分布図6 (Ⅸ類)



第65図 縄文時代の土器19 (Ⅸ b 類)

している。文様は口縁部には無く、頸部から肩部に詰め
た太い横刺突文を施し、肩部には刻目突帯が横方向に文
様帯を止めるようにみられる。加えて、縦方向の刻目突
帯が頸部に2列施されている。これは接合されていないが
同質であるため同じ番号に含めた。202は中側に傾いた
頸部の部分である。器面は条痕文の上を撫で調整してい
る。文様は横方向の刺突文と縦方向の刻目突帯が施され
ている。203は頸部から内側に向いた口縁部である。器
面調整は撫で仕上げである。文様は横方向の太い刺突文
と縦方向の刻目突帯である。この突帯は口唇部まで貼り
付けている。204は肩部から口縁部に向かって内側に傾
いた器形の土器である。器面は条痕文で調整されてい

る。文様は口縁部近くには無く、肩部に縦方向と斜方向
に刻目突帯を施している。207は丸みを呈した肩・胴部
である。器面は条痕文で調整されている。文様は斜方向
と横方向の刺突文を施し、肩部に縦方向の刻目突帯を貼
り付けている。208は丸みを呈した肩・胴部である。器
面は条痕文で調整されている。文様は斜方向と横方向の
刺突文を施し、肩部に縦方向の刻目突帯を貼り付けてい
る。209は丸みを呈した肩・胴部である。器面は条痕文
で調整されている。文様は横方向の刺突文を施し、肩部
に2本の縦方向刻目突帯を貼り付けている。210は外に
開く深鉢の口縁部である。器面は条痕文を両面に施し、
文様は外面に横刺突文と縦に口唇部まで刻み突帯を施し



第66図 縄文時代の土器20 (Ⅸ c 類)

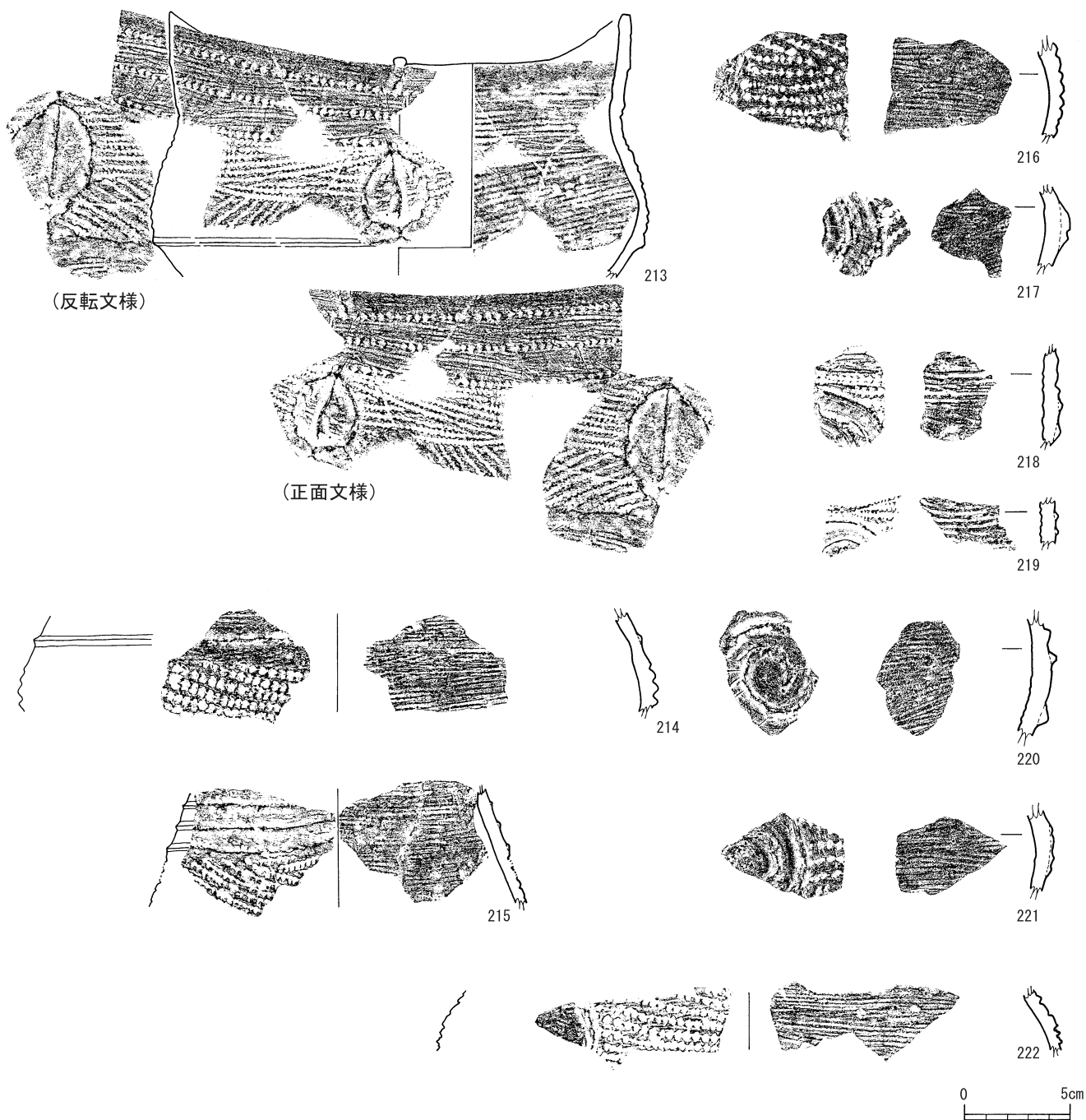
ている。211は外に開く深鉢の口縁中央部である。器面は条痕文を両面に施し、文様は外面に横刺突文と縦に突帯を施している。212は直に向く器形の口縁部である。器面は条痕文を両面に施し、文様は外面に斜方向の刺突文と横刻み目の突帯文を施している。

Ⅸ d 類の土器 (213～222)

この類は横刻み目と刺突文と尖り突帯を組み合わせたグループである。

213は口径22cm、底部欠損状態で器高12.5cmを測り、口縁部が直に向き頸部で段ができ肩から胴部にかけて膨らみを呈する器形の土器である。また、口縁部は2箇所が山形口縁になる形である。器面調整は条痕文を両面とも施している。文様は口縁部に横刻み目を3列施し、肩から胴部は三角領域の中に横方向・斜方向の刺突文を付けている。また、胴部には6cmの大と4cmの小的の葉を模した尖り突帯の文様を縦位に付けている。さらに、その下には文様帯の境として横方向に尖り突帯を施している。214は丸みを呈した胴部である。器面調整は条痕文を両面とも施している。文様は斜めの刺突文を施している。また、下位には尖り突帯を横方向に貼り付けている。215は丸みを呈した胴部である。器面調整は条痕文

を両面とも施している。文様は斜めの刺突文を施している。また、下位には3条の尖り突帯を横方向に貼り付けている。216は丸みを呈した胴部である。器面調整は条痕文を両面とも施している。文様は弧に刺突文を羽状に施している。そして、縦に尖り突帯を貼り付けている。217は丸みを呈した胴部である。器面調整は条痕文を両面とも施している。文様は弧状に刺突文を施している。そして、渦巻き文の尖り突帯を貼り付けている。218は丸みを呈した胴部である。器面調整は条痕文を両面とも施している。文様は刺突文を横方向に施している。そして、渦巻き尖り突帯を貼り付けている。219は丸みを呈した胴部である。器面調整は条痕文を両面とも施している。文様は刺突文を横方向に施している。そして、渦巻き尖り突帯を貼り付けている。220は丸みを呈した胴部である。器面調整は条痕文を内面に施している。文様は渦巻き尖り突帯を貼り付けている。221は丸みを呈した胴部である。器面調整は条痕文を内面に施し外面は撫でている。文様は刺突文を横方向に施している。そして、渦巻き尖り突帯を貼り付けている。222は丸みを呈した肩部である。器面調整は条痕文を両面とも施している。文様は刺突文をやや斜方向に施している。そして、尖り



第67図 縄文時代の土器21 (Ⅸd類)

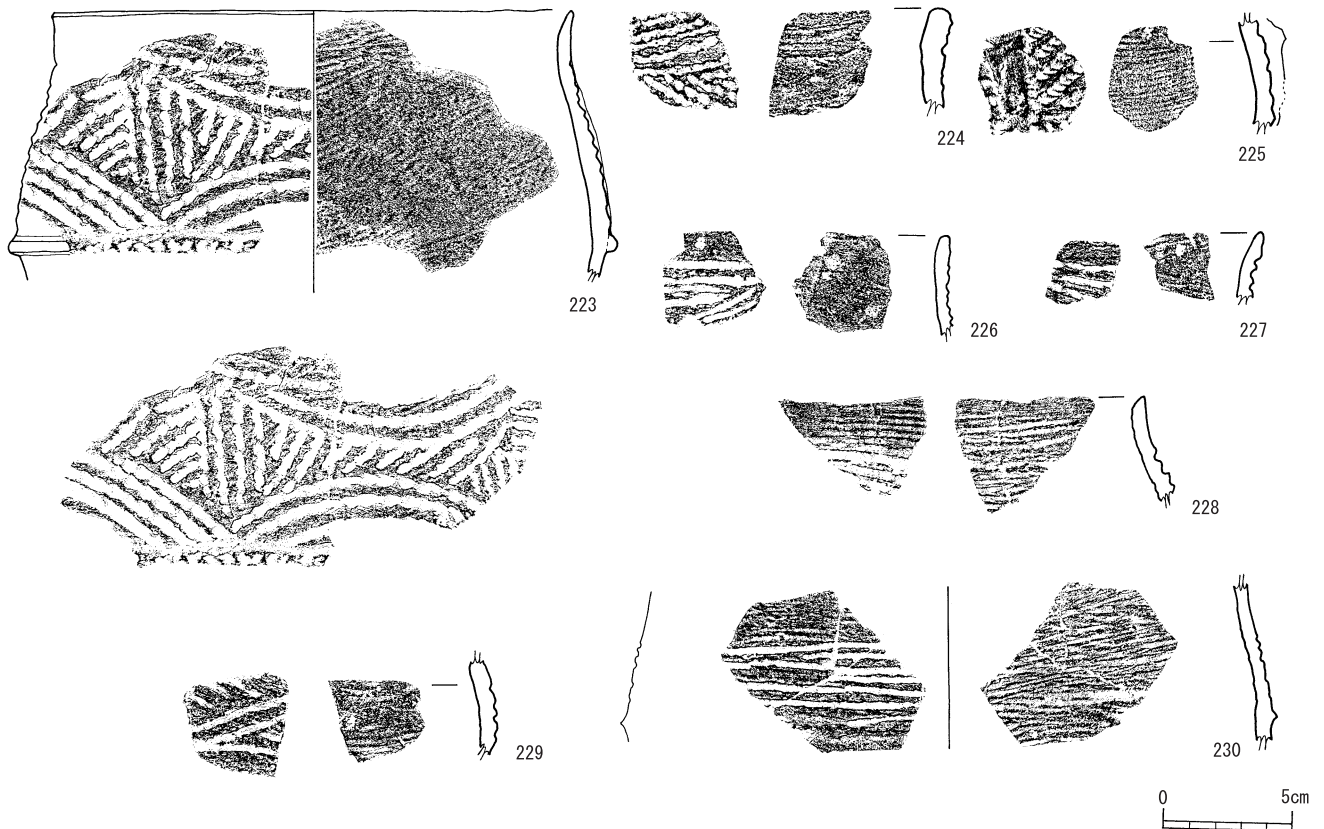
突帯を貼り付けている。

Ⅸe類の土器 (223~230)

この類は押引文を施すグループである。

223は口唇部欠損状態で口径が20.5cm、底部欠損状態で器高10.5cmを測る。口縁部は直に向き頸部から胴部にかけて膨らみを呈する器形の土器である。器面は内側が条痕文の上を撫でて調整し外側は丁寧な撫で調整を施している。文様は肩部に2~4列の弧状押引文を上下に施し、その領域の中に縦方向、横方向、斜方向の押し引き文を付けている。また、その下には文様帯の境として横方向に刻目突帯を貼り付けている。224は直に向く口

縁部である。器面は撫で調整で、文様は横方向と斜方向の押引文を施している。225は丸みのある胴部である。器面は内面が条痕文で外面が撫で調整である。文様は斜方向と横方向の押引文である。また、下位には刻目突帯を貼り付けている。226は直に向く口縁部である。器面は撫で調整で、文様は横方向と斜方向の押引文を施している。227は外反する口縁部である。器面は撫で調整で、文様は横方向に押引文を施している。228は内に向く口縁部である。器面は条痕文調整で、文様は斜方向に押引文を施している。229は丸みのある胴部である。器面は内面が条痕文で外面が撫で調整である。文様は斜方向の



第68図 縄文時代の土器22 (Ⅸe類)

細い沈線状になった押引文である。230は丸みのある胴部からやや絞られた頸部である。器面は内面が条痕文で外面が撫で調整である。文様は細い沈線状になった押引文を横方向に施している。

以上のようにこの類はⅧa類が直に向く器形で横や縦の刺突文を施すグループである。Ⅷbは丸く張った胴部から内に向く口縁部を呈し、太目の刺突文を施すグループである。ⅧcはⅧbに縦方向の刻み突帯を施すグループである。Ⅷdは横刻み目と刺突文と尖り突帯を組み合わせたグループである。Ⅷeは押引文を施すグループである。

X類

この類は文様を基準にa・b・cの3グループに分けられる。Xaは横方向の刻み目と口縁部・胴部に多条突帯を含む尖り突帯、そして、Ⅸeから変化したと思われる沈線を組み合わせているグループである。Xbは刻み目と沈線を組み合わせたグループである。Xcは刻み目と尖り突帯と沈線と玉状突起を組み合わせたものである。

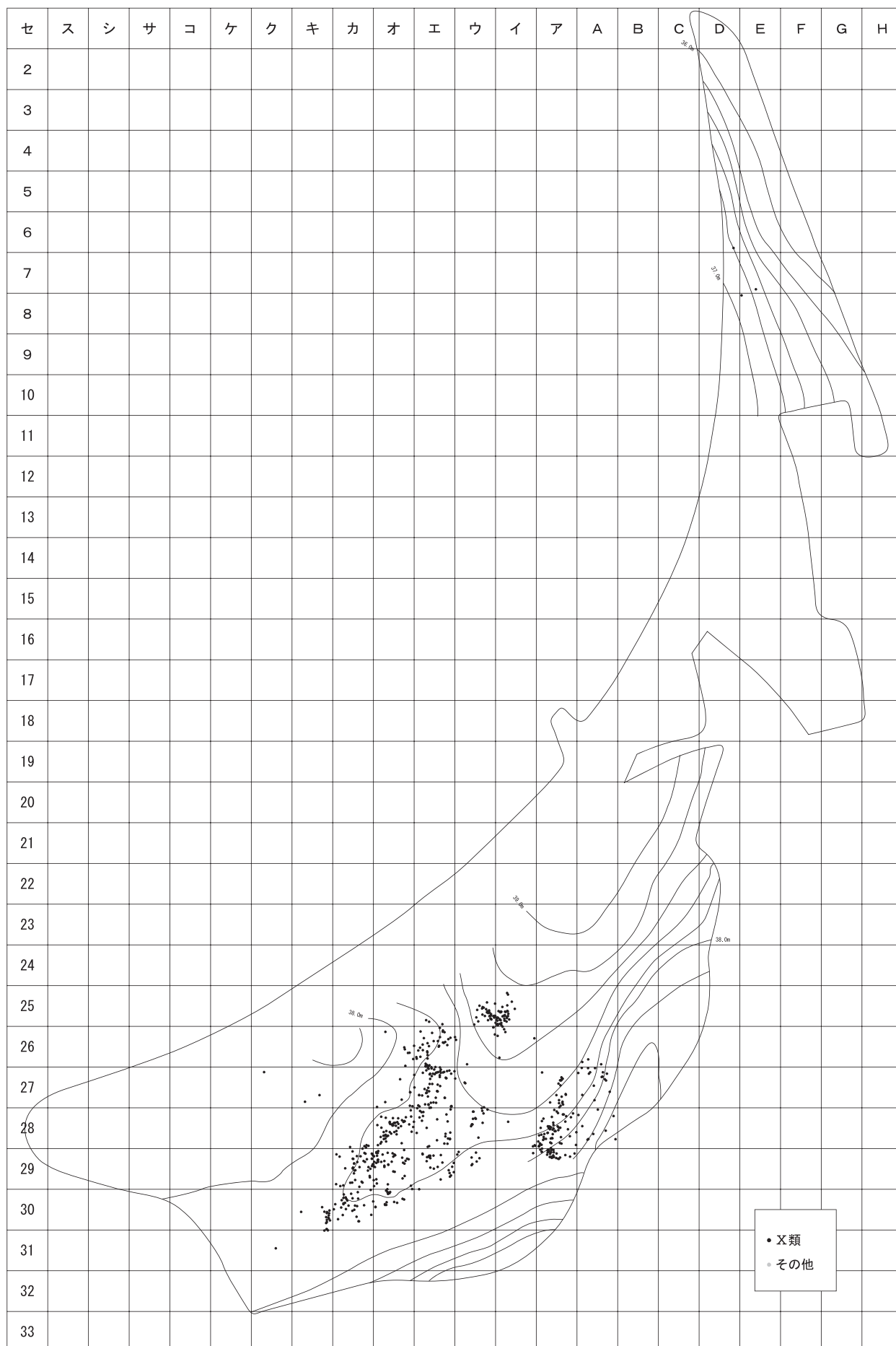
X類の分布

北部微高地に3点みられるが、大半は南部舌状台地に出土している。その中では、A・ア-26~29区とイ・ウ-25区とウ〜キ-26~30区に分かれて出土している。この分布状態はⅧc類並びにⅨ類に重なる傾向がみられ

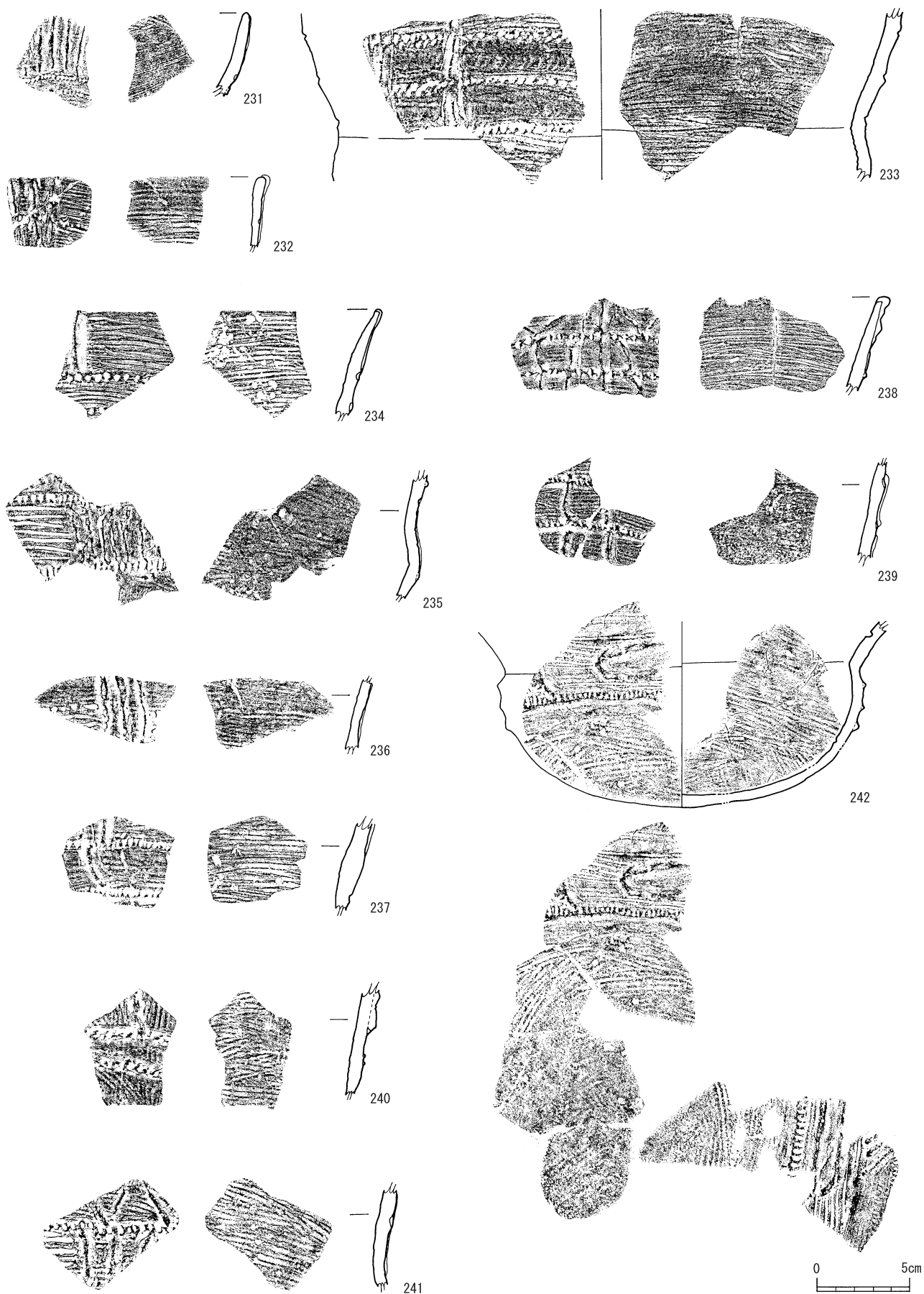
る。

Xa類の土器 (231~258)

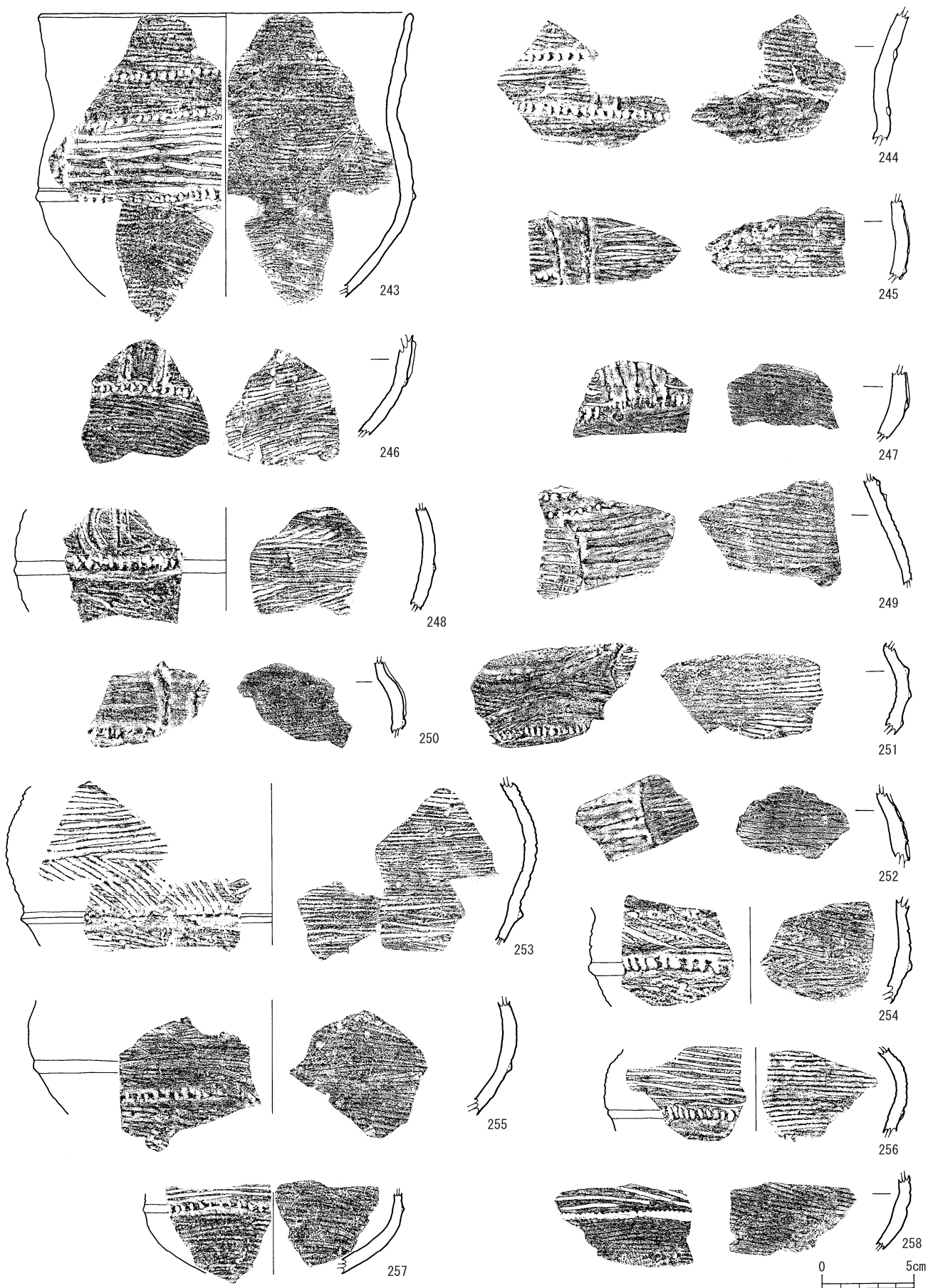
231は外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内面に条痕文がみられ、外面は撫で調整である。文様は口唇部まで被した多条の尖り突帯を縦方向に施し、頸部に2列の横刻み目を付けている。232は外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文がみられる。文様は口唇部まで多条の尖り突帯を縦方向に施し、1列の横刻み目刺突文を付けている。233は口唇部が欠損しているが、口縁部は外に開き、頸部が締め、肩が張る器形の深鉢である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は口縁部から頸部にかけて3列の横刻み目の刺突文があり、口縁部に縦方向の尖り突帯を貼り付けている。234は外に開く深鉢の口縁部である。器面調整は内外面に条痕文がみられる。文様は口唇部まで尖り突帯を縦方向に施し、1列の横刻み目を付けている。235は口唇部が欠損しているが頸部がやや締め口縁部は外に開き、胴部は「く」の字に張る器形で浅鉢に近い。器面調整は内面に条痕文がみられ、外面は撫で調整である。文様は口縁部に尖り突帯、頸部と肩部に多条の尖り突帯を縦方向に張り付けている。また、7本の沈線も横方向に付けている。その他、横刻み目の刺突文を頸部と胴部に施している。236は外に開く頸部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は3本の尖り突帯を縦方向に貼



第69図 縄文時代の土器出土分布図7 (X類)



第70図 縄文時代の土器23 (X a 類①)



第71図 縄文時代の土器24 (X a類②)

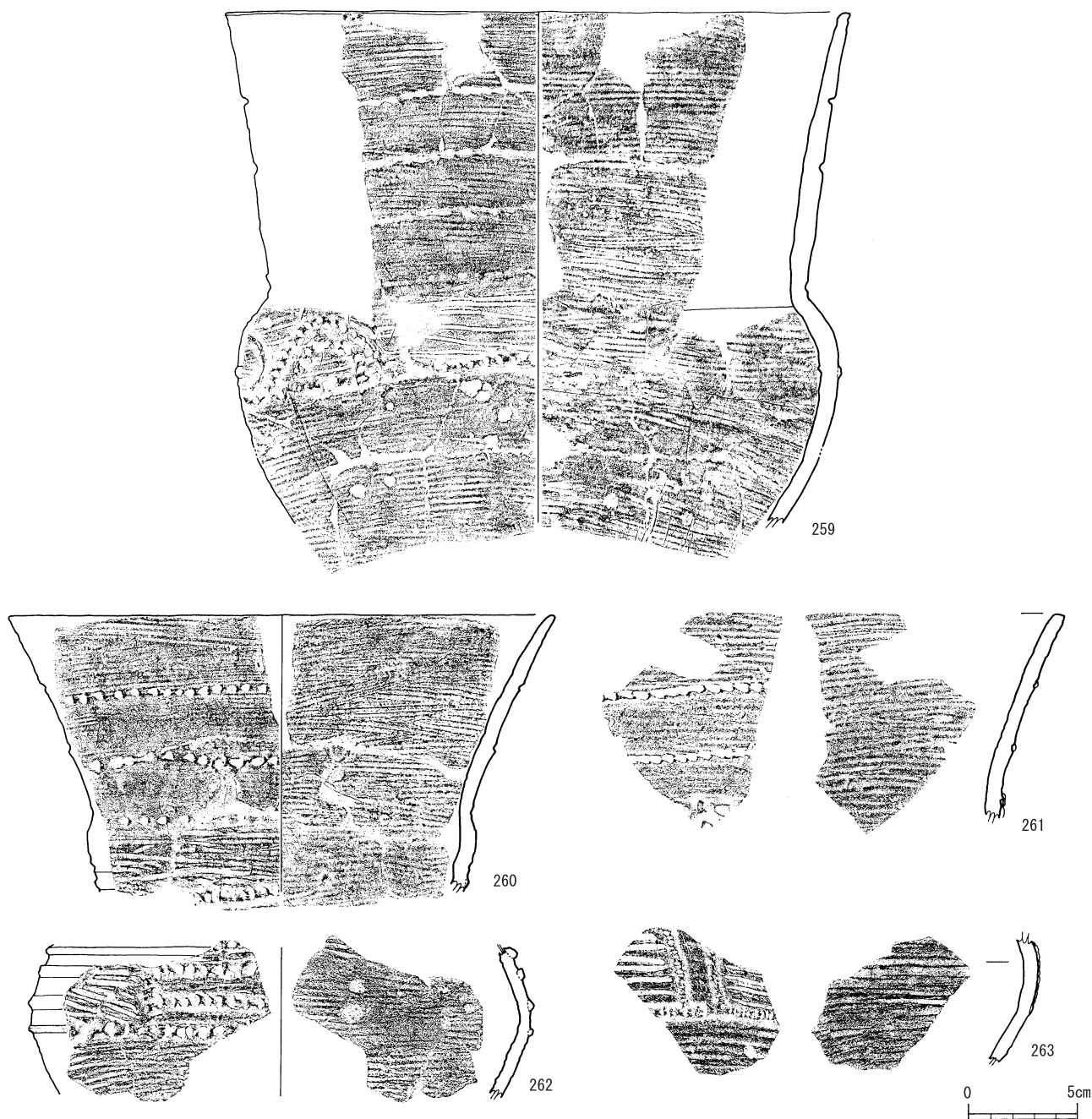
り付け、横方向に刻み目を施している。237は外に開く頸部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は2本と1条の尖り突帯とを縦方向に貼り付け、2列の横刻み目の刺突文を施している。238は口唇部に山状の張り出しを作っている外に開く口縁部である。器面調整は条痕文を内外面に施している。文様は尖り突帯を格子目に貼り付けている。内2本は横刻み目の刺突文を施している。239は外に開く口縁部である。器面調整は条痕文を内外面に施している。文様は尖り突帯を格子目に貼り付けている。内2本は横刻みを施している。240は外に開く口縁部である。器面調整は条痕文を内外面に施している。文様は尖り突帯と2本の横刻み突帯を施している。241は外に開く口縁部である。器面調整は条痕文を内外面に施している。文様は尖り突帯を格子目に貼り付けている。内1本は横刻みを施している。242は頸部が締まり口縁部は外反し、胴部から底部にかけて半球状になる器形を呈した浅鉢である。底部は丸底である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は口縁部から肩部に直線と曲線の尖り突帯を施し、一番張った胴部に刻目突帯を施している。243は頸部から口縁部が外にやや開き、胴部は丸く張る器形の深鉢である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は口縁部と頸部に1列の横刻み目刺突文を施し、胴部に刻目尖り突帯を貼り付けている。頸部には7条の沈線を横方向に施している。また、縦方向の尖り突帯を貼り付けている。244は頸部がやや締まり、胴部は丸く張る深鉢である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は口縁部と肩部に刻目尖り突帯を施し、その間に縦方向の尖り突帯を2本貼り付けている。245は丸みのある深鉢の胴部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は縦方向の尖り突帯を2本貼り付けている。246は丸みのある深鉢の胴部から底部近くである。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は胴部に刻み目の尖り突帯を横方向に、縦方向の尖り突帯を2本施している。247は丸みのある深鉢の胴部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は縦方向の尖り突帯を5本貼り付け多条突帯を呈している。また、1列の横刻み目刺突文を施している。248は丸みのある深鉢の胴部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は縦方向と弧状の尖り突帯を3本貼り付けている。また、1列の横刻み目刺突文を施している。249は内側に向いた深鉢の肩部である。器面は内面が条痕文で外面が撫で調整である。文様は頸部に刻み目尖り突帯を2本横方向に貼り付け、肩部に縦方向の尖り突帯で区切り、多本の沈線と多条の尖り突帯を施している。250は丸みを呈した肩部である。器面は内面が条痕文で外面が撫で調整である。文様は縦突帯2本で区切り、中は沈線が施されている。胴部には刻目突帯が巡っている。251は丸みを呈した胴部である。器面は内面が条痕文で

外面が撫で調整である。文様は縦突帯で区切り、間は撫で調整であるが片方の中は沈線が施されている。胴部には刻目突帯が巡っている。252は内側に向いた深鉢の肩部である。器面は内面が条痕文で外面が条痕文と撫で調整である。文様は肩部に縦方向の尖り突帯で区切り、多本の沈線と多条の尖り突帯を施している。253は丸みを呈した深鉢の肩部から胴部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は肩部に横方向の沈線、一番張った胴部から下は斜方向の沈線を施している。そして、最下位には尖り突帯を横方向に1本貼り付けている。254は丸みを呈した深鉢の胴部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は肩部に斜方向の沈線、一番張った胴部には刻目突帯を横方向に1本施している。255は丸みを呈した深鉢の胴部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は一番張った胴部に1本の刻目突帯を横方向に施している。256は丸みを呈した深鉢の胴部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は肩部に横方向の沈線、一番張った胴部より少し下位に1本の刻目突帯を横方向に施している。257は丸みを呈した浅鉢の胴部から底部近くである。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は胴部に横方向の沈線、一番張った胴部には刻目突帯を横方向に1本施している。258は丸みを呈した浅鉢の胴部から底部近くである。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は胴部に斜め横方向の沈線があり、最下位には横方向に詰めた刺突文を施している。

X b 類の土器 (259~263)

この類は横刻み目刺突文と刻み目突帯で構成する文様をもつグループである。

259は口縁部が頸部からやや開く傾きで立ち、口縁端部では外反をしている深鉢である。肩部から胴部を含め底部近くまでの器形は球状である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は口縁部に横刻み目刺突文を4列施し、肩部には波状の刻目突帯と横沈線を施している。文様の最下位には刻目突帯を横方向に施している。260は口縁部が頸部からやや開く傾きで立ち、口縁端部では外反をしている。肩部から胴部の器形は径の小さい球状である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は口縁部に横刻み目刺突文を3列施し、肩部には横沈線を施している。文様の最下位には刻目突帯を施している。261は口縁部が頸部からやや開く傾きで立ち、口縁端部では外反をしている。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は口縁部に横刻み目刺突文を3列施し、頸部には縦方向の刻目突帯を施している。262は球状を呈した深鉢の肩部から胴部である。器面調整は内外面とも条痕文である。肩部には縦方向と横方向の刻目突帯を組み合わせたものと横沈線を施している。263は球状を呈した深鉢の胴部である。器面調整は内外面とも条痕文であ



第72図 縄文時代の土器25 (X b類)

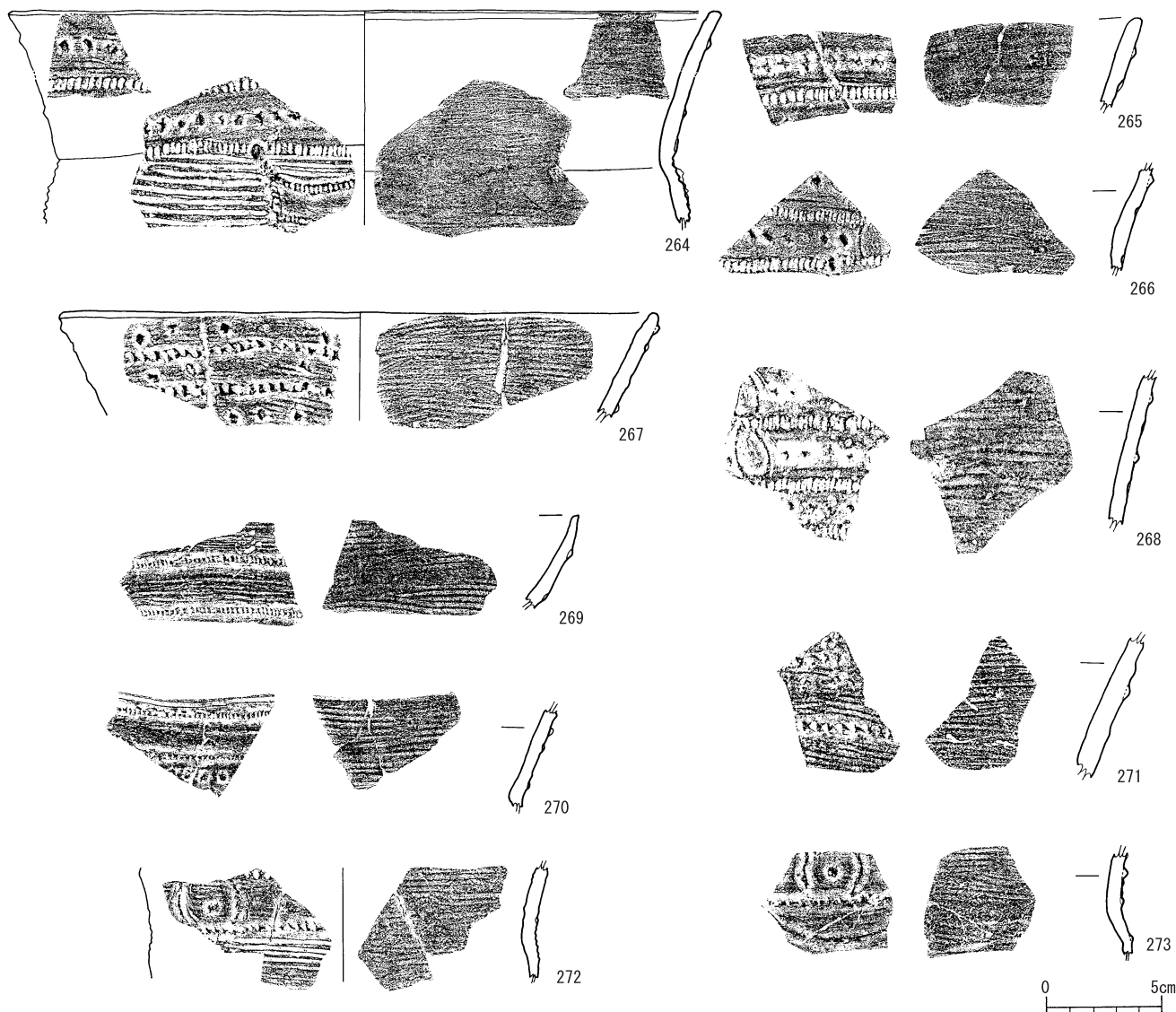
る。肩部には縦方向と横方向を組み合わせた細い刻目突帯と横沈線を施している。

X c 類の土器 (264~273)

この類はX aに玉状突起が加わったものである。文様は刻み目刺突、尖り突帯、沈線、玉状突起で構成しているグループである。

264は頸部で締まり、外反する口縁部と球状に丸くなる肩部を呈する器形の深鉢である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は頸部から口縁部にかけて横刻み目の刺突文を2列回し、その上位と間に玉状突起を貼り付けている。肩部には横沈線と刻目突帯を縦方向と横方向に組み合わせている。265は外に開く口縁部である。

器面調整は内外面とも条痕文である。文様は玉状突起と横刻み目の刺突文を施している。266は外に開く口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は玉状突起と横刻み目の刺突文を施している。267は外に開く口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は玉状突起と刻目突帯文を交互に施している。268は口唇部が欠損して無いが外に開く口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は玉状突起と縦弧状の尖り突帯と横刻み目の刺突文を施している。269は外に開く口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は細い刻み目突帯文を横方向に貼り付けている。270は口縁部が欠損しているが外に開く器形の口縁



第73図 縄文時代の土器26 (X c類)

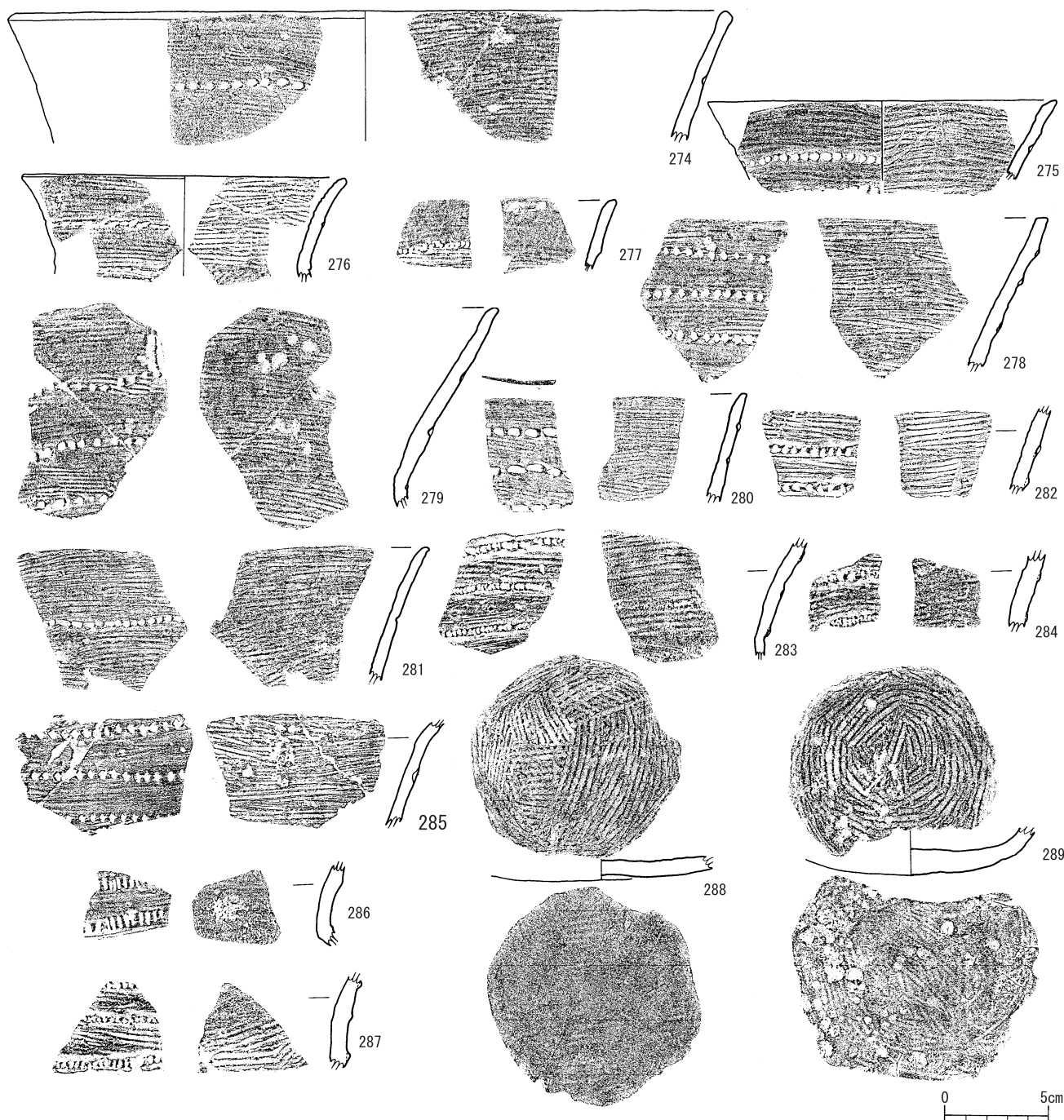
部である。器面調整は内面が条痕文で外面が条痕文と撫で調整である。文様は細い刻目突帯文と玉状突起を横方向に施している。271は口縁部が欠損しているが外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外面が条痕文である。文様は刻目突帯文と玉状突起を横方向に施している。272はやや締まった頸部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は刻目突帯2本の間に弧状尖り突帯を向かい合わせ円形にし、その中央に円形突起を施している。273はやや締まった頸部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は刻目突帯2本の間に弧状尖り突帯を向かい合わせ円形にし、その中央に円形突起を施している。これらの文様の下には尖り突帯が弧状に貼り付けている。

IX・X類の土器 (274～289)

この類はIX d類とX類に共通するものである。すなわち肩部と胴部がないためどの類になるか不明土器としてここに上げた。このことは、両類がセット関係が非常に

近い時期のものとしてとらえられることを示している。

274は外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横刻み目の刺突文を施している。275は外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横刻み目の刺突文を2列施している。276は外反する器形の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横刻み目の細かい刺突文を2列施している。277は外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横刻み目の刺突文を施している。278は外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横刻み目の刺突文を4列施している。279は外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横刻み目の刺突文を3列施している。280は外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横刻み目の刺突文を3列施している。281は外に開く器形の口縁部である。器面調整は内



第74図 縄文時代の土器27（Ⅸ，Ⅹ類）

外面とも条痕文である。文様は横刻み目の刺突文を施している。282は外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横刻み目の刺突文を2列施している。283は口縁端部が欠損しているが外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横刻み目の3列刺突文を施している。284は口縁端部が欠損しているが外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は刻目突帯と刺突文を施している。285は口縁端部が欠損しているが外に開く器形の口縁部である。器面調整は内外

面とも条痕文である。文様は横刻み目の2列刺突文を施している。286は締まった頸部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横刻み目の2列刺突文を施している。287は締まった頸部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は刻目突帯文が2列と刺突文が1列みられる。

288と289は底部である。これもⅨ類とⅩ類の器形にあたるためここに上げた。

288は角のない広い丸底である。中央部はやや変形して窪んでいる。内面は条痕文であるが、外面は条痕文の

上をやや丁寧に撫で調整している。289は角のない広い丸底である。器面は内面が条痕文で、外面が条痕文の上から撫で調整をしている。

X I 類の土器 (290~293)

この類は主にⅧcの器形で厚手である。文様は尖り突帯に刻み目を付けたグループである。

290は口径29.6cmである。器形は口縁部が直線状で外に開き、上部が厚くなっている。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は横方向に尖り突帯を巡らし、縦方向の刻み目突帯2本を口唇部まで貼り付けている。291は口径17.2cmで、頸部が締まり、口縁部が外反している土器である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は縦方向の刻み目突帯3本を口唇部まで貼り付けている。この土器は頸部が締まっている器形であるが、突帯の太さや刻みの特徴でこのグループに入れた。器形的には山陰系の可能性もある。292は口径が25.2cmで、口縁が直線状に開く器形である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は2列の尖り突帯に刻みを付けた横方向と縦方向の突帯を組み合わせている。293は直線状に開く口縁部である。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は、刻み目突帯を斜めに2本貼り付けている。

X II・X III類の分布

X II類は北微高地のD・E-4~7区と南部舌状微高地のオ・カー29区に出土している。

X III類はa、bとも北微高地と南部舌状微高地に散布

的に出土している。

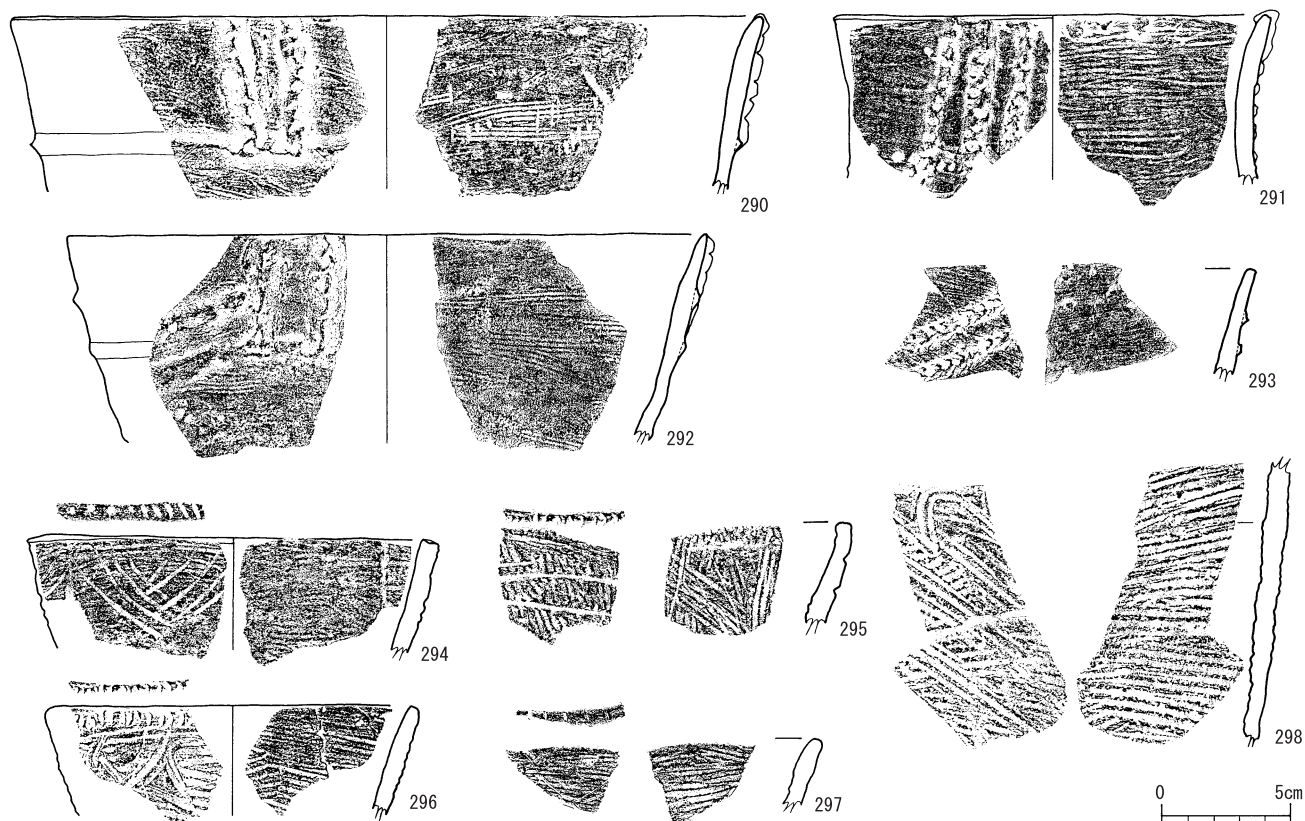
X II類の土器 (294~298)

この類は条痕文に沈線や条痕文で文様を施しているグループで比較的薄手である。

294は口径16.1cmである。口縁は内湾気味の曲がり以外に開いている。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は弧状の4から5条の沈線を向かい合わせて重ねているものを連続に施している。295は口径16cmである。口縁は内湾気味の曲がり以外に開いている。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は内面が条痕文で縦と斜めを組み合わせ、外面は2条の沈線が横方向に施されている。296は口径14.2cmである。口縁は内湾気味の曲がり以外に開いている。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は内面が条痕文で右斜方向と左斜方向を組み合わせ、外面は2条の沈線が鋸歯状に施されている。なお、口唇部には刻み目が施されている。297は口縁が内湾気味の曲がり以外に開いている。器面調整は内外面とも条痕文である。文様は外面に2条の沈線が鋸歯状に施されている。なお、口唇部には刻み目がある。

X III類 (299~321)

この類は無文土器のグループである。分類は大きく二つに分けられた。X III aはX II類の器形で内湾気味の曲がり以外に開くタイプである。X III bは直線状に外開きをする器形である。



第75図 縄文時代の土器28 (X I, X II類)

XⅢ a類の土器 (299～311)

299は厚手の土器で、内外面に条痕文を施している。300から309は薄手の土器で内外面に条痕文を施している。300は口径が19cmで、開きが大きい。303は口唇部にも条痕文を施している。305は口径17cmで、深さは浅く、浅鉢の器形である。306は口径15.9cmで深さは浅く、浅鉢に入る器形である。310は口唇部が欠損しているが、深鉢の器形である。311は条痕文の幅が広いものである。

総じてこの類は299と310がⅧ類、他はXⅡ類の無文土器との考えもできる。

XⅢ b類の土器 (312～321)

この類は概ね薄手の土器である。312～315は口縁部が

外反するタイプで、316～321は直線状に外開きをするタイプである。これらは器面調整が内外面とも条痕文を施している。

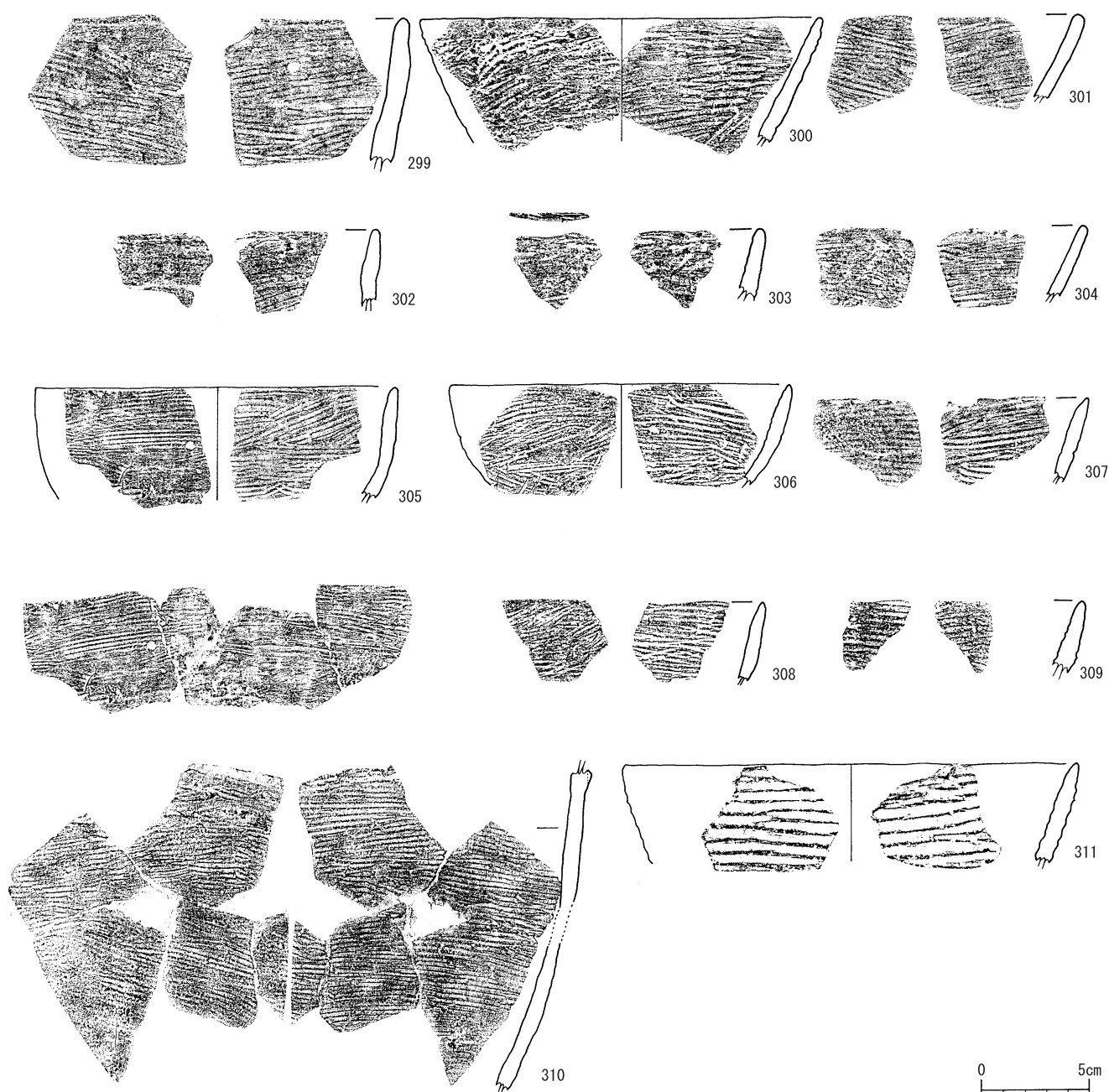
総じて、この類の器形はX類に類似している。よってこの類はX類の無文土器との考えもできる。

XⅣ類

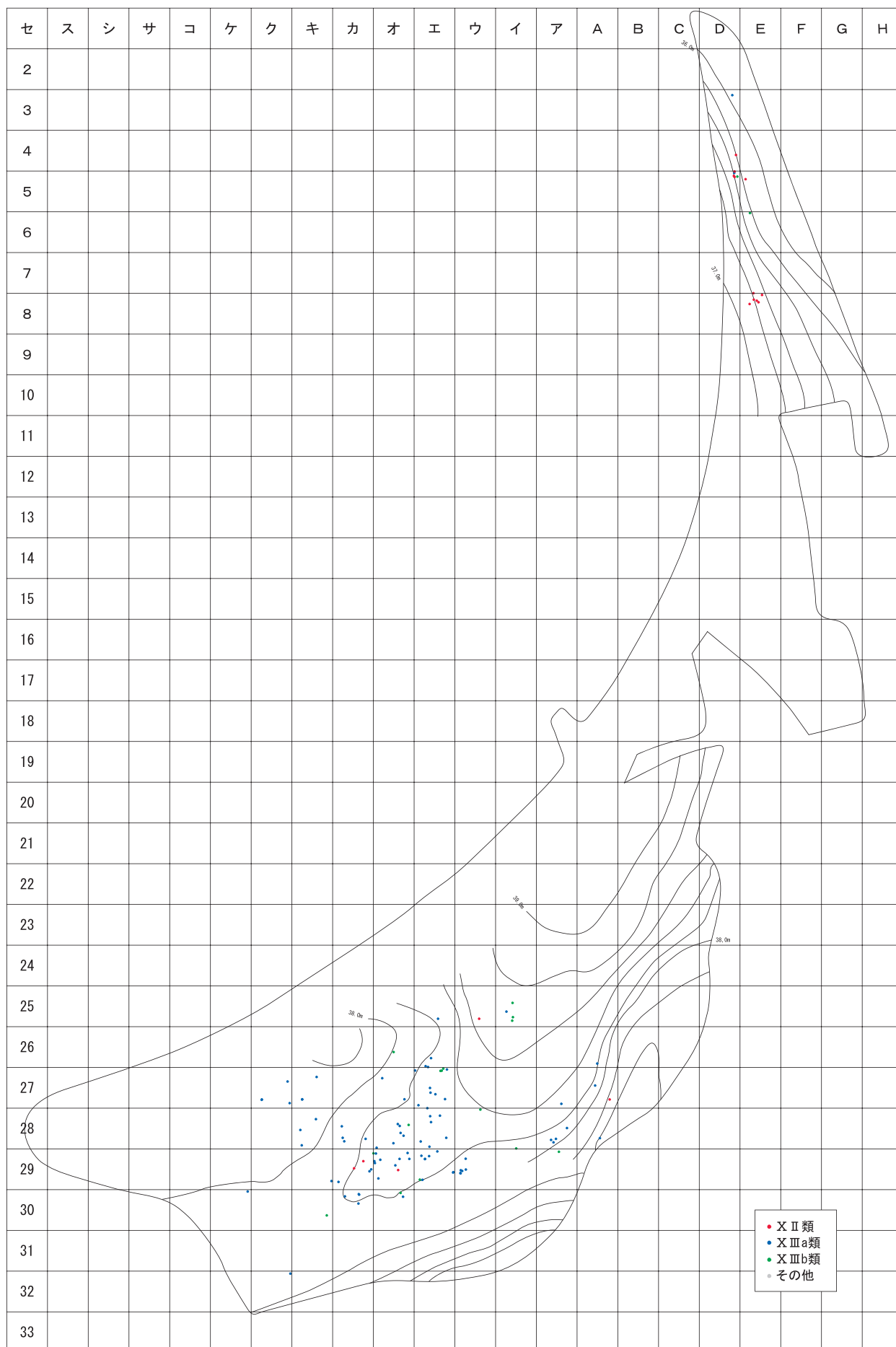
この土器は区画で全体を割り振りし、その小さな区画内を短い沈線文で埋める手法を呈する群である。その文様帯は底部を含めた外面全体に及ぶものや、口縁内面に施すものもある。器形は口縁部が外反し胴部は直線状が多く、底部は丸底が多い。

XⅣ類の分布

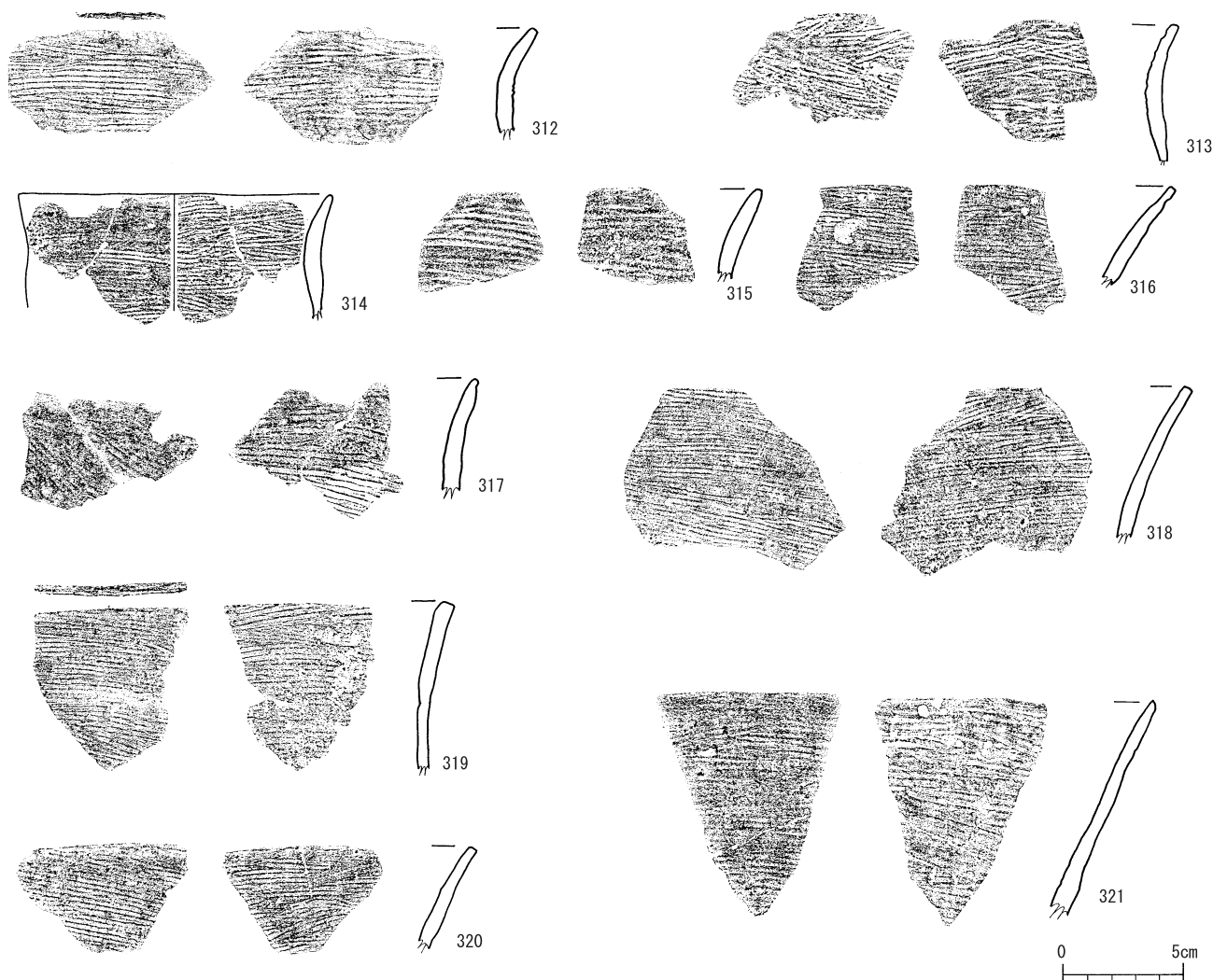
この類は主に北部微高地に集中して分布している。南



第76図 縄文時代の土器29 (XⅢ a類)



第77図 縄文時代の土器出土分布図8 (X II, X III a, X III b類)



第78図 縄文時代の土器30 (XIII b類)

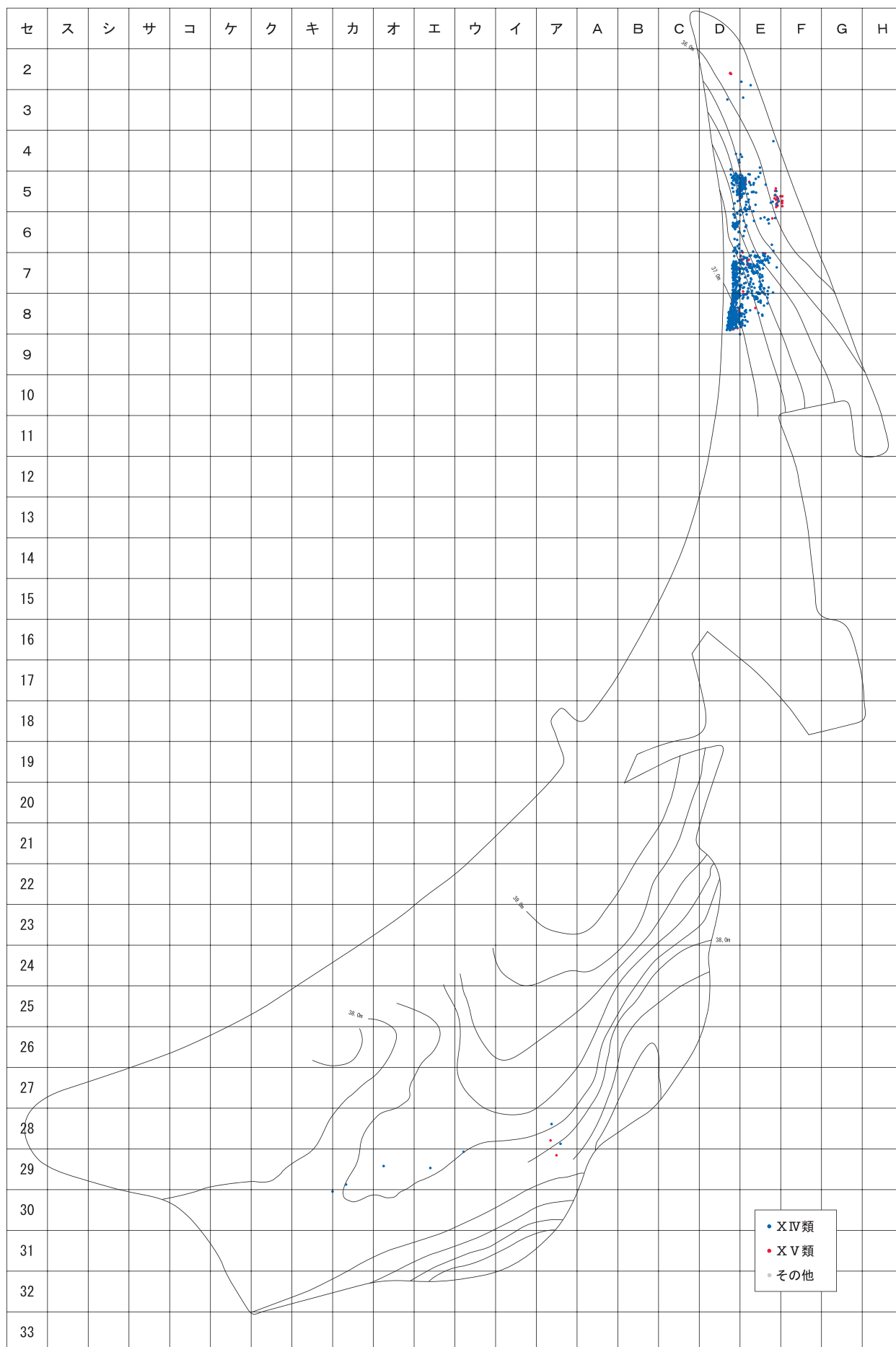
部舌状微高地は散布的である。

北部微高地はD・E-7・8区に分けられる。

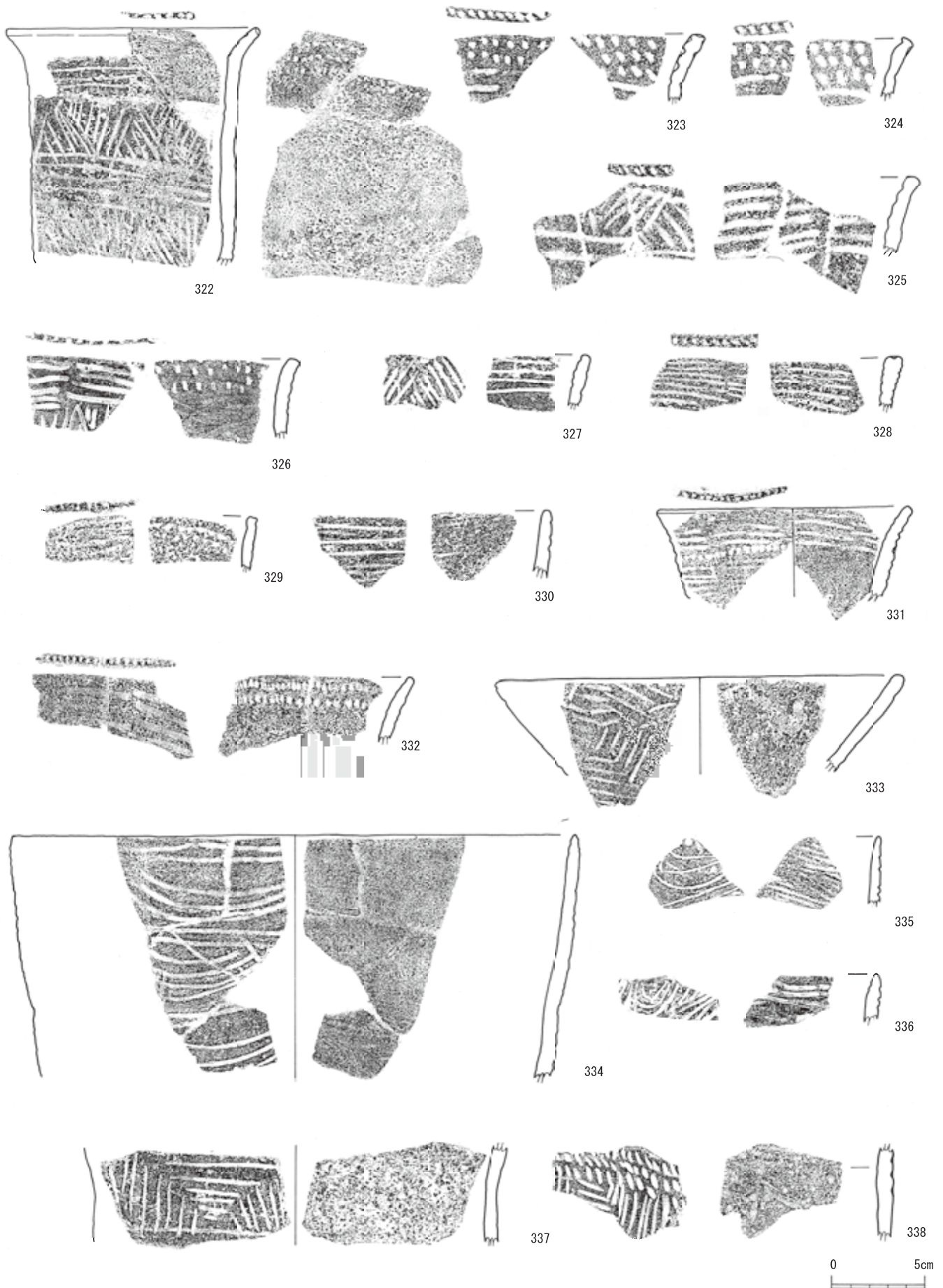
XIV類の土器 (322~349)

322は底面が欠損しているが、口縁部から底部まであり、器形がわかる深鉢である。器形は口縁部が外反し、胴部は底部から直に立ち上がっている。文様は口唇部が連点、外側の口縁部と胴部に横方向の沈線、その間に鋸歯状に領域を区切り、中を沈線で埋めている。内面の口縁部にも連点が3列みられる。器面は撫で調整であるが、摩耗がみられる。323は外反する深鉢の口縁部で、口唇部も含め、連点と沈線で文様を構成している。器面は撫で調整である。324は外反する深鉢の口縁部で、口唇部も含め、連点と沈線で文様を構成している。器面は撫で調整である。325は外反する深鉢の口縁部で、外面の文様は沈線で蜘蛛の巣状に構成している。内面は横方向の単線で構成している。器面は撫で調整である。326は外反する深鉢の口縁部で、口唇部も含め、連点と沈線で文様を構成している。器面は撫で調整である。327~330は口縁部が直に向く器形の深鉢である。327の文様は

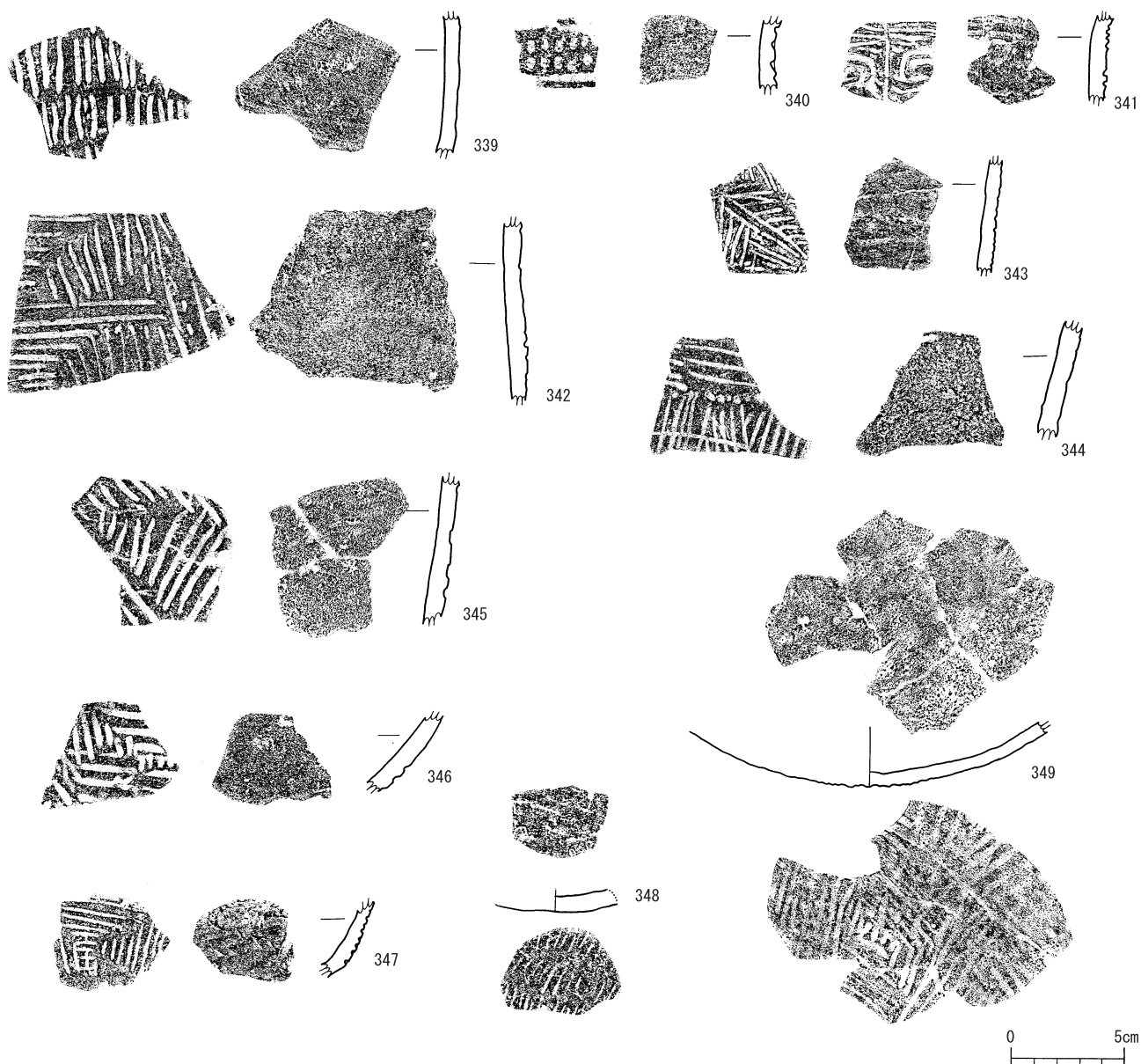
沈線のみである。器面は撫で調整である。328は口唇部に連点を施し、他の面は沈線である。329は口唇部と内面に連点、外面に沈線を施している。330は沈線を外面に施している。331は外反する口縁部で、文様は外面に沈線と連点の組み合わせである。器面は撫で調整である。332は外反する口縁部である。文様は口唇部に連点、外面に沈線、内面に連点を施している。333は外に開く口縁部である。器形は浅鉢状である。文様は横沈線に四角に沈線を重ねて構成している。器面は撫で調整である。334~336は直に向く口縁を呈する深鉢である。文様は主に直線と弧状の沈線で構成している。335と336は細い沈線である。337、338は深鉢の胴部である。文様は連点と四角に沈線を重ねて構成している。器面は撫で調整である。339は深鉢の胴部である。文様は縦の単線を重ねて構成している。器面は撫で調整である。340は深鉢の胴部である。文様は連点と沈線で構成している。器面は撫で調整である。341は深鉢の胴部である。文様は沈線と巻き文である。器面は撫で調整である。342は深鉢の胴部である。文様は縦糸のない蜘蛛の巣状の沈線文で



第79図 縄文時代の土器出土分布図9 (XIV, XV類)



第80図 縄文時代の土器31 (XIV類①)



第81図 縄文時代の土器32 (XⅣ類②)

ある。器面は撫で調整である。343は深鉢の胴部である。文様は蜘蛛の巣状の沈線文である。器面は撫で調整である。344は深鉢の胴部である。文様は沈線文で構成している。器面は撫で調整である。345は深鉢の胴部である。文様は蜘蛛の巣状の沈線文である。器面は撫で調整である。346は深鉢の底部である。文様は変則蜘蛛の巣状の沈線文である。器面は撫で調整である。347は深鉢の底部で丸底である。文様は蜘蛛の巣状の沈線文である。器面は撫で調整である。348は底部で丸底である。器面は撫で調整である。文様は縦状の沈線である。349は底部で丸底である。器面は撫で調整である。文様は変則蜘蛛の巣状である。

XⅤ類 (350～363)

細い沈線と連点それに刻目突帯を施すものをXⅤa類、微隆起突帯とそれに刻み目を施したものに細い沈線

を施すものをXⅤb類とした。

XⅤ類の分布

この類は北部微高地のE-5区に集中して出土している。他は散布的である。

XⅤa類の土器 (350～354)

350は外反する口縁部で、文様は刻目突帯と縦方向の連点と細い沈線である。351は内湾する口縁部で、文様は鋸歯状に付けた細い沈線と連点を外面に、横方向の連点を内面に施している。352～354は数列の細かい連点と沈線を施している。これらは縄文前期に位置する。

XⅤb類の土器 (355～363)

355は内湾気味に外開きを呈する口縁部をもつ深鉢である。文様は刻み目の微隆起突帯を逆三角形に貼り付け、突帯の上と下に細い沈線を付けている。356は内湾気味に外開きを呈する口縁部をもつ深鉢である。文様は

微隆起突帯を横方向に付けている。357は直に向く口縁部である。文様は微隆起突帯を斜めに貼り付け、左右に細い沈線を施している。358は胴部である。文様は微隆起突帯を斜めに貼り付け、左右に細い沈線を施している。359は胴部である。文様は微隆起突帯を横方向に貼り付け、上下に細い沈線を施している。360は直に向く胴部である。文様は微隆起突帯を縦方向に貼り付け、左右に細い沈線を施している。361は胴部である。文様は微隆起突帯を縦方向と横方向2本を貼り付け、上下左右に細い沈線を施している。362は直に向く胴部である。文様は微隆起突帯を縦方向に2本貼り付け、左右に細い沈線を施している。器面は撫で調整である。363は直に向く胴部である。文様は微隆起突帯を縦・横・斜め方向に貼り付け、上下左右に細い沈線を施している。器面は撫で調整である。

XVI類 (364~368)

この類は器面に縄文を施す土器である。

XVI類の分布

この類は北部微高地のD-2区とE-5区とD-8区に出土している。

XVI類の土器 (364~368)

364~367は同一土器と思われる。364は深鉢で、「く」の字頸部で口縁は開き、口唇部には半円状の突起を張り付けている。肩部はやや丸みをもって、365の胴部に繋がっている。365からは366の底部近くに繋がっている。底部は平底の367へ繋がっている。文様は全面縄文を施している。内側の器面は撫で調整である。この土器は焼成が柔らかいため器面がやや摩耗している。368は深鉢

の胴部である。前との違いは、焼成がやや硬く、内面に条痕文がみられる。外面は前と同じく全面縄文である。

XVII類 (369~375)

この類は口縁部がキャリパーになり、頸部が締まり、胴部が膨らむ器形である。

XVII類の分布

この類は北部微高地のE・D-3~8区に出土している。XVI類と同地区である。

XVII類の土器 (369~375)

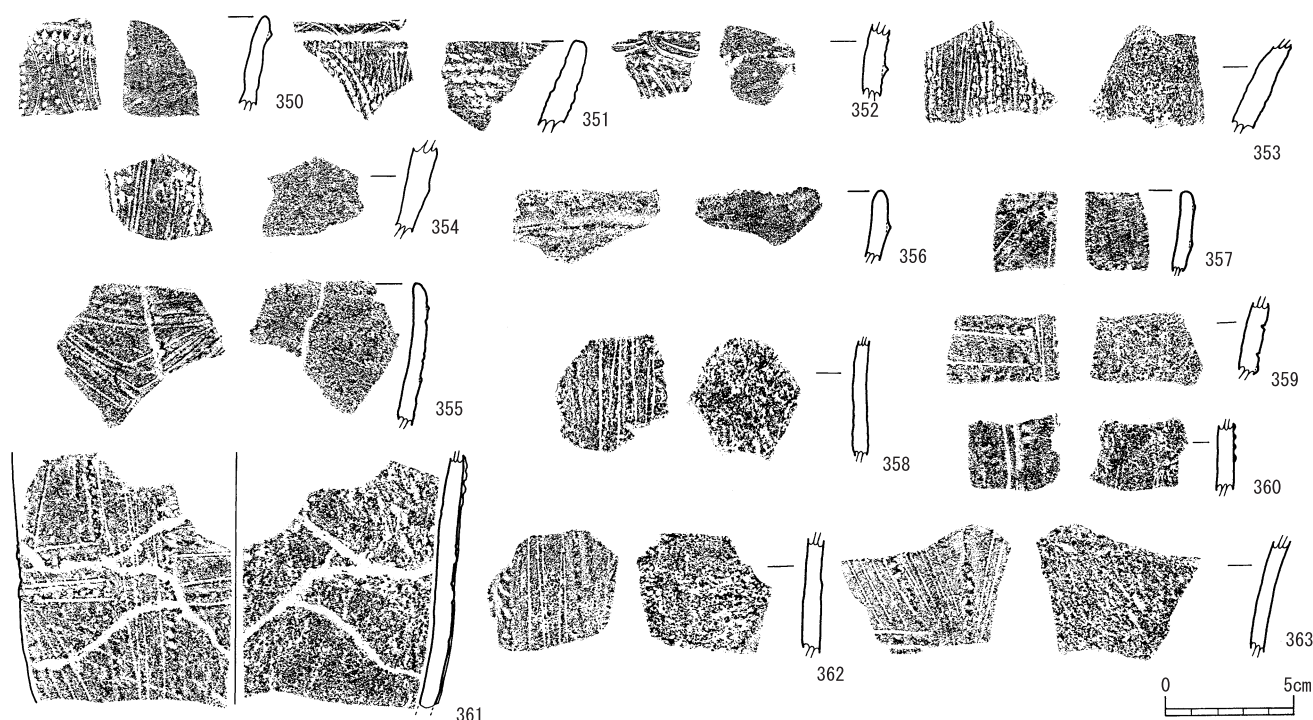
369は口縁部がキャリパーになり、頸部が締まる薄手の深鉢である。外面の文様は山形に突帯を貼り付け、多条沈線を縦方向に施している。器面調整は条痕文である。370・371は口縁部がキャリパーになり、頸部が締まる器形である。文様は刻目貼り付け突帯を弧状に施している。器面調整は条痕文である。372は口縁部がキャリパーになり、頸部が締まる器形である。外面の文様は刻目貼り付け突帯を横方向と縦方向に施している。その中には多条沈線が縦方向にみられるほか2列連点がある。器面調整は条痕文である。373は372と同じ様な土器であるが、文様が蕨手状になっている。374は372の頸部と思われる。文様は刻目貼り付け突帯と3列連点が施されている。375は平底の底部である。底部にしては薄手にできている。底面は撫で調整をしている。

XVIII類

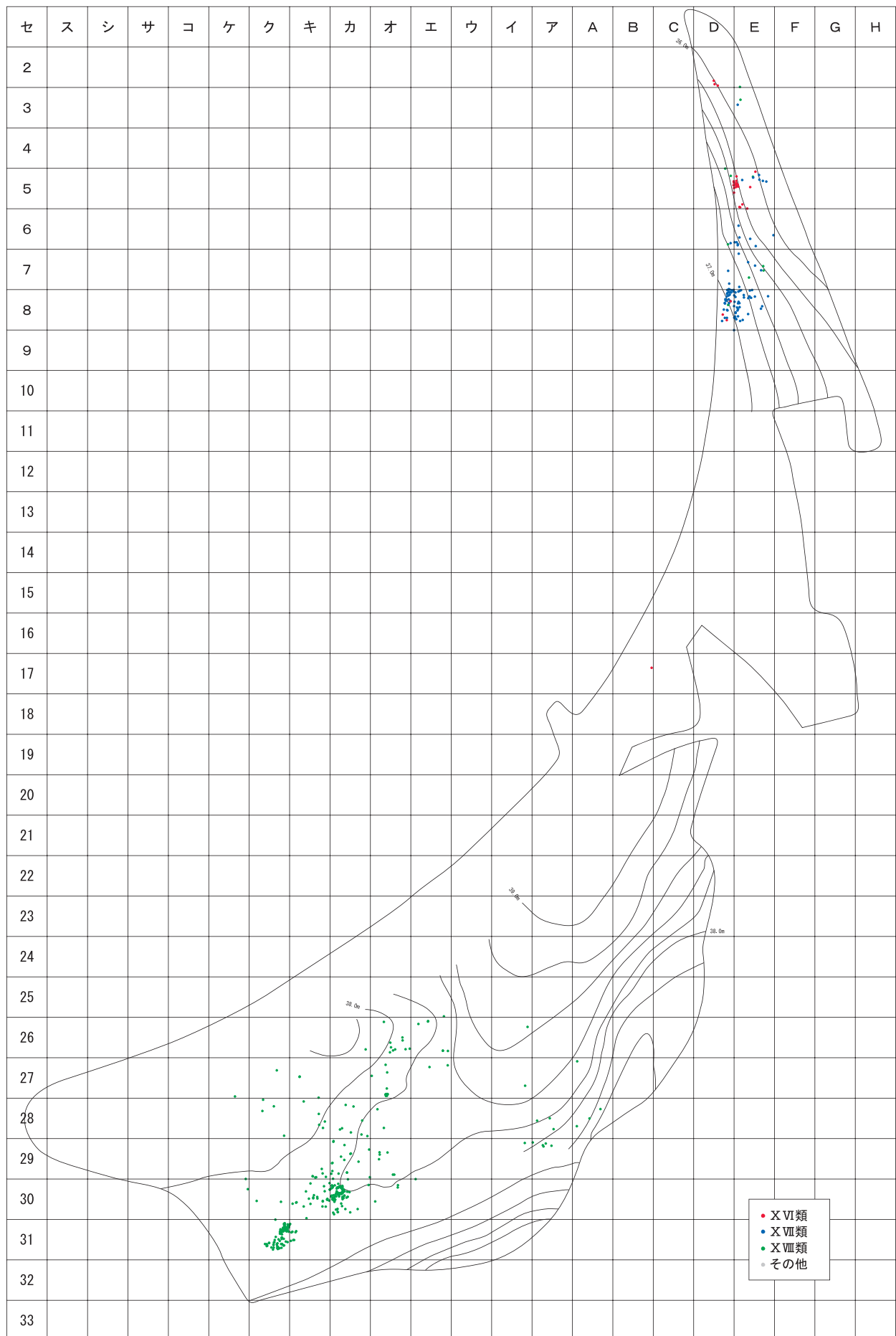
この土器は文様に凹線文を施すものと、それと同じ器形をもつ無文土器である。

XVIII類の分布

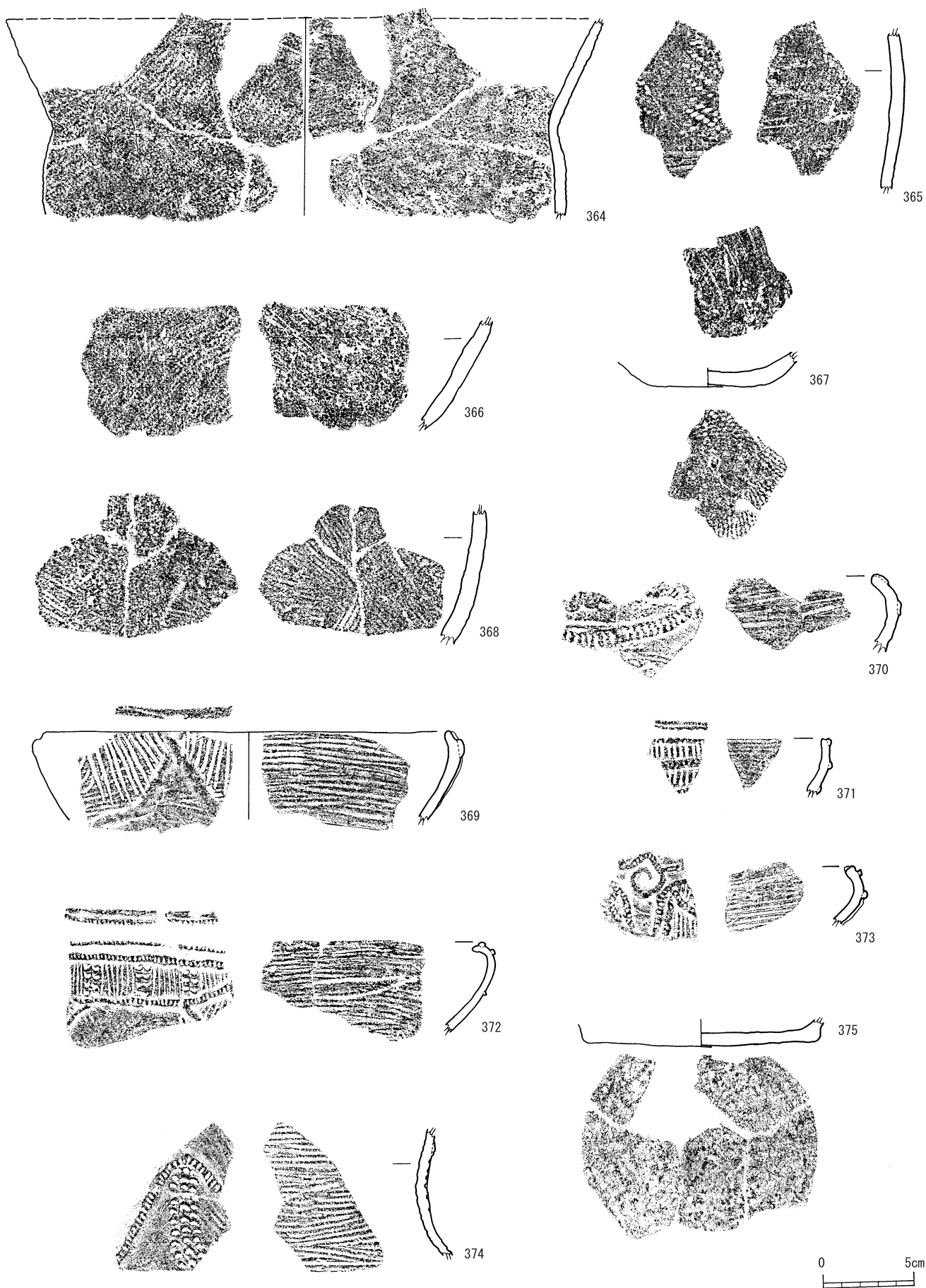
この類は南部舌状微高地に分布し、カーク-30・31区



第82図 縄文時代の土器33 (XV類)



第83図 縄文時代の土器出土分布図10 (X VI, X VII, X VIII類)



第84図 縄文時代の土器34 (XVI, XVII類)

に集中して出土している。他は散布的である。

XⅧ類の土器 (376～416)

この土器は凹線で曲線を全面に施すもの、口縁部に文様帯を作りその中に施すもの、直線文様を基本で施すもの、沈線を施すもの、無文のグループに分けられる。

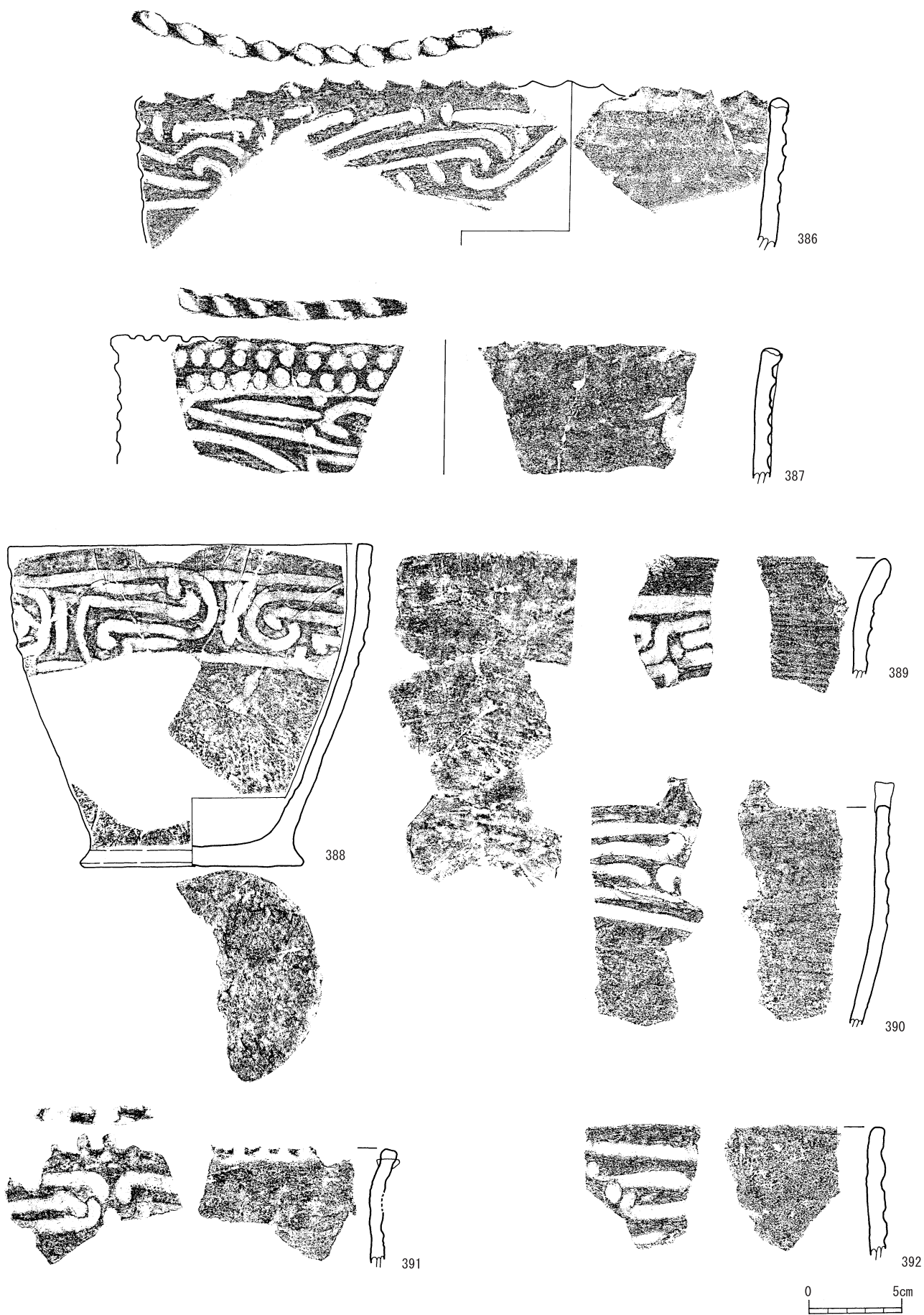
凹線で曲線を全面に施すグループは376～384である。376は口唇部に突起状の四角い張り出し部を付け、胴部がやや張った器形の深鉢である。文様は渦巻き状に凹線と連点を付けている。器面は撫で調整である。377は深鉢の胴部で、文様は渦巻き文である。377～384は口唇部

が平坦になり、器形は直向する口縁をもつ深鉢である。文様は凹線を曲線と連点で構成したものである。385は胴部から平底の底部である。文様は直線であるが、全面に文様を施すグループに入れた。

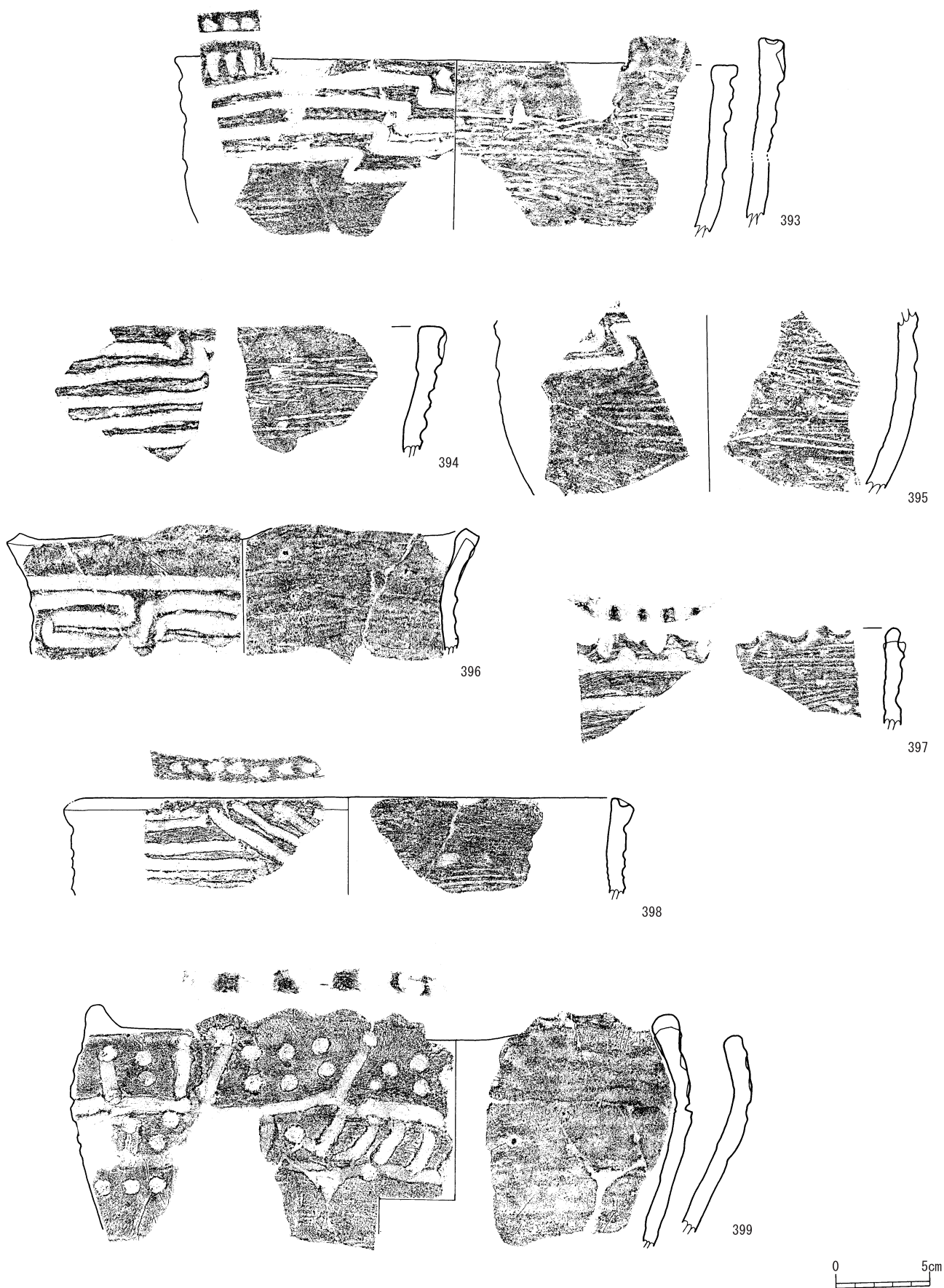
口縁部に文様帯を作りその中に施すものは386～392である。386は直に向く器形の深鉢である。文様は口唇部に凹点の刻み目を入れ、口縁部の上部に凹線で区切りを付けて、その中を蕨手状に凹線を施している。器面は撫で調整である。387は直に向く器形の深鉢である。文様は口唇部に凹点の刻み目を入れ、口縁部の上部に凹点で



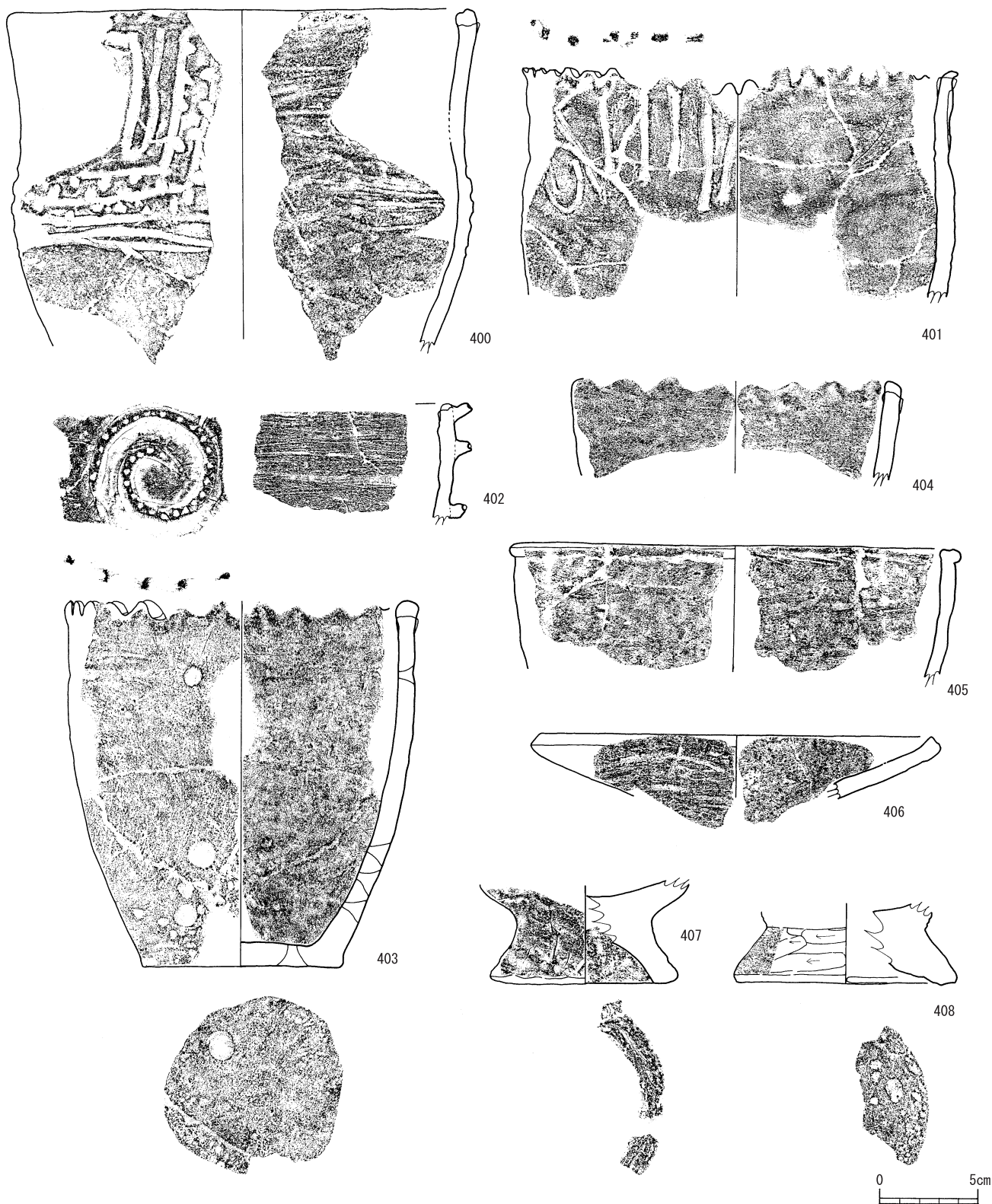
第85図 縄文時代の土器35 (XⅧ類①)



第86図 縄文時代の土器36 (XⅧ類②)



第87図 縄文時代の土器37 (XⅧ類③)

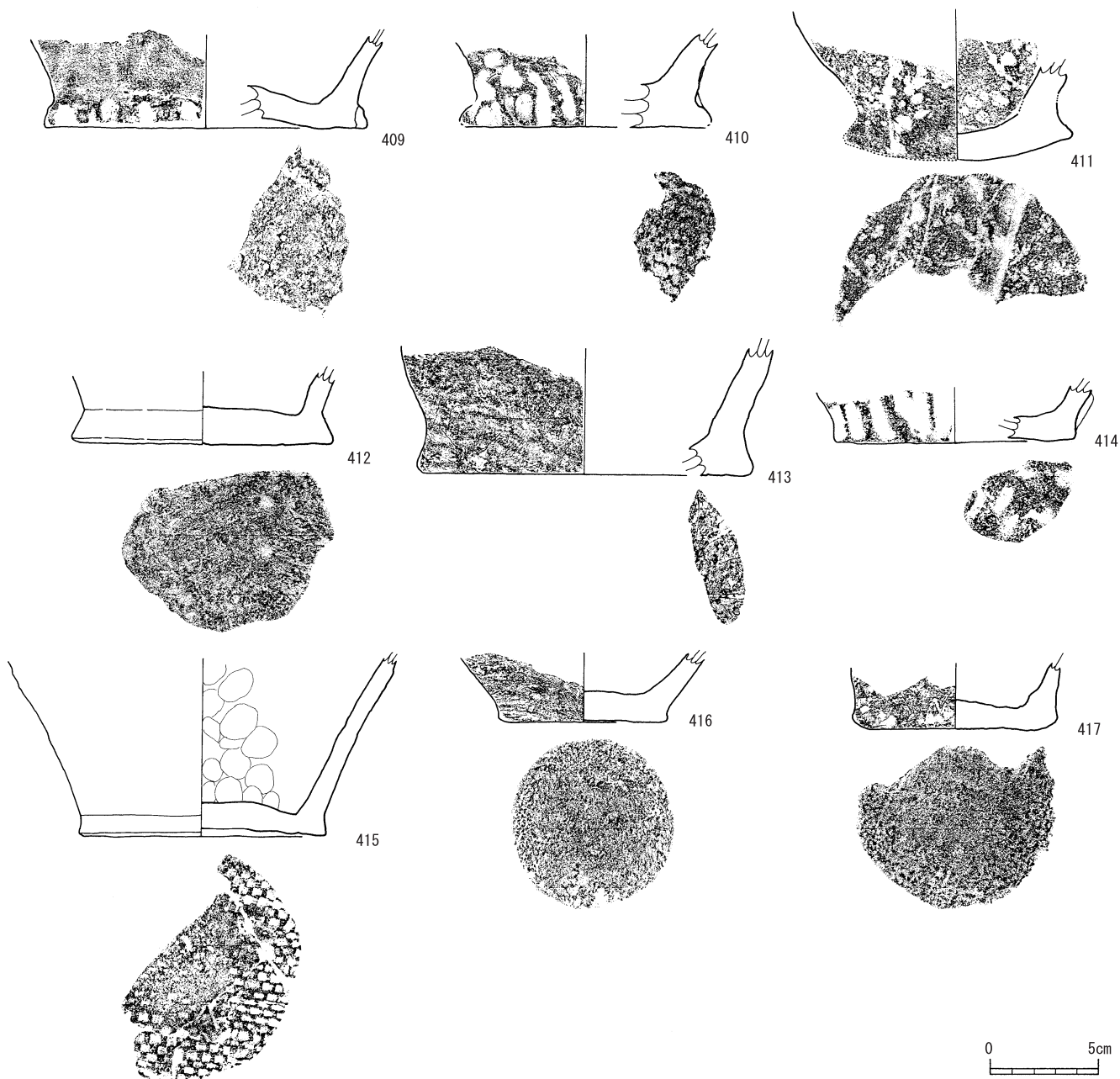


第88図 縄文時代の土器38 (XVIII類④)

2列, その下に蕨手状に凹線を施している。器面は撫で調整である。388は直に向く器形の深鉢である。底部は張り出しがあり, 平底である。文様は口縁部の上部に凹線で区切りを付けて, その中を蕨手状に凹線を施している。器面は撫で調整である。389~392は凹線文を蕨手状に施している深鉢である。390には口唇部に突起がみら

れ, 391には口唇部に凹点の刻みがみられる。

直線文様を基本で施すものは393~399である。399は直に向く口縁の深鉢である。口唇部には半円形の突起を付けている。文様は突起の口唇部に凹点刻みと外側に縦の凹線を付け, 口縁部には横直線と括れを組み合わせた文様を施している。器面調整は条痕文である。395~397



第89図 縄文時代の土器39 (XVIII類⑤)

は直に向く口縁の深鉢である。文様は397が凹点刻みと外側に縦の凹線を付け、他は口縁部には横直線と括れを組み合わせた文様を施している。器面調整は条痕文である。398は口縁部が直に向く深鉢である。文様は口唇部に凹点刻みを付け、口縁部に横方向と斜方向の直線を施している。器面調整は条痕文である。399はこのグループの範疇からははずれるものである。ここでは直線の共通点としてここに上げた。器形は口縁部が丸みをもってやや開いている深鉢である。口唇部には山形突起をつけ凹点刻みを付けている。文様は直線と凹点を施している。器面は撫で調整である。

沈線を施すものは400～402である。400は胴部がやや丸みをもち、口縁部が直に立ち上がる器形の深鉢である。口唇部には刻み目があり、口縁部には縦・横の沈線

とその間に連点を施している。器面調整は条痕文である。401は胴部がやや丸みをもち、口縁部が直に立ち上がる器形の深鉢である。口唇部には刻み目があり、口縁部には縦・円の沈線を不規則に施している。器面は撫で調整である。

402は渦巻き状突帯に刻み目を施したものである。器面調整は条痕文である。

無文のグループは403～406である。403は直に立つ口縁部をもった平底の深鉢である。文様は口唇部には刻み目が入れている。器面は撫で調整である。404は403と類似したものである。405は口縁部に突帯が巡らされているもので、器形は鉢である。器面は撫で調整である。406は外に開く鉢である。器面は撫で調整である。407は縄文中期の阿高式土器の鉢脚台も考えられる。器形は上

げ底で雑に器面調整をしている。408は厚手の張り出しのある底部で、上げ底である。器面は撫で調整である。

底部

408～417は底部である。408は中央部があげ底状態になっている張り出しのある平底である。張り出し部には指圧痕が巡らされている。立ち上がりは外反である。409は大きな張り出しのある平底である。底面は厚みがある。立ち上がりは外反である。410は変形した平底である。底部の張り出しは尖り気味になり、安定性が無い。411は張り出しがあまり無い平底である。立ち上がりは外に開く。412も張り出しが少ない平底である。立ち上がりは外に開く。413は張り出しがない平底である。414は張り出しがないあげ底である。立ち上がりは外に開く。内面には剥離された部分もみられる。415は張り出しのない平底である。416は角が丸みをもつ平底である。内面の調整は雑である。

XX類 (418・419)

418は口縁部が外に立ち上がる器形の深鉢である。口唇部には刻み目があり、口縁部には横・斜め・円の沈線を施している。419は口縁部が直に向く深鉢である。文様は口唇部に山形突起を貼り付け刻みを入れ、沈線も施している。文様は細い沈線を縦と横と箱形に入れている。器面は撫で調整で、出土地点はウ-19区に出土している。

XX類 (420・421)

420は外に開く三角断面口縁で口唇部に貝殻刺突文がみられる。器面は撫で調整である。421は三角断面口縁の一部で貝殻条痕が内外面にみられる。出土地点はア-29区とア-28区に出土している。

XX I類 (422～425)

422は肩が張り、頸部が内向し、胴部が丸みをもつ深鉢である。器面調整は外面が灰白色で横研磨がみられる。内面は丁寧な撫で調整である。423は肩から胴部が丸みをもち、外面が研磨されている深鉢である。424はあげ底の深鉢底部である。器面は丁寧な撫で調整がされている。425は平底で浅鉢の底部である。外器面は研磨が施されている。

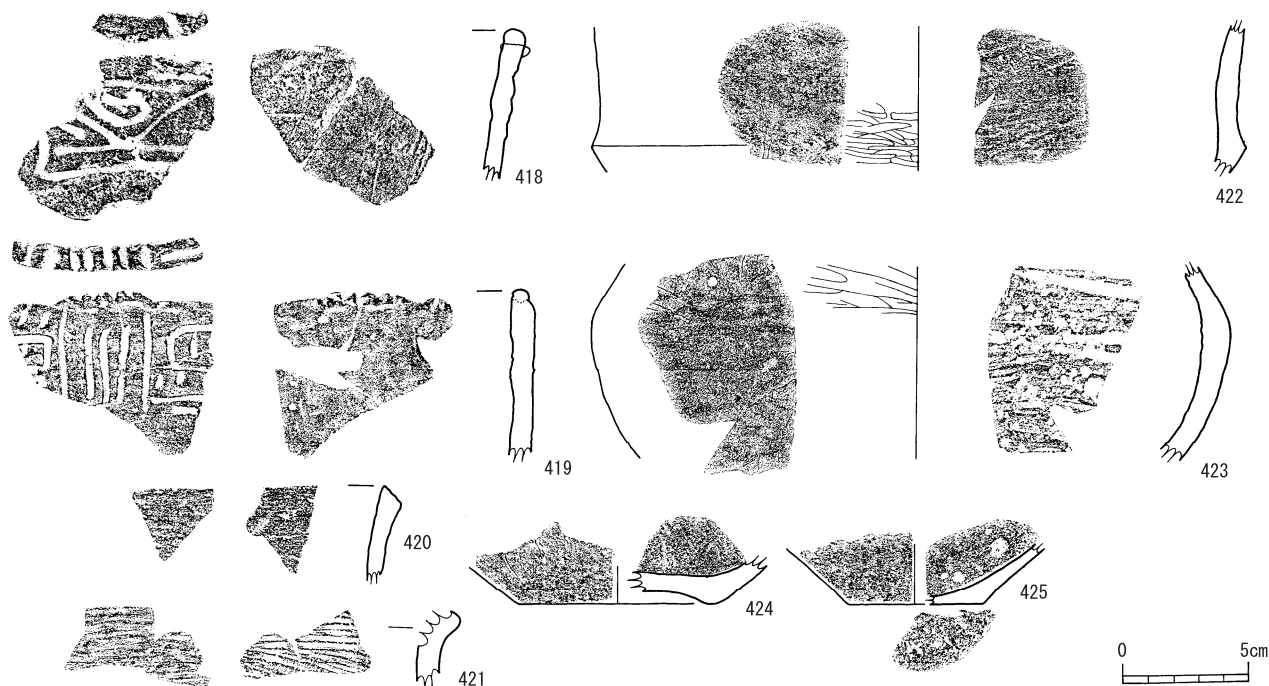
XX II類 (426～437)

この類は縄文時代晩期前半に位置する土器群である。

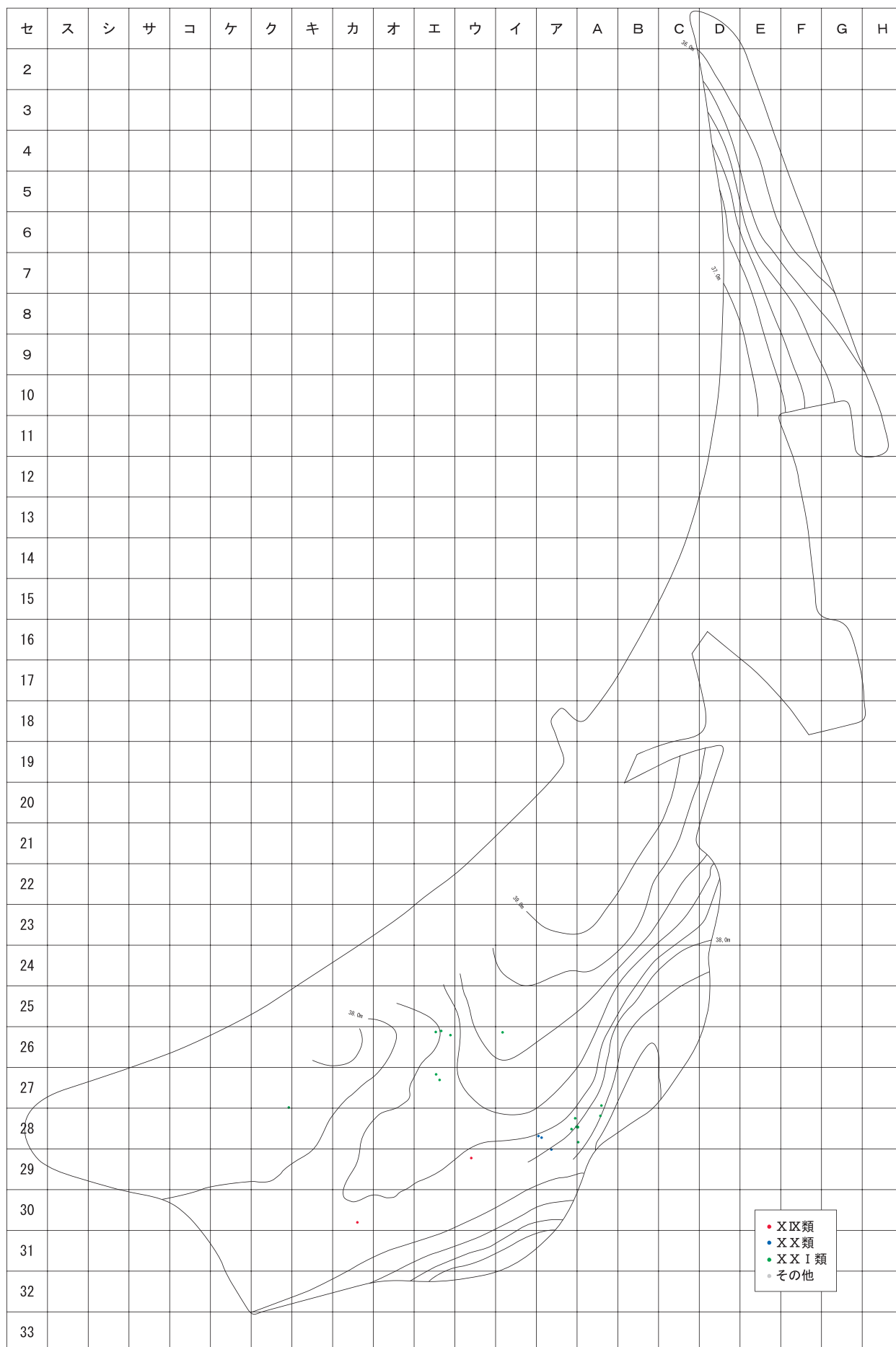
XX II類の分布

この類は北部微高地のD-2～8区と、南部舌状微高地のA-28・29区やキ・ク-30・31区等に散布的に出土している。

426は頸部で「く」の字に折れ、口縁部が外に開く深鉢である。器面は撫で調整である。427は口縁部が外反する鉢形土器である。器面調整は外面篋状のもので口縁部を横方向、胴部を縦方向に行っている。内面は粗い篋状のもので撫でている。428は外に開く深鉢の口縁部である。器面は外側が篋状条痕、内側が撫で調整である。429は内側に段を形成した内向する深鉢の口縁部である。器面は細い篋状条痕が施されている。430は頸部が「く」に締まり、口縁部が開き、肩部は張り、胴部は丸みをもっている深鉢である。これは、頸径が47cmで、器高が25cm以上をもち大型の土器である。器面は篋状のもので撫で調整を施している。431は「く」の字に肩の張る器形で深鉢である。器面は篋状のもので撫で調整を横方向に施している。432は張り出しの少ない平底をもち、胴部が張る器形の深鉢である。頸部や口縁部は欠損して



第90図 縄文時代の土器 (XX類, XX I類, XX II類)



第91図 縄文時代の土器出土分布図11 (X IX, X X, X X I類)

いる。器面は篋状条痕が横方向に施されている。433は張り出しのない平底である。器面は篋状条痕がみられる。434は張り出しがある平底である。器面は篋状条痕がある。435は口縁部が外に開く器形の浅鉢である。口唇部は円形断面である。器面は内外面に研磨が施されている。436は頸部と肩部で「く」の字状に折れる器形の浅鉢である。器面は両面とも研磨調整を横方向にしている。437は口縁部が外に開き、内側に沈線で段を付け、頸部と肩部で「く」の字状に折れる器形の浅鉢である。器面は両面とも研磨調整で横方向にみられる。

XXⅢ類 (438~486)

この類は縄文時代晩期中葉に位置する土器群である。

XXⅢ類の分布

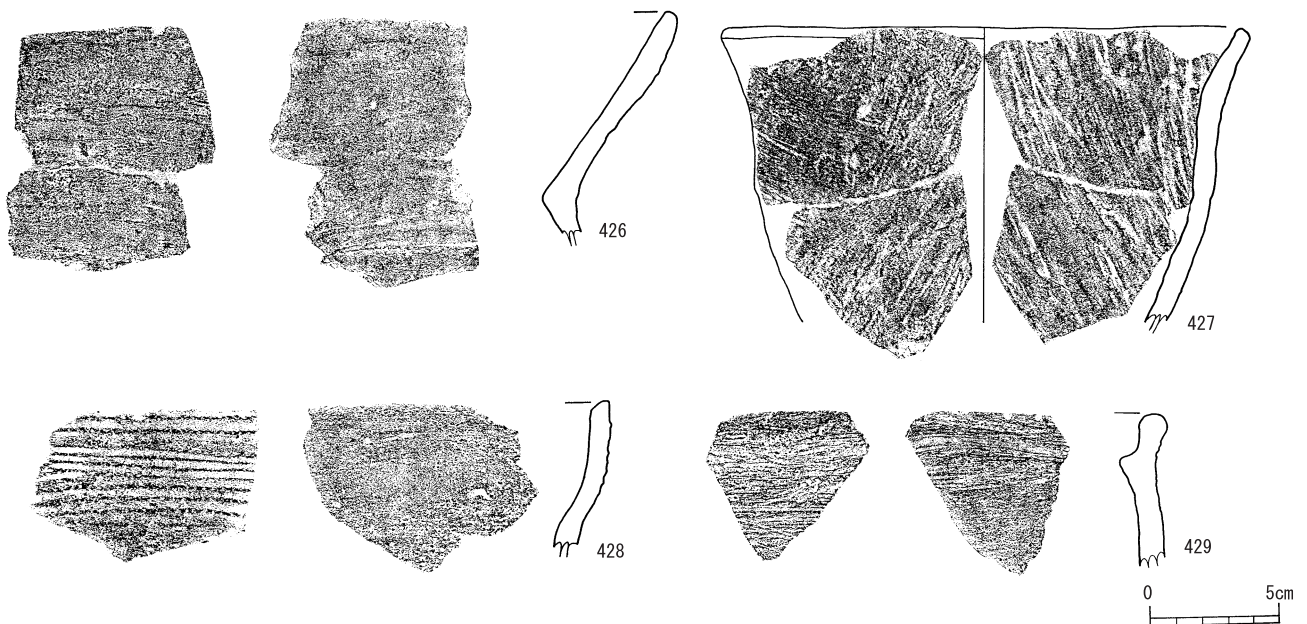
この類は北部微高地に集中して分布し、南部舌状微高地はア・イ-28区に集中し、ほかは散布状態である。

438~440は口縁端部でやや開くが直に向く深鉢の口縁部である。この中で438はひれ状突起を口唇部に付けている。439には補修孔がみられる。これらの器面調整は篋状条痕が横方向にみられる。441は内向する深鉢の口縁部である。器面調整は横方向の篋状条痕である。442は口径40cmで、口縁部が直に立ち、胴部が丸く張る深鉢である。器面調整は篋状条痕をやや撫でている。443は口径31.2cm、底部欠損で器高22cmの深鉢である。口縁部は内向しているが口縁端部は外反している。頸部はやや締め、胴部は丸く張る器形である。器面調整は篋状工具で施した篋状条痕が横方向にみられる。444は内向した深鉢の口縁部である。器面調整は外面が条痕文で、内面が撫で調整である。445は直に向いた深鉢の口縁部である。器面調整は篋状工具で施した篋状条痕が縦・斜方向にみられる。446は口径36.4cm、底部欠損で器高24cm

の深鉢である。口縁部は内向し口縁部と肩部に沈線が巡っている。胴部は丸く張る器形である。器面調整は篋状工具で施した篋状条痕が横方向にみられる。447は口縁部が内向する深鉢である。口縁部は内向し沈線が巡り端部はやや肥厚している。器面調整は篋状工具で施した篋状条痕が横方向にみられる。448は肩が張り、口縁部が内向した深鉢である。口縁部には沈線が巡り端部はやや肥厚している。器面調整は篋状工具で施した篋状条痕が横方向にみられる。

449~455は深鉢の底部である。449は厚手の底部で中央部がやや上げ底である。器面には条痕文が一部みられる。450は厚手の土器で上げ底である。451は厚手の土器で浅い上げ底である。452は中央部がやや上げ底である。453は厚手の土器で平底である。454は厚手の張り出しのある土器で平底であるが、充実に作成した時の縁がみられる。455は厚手の土器で張り出しのある平底である。全体的に器面は撫で調整である。

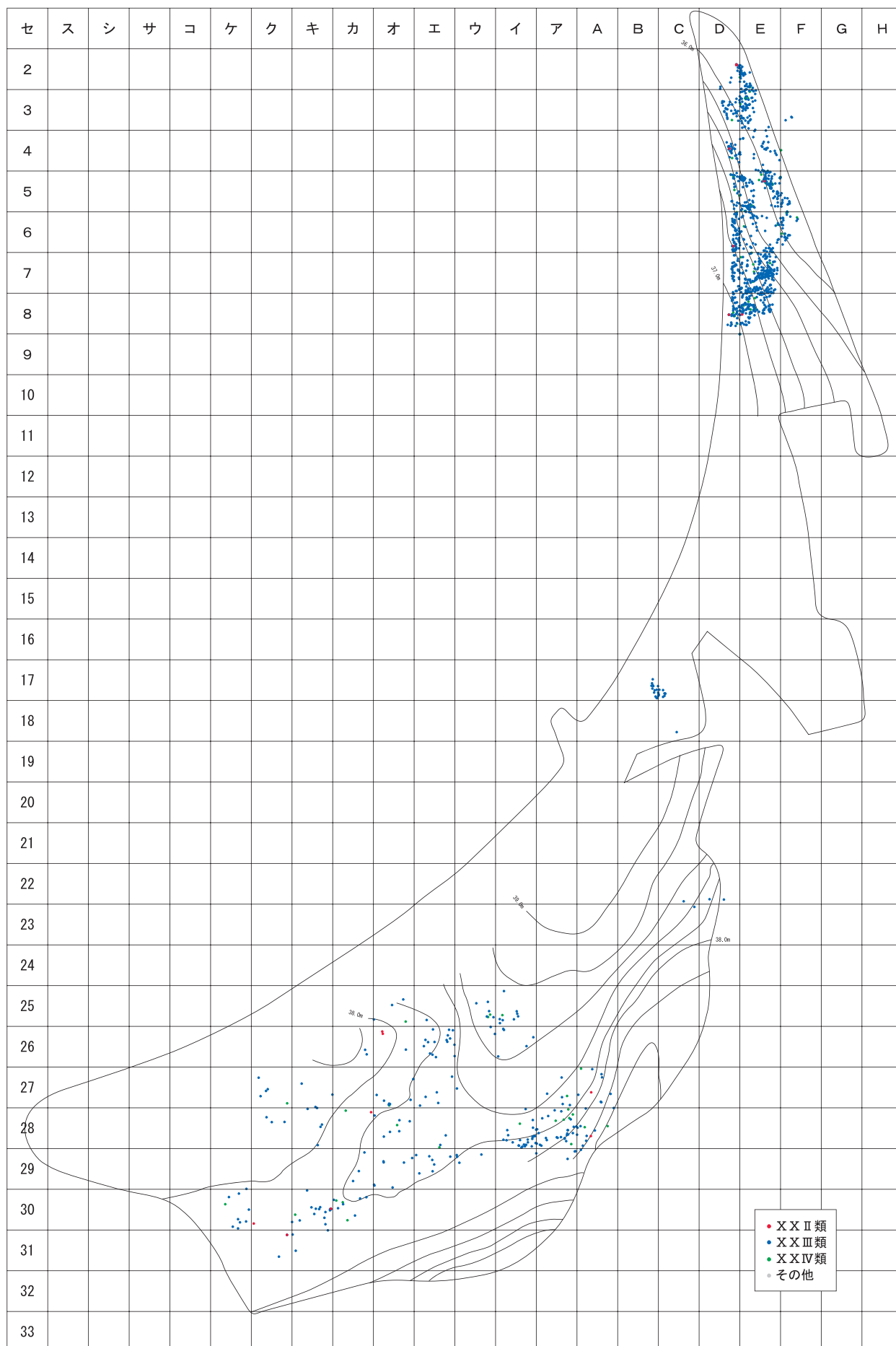
456~469は浅鉢である。456は口径36.4cmで、外反する口縁部である。口唇部は断面が円形で、ひれ状突起を付けている。器面調整は横研磨である。457は口径27.6cmで、頸部で「く」の字に折れ、外反する口縁部をもつ浅鉢である。口唇部は断面が円形で、ひれ状突起を付けている。器面調整は横研磨である。458は口径17.6cmで、外反する口縁部である。口唇部は断面が円形で、山形口縁である。口縁部には沈線が施され丹塗りされている。器面調整は横研磨である。459は口径30.8cmで、頸部と肩部が短い段がつき、そこから口縁部は外に開いている。また、口唇部は少し肥厚している。器面調整は横方向の研磨である。460は口径27.2cmで459と同形であるが、口縁部内側に沈線が施さ



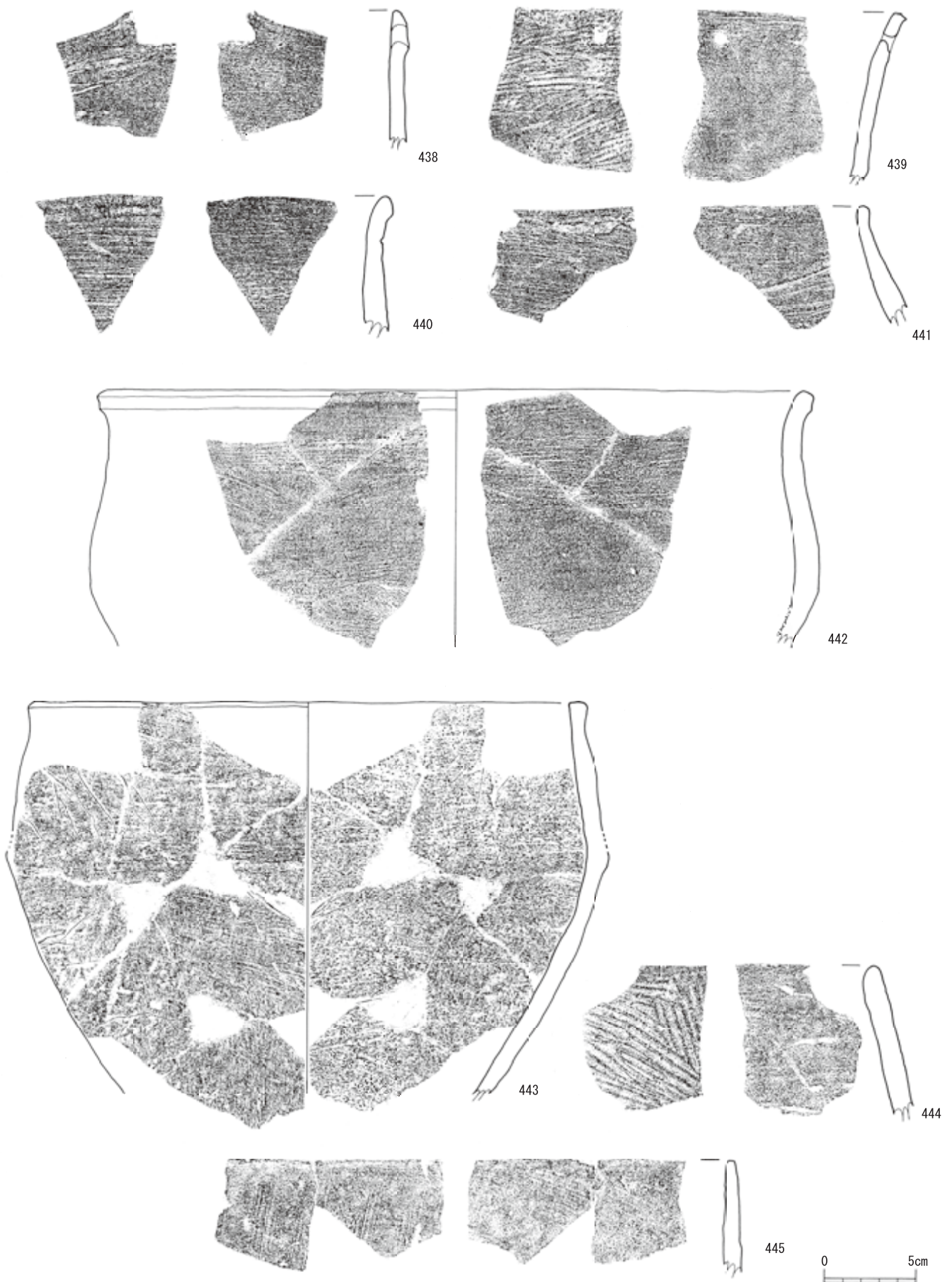
第92図 縄文時代の土器41 (XXⅡ類①)



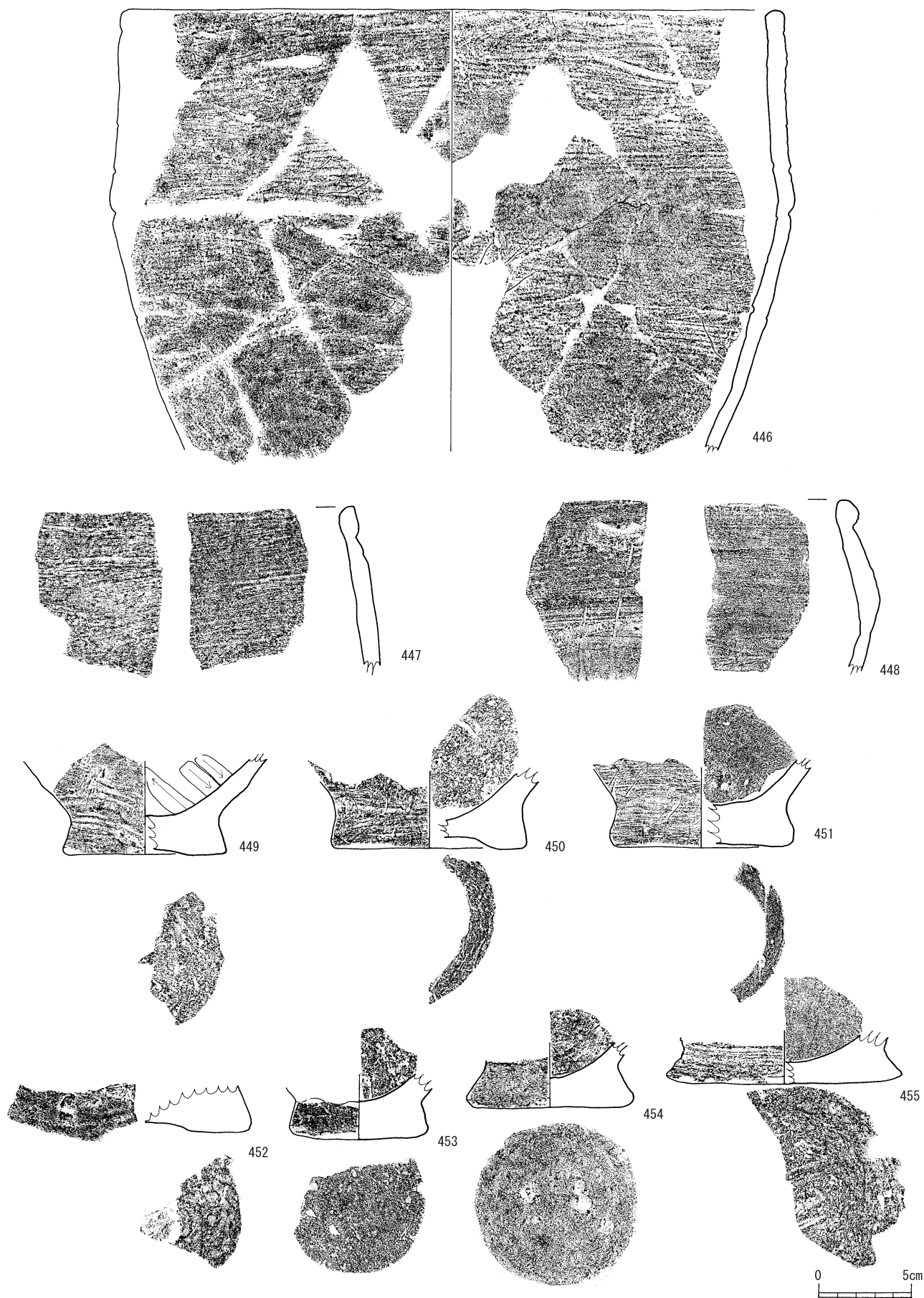
第93図 縄文時代の土器42 (XXII類②)



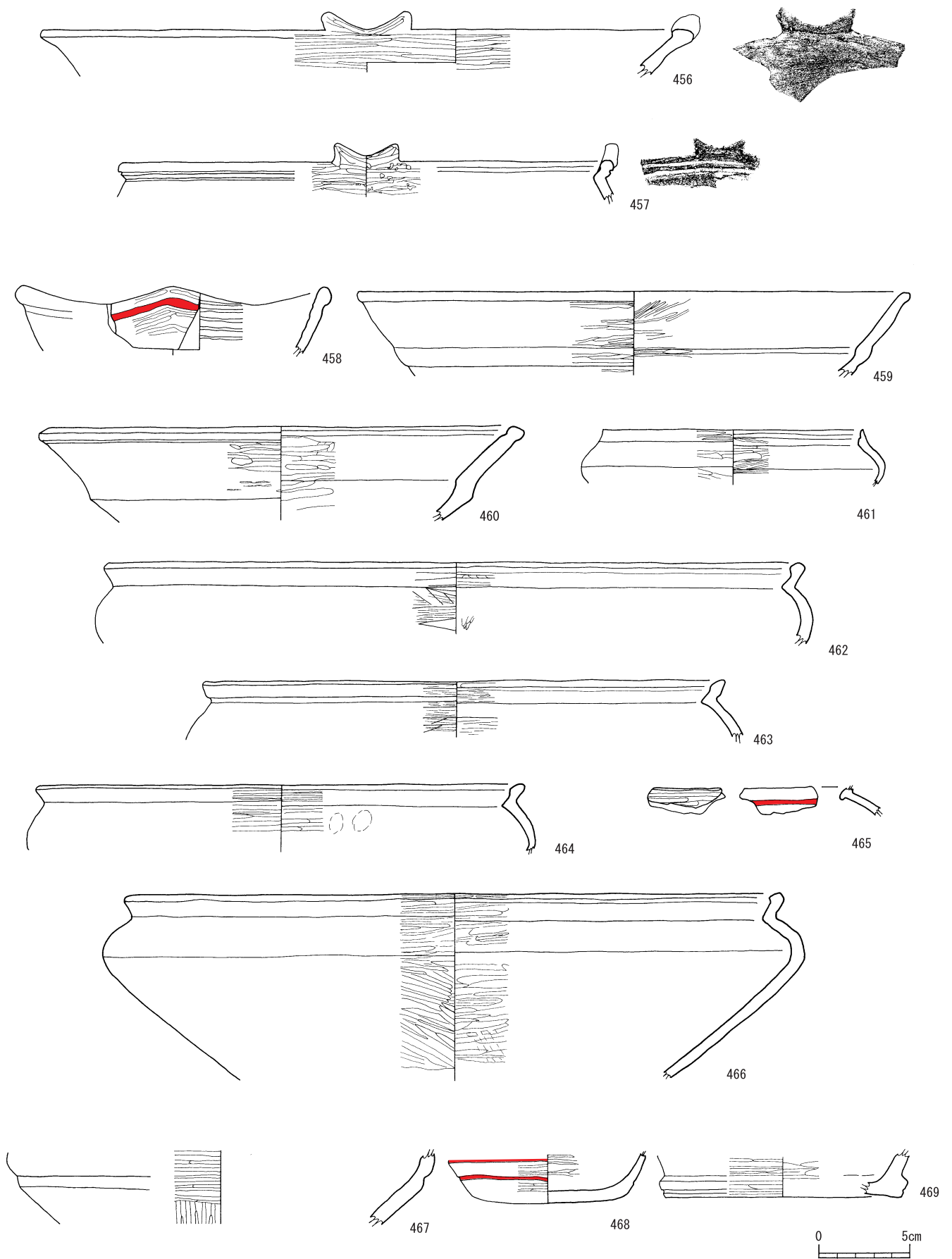
第94図 縄文時代の土器出土分布図12 (XXII, XXIII, XXIV類)



第95図 縄文時代の土器43 (X X III類①)



第96図 縄文時代の土器44 (X X Ⅲ類②)



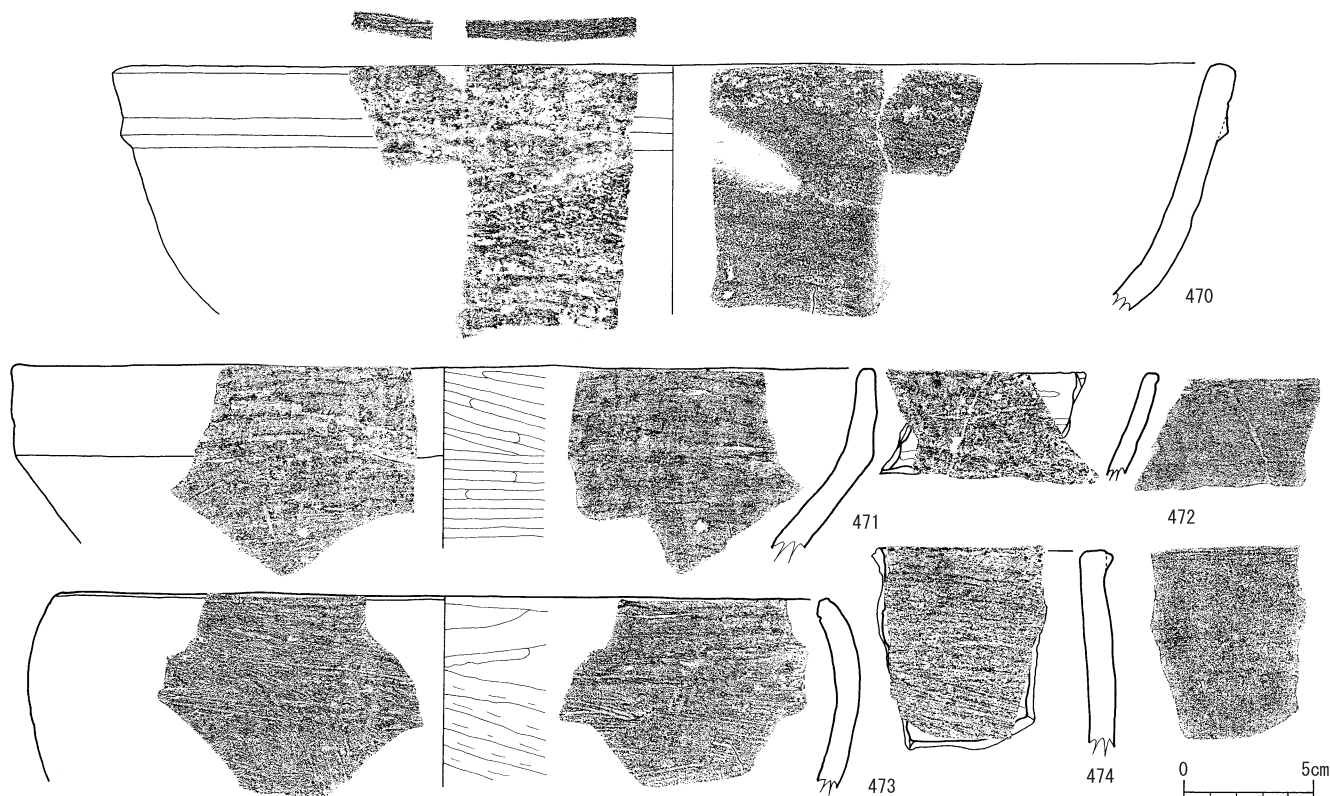
第97図 縄文時代の土器45 (X X Ⅲ類③)

れている。461は絞った頸部から丸く張った胴部である。器面調整は横方向の研磨である。462は口径38.6cmで、「く」の字状の頸部から口縁部は短く外向し、肩・胴部は大きく張り、丸みを呈している浅鉢である。器面調整は横方向の研磨である。463は口径30.1cmで、「く」の字状の頸部から口縁部は短く外向し、肩部は大きく張り、丸みを呈している浅鉢である。器面調整は横方向の研磨である。464は口径24.8cmで、「く」の字状の頸部から口縁部は短く外向し、肩部は大きく張り、丸みを呈している浅鉢である。器面調整は横方向の研磨である。465は沈線が朱塗り、前の形態と類似している土器である。466は口径36.8cm、底部欠損器高10.5cmで、「く」の字状の頸部から口縁部は短く外向し、肩・胴部は大きく張り、丸みをもち底部へは直線的に呈している浅鉢である。器面調整は横・斜方向の研磨である。467は厚手の浅鉢である。468はやや丸みのある平底である。底面のすぐ上には沈線が1本施されている。器面調整は横方向の研磨である。469は厚い張り出しのある浅鉢の底部である。張り出し部には沈線が1本施されている。器面調整は横方向の研磨である。

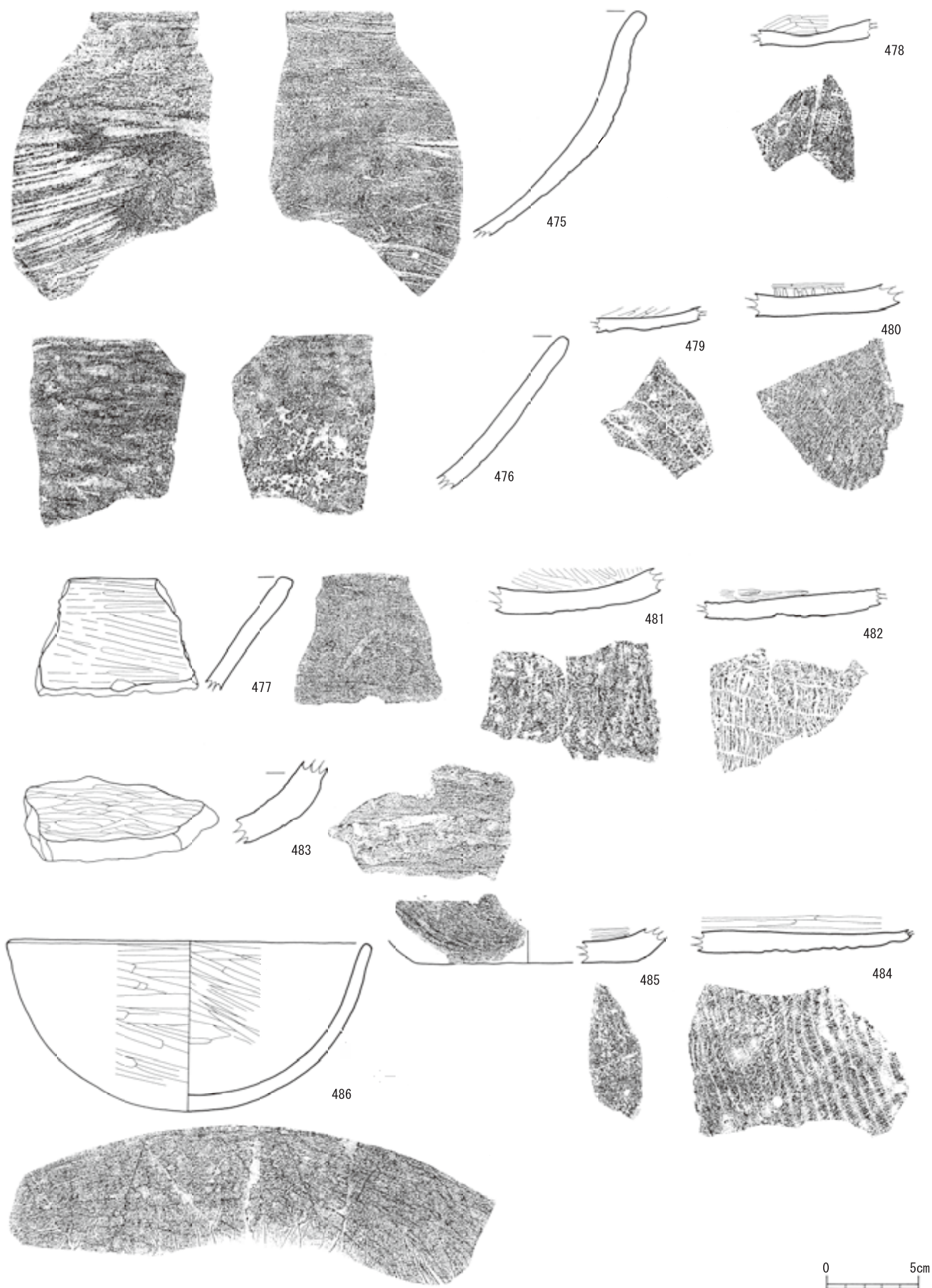
470～486は食器のボールと類似した浅鉢である。以後ボール型浅鉢とする。この土器は外面が粗く調整し、内面は研磨調整をしているのが特徴である。470は口径44.2cm、底部欠損器高約10cm強で、口縁が外に開いたボール状の器形である。外面は粗く調整し、内面は横研磨調整をしている。一見、土鍋を連想する。471は口径

34cm、底部欠損器高約8cm強で、口縁が「く」の字状になり外に開いたボール状の器形である。外面は粗く調整し、内面は横研磨調整をしている。472は口縁が外に開いたボール状の器形である。外面は粗く調整し、内面は横研磨調整をしている。473は口径30.2cm、口縁が内を開いたボール状の器形である。外面は粗く調整し、内面は丁寧な撫で調整をしている。474は口縁が直に立ったボール状の器形である。外面は粗く調整し、内面は横研磨調整をしている。475は底部欠損器高約13cmで、口縁が外反したボール状の器形である。外面は粗く調整し、内面は横研磨調整をしている。476は底部欠損器高約9cmで、口縁が外に開いたボール状の器形である。外面は粗く調整し、内面は横研磨調整をしている。477は口縁が外に開いたボール状の器形である。外面は粗く調整し、内面は横研磨調整をしている。

478はボール型浅鉢の底部である。外面は細かい布目圧痕がある。内面は研磨調整をしている。479はボール型浅鉢の底部である。外面は幅の広い布目圧痕がある。内面は研磨調整をしている。480はボール型浅鉢の底部である。外面は細かい布目圧痕の上を撫で調整した痕跡がある。内面は研磨調整をしている。481はボール型浅鉢の底部である。外面は幅の広い布目圧痕があり縁は撫で調整がみられる。内面は研磨調整をしている。482はボール型浅鉢の底部である。外面は幅の広い布目圧痕がある。内面は研磨調整をしている。483はボール型浅鉢の底部の縁である。外面には撫で調整痕がある。内面は



第98図 縄文時代の土器46 (XXⅢ類④)



第99図 縄文時代の土器47 (X X Ⅲ類⑤)

研磨調整をしている。484はボール型浅鉢の底部である。外面は広い布目圧痕がある。内面は研磨調整をしている。485はボール型浅鉢の底部の縁である。外面には撫で調整痕がある。

486は半球状の器形である。器面調整は両面とも研磨が施されている。これはマリと呼ばれている土器である。

以上が晩期中葉の土器である。

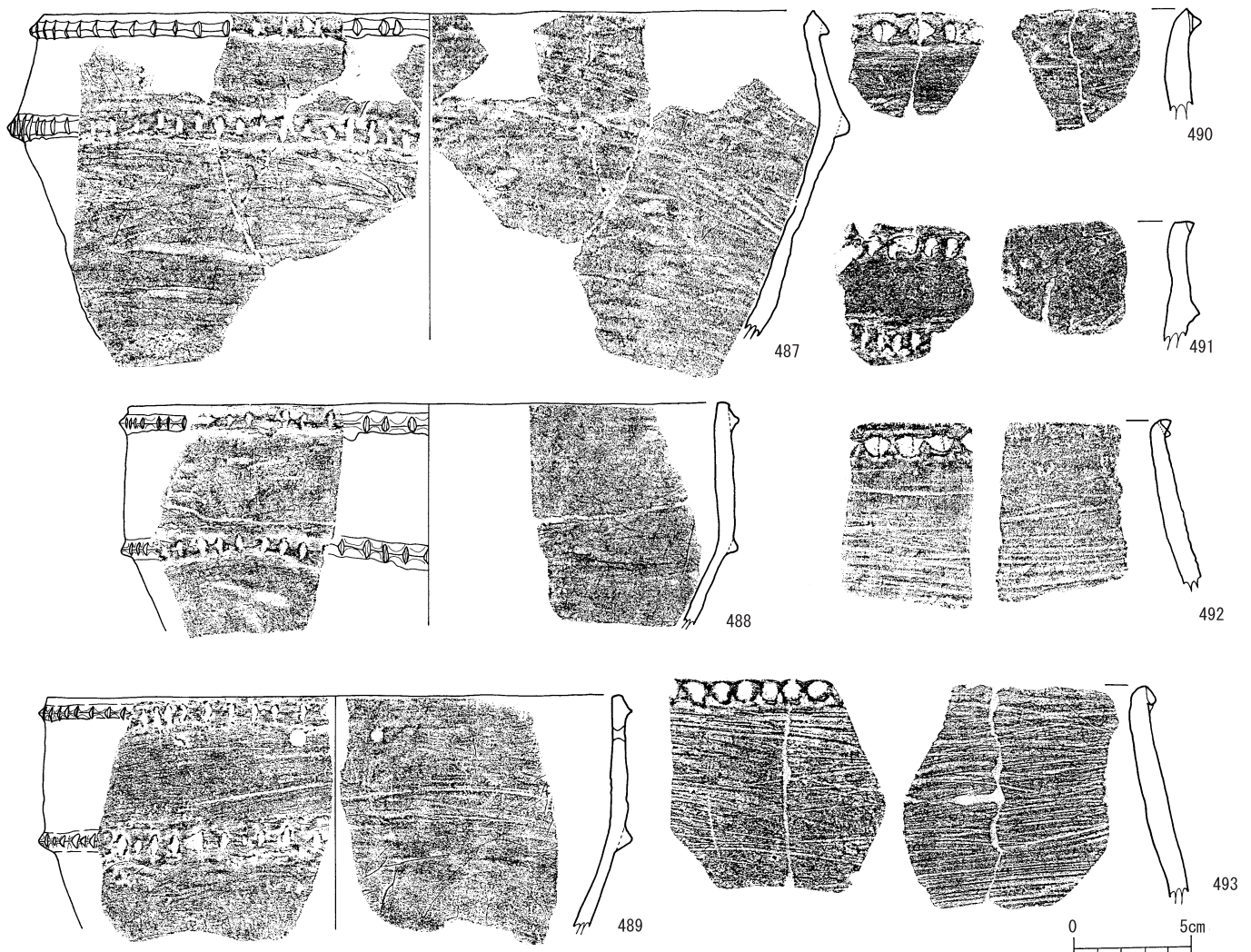
XXIV類 (487～505)

この類は晩期後葉の土器でいわゆる刻目突帯文土器である。487は口径33.6cmで「く」の字に折れる頸部をもつ深鉢である。口縁部は内向し、口縁端部に刻目突帯文を施す。また肩部にも刻目突帯文を施す。器面調整は丁寧な窺撫である。488は口径26cmで「く」の字に折れる頸部をもつ深鉢である。口縁部は直に立ち、口縁端部に刻目突帯文を施す。また肩部にも刻目突帯文を施す。器面調整は丁寧な窺撫である。489は口径25cmで「く」の字に折れる頸部をもつ深鉢である。口縁部は直に立ち、口縁端部に刻目突帯文を施す。また肩部にも刻目突帯文を施す。器面調整は丁寧な窺撫である。

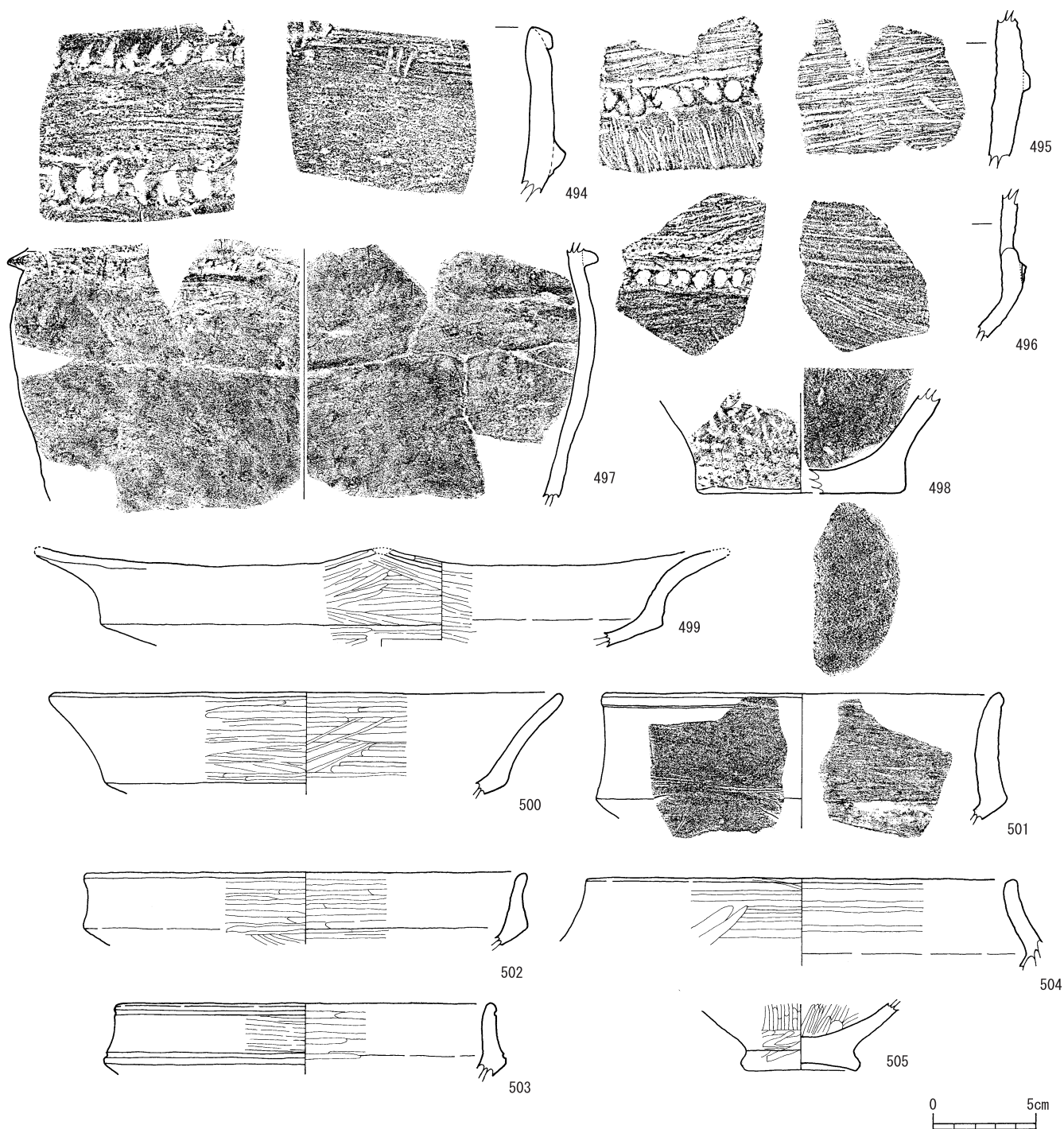
490・491は直に立った口縁部である。492・493は内向した口縁部である。494は直に立った口縁部である。器面調整は粗い。495～497は刻目突帯文土器の胴部である。497以外は器面調整が粗い。498は平底の底部である。

499～505は浅鉢である。499は山形口縁をなし、頸部と肩部では「く」の字断面をなす。器面調整は両面とも研磨である。500は口径25.6cmで、平坦口縁をなし、肩部では「く」の字断面をなす。器面調整は両面とも研磨である。501は口径20cmで、直に立つ口縁をなし、頸部と肩部では「く」の字断面をなす。器面調整は両面とも研磨である。502は口径22cmで、直に立つ口縁をなし、頸部と肩部では「く」の字断面をなす。器面調整は両面とも研磨である。503は口径18.5cmで、直に立つ口縁をなし、頸部と肩部では「く」の字断面をなす。器面調整は両面とも研磨である。口縁部と肩部に沈線を施す。504は口径21.2cmで、内向する口縁をなし、頸部と肩部では「く」の字断面をなす。器面調整は両面とも研磨である。505は底部でやや上げ底である。器面調整は両面とも研磨である。

以上が晩期後葉の土器である。



第100図 縄文時代の土器48 (XXIV類①)



第101図 縄文時代の土器49（XXIV類②）

分布

XXII類

この類は、北部微高地の南側と南部舌状微高地のエー26区を中心とした所に分布している。

XXIII類

この類は、北部微高地の南側と南部舌状微高地の全体に分布している。

XXIV類

この類は南部舌状微高地の先端部に出土している。

晩期その他（506・507）

この製品は土器片を加工したもの一般にメンコと呼ばれているものである。506は厚さ約1cmの土器片を、円形に近い4×3.9cmの形態に両面から打ち欠き、打ち欠き面は擦っている。器面は条痕が両面ともみられる。507は厚さ約1cmの土器片を、方形に近い1辺が3.5cmの形態に両面から打ち欠き、打ち欠き面は擦っている。器面は撫で調整が両面ともみられる。この2点を器面から分類すると506がXXIII類で507がXXIV類に分けられる。

遺構から出土した遺物 (508～536)

3号集石 (508)

508はカスレ・トギレ突帯でⅧb類である。

5号集石 (509)

509は器面に凹点と凹線があるXⅧ類の土器である。

8号集石 (510)

510は無文でⅦ類である。

12号集石 (511)

511はカスレ・トギレ突帯でⅧb類である。

集石13号 (512・513)

512は微隆起突帯でXⅤ類である。513は刻み目がありⅨ・X類である。

集石15号 (514・515)

514は刺突文でⅨ・X類である。515はボール型浅鉢でXⅩⅢ類である。

集石18号 (516～520)

516・517はミミズバレ突帯でⅧa類, 518は尖り突帯でⅧc類, 519は押引文でⅨe類である。520は刻目文でⅨb類である。

21号集石 (521)

521はトギレ・カスレ突帯でⅧb類である。

27号集石 (522)

522はXⅢb類である。

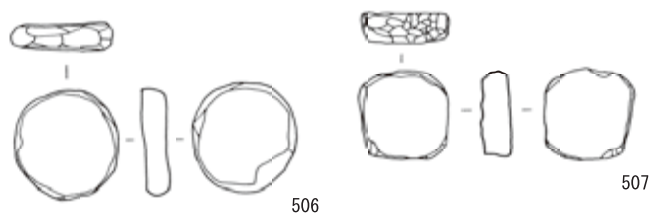
28号集石 (523・524)

523・524はXⅢa類である。

32号集石 (525)

525は尖り突帯でⅧc類である。

磨石1号 (526～531)



第102図 縄文時代の土器50 (土製品)

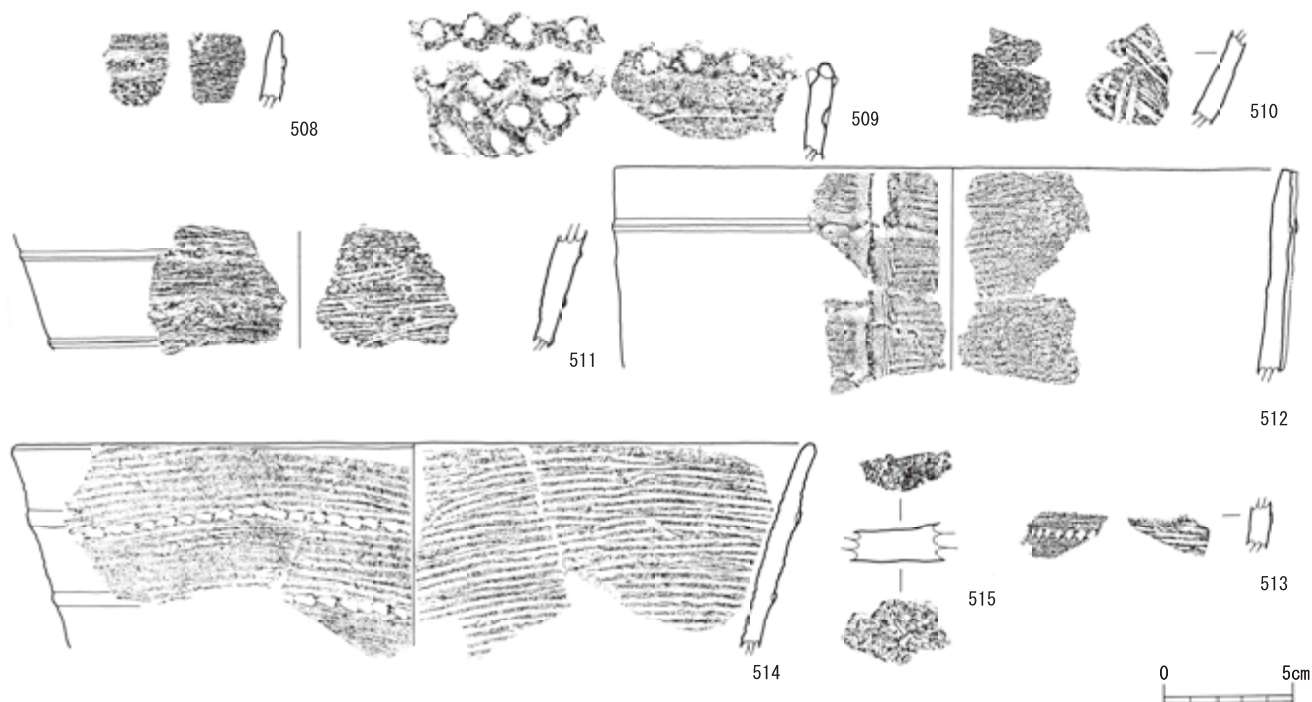
526はカスレ・トギレ突帯でⅧb類, 527は刻み目突帯でXb類, 528は尖り突帯でⅧc類, 529は横刺突文と多条尖り突帯でXa類, 530は押引文でⅨe類, 531は刻み目突帯でⅨ・X類である。

石斧集石 (532～534)

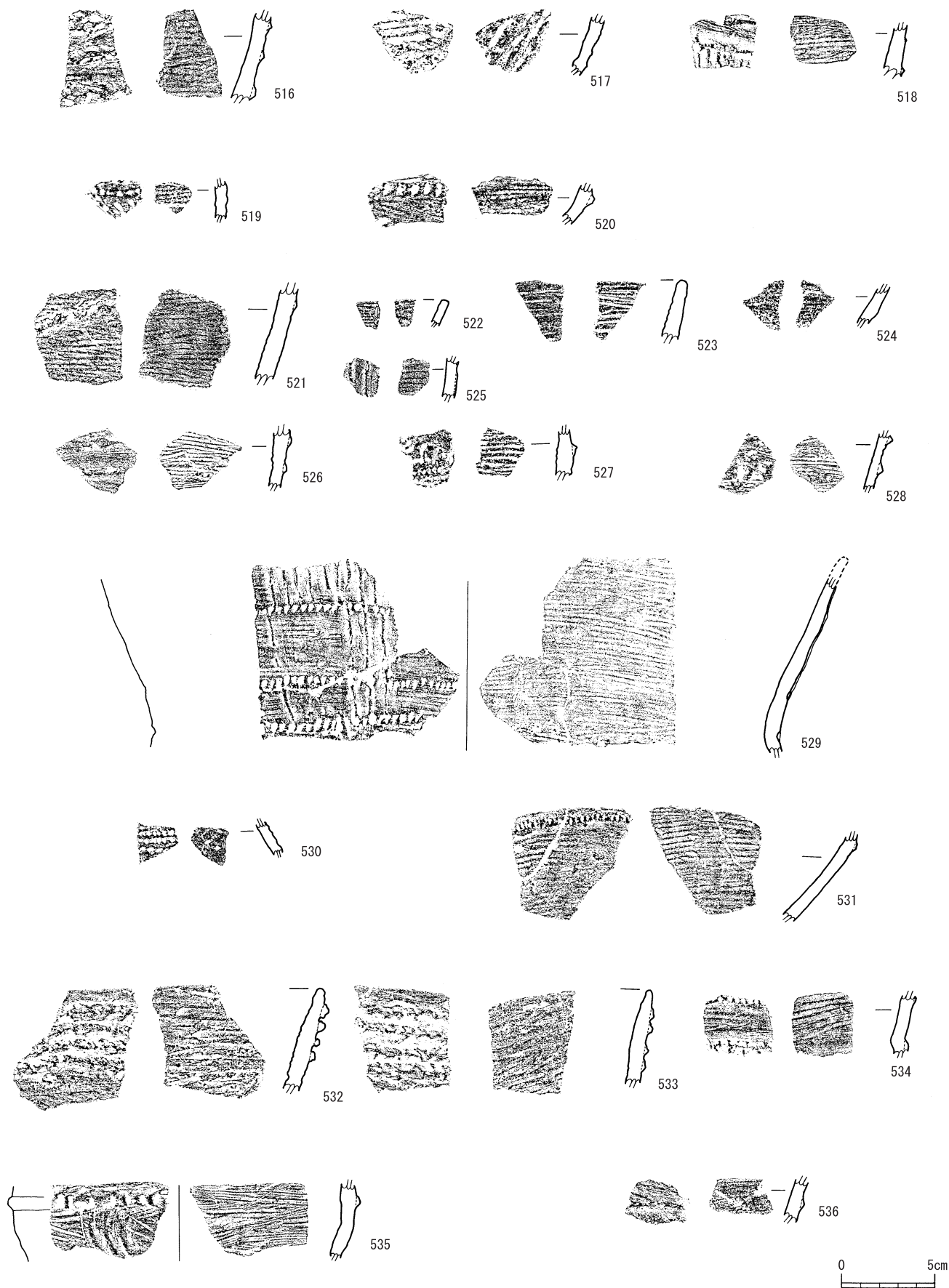
532・533はミミズバレ突帯でⅧa類, 534は横刺突文と刻み目突帯でⅨb類である。

剥片デボ (535・536)

535は刻み目突帯と沈線でⅨd類, 536はカスレ・トギレ突帯でⅧb類である。



第103図 縄文時代の土器51 (遺構内出土①)



第104図 縄文時代の土器52（遺構内出土②）

第7表 縄文土器観察表1

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
44	1	深鉢	口縁部	I	刺突文、貝殻条痕→ナデ	ヘラナデ	角閃石、長石、石英、黒雲母	にぶい褐	にぶい褐	良好	21.8			(口唇部) 刻み尖り	ア-27	Ⅲ	11231
	2	深鉢	口縁部	I	刻目突帯、貝殻条痕文	ナデ	石英、小石少混、長石、角閃石	褐	にぶい褐	良好				(口唇部) 尖り	—	—	—
	3	深鉢	胴部	Ⅱ	押型文	ナデ	石英、長石	灰黄	オリーブ黒	良好					オ-29	Ⅲ	4041
	4	深鉢	口縁～胴部	Ⅱ	刻目突帯、押型文	ナデ	石英、長石、雲母	オリーブ黒	灰黄褐	良好					ア A - 21 ~ 28	Ⅲ	一括
	5	深鉢	胴部	Ⅱ	押型文、沈線	ヘラナデ	長石、石英、角閃石	にぶい褐	黄灰	良好					ア A - 21 ~ 28	Ⅲ	一括
	6	深鉢	口縁部	Ⅲ	刻目突帯、沈線	ナデ	石英、長石、角閃石	灰褐	暗灰黄	良好	21.0			(口唇部) 刻み	BC - 21 ~ 28	Ⅲ	—
	7	深鉢	胴部	Ⅲ	沈線、刺突文、ナデ	条痕文、ナデ	軽石、石英	明黄褐	にぶい黄橙	良好					A - 27	Ⅲ	10543
	8	深鉢	胴部	Ⅲ	刻目突帯、沈線、ナデ	ナデ	石英、長石	にぶい黄褐	にぶい赤褐	良好					—	—	—
	9	深鉢	胴部	Ⅲ	連点、沈線	ナデ	石英、長石、黒雲母	にぶい黄褐	赤褐	良好					イ-31	Ⅲ	一括
	10	深鉢	口縁部	Ⅳ	刻目突帯、沈線	ナデ	石英、長石、角閃石	にぶい橙	にぶい黄橙	良好					ク-31	Ⅲ	4447
	11	深鉢	口縁部	Ⅳ	刻目突帯、沈線、ナデ	ナデ	石英、長石、雲母	にぶい褐	褐	良好					ケ-30	Ⅲ	7430
	12	深鉢	口縁部	Ⅳ	刻目突帯、貝殻条痕文	ナデ	石英、長石、黒雲母	橙	にぶい橙	良好				(口唇部) 刻み	キ-30	Ⅲ	5012
	13	深鉢	口縁部	Ⅳ	沈線、ナデ	ナデ	石英、長石、黒雲母	にぶい橙	にぶい橙	良好					キ-30	Ⅲ	—
	14	深鉢	頸部	Ⅳ	沈線、ナデ、刻目突帯	ナデ	石英、小石1mm	暗赤褐	にぶい赤褐	良好					オ-28	Ⅲ	6410
	15	深鉢	底部	Ⅳ	刻目突帯、沈線、ナデ	ナデ	石英、長石、輝石	黒	にぶい黄橙	良好					ア A - 21 ~ 28	Ⅲ	一括
	16	深鉢	胴部	Ⅳ	ヘラミガキ	ナデ	石英、長石	にぶい橙	褐灰	良好		10.6			イ-27	Ⅲ	11283
	17	深鉢	胴部	Ⅳ	ヘラミガキ、沈線	貝殻条痕文	石英、長石	黄灰	暗灰黄	良好					イ-27	Ⅲ	11281
45	18	深鉢	口縁～胴部	V	条痕の格子文、刺突文	ナデ	石英、長石、雲母、小石2～5mm	にぶい黄橙	にぶい黄橙	軟質	30.6				ウ-30	Ⅲ	一括
	19	深鉢	口縁部	V	ヘラナデ、貝殻条痕文	ヘラナデ	石英、長石、黒雲母、小石2～6mm	灰	オリーブ	軟質					ウ-31	Ⅲ	—
	20	深鉢	口縁部	V	貝殻押引文、条痕の格子文	ヘラナデ	石英、長石、小石1～2mm 輝石	灰黄褐	灰黄褐	良好	15.6				ア A - 21 ~ 28	Ⅲ	一括
	21	深鉢	頸部	V	貝殻刺突連続文、貝殻条痕文	ヘラナデ	石英、雲母、長石	にぶい橙	にぶい橙	良好					イ-27	Ⅲ	11159 11160 11288 11296
	22	深鉢	頸～胴部	V	ヘラナデ、貝殻押引文、貝殻条痕文	ヘラナデ	石英、長石、雲母	黄灰	黄灰	良好				補修孔	イ-27	Ⅲ	11281 11282 11290 11291
	23	深鉢	胴部	V	ヘラナデ、貝殻押引文、貝殻条痕文、沈線	ヘラナデ	石英、長石、黒雲母、小石1～5mm	にぶい黄橙	にぶい黄橙	不良					ウ-31	Ⅲ	一括
	24	深鉢	胴部	V	貝殻押引文、貝殻条痕文	貝殻条痕→ナデ	石英、長石、雲母	にぶい黄橙	にぶい褐	不良					BC - 21 ~ 28	Ⅲ	—
	25	深鉢	胴部	V	貝殻押引文、貝殻波状文	ナデ	石英、長石、黒雲母、小石1～3mm	にぶい黄橙	浅黄	不良					E - G - 13、14	Ⅲ a	—
	26	深鉢	胴部	V	貝殻押引文、貝殻条痕文	ヘラナデ	石英、長石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好					BC - 21 ~ 28	Ⅲ	—
	27	深鉢	胴部	V	貝殻刺突連続文	ヘラナデ	軽石、石英	にぶい黄橙	褐灰	良好					BC - 21 ~ 28	Ⅲ	P1
	28	深鉢	胴部	V	貝殻条痕文	ヘラケズリ	小石1～3mm、石英、長石、雲母	橙	にぶい褐	良好					—	—	—
	29	深鉢	胴部	V	貝殻条痕文	横ナデ	長石、石英、輝石、小石少混	橙	にぶい黄橙	良好					BC - 21 ~ 28	Ⅲ	P1
	30	深鉢	胴部	V	刺突文、貝殻条痕文	ヘラナデ	石英、長石、輝石、角閃石	にぶい橙	にぶい黄橙	良好					オ-カ-29 ~ 32	Ⅲ	一括
	31	深鉢	胴部	V	貝殻条痕文、刻目突帯	ナデ	石英、長石、角閃石、黒雲母、小石1～6mm	橙	明褐灰	不良					ウ-30	Ⅲ	—
	32	深鉢	胴部	V	刻目突帯、貝殻条痕文	ナデ	長石、石英、角閃石、黒雲母、小石1～2mm	にぶい褐	にぶい褐	良好					イ-30	Ⅲ	—
46	33	深鉢	胴部	V	貝殻条痕文	ナデ	石英、長石、角閃石、小石1～3mm	橙	にぶい褐	良好					イ-30 ウ-31	Ⅲ	— 一括
	34	深鉢	胴～底部	V	ナデ、貝殻条痕文	ナデ	石英、長石、雲母、小石1～3mm	橙	灰褐	良好					イ-30	Ⅲ	—
	35	深鉢	底部	V	ヘラナデ	ヘラナデ	石英、長石、黒雲母	にぶい橙	灰褐	軟質	11.8				—	—	—
	36	深鉢	底部	V	ヘラナデ	ヘラナデ	石英、長石、雲母、小石1～5mm	にぶい橙	にぶい黄橙	軟質	13.6				ウ-31	Ⅲ	一括
	37	深鉢	底部	V	ナデ	ヘラナデ	長石、雲母、小石1～3mm	明赤褐	にぶい褐	軟質	8.1				イ-30	Ⅲ	一括
	38	深鉢	底部	V	ナデ	ヘラナデ	石英、長石、雲母	明赤褐	にぶい黄橙	軟質	18.0				ウ-31	Ⅲ	一括
	39	深鉢	口縁部	Ⅵ a	ヘラナデ、貝殻条痕文	ヘラナデ	長石、石英、雲母、小石1～4mm	にぶい褐	にぶい橙	良好				(外面) 煤、(口唇部) 刻み	ウ-30	Ⅲ	一括
	40	深鉢	胴部	Ⅵ a	貝殻条痕文、横刻み	ヘラナデ	石英、長石、雲母、小石1～3mm	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好					I - 30	Ⅲ	—
	41	深鉢	胴部	Ⅵ a	貝殻条痕文	ヘラナデ	石英、長石、雲母、小石1～2mm	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好					—	—	—
	42	深鉢	胴部	Ⅵ b	条痕の格子文	条痕→ナデ	石英、長石、角閃石	にぶい黄橙	黄灰	良好					ア A - 21 ~ 28	Ⅲ	一括
48	43	深鉢	口縁～胴部	Ⅶ	条痕文	条痕文、ケズリ	石英、長石、小石1～3mm	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	40.5			(外面) 煤付着	カ-27 ~ 29	Ⅲ	5895 8006 5893 5896 6788 3031 5131 5117
	44	深鉢	口縁部	Ⅶ	条痕→ナデ、刻目突帯	条痕→ナデ	長石、雲母、小石1～2mm	オリーブ黒	黒褐	良好				(口唇部) 刻み目	オ-29	Ⅲ	7896
	45	深鉢	口縁部	Ⅶ	条痕文、刺突文	ヘラケズリ	石英、長石、小石1～3mm	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好				(口唇部) 刻み目	カ-27	Ⅲ	5866
	46	深鉢	口縁部	Ⅶ	条痕文、刻目突帯	条痕文	石英、長石、雲母、小石1～2mm	にぶい橙	にぶい黄橙	良好				(口唇部) 刻み目	ア A - 21 ~ 28	Ⅲ	一括
	47	深鉢	口縁部	Ⅶ	条痕文、刻目突帯	条痕文	長石、小石1～2mm	黒	黒褐	良好				(口唇部) 刻み目	カ-27	Ⅲ	5907
	48	深鉢	口縁部	Ⅶ	刻目突帯、条痕文	条痕文	小石1～3mm	橙	橙	良好				(内面) 一部剥離	カ-27	Ⅲ	5867

第8表 縄文土器観察表2

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
49	49	深鉢	口縁～胴部	Ⅶ	条痕文、格子文、横刻み、刻目突帯	条痕文、ケズリ	石英、長石、小石1～3mm	にぶい黄橙	暗灰黄	良好	28.0			(口唇部) 刻み目	ウ-31	Ⅲ	一括
	50	深鉢	口縁部	Ⅶ	条痕文、刻目突帯	条痕文	石英、長石、黒雲母、小石2mm	灰褐	灰黄褐	良好				(口唇部) 刻み目			—
	51	深鉢	口縁部	Ⅶ	条痕文、刻目突帯	条痕文	小石1～3mm	橙	にぶい黄橙	良好					エ-28	Ⅲ	8132
	52	深鉢	口縁部	Ⅶ	刻目突帯、条痕文、刻み	沈線、条痕文	石英、長石、雲母、白色小石少混1mm	黒褐	灰褐	良好				(外面) 煤付着	カ-28	Ⅲ	6806
	53	深鉢	口縁部	Ⅶ	条痕文、刻目突帯	条痕文	石英、長石、黒雲母、小石3mm	黒褐	暗灰黄	良好					エ-27	Ⅲ	5583
	54	深鉢	胴部	Ⅶ	ヘラナデ、刻目突帯	条痕→ナデ	石英、長石、雲母	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好					エ-28		5507
	55	深鉢	胴～底部	Ⅶ	条痕文	ケズリ、条痕文	石英、長石、小石1～3mm	にぶい黄橙	にぶい黄	良好					ウ-31	Ⅲ	一括
	56	深鉢	胴部	Ⅶ	条痕文	条痕→ナデ	石英、長石、角閃石、黒色小石少混	橙	褐灰	良好					カ-28	Ⅲ	6486
	57	深鉢	底部	Ⅶ	ナデ	ヘラケズリ	石英、長石	にぶい橙	黒	良好					ウ-31	Ⅲ	一括
50	58	深鉢	底部	Ⅶ	条痕文	ナデ	石英、長石、輝石、小石少混	橙	黒	良好					オ-28	Ⅲ	8040
	59	深鉢	底部	Ⅶ	条痕文	ナデ	石英、長石、白色小石少混、赤色小石	にぶい橙	灰黄褐	良好					ケ-30	Ⅲ	4454
	60	深鉢	胴部	Ⅶ	条痕文	ナデ	石英、長石、角閃石、輝石、黒色小石		黒	良好				(内面) 少量煤付着	E～G-15-17	Ⅲ	一括
	61	深鉢	底部	Ⅶ	ヘラナデ	ヘラケズリ	石英、長石、小石2mm	にぶい褐	暗灰黄	良好					オ-29	Ⅲ	一括
	62	深鉢	底部	Ⅶ	条痕文	条痕文	石英、長石、黒色小石少混	にぶい黄橙	黄灰	良好					—	-	—
	63	深鉢	胴部	Ⅶ	条痕文	条痕文	石英、長石、角閃石、黒色小石、小石少混	にぶい黄橙、橙	黄灰	良好					オ-29	Ⅲ	4023
	64	深鉢	胴部	Ⅶ	条痕文	ヘラケズリ	石英、長石、輝石、小石少混	橙	褐灰	良好					オ-28	Ⅲ	一括
	65	深鉢	底部	Ⅶ	条痕文	条痕文	石英、長石、小石4mm	浅黄	黄灰	良好					カ-31	Ⅲ	一括
	66	深鉢	口縁～胴部	Ⅷ a	条痕文、かすれ突帯、とがり突帯	条痕文	チャート、石英、長石、小石多混	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	36.9			(内外) 煤、(口唇部) 刻み	ア-28	Ⅲ	10879 11336 11456 11853 11678 11055 11069 10679
52	67	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕文、ミミズバレ状突帯、押し引き文	条痕文	石英、長石、輝石、小石少混	明赤褐	明赤褐	良好				(口唇部) 刻み	BC-21～28		
	68	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕文、とがり突帯	条痕文	石英、長石、小石2mm	オリーブ黒	暗灰黄	良好				(口唇部) 刻み	A-27	Ⅲ	11278
	69	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕→ナデ、かすれ突帯	条痕文	石英、長石、小石多混	橙、褐灰	にぶい黄橙	良好	36.2			(外面) 少量煤付着	ケ-30	Ⅲ	7404
	70	深鉢	口縁～胴部	Ⅷ a	とがり突帯、条痕文	条痕文	石英、長石、白色小石多混	黒、明褐	にぶい褐	良好	34.0			(外面) 少量煤付着	カ-30	Ⅲ	7628 7569 7568
53	71	深鉢	口縁～胴部	Ⅷ a	条痕文、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、輝石、角閃石	黄橙	にぶい黄橙	良好	41.0				ア-26	Ⅲ	11828 11843
	72	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕文、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、白色小石少混	暗褐	褐	良好				(外面) 少量煤付着	オ-29	Ⅲ	4250
	73	深鉢	胴部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石	灰黄褐	明黄褐	良好					ア A-21～28	Ⅲ	一括
	74	深鉢	胴部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、雲母、輝石	灰黄	にぶい黄	良好				(外面) 煤付着	ア A-21～28	Ⅲ	一括
	75	深鉢	胴部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、雲母、小石少混	にぶい赤褐	にぶい黄褐	良好				(外面) 少量煤付着	オ-29	Ⅲ	4064 5236
	76	深鉢	口縁部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、白色小石	にぶい黄橙、黒褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	エ-28	Ⅲ	8178
	77	深鉢	口縁部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、角閃石、輝石	暗赤褐	褐	良好				(外面) 煤付着	—	-	注記 なし
	78	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕→ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、小石5mm、白色小石少混	浅黄、黒褐	黄灰	良好				(外面) 煤、(口唇部) 刻み	ウ-31	Ⅲ	一括
	79	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕→ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、小石3mm	黒	黒褐	良好					カ-30	Ⅲ	7971
	80	深鉢	口縁部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、赤色小石、黒色小石	赤褐、黒褐	褐	良好	17.2				イ-29	Ⅲ	10950
	81	深鉢	口縁部	Ⅷ a	とがり突帯、ヘラナデ	条痕文、ヘラナデ	石英、長石、白色小石多混	黒褐	黒褐、にぶい黄橙	良好					ア-28		9996 9992
	82	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕文、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、白色小石少混	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	25.6			補修孔(外面) 煤付着	エ-28 エ-29	Ⅲ	8246 5467 4009
	83	深鉢	口縁部	Ⅷ a	ナデ、渦巻き刻み突帯	ナデ	石英、長石、雲母	にぶい褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	エ-28	Ⅲ	8243
	84	深鉢	口縁部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	ナデ	石英、長石、砂粒混、小石3mm	黒褐	黒灰	良好				(外面) 煤付着	オ-29	Ⅲ	5398
	85	深鉢	胴部	Ⅷ a	条痕→ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石	黄灰	黒	良好				(外面) 少量煤付着	カ-30 オ-31	Ⅲ	4859
54	86	深鉢	口縁～胴部	Ⅷ a	条痕文、沈線、突帯	条痕文	石英、長石、輝石、小石少混	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	31.0			(外面) 煤付着	ア-28	Ⅲ	11588 8918 11044 10450 11589 11598 番号なし
	87	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕文、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石	褐灰	にぶい褐	良好	31.0			(外面) 少量煤付着	ア-28	Ⅲ	10206
	88	深鉢	口縁部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、小石5mm、白色小石少混	灰黄褐	にぶい赤褐	良好	23.8				ア-28	Ⅲ	10139
	89	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕文、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、雲母、小石少混	灰黄褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	ウ-29	Ⅲ	3768
	90	深鉢	口縁部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、輝石、小石2mm	灰褐	褐	良好				(外面) 少量煤付着	ア-28	Ⅲ	10209
	91	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕文、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、輝石、白色小石少混	灰黄褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	ア-28	Ⅲ	11496
	92	深鉢	口縁部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、赤色小石、白色小石多混	暗褐	褐	良好					C-5	V	2410
	93	深鉢	口縁部	Ⅷ a	ミミズバレ状突帯、押し引き文	条痕文	石英、長石、白色小石少混	にぶい黄褐	にぶい褐	良好				(口唇部) 刻み			注記なし
	94	深鉢	口縁部	Ⅷ a	ナデ、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、白色小石少混	にぶい橙、黒褐	にぶい橙	良好	26.4			(外面) 煤付着	オ-31	Ⅲ	一括
55	95	深鉢	口縁部	Ⅷ a	条痕文、ミミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石	灰褐	褐	良好					ア-28	Ⅲ	9041
	96	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕文、かすれ・とぎり突帯	条痕文	石英、長石、白色小石少混	黒褐	橙	良好	33.3				9T	V	496 注記なし
	97	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕→ナデ、かすれ・とぎり突帯	条痕→ナデ	石英、長石、白色小石少混	暗灰黄	橙	良好				(外面) 煤付着	ア-27	Ⅲ	9460
	98	深鉢	口縁部	Ⅷ b	かすれ・とぎり突帯、条痕→ナデ	条痕→ナデ	石英、長石、小石5mm、赤色小石	灰黄褐	橙	良好	22.8			(外面) 煤付着	ア-28	Ⅲ	10020 10228 11482

第9表 縄文土器観察表3

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
55	99	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕→ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕→ナデ	石英, 長石, 小石多混	褐	にぶい橙	良好				(口唇部) 刻み	オ-29	Ⅲ	5843
	100	深鉢	口縁部	Ⅷ b	ナデ, 条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 輝石, 白色小石	灰黄褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	—	—	—
	101	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 小石少混	灰黄褐	橙	良好					—	—	注記なし
	102	深鉢	口縁部	Ⅷ b	かすれ・とぎれ突帯, 条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母	黒褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	ウ-28	—	7128
	103	深鉢	口縁部	Ⅷ b	かすれ・とぎれ突帯, 条痕文	条痕文	石英, 長石, 小石少混	黒褐	黒褐	良好				(内外) 煤付着	エ-27	Ⅲ	5623
	104	深鉢	口縁部	Ⅷ b	かすれ・とぎれ突帯, 条痕文	条痕文	石英, 長石, 白色小石少混	黄灰	にぶい黄橙	良好					ウ-28	Ⅲ	7069
	105	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石	黒褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	—	—	注記なし
	106	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕→ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕→ナデ	石英, 長石, 雲母, 白色小石, 赤色小石	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良好	18.2			(外面) 煤付着	イ-26	Ⅲ	8655
	107	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕→ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕→ナデ	石英, 長石, 赤色小石	黒褐	にぶい黄橙	良好				(口唇部) 刻み	ア-29	Ⅲ	11671
	108	深鉢	頸部	Ⅷ b	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 角閃石, 雲母	オリーブ黒	にぶい橙	良好				(外面) 煤付着	ア-28	Ⅲ	10173
	109	深鉢	頸部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	ナデ, 条痕文	石英, 長石, 白色小石少混	オリーブ黒	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	ア-27	Ⅲ	10639
	110	深鉢	頸部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石	にぶい黄橙, 黒褐	にぶい黄橙, 黒褐	良好				(外面) 煤付着	ア-28	Ⅲ	8971
	111	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕→ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕→ナデ	石英, 長石	黒褐	暗灰黄	良好					ア-27	Ⅲ	10079
	112	深鉢	胴部	Ⅷ b	ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石	浅黄	暗灰黄	良好				(外面) 煤付着	ア-20	Ⅲ	10110
56	113	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文, ナデ	石英, 長石, 白色小石, 角閃石	にぶい黄褐	橙	良好					イ-カー-25-28	Ⅳ	一括
	114	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文, ナデ	石英, 長石, 白色小石少混, 赤色小石	黒, にぶい褐	にぶい赤褐	良好					オ-29	Ⅲ	5270
	115	深鉢	口縁～胴部	Ⅷ b	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 角閃石, 輝石	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	30.0			(内外) 煤付着	ア-27	Ⅲ	10625 10619 10622 10623 10621 11380 11325 11326 不明
	116	深鉢	口縁部	Ⅷ b	ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母	灰黄	橙	良好					オ-29	Ⅲ	7918
	117	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕→ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 小石少混, 雲母	褐灰	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	ウ-29	Ⅲ	5330
	118	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 白色小石少混	灰黄褐	灰黄	良好				(外面) 少量煤付着	ア A-21-28	Ⅲ	一括
	119	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, とがり突帯	条痕文, ナデ	石英, 長石, 小石少混	にぶい黄橙	黄灰	良好				(外面) 煤付着(口唇部) 刻み	エ-31	Ⅲ	一括
	120	深鉢	頸部	Ⅷ b	条痕文, かすれ・とぎれ突帯, ナデ	条痕文, ナデ	石英, 長石, 角閃石	灰黄褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	BC-21-28	—	—
	121	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 小石少混	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	キ-30	Ⅲ	5032
	122	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ミガキ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 白色小石多混	灰オリーブ	にぶい黄橙	良好					ア-28	Ⅲ	10049
	123	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文, ナデ	石英, 長石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好					オ-29	Ⅲ	4206
	124	深鉢	胴部	Ⅷ b	かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 角閃石, 小石少混1mm	黒褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	カー-30	Ⅲ	5076
	125	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石	にぶい黄橙	オリーブ黒	良好				(内外) 煤付着	オ-27	Ⅲ	6514
57	126	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 赤色小石, 白色小石少混	灰黄褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 少量煤付着	BC-21-28	Ⅲ	注記なし
	127	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 輝石, 白色小石	褐灰	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	イ-26	Ⅲ	11804 (4個)
	128	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石	黒, にぶい橙	オリーブ黒	良好				(外面) 煤付着	イ-26	Ⅲ	8665 8778
	129	深鉢	胴部	Ⅷ b	ナデ, 条痕文, かすれ・とぎれ突帯	ヘラナデ	石英, 長石, 赤色小石, 小石多混	黒褐	灰黄褐	良好				(外面) 煤付着	カー-31	Ⅲ	一括
	130	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 白色小石少混, 雲母, 砂粒混	にぶい赤褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 少量煤付着	カー-29	Ⅲ	4579
	131	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石	黒褐	橙	良好					9T	V	496
	132	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石	灰黄褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	オ-29	Ⅲ	4124
	133	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ナデ, かすれ・とぎれ突帯	ナデ	石英, 長石, 小石7mm, 雲母, 角閃石	オリーブ黒	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	ア-28	Ⅲ	10202
	134	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕→ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文, ヘラナデ	石英, 長石, 小石5mm, 白色小石少混	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好				(内外) 煤付着	ウ-28	Ⅲ	7203
	135	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕文, ミミズバレイ状突帯	条痕→ナデ	石英, 長石, 小石少混	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	33.4				エ-29 オ-29	Ⅲ	5364 4204
58	136	深鉢	口縁部	Ⅷ b	条痕文, ミミズバレイ状突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良好	30.0			(外面) 煤付着(口唇部) 刻み	ア-28	Ⅲ	10027 9044
	137	深鉢	口縁部	Ⅷ b	ナデ, ミミズバレイ状突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 白色小石少混	黒褐	褐	良好				器面剥離	カー-29	Ⅲ	4617
	138	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕文, ミミズバレイ状突帯	条痕文	石英, 長石	暗赤灰	明赤褐	良好				(外面) 煤付着	ウ-29	Ⅲ	3774 5326
	139	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕→ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕→ナデ	石英, 長石, 砂粒混, 白色小石	褐灰	にぶい黄褐	良好					ア-27	Ⅲ	9454
	140	深鉢	胴部	Ⅷ b	条痕→ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 小石少混	暗灰黄	暗灰黄	良好				(外面) 少量煤付着	ア-27	Ⅲ	11210
	141	深鉢	胴部	Ⅷ b	突帯, 条痕→ナデ	条痕文	石英, 長石, 小石少混	黒褐	灰褐	良好				(外面) 煤付着	A-28	Ⅲ	10304 10305 10307 10360
	142	深鉢	口縁部	Ⅷ c	条痕→ナデ, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石	にぶい黄橙	灰黄	良好					ア A-21-28	Ⅲ	一括
59	143	深鉢	口縁部	Ⅷ c	条痕文, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 白色小石少混	黒褐	暗灰黄	良好					イ-カー-29-32	Ⅲ	一括
	144	深鉢	口縁部	Ⅷ c	とがり突帯, 条痕文	条痕文	石英, 長石, 白色小石, 赤色小石	にぶい黄橙	黄灰	良好					ア-28	Ⅲ	8869
	145	深鉢	口縁部	Ⅷ c	刻目突帯, 条痕文	条痕文	石英, 長石	黄灰	暗灰黄	良好	31.0			(外面) 煤付着	オ-26	Ⅲ	6634 6637
	146	深鉢	胴部	Ⅷ c	条痕→ナデ, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 赤色小石多混, 白色小石	赤褐	にぶい赤褐	良好				(外面) 煤付着	オ-28	Ⅲ	6340
	147	深鉢	口縁部	Ⅷ c	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 白色小石少混	褐灰	にぶい黄橙	良好	27.0			(外面) 煤付着	エ-28	Ⅲ	7208
	148	深鉢	胴部	Ⅷ c	条痕→ナデ, とがり突帯	条痕文	石英, 長石	にぶい黄橙	橙	良好				(外面) 煤付着	カー-29	Ⅲ	7718

第10表 縄文土器観察表 4

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
59	149	深鉢	胴部	VIII c	とがり突帯, 条痕→ナデ	条痕文	石英, 長石, 金雲母	明赤褐	灰褐	良好				(外面) 煤付着	カ-30	III	7662
	150	深鉢	胴部	VIII c	条痕→ナデ, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 白色小石	にぶい黄褐	にぶい黄	良好				(外面) 煤付着	ア-28	III	10119 10121
	151	深鉢	胴部	VIII c	条痕→ナデ, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母	にぶい黄橙	褐灰	良好					オ-29	III	5178
	152	深鉢	胴部	VIII c	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 砂粒混, 白色小石少混	黒褐	黄灰	良好				(外面) 煤付着 (内面) 一部剥離	エ-28	III	5620
	153	深鉢	胴部	VIII c	条痕→ナデ, かすれ突帯	条痕文	石英, 長石, 白色小石	にぶい橙	灰黄褐	良好				(外面) 少量煤付着 (内外) 一部剥離	オ-29	III	5242
	154	深鉢	胴部	VIII c	条痕文, とがり突帯	条痕→ナデ	石英, 長石	橙	灰オリーブ	良好				(外面) 少量煤付着	キ-27	III	5963
	155	深鉢	口縁部	VIII c	かすれ・とぎれ突帯, 条痕文	条痕文	石英, 長石	黒褐	黒褐, にぶい黄橙	良好	23.4			(外面) 煤付着	カ-29	III	5130 5135 5230
	156	深鉢	口縁部	VIII c	条痕文, とがり突帯	条痕文	石英, 長石	赤黒	暗赤灰	良好	27.4			(外面) 煤付着	イ-24 イ-25	III	8342 9820
60	157	深鉢	口縁部	VIII c	条痕→ナデ, とがり突帯	条痕文	石英, 長石	暗灰黄	灰黄褐	良好	28.4			(外面) 煤付着	A-27	III	10552 10555 10600
	158	深鉢	口縁～胴部	VIII c	とがり突帯, 条痕文	条痕文	石英, 長石, 輝石, 白色小石	黒褐	にぶい褐	良好	27.0			(外面) 煤付着	イ-25	III	9660 8843
	159	深鉢	胴部	VIII c	条痕→ナデ, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 赤色小石多混	黒褐	にぶい褐	良好				(外面) 煤付着	オ-28	III	6339
	160	深鉢	胴部	VIII c	条痕→ナデ	条痕→ナデ	石英, 長石, 砂粒混, 小石少混1～5mm	黒褐	にぶい褐	良好				(外面) 煤付着	ク-31	III	4383
	161	深鉢	胴部	VIII c	条痕→ナデ, とがり突帯	条痕文	石英, 長石	灰黄	にぶい黄橙	良好					A-27	III	10595
	162	深鉢	口縁部	VIII c	条痕→ナデ, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 角閃石, 小石4mm 砂粒少混	黄灰	灰黄	良好	27.0			(外面) 煤付着	オ-30	III	7853 4334
	163	深鉢	口縁部	VIII c	とがり突帯, 条痕文	条痕文	石英, 長石	黒褐	灰褐	良好				(外面) 煤付着 風化	オ-28	III	6316
	164	深鉢	胴部	VIII c	条痕文, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 輝石	黒褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	イ-25	III	8836 9660
61	165	深鉢	胴部	VIII c	とがり突帯, 条痕→ナデ	条痕文	石英, 長石	灰黄褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	A-27	III	10599
	166	深鉢	口縁～胴部	VIII c	とがり突帯, 条痕→ナデ	条痕文	石英, 長石	にぶい橙	橙	良好	26.2			(外面) 煤付着	エ-27	III	5777
	167	深鉢	口縁部	VIII c	とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 小石少混	黄灰	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	エ-27	III	5746 7278
	168	深鉢	口縁部	VIII c	とがり突帯, 条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石, 小石少混	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	26.4			(外面) 煤付着	B・C-21～28	III	—
	169	深鉢	口縁部	VIII c	条痕→ナデ	ナデ	石英, 長石, 砂粒多混, 雲母	黒褐	にぶい黄褐	良好	32.6			(外面) 風化 有り	9T	V	710 711 不明
	170	深鉢	口縁部	VIII c	とがり突帯	条痕→ナデ	石英, 長石	黄灰	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	オ-29	III	4032
	171	深鉢	口縁部	VIII c	条痕文, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 白色小石少混	灰黄褐	にぶい黄橙	良好					エ-27	III	5719
	172	深鉢	口縁部	VIII c	とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 角閃石, 小石少混	にぶい橙	にぶい黄橙	良好					オ-28	III	6217
62	173	深鉢	胴部	VIII c	条痕文, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 小石少混, 雲母, 角閃石	にぶい橙	灰黄褐	良好				(内外) 一部剥離	—	—	—
	174	深鉢	胴部	VIII c	条痕→ナデ, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 砂粒少混	黒褐	にぶい黄褐	良好				(外面) 煤付着, 一部剥離	オ-29	III	4228
	175	深鉢	底部	VIII a	ナデ	ナデ	石英, 長石, 輝石, 雲母, 小石2mm	橙	灰黄褐	良好		11.0		(内面) 煤付着	—	—	—
	176	深鉢	底部	VIII a	ナデ	条痕文	石英, 長石, 雲母, 小石少混	褐灰	黒褐	良好				(内面) 煤付着	エ-31	III	一括
	177	深鉢	胴～底部	VIII a	条痕文, ナデ	ナデ	石英, 長石, 雲母, 小石少混	暗灰黄	灰黄褐	良好				(外面) 煤付着	—	—	—
	178	深鉢	底部	VIII b	ナデ	条痕文, ナデ	長石, 石英	にぶい赤褐	にぶい褐	良好				(内外) 少量煤付着	E～G-13～14	—	一括
	179	深鉢	底部	VIII c	条痕文	条痕文	石英, 長石	暗赤褐	暗赤褐	良好				(内外) 煤付着	オ-31	III	一括
	180	深鉢	底部	VIII b	条痕文	条痕文	石英, 長石	にぶい褐	橙	良好					BC-21～28	III	一括
63	181	深鉢	底部	VIII b	条痕文	条痕文	石英, 長石, 輝石, 赤色小石, 白色小石	にぶい橙	灰黄	良好				一部剥離	—	—	—
	182	深鉢	底部	VIII b	条痕文	条痕文	石英, 長石	にぶい橙	黒褐	良好					イ-26	表	—
	183	深鉢	底部	VIII	ナデ, 条痕文	ナデ	石英, 長石, 輝石, 小石2mm	橙	オリーブ黒	良好				(内外) 少量煤付着	ウ-31	III	一括
	184	深鉢	胴部	IX a	ナデ, 横刻み	条痕文	石英, 長石, 雲母, 赤色小石1mm	にぶい褐	灰黄褐	良好				(内外) 少量煤付着	エ-27	III	5662
	185	深鉢	胴部	IX a	条痕文, 連点	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石	にぶい橙	橙	良好					エ-27	III	5658
	186	深鉢	胴部	IX a	条痕文, 連点	条痕文	石英, 長石, 雲母, 小石少混1mm	にぶい橙	灰黄褐	良好				(外面) 煤付着	ウ-25	III	11739
	187	深鉢	胴部	IX a	ナデ, 沈線→横刻み	条痕文	石英, 長石, 雲母, 砂粒混	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好					エ-29	III	4007
	188	深鉢	口縁部	IX b	条痕文, 刺突文	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石, 砂粒混	灰黄	灰黄	良好				(内外) 一部ナデ消し	オ-27	III	6517
65	189	深鉢	胴部	IX b	ナデ, 刺突文	ナデ	石英, 長石, 雲母, 砂粒混	黄灰	暗灰黄	良好					オ-27	III	6559
	190	深鉢	胴部	IX b	刺突文, ナデ, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 小石3mm	橙	にぶい黄褐	良好				(外面) 煤付着	エ-29	III	3876
	191	深鉢	口縁部	IX b	刺突多連文, 押し引き文	ナデ	石英, 長石, 雲母, 小石3mm	にぶい黄褐	灰黄褐	良好	16.0			(外) 煤, (内外) 一部剥離	エ-29	III	5354
	192	深鉢	胴部	IX b	条痕文, 刺突文	条痕文	石英, 長石, 雲母	橙	にぶい褐	良好					イ-25	III	8617 8536 9776 9705
	193	深鉢	胴部	IX b	刻目突帯, 刺突文, ナデ	条痕文	石英, 長石, 雲母, 砂粒混, 小石少混	黒褐, 橙	黒褐	良好					ウ-25	III	11733 9745
	194	深鉢	胴部	IX b	刺突文, 刻目突帯, ナデ	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石, 赤色小石	褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	オ-26	III	6495 (4個)
	195	深鉢	胴部	IX b	押し引き文, 刻目突帯, ナデ	条痕文	石英, 長石	にぶい橙	にぶい黄	良好				(外面) 煤付着	イ-28	III	10830
	196	深鉢	胴部	IX b	刺突文, ナデ, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 輝石	淡黄	灰黄	良好				(外面) 煤付着	ア-28	III	9923
	197	深鉢	胴部	IX b	条痕文, 押し引き文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 小石少混	灰黄	暗灰黄	良好				(外面) 煤付着	キ-30	III	5050

第11表 縄文土器観察表5

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
65	198	深鉢	胴部	IX b	条痕文、押し引き文、 刻目突帯	条痕文	石英、長石、赤色小石少混	黒褐	褐灰	良好				(外面) 煤付着	カ-30	Ⅲ	7762
	199	深鉢	胴部	IX b	ナデ、刻目突帯、刺突文	条痕文	石英、長石、小石少混	にぶい黄褐	褐灰	良好					イ-28	Ⅲ	10856 (2個)
	200	深鉢	胴部	IX b	条痕文、刺突文、刻目突帯	条痕文	石英、長石、雲母	橙	灰黄	良好					ア-27、28	Ⅲ	9328 11550
66	201	深鉢	口縁～胴部	IX c	条痕→ナデ、刻目突 帯、刺突文	条痕→ナデ	石英、長石	灰黄	浅黄	良好				(外面) 煤付着	A-27	Ⅲ	10274 10279 11268 (2個)
	202	深鉢	胴部	IX c	刻目突帯、刺突文、 ナデ	条痕文	石英、長石、金雲母、黒色小石、白 色小石少混	赤褐	赤褐	良好					エ-28	Ⅲ	5528
	203	深鉢	口縁部	IX c	ナデ、刻目突帯、刺 突文	ナデ	石英、長石	にぶい褐	にぶい黄褐	良好	14.0			(外面) 少量 煤付着	ウ-31	Ⅲ	一括
	204	深鉢	胴部	IX c	刻目突帯、刺突文、ナデ	条痕文	石英、長石、砂粒混	にぶい黄褐	黄灰	良好				(外面) 煤付着	ア-27	Ⅲ	11203
	205	深鉢	口縁部	IX c	条痕文、刺突文、刻 目突帯	条痕文	石英、長石、白色小石	にぶい黄褐	黄褐	良好	10.2			(外面) 少量 煤付着	オ-28	Ⅲ	8110
	206	深鉢	胴部	IX c	条痕文、刺突文、とがり突帯	条痕文	石英、長石、砂粒混、雲母	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好					イ-28	Ⅲ	10800
	207	深鉢	胴部	IX c	とがり突帯、刺突文、ナデ	条痕文	石英、長石、角閃石、砂粒混、白色小石	灰褐	灰黄褐	良好					カ-27	Ⅲ	5900
	208	深鉢	胴部	IX c	貝殻刺突文、ナデ、 刻目突帯	条痕文	石英、長石	にぶい橙	にぶい橙	良好					オ-28	Ⅲ	6254
	209	深鉢	胴部	IX c	刺突文、刻目突帯、 ナデ	条痕文	石英、長石、黒色小石、雲母	橙	橙	良好				(外面) 煤 (内 面) 一部剥離	オ-27	Ⅲ	6574
	210	深鉢	口縁部	IX c	条痕文、刺突文、と がり突帯	条痕文 一部ナデ 消し	石英、長石、雲母	にぶい黄褐	にぶい橙	良好	33.8			(内外) 一部 剥離	オ-28	Ⅲ	6369
	211	深鉢	胴部	IX c	条痕文、刻目突帯、刺突文	条痕文	石英、長石、小石5mm	明赤褐	橙	良好				(外面) 煤付着	イ-28	Ⅲ	10803
	212	深鉢	口縁部	IX c	条痕文、刺突文、刻 目突帯	条痕文	石英、長石	にぶい褐	橙	良好	16.0			(外面) 煤付着 (口唇部) 刻み	オ-28	Ⅲ	6261
67	213	深鉢	口縁部	IX d	条痕文、刺突文、ナ デ、とがり突帯	条痕文	石英、長石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	22.0			(外面) 煤付 着	エ-28	Ⅲ	8233 (8個)
	214	深鉢	胴部	IX d	条痕文、刺突文、と がり突帯	条痕文	石英、長石、赤色小石	橙灰	褐灰	良好				(外面) 少量 煤付着	ウ-28	Ⅲ	7165
	215	深鉢	胴部	IX d	刺突文、とがり突帯、 ナデ	条痕文	石英、長石、輝石	灰黄褐	オリーブ黒	良好				(内外) 一部 剥離	エ-27	Ⅲ	5730 5564
	216	深鉢	胴部	IX d	突帯、刺突文、ナデ	条痕文	石英、長石	浅黄	浅黄	良好					A-27	Ⅲ	10673
	217	深鉢	胴部	IX d	渦巻き刻み突帯、刺 突文、ナデ	条痕文	石英、長石	灰黄	にぶい黄橙	良好				(外面) 少量 煤付着	A-27	Ⅲ	10666
	218	深鉢	胴部	IX d	条痕→ナデ、渦巻き 刻み突帯、刺突文	条痕文	石英、長石	暗灰黄	暗灰黄	良好				(外面) 少量 煤付着	エ-29	Ⅲ	3948
	219	深鉢	胴部	IX d	ナデ、渦巻き刻み突 帯、刺突文	条痕文	石英、長石、小石1～2mm	橙	オリーブ黒	良好					A-28	Ⅲ	10354
	220	深鉢	胴部	IX d	渦巻き刻み突帯、ナ デ	条痕文	石英、長石	灰黄	にぶい黄橙	良好				(外面) 少量 煤付着	A-27	Ⅲ	10653
	221	深鉢	胴部	IX d	ナデ、刺突文、渦巻 き刻み突帯	条痕文	石英、長石、赤色砂粒 (1～3mm)	にぶい黄橙	浅黄	良好				(外面) 煤付 着	A-27	Ⅲ	11297
	222	深鉢	胴部	IX d	刺突文、とがり突帯、ナデ	条痕文	石英、長石、赤色小石	にぶい褐	オリーブ黒	良好					ウ-28	Ⅲ	7137 7339
	223	深鉢	口縁部	IX e	連続押し引き文、刻 目突帯	条痕→ナデ	石英、長石、金雲母、砂粒混	暗褐	にぶい黄褐	良好				(外面) 煤付着 (口唇部) 刻み	カ-30	Ⅲ	7812 7814 4896
	224	深鉢	口縁部	IX e	押し引き文、ナデ	ナデ	石英、長石	にぶい橙	灰黄褐	良好				(外面) 少量 煤付着	ー	ー	ー
68	225	深鉢	胴部	IX e	刻目突帯、板ナデ、ナデ	条痕文	石英、長石、白色小石、雲母	橙	橙	良好					オ-29	Ⅲ	4299
	226	深鉢	口縁部	IX e	押し引き文	ナデ	石英、長石、雲母、小石3mm	黒褐	暗灰黄	良好				(外面) 煤付着	エ-27	Ⅲ	7290
	227	深鉢	口縁部	IX e	刺突文、条痕→ナデ	ナデ	石英、長石、金雲母	橙	橙	良好				(外面) 煤付着	カ-30	Ⅲ	7606
	228	深鉢	口縁部	IX e	条痕文、押し引き文	条痕文	石英、長石、輝石	にぶい橙	にぶい黄橙	良好					オ-29	Ⅲ	7902 (4個)
	229	深鉢	胴部	IX e	条痕文、押し引き文	条痕文	石英、長石、金雲母、白色小石少混	にぶい黄橙	にぶい褐	良好				(外面) 煤付着	カ-30	Ⅲ	4916
	230	深鉢	胴部	IX e	条痕→ナデ、押し引 き文、突帯	条痕文	石英、長石、白色小石	黒	褐灰	良好				(外面) 煤付着	カ-29	Ⅲ	5126 (2個) 5127
	231	深鉢	口縁部	X a	横刻み、とがり突帯、 玉状突起 (円型突起)	条痕文	石英、長石、輝石	黄灰	灰黄褐	良好				(外面) 煤付 着	ア A-21～ 28	Ⅲ	一括
	232	深鉢	口縁部	X a	条痕文、横刻み、とがり突帯	条痕文	石英、長石	にぶい褐	灰褐	良好					オ-28	Ⅲ	6279
70	233	深鉢	胴部	X a	条痕文、横刻み、突帯	条痕文	石英、長石、小石少混1～2mm	褐	暗灰黄	良好				(外面) 煤付着	オ-29	Ⅲ	5267 (3個)
	234	深鉢	口縁部	X a	条痕文、刺突突帯、 とがり突帯	条痕文	石英、長石	にぶい黄褐	にぶい橙	良好				(外面) 少量 煤付着	エ-27	Ⅲ	5834
	235	深鉢	胴部	X a	条痕文、沈線、刻目突 帯、横刻み とがり突帯、 玉状突起 (円型突起)	条痕文	石英、長石、雲母、赤色小石5mm	灰	灰黄	良好				(外面) 煤付 着	ア A-21～ 28	Ⅲ	一括
	236	深鉢	胴部	X a	とがり突帯、刺突文	条痕文	石英、長石、雲母、輝石、白色小石 2mm	灰黄褐	にぶい褐	良好				(外面) 少量 煤付着	ア-29	Ⅲ	11672
	237	深鉢	胴部	X a	横刻み、とがり突帯、 条痕→ナデ	条痕文	石英、長石、小石5mm	灰黄	黄灰	良好					エ-27	Ⅲ	5809
	238	深鉢	口縁部	X a	刻目突帯、とがり突 帯	ナデ	石英、長石、小石6mm	灰黄	にぶい黄橙	良好				(外面) 少量 煤付着	ウ-31	Ⅲ	一括
	239	深鉢	胴部	X a	刻目突帯、とがり突帯、条痕文	条痕→ナデ	石英、長石、砂粒混、小石少混1mm	黒褐	黄灰	良好					ウ-31	Ⅲ	一括
	240	深鉢	胴部	X a	刻目突帯、とがり突 帯、ナデ	条痕文	石英、長石	にぶい黄橙	灰黄褐	良好				(外面) 少量 煤付着	カ-30	Ⅲ	4828
	241	深鉢	胴部	X a	横刻み突帯、沈線、 とがり突帯、条痕文	条痕文	石英、長石、雲母、小石7mm、小 石少混1～2mm	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好				(外面) 少量 煤付着	ー	ー	ー
	242	浅鉢	胴～底部	X a	条痕文、横刻み突帯、 とがり突帯	条痕文	石英、長石、雲母、輝石	橙	にぶい黄橙	良好				(内外) 煤付 着	A-27	Ⅲ	11687 番号なし
	243	深鉢	口縁～胴部	X a	条痕文、横刻み、刻 目突帯	条痕文	石英、長石、白色小石3mm、雲母	にぶい褐	にぶい赤褐	良好	20.6			(外面) 煤付 着	イ-25	Ⅲ	8707 8840 8665 11704 (2個)
71	244	深鉢	胴部	X a	条痕文、刻目突り突 帯、とがり突帯	条痕文	石英、長石、雲母、輝石、赤色小石 5mm	灰黄褐	にぶい赤褐	良好				(外面) 煤付 着	ア-28	Ⅲ	9077
	245	深鉢	胴部	X a	条痕文、とがり突帯、 刻目突帯	条痕文	石英、長石、雲母	暗灰黄	灰黄褐	良好					イ-25	Ⅲ	11753
	246	深鉢	胴部	X a	条痕文、刻目突帯、 とがり突帯	条痕文	石英、長石、雲母	にぶい褐	褐灰	良好				(外面) 煤付 着	ア A-21～ 28	Ⅲ	一括

第12表 縄文土器観察表6

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
71	247	深鉢	胴部	X a	条痕文、横刻み突帯、とがり突帯	条痕文	石英、長石、雲母、小石少混1～2mm	灰黄	黄灰	良好				(外面) 煤付着	ア A - 21～28	Ⅲ	一括
	248	深鉢	胴部	X a	沈線、刻目突帯、とがり突帯、条痕文	条痕文	石英、長石	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良好				(外面) 煤付着	イ - 25	Ⅲ	9819
	249	深鉢	胴部	X a	沈線、とがり突帯、横刻み突帯	条痕文	石英、長石、白色小石少混	褐	にぶい褐	良好			6.0		オ - 29	Ⅲ	一括
	250	深鉢	胴部	X a	刻目突帯、とがり突帯、条痕文	ナデ	石英、長石、雲母、輝石、白色小石少混1～2mm	にぶい黄橙	黄灰	良好				(外面) 煤付着	ア A - 21～28	Ⅲ	一括
	251	深鉢	胴部	X a	条痕文、刻目突帯、とがり突帯	条痕文	石英、長石、雲母、白色小石少混1～3mm	褐	橙	良好				(外面) 煤付着	カ - 29	Ⅲ	4520
	252	深鉢	胴部	X a	横刻み突帯、とがり突帯、ナデ	条痕文	石英、長石、小石少混1～2mm	にぶい黄橙	暗灰黄	良好				(外面) 煤付着	ア - 27	Ⅲ	11214
	253	深鉢	胴部	X a	条痕文、沈線、とがり突帯	条痕文	石英、長石、白色小石5mm、雲母、輝石	褐	にぶい橙	良好				(外面) 煤付着	オカ - 29	Ⅲ	4514 450? 番号なし
	254	深鉢	胴部	X a	刻目突帯、沈線、条痕文、刺突文	条痕文	石英、長石、砂粒混	にぶい黄褐	黄灰	良好				(内外) 煤付着	ア A - 21～28	Ⅲ	一括
	255	深鉢	胴部	X a	条痕文、刻目突帯	条痕文	石英、長石、雲母、軽石3mm	にぶい黄橙	灰黄褐	良好				(外面) 煤付着	BC - 21～28	Ⅲ	一括
	256	深鉢	胴部	X a	条痕文、刻目突帯	条痕文	石英、長石、雲母、輝石、白色小石少混1～4mm	にぶい褐	橙	良好				(外面) 煤付着	カ - 31	Ⅲ	一括
72	257	浅鉢	胴部	X a	条痕文、刻目突帯、沈線	条痕文	石英、長石、雲母、輝石、小石少混1～3mm	にぶい橙	暗灰黄	良好				(外面) 煤付着	ア - 28	Ⅲ	9853
	258	深鉢	胴部	X a	条痕→ナデ、刺突文、沈線	条痕文	石英、長石、輝石、雲母、小石少混1～2mm	黒褐	にぶい褐	良好				(外面) 煤(内面) 一部剥離	エ - 30	Ⅲ	4017
	259	深鉢	口縁～胴部	X b	条痕文、横刻み、刻目突帯、とがり突帯	条痕文	石英、長石	にぶい黄橙	灰黄	良好	29.0			(外面) 煤付着	ア - 28	Ⅲ	8989 8994 8995 8996 9221 9217 9220 8991 8990 9216 10975 9214 8985 8986 番号なし
	260	深鉢	口縁～胴部	X b	条痕文、横刻み、刻目突帯	条痕文	石英、長石、雲母	にぶい橙	にぶい黄橙	良好					イ - 25	Ⅲ	11752 (2個) 9609
	261	深鉢	口縁～胴部	X b	条痕文、横刻み、刻目突帯	条痕文	石英、長石、輝石、白色小石少混1mm	黒褐	灰黄褐	良好					ウ - 25		11756 11751
	262	深鉢	胴部	X b	条痕文、刻目突帯	条痕文	石英、長石	黒褐	黒褐	良好				(外面) 一部煤付着(内面) 一部剥離	オ - 28	Ⅲ	6309 6310 6313 8057
	263	深鉢	胴部	X b	刻目突帯、横条痕文	条痕文	石英、長石、黒雲母	灰褐	オリーブ黒	良好				(内外) 煤付着	エ - 27	Ⅲ	7253
73	264	深鉢	口縁～胴部	X c	横刻み刺突文、横沈線、刻目突帯、玉状突起(円型突起)条痕文	条痕文	石英、長石、黒雲母、白色小石	褐灰	灰黄褐	良好	31.4			(外面) 煤付着	エ - 27	Ⅲ	5621 5683 5665 7249
	265	深鉢	口縁部	X c	刺突連続文、ナデ、玉状突起(円型突起)	条痕文	石英、長石、黒雲母、角閃石、砂粒混	暗灰黄	にぶい黄褐	良好					エ - 26	Ⅲ	6947
	266	深鉢	胴部	X c	条痕→ナデ、横刻み、玉状突起(円型突起)	条痕文	石英、長石、雲母	黒褐	褐灰	良好				(外面) 煤付着	-		-
	267	深鉢	口縁部	X c	条痕文、刻目突帯、玉状突起(円型突起)	条痕文	石英、長石、雲母、砂粒混	にぶい黄褐	にぶい赤褐	良好	26.4			(外面) 煤付着	ア - 28	Ⅲ	10149
	268	深鉢	胴部	X c	横刻み、玉状突起(円型突起)、とがり突帯	ナデ	石英、長石、雲母、小石少混1～5mm	橙	オリーブ黒	良好					イ - 29	Ⅲ	10990
	269	深鉢	口縁部	X c	刻目突帯、条痕文	条痕文	石英、長石	橙	橙	良好				(外面) 煤付着	オ - 29		5233
	270	深鉢	胴部	X c	条痕→ナデ、横刻み突帯、玉状突起(円型突起)	条痕文	石英、長石	にぶい褐	にぶい橙	良好				(外面) 煤付着	イ - 28	Ⅲ	11638
	271	深鉢	胴部	X c	条痕文、刺突文、玉状突起(円型突起)	条痕文	石英、長石、雲母、白色小石3mm	にぶい黄褐	黒褐	良好				(外面) 煤付着	イ - 29		10974 10981
	272	深鉢	頭部	X c	条痕文、横刻み、沈線、刻目突帯ととがり突帯	条痕文	石英、長石、金雲母	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好			4.9	(胴径) 15.8cm(外面) 煤付着	ア - 28	Ⅲ	9852
	273	深鉢	胴部	X c	条痕文、刻目突帯、とがり突帯、玉状突起(円型突起)	条痕文	石英、長石、雲母、白色小石2mm	暗灰黄	灰黄	良好				(外面) 煤付着	ア - 28	Ⅲ	10740
74	274	深鉢	口縁部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み	条痕文	石英、長石、雲母、輝石	黒褐	にぶい黄橙	良好	36.0			(外面) 煤付着	A - 27	Ⅲ	10601 10628 11380
	275	深鉢	口縁部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み	条痕文	石英、長石、雲母、小石少混1～2mm	黒褐	灰黄褐	良好	17.2			(外面) 煤付着	ウ - 25	Ⅲ	11711
	276	深鉢	口縁部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み	条痕文	石英、長石、雲母	黒褐	にぶい褐	良好	15.8			(外面) 煤付着	エ - 29	Ⅲ	3855
	277	深鉢	口縁部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み	貝殻条痕文	石英、長石、雲母、白色小石2mm	橙	にぶい褐	良好				(外面) 少量煤付着	オ - 28	Ⅲ	6226
	278	深鉢	口縁部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み	条痕文	石英、長石	褐	にぶい褐	良好				(外面) 少量煤付着	ウ - 28	Ⅲ	7161
	279	深鉢	口縁部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み、ミズバレ状突帯	条痕文	石英、長石、白色小石少混1mm	にぶい黄褐	灰黄褐	良好				(外面) 煤付着	BC - 21～28	Ⅲ	-
	280	深鉢	口縁部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み	条痕文	石英、長石、黒色小石1mm	褐	灰褐	良好				(外面) 煤付着	イ - 25	Ⅲ	9660
	281	深鉢	口縁部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み	条痕文	石英、長石、雲母、小石少混1～2mm	暗灰黄	オリーブ黒	良好				(外面) 少量煤付着	ア - 28	Ⅲ	9170
	282	深鉢	胴部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み突帯	条痕文	石英、長石、雲母、砂粒混	にぶい赤褐	にぶい褐	良好				(外面) 少量煤付着	オ - 30	Ⅲ	4309
	283	深鉢	胴部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み突帯	条痕文	石英、長石、小石少混1mm	黄灰	にぶい黄	良好					ア - 28	Ⅲ	9952
	284	深鉢	胴部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み突帯	条痕文	石英、長石、砂粒混、小石少混1mm	黄灰	灰黄	良好					イ - 25	Ⅲ	8511
	285	深鉢	胴部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み	条痕文	石英、長石、輝石、雲母	灰褐	にぶい黄褐	良好				(外面) 少量煤付着	ア - 28	Ⅲ	9964
	286	深鉢	胴部	Ⅱ・X	条痕文、刻み、刻目突帯	条痕文	石英、長石、赤色小石少混1～2mm	にぶい橙	にぶい褐	良好					ウ - 28		7135
	287	深鉢	胴部	Ⅱ・X	条痕文、横刻み突帯	条痕文	石英、長石、赤色小石3mm	黒	黄灰	良好				(外面) 煤付着	ア - 27	Ⅲ	11205
	288	深鉢	底部	Ⅱ・X	条痕文	条痕→ナデ	石英、長石	にぶい黄橙	灰黄褐	良好				(外面) 少量煤付着	エ - 28	Ⅲ	5454
	289	深鉢	底部	Ⅱ・X	条痕文	条痕文	石英、長石、雲母、輝石	にぶい黄	黄灰	良好				(内面) 煤(内面) 一部剥離	ア - 28	Ⅲ	10134

第13表 縄文土器観察表 7

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
75	290	深鉢	口縁部	X I	条痕文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 砂粒混, 小石少混1mm	にぶい黄橙	にぶい褐	良好	19.8			(外面) 煤付着	ウ-30	Ⅲ	一括
	291	深鉢	口縁部	X I	条痕文, 刺突文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母	にぶい黄褐	褐	良好	17.6			(外面) 煤付着	オ-28	Ⅲ	6225
	292	深鉢	口縁部	X I	ナデ, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 白色小石少混1~3mm	にぶい褐	灰黄褐	良好	25.2			(外面) 煤付着	エ-29	Ⅲ	3880
	293	深鉢	口縁部	X I	条痕文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石	黒褐	オリブ黒	良好				(外面) 煤付着	エ-29	Ⅲ	5304 3888
	294	深鉢	口縁部	X II	条痕→ナデ, 沈線	条痕文	石英, 長石, 雲母, 砂粒混, 白色小石少混	黒褐	にぶい褐	良好	16.1			(口唇部) 刻み	C-8	V	2126 2098
														C-7	2791		
	295	深鉢	口縁部	X II	条痕文, 沈線	条痕文	石英, 長石	黒褐	にぶい黄	良好				(外面) 煤付着 (口唇部) 刻み	A-27	Ⅲ	11384
	296	深鉢	口縁部	X II	条痕文	条痕文	石英, 長石	オリブ黒	灰黒	良好	14.2			(口唇部) 刻み	オ-29	Ⅲ	7907
	297	深鉢	口縁部	X II	条痕文, 沈線	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石	黒褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着 (口唇部) 刻み	C-8	V	2937
76	298	深鉢	胴部	X II	沈線	条痕文	石英, 長石, ガラス石3mm, 小石少混	オリブ黒	暗灰黄	良好				(外面) 煤付着	カ-29	Ⅲ	7730 5102
	299	深鉢	口縁部	X III a	条痕文	条痕文	石英, 長石, 小石少混	黒褐	橙, 黒褐	良好				(外面) 煤付着	B-5	Ⅳ	3489
	300	深鉢	口縁部	X III a	条痕文	条痕文	石英, 長石, 角閃石, 雲母	黒褐	灰黄褐	良好	19.0			(外面) 煤付着	B-3	Ⅳ	3345
	301	深鉢	口縁部	X III a	条痕文	条痕文	石英, 長石, 輝石, 小石少混1mm	にぶい黄橙	にぶい橙	良好				(外面) 煤付着	カ-29	Ⅲ	5136
	302	深鉢	口縁部	X III a	ナデ	条痕文	石英, 長石, 雲母	黒褐	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	ウ-28	Ⅲ	7130
	303	深鉢	口縁部	X III a	条痕→ナデ	条痕→ナデ	石英, 長石, 小石少混	黒	黄灰	良好				(外面) 煤 (口唇部) 条痕文	ケ-30	Ⅲ	7421
	304	深鉢	口縁部	X III a	条痕→ナデ	条痕文	石英, 長石	暗灰黄	暗灰黄	良好					オ-28	Ⅲ	6247
	305	浅鉢	口縁部	X III a	条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母	橙, 橙灰	褐灰	良好	17.0			(外面) 煤付着 (内外) 一部剥離	エ-28 エ-29	Ⅲ	8171 3922 5301
	306	浅鉢	口縁部	X III a	条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母	褐灰	灰黄褐	良好	15.9			(外面) 煤付着	オ-29	Ⅲ	5231
	307	深鉢	口縁部	X III a	条痕文, ナデ	条痕文	石英, 長石	黒褐	にぶい黄褐	良好				(外面) 煤付着	イ-25	Ⅲ	8484
	308	深鉢	口縁部	X III a	条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母	黒褐	灰黄褐	良好				(外面) 煤付着	オ-29	Ⅲ	4151
	309	深鉢	口縁部	X III a	条痕→ナデ	条痕文	石英, 長石, 輝石	黒	にぶい黄橙	良好					ア-28	Ⅲ	11588
	310	深鉢	胴部	X III a	条痕文, 突帯	条痕文	石英, 長石	暗灰黄	灰黄	良好				(外面) 煤付着	ア A-21~28	Ⅲ	一括
	311	深鉢	口縁部	X III a	条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石, 白色小石	暗灰黄	にぶい黄橙	良好	21.2			(外面) 少量煤付着	ア-28	Ⅲ	10003
78	312	深鉢	口縁部	X III b	条痕文	条痕文	石英, 長石, 輝石, 角閃石, 雲母	明赤褐	暗灰黄	良好					イ-28	Ⅲ	10851
	313	深鉢	口縁部	X III b	条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石	褐	褐灰	良好					キ-30	Ⅲ	7371
	314	深鉢	口縁部	X III b	条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石, 砂粒混	にぶい橙	灰黄褐	良好	13.2				エ-27	Ⅲ	7297
	315	深鉢	口縁部	X III b	条痕文	条痕文	石英, 長石, 白色小石少混1mm, 白色小石少混	灰黄	黄灰	良好				(外面) 少量煤付着	オ-26	Ⅲ	6633
	316	深鉢	口縁部	X III b	条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母, 小石少混1~2mm	にぶい黄橙	にぶい橙	良好					イ-29	Ⅲ	11101
	317	深鉢	口縁部	X III b	条痕文	条痕文	石英, 長石, 白色小石少混1~6mm	黄灰	灰黄	良好				(外面) 一部剥離	オ-28	Ⅲ	6233 (2個)
	318	深鉢	口縁部	X III b	貝殻条痕文	貝殻条痕文	石英, 長石, 雲母, 小石少混1~3mm	黒褐	にぶい褐	良好				(内外) 煤付着	ウ-28	Ⅲ	7133
	319	深鉢	口縁部	X III b	条痕文	条痕文	石英, 長石, 小石少混1~2mm	灰黄褐	にぶい黄褐	良好				(外面) 煤付着	ウ-28	Ⅲ	7141 7142
	320	深鉢	口縁部	X III b	条痕文	条痕文	石英, 長石	灰黄褐	黒褐	良好				(外面) 煤付着	ア A-21~28	Ⅲ	一括
	321	深鉢	口縁部	X III b	条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石, 砂粒混	黒褐	にぶい黄褐	良好				(外面) 煤付着 (内) 一部剥離	イ-25	Ⅲ	8423 8450
80	322	深鉢	口縁~胴部	X IV	ナデ, 連点, 沈線	ナデ, 連点	石英, 長石, 小石多混1~3mm	黒褐	黒	良好	13.8			摩耗 (口唇部) 連点	C-8	V	2796 2798
	323	深鉢	口縁部	X IV	沈線, ナデ, 連点	沈線, ナデ, 連点	石英, 長石, 雲母, 輝石, 小石少混1~2mm	褐	にぶい褐	良好				(口唇部) 連点	13T	Ⅲ	660
	324	深鉢	口縁部	X IV	ナデ, 沈線, 連点	ナデ, 沈線, 連点	石英, 長石, 白色小石少混1~2mm	褐	にぶい橙	良好				(口唇部) 連点	B-8	V	1964
	325	深鉢	口縁部	X IV	ナデ, 沈線	ナデ, 沈線	石英, 長石, 雲母, 白・黒小石少混1~2mm	灰黄	黄灰	良好					13T B-8	V	579 2478 不明
	326	深鉢	口縁部	X IV	ナデ, 沈線	条痕ナデ消し 連点	石英, 長石, 雲母, 角閃石	赤褐	明赤褐	良好				(口唇部) 連点	C-6	V	2308
	327	深鉢	口縁部	X IV	ナデ, 沈線	ナデ, 沈線	石英, 長石, 雲母, 小石少混1mm	にぶい橙	浅黄橙	良好				(口唇部) 連点	-	-	-
	328	深鉢	口縁部	X IV	ナデ, 沈線	ナデ, 沈線	石英, 長石, 雲母, 小石少混1~2mm	暗褐	にぶい赤褐	良好				(口唇部) 連点 やや摩耗	C-7	V	2215
	329	深鉢	口縁部	X IV	沈線, ナデ	ナデ, 連点	石英, 長石, 雲母, 小石少混1~2mm	褐	にぶい褐	良好				摩耗 (口唇部) 連点	B-7	V	2676
	330	深鉢	口縁部	X IV	沈線, ナデ	ナデ	石英, 長石, 小石多混1~2mm	黒褐	にぶい黄橙	良好				摩耗	イ-7	V	3660
	331	深鉢	口縁部	X IV	ナデ, 沈線, 連点	ナデ, 沈線	石英, 長石, 小石多混1~2mm, 砂粒混	褐	にぶい黄橙	良好	14.0			(外面) 少量煤 (口唇部) 連点 やや摩耗	C-6	V	2329
	332	深鉢	口縁部	X IV	ナデ, 沈線	ナデ, 連点	石英, 長石, 雲母, 小石少混1~2mm	黄褐	褐	良好				(口唇部) 連点	B-7	V	2669 2670
	333	浅鉢	口縁部	X IV	沈線, ナデ	ナデ	石英, 長石, 雲母, 白色小石少混1~5mm	黒褐, 暗赤褐	にぶい黄橙, 黒褐	良好	22.4			やや摩耗	C-5	V	3156
	334	深鉢	口縁~胴部	X IV	沈線, ナデ	ナデ	長石, 石英, 雲母, 角閃石, 輝石, 砂粒混	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	30.8				C-5	V	3560 3194 3514 3515 不明
	335	深鉢	底部	X IV	沈線, ナデ	条痕文	滑石, 長石, 石英	灰褐	橙	良好					C-5	V	3083
	336	深鉢	口縁部	X IV	ナデ, 沈線	ナデ, 沈線	石英, 長石, 雲母, 小石少混1~3mm	にぶい黄橙, 黒褐	にぶい黄橙	良好					C-5	Ⅳ	1759
	337	深鉢	胴部	X IV	沈線, ナデ	ナデ	石英, 長石, 白・赤・黒色小石多混1~5mm	黒褐	黒, 暗褐	良好				摩耗	-	-	-
	338	深鉢	胴部	X IV	短沈線, 刺突連続文, ナデ	ナデ	石英, 長石, 砂粒混, 雲母, 小石少混1~5mm	黒褐, 明赤褐	灰褐	良好					-	-	-
81	339	深鉢	胴部	X IV	ナデ, 短沈線 (縦)	ナデ	石英, 長石, 雲母, 輝石, 白色小石2mm	にぶい橙	灰黄褐	良好				(外面) 少量煤付着	C-4	Ⅱ	3438
	340	深鉢	胴部	X IV	ナデ, 連点	ナデ	石英, 長石, 小石少混1~3mm	灰赤	橙	良好				やや摩耗	B-8	Ⅵ	2760
	341	深鉢	胴部	X IV	沈線, 巻き文, ナデ	ナデ	石英, 長石, 白色小石少混1~3mm	灰黄褐	にぶい褐	良好					C-5	Ⅳ	1759
	342	深鉢	胴部	X IV	くもの果状の沈線文, ナデ	ナデ	石英, 長石, 白・赤・黒色小石多混1~5mm	黒褐, 暗赤褐	黒褐, 褐	良好				(外面) 煤付着	C-5	V	3159
	343	深鉢	胴部	X IV	くもの果状の沈線文, ナデ	ナデ	石英, 長石, 雲母, 白色小石3mm	にぶい黄橙	灰黄褐	良好				(外面) 煤付着	C-13	Ⅱ	2562

第14表 縄文土器観察表8

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
81	344	深鉢	胴部	XIV	沈線、竹管状工具ナデ、刺突連続文	ナデ	石英、長石、砂粒混、雲母	灰黄褐	にぶい黄橙	良好					13T	II	299
	345	深鉢	胴部	XIV	沈線、ナデ	ナデ	石英、長石、雲母、白色小石少混1～5mm	灰黄褐	黒褐	良好					B-6	V	2964 (2個) 注記なし
	346	深鉢	底部	XIV	くもの巣状の沈線文、ナデ	ナデ	石英、長石、角閃石、雲母	にぶい橙	にぶい黄橙	良好					B-8	V	2955
	347	深鉢	底部	XIV	ナデ、巻き文	ナデ	石英、長石	にぶい橙	にぶい黄橙	良好					—	—	—
	348	深鉢	底部	XIV	沈線、ナデ	ナデ	長石、石英、雲母	褐灰	にぶい黄橙	良好					C-2	II	3309
82	349	深鉢	底部	XIV	沈線、ナデ	ナデ	石英、長石、砂粒混、小石多混1～3mm	にぶい赤褐	黒褐	良好				(内面) 煤付着	C-5	V	3135 3148 2400
	350	深鉢	口縁部	XVa	刻目突帯、沈線、貝殻刺突連続文	ナデ	石英、長石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好					A-28	III	10716
	351	深鉢	口縁部	XVa	燃文	押型文	石英、長石、黒雲母 小石1～3mm	褐	にぶい褐	良好					9T	V	460
	352	深鉢	胴部	XVa	刻目突帯、刺突連続文、沈線	ナデ	石英、長石、雲母	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好					I-29	III	10996
	353	深鉢	胴部	XVa	貝殻押引文、貝殻条痕文	ナデ	石英、滑石	にぶい褐	明褐	良好					9T	V	461
84	354	深鉢	胴部	XVa	貝殻条痕文、貝殻刺突文	ナデ	石英、雲母、滑石	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好					9T	V	482
	355	深鉢	口縁部	XVb	ナデ、細沈線、微隆起突帯	ナデ	石英、長石、砂粒混、白色小石2mm	黒褐	にぶい橙	良好				(外面) 煤付着	C-7	V	2391 1584 IV
	356	深鉢	口縁部	XVb	ナデ、微隆起突帯	ナデ	石英、長石、白・赤・黒色小石多混1～2mm	黒褐	暗褐	良好				(外面) 摩耗	C-7	V	2154
	357	深鉢	口縁部	XVb	ナデ、微隆起突帯、細沈線	ナデ	石英、長石、雲母	黒褐	にぶい褐	良好					C-6	V	3458
	358	深鉢	胴部	XVb	ナデ、沈線、微隆起突帯	ナデ	石英、長石、小石多混1mm	黒褐	灰黄褐	良好				やや摩耗	C-5	IV	1803
	359	深鉢	胴部	XVb	ナデ、微隆起突帯、沈線	ナデ	石英、長石、雲母、白・黒小石多混1～2mm	灰黄褐	黒褐	良好				やや摩耗	C-5	IV	1798
	360	深鉢	胴部	XVb	ナデ、微隆起突帯沈線	ナデ	石英、長石、黒色小石少混1～2mm、雲母	にぶい黄橙	黒褐	良好					C-5	IV	1769
	361	深鉢	胴部	XVb	ナデ、細沈線、微隆起突帯	ナデ	石英、長石	黒褐、にぶい黄橙	黒褐、にぶい黄橙	良好				(内外) 一部煤付着	C-5	IV	1798 不明
	362	深鉢	胴部	XVb	細沈線、微隆起突帯、ナデ	ナデ	石英、長石、小石多混1～2mm	黒褐	灰黄褐	良好				摩耗	D-5	IV	1866
	363	深鉢	胴部	XVb	沈線、ナデ、微隆起突帯	ナデ	石英、長石、小石多混1mm	黒褐	にぶい黄褐	良好				やや摩耗	C-5	V	3230
	364	深鉢	口縁～胴部	XVI	縄文	ナデ	石英、長石、角閃石、雲母、小石多混1～7mm	黒褐	褐	軟質				やや摩耗 (外) 煤 (口唇部) 半円状突起	C-5	V	3169
	365	深鉢	胴部	XVI	単節縄文	ナデ	石英、長石、雲母、小石少混1～3mm	黒褐	灰黄褐	軟質				(内外) 少量煤付着 やや摩耗	—	—	—
	366	深鉢	胴部	XVI	縄文	ナデ	石英、長石、角閃石、雲母、小石多混1～5mm	褐灰	黒褐	軟質				やや摩耗	9T	III	240
367	深鉢	底部	XVI	縄文	ナデ	石英、長石、雲母	灰黄褐	黒褐	軟質					17T	II	84	
368	深鉢	胴部	XVI	縄文	条痕文	石英、長石、雲母、角閃石、小石少混1mm	黒褐	にぶい黄褐	良好				やや摩耗	13T	V	522	
369	深鉢	口縁部	XVII	多条沈線、突帯	条痕文	石英、長石、雲母、角閃石、黒色砂粒	灰黄褐	黒	良好	22.6				C-7	V	2290	
370	深鉢	口縁部	XVII	ナデ、刻目貼付突帯 (口唇)	ナデ、条痕文	石英、長石、雲母、角閃石、輝石	橙	橙	良好				(外面) 少量煤付着	B-8	V	2713 (3個)	
371	深鉢	口縁部	XVII	刻目貼付突帯、沈線	条痕文	石英、長石、雲母	橙	黒	良好					13T	II	201	
372	深鉢	口縁部	XVII	多条沈線、2列連点、刻目貼付突帯	条痕文	石英、長石、雲母、赤・黒砂粒	にぶい黄橙	にぶい橙	良好				(内外) 少量煤付着	B-8	IV	2624	
373	深鉢	口縁部	XVII	ナデ、沈線、蕨手状突帯	条痕文	石英、長石、角閃石、輝石、雲母、砂粒混	橙	にぶい黄橙	良好				(内外) 一部煤付着	B-7	V	2687	
374	深鉢	胴部	XVII	条痕文、刻目貼付突帯、沈線、3列連点	条痕文	石英、長石、雲母、黒色砂粒	灰褐	灰褐	良好				(内外) 煤付着	B-8	V	2014 2031	
375	深鉢	底部	XVII	ヘラナデ	ヘラナデ	石英、長石、赤・白小石多混1mm	にぶい赤褐	黒褐	良好		13.2		(内面) 煤付着	カー31	III	一括	
376	深鉢	口縁～胴部	XVIII	ナデ、凹点の圧痕文、凹線	ヘラナデ	石英、長石、角閃石、雲母、砂粒混、白色小石2mm	にぶい赤褐	黒褐	良好	24.0			(外) 煤 (内) 一部剥離 (口唇部) 凹点刻み	カー30	III	7679 7818	
377	深鉢	胴部	XVII	ナデ、渦巻文	ナデ	石英、長石、雲母、黒色砂粒	黒褐	橙	良好				(外面) 煤付着	ケー31	III	7585	
378	深鉢	口縁部	XVIII	ナデ、凹線	ナデ	石英、長石、雲母、小石少混1～2mm	にぶい黄褐	暗灰黄	良好				(外面) 煤付着	ケー31	III	4391	
379	深鉢	口縁部	XVII	ナデ、条痕ナデ消し	ナデ、指圧痕	石英、長石、雲母、角閃石、砂粒混	橙	明赤褐	良好				(口唇部) 刻み目	オー28	III	4156 4253	
85	380	深鉢	口縁部	XVII	ナデ、凹線	ナデ	石英、長石、雲母、滑石、小石少混1～2mm	黒褐	にぶい赤褐	良好				(口唇部) 指圧痕 (外) 煤付着	カー30	III	7603
	381	深鉢	口縁部	XVII	ナデ、凹線	ナデ	石英、長石、雲母、角閃石、砂粒混	にぶい赤褐	灰黄褐	良好				(外面) 少量煤付着 (口唇部) 刻み目	オー31	III	一括
	382	深鉢	口縁部	XVII	凹線、凹点の圧痕文	ナデ、指圧痕	石英、長石、雲母、滑石、小石少混1～5mm	暗赤褐	暗オリーブ褐	良好				(口唇部) 凹点刻み	カー28	III	6796
	383	深鉢	口縁部	XVII	ナデ、指圧痕、条痕ナデ消し	ナデ、指圧痕、ハケメ	石英、長石、雲母、滑石、角閃石、小石少混1～2mm	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	16.1			(外面) 少量煤付着	ケー31	III	7502
	384	深鉢	口縁部	XVII	ナデ、凹線	ナデ	石英、長石、雲母、輝石、黒色砂粒、白色小石8mm	にぶい橙	にぶい黄橙	良好				(外面) 少量煤付着	カー30	III	7810
385	深鉢	底部	XVII	ナデ、凹線、凹点	ナデ	石英、長石、雲母	にぶい橙	にぶい褐	良好		10.0		(底面) 鯨脊椎骨痕?	ケー31	III	4345 4343	
86	386	深鉢	口縁部	XVII	ナデ、凹線	ナデ	石英、長石、赤・白小石少混1～2mm、黒色砂粒、雲母	灰黄褐	オリーブ黒	良好	36.8			(口唇部) 凹点刻み (外面) 少量煤付着	キー30 カー30	III	5047 5028 7821 4827
	387	深鉢	口縁部	XVII	凹点の圧痕文、凹線、ナデ	ナデ	石英、長石、砂粒混、小石少混1～2mm	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	38.8			(口唇部) 凹点刻み	カー29	III	4625
	388	深鉢	口縁～底部	XVII	ヘラケズリ、ナデ、凹線	条痕文	石英、長石、雲母、小石多混1～2mm	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	20.0	12.0	17.5	(底面) 鯨脊椎骨痕?	イーカー25～28	IV	一括
	389	深鉢	口縁部	XVII	ナデ、凹線	ナデ	石英、長石、輝石、雲母、角閃石、小石少混1～3mm	にぶい褐	灰褐	良好					エー28	III	8189
	390	深鉢	口縁～胴部	XVII	凹線、ナデ	ナデ	石英、長石、雲母、砂粒混、小石少混1～2mm	にぶい赤褐	灰褐	良好				(口唇部) 山形突起 (内面) 少量煤付着	イーカー25～28	IV	一括
	391	深鉢	口縁部	XVII	ナデ	ナデ	石英、長石、雲母、黒色砂粒	褐	灰黄褐	良好				(外面) 煤 (口唇部) 凹点刻み	カー30	III	7530
392	深鉢	口縁部	XVII	ナデ、凹線	ナデ	石英、長石、小石7mm、雲母	黒褐	灰黄褐	良好				(外面) 少量煤付着	カー29	III	4526	

第15表 縄文土器観察表9

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
87	393	深鉢	口縁部	XⅦ	条痕文、ナデ、条痕 ナデ消し、刺突文	指圧痕、条痕文	石英、長石、雲母、角閃石	橙	にぶい橙	良好	30.4			(外面) 煤付 着(口唇部) 凹点刻み	ク-31 イ-ク-25- 28	Ⅲ Ⅳ	4401 7505 (2個) 一括
	394	深鉢	口縁部	XⅦ	ナデ、凹線	条痕文	石英、長石、雲母、白色小石少混1~3mm	にぶい褐	橙	良好				(外面) 煤付着	ク-31	Ⅲ	4359
	395	深鉢	胴部	XⅦ	条痕	条痕	石英、長石、雲母、黒色砂粒	黒褐	灰黄褐	良好				(外面) 煤付着	オ-30	Ⅲ	4287 (2個)
	396	深鉢	口縁部	XⅦ	ナデ、凹線	ナデ	石英、長石、角閃石	にぶい赤褐	灰褐	良好	24.2			(内面) 少量 煤付着	エ-28	Ⅲ	8185 8186
	397	深鉢	口縁部	XⅦ	条痕文、凹線、凹点 の圧痕文	条痕文	石英、長石、滑石多混	橙	橙	良好				(口唇部) 凹 点刻み	オ-31	Ⅲ	一括
	398	深鉢	口縁部	XⅦ	凹線、条痕文	条痕文	石英、長石、角閃石、小石少混1~2 mm	橙	明赤褐	良好	30.8			(内外) 煤付 着(口唇部) 凹点刻み	ク-31	Ⅲ	4410
88	399	深鉢	口縁部	XⅦ	凹点の圧痕文、凹線	ナデ	石英、長石、白色小石少混、黒色砂 粒	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	30.6			(口唇部) 山 形突起 凹点 刻み	ク-31	Ⅲ	4372 4355 4370 4369 7496 7497 4400
	400	深鉢	口縁~胴部	XⅦ	条痕文、条痕ナデ消 し、刺突文	条痕文	石英、長石、雲母、角閃石、滑石、 砂粒混	暗赤	暗赤	良好	24.0			(外面) 煤付 着(口唇部) 刻み目	ク-31	Ⅲ	7476 (2個)
	401	深鉢	口縁部	XⅦ	ナデ、凹線	ナデ	石英、長石、小石少混1~3mm、砂粒 混、雲母	にぶい褐	黒褐	良好	22.6			(内外) 少量 煤付着(口唇 部) 刻み目	ク-31	Ⅲ	7479 (6個)
	402	深鉢	口縁~胴部	XⅦ	ナデ、渦巻き状連点 突帯	ナデ	石英、長石、雲母、白色小石少混	にぶい橙	灰黄	良好				(口唇部) 刻 み目	カ-29	Ⅲ	4689 4674
	403	深鉢	口縁~底部	XⅦ	ナデ	ナデ、指圧痕	石英、長石、雲母、小石少混	褐灰	橙、黒	良好	17.9	10.5	18.8	5ヵ所に補修 孔(外面) 少 量煤付着	ク-31	Ⅲ	4351 7494 7500 4415 7493 4354
	404	深鉢	口縁部	XⅦ	ナデ	ナデ	石英、長石、雲母、小石少混1mm、 砂粒混、角閃石	褐灰	にぶい褐灰	良好	16.0			(内外) 煤付着 (口唇部) 刻み 目	ク-31	Ⅲ	4416
89	405	深鉢	口縁部	XⅦ	指ナデ	指ナデ	石英、長石、黒色砂粒	褐	黒褐	良好	23.2			(内外) 煤付着	カ-30	Ⅲ	7541 7811
	406	深鉢	口縁部	XⅦ	条痕文	ナデ	石英、長石、輝石、小石少混1~3mm	橙	にぶい褐	良好	21.2				ケ-30	Ⅲ	4456
	407	深鉢	底部	XⅦ	ヘラナデ	ヘラナデ	石英、長石、角閃石、雲母、小石少混1~2mm	にぶい橙	黄灰	良好		9.8		(内面) 煤付着	EFG-15~17	Ⅱa	一括(2個)
	408	深鉢	底部	XⅦ	ヘラナデ	ヘラナデ	石英、長石、白色小石多混1~5mm、砂粒混	にぶい橙	灰黄褐	良好		11.6			EFG-13・14	-	-
	409	深鉢	底部	XⅦ	指圧痕による刻目	指圧痕	石英、長石、滑石、金雲母	赤	赤	良好		15.0			カ-28	Ⅲ	6826
	410	深鉢	底部	XⅦ	指圧痕、ナデ	指圧痕	石英、長石、雲母、小石少混	赤	黒	良好					オ-31	Ⅲ	一括
	411	深鉢	底部	XⅦ	ヘラナデ、指圧痕	ヘラナデ	石英、長石、輝石、角閃石、小石5mm	にぶい黄橙	良好						ク-31	Ⅲ	7508
	412	深鉢	底部	XⅦ	ナデ	ナデ	石英、長石、雲母、小石少混	橙	明赤褐	良好		12.2		(底面) 煤付着	カ-30	Ⅲ	7586
	413	深鉢	底部	XⅦ	指圧痕	ナデ	石英、長石、角閃石、雲母、小石少混	浅黄橙	にぶい黄橙	良好		15.4			キ-30	Ⅲ	7471
	414	深鉢	底部	XⅦ	ナデ	指圧痕	石英、長石、角閃石、雲母、輝石	灰黒	橙	良好		11.2			オ-31	Ⅲ	一括
	415	深鉢	胴~底部	XⅦ	ナデ、指圧痕	指圧痕、ナデ	石英、長石、小石少混	橙	黒灰、橙	良好		11.6		(底面) 竹編 み目	カ-30	Ⅲ	7529
	416	深鉢	底部	XⅦ	ナデ	指圧痕	石英、長石、雲母、小石少混	橙	黄灰	良好		7.9			カ-30	Ⅲ	7522
	417	深鉢	底部	XⅦ	指圧痕	指圧痕	石英、長石	にぶい赤褐	にぶい黄橙	良好		9.6			カ-30	Ⅲ	7678
	418	深鉢	口縁部	XⅨ	ナデ、凹線	ナデ	石英、長石、雲母、黒色砂粒	にぶい橙	黒褐	良好				(外面) 少煤 (口唇部) 刻み	カ-30	Ⅲ	4793
	419	深鉢	口縁部	XⅨ	指ナデ、細沈線	指ナデ	石英、長石、角閃石、小石少混1~2 mm	にぶい褐	にぶい黄橙	良好				(外) 煤(口 唇部) 刻み山 形突起	ウ-29	Ⅲ	3730
90	420	深鉢	口縁部	XⅩ	ナデ、条痕文	ナデ	石英、長石、雲母	にぶい橙	灰黄褐	良好				三角断面口縁の 一部(口唇部) 貝殻刺突文	ア-29	Ⅲ	11672
	421	深鉢	胴部	XⅩ	条痕文	条痕文	石英、長石、白色小石少混1mm	にぶい赤褐	にぶい橙	良好				(外) 煤 三角 断面口縁一部	ア-28	Ⅲ	9885 9893
	422	深鉢	胴部	XXⅠ	ナデ→ミガキ	ナデ	石英、長石、砂粒混、小石少混1~2mm	灰	黄灰	良好				(外面) 煤付着	イ-26	Ⅲ	9562
	423	深鉢	胴部	XXⅠ	ミガキ	ケズリ	石英、長石、雲母	灰黄褐	にぶい褐灰	良好					ア-28	Ⅲ	10197
	424	浅鉢	底部	XXⅠ	ナデ	ナデ	石英、長石、雲母、砂粒混	にぶい褐	灰褐	良好		8.0			キ-27	Ⅲ	5941
	425	浅鉢	底部	XXⅠ	ミガキ	ナデ	石英、長石、雲母、角閃石、小石少 混1~2mm	浅黄橙	浅黄橙	良好		5.6		(外面) 少量 煤付着	エ-26	Ⅲ	6117
	426	深鉢	口縁部	XXⅡ	ナデ	ナデ	石英、長石、雲母、角閃石、黒色砂粒	にぶい橙	にぶい赤褐	良好				(外面) 煤付着	A-27	Ⅲ	11839
92	427	深鉢	口縁部	XXⅡ	ヘラナデ	ヘラナデ	石英、長石	黒褐	24	良好	20.8			(外面) 煤付着	C-5		一括
	428	深鉢	口縁部	XXⅡ	ヘラ状条痕	ナデ	石英、長石、雲母、砂粒混、小石少混1mm	にぶい黄橙	黄灰	良好					カ-30	Ⅲ	7412
	429	深鉢	口縁部	XXⅡ	ヘラ状条痕	ヘラ状条痕	石英、長石、雲母、砂粒混、しそ輝 石1~2mm	オリブ黒	灰黄	良好				(外面) 煤付着	EFG-15~17	Ⅱa	一括
93	430	深鉢	胴部	XXⅡ	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	石英、長石、雲母、輝石、黒色砂粒 小石少混1~2mm	黒褐	にぶい黄橙	良好					B-2	Ⅱ	3303 3304 3305
	431	深鉢	胴部	XXⅡ	ナデ、沈線	ナデ	石英、長石、雲母、角閃石、輝石、 砂粒混	にぶい褐	にぶい黄橙	良好		11.2		(外面) 少量 煤付着	EFG-15~17	Ⅱa	一括
	432	深鉢	胴~底部	XXⅡ	ヘラ状条痕	ヘラ状条痕	石英、長石、雲母、輝石、角閃石 小石少混1~2mm	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		9.2		(内面) 少量 煤付着	カ-28	Ⅲ	6398
	433	深鉢	底部	XXⅡ	ヘラ状条痕	ヘラ状条痕	石英、長石、白色小石少混1~2mm	にぶい橙	黒褐	良好		11.6			EFG-15~17	Ⅱa	一括
	434	深鉢	底部	XXⅡ	ナデ	ナデ	石英、長石、砂粒混、小石1mm、小石7mm	にぶい橙	黄灰	良好		11.6			オ-26	Ⅲ	6614 6615
	435	浅鉢	口縁部	XXⅡ	ハケメ、ミガキ	ハケメ、ミガキ	石英、長石、雲母、白色小石少混1 mm	黒	黒	良好				(口唇部) 円 形断面	13T	Ⅱa	284
	436	浅鉢	胴部	XXⅡ	ヘラナデ、横ナデ、 ミガキ	ヘラナデ、ミガ キ	石英、長石、雲母、小石少混1mm	灰黄褐	灰	良好					EFG-15~17	Ⅱa	一括
	437	浅鉢	口縁部	XXⅡ	ミガキ	ミガキ、沈線	石英、長石	黒	暗褐	良好					EFG-15~17	Ⅱa	一括
95	438	深鉢	口縁部	XXⅢ	ナデ	ナデ	石英、長石、雲母、砂粒混	黒褐	暗褐	良好				(口唇部) ひ れ状突起	-	-	-
	439	深鉢	口縁部	XXⅢ	ヘラ状条痕	ヘラ状条痕	石英、長石、角閃石、砂粒混	黒褐	灰オリブ	良好				補修孔	B-8	V	2108
	440	深鉢	口縁部	XXⅢ	ナデ	ナデ	石英、長石、雲母、角閃石	暗灰黄	浅黄	良好				(外面) 煤付着	-	-	-
	441	深鉢	口縁部	XXⅢ	ヘラ状条痕	ヘラ状条痕	石英、長石、雲母、角閃石、砂粒混	黄灰	浅黄橙	良好				(外面) 少量 煤付着	E~G-13・ 14	Ⅱa	一括

第16表 縄文土器観察表10

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
95	442	深鉢	口縁部	XXⅡ	ナデ	ナデ	石英、長石、雲母、角閃石、輝石、砂粒混	にぶい黄橙	灰黄	良好	40.0			(外面) 煤付着	C-5	Ⅰ	一括
	443	深鉢	口縁～胴部	XXⅡ	ヘラ状条痕	ヘラ状条痕	石英、長石			良好	31.2				EFG 15～17	Ⅱa	一括
	444	深鉢	口縁部	XXⅡ	条痕文	ナデ	石英、長石、雲母、角閃石、砂粒混	黒褐	にぶい橙	良好				(外面) 煤付着	C-7	Ⅱ	978
	445	深鉢	口縁部	XXⅡ	ヘラ状条痕	ヘラ状条痕	石英、長石、雲母、小石少混、小石少混1～5mm	灰黄褐	にぶい黄橙、黒	良好				(外面) 煤付着	—	—	—
96	446	深鉢	口縁～胴部	XXⅡ	ヘラ状条痕、沈線	ヘラ状条痕	石英、長石、雲母、小石少混1～2mm	黒褐	オリーブ黒	良好	36.4			(内外) 煤付着	13T	Ⅱa	311
	447	深鉢	口縁部	XXⅡ	ヘラ状条痕、沈線	ヘラ状条痕	石英、長石、小石少混1～2mm、砂粒混	暗赤褐	にぶい黄褐	良好					E～G-15～17	Ⅱa	一括
	448	深鉢	口縁～胴部	XXⅡ	ヘラ状条痕、沈線	ヘラ状条痕	石英、長石、小石少混1～5mm	黒褐	灰黄褐	良好				(外面) 煤付着	EFG-13・14	Ⅰ	—
	449	深鉢	胴～底部	XXⅡ	条痕文	ヘラナデ	石英、長石、金雲母、黒雲母、白色小石多混1～7mm	にぶい黄橙	暗灰黄	良好		9.0		(内面) 少量煤付着	EFG-13・14	Ⅱa	—
	450	深鉢	胴～底部	XXⅡ	ヘラナデ	ヘラナデ	石英、長石、雲母、小石少混1～3mm	にぶい黄橙	黄灰	良好		10.6			EFG-15～17	Ⅱa	一括
	451	深鉢	底部	XXⅡ	ヘラナデ	ヘラナデ	石英、長石、雲母、砂粒混	にぶい黄橙	黄灰	良好		10.2		(外面) 少量煤付着	EFG-15～17	Ⅱa	一括
	452	深鉢	底部	XXⅡ	ヘラナデ	—	石英、長石、雲母、黒色砂粒	にぶい黄橙	黄黒	良好					C-6	—	一括
	453	深鉢	底部	XXⅡ	ヘラナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ、ヘラケズリ	石英、長石、雲母、砂粒混、小石多混1～3mm	灰黄褐	褐灰	良好		7.6			B-3	—	一括
	454	深鉢	底部	XXⅡ	ハケメ、ヘラケズリ	ハケメ、ヘラケズリ	石英、長石、雲母、砂粒混	にぶい黄橙	褐灰	良好		9.2		(内面) 煤付着	C-7	Ⅱ	1010
	455	深鉢	底部	XXⅡ	ヘラナデ	ヘラナデ	石英、長石、雲母、砂粒混、小石少混1mm	灰黄	にぶい黄橙	良好		13.0			—	—	—
	456	浅鉢	口縁部	XXⅡ	ミガキ	ミガキ	石英、長石、輝石	暗灰黄	黄灰	良好	36.4			(口唇部) ひれ状突起	12T	Ⅱ	3
	457	浅鉢	口縁部	XXⅡ	ミガキ	ミガキ	石英、長石、輝石	黄灰	灰オリーブ	良好	27.6			(口唇部) ひれ状突起 赤色顔料少量付着	B-5	Ⅱa	808
97	458	浅鉢	口縁部	XXⅡ	ミガキ、沈線	条痕文、ミガキ	石英、長石、輝石	黄灰	黄灰	良好	17.6			(外面) 丹塗り(口縁部) 山形	C-7	Ⅱa	1079
	459	浅鉢	口縁部	XXⅡ	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	石英、長石	黄灰	暗灰黄	良好	30.8				C-7	V	2843
	460	浅鉢	口縁～胴部	XXⅡ	ヘラナデ、ミガキ	ヘラナデ、ミガキ、沈線	石英、長石、輝石	灰黄	黄灰	良好	27.2				EFG-13・14	—	—
	461	浅鉢	口縁～胴部	XXⅡ	ヘラナデ、ミガキ	ヘラナデ、ミガキ	石英、長石、輝石	黒褐	オリーブ黒	良好	14.6				C-2	Ⅱa	1497
	462	浅鉢	口縁部	XXⅡ	ミガキ、ヘラナデ	ミガキ	石英、長石	黒灰	黒灰、赤褐	良好	38.6				—	—	—
	463	浅鉢	口縁部	XXⅡ	ミガキ、ハケメ	ミガキ、ハケメ	石英、長石	黄灰	暗灰黄	良好	30.1				EFG-15～17	Ⅱa	一括
	464	浅鉢	口縁部	XXⅡ	ミガキ	ミガキ	石英、長石	黄灰	灰黄	良好	24.8				EFG-15～17	Ⅱa	一括
	465	浅鉢	口縁部	XXⅡ	板ナデ	ナデ	石英、長石	黄灰	灰黄	良好				朱塗り(顔料) 水銀朱?	17T	Ⅱa	81
	466	浅鉢	口縁～胴部	XXⅡ	ヘラミガキ、ナデ	ヘラナデ、ヘラミガキ	石英、長石、輝石	黒灰	黒灰	良好	36.8				B-7 C-7	Ⅱ	927 1083
	467	浅鉢	胴部	XXⅡ	ミガキ	ミガキ	石英、長石	暗灰黄	黄灰	良好					EFG-13～17	—	—
	468	浅鉢	底部	XXⅡ	ヘラミガキ、ナデ、沈線	ヘラミガキ、ナデ	石英、長石、輝石	灰黒	黄灰	良好		8.6		沈線内赤色顔料少量残	B-7	Ⅱ	961
	469	浅鉢	底部	XXⅡ	ミガキ、沈線	ミガキ	石英、長石、輝石	黄褐	にぶい黄橙	良好		13.2			EFG-13・14	Ⅱa	—
	470	ボール型浅鉢	口縁部	XXⅡ	ナデ、三角貼付突帯	ミガキ	石英、長石、角閃石、小石多混1～2mm	黒褐	にぶい黄橙	良好	44.2			(外面) 煤付着、やや摩耗	B-3 C-5	Ⅱ	2519 一括
98	471	ボール型浅鉢	口縁～胴部	XXⅡ	ナデ	ヘラミガキ	砂粒混、石英、長石	暗灰黄、黒褐	暗灰黄、黒褐	良好	34.0			(外面) 黒斑有	C-4	Ⅱ	3386
	472	ボール型浅鉢	口縁部	XXⅡ	ナデ	ミガキ	石英、長石、輝石	にぶい黄橙	黒	良好				(外面) 煤付着	EFG-15～17	Ⅱa	一括
	473	ボール型浅鉢	口縁部	XXⅡ	ヘラナデ	ヘラナデ	石英、長石、角閃石	灰黄	灰黄、黄灰	良好	30.2				D-6	—	一括
	474	ボール型浅鉢	口縁部	XXⅡ	ナデ	ヘラミガキ	石英、長石、白色小石少混	黒灰、灰黄	黒、褐	良好				(外面) 煤付着	B-7	Ⅱa	940
99	475	ボール型浅鉢	口縁～胴部	XXⅡ	ナデ	ミガキ	石英、長石、雲母、砂粒混、白色小石少混1mm	黒褐	暗灰黄	良好				(外面) 煤付着	EFG-13・14	Ⅱa	—
	476	ボール型浅鉢	口縁部	XXⅡ	ナデ	ミガキ	石英、長石、雲母、砂粒混、小石少混1～2mm	黒褐	暗灰黄	良好				(外面) 煤付着	C-4	Ⅱ	2589
	477	ボール型浅鉢	口縁部	XXⅡ	ナデ、条痕文	ヘラミガキ	長石、石英	灰黄	灰黄	良好				(外面) 煤付着	EFG-13・14	Ⅱa	—
	478	ボール型浅鉢	底部	XXⅡ	圧痕	ミガキ	石英、長石、輝石	にぶい黄橙	黒、にぶい黄橙	良好				(底面) 平織痕	EFG-13・14	Ⅱa	—
	479	ボール型浅鉢	底部	XXⅡ	圧痕	ミガキ	石英、長石、輝石	灰黒、灰黄	黒	良好					B-8	Ⅱ	1342
	480	ボール型浅鉢	底部	XXⅡ	ヘラナデ	ミガキ	石英、長石、輝石、角閃石	黒、にぶい黄褐	黒	良好					EFG-15～17	Ⅱa	一括
	481	ボール型浅鉢	底部	XXⅡ	圧痕	ミガキ	石英、長石、輝石	黒褐、浅黄	にぶい黄	良好				(底面) 平織痕	EFG-13・14	Ⅱa	一括
	482	ボール型浅鉢	底部	XXⅡ	圧痕	ミガキ	石英、長石、輝石	にぶい橙	黒褐	良好				(編布) 縦糸間17mm、横糸間1cmあたり7本、S字燃	BC-21～28	Ⅲ	—
	483	ボール型浅鉢	胴部	XXⅡ	ナデ	ミガキ	石英、長石、白色小石少混	黒、灰黄褐	にぶい黄橙	良好					EFG-15～17	Ⅱa	一括
	484	ボール型浅鉢	底部	XXⅡ	圧痕	ミガキ	石英、長石、輝石	にぶい橙、褐灰	黒	良好				(底面) 編布痕	カー27	Ⅲ	5850
	485	ボール型浅鉢	底部	XXⅡ	条痕→ナデ	横ナデ	石英、長石、輝石	浅黄	浅黄	良好		6.0		(内面) 煤付着	C-7	Ⅱa	976
	486	ボール型浅鉢	口縁～底部	XXⅡ	ヘラナデ、ミガキ	ヘラナデ、ミガキ	石英、長石、雲母、砂粒混、赤・白色小石多混1～5mm	黒褐	黒褐	良好	20.5		9.3	呼称「マリ」	C-4	Ⅲ	2615 注記なし
100	487	深鉢	口縁部	XXⅣ	条痕文、ヘラナデ、刻目突帯	条痕文、ヘラナデ	石英、長石、雲母、輝石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	33.6			(外面) 煤付着	C-2 C-6	Ⅲ	1182 1183 (2個) 1176 1171 1184 1179
	488	深鉢	口縁部	XXⅣ	条痕文、ヘラナデ、刻目突帯	条痕文、ヘラナデ	石英、長石、雲母、輝石	黒、橙	黒、黒褐	良好	26.0			(外面) 少量煤付着	C-5	Ⅲ	1177 1178 1180
	489	深鉢	口縁部	XXⅣ	条痕文、ヘラナデ、刻目突帯	条痕文、ヘラナデ	石英、長石、雲母、輝石、角閃石	黒、にぶい黄橙	にぶい黄橙、灰黄褐	良好	25.0			補修孔	C-7 C-5	Ⅱa Ⅲ	1322 1173

第17表 縄文土器観察表11

挿図 番号	遺物 番号	器種	部位	分類	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量 (cm)			備考	出土区	層	注記 番号
					外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高				
100	490	深鉢	口縁部	XXIV	ミガキ, 刻目突帯	ナデ	石英, 長石	黒	暗灰黄	良好					EFG-13・14	Ⅲa	一括
	491	深鉢	口縁部	XXIV	ナデ, 刻目突帯	ナデ	石英, 長石, 小石少混	灰黄	にぶい黄	良好					EFG-15~17	Ⅲa	一括
	492	深鉢	口縁部	XXIV	条痕文	条痕文	石英, 長石, 白色小石少混	橙, 褐灰	褐灰, にぶい黄橙	良好					EFG-13・14	—	—
	493	深鉢	口縁部	XXIV	条痕文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 小石4mm	にぶい黄橙	黄灰	良好					EFG-15~17	Ⅲa	一括
101	494	深鉢	口縁部	XXIV	ナデ, 条痕文, 刻目突帯	ナデ, 条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石, 角閃石 小石1~2mm	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好					BC-21~28	Ⅲ	—
	495	深鉢	胴部	XXIV	条痕文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 小石5mm, 輝石	橙	にぶい橙	良好					14	Ⅲ	—
	496	深鉢	胴部	XXIV	条痕文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 輝石	黄灰	にぶい黄橙	良好				(外面) 少量煤付着	EFG-13・14	Ⅲa	—
	497	深鉢	胴部	XXIV	ナデ, 刻目突帯	ナデ	石英, 長石, 雲母, 輝石	黒褐	赤褐, 黒褐	良好				(外面) 煤付着	C-5	Ⅲ	1206
	498	深鉢	底部	XXIV	ハラケズリ	ハラナデ	石英, 長石, 雲母, 砂粒混, 白色小石少混1mm	にぶい黄橙	灰黄	良好		10.8			E-G-15~17	Ⅲa	一括
	499	浅鉢	口縁部	XXIV	ハラミガキ	ハラミガキ	石英, 長石, 小石多混1~2mm, 金雲母	黒褐	暗褐	良好				(外面) 煤付着 (口縁部) 山形	C-5	—	一括
	500	浅鉢	口縁部	XXIV	ハラミガキ	ハラミガキ	石英, 長石	にぶい赤褐	にぶい褐	良好	25.6			(外面) 赤色顔料?	E-G-15~17	Ⅲa	一括
	501	浅鉢	口縁部	XXIV	ハラミガキ, 沈線	ハラミガキ	石英, 長石, 雲母, 輝石, 小石少混1~7mm, 砂粒混	灰黄	黄灰	良好	20.0			(外面) 少量煤付着	C-5		一括
	502	浅鉢	口縁~胴部	XXIV	ハラミガキ	ハラミガキ	石英, 長石, 赤色小石1mm, 小石少混	黄灰	黄灰	良好	22.0				EFG-13・14	Ⅲa	一括
	503	浅鉢	口縁部	XXIV	ナデ, 沈線(丹塗り)	ハラミガキ	石英, 長石, 雲母, 輝石	灰黄	灰黄	良好	18.5				EFG-15~17	Ⅲa	一括
	504	浅鉢	口縁部	XXIV	ハラミガキ	ハラミガキ	石英, 長石	暗灰黄	浅黄	良好	21.2				EFG-15~17	Ⅲa	一括
	505	浅鉢	胴~底部	XXIV	ハラミガキ	ハラミガキ	石英, 長石	—	—	良好		6.0			EFG-13・14	Ⅲa	一括
102	506	マンコ	胴部	XXIII	条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母, 角閃石, 小石少混1~2mm	褐灰	にぶい黄橙	良好					11T	Ⅱe	215
	507	マンコ	胴部	XXIV	条痕→ナデ	ナデ	石英, 長石, 雲母, 砂粒混, 白色小石少混1mm	褐灰	黄灰	良好				(外面) 少量煤付着	EFG-15~17	Ⅲa	—
103	508	深鉢	口縁部	VIII b	ナデ, 突帯	ナデ	石英, 長石, 小石少混1~2mm	褐灰	にぶい橙	良好					7号集石	—	3665
	509	深鉢	口縁部	XVII	凹点, 凹線, 条痕文	条痕文	石英, 長石, 角閃石, 雲母, 小石少混1~2mm	明赤褐	にぶい赤褐	良好				(口唇部) 凹点刻み	5号集石	—	—
	510	深鉢	胴部	VII	ナデ	条痕文	石英, 長石, 雲母, 小石少混1mm	褐灰	灰黄褐	良好					8号集石	—	—
	511	深鉢	胴部	VIII b	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 小石少混1~2mm	褐灰	にぶい橙	良好				(外面) 煤付着	12号集石	—	5
	512	深鉢	口縁部	XV	条痕文, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 赤・白小石少混1~5mm	黒褐	にぶい赤褐	良好	26.7			(外面) 少量煤付着	13号集石	—	2 3
	513	深鉢	胴部	IX・X	条痕文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 砂粒混	黄灰	黄灰	良好					13号集石	—	4
	514	深鉢	口縁~胴部	IX・X	条痕文, 刺突文	条痕文	石英, 長石, 雲母, 小石少混1~2mm	黒褐	オリーブ黒	良好	31.6			(外面) 少量煤付着	15号集石	Ⅲ	5 6
	515	ボール型浅鉢	底部	XXIII	ナデ	条痕文	石英, 長石, 赤色小石5mm	にぶい赤褐	灰黄褐	良好				(外面) 少量煤付着	15号集石	—	9
104	516	深鉢	胴部	VIII a	条痕→ナデ, ミミズバレ状突帯	条痕→ナデ	石英, 長石	暗灰黄	黄灰	良好					18号集石	—	197
	517	深鉢	胴部	VIII a	条痕文, ミミズバレ状突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 砂粒混, 赤・白小石少混1~3mm	にぶい黄褐	黒褐	良好					18号集石	—	5
	518	深鉢	胴部	VII c	条痕文, とがり突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 小石少混1~2mm	褐灰	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	18号集石	—	193
	519	深鉢	胴部	IX e	条痕文, 押し引き文	条痕文	石英, 長石, 雲母	褐灰	にぶい橙	良好				(外面) 煤付着	18号集石	—	199
	520	深鉢	胴部	IX b	条痕文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 砂粒混	にぶい橙	褐灰	良好					18号集石	—	31
	521	深鉢	胴部	VII b	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 砂粒混, 小石少混1~2mm	褐灰	にぶい黄橙	良好				(外面) 煤付着	21号集石	—	—
	522	深鉢	口縁~胴部	VIII b	条痕文	条痕文	石英, 長石, 黒色小石1mm	黒褐	灰黄褐	良好				(外面) 少量煤付着	27号集石	—	93 94
	523	深鉢	口縁部	XIII a	条痕文	条痕文	石英, 長石, 雲母, 砂粒混, 白色小石少混1~2mm	オリーブ黒	黄灰	良好				(外面) 少量煤付着	28号集石	—	2
	524	深鉢	胴部	XIII a	条痕文	条痕文	石英, 長石	灰黄褐	褐灰	良好					28号集石	—	3
	525	深鉢	胴部	VIII c	条痕文, とがり突帯	条痕文	石英, 長石	灰黄褐	灰黄褐	良好					7号集石	—	11791
	526	深鉢	胴部	VIII b	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石	灰黄	にぶい黄橙	良好				(外面) 少量煤付着	磨石集積1号	—	8
	527	深鉢	胴部	X b	刺突文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 白色小石少混1~2mm	褐灰	にぶい褐	良好				(外面) 少量煤付着	磨石集積1号	—	22
	528	深鉢	胴部	VII c	条痕文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 砂粒混, 小石少混1mm	黒褐	灰褐	良好				(外面) 煤付着	磨石集積1号	—	15
	529	深鉢	口縁~胴部	X a	条痕文, 横刺突文, 条痕ナデ消し	条痕文	石英, 長石, 小石少混1~5mm	灰褐	灰黄褐	良好				(外面) 少量煤付着	磨石集積1号	—	13 24 26
	530	深鉢	胴部	IX e	条痕文, 押し引き文	条痕文	石英, 長石, 輝石, 白色小石2mm, 砂粒混	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好				(外面) 少量煤付着	磨石集積1号	—	30
	531	深鉢	胴部	IX・X	条痕文, 刻目突帯	条痕文	石英, 長石, 白色小石5mm, 雲母, 輝石	暗褐	褐灰	良好				(外面) 少量煤付着	磨石集積1号	—	31
	532	深鉢	口縁部	VIII a	条痕文, ミミズバレ状突帯	条痕文	石英, 長石, 雲母, 輝石, 赤色小石少混1~2mm	暗赤褐	にぶい黄褐	良好				(外面) 煤付着	石斧集積2号	—	11089
	533	深鉢	口縁部	VII a	条痕文, ミミズバレ状突帯	条痕文	石英, 長石, 小石少混1~5mm, 雲母	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好					石斧集積2号	—	11085
	534	深鉢	胴部	IX b	ナデ, 刻目突帯, 横刺突文	条痕文	石英, 長石, 小石少混1mm, 砂粒混	灰黄褐	にぶい黄橙	良好					石斧集積2号	—	11086
	535	深鉢	胴部	IX d	条痕文, 刻目突帯, 沈線, ミミズバレ状突帯	条痕文	石英, 長石, 角閃石, 雲母	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好				(内外) 一部煤付着	剥片集積1号	—	3
	536	深鉢	胴部	VII b	条痕文, かすれ・とぎれ突帯	条痕文	石英, 長石, 小石少混1~2mm	灰黄褐	灰黄褐	良好				(外面) 少量煤付着	剥片集積1号	—	14

第3節 出土石器

縄文時代の石器は、Ⅴ層、Ⅳ層、Ⅲ層、から合計919点が出土しているが、Ⅲ層からの出土がほとんどを占めている。これは、Ⅲ層が河川の二次堆積層で縄文時代早期から晩期までの遺物包含層となっているためである。そのために時期の判断は、遺物の垂直分布と土器の分布と照らし合わさなければ、判断は難しい。そこで本遺跡では、石器組成を時期ごとに検討することが難しいため各器種ごとに包括して報告した。また、調査時に原位置を保っているとは判断できたものは、1点ずつ出土地点と絶対高の記録を行ったが、河川に近く原位置を保っていないと判断したものは、グリッドごとに包含層一括資料として扱った。

本報告書で取り扱った器種は、石鏃、石匙、石錐、挟入石器、楔形石器、スクレイパー、大型削器、両面加工石器、尖頭状石器、二次加工剥片、剥片、石核、ハンマーストーン、石斧、磨石／敲石、石皿、異形石器、礫器である。さらにスクレイパーについては、刃部の観察により削器、搔器の区分もある。

石材は、肉眼的特徴によっておおむね次のように分類した。なお、観察表等においては、それぞれ略号を使用し、石材ごとに色分け表示を行った。

黒曜石Ⅰ類 (OB1)

不純物を多く含み、漆黒で光を全く透さないものを包括した。薩摩川内市樋脇町上牛鼻、日置郡市来町平木場、串木野市宇都などで採取される黒曜石に類似する。

黒曜石Ⅱ類 (OB2B)

わずかに透明感があり、不純物を多く含むものを包括した。鹿児島市の三船、大口市の日東、五女木、肝属郡根占町長谷、熊本県球磨郡球磨村の白浜などで採取できる黒曜石に類似する。

黒曜石Ⅲ類 (OB3A) (OB3B)

黒色～鉛色の透明感があって不純物をほとんど含まない黒曜石を包括した。おおむね宮崎県えびの市の桑ノ木津留、大口市上青木などで採取できる黒曜石に類似するものであるが、既知の原産地資料と一致しないものも含まれている。

黒曜石Ⅳ類 (OB4)

黒色で不純物を含まない良質の黒曜石を包括した。佐賀県伊万里市腰岳産の黒曜石に類似する。

黒曜石Ⅴ類 (OB5)

黒灰色で不純物を少量含むものを包括した。長崎県佐世保市の針尾中町などで採取できる黒曜石に類似する。

黒曜石Ⅵ類 (OB6)

青灰色で不純物を少量含むものを包括した。長崎県佐世保市東浜などで採取できる黒曜石に類似する。

黒曜石Ⅶ類 (OB8)

不純物をほとんど含まない、灰白色～灰色の黒曜石を包括する。大分県姫島で採取できる黒曜石に類似する。

安山岩 (AN)

本遺跡では無斑晶質の安山岩を包括する。佐賀県多久などの西北九州で採取できるサヌカイトに類似するものと、薩摩川内市上牛鼻付近で採取できるいわゆる玻璃質安山岩が含まれる。

ギョクズイ (CC)

熱水鉱床等で発達する白色～黄色の珪質岩と鉄石英を包括した。

チャート (CH)

淡緑色～白色の節理が目立つものと、白色に黒色の筋の入る石材がある。

ホルンフェルス (HF)

接解變成岩で黒雲母の多いものも含む。本遺跡では、明灰色～黒色のものを包括した。

頁岩 (SH)

節理を多く内包する淡緑色頁岩や青灰色の珪質頁岩、光沢のない硬質の頁岩を包括している。

砂岩 (SS)

本遺跡では、比較的緻密な砂岩がハンマーストーンや磨石、敲石、石皿、台石に利用されている。

蛇紋岩 (SE)

緑色～黒灰色で川辺町八瀬尾で採取できるものと類似する。硬質で良質の蛇紋岩を包括した。本遺跡では、磨製石斧に利用されている。

輝石安山岩 (PA)

黒色鉱物を含む、斑晶のあまり発達していない火成岩を一括して包括した。本遺跡では、磨石、敲石、石皿、台石に利用されている。

1 石鏃 (第107図～第110図)

本遺跡では、179点の石鏃及び石鏃未製品が出土した。その中から原位置を保ち、形態が判断可能なものを中心に77点を図化した。

形態及び形状には多様な類型が認められるが、ここでは、基部の形状及び挟りの形状をもとにいくつかの類型に分けて報告する。

Ⅰ類 (第107図 S1～S14)

比較的小型で平基及び基部の挟りが浅く、長幅比が1:1もしくは近い石鏃を包括した。S2、S3は整形剥離が丁寧であり、S3は主剥離面を残す。S4、S5は平基で、S5は整形剥離が丁寧で深い。S6は浅い挟りが入るが脚が左右非対称である。S7は右側縁と基部に整形剥離が見られるものの浅く素材剥片時の剥離と主剥離面が広く残り左側縁の整形に至っていないため制作段階のものである。S8は先端と左の脚部が欠損し脚先が尖る。S9～S12は広い整形剥離が残り、S9は整形剥離が浅く主剥離

面が広く残る。S13は先端が欠損する。S14は五角形鏃で、細かな浅い整形剥離が入るが、主剥離面が大きく残る。

Ⅱ類（第107図 S15～S22）

基部に挟りが入り脚部が木葉状で大きな整形剥離が入り長幅比が1：1もしくは近い石鏃を包括した。S15は表裏両面ともに幅広の整形剥離が入る。S16～S21の整形剥離は幅、長さ共に均一でない。S18～S21は主剥離面が残り、S20は礫面が広く残る。S22は大型の鏃でそのほとんどを欠損し整形剥離は大きく主剥離面を残す。

Ⅲ類（第108図 S23～S48）

基部に浅い挟りが入り、長幅比が縦が大きい二等辺三角形のものを包括した。総じて連続する細かな整形剥離が入るが、S24は整形剥離が一定でなく、S27、S31、S34、S41、S43、S44、S47は主剥離面が残る。また、S28、S34は礫面が残り厚みを減じていない。S47、S48は平基で整形剥離途中の段階である。また、S23、S30、S33、S34、S37、S39、S43、S44の先端の形状は、両側縁の整形剥離により直角から鈍角になり肩を張る形状であり、S25、S26、S35、S36、S38、S41、S45は、先端から脚先まで直線的で鋭い形状であり、S41、S45以外両面共に細かで深い剥離により整形される。

Ⅳ類（第109図 S49～S65）

基部に深い挟りが入り、長幅比が縦が大きい二等辺三角形のものを包括した。総じて連続する細かな整形剥離が入るが、S49、S51、S52は左側縁中央から脚にか



第105図 縄文時代の石器出土分布図 1

けて2つの挟りが入り段を持つ。S53は両側縁を鋸歯状の整形が施され挟りが深い。S54は脚先が左右非対称である。S58は左脚部が欠損するが、基部は深い挟りが入り、いわゆる鋤形鏃の形状で腹面には、細かな整形剥離が入らない。S59～S61, S64は、両側縁ともに両面から細かな連続する整形剥離により直線的に側縁を整形し、特にS61, S64は細かな鋸歯状の整形を施し脚先は尖る。S63, S65は、両側縁を深い整形剥離で鋸歯状に整形を施す。

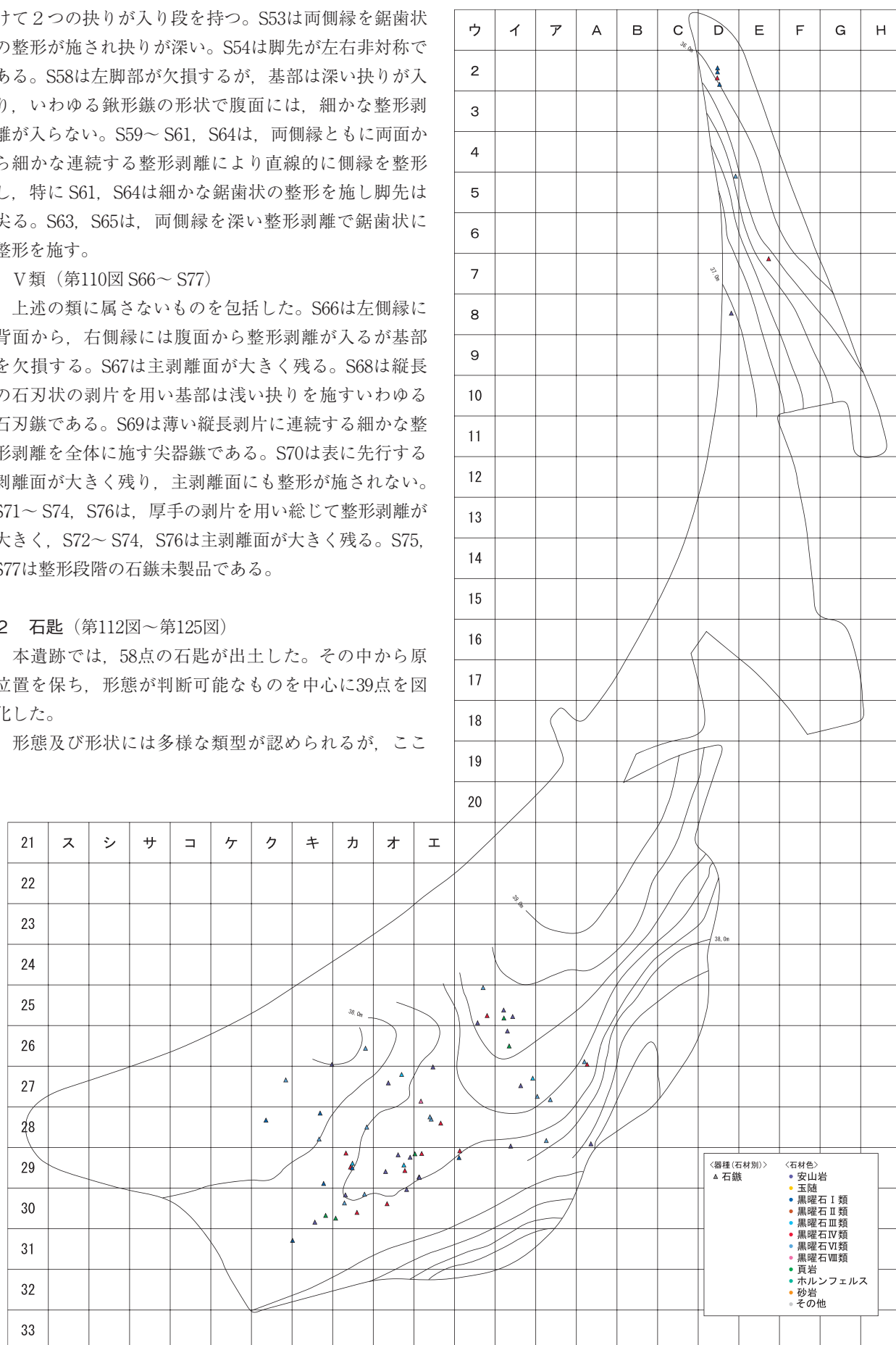
V類（第110図 S66～S77）

上述の類に属さないものを包括した。S66は左側縁に背面から、右側縁には腹面から整形剥離が入るが基部を欠損する。S67は主剥離面が大きく残る。S68は縦長の石刃状の剥片を用い基部は浅い挟りを施すいわゆる石刃鏃である。S69は薄い縦長剥片に連続する細かな整形剥離を全体に施す尖器鏃である。S70は表に先行する剥離面が大きく残り、主剥離面にも整形が施されない。S71～S74, S76は、厚手の剥片を用い総じて整形剥離が大きく、S72～S74, S76は主剥離面が大きく残る。S75, S77は整形段階の石鏃未製品である。

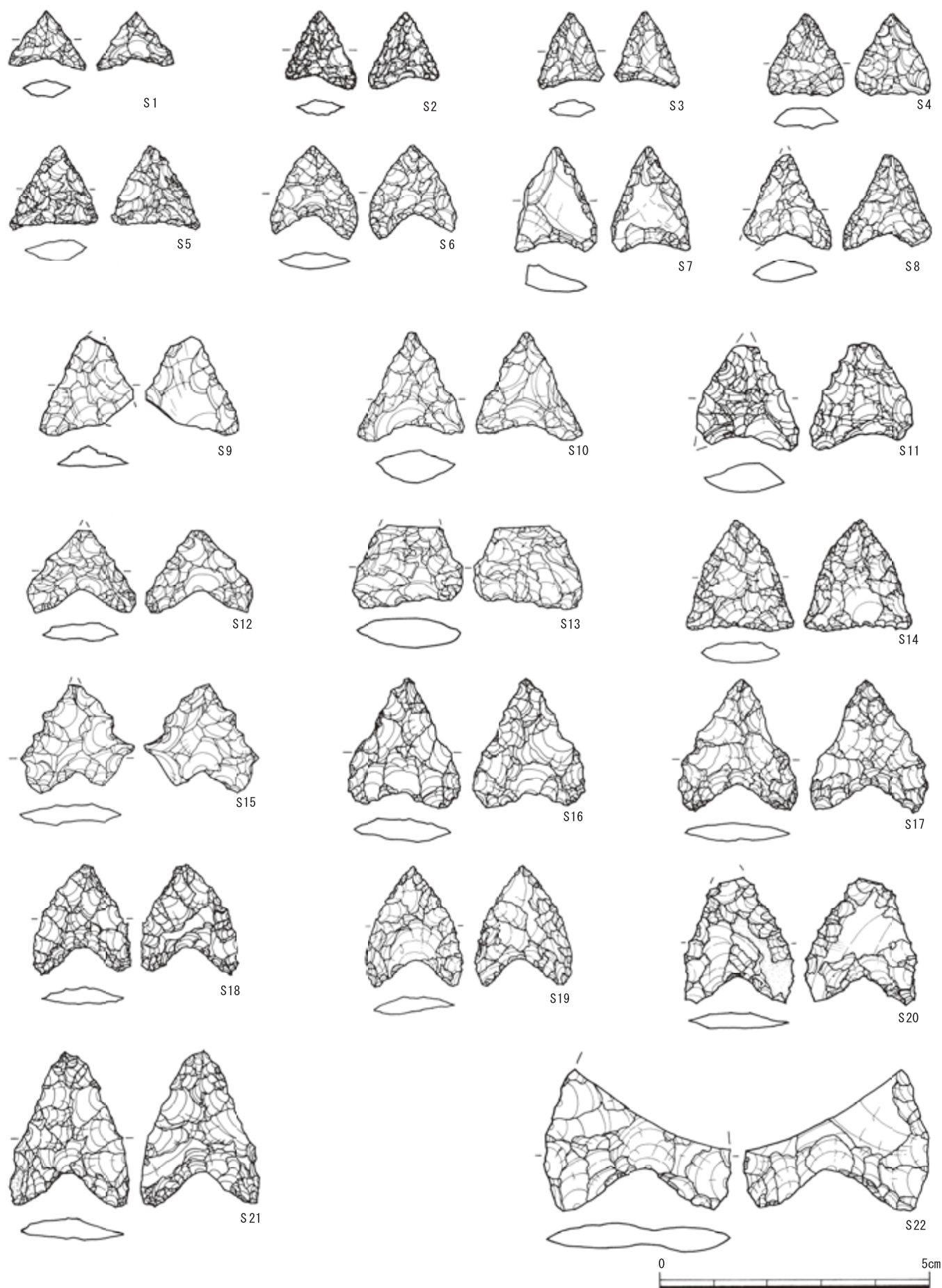
2 石匙（第112図～第125図）

本遺跡では、58点の石匙が出土した。その中から原位置を保ち、形態が判断可能なものを中心に39点を図化した。

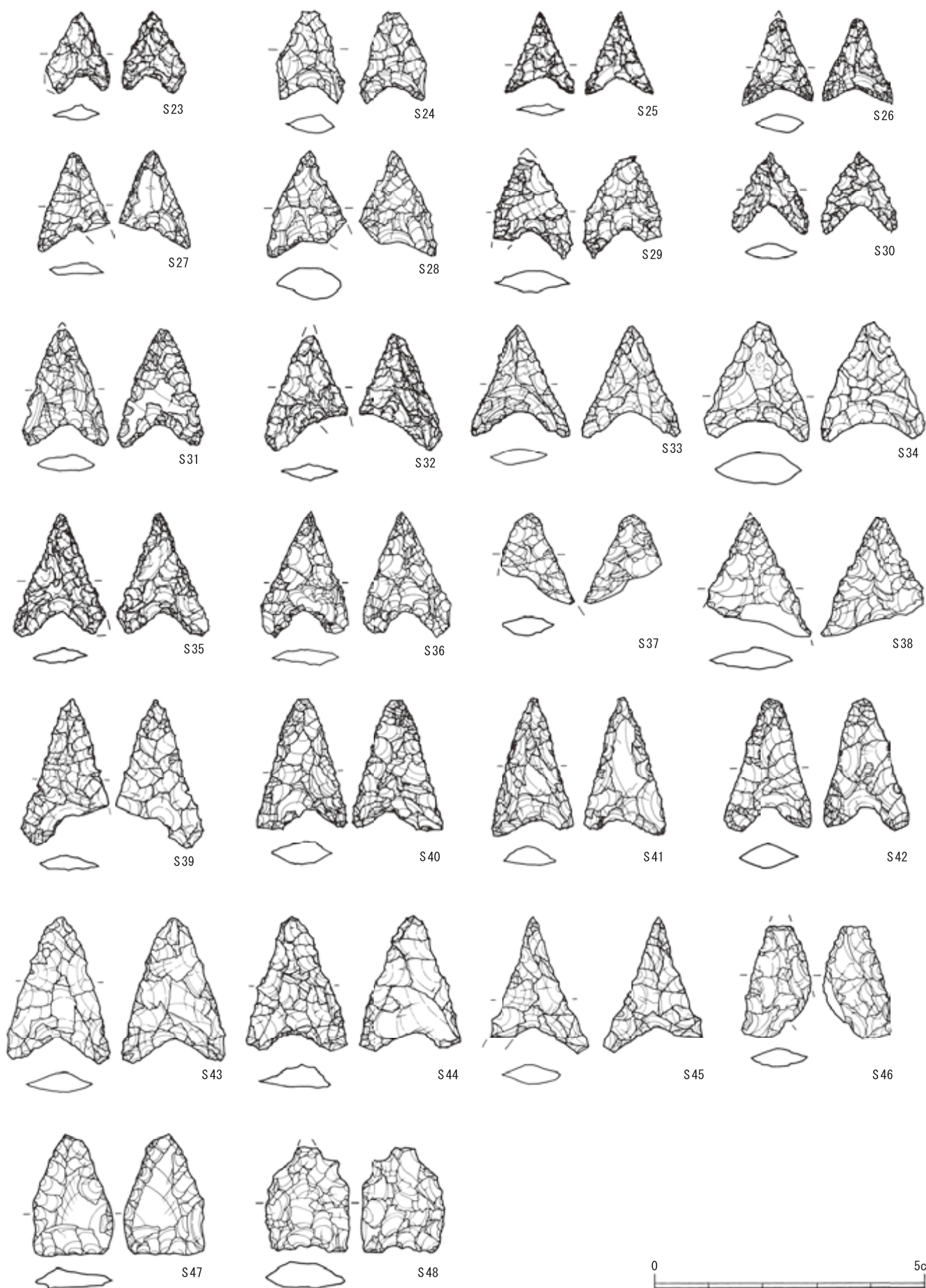
形態及び形状には多様な類型が認められるが、ここ



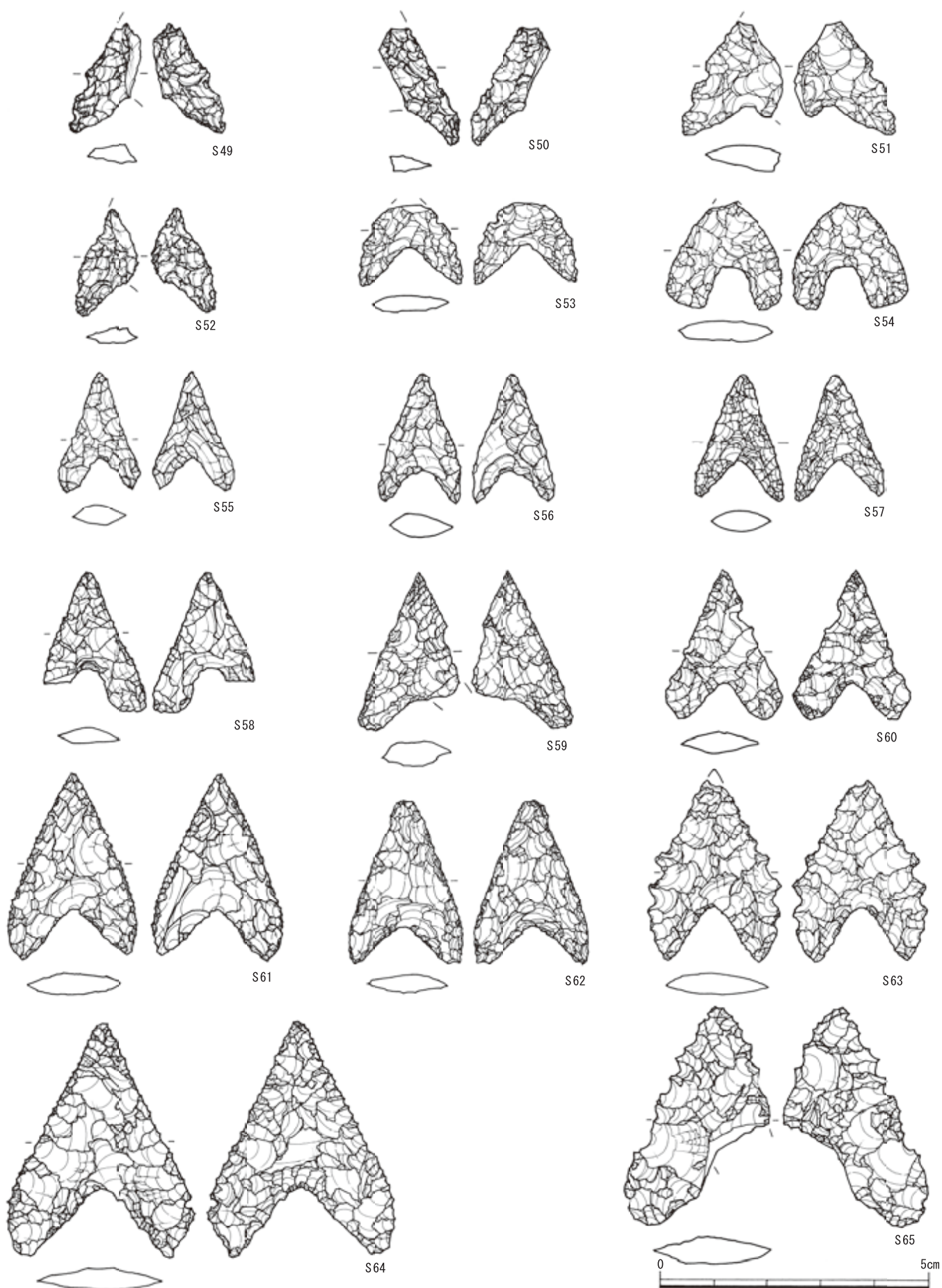
第106図 縄文時代の石器出土分布図2（石鏃，異形石器，ドリル他）



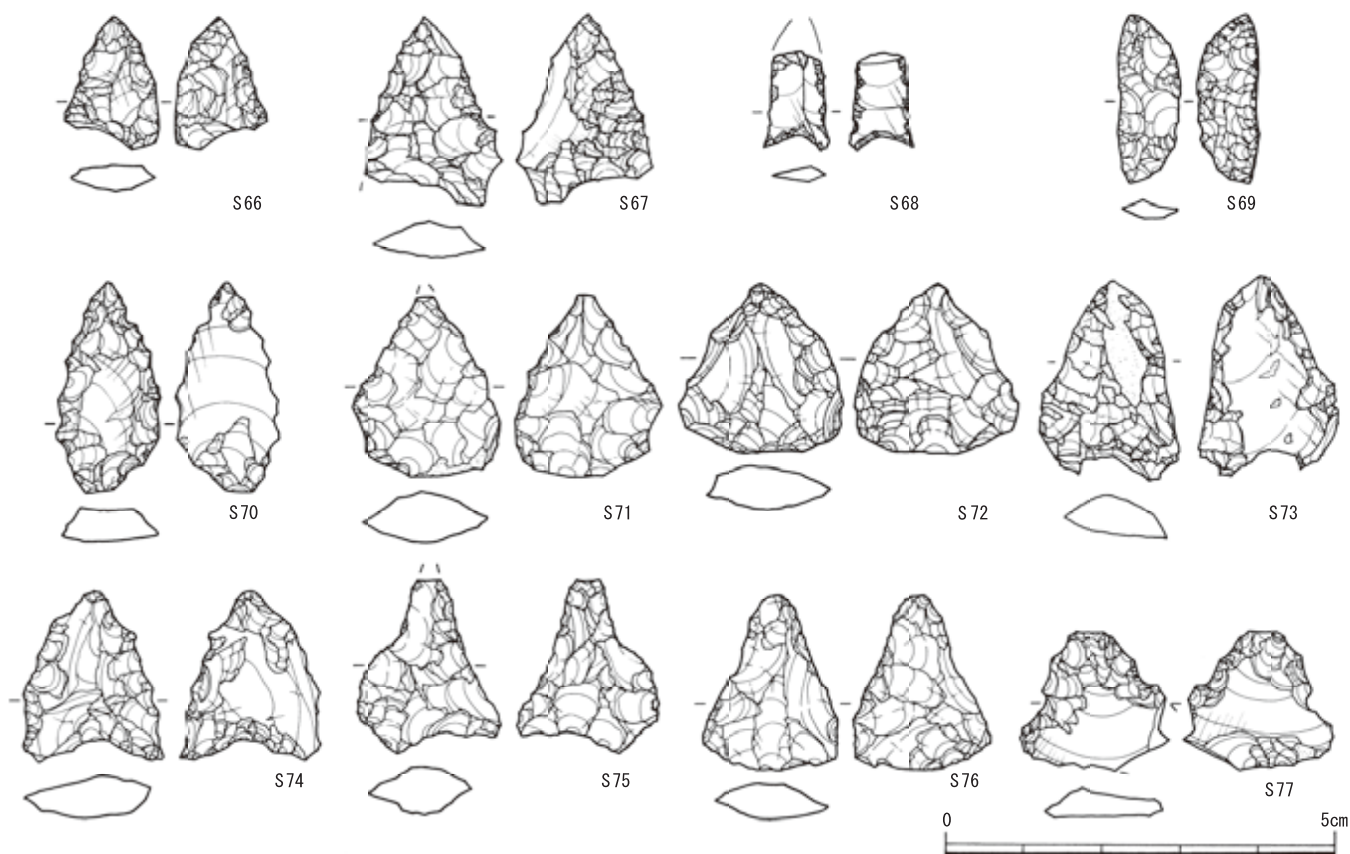
第107図 縄文時代の石器1（石鏃1）



第108図 縄文時代の石器2（石鏃2）



第109図 縄文時代の石器3 (石鏃3)



第110図 縄文時代の石器4（石鏃4）

第18表 縄文時代石器観察表（1）

挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
107	1	石鏃	—	OB	1	11.0	13.4	3.0	0.26	494	9T	V	—
	2	石鏃	—	SH	—	5.2	11.8	3.2	0.43	8797	イ-26	Ⅲ	—
	3	石鏃	—	OB	4	14.0	12.0	3.0	0.33	3650	C-7	V	—
	4	石鏃	—	OB	1	15.0	13.9	4.0	0.71	7473	キ-31	Ⅲ	—
	5	石鏃	—	OB	4	19.9	19.5	3.6	0.63	3-一括	カ-31	Ⅲ	—
	6	石鏃	—	OB	4	17.2	15.9	3.1	0.64	4333	オ-30	Ⅲ	—
	7	石鏃	—	AN	—	(9.3)	13.8	4.6	(0.99)	4030	オ-29	Ⅲ	—
	8	石鏃	—	OB	6	(17.6)	(16.5)	4.0	(0.73)	10584	A-27	Ⅲ	—
	9	石鏃	—	SH	—	(17.8)	(17.1)	3.6	(0.68)	3966	エ-29	Ⅲ	—
	10	石鏃	—	AN	—	20.0	19.8	5.7	1.17	4897	カ-30	Ⅲ	—
	11	石鏃	—	CC	—	(18.6)	(18.7)	17.9	(1.46)	3-一括	カ-31	Ⅲ	—
	12	石鏃	—	OB	4	(15.0)	(19.6)	3.1	(0.67)	5469	エ-28	Ⅲ	—
	13	石鏃	—	OB	1	(15.3)	(20.3)	5.8	(1.99)	6782	キ-28	Ⅲ	—
	14	石鏃	—	AN	—	19.8	19.5	3.7	1.22	3-一括	エ-32	Ⅲ	—
	15	石鏃	—	AN	—	(20.2)	(20.9)	4.1	(1.25)	11119	A-29	Ⅲ	—
	16	石鏃	—	OB	6	24.4	20.5	3.8	1.33	7783	カ-30	Ⅲ	—
	17	石鏃	—	AN	—	29.5	21.8	3.7	1.32	7868	オ-30	Ⅲ	—
	18	石鏃	—	OB	6	21.4	8.2	3.1	0.77	7654	カ-30	Ⅲ	—
	19	石鏃	—	AN	—	(22.0)	17.4	3.0	(0.86)	3-一括	ウ-31	Ⅲ	—
	20	石鏃	—	OB	6	(24.3)	19.8	3.1	(1.12)	6492	カ-28	Ⅲ	—
	21	石鏃	—	OB	6	28.1	21.8	3.7	1.68	8321	ウ-25	Ⅱ	—
	22	石鏃	—	AN	—	25.6	34.4	4.6	2.77	4194	オ-29	Ⅲ	—
108	23	石鏃	—	AN	—	3.2	6.8	4.1	0.43	8422	イ-25	Ⅲ	—
	24	石鏃	—	OB	4	(6.7)	2.4	1.3	(0.57)	8620	ウ-26	Ⅲ	—
	25	石鏃	—	OB	6	15.7	12.6	2.4	0.22	3048	B-5	V	—
	26	石鏃	—	OB	4	(15.1)	12.4	3.0	(0.28)	420	9T	V	—
	27	石鏃	—	OB	6	19.1	12.1	2.4	0.35	6748	キ-28	Ⅲ	—

第19表 縄文時代石器観察表 (2)

挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
108	28	石鏃	－	OB	1	20.1	(13.6)	6.0	(1.01)	398	9T	V	－
	29	石鏃	－	OB	4	(18.2)	15.1	3.7	(0.65)	5327	ウー29	Ⅲ	－
	30	石鏃	－	OB	6	14.6	14.0	2.7	0.33	3一括	キー31	Ⅲ	－
	31	石鏃	－	OB	6	21.7	16.7	3.0	0.67	3一括	カー31	Ⅲ	－
	32	石鏃	－	AN	－	(22.0)	8.3	4.4	(0.88)	11793	ウー26	Ⅲ	－
	33	石鏃	－	SH	－	2.3	7.7	3.7	0.54	8667	イー25	Ⅲ	－
	34	石鏃	－	AN	－	23.0	(18.5)	5.6	(1.62)	4065	オー29	Ⅲ	－
	35	石鏃	－	AN	－	23.7	15.4	3.5	0.80	7996	キー26	Ⅲ	－
	36	石鏃	－	OB	3	28.6	6.2	3.2	0.75	6563	オー27	Ⅲ	－
	37	石鏃	－	OB	1	(16.5)	(14.8)	5.0	(0.46)	383	9T	V	－
	38	石鏃	－	OB	6	(23.0)	(19.0)	4.0	(1.06)	5473	エー28	Ⅲ	－
	39	石鏃	－	AN	－	27.1	13.5	3.3	0.79	6549	オー27	Ⅲ	－
	40	石鏃	－	OB	8	(24.5)	16.1	4.4	(1.11)	5547	エー27	Ⅲ	－
	41	石鏃	－	AN	－	(25.5)	15.0	4.0	(0.95)	3一括	ウー31	Ⅲ	－
	42	石鏃	－	OB	3	24.7	15.5	4.5	1.00	4677	カー29	Ⅲ	－
	43	石鏃	－	AN	－	(27.6)	18.5	3.7	(1.28)	10860	イー28	Ⅲ	－
	44	石鏃	－	AN	－	25.7	18.1	4.4	1.27	4937	キー30	Ⅲ	－
	45	石鏃	－	OB	6	25.7	15.9	3.5	0.73	10077	アー27	Ⅲ	－
	46	石鏃	－	SH	－	(20.5)	(11.3)	3.8	(0.88)	12006		Ⅲ	8号集石9
	47	石鏃	－	SH	－	(22.7)	(14.7)	3.8	(1.13)	7553	カー30	Ⅲ	－
	48	石鏃	－	OB	1	(19.9)	(15.4)	4.8	(1.32)	4733	キー29	Ⅲ	－
109	49	石鏃	－	OB	6	21.9	(9.6)	3.9	(0.67)	5950	キー27	Ⅲ	－
	50	石鏃	－	SH	－	24.2	3.9	4.1	0.75	7375	キー30	Ⅲ	－
	51	石鏃	－	OB	6	(21.5)	(19.2)	4.2	(1.12)	8248	エー28	Ⅲ	－
	52	石鏃	－	AN	－	18.4	9.6	3.6	0.58	8553	イー25	Ⅲ	－
	53	石鏃	－	OB	1	(15.1)	(19.3)	3.0	(0.68)	3758	ウー29	Ⅲ	－
	54	石鏃	－	OB	1	(20.1)	(21.6)	3.9	(1.32)	6706	ケー28	Ⅲ	－
	55	石鏃	－	AN	－	22.6	16.3	4.1	0.70	9323	アー27	Ⅲ	－
	56	石鏃	－	AN	－	24.7	15.0	4.4	0.82	3997	エー29	Ⅲ	－
	57	石鏃	－	SH	－	22.0	16.0	3.8	0.72	3一括	ウー31	Ⅲ	－
	58	石鏃	－	OB	6	27.1	18.1	3.7	1.02	9932	アー28	Ⅲ	－
	59	石鏃	－	OB	6	30.0	(5.2)	4.1	(1.33)	7986	カー26	Ⅲ	－
	60	石鏃	－	OB	3	28.2	(20.8)	3.8	(1.11)	4043	オー29	Ⅲ	－
	61	石鏃	－	AN	－	33.6	23.7	4.2	2.10	3一括	オー31	Ⅲ	－
	62	石鏃	－	AN	－	31.4	1.4	3.9	1.72	7157	ウー28	Ⅲ	－
	63	石鏃	－	AN	－	(33.2)	24.8	3.8	(2.26)	3一括	ウー31	Ⅲ	－
	64	石鏃	－	OB	4	49.6	33.3	4.0	3.20	5171	カー29	Ⅲ	－
	65	石鏃	－	OB	4	41.8	20.8	5.5	3.21	4799	カー30	Ⅲ	－
110	66	石鏃	－	OB	4	(17.0)	(12.0)	3.2	(0.54)	5369	オー29	Ⅲ	－
	67	石鏃	－	OB	4	24.6	17.2	5.4	1.48	5091	カー29	Ⅲ	－
	68	石鏃	－	OB	3	3.0	(6.8)	2.4	(0.22)	11175	イー27	Ⅲ	－
	69	石鏃	－	OB	4	7.7	21.5	2.3	0.37	3a一括	E ～ G -15～17	Ⅲ a	－
	70	石鏃	－	OB	4	26.9	13.9	4.2	1.35	10675	Aー27	Ⅲ	－
	71	石鏃	－	AN	－	(23.1)	(19.1)	6.6	(2.59)	11166	イー27	Ⅲ	－
	72	石鏃	－	SH	－	21.5	20.0	8.7	2.85	3一括	イー30	Ⅲ	－
	73	石鏃	－	AN	－	25.5	17.1	3.1	2.59	552	13T	V	－
	74	石鏃	－	OB	1	21.6	18.0	5.3	1.57	5100	カー29	Ⅲ	－
	75	石鏃	－	AN	－	(22.6)	(18.2)	6.0	(1.43)	3995	エー29	Ⅲ	－
	76	石鏃	－	AN	－	22.5	17.6	4.7	1.41	9579	アー27	Ⅲ	－
	77	石鏃	－	OB	4	(18.2)	(19.0)	3.6	(1.01)	3914	エー29	Ⅲ	－

では、刃部の位置及び形状をもとにいくつかの類型に分けて報告する。

I 類（第112図 S78～S86）

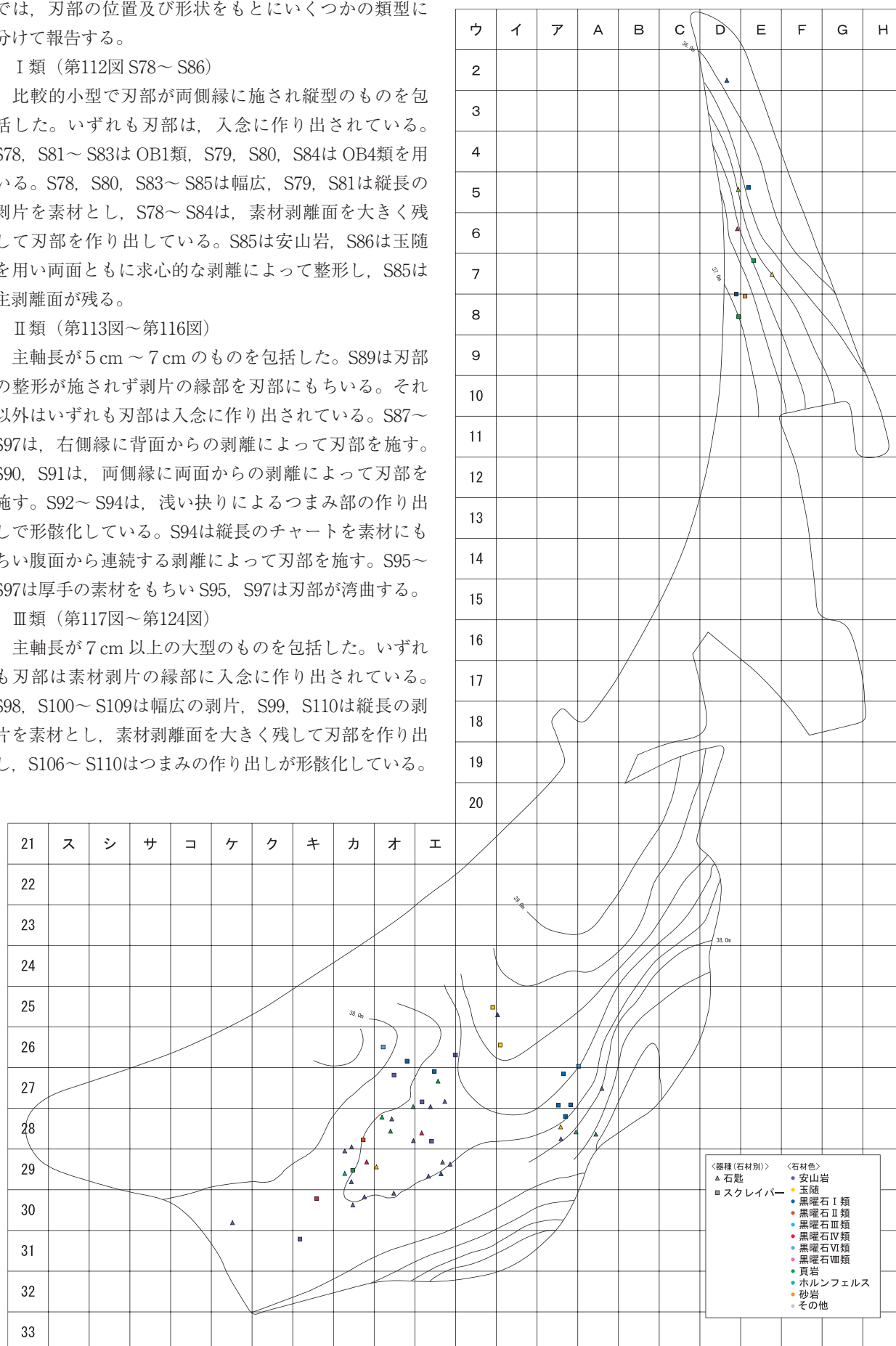
比較的小型で刃部が両側縁に施され縦型のものを包括した。いずれも刃部は、入念に作り出されている。S78, S81～S83はOB1類, S79, S80, S84はOB4類を用いる。S78, S80, S83～S85は幅広, S79, S81は縦長の剥片を素材とし, S78～S84は, 素材剥離面を大きく残して刃部を作り出している。S85は安山岩, S86は玉随を用い両面ともに求心的な剥離によって整形し, S85は主剥離面が残る。

II 類（第113図～第116図）

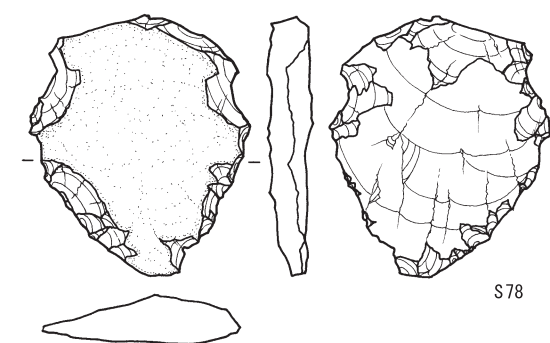
主軸長が5 cm～7 cm のものを包括した。S89は刃部の整形が施されず剥片の縁部を刃部にもちいる。それ以外はいずれも刃部は入念に作り出されている。S87～S97は, 右側縁に背面からの剥離によって刃部を施す。S90, S91は, 両側縁に両面からの剥離によって刃部を施す。S92～S94は, 浅い挟りによるつまみ部の作り出しで形骸化している。S94は縦長のチャート素材にもちい腹面から連続する剥離によって刃部を施す。S95～S97は厚手の素材をもちいS95, S97は刃部が湾曲する。

III 類（第117図～第124図）

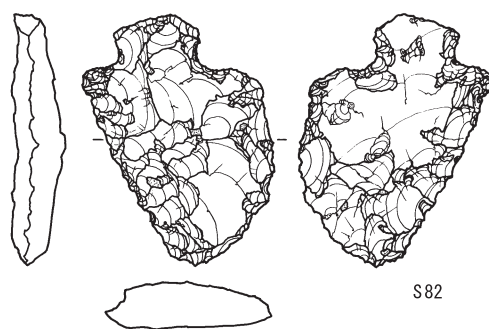
主軸長が7 cm 以上の大型のものを包括した。いずれも刃部は素材剥片の縁部に入念に作り出されている。S98, S100～S109は幅広の剥片, S99, S110は縦長の剥片を素材とし, 素材剥離面を大きく残して刃部を作り出し, S106～S110はつまみの作り出しが形骸化している。



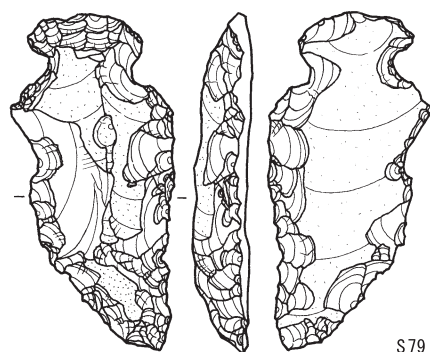
第111図 縄文時代の石器出土分布図（石匙，削器，尖頭状石器）



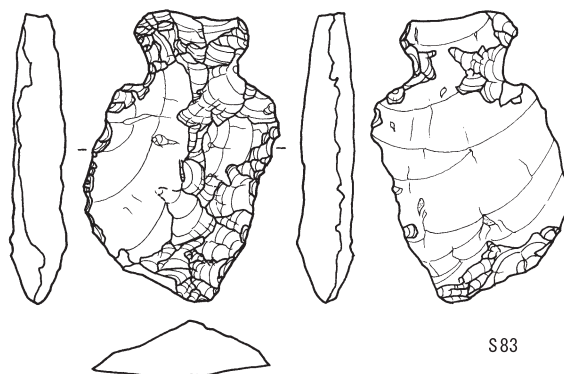
S78



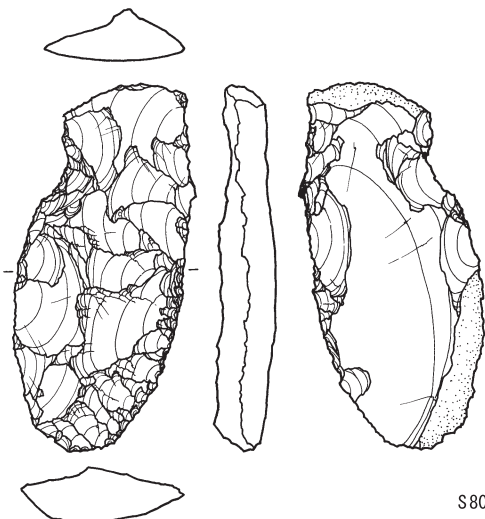
S82



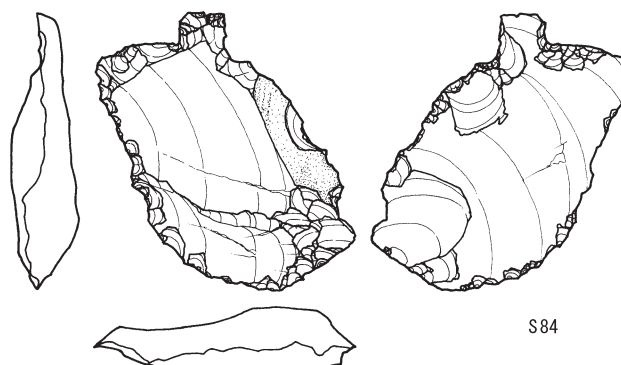
S79



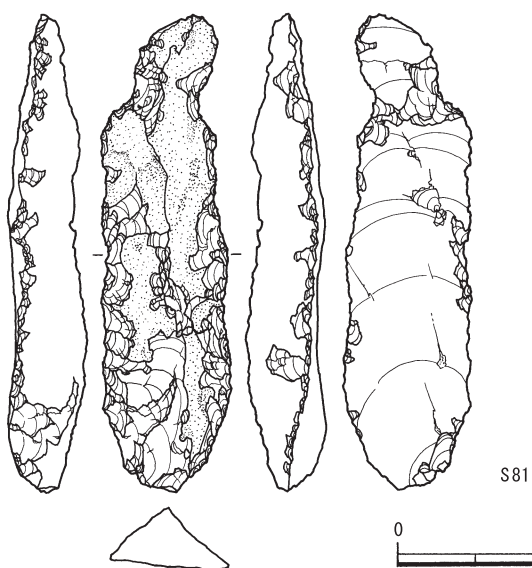
S83



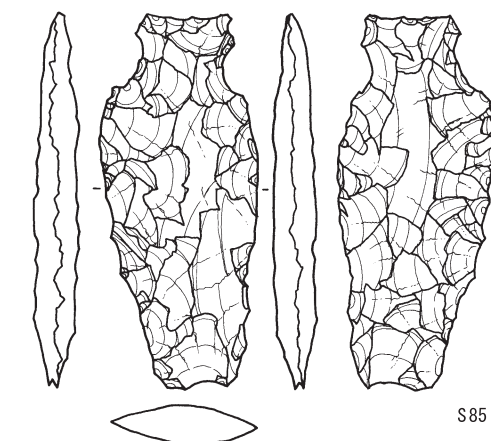
S80



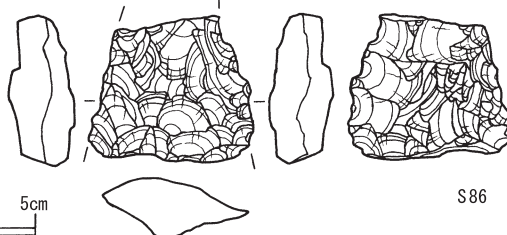
S84



S81



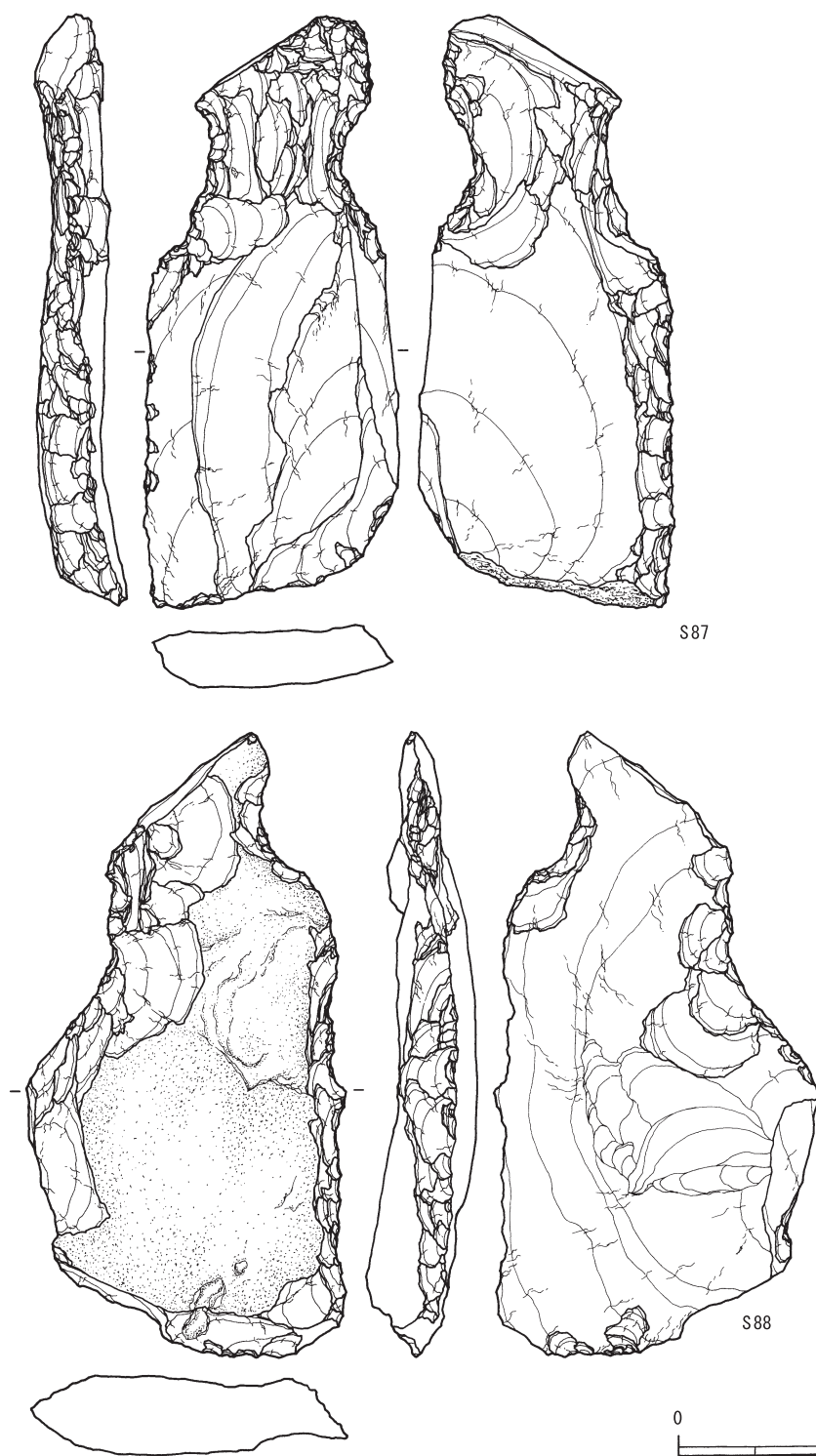
S85



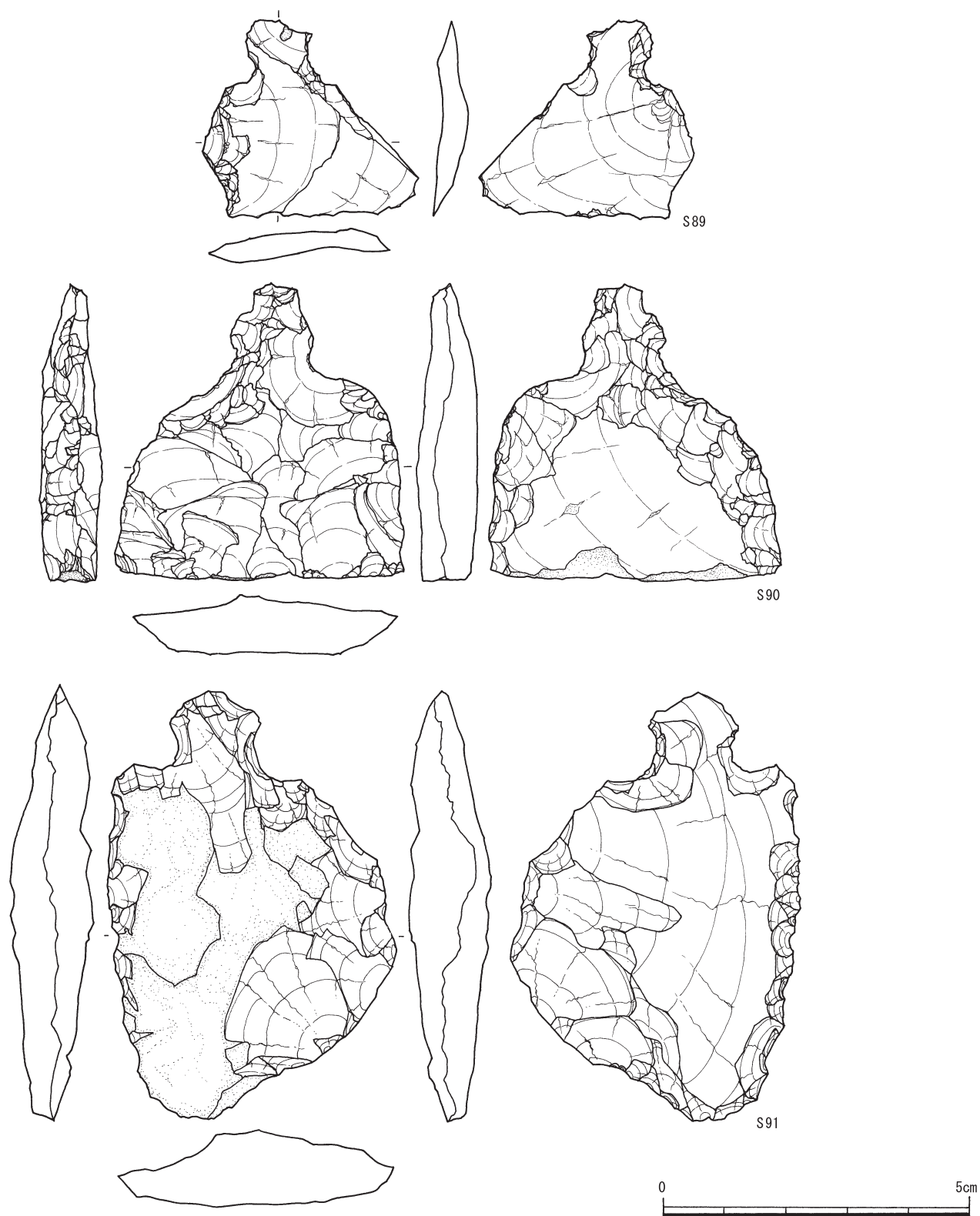
S86



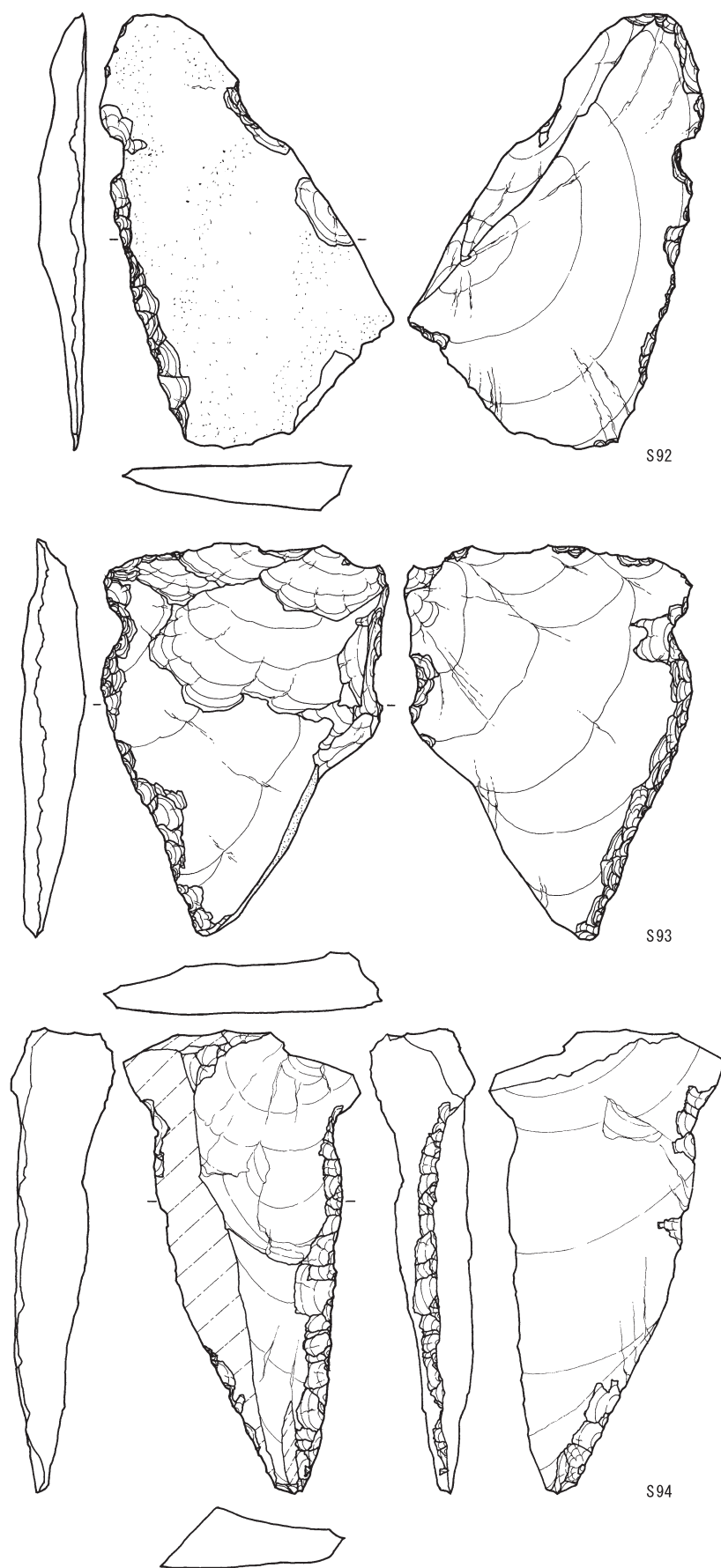
第112図 縄文時代の石器5（石匙1）



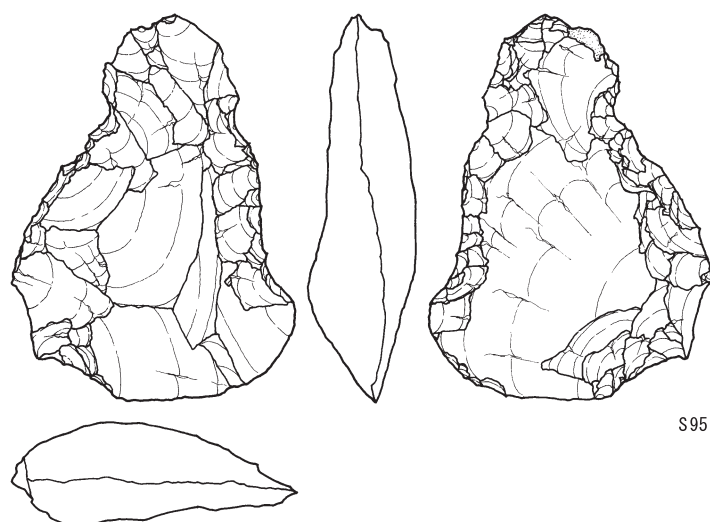
第113図 縄文時代の石器6（石匙2）



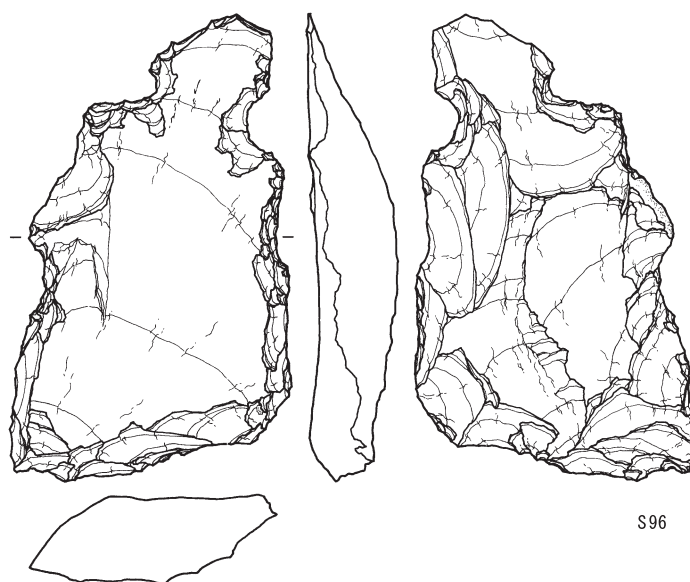
第114図 縄文時代の石器7（石匙3）



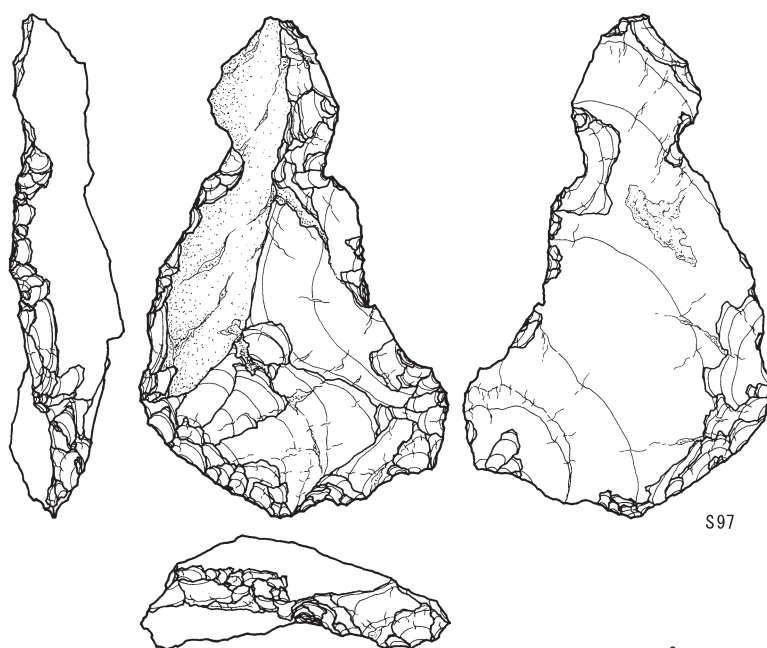
第115図 縄文時代の石器8（石匙4）



S95



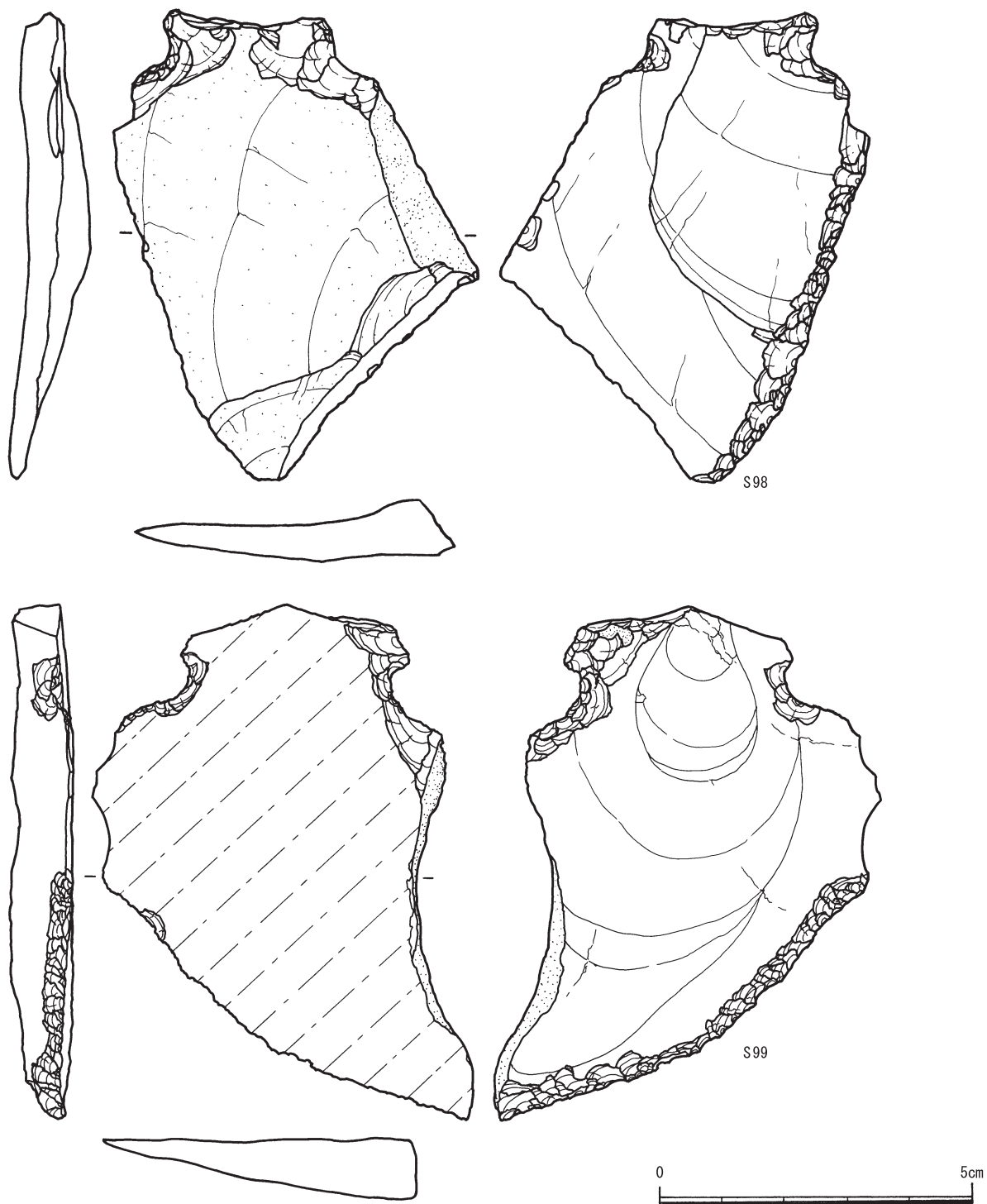
S96



S97



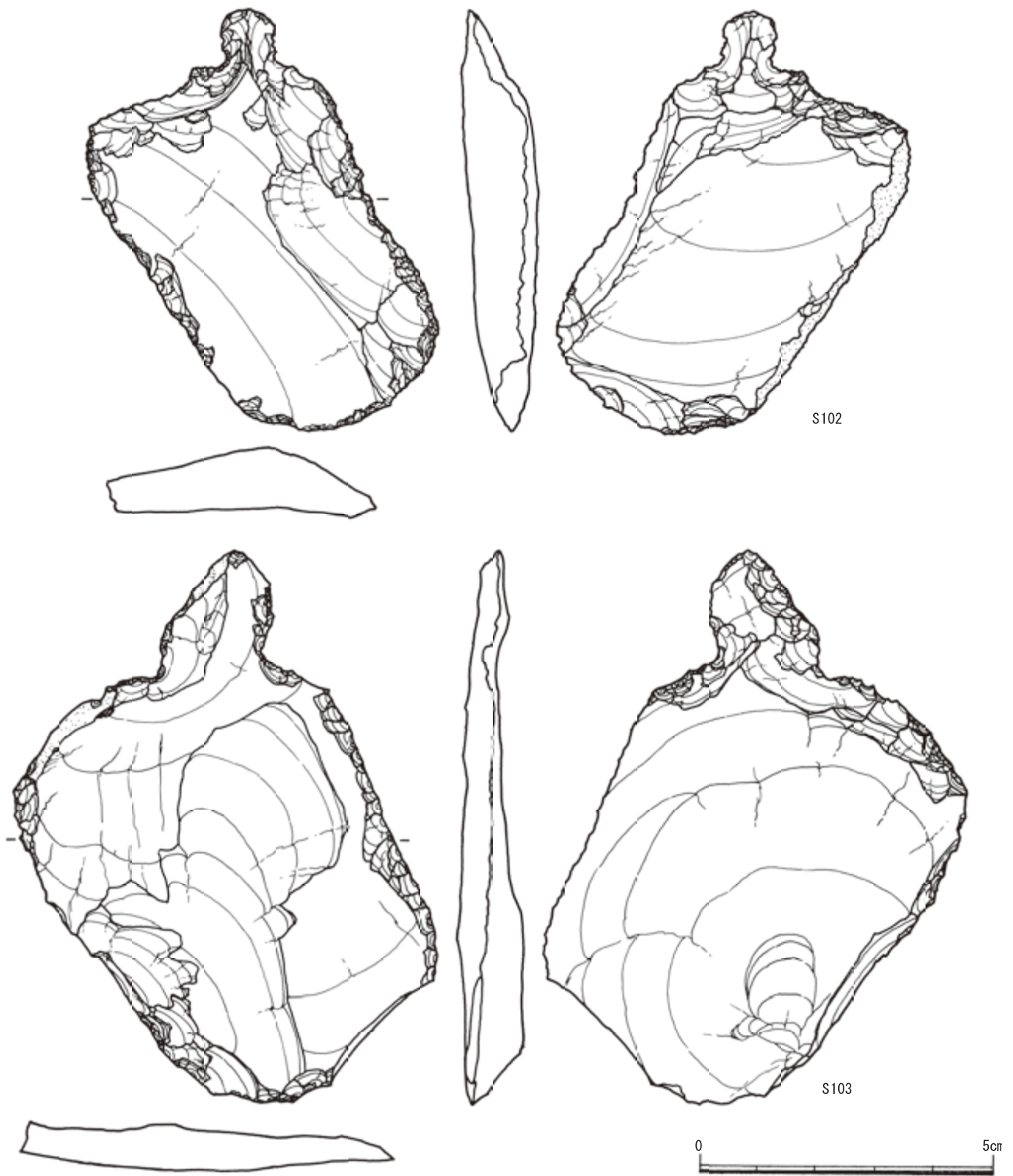
第116図 縄文時代の石器9（石匙5）



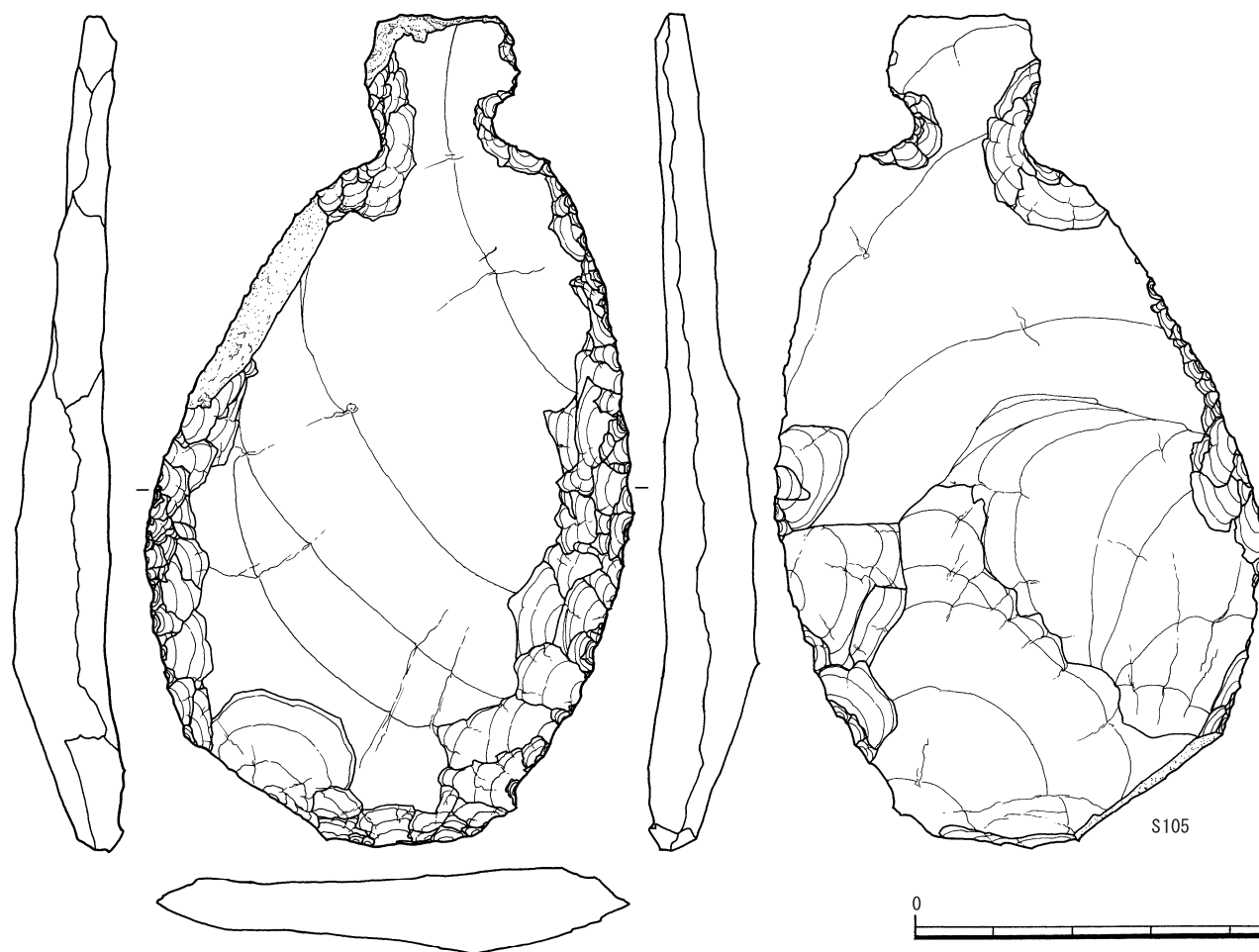
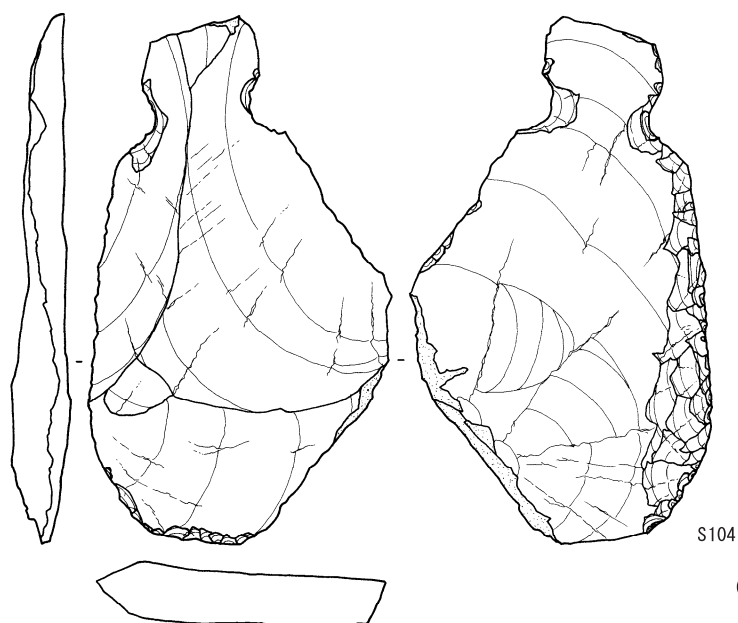
第117図 縄文時代の石器10（石匙6）



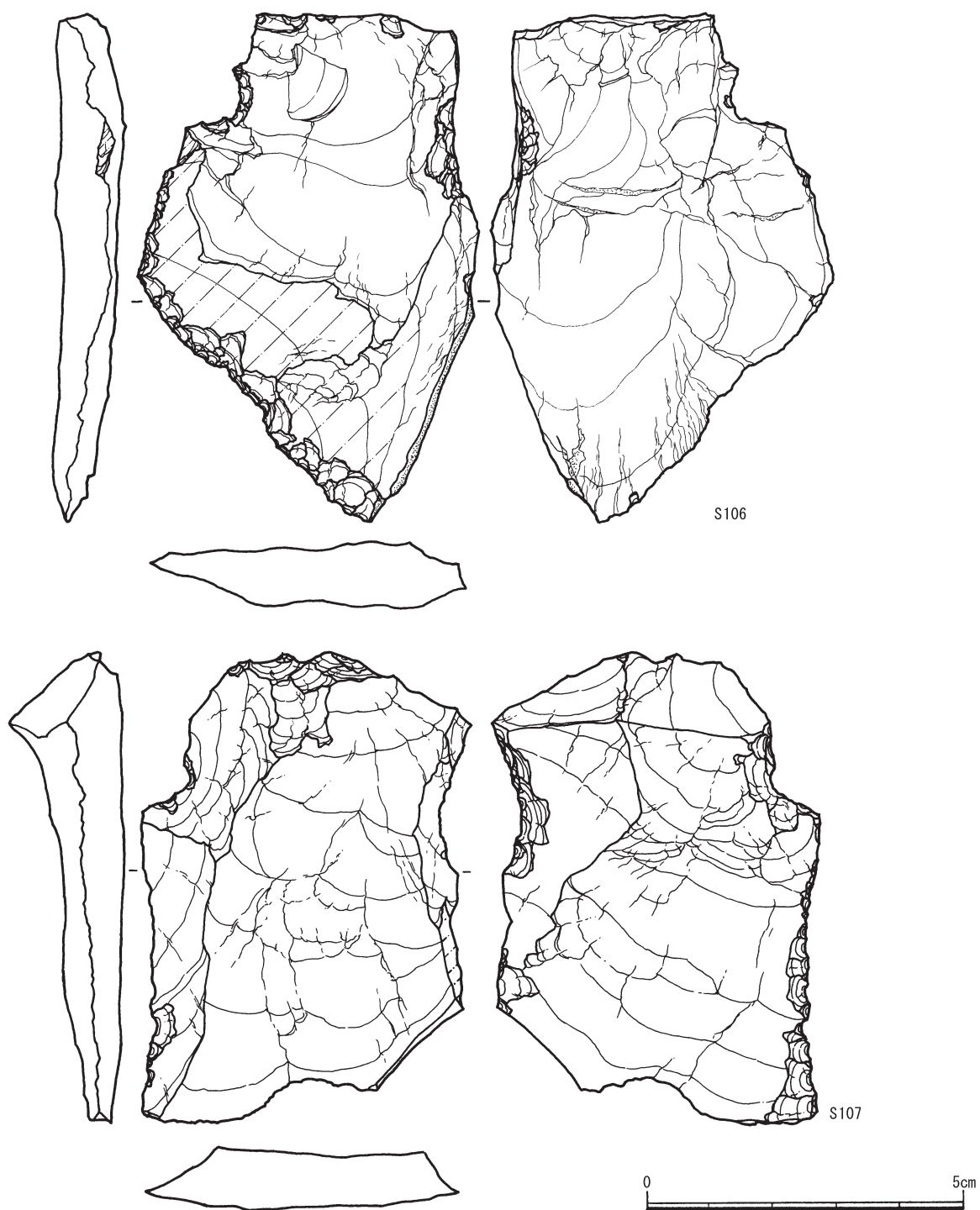
第118図 縄文時代の石器11（石匙7）



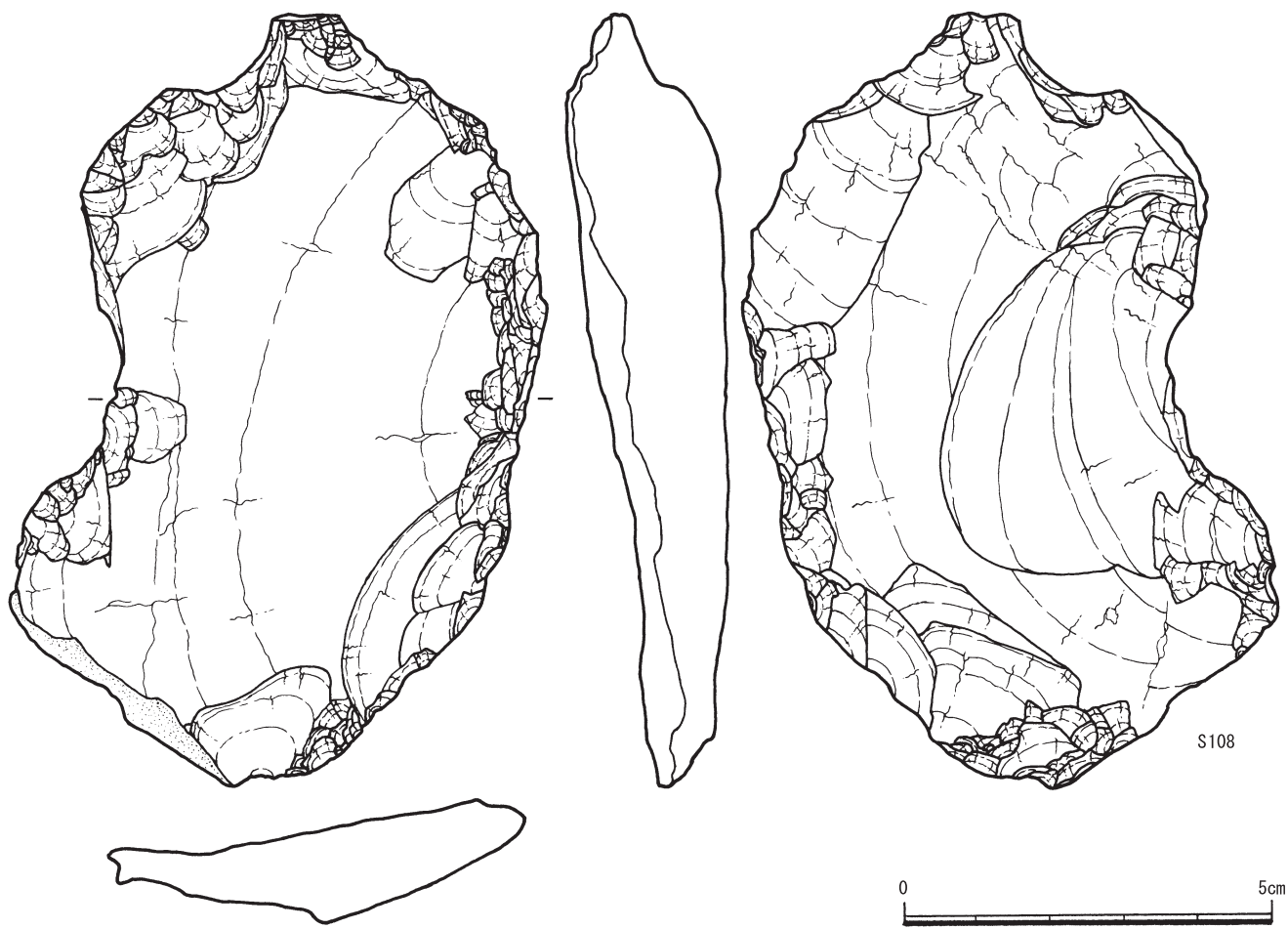
第119図 縄文時代の石器12（石匙8）



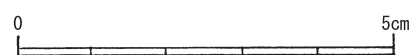
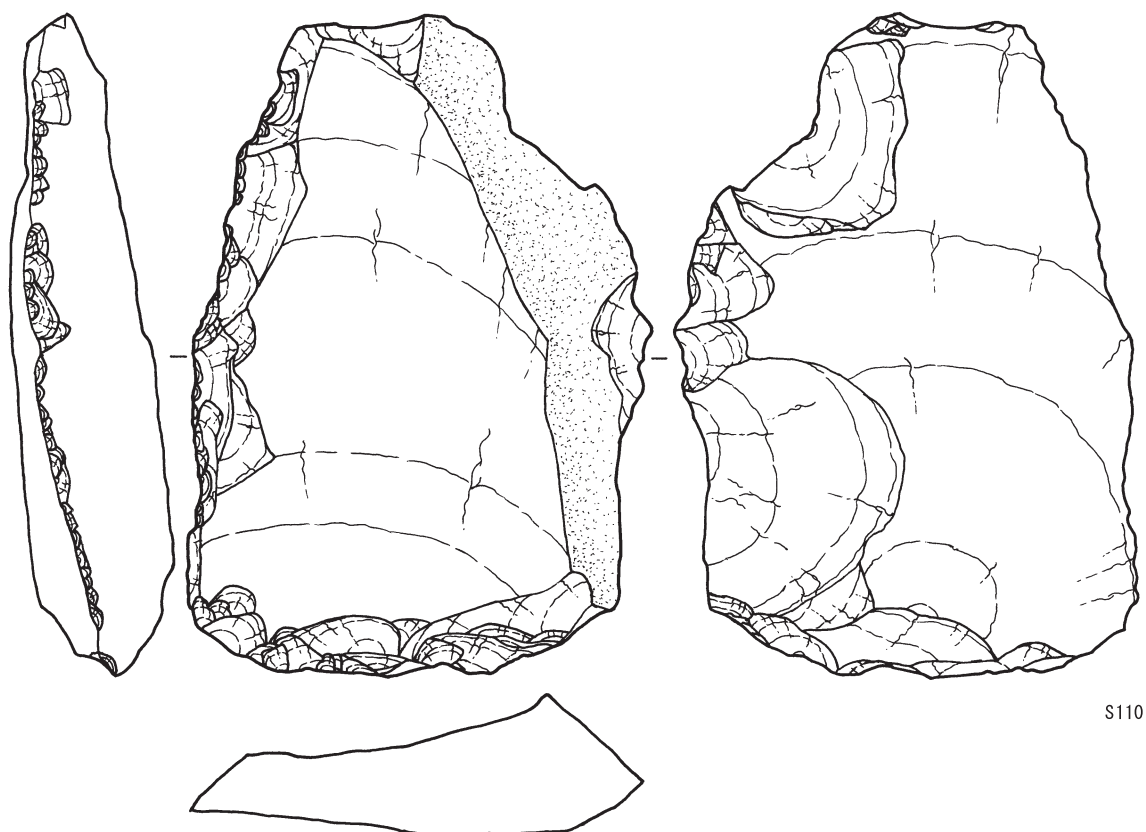
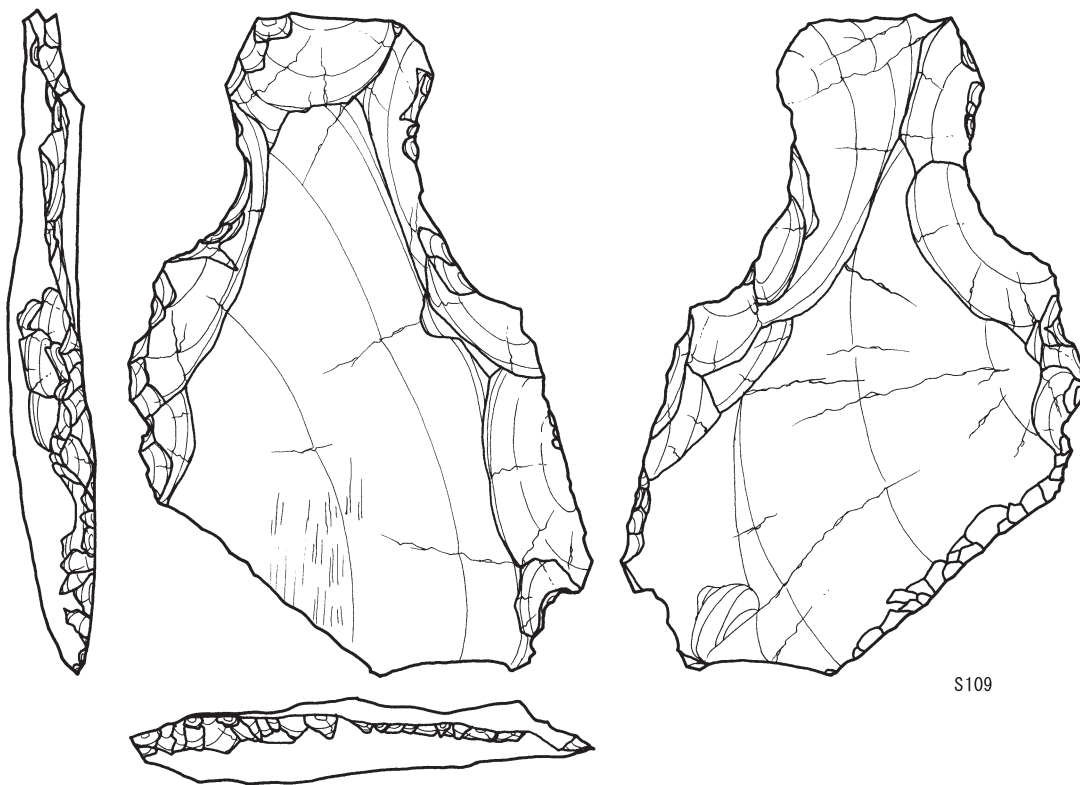
第120図 縄文時代の石器13（石匙9）



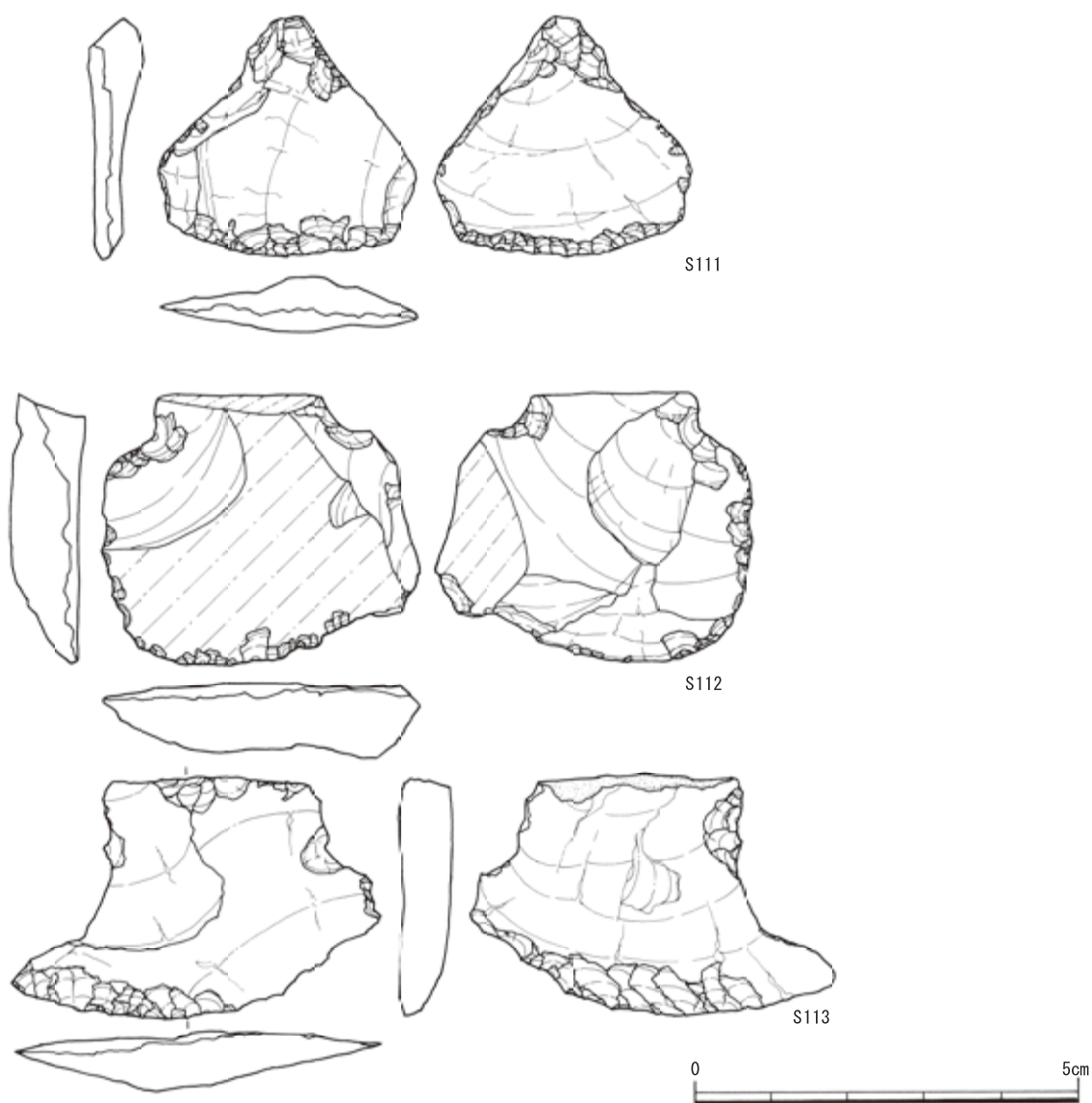
第121図 縄文時代の石器14 (石匙10)



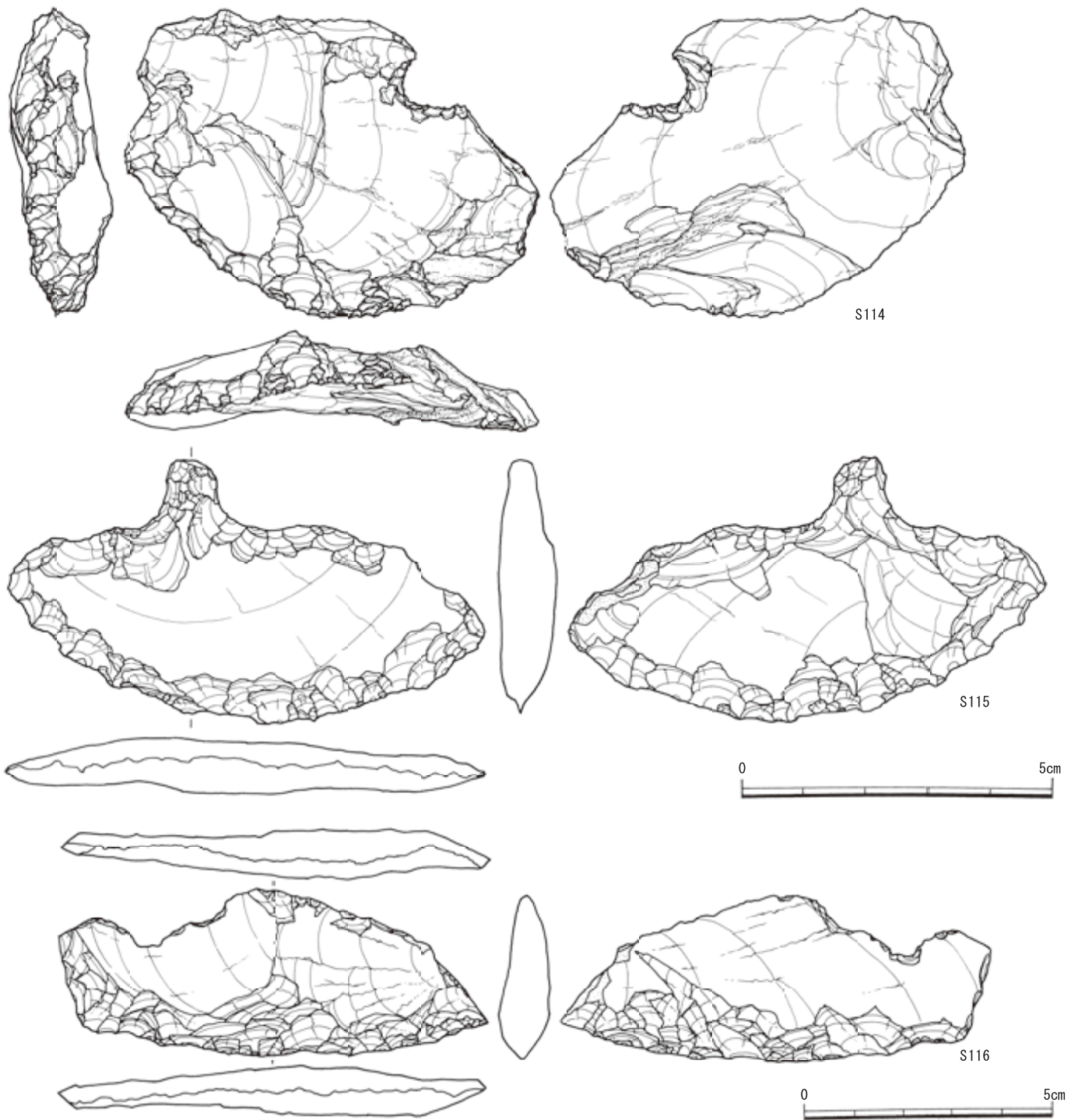
第122図 縄文時代の石器15（石匙11）



第123図 縄文時代の石器16 (石匙12)



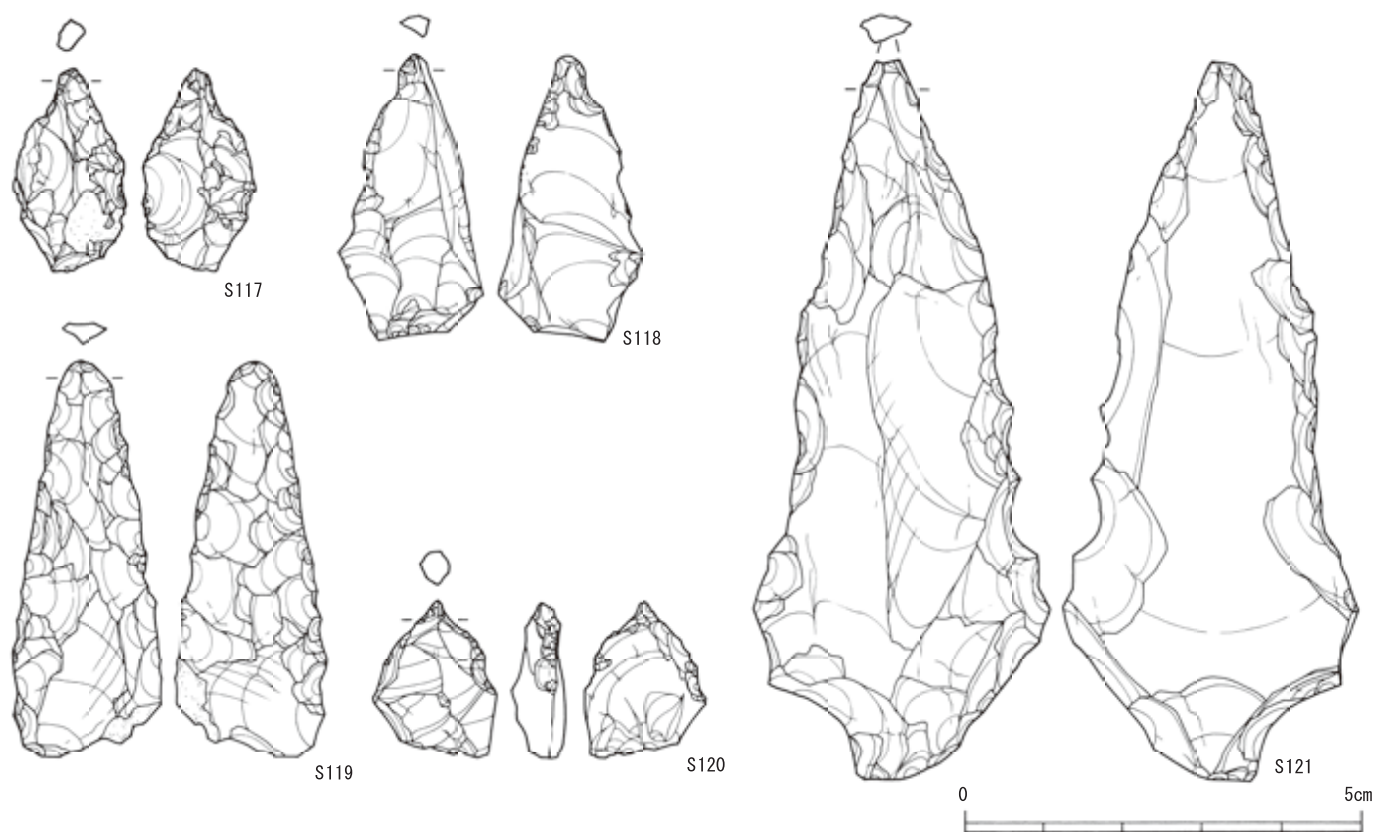
第124図 縄文時代の石器17（石匙13）



第125図 縄文時代の石器18 (石匙14)

第20表 縄文時代石器観察表 (3)

挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
112	78	石匙	－	OB	1	33.0	27.3	6.6	5.48	8495	イ－25	Ⅲ	－
	79	石匙	－	OB	4	42.9	19.9	7.5	4.67	3一括	イ～カー 30～32	Ⅲ	－
	80	石匙	－	OB	4	46.5	23.2	8.4	7.46	4710	カ－29	Ⅲ	－
	81	石匙	－	OB	1	60.5	16.5	10.3	8.54	3844	エ－29	Ⅲ	－
	82	石匙	－	OB	1	31.9	24.9	6.8	3.80	448	9T	V	－
	83	石匙	－	OB	1	36.8	24.7	7.0	5.27	1673	B－6	Ⅳ	－
	84	石匙	－	OB	4	35.0	33.4	7.6	6.35	5443	エ－28	Ⅲ	－
	85	石匙	－	AN	－	47.0	19.7	5.8	5.65	7441	ケ－30	Ⅲ	－
113	86	石匙	－	CC	－	18.4	20.5	8.0	2.76	1249	C－7	Ⅱ a	－
	87	石匙	－	AN	－	76.1	33.3	12.1	27.81	10508	A－27	Ⅲ	－
114	88	石匙	－	HF	－	80.3	41.2	14.6	39.65	11472	ア－28	Ⅲ	－
	89	石匙	－	AN	－	32.5	35.0	5.6	3.70	4303	オ－30	Ⅲ	－
	90	石匙	－	AN	－	48.0	47.2	10.1	21.50	7619	カ－30	Ⅲ	－
115	91	石匙	－	AN	－	69.8	46.8	12.9	31.85	7966	オ－28	Ⅲ	－
	92	石匙	－	SH	－	63.2	42.8	6.9	13.35	5699	エ－27	Ⅲ	－
	93	石匙	－	SH	－	57.4	42.8	9.5	20.48	6393	オ－28	Ⅲ	－
116	94	石匙	－	CH	－	67.5	34.1	15.0	17.50	3一括	カ－31	Ⅲ	－
	95	石匙	－	AN	－	49.0	36.5	13.9	19.84	7653	カ－30	Ⅲ	－
	96	石匙	－	AN	－	59.7	36.2	11.8	24.72	11087	ア－28	Ⅲ	－
117	97	石匙	－	CC	－	64.0	39.8	14.4	22.65	9302	ア－28	Ⅲ	－
	98	石匙	－	AN	－	74.8	58.0	12.5	29.80	3一括	ア A－ 21～28	Ⅲ	－
118	99	石匙	－	AN	－	82.2	61.8	10.4	43.95	3806	エ－29	Ⅲ	－
	100	石匙	－	AN	－	79.9	56.8	12.0	45.85	5580	エ－27	Ⅲ	－
119	101	石匙	－	AN	－	97.8	66.8	11.5	68.63	3958	エ－29	Ⅲ	－
	102	石匙	－	AN	－	71.4	60.4	13.0	37.79	3825	エ－29	Ⅲ	－
120	103	石匙	－	AN	－	94.5	71.5	11.2	50.59	5613	エ－27	Ⅲ	－
	104	石匙	－	AN	－	98.0	56.8	11.0	51.61	6853	カ－29	Ⅲ	－
121	105	石匙	－	AN	－	105.5	61.9	13.9	73.15	6297	オ－28	Ⅲ	－
	106	石匙	－	SH	－	79.9	53.8	11.4	46.10	11564	A－28	Ⅲ	－
122	107	石匙	－	SH	－	74.2	51.0	18.2	51.39	6386	オ－28	Ⅲ	－
	108	石匙	－	AN	－	103.6	72.3	21.5	102.35	7695	カ－29	Ⅲ	－
123	109	石匙	－	HF	－	86.8	61.0	10.7	50.51	6502	オ－27	Ⅲ	－
	110	石匙	－	HF	－	86.8	60.6	21.8	96.14	4634	カ－29	Ⅲ	－
124	111	石匙	－	CH	－	31.3	33.4	7.2	5.13	3542	B－5	V	－
	112	石匙	－	CC	－	35.4	41.4	1.0	15.19	3一括	ウ－31	Ⅲ	－
	113	石匙	－	AN	－	30.9	47.5	7.2	9.02	9042	ア－28	Ⅲ	－
125	114	石匙	－	CC	－	49.8	67.0	16.1	39.66	4161	オ－29	Ⅲ	－
	115	石匙	－	AN	－	42.6	76.3	8.9	23.11	3一括	イ－30	Ⅲ	－
	116	石匙	－	AN	－	34.0	85.4	10.0	23.81	6840	カ－28	Ⅲ	－



第126図 縄文時代の石器19（石錘）

IV類（第124図・第125図）

横型の石匙を包括した。S111～S113は、小型で両面から刃部の作り出しをし、つまみ部の作り出しは、形骸化している。S114～S116は、素材剥片の縁部に連続する剥離により湾曲する縁部を施す。

3 石錘（第126図）

先端部が凸状をなし、体部を意図的に厚く作り出すものを取り扱った。S119は、素材面を基部に残すのみであり、先端は摩滅し体部は薄い。S121は、薄手の素材を用いる。

4 削器（第127図～第132図）

素材剥片の側縁に連続した調整を施し、刃部を作り出

したものを含む。S122～S125, S129, S133は、求心的な剥離が行われている。他は素材剥離面を大きく残して刃部を作り出したもので、扁平な剥片を使用している。

5 尖頭状石器（第133図）

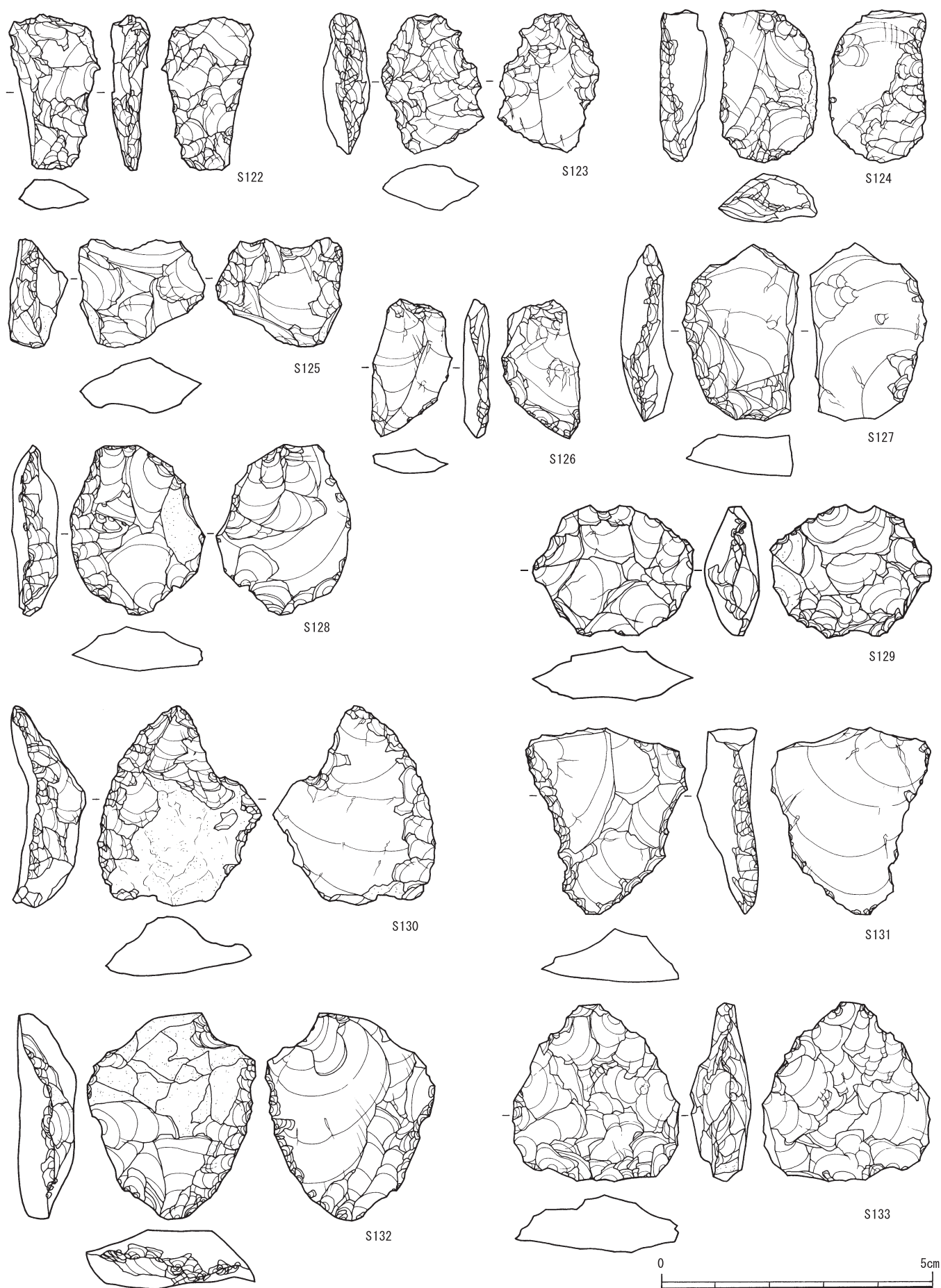
厚手で自然面の残る頁岩の剥片を素材とし、剥片の側縁に連続した調整を施し、素材剥離面を大きく残して凸状に刃部を作り出している。

6 楔形石器（第134図）

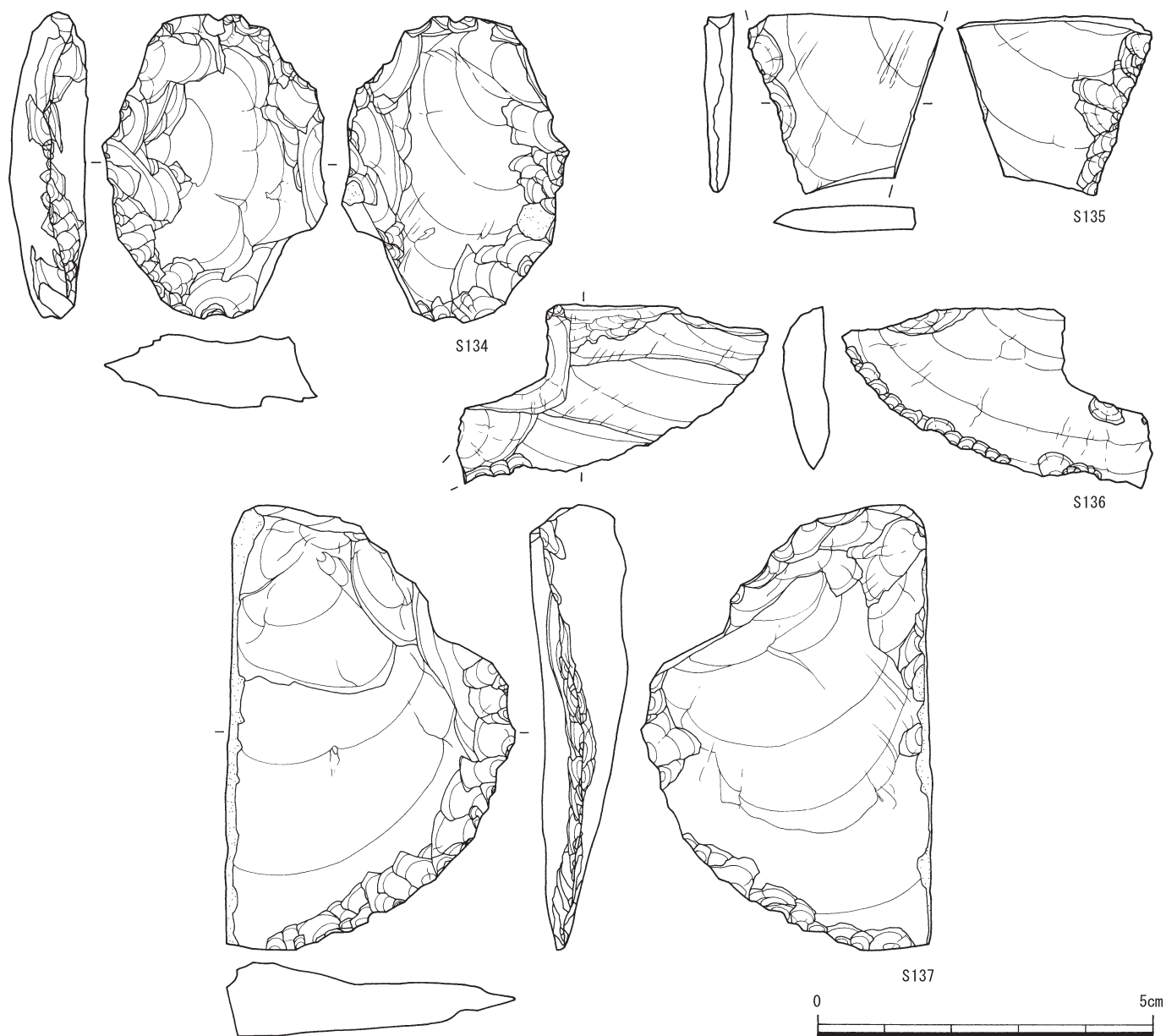
二次剥離の打撃角が垂直に近く、上下端部に潰れまたは微細剥離痕が観察されるものをあつかった。縦断面がS150は菱形、S151～S154はレンズ状であり、S152,

第21表 縄文時代石器観察表（4）

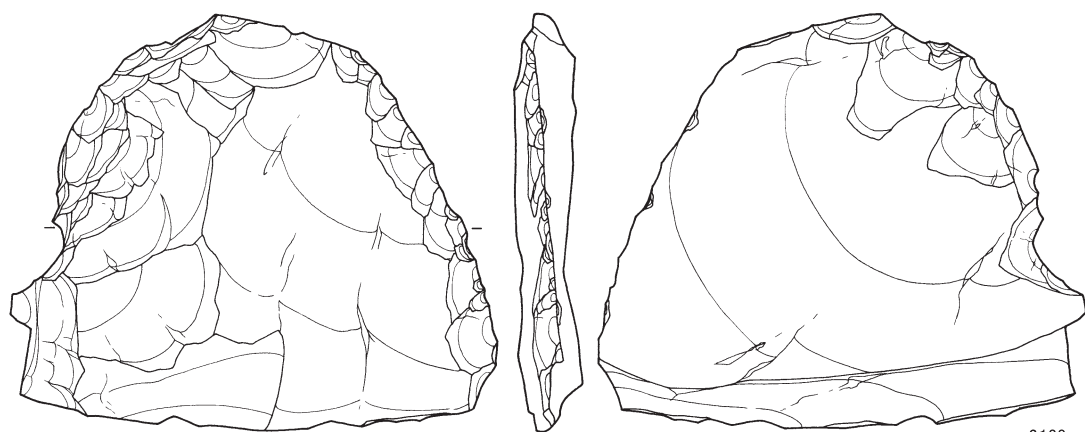
挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備考
126	117	ドリル	—	OB	4	26.0	14.0	10.0	3.12	11183	ア-27	Ⅲ	—
	118	ドリル	—	OB	6	36.7	18.0	10.0	5.03	3一括	ウ-31	Ⅲ	—
	119	ドリル	—	AN	—	50.0	18.5	8.0	6.81	3一括	イ-31	Ⅲ	—
	120	ドリル	—	OB	4	20.4	15.9	7.0	1.71	11304	A-27	Ⅲ	—
	121	ドリル	—	SH	—	90.5	37.0	8.0	26.18	3一括	オ-31	Ⅲ	—



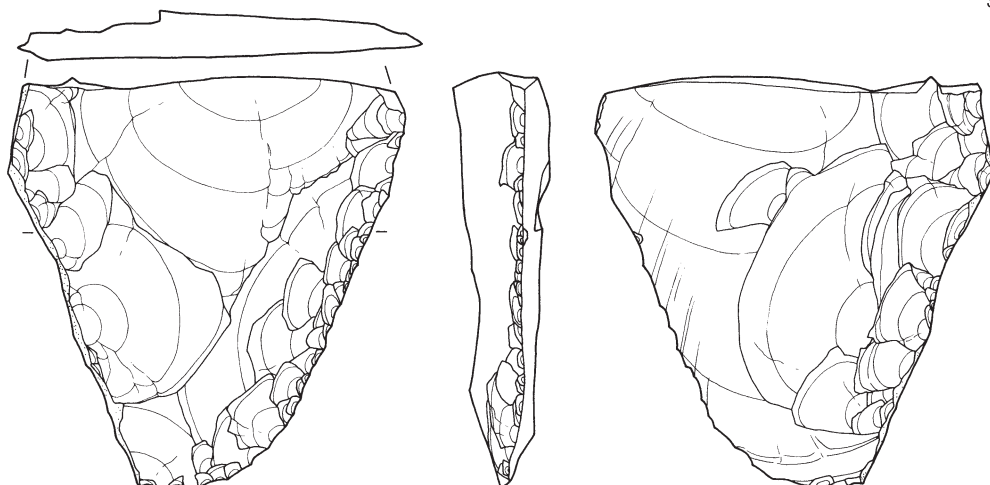
第127図 縄文時代の石器20 (削器 1)



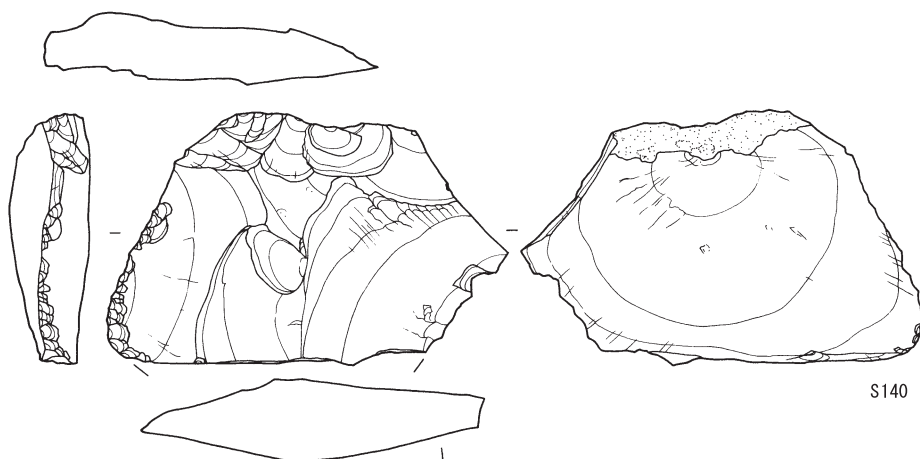
第128図 縄文時代の石器21（削器2）



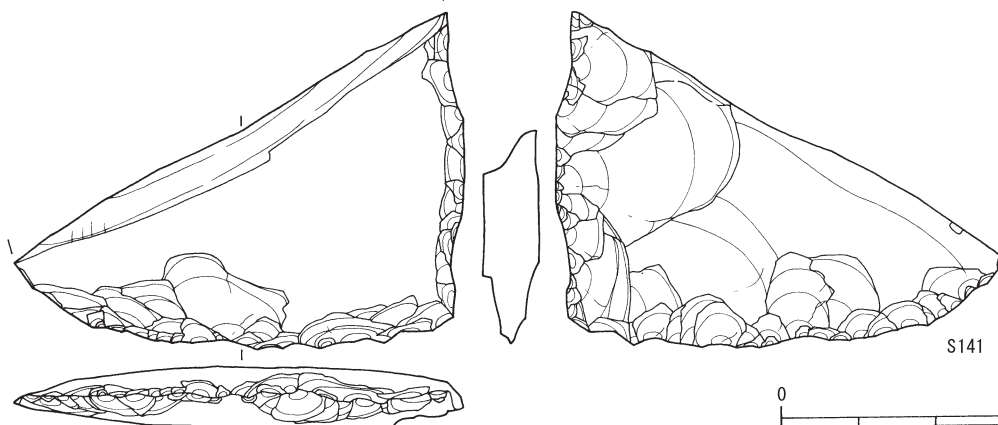
S138



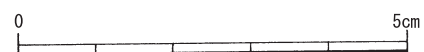
S139



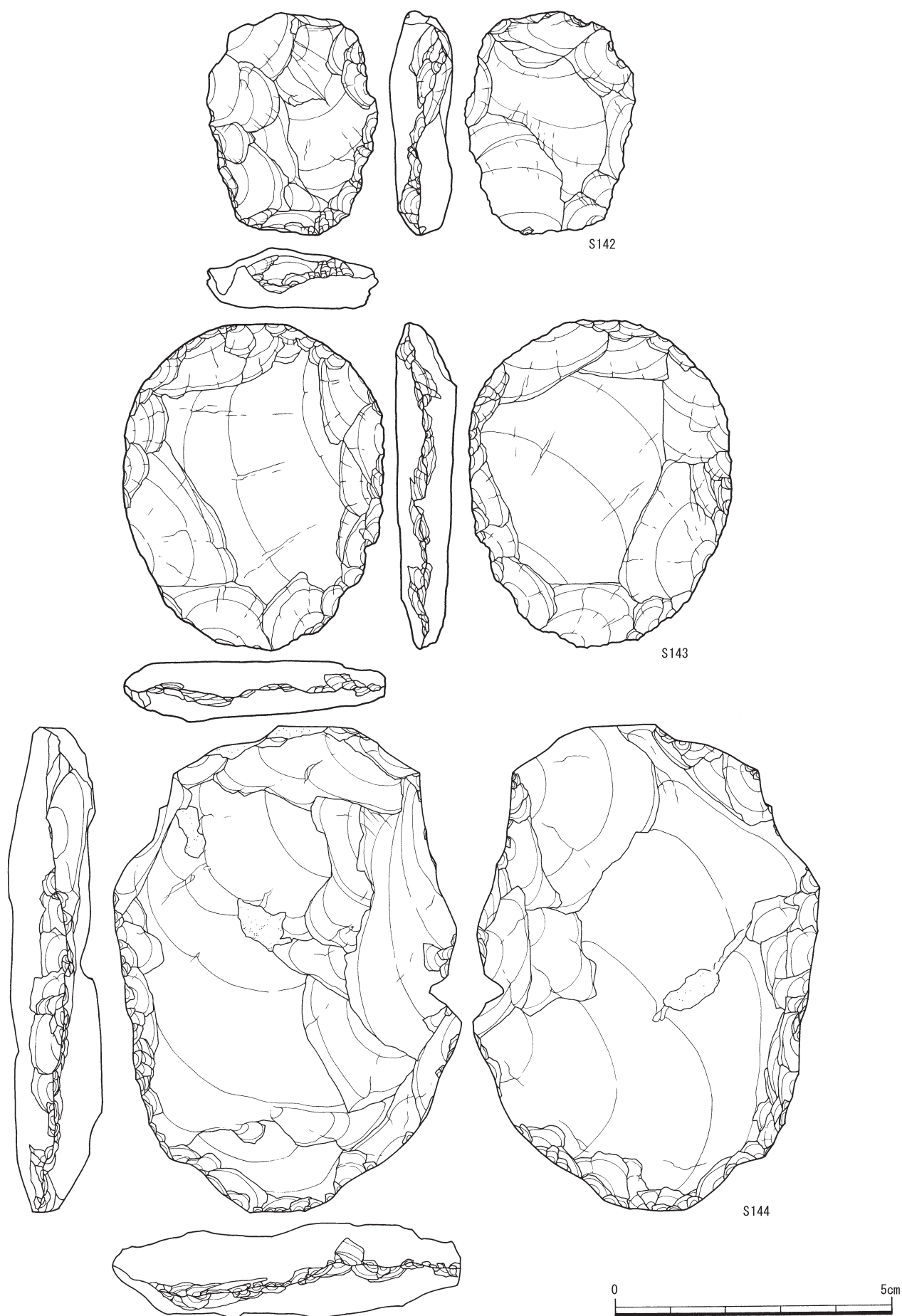
S140



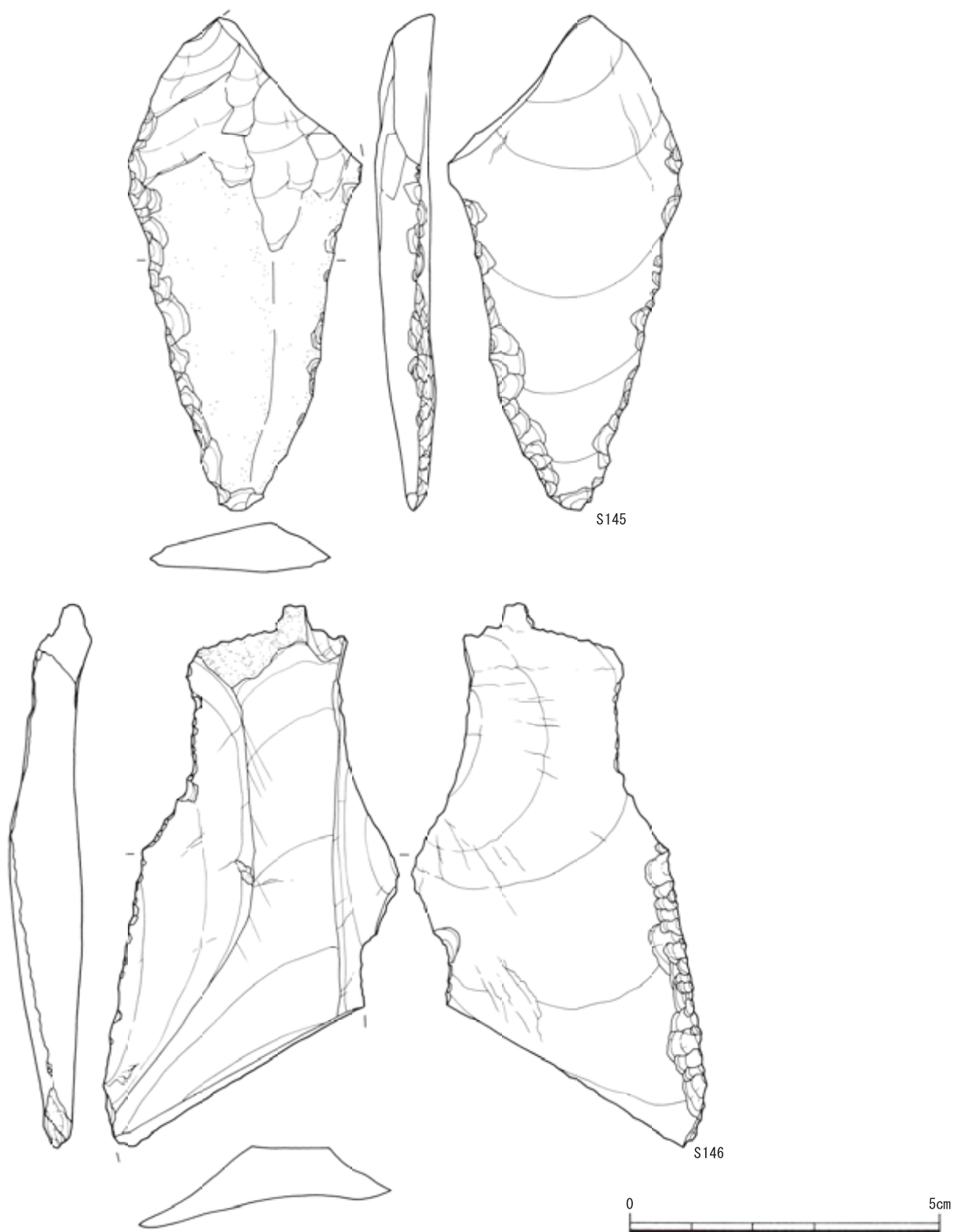
S141



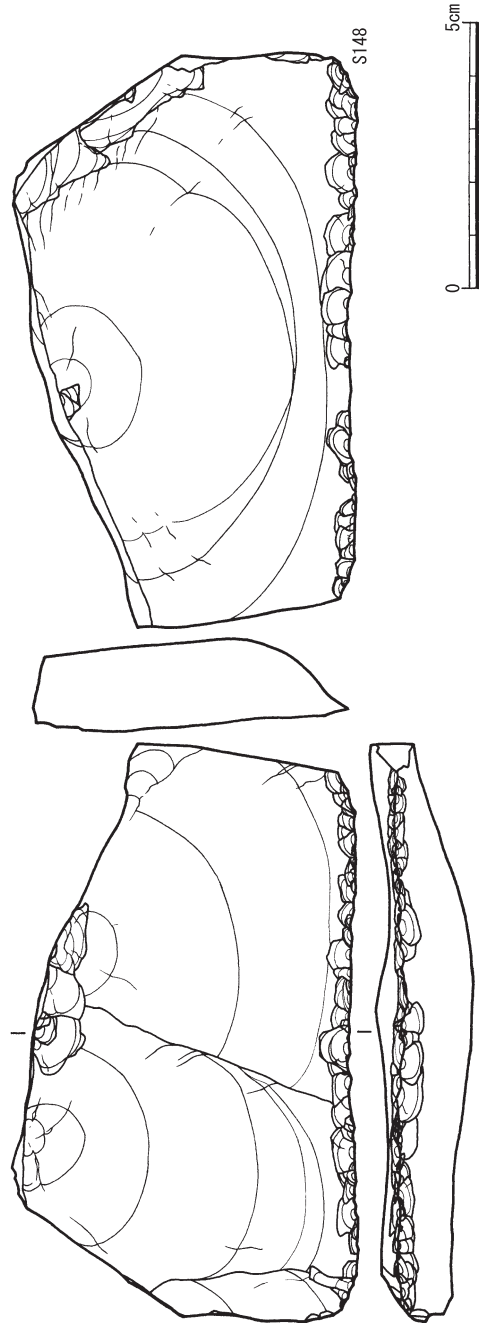
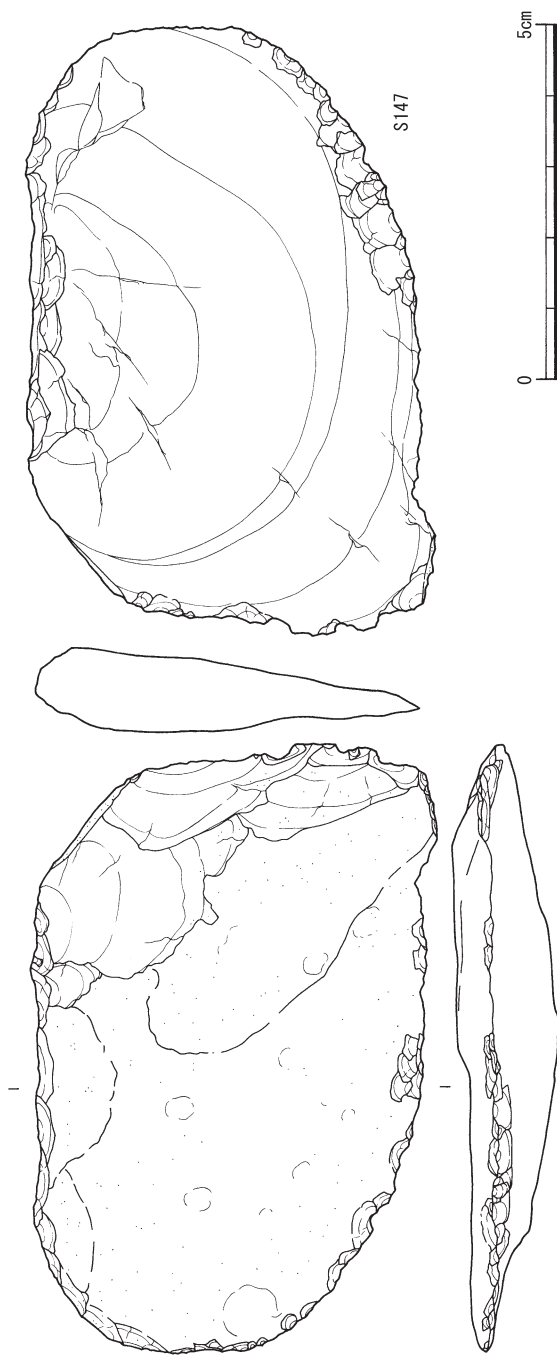
第129図 縄文時代の石器22 (削器3)



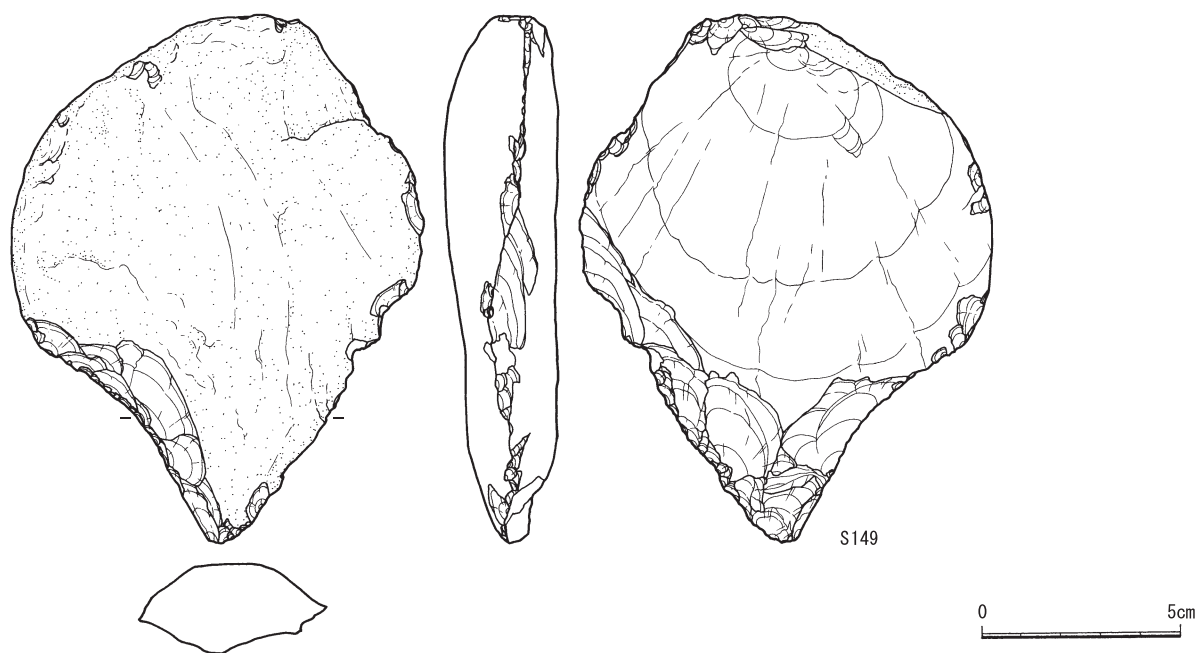
第130図 縄文時代の石器23 (削器4)



第131図 縄文時代の石器24 (削器5)



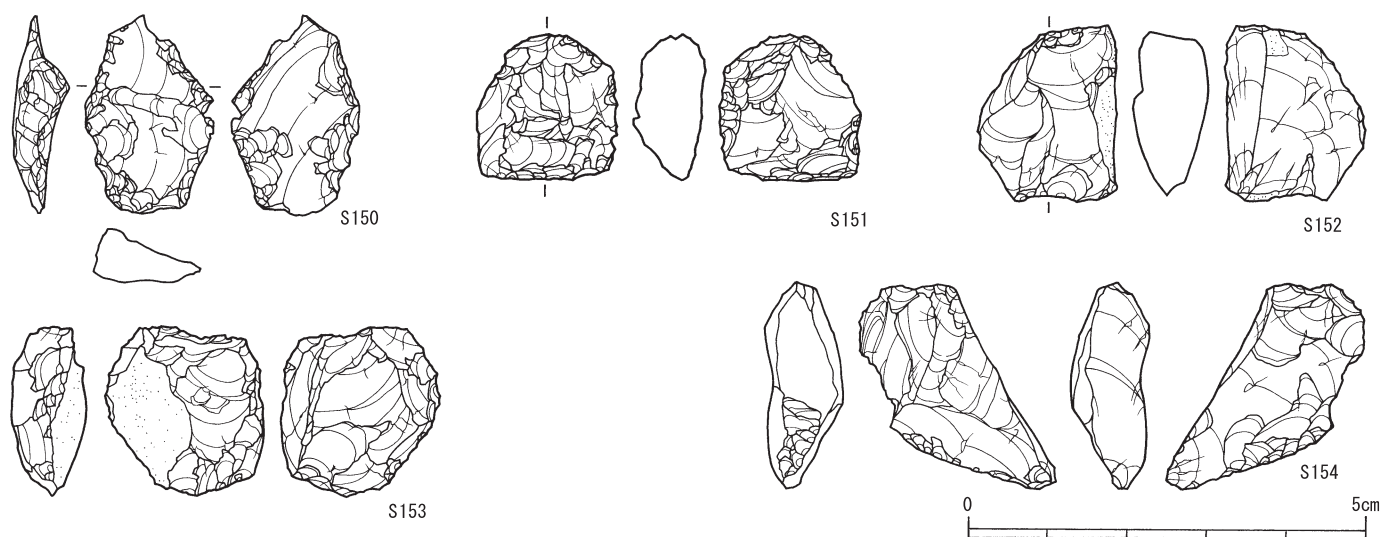
第132図 縄文時代の石器25 (削器6)



第133図 縄文時代の石器26（尖頭状石器）

第22表 縄文時代石器観察表（5）

挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
127	122	削器	—	CC	—	28.2	16.2	5.5	1.96	11732	ウー25	Ⅲ	—
	123	削器	—	OB	1	25.8	18.0	8.2	3.51	955	Bー7	Ⅱ	—
	124	削器	—	OB	1	28.0	18.1	8.9	4.61	10467	Aー28	Ⅲ	—
	125	削器	—	OB	6	20.4	23.2	10.2	4.28	8561	ウー25	Ⅲ	—
	126	削器	—	OB	1	25.8	14.3	4.6	1.84	5810	エー27	Ⅲ	—
	127	削器	—	OB	2	32.6	21.2	8.4	6.23	6474	カー28	Ⅲ	—
	128	削器	—	OB	4	31.9	24.2	8.2	5.80	5066	キー30	Ⅲ	—
	129	削器	—	OB	1	24.0	29.8	10.2	6.71	3504	Cー5	V	—
	130	削器	—	OB	1	37.2	31.0	11.2	9.95	10095	Aー27	Ⅲ	—
	131	削器	—	OB	1	34.6	30.2	10.0	7.76	6579	オー26	Ⅲ	—
	132	削器	—	OB	6	38.3	31.5	10.1	9.91	10567	Aー27	Ⅲ	—
	133	削器	—	OB	1	32.9	30.9	11.0	10.06	10084	Aー27	Ⅲ	—
128	134	削器	—	OB	1	45.6	34.1	11.0	18.36	9525	Aー27	Ⅲ	—
	135	削器	—	AN	—	(27.0)	(28.0)	3.8	(3.61)	5548	エー27	Ⅲ	—
	136	削器	—	AN	—	(28.2)	(47.0)	6.5	(5.83)	5432	エー28	Ⅲ	—
	137	削器	—	AN	—	66.1	42.0	11.3	29.92	12011	—		10号集石1
129	138	削器	—	SH	—	53.8	62.4	7.0	25.83	4648	カー29	Ⅲ	—
	139	削器	—	AN	—	54.0	50.3	10.5	26.16	12039	—		14号集石129
	140	削器	—	OB	6	(32.2)	(51.0)	10.4	(14.03)	6625	オー26	Ⅲ	—
	141	削器	—	AN	—	(42.5)	(56.6)	7.9	(17.23)	7456	キー31	Ⅲ	—
130	142	削器	—	SH	—	40.7	30.6	11.0	14.03	3a 一括	E～G ー15～17	Ⅲ a	—
	143	削器	—	SH	—	59.3	47.0	10.9	35.01	594	13T	Ⅲ	—
	144	削器	—	CC	—	88.1	63.2	16.8	90.67	8771	イー26	Ⅲ	—
131	145	削器	—	SS	—	(79.4)	(37.2)	8.0	(23.51)	2143	Cー8	V	—
	146	削器	—	AN	—	(88.0)	(41.4)	10.0	(25.51)	6055	エー26	Ⅲ	—
132	147	削器	—	AN	—	57.0	85.8	13.0	63.70	6553	オー27	Ⅲ	—
	148	削器	—	SH	—	65.0	109.0	17.0	139.92	2289	Cー7	V	—



第134図 縄文時代の石器27（楔形石器）

S154は剪断面が明瞭に観察される。

7 二次加工剥片（第135図 S155～S157, S160, S161）

遺跡全体では、155点の二次加工剥片が出土しているがその中から、4点図下した。S155は調整剥片である、S156は左側縁に細かな加工を施す、S157は素材面が大きく残るものの上端部から下端部にかけて細かな連続する加工を施す。S160は安山岩の剥片に求心的な剥離を施す、S161は右側縁に両面から連続した剥離を施す。

8 異形石器（第135図 S158）

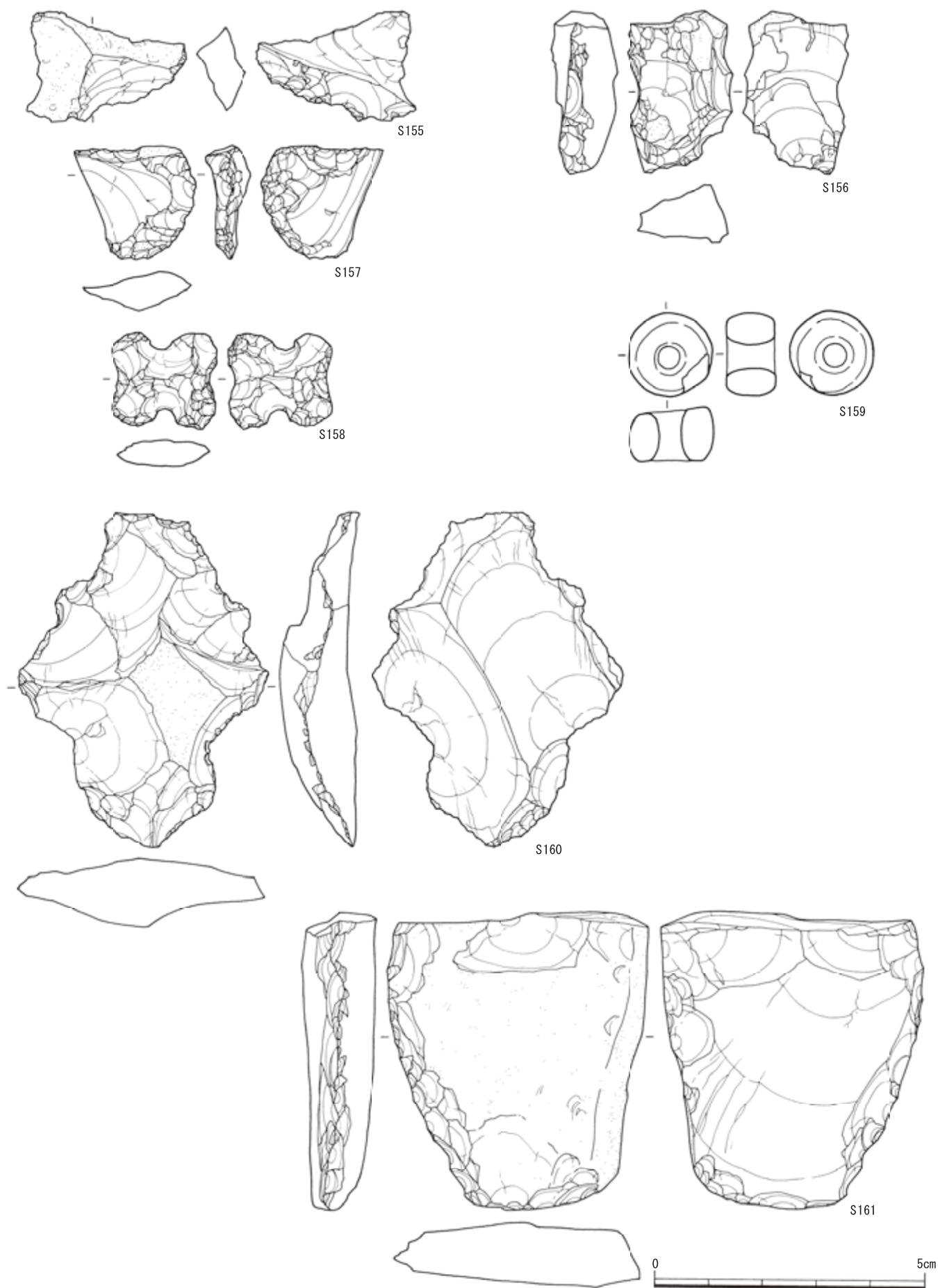
頁岩の厚手の剥片を用い整形は素材剥離面を残さず上端と下端に深い抉りを施し、両側縁には、浅い抉りが入る。

9 玉類（第135図 S159）

石材は不明であるが、比較的柔らかで明緑色の石材を用い穿孔方向は、両面とも面取りを行っているため定かではない。

第23表 縄文時代石器観察表（6）

挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備考
133	149	尖頭状石器	—	SH	—	131.0	104.0	22.2	385.00	3一括	エー31	Ⅲ	—
134	150	抉入石器	—	OB	1	25.0	16.3	7.0	2.11	4162	オー29	Ⅲ	—
	151	楔型石器	—	OB	1	19.0	17.9	9.0	2.71	6562	オー27	Ⅲ	—
	152	楔形石器	—	OB	1	22.4	17.2	9.2	3.85	2099	Cー8	V	—
	153	楔型石器	—	OB	6	21.0	19.9	9.1	4.02	11031	アー29	Ⅲ	—
	154	楔形石器	—	OB	4	26.0	25.0	9.0	4.24	8498	イー25	Ⅲ	—
135	155	二次加工剥片	—	OB	1	21.0	29.8	9.0	3.33	4525	キー27	Ⅲ	—
	156	二次加工剥片	—	OB	1	30.0	19.0	12.0	6.79	6002	ウー26	Ⅲ	—
	157	二次加工剥片	—	OB	6	20.8	22.0	7.0	2.08	5888	カー27	Ⅲ	—
	158	異形石器	—	SH	—	17.9	19.4	5.0	1.81	4947	キー30	Ⅲ	—
	159	玉	—	SE	—	15.0	14.8	10.2	3.5	表一括	オー31	表	—
	160	二次加工剥片	—	AN	—	62.0	46.1	13.2	22.62	5693	エー27	Ⅲ	—
	161	二次加工剥片	—	AN	—	55.1	48.0	13.0	47.68	9854	アー28	Ⅲ	—



第135図 縄文時代の石器28 (二次加工剥片・異形石器・玉)

10 石核（第137図～第147図）

遺跡全体では、144点の石核が出土しているがその中から、44点を図下した。抽出した石核は比較的小型のもの S162～S181、小型の両極石核 S191～S197、中型のもの S182～S188、大型のもの S189、S190、S198～S205とサイズにバリエーションがみられる。

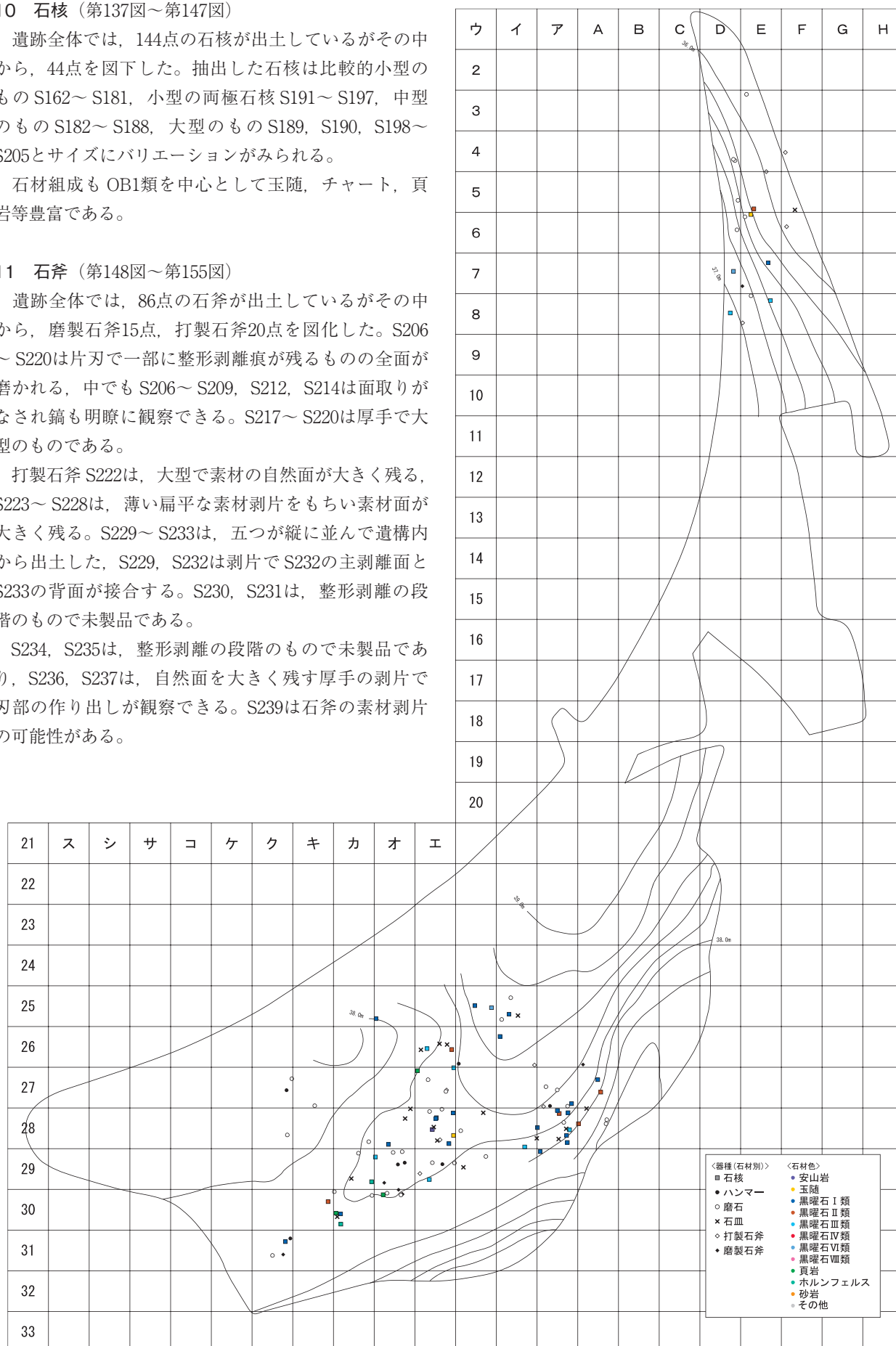
石材組成も OB1類を中心として玉随、チャート、頁岩等豊富である。

11 石斧（第148図～第155図）

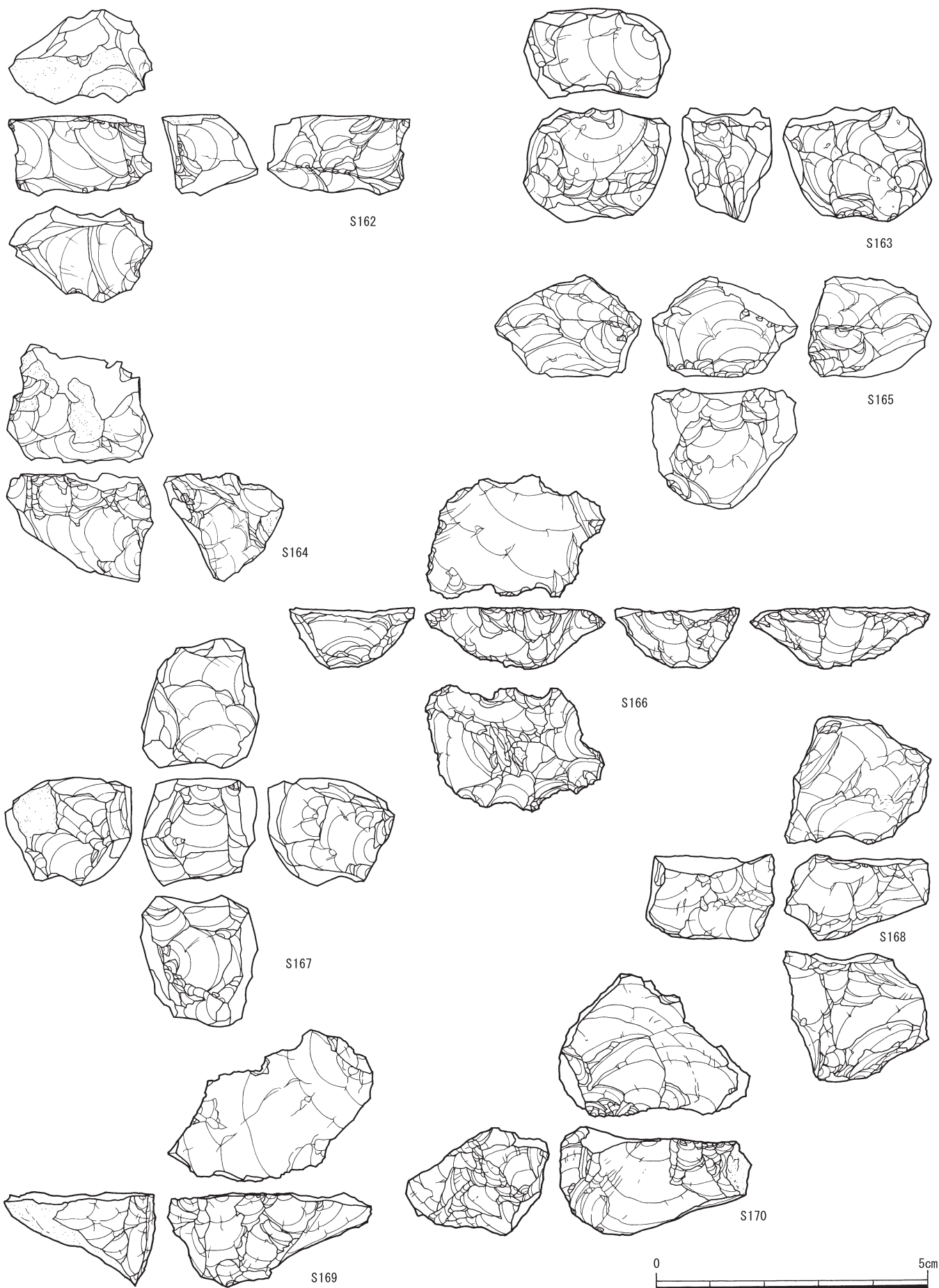
遺跡全体では、86点の石斧が出土しているがその中から、磨製石斧15点、打製石斧20点を図化した。S206～S220は片刃で一部に整形剥離痕が残るものの全面が磨かれる、中でも S206～S209、S212、S214は面取りがなされ鑄も明瞭に観察できる。S217～S220は厚手で大型のものである。

打製石斧 S222は、大型で素材の自然面が大きく残る、S223～S228は、薄い扁平な素材剥片をもちい素材面が大きく残る。S229～S233は、五つが縦に並んで遺構内から出土した、S229、S232は剥片で S232の主剥離面と S233の背面が接合する。S230、S231は、整形剥離の段階のもので未製品である。

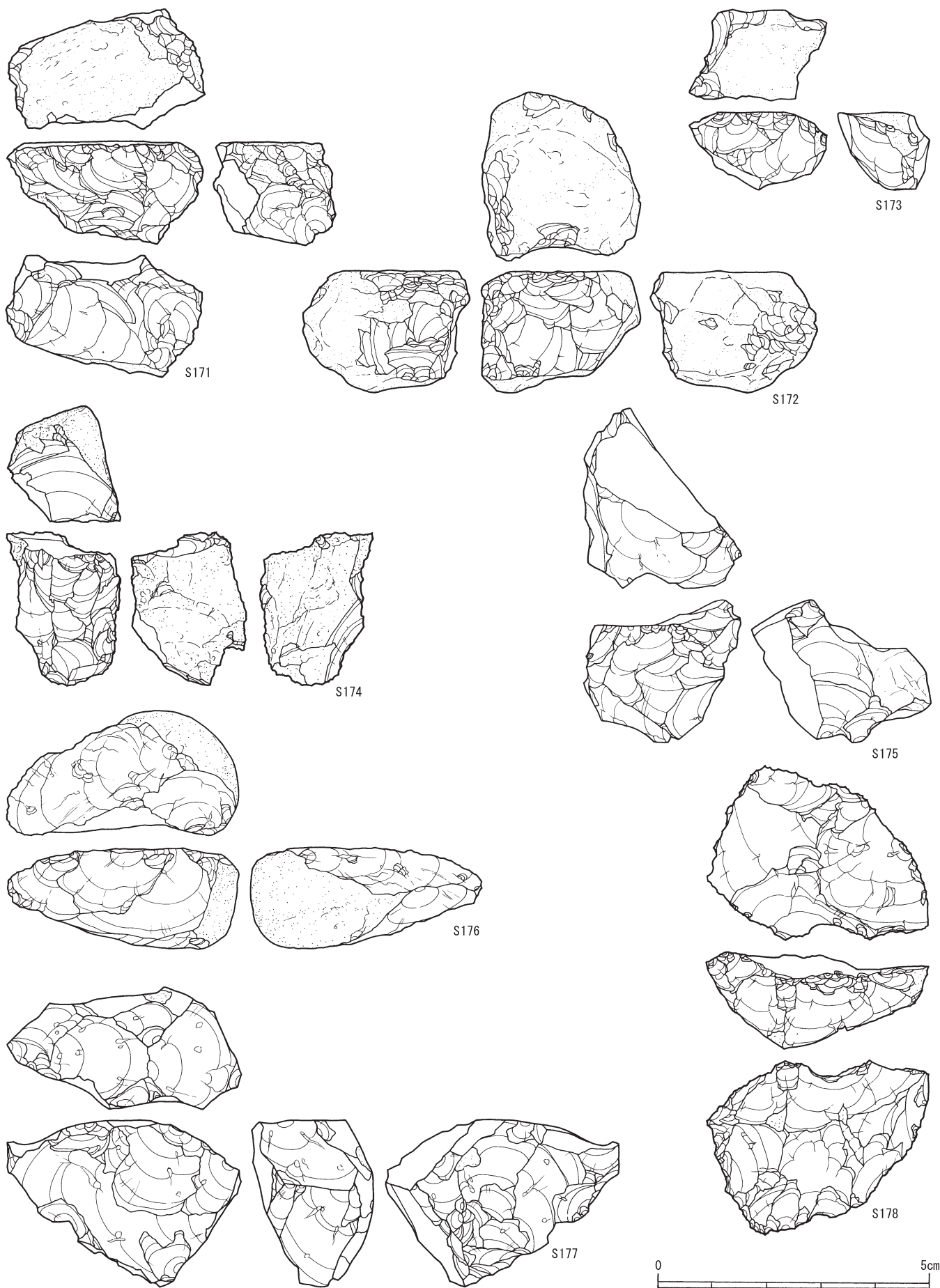
S234、S235は、整形剥離の段階のもので未製品であり、S236、S237は、自然面を大きく残す厚手の剥片で刃部の作り出しが観察できる。S239は石斧の素材剥片の可能性はある。



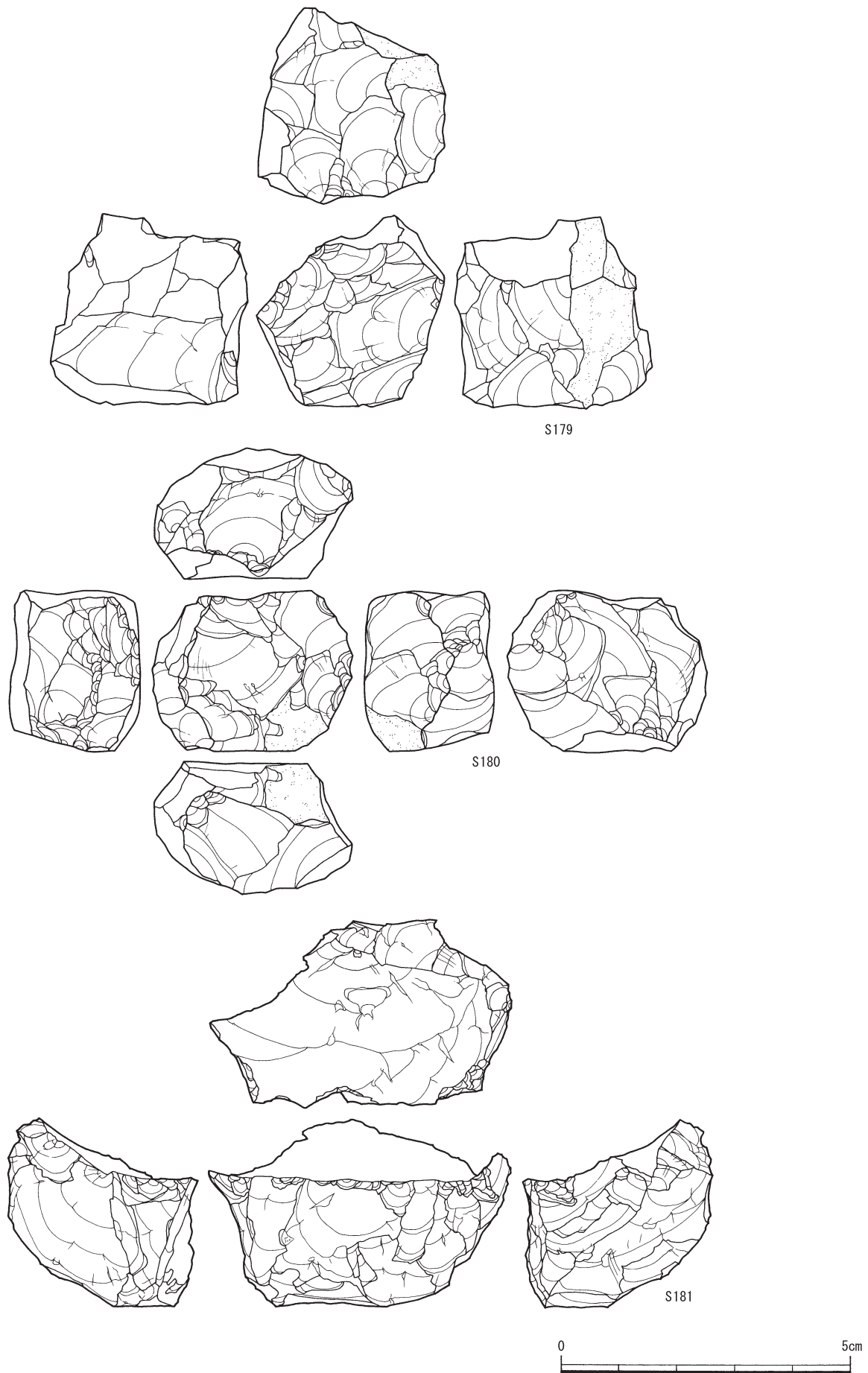
第136図 縄文時代の石器出土分布図 4



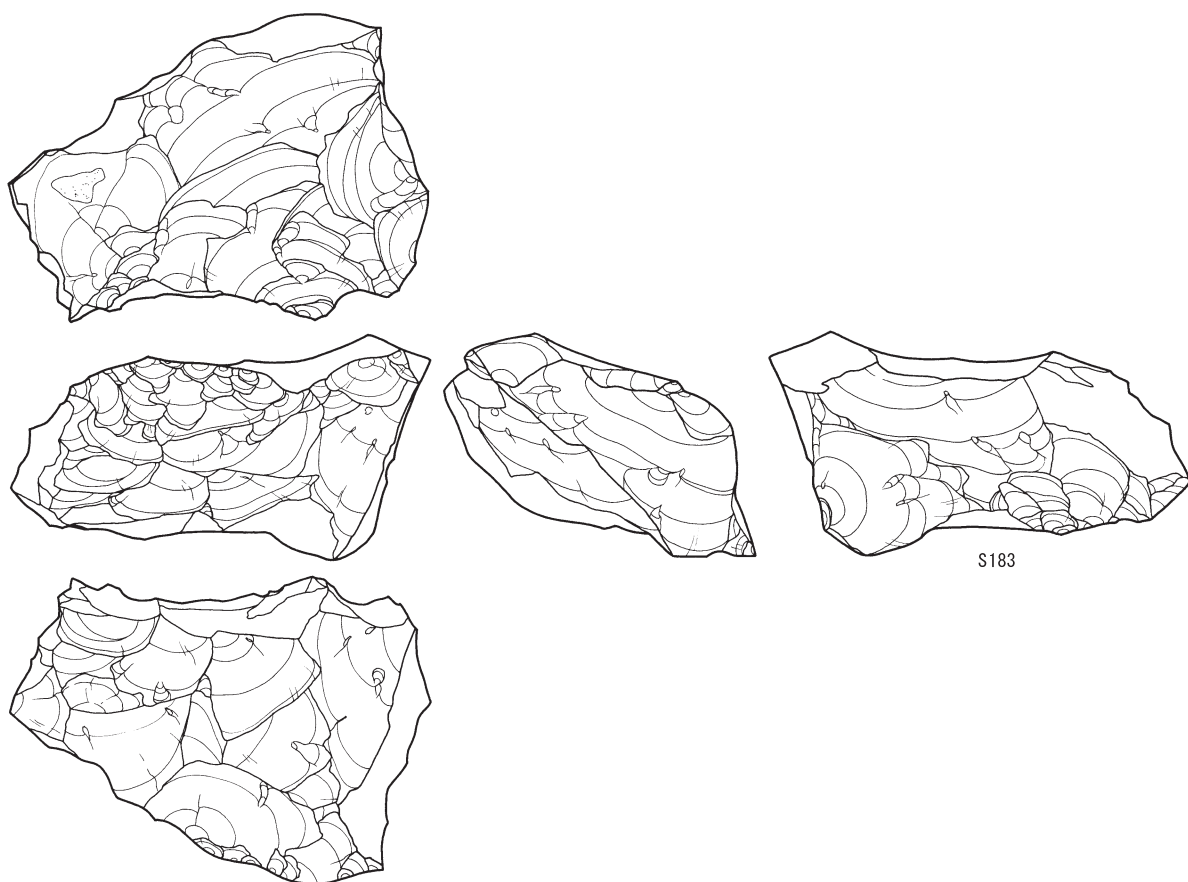
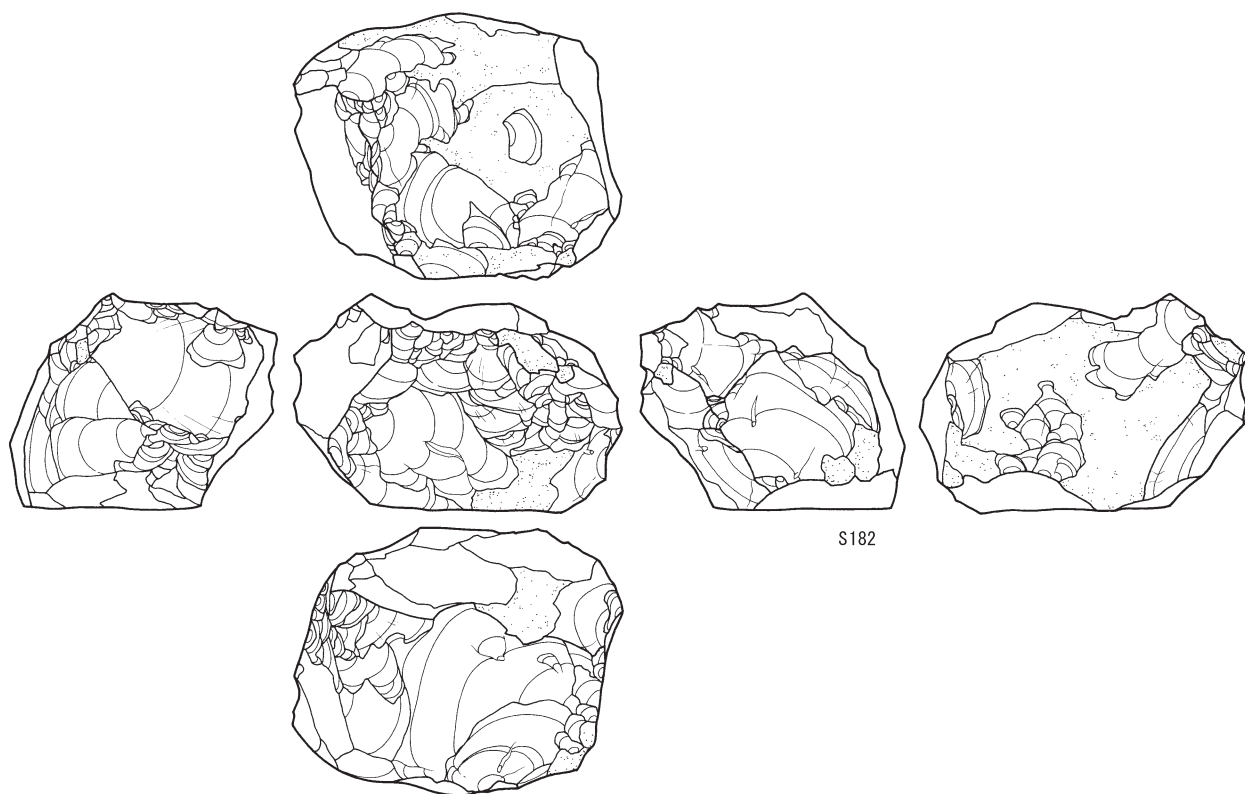
第137図 縄文時代の石器29 (石核1)



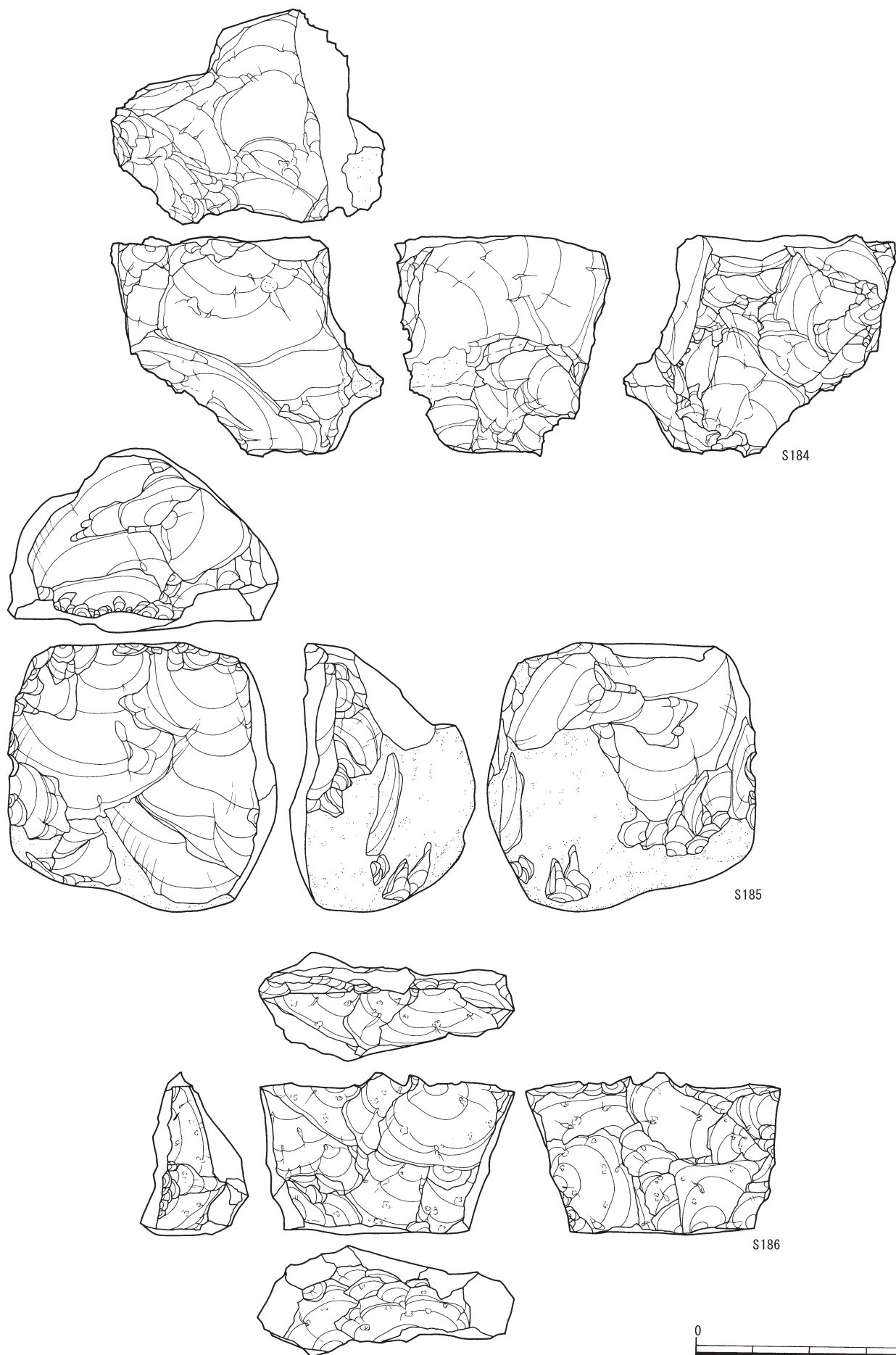
第138図 縄文時代の石器30 (石核2)



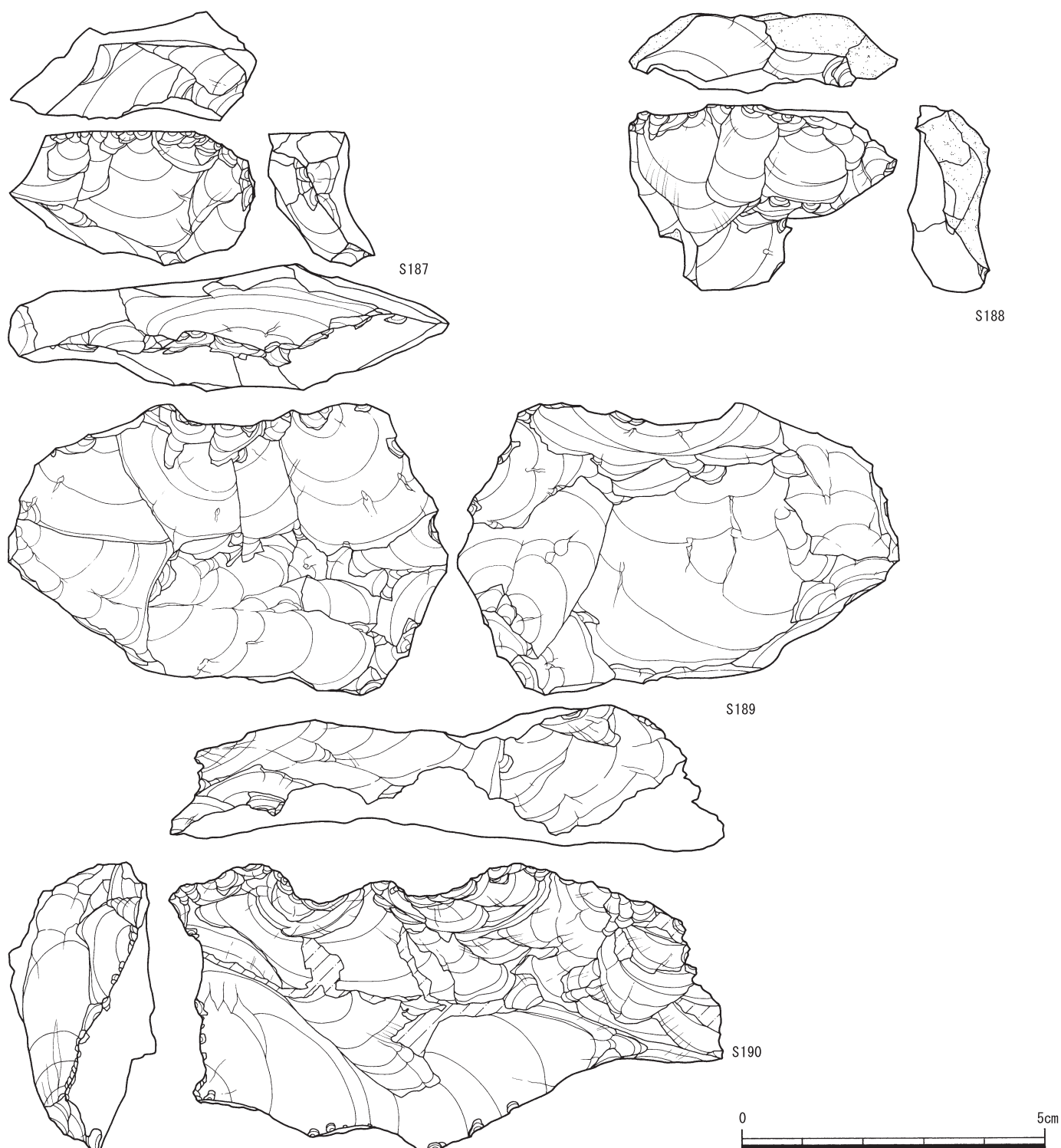
第139図 縄文時代の石器31（石核3）



第140図 縄文時代の石器32 (石核4)



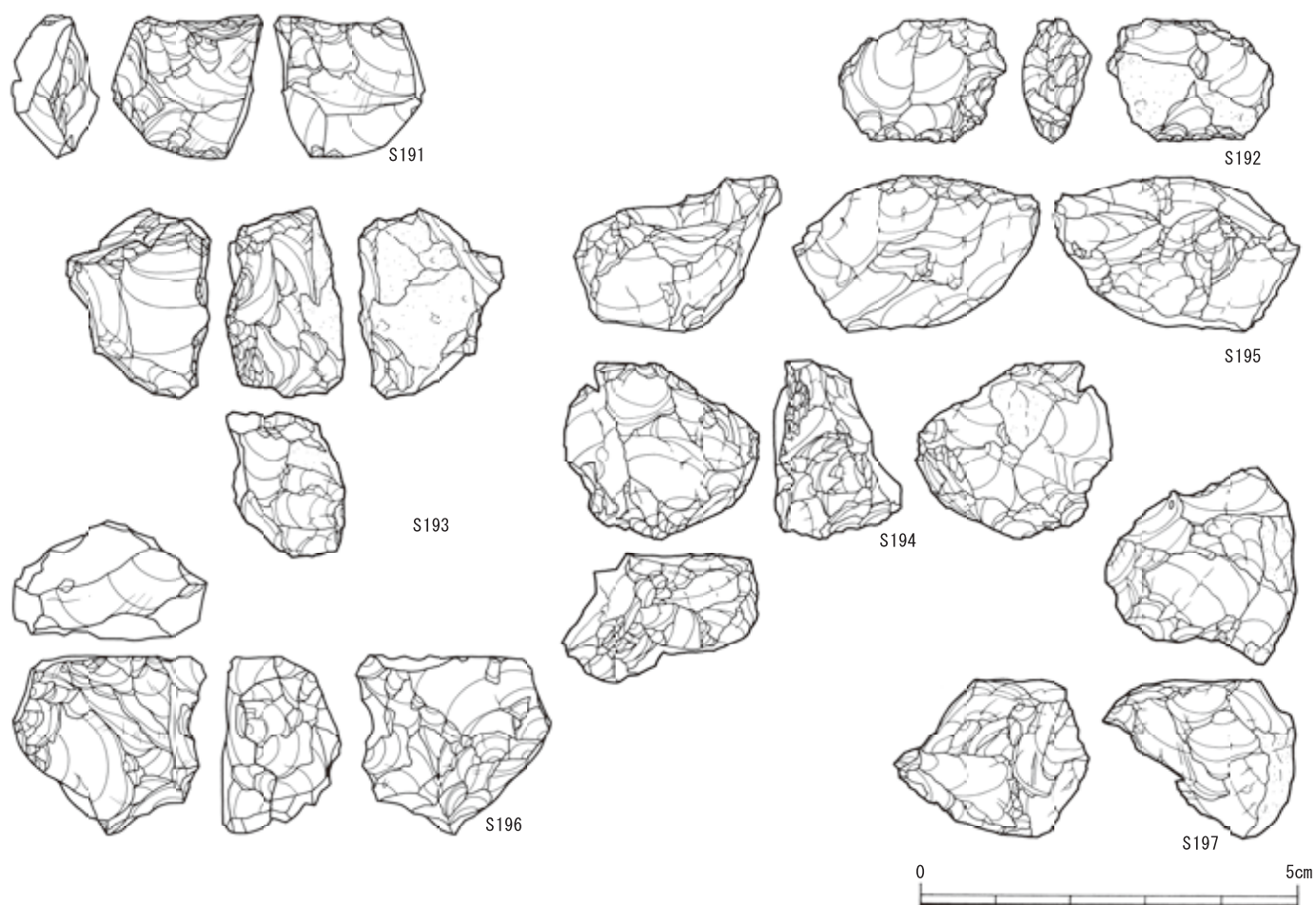
第141図 縄文時代の石器33（石核5）



第142図 縄文時代の石器34（石核6）

第24表 縄文時代石器観察表（7）

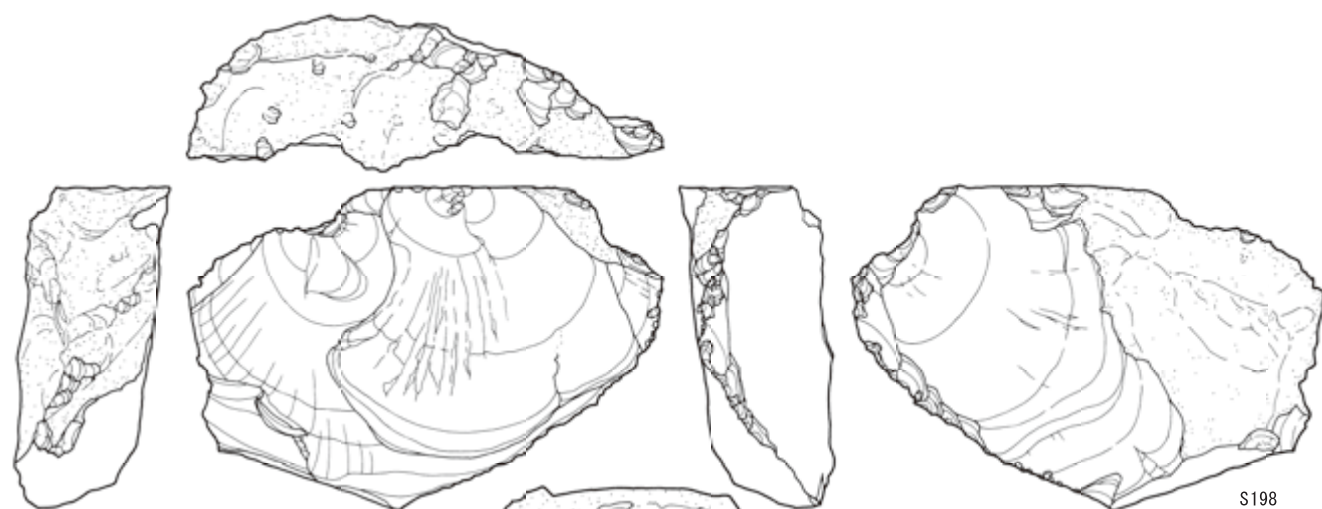
挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
137	162	石核	—	OB	4	15.2	26.5	15.0	5.72	6174	エ-26	Ⅲ	—
	163	石核	—	OB	2	21.1	28.0	16.9	10.81	11274	A-27	Ⅲ	—
	164	石核	—	OB	1	20.0	26.8	22.2	8.90	10055	ア-28	Ⅲ	—
	165	石核	—	OB	1	18.5	22.0	23.0	13.01	6429	イ-28	Ⅲ	—
	166	石核	—	OB	1	11.2	33.1	22.0	7.50	10477	ア-28	Ⅲ	—
	167	石核	—	OB	1	18.8	22.2	24.0	14.53	6934	オ-26	Ⅲ	—
	168	石核	—	OB	1	15.4	26.8	23.5	11.90	9449	ア-27	Ⅲ	—
	169	石核	—	OB	1	17.5	38.3	27.0	11.40	10117	ア-28	Ⅲ	—



第143図 縄文時代の石器35（石核7）

第25表 縄文時代石器観察表（8）

挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
137	170	石核	－	OB	1	20.4	35.2	26.2	14.40	10060	ア－28	Ⅲ	－
138	171	石核	－	OB	1	19.1	36.0	21.6	15.84	11301	A－27	Ⅲ	－
	172	石核	－	OB	1	23.0	30.0	32.0	27.76	8429	イ－25	Ⅲ	－
	173	石核	－	OB	1	14.2	25.3	17.0	5.62	7570	カ－30	Ⅲ	－
	174	石核	－	OB	4	29.0	18.0	21.0	10.78	5835	エ－27	Ⅲ	－
	175	石核	－	OB	1	25.2	29.0	29.6	16.26	7495	ク－31	Ⅲ	－
	176	石核	－	OB	2	19.2	43.0	22.4	17.45	8950	ア－28	Ⅲ	－
	177	石核	－	OB	2	31.8	43.0	22.0	23.43	3568	C－5	V	－
	178	石核	－	OB	1	18.0	41.0	31.0	16.86	8627	ウ－26	Ⅲ	－
139	179	石核	－	CC	－	33.1	33.2	34.0	35.61	2997	C－6	V	－
	180	石核	－	OB	6	28.0	35.0	22.0	26.30	2646	B－7	V	－
	181	石核	－	OB	1	32.0	52.0	24.1	40.50	8236	エ－28	Ⅲ	－
140	182	石核	－	OB	1	27.1	40.8	35.0	46.66	9163	ア－28	Ⅲ	－

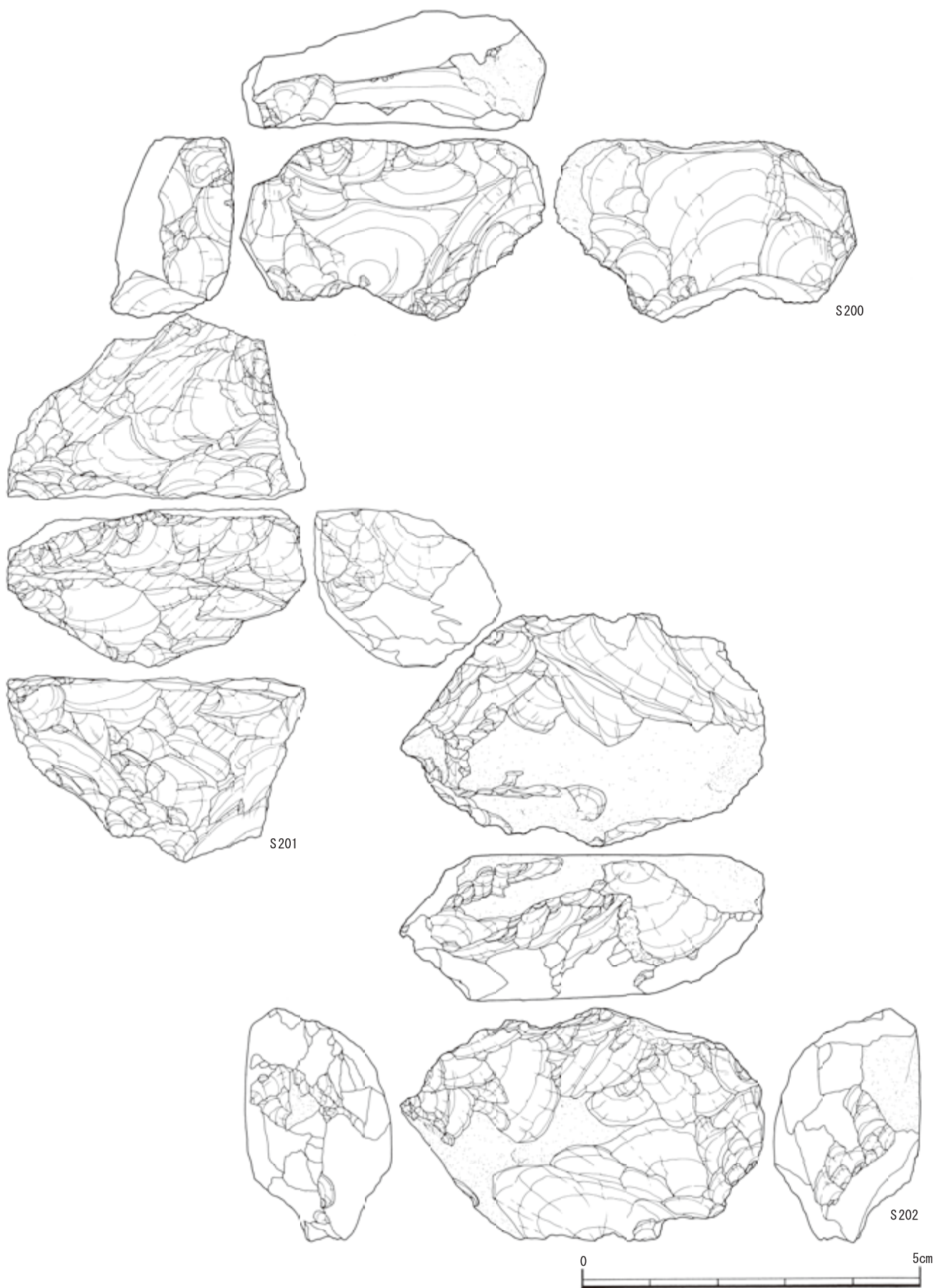


S198

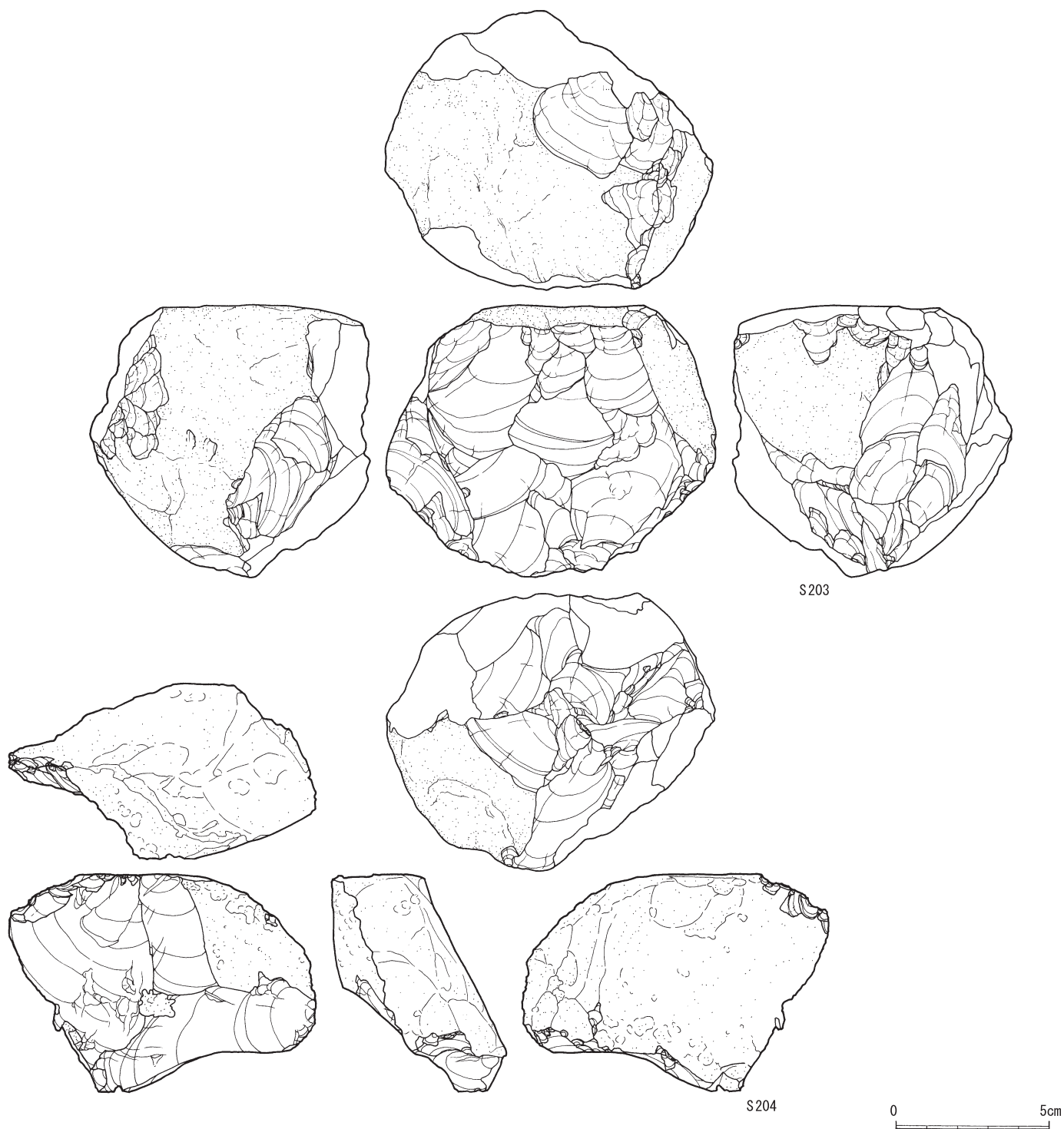
S199



第144図 縄文時代の石器36 (石核8)



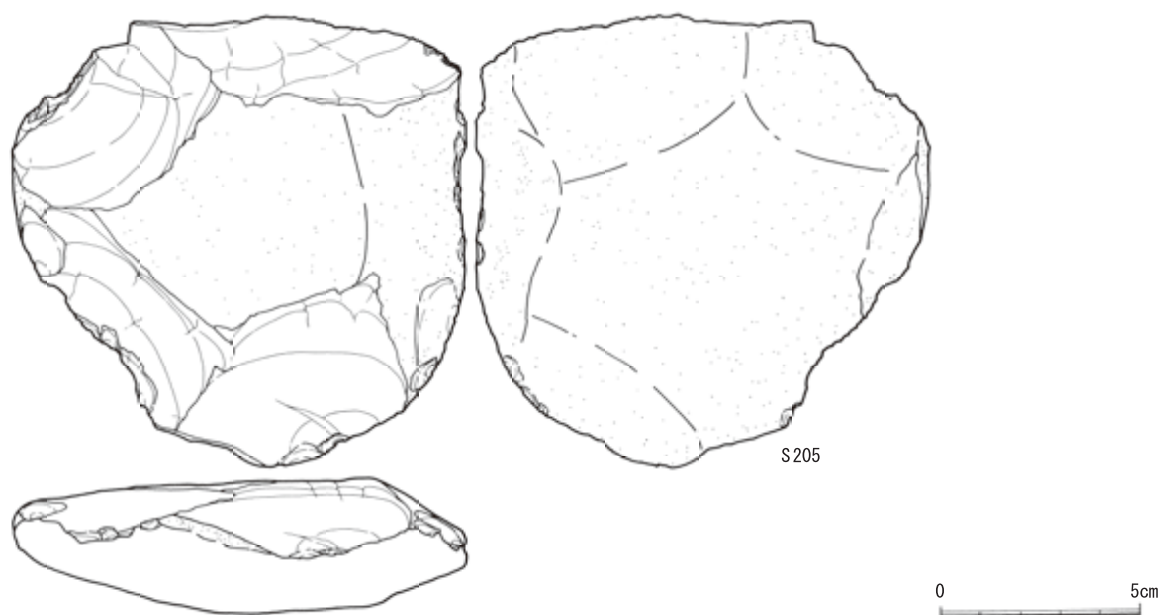
第145図 縄文時代の石器37（石核9）



第146図 縄文時代の石器38（石核10）

第26表 縄文時代石器観察表（9）

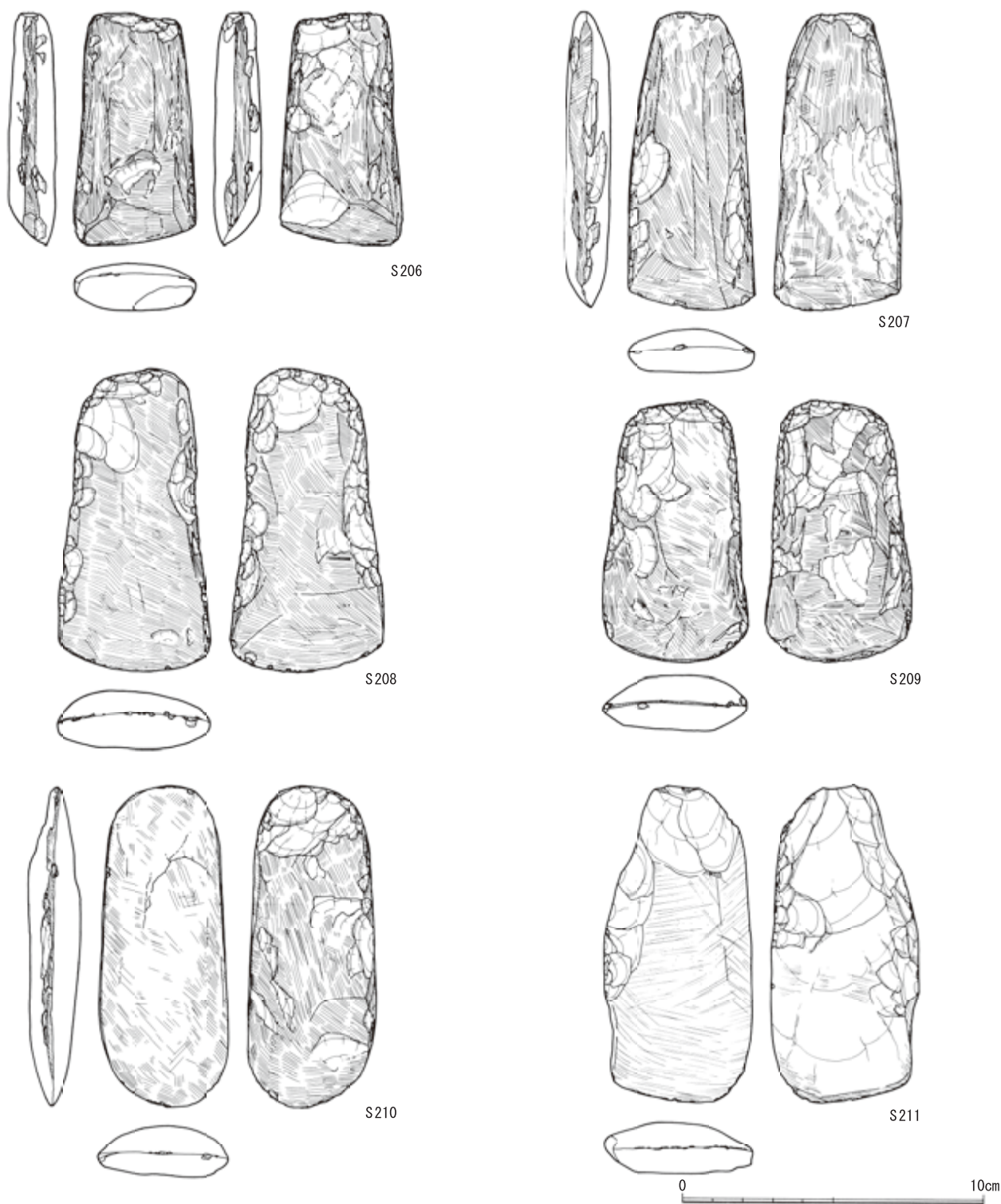
挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
140	183	石核	—	OB	1	39.3	54.0	18.0	43.74	10924	イ-29	表	—
141	184	石核	—	OB	1	38.6	48.0	36.0	51.36	8238	エ-28	Ⅲ	—
	185	石核	—	OB	4	48.0	47.7	32.1	69.28	12093	—		剥片2号-59
	186	石核	—	OB	2	33.5	44.2	18.0	20.00	6051	エ-26	Ⅲ	—
142	187	石核	—	CC	—	23.7	40.0	13.0	12.30	7024	ウ-27	Ⅲ	—
	188	石核	—	OB	4	30.5	44.1	13.0	12.29	337	13T	Ⅱ	—
	189	石核	—	OB	2	48.0	72.0	20.8	57.75	7359	キ-30	Ⅲ	—
	190	石核	—	SH	—	43.0	91.0	23.5	73.47	5748	エ-27	Ⅲ	—



第147図 縄文時代の石器39（石核11）

第27表 縄文時代石器観察表（10）

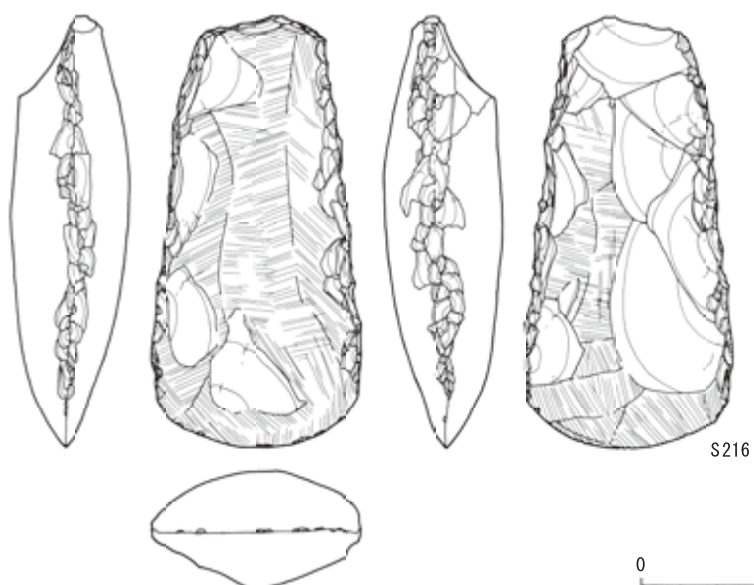
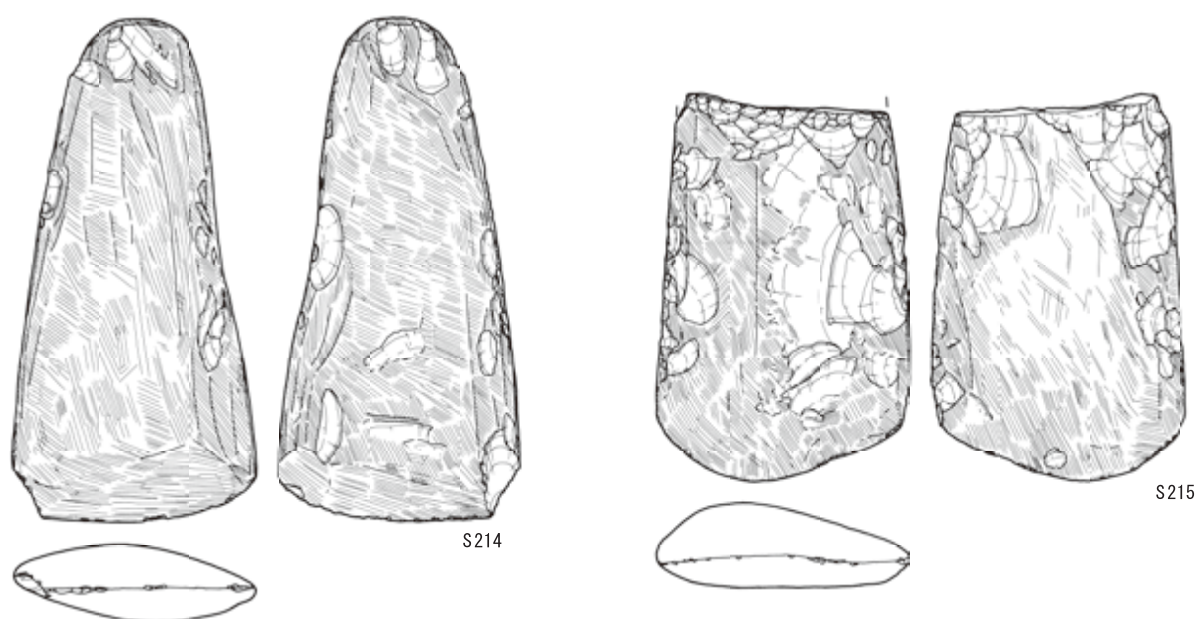
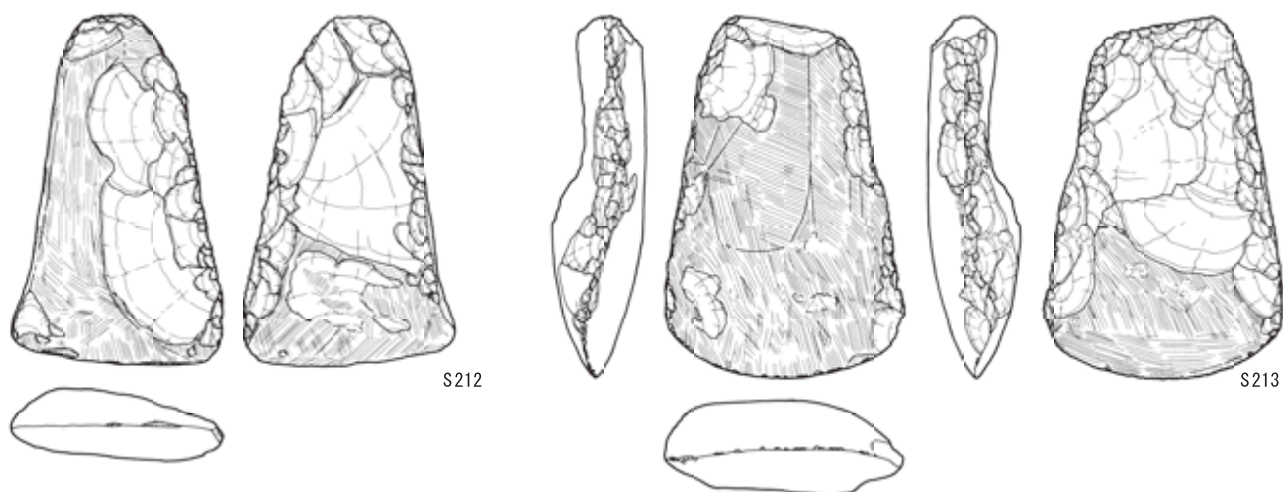
挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
143	191	石核	－	OB	1	19.0	19.7	11.7	3.73	5490	エ－28	Ⅲ	－
	192	石核	－	OB	4	16.0	21.9	9.0	2.42	11509	ア－28	Ⅲ	－
	193	石核	－	OB	4	15.5	25.3	24.4	7.39	10823	イ－28	Ⅲ	－
	194	石核	－	OB	1	23.2	25.5	17.0	8.90	8689	イ－26	Ⅲ	－
	195	石核	－	OB	2	20.8	33.0	30.0	14.22	11681	A－28	Ⅲ	－
	196	石核	－	OB	1	23.7	26.0	15.6	9.11	7113	ウ－27	Ⅲ	－
	197	石核	－	OB	1	20.5	25.8	25.6	10.32	1231	C－7	Ⅱ a	－
144	198	石核	－	OB	4	41.2	60.8	17.0	36.03	5225	オ－29	Ⅲ	－
	199	石核	－	OB	5	46.0	66.5	46.0	163.40	1161	C－8	Ⅱ	－
145	200	石核	－	AN	－	44.5	74.8	23.5	91.11	8227	エ－27	Ⅲ	－
	201	石核	－	SH	－	39.0	73.2	51.2	126.86	4812	カ－30	Ⅲ	－
	202	石核	－	HF	－	36.5	90.1	57.5	199.69	4752	カ－30	Ⅲ	－
146	203	石核	－	SH	－	89.0	105.0	89.0	1060.00	4319	オ－30	Ⅲ	－
	204	石核	－	OB	4	70.5	101.0	36.0	236.74	3960	エ－29	Ⅲ	－
147	205	石核	－	HF	－	113.5	114.5	33.5	480.00	7714	カ－29	Ⅲ	－



第148図 縄文時代の石器40（石斧1）

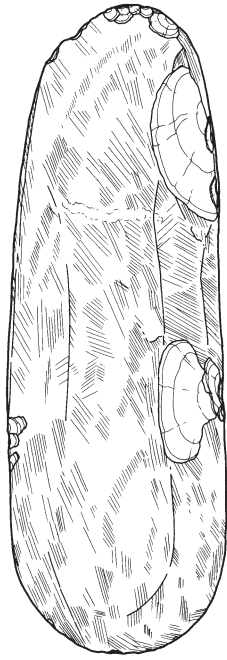
第28表 縄文時代石器観察表（11）

挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
148	206	磨製石斧	—	SH	—	77.0	40.0	15.6	75.64	3一括	オ-31	Ⅲ	—
	207	磨製石斧	—	SE	—	99.0	41.6	15.0	85.50	2206	C-7	V	—
	208	磨製石斧	—	HF	—	101.0	51.3	19.0	134.41	10588	A-27	Ⅲ	—
	209	磨製石斧	—	HF	—	86.6	48.1	18.7	112.78	11094	ア-28	Ⅲ	—
	210	磨製石斧	—	HF	—	106.8	42.5	17.8	103.49	4407	ク-31	Ⅲ	—

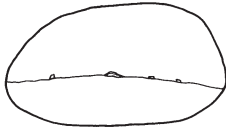


0 10cm

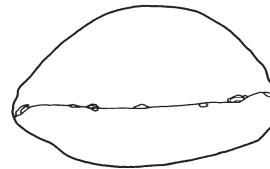
第149図 縄文時代の石器41（石斧2）



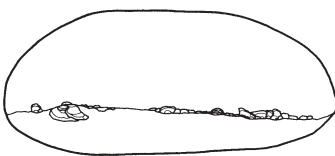
S217



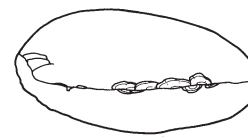
S218



S219



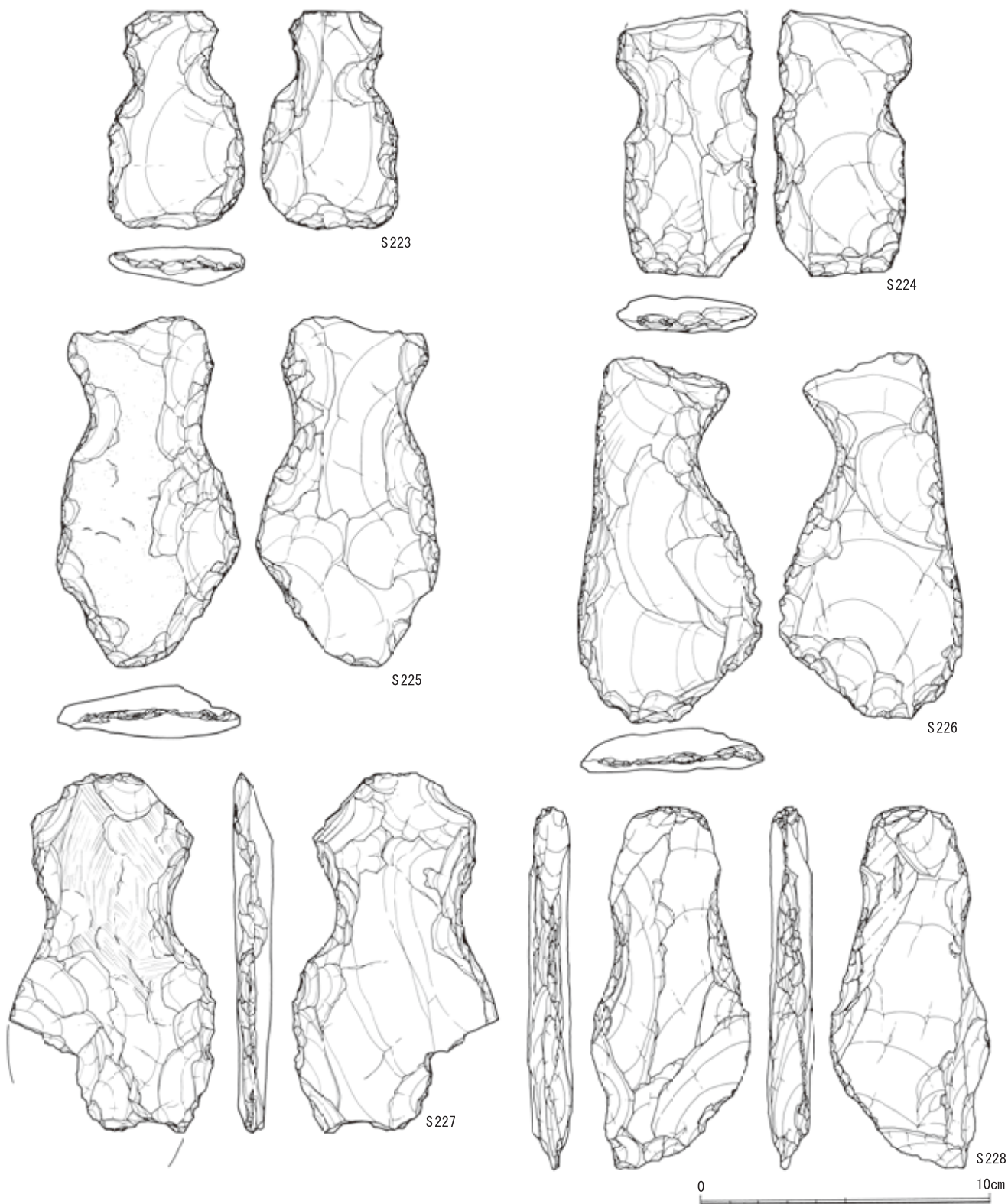
S220



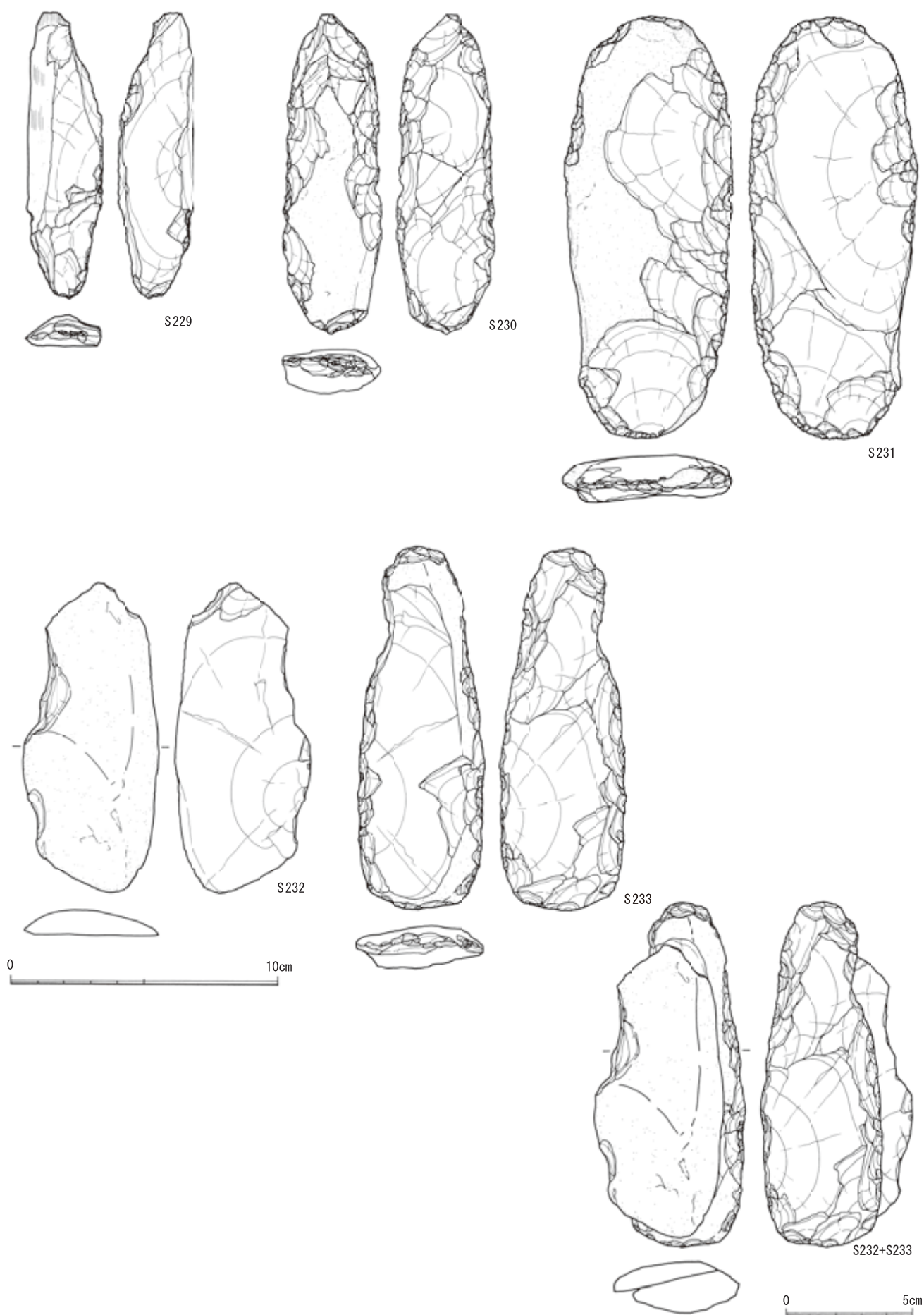
第150図 縄文時代の石器42 (石斧3)



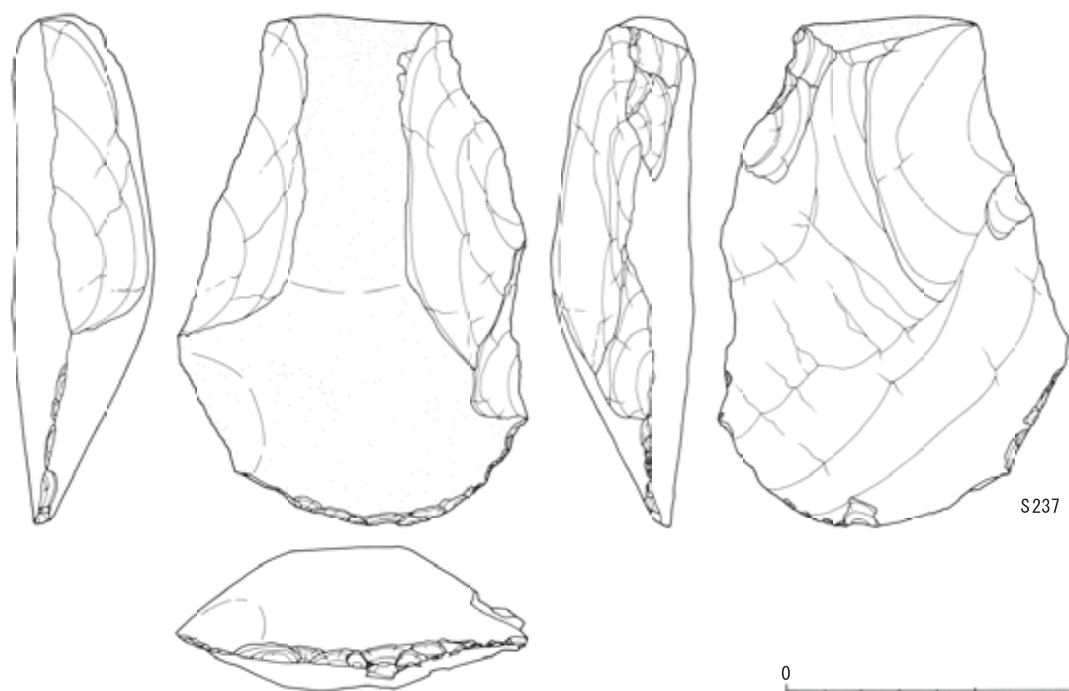
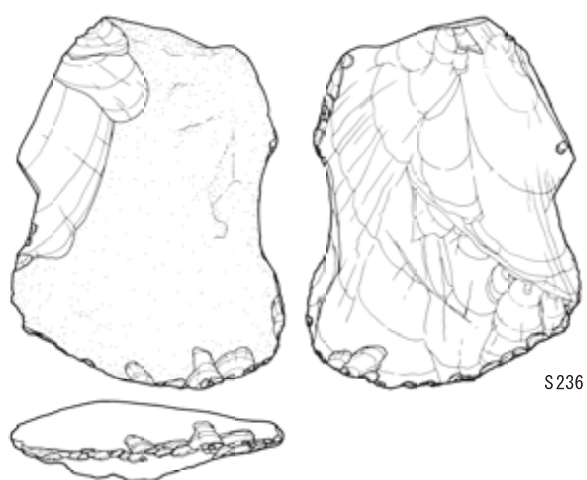
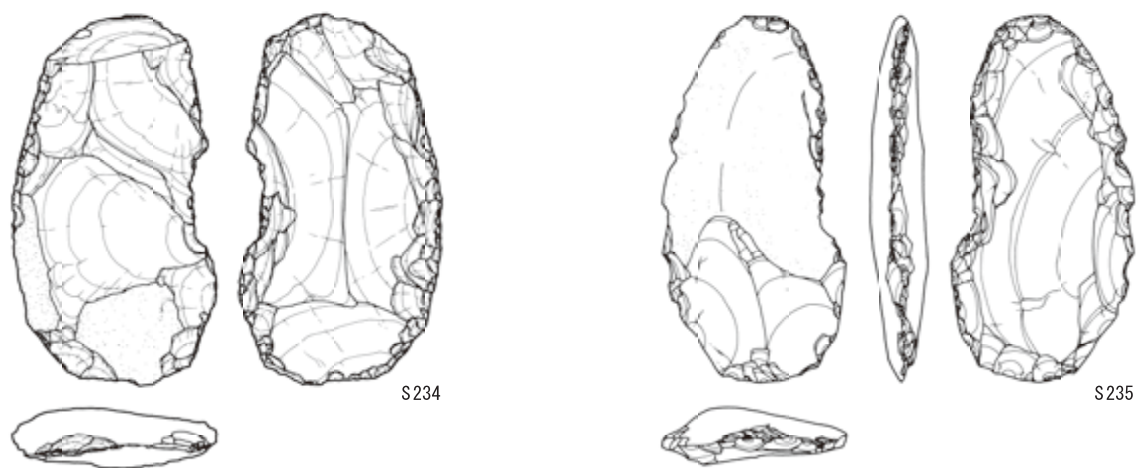
第151図 縄文時代の石器43（石斧4）



第152図 縄文時代の石器44（石斧 5）



第153図 縄文時代の石器45 (石斧6)

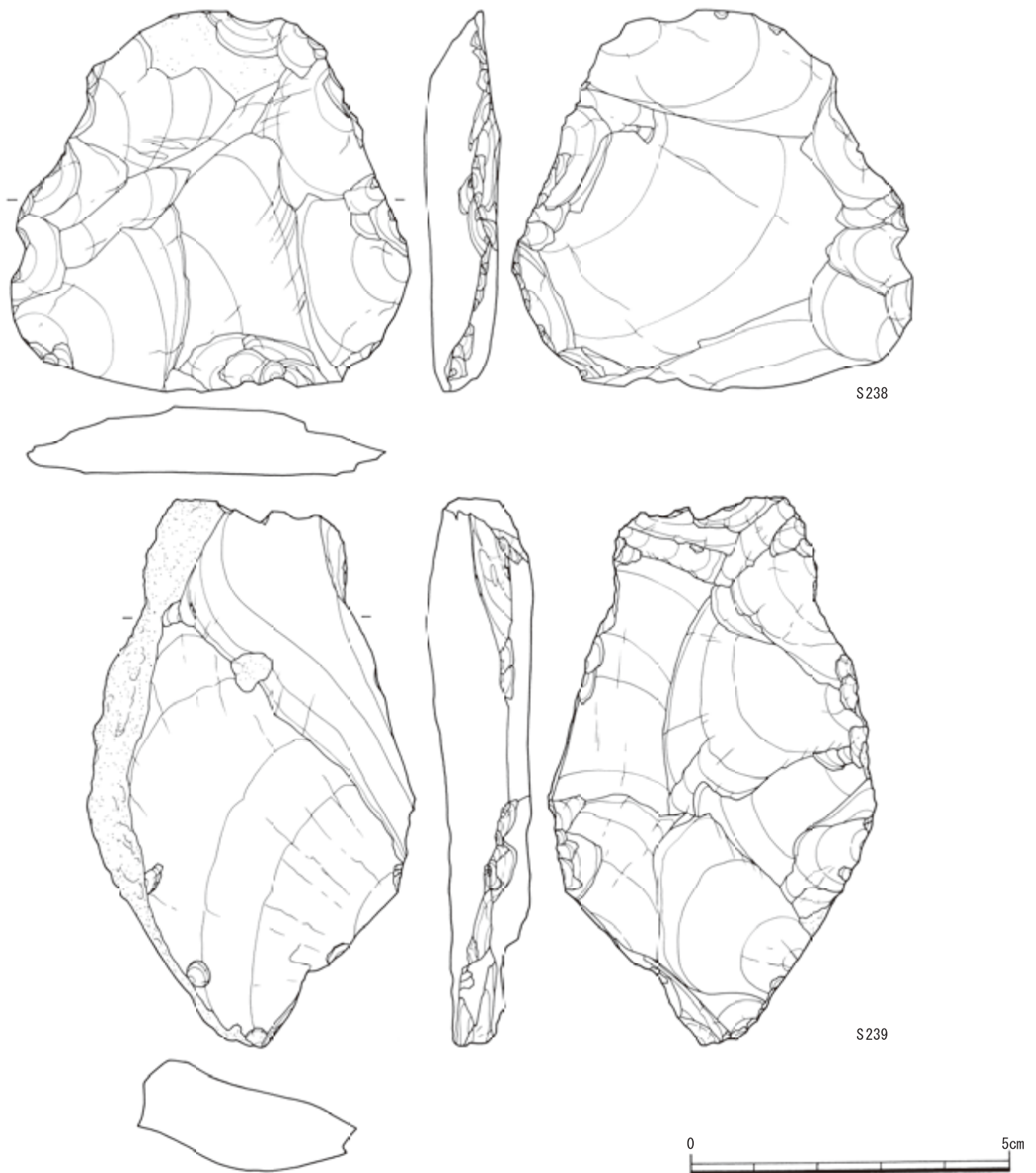


0 10cm

第154図 縄文時代の石器46（石斧7）

第29表 縄文時代石器観察表 (12)

挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
148	211	打製石斧	－	HF	－	105.7	50.0	17.5	105.91	8223	エ－27	Ⅲ	－
149	212	磨製石斧	－	HF	－	92.2	55.5	17.2	97.00	3一括	カ－31	Ⅲ	－
	213	磨製石斧	－	SH	－	96.6	63.3	24.4	162.07	11092	ア－28	Ⅲ	－
	214	磨製石斧	－	HF	－	132.6	64.6	20.2	211.24	4267	オ－29	Ⅲ	－
	215	磨製石斧	－	SH	－	(102.0)	(67.2)	22.0	(218.69)	11090	ア－28	Ⅲ	－
	216	磨製石斧	－	HF	－	114.0	55.8	31.0	233.48	11093	ア－28	Ⅲ	－
150	217	磨製石斧	－	HF	－	172.0	57.5	31.9	474.00	11091	ア－28	Ⅲ	－
	218	磨製石斧	－	HF	－	183.6	70.3	43.2	651.00	4290	オ－30	Ⅲ	－
	219	磨製石斧	－	SH	－	200.0	83.5	37.0	929.00	4298	オ－30	Ⅲ	－
	220	磨製石斧	－	HF	－	181.6	64.4	32.7	520.00	11095	ア－28	Ⅲ	－
151	221	打製石斧	－	HF	－	183.0	49.6	32.0	296.82	8100	オ－30	Ⅲ	－
	222	打製石斧	－	HF	－	197.0	75.5	31.0	672.00	11153	イ－26	Ⅲ	－
152	223	打製石斧	－	SH	－	77.0	48.0	12.0	55.66	1918	D－6	Ⅳ	－
	224	打製石斧	－	HF	－	91.6	47.7	11.0	66.01	2一括	C－7	Ⅱ	－
	225	打製石斧	－	HF	－	122.2	63.0	18.0	127.28	2一括	C－7	Ⅱ	－
	226	打製石斧	－	HF	－	127.0	64.0	14.0	119.71	2一括	C－7	Ⅱ	－
	227	打製石斧	－	HF	－	125.8	71.6	13.8	128.09	2620	C－4	Ⅱ	－
	228	打製石斧	－	HF	－	126.6	55.2	15.2	110.81	265	13T	Ⅱ	－
153	229	打製石斧	－	HF	－	107.7	28.2	10.8	38.20	12081	13T	Ⅲ	1号石斧埋納1
	230	打製石斧	－	HF	－	120.1	37.3	15.0	77.78	12082	13T	Ⅲ	1号石斧埋納2
	231	打製石斧	－	HF	－	150.0	63.4	16.6	202.97	12083	13T	Ⅲ	1号石斧埋納3
	232	打製石斧	－	HF	－	116.1	51.0	10.0	56.22	12084	13T	Ⅲ	1号石斧埋納4
	233	打製石斧	－	HF	－	135.8	47.1	14.6	106.80	12085	13T	Ⅲ	1号石斧埋納5
	232+233	打製石斧	－	SH	－	135.8	59.3	21.5	163.02	12084・12085	13T	Ⅲ	1号石斧埋納4・5
154	234	打製石斧	－	HF	－	98.0	52.4	16.0	83.80	3472	C－4	Ⅱ	－
	235	打製石斧	－	HF	－	97.0	47.0	15.0	69.81	11110	ア－27	Ⅲ	－
	236	打製石斧	－	HF	－	99.0	72.7	20.7	156.99	4291	オ－30	Ⅲ	－
	237	打製石斧	－	HF	－	135.1	94.9	37.0	450.00	7079	ウ－27	Ⅲ	－
155	238	石斧	－	SH	－	60.0	62.0	11.0	45.99	2832	C－7	V	－
	239	石斧	－	AN	－	86.4	50.1	15.0	61.69	7005	ウ－27	Ⅲ	－



第155図 縄文時代の石器47 (石斧8)

12 ハンマーストーン (第156図)

10点を抽出した。全て円礫を素材とし、上下両端と両側縁が使用面となる。S248は側縁の全周に敲打痕が、磨跡が両面に認められる。

13 磨石／敲石 (第157図～第162図)

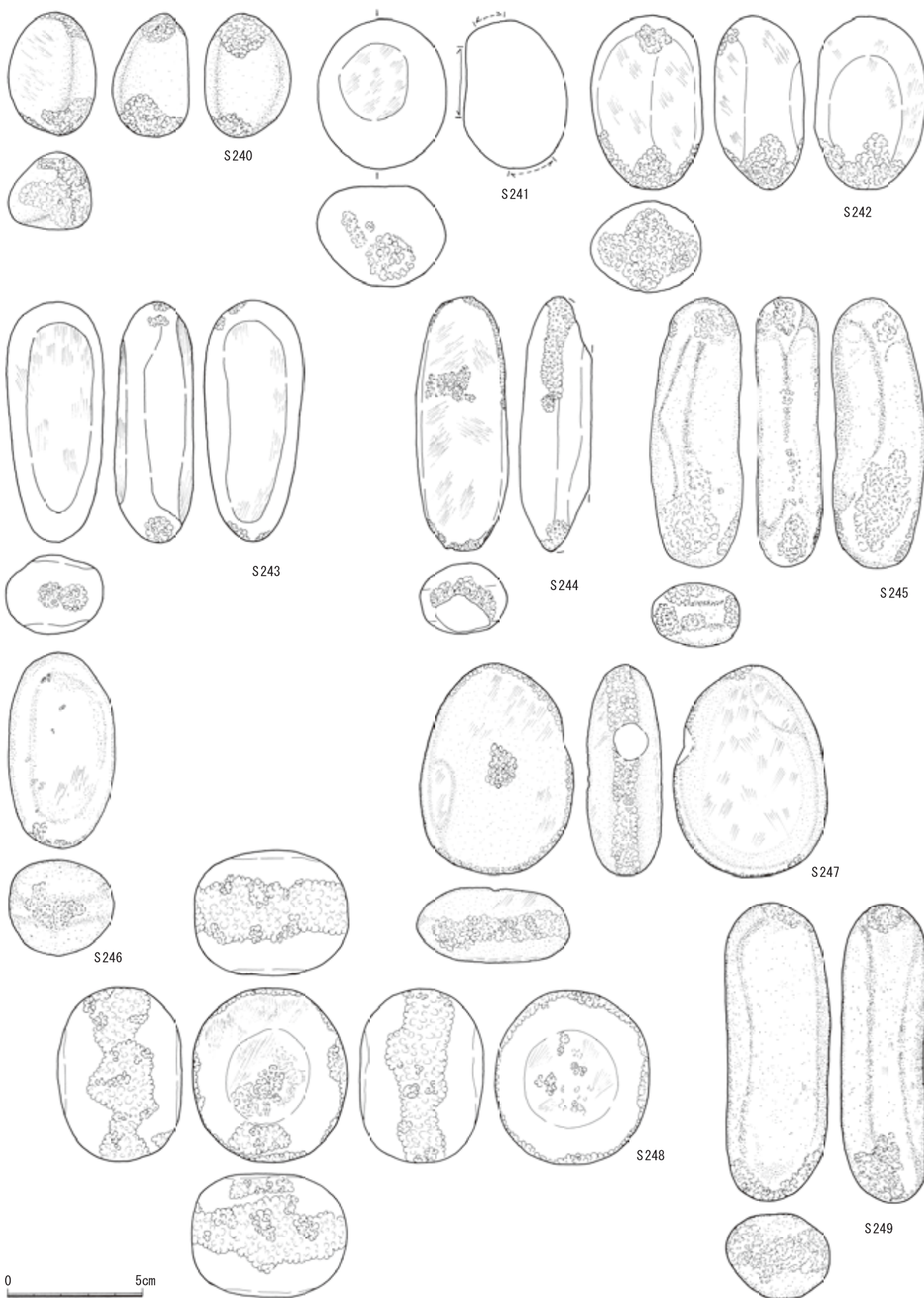
敲打痕と平滑面の両機能を兼ねたものをあつかった。石材は砂岩と輝石安山岩の円礫をもちい、S258, S259, S277, S279, S281, S283, S294は、平滑面に敲打痕が明瞭に認められる。

14 石皿 (第163図～第167図)

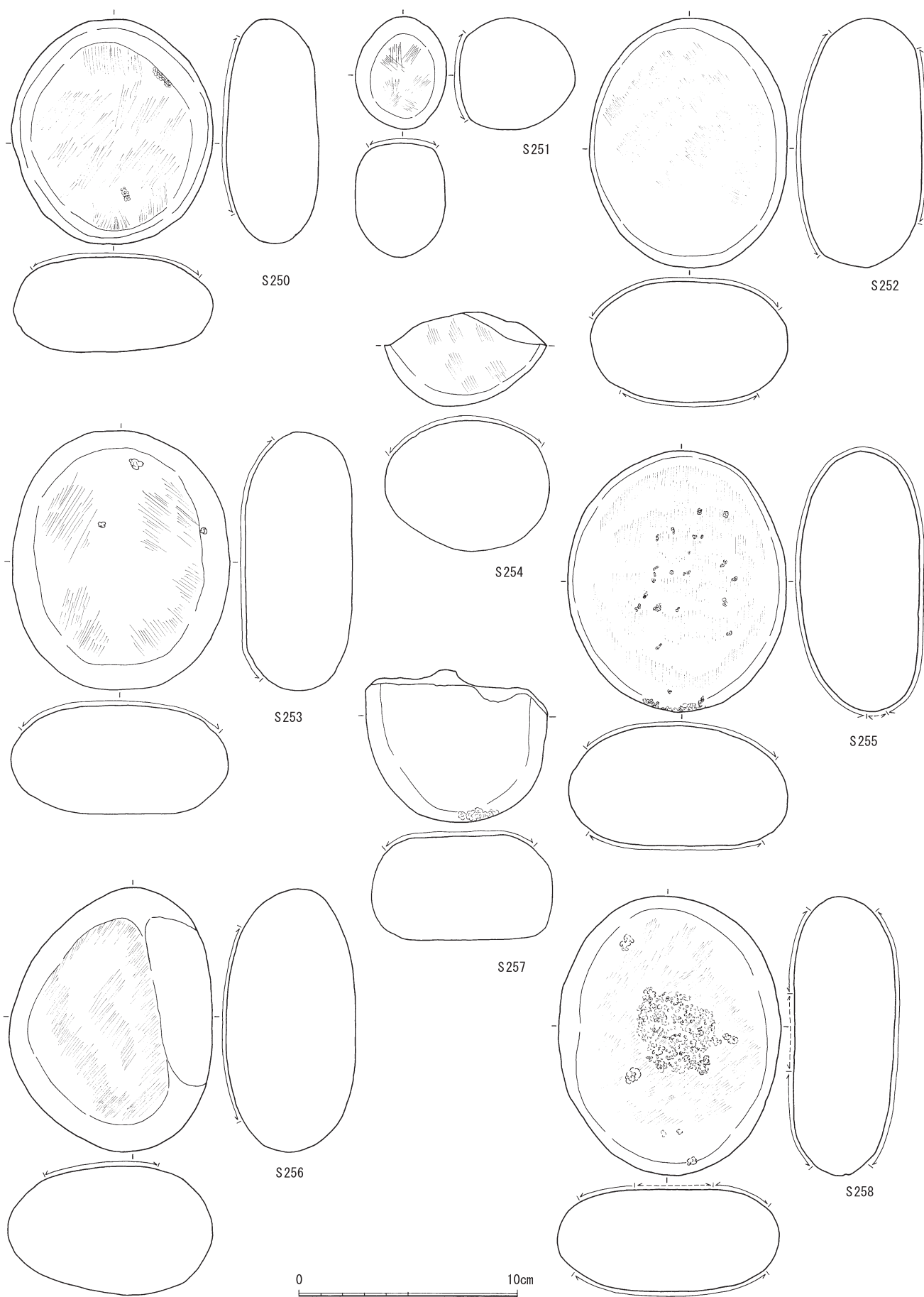
平坦な平滑面をもつものが主で皿状に明瞭な凹みをもつものは、S314のみである。S298～S308は、小型の礫をもちい破損している。石材は全て砂岩である。

15 礫石器 (第168図)

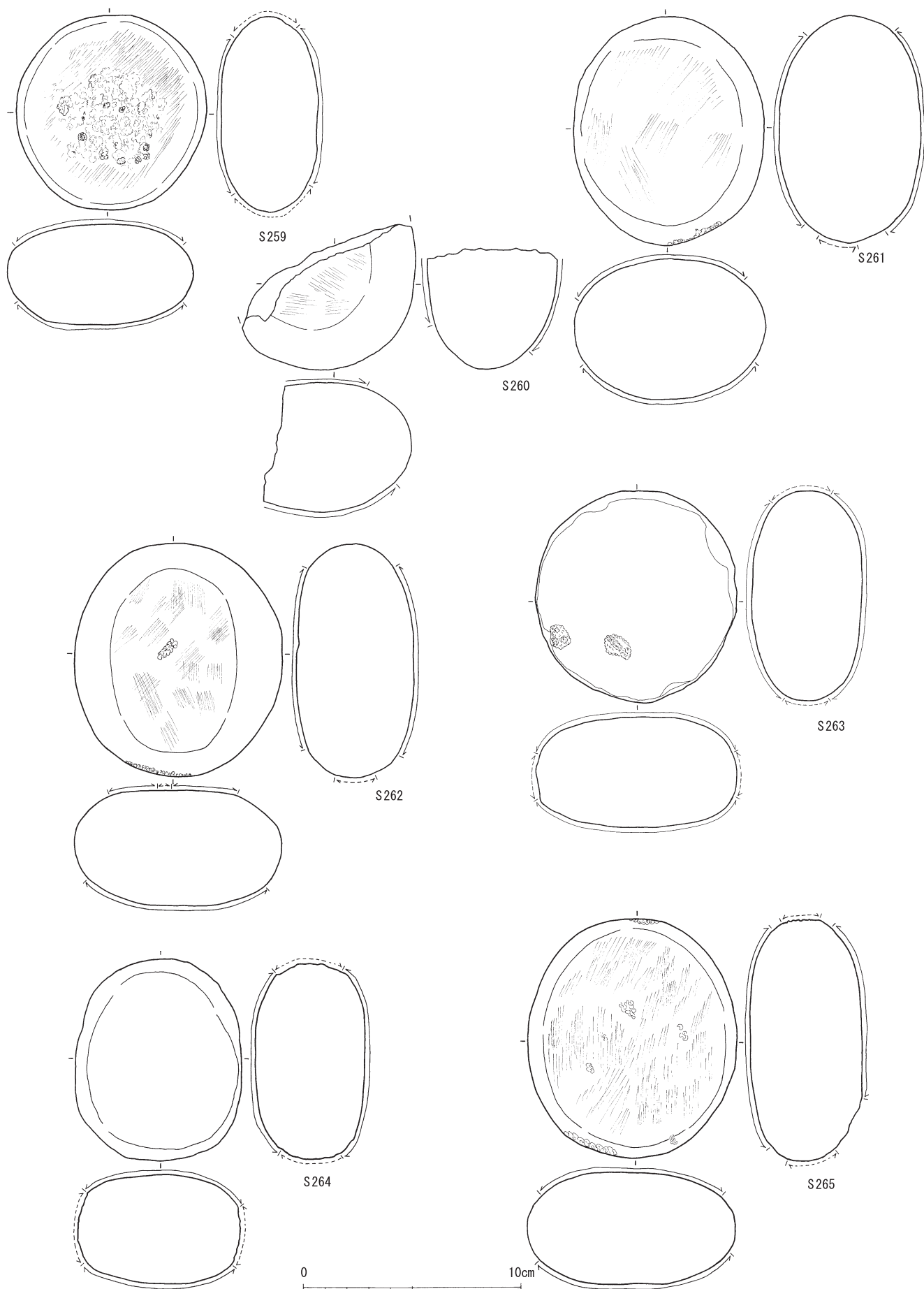
1点の礫石器を確認している。扁平な砂岩をもちい、表面からの剥離によって刃部を作り出す。



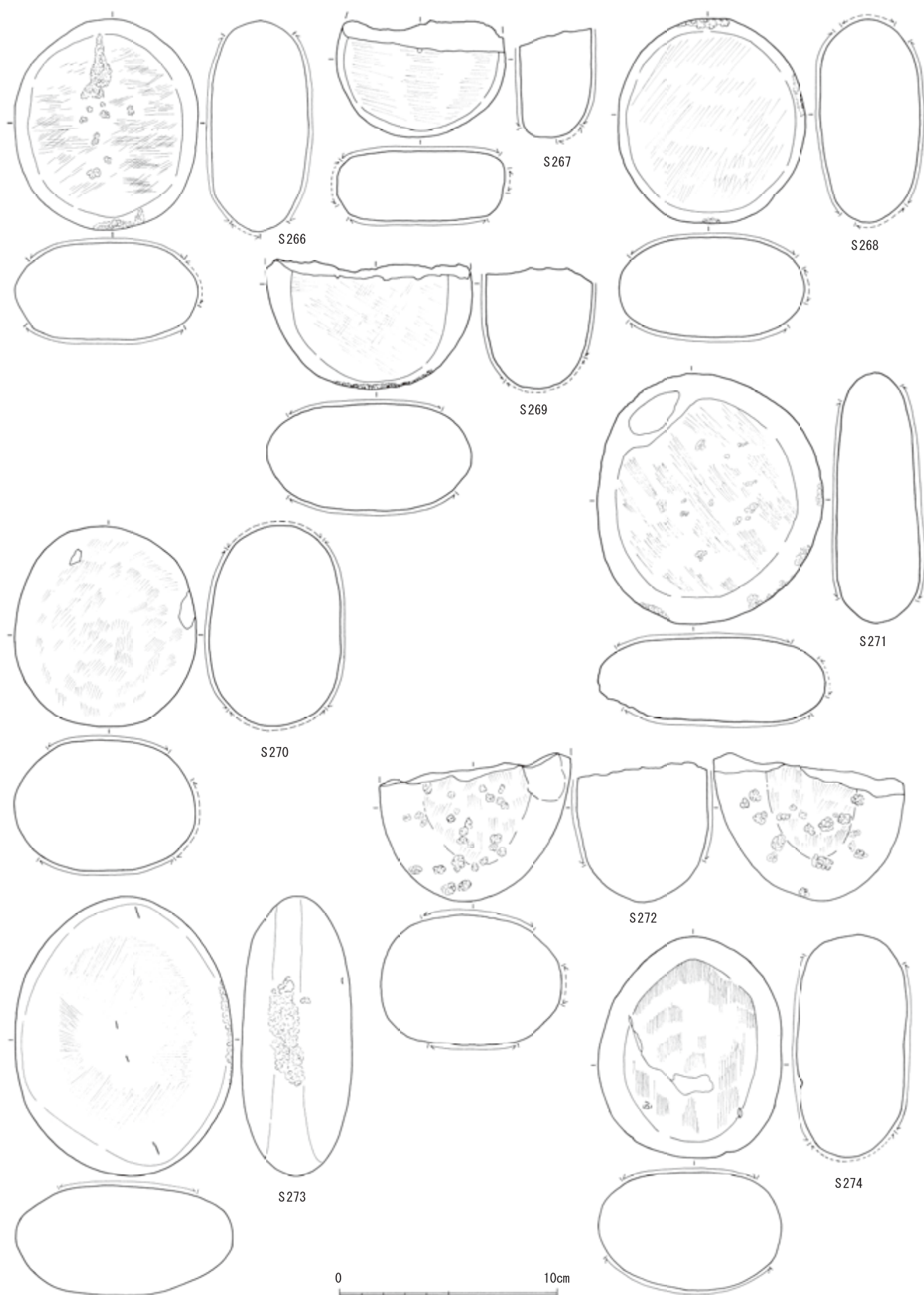
第156図 縄文時代の石器48 (ハンマーストーン)



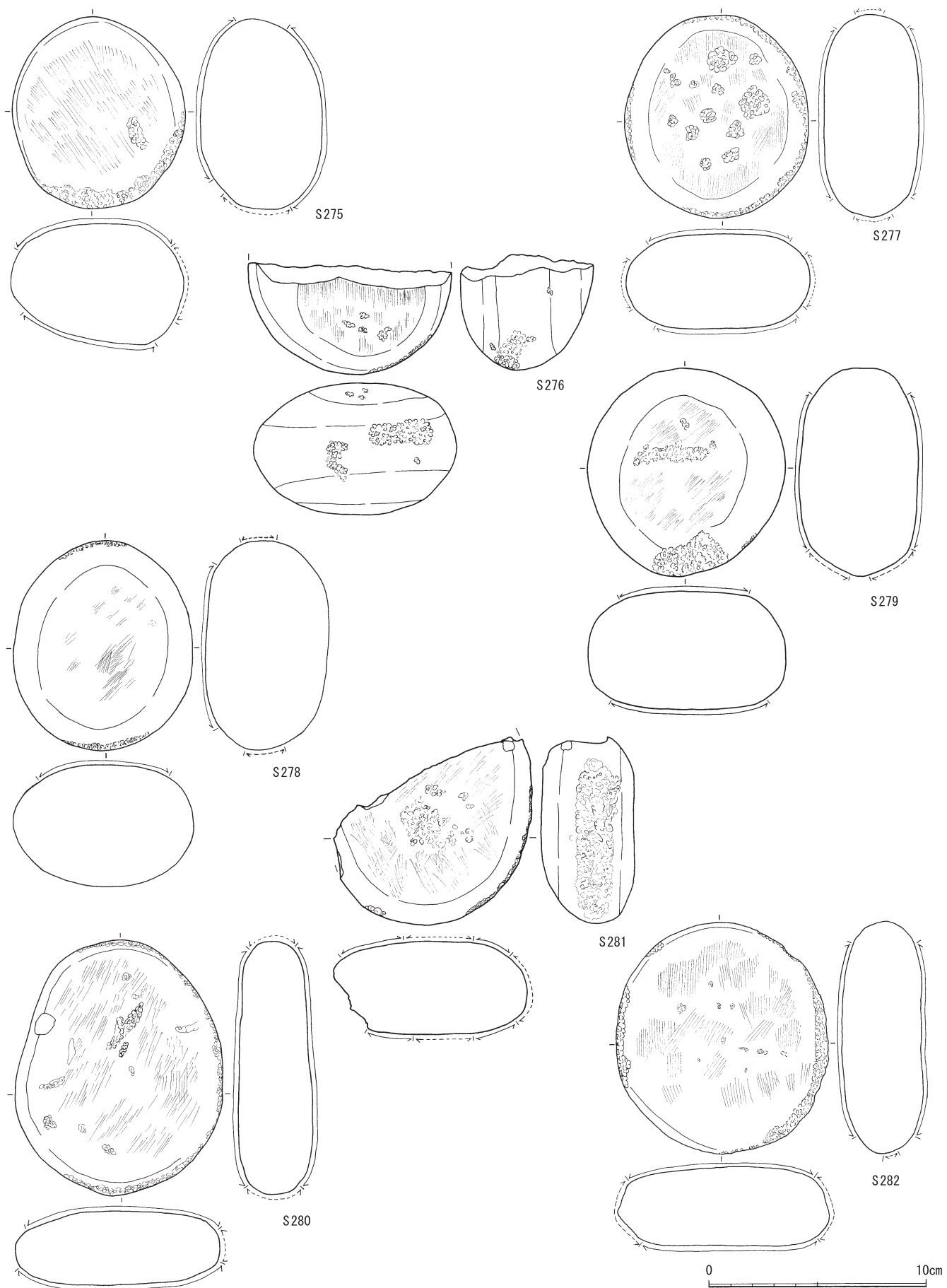
第157図 縄文時代の石器49（磨石・敲石1）



第158図 縄文時代の石器50（磨石・敲石2）



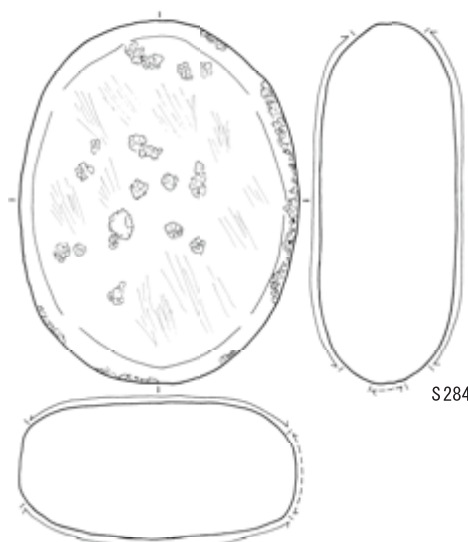
第159図 縄文時代の石器51（磨石・敲石3）



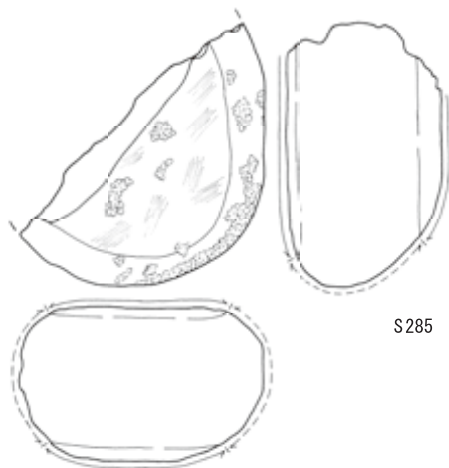
第160図 縄文時代の石器52（磨石・敲石4）



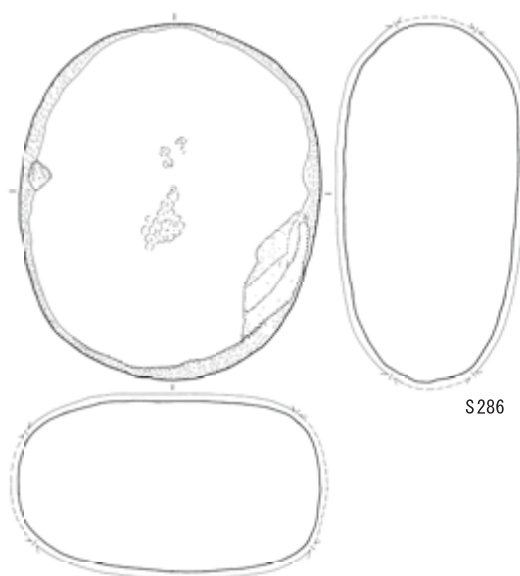
S283



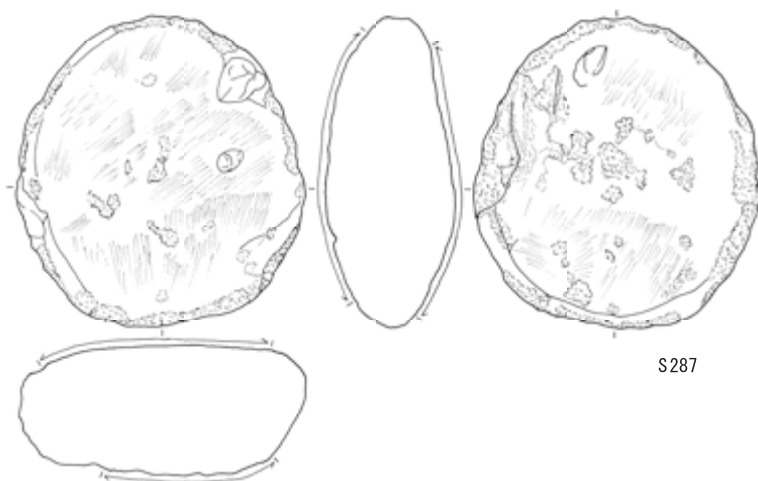
S284



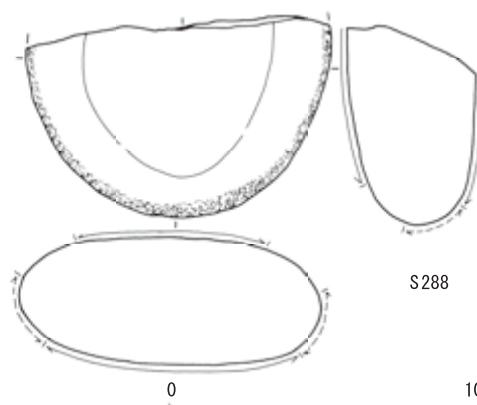
S285



S286



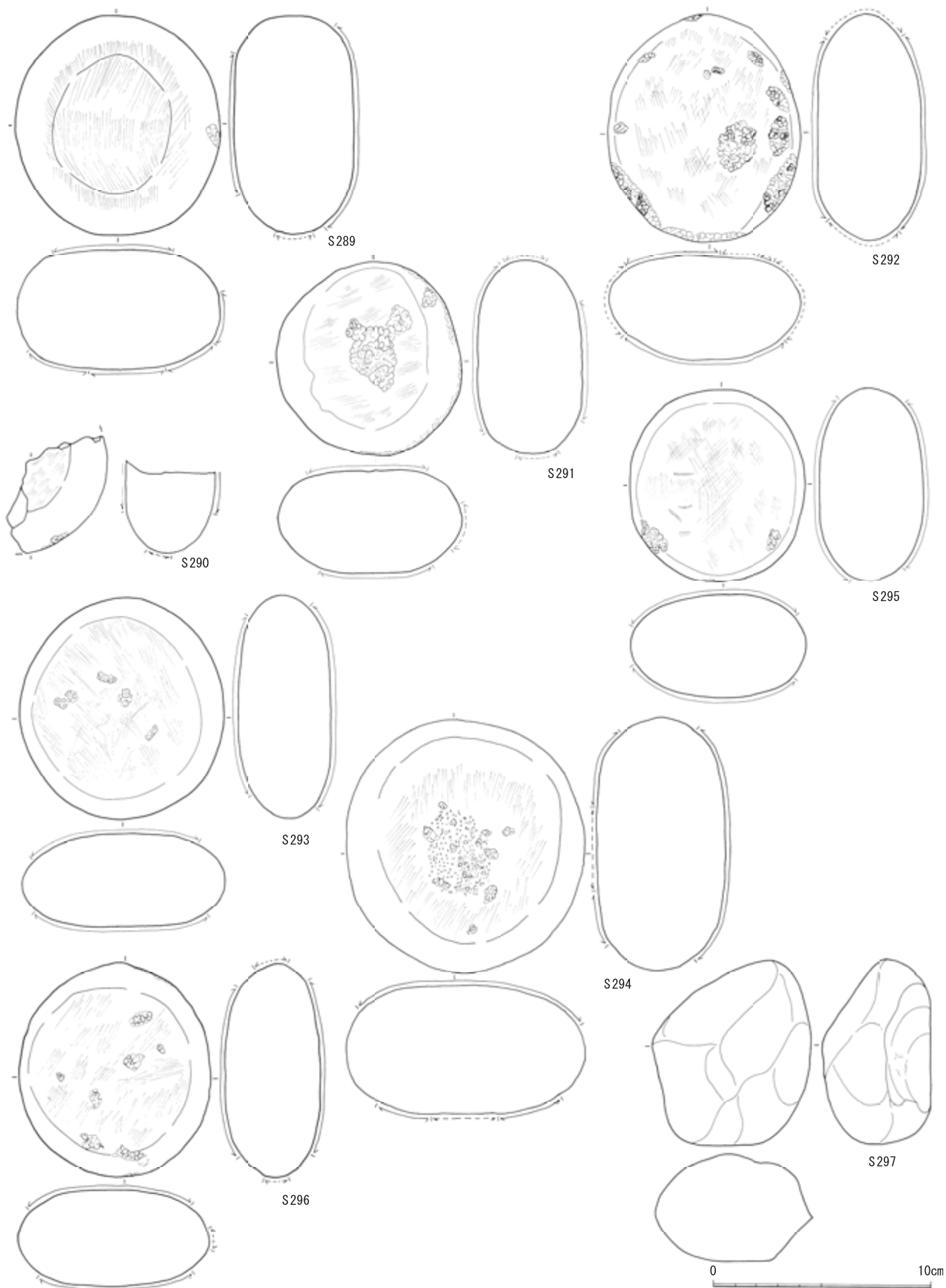
S287



S288

0 10cm

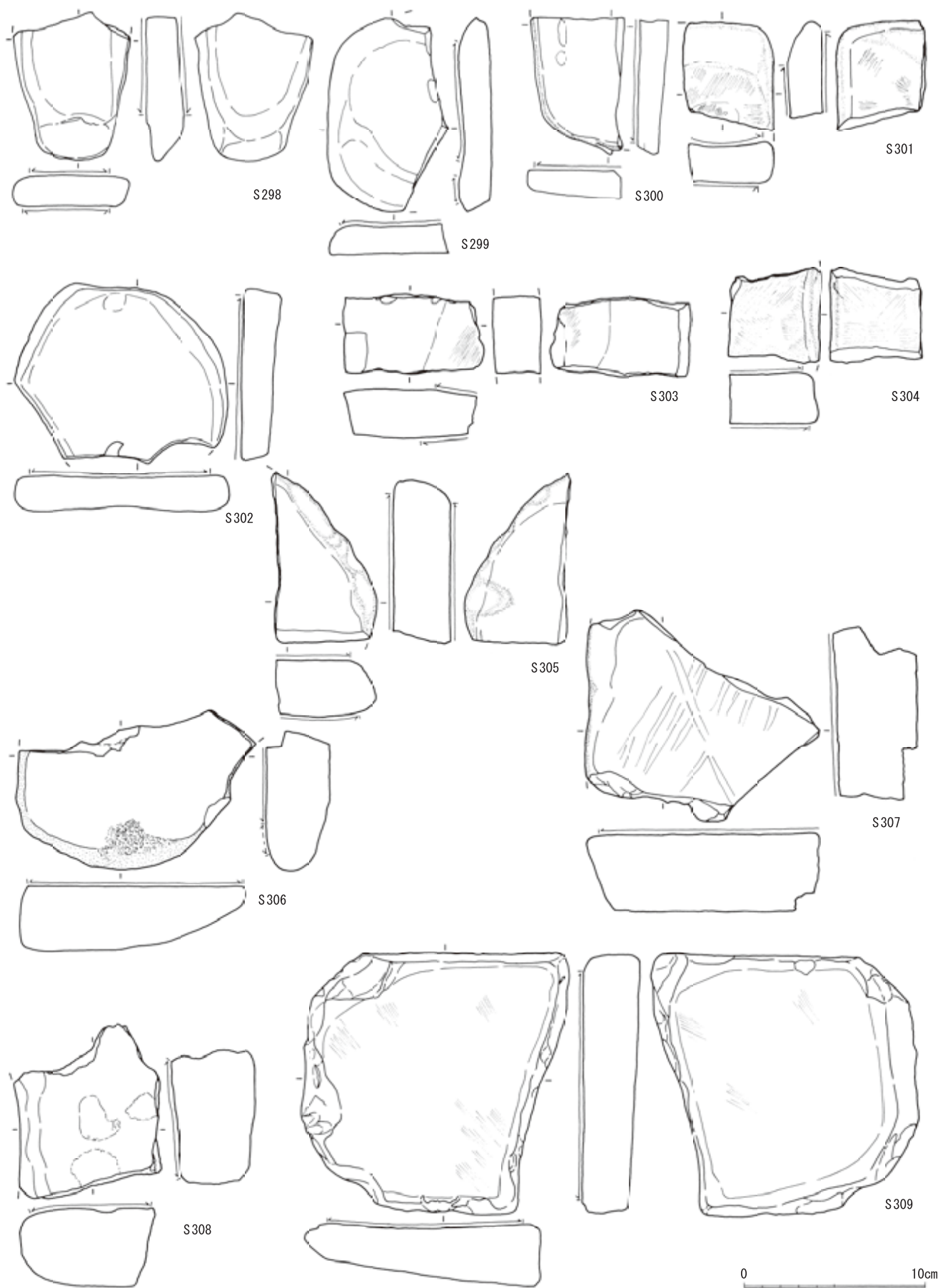
第161図 縄文時代の石器53（磨石・敲石5）



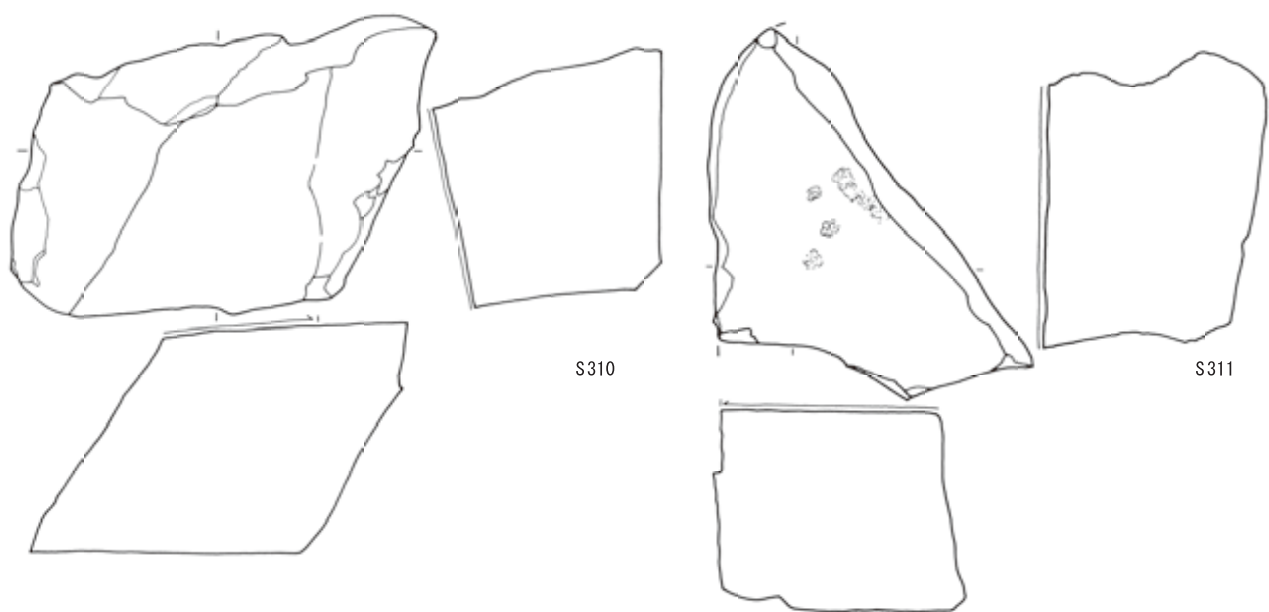
第162図 縄文時代の石器54（磨石・敲石6）

第30表 縄文時代石器観察表 (13)

挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
156	240	ハンマー	－	SS	－	45.1	31.4	28.5	57.0	3a 一括	E～G -13, 14	Ⅲ a	－
	241	ハンマー	－	SS	－	54.7	47.1	38.1	127.0	5284	オ－29	Ⅲ	－
	242	ハンマー	－	PA	－	63.6	40.0	33.2	126.0	9334	ア－27	Ⅲ	－
	243	ハンマー	－	PA	－	88.3	34.9	30.1	143.0	5944	キ－27	Ⅲ	－
	244	ハンマー	－	PA	－	93.8	33.2	27.8	130.0	6017	ウ－26	Ⅲ	－
	245	ハンマー	－	SS	－	98.9	33.2	24.1	121.0	4344	ク－31	Ⅲ	－
	246	ハンマー	－	PA	－	72.2	39.1	35.5	147.0	4100	オ－29	Ⅲ	－
	247	ハンマー	－	SS	－	77.6	56.5	27.9	172.0	3826	エ－29	Ⅲ	－
	248	ハンマー	－	PA	－	64.3	56.7	46.5	261.0	3一括	カ－31	Ⅲ	－
	249	ハンマー	－	SS	－	110.2	39.2	31.2	228.0	3一括	イ～カー 29～32	Ⅲ	－
157	250	磨石	－	PA	－	105.0	93.6	42.7	651.0	6974・ 7981	ウ－27・ カー26	Ⅲ	－
	251	磨石	－	SS	－	52.3	42.5	53.1	167.0	8252	ウ－28	Ⅲ	－
	252	磨石	－	PA	－	115.0	90.3	56.3	885.0	9344	ア－27	Ⅲ	－
	253	磨石	－	PA	－	120.2	99.8	51.0	941.0	3410	B－4	Ⅲ	－
	254	磨石	－	SS	－	(42.0)	(72.1)	60.3	(215.0)	9639	イ－25	Ⅲ	－
	255	磨石	－	PA	－	120.1	99.0	55.7	1023.0	5387	オ－30	Ⅲ	－
	256	磨石	－	SS	－	119.1	91.7	59.4	931.0	3703	ウ－29	Ⅲ	－
	257	磨石	－	PA	－	(69.3)	(82.9)	58.6	(426.0)	5780	エ－27	Ⅲ	－
	258	磨石	－	PA	－	127.4	101.4	47.7	988.0	7655	カ－30	Ⅲ	－
158	259	磨石	－	PA	－	91.5	86.7	46.7	569.0	3080	B－5	Ⅲ	－
	260	磨石	－	PA	－	(53.6)	(91.6)	60.8	(345.0)	4074	オ－29	Ⅲ	－
	261	磨石	－	PA	－	104.9	87.6	66.9	854.0	3961	エ－29	Ⅲ	－
	262	磨石	－	SS	－	107.8	95.2	53.5	837.0	5897	カ－27	Ⅲ	－
	263	磨石	－	PA	－	97.8	92.1	51.2	709.0	3409	B－4	Ⅲ	－
	264	磨石	－	PA	－	92.6	74.6	50.9	571.0	3一括	ア A－ 21～28	Ⅲ	－
	265	磨石	－	PA	－	(109.1)	96.0	52.5	(862.0)	3一括	キ－32	Ⅲ	－
159	266	磨石	－	PA	－	96.2	82.9	45.1	552.0	2146	C－8	V	－
	267	磨石	－	SS	－	(52.4)	76.7	32.8	(205.0)	9107	ア－28	Ⅲ	－
	268	磨石	－	PA	－	94.6	96.1	46.0	531.0	6718	ク－28	V	－
	269	磨石	－	PA	－	(55.5)	94.5	49.6	(408.0)	2326	C－7	V	－
	270	磨石	－	PA	－	93.7	85.1	59.7	709.0	11561	A－28	Ⅲ	－
	271	磨石	－	PA	－	114.3	103.1	36.8	712.0	4315	オ－30	Ⅲ	－
	272	磨石	－	PA	－	(59.2)	(87.9)	60.0	(438.0)	6455	カ－28	Ⅲ	－
	273	磨石	－	SS	－	128.5	100.1	51.7	938.0	4一括	イカー 25～28	Ⅳ	－
	274	磨石	－	SS	－	102.2	83.9	51.0	707.0	9354	ア－27	Ⅲ	－
160	275	磨石	－	SS	－	88.3	(78.5)	55.4	(547.0)	7520	カ－30	Ⅲ	－
	276	磨石	－	PA	－	(49.5)	(94.4)	61.6	(347.0)	6444	オ－29	Ⅲ	－
	277	磨石	－	PA	－	93.8	84.8	44.5	553.0	2981	C－6	Ⅲ	－
	278	磨石	－	SS	－	95.8	82.3	52.1	639.0	5502	エ－28	Ⅲ	－
	279	磨石	－	PA	－	95.5	90.5	54.6	723.0	11350	A－28	Ⅳ	－
	280	磨石	－	PA	－	115.8	94.6	34.2	574.0	3一括	ア A－ 21～28	Ⅲ	－
	281	磨石	－	PA	－	(83.8)	(87.6)	43.6	(449.0)	3一括	カ－31	Ⅲ	－
161	282	磨石	－	SS	－	106.9	97.2	37.4	603.0	4444	ク－31	Ⅲ	－
	283	磨石	－	PA	－	121.0	103.2	58.1	1102.0	5952	キ－27	Ⅲ	－
	284	磨石	－	PA	－	116.6	89.3	43.3	741.0	9464	ア－27	Ⅲ	－
	285	磨石	－	PA	－	(84.5)	(78.4)	51.4	(363.0)	3808	エ－29	Ⅲ	－
	286	磨石	－	PA	－	115.9	97.1	56.6	992.0	5113	カ－29	V	－
	287	磨石	－	PA	－	100.3	92.4	42.6	432.0	8353	イ－24	Ⅲ	－
162	288	磨石	－	SS	－	(69.5)	(97.7)	40.6	(330.0)	7174	ウ－28	Ⅲ	－
	289	磨石	－	SS	－	100.7	92.8	55.2	762.0	12074	－	V	磨石集石1 号20

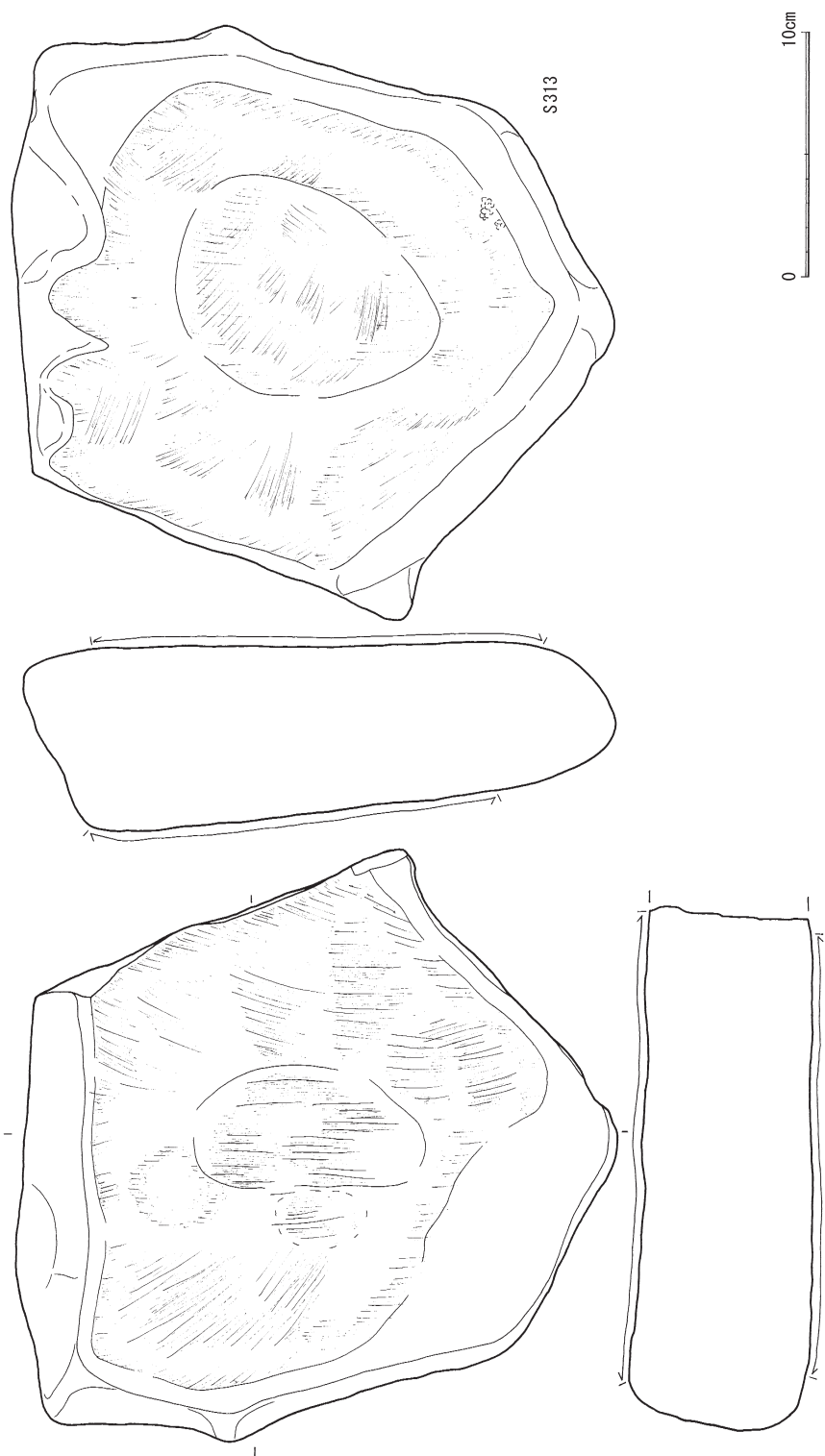


第163図 縄文時代の石器55（石皿1）

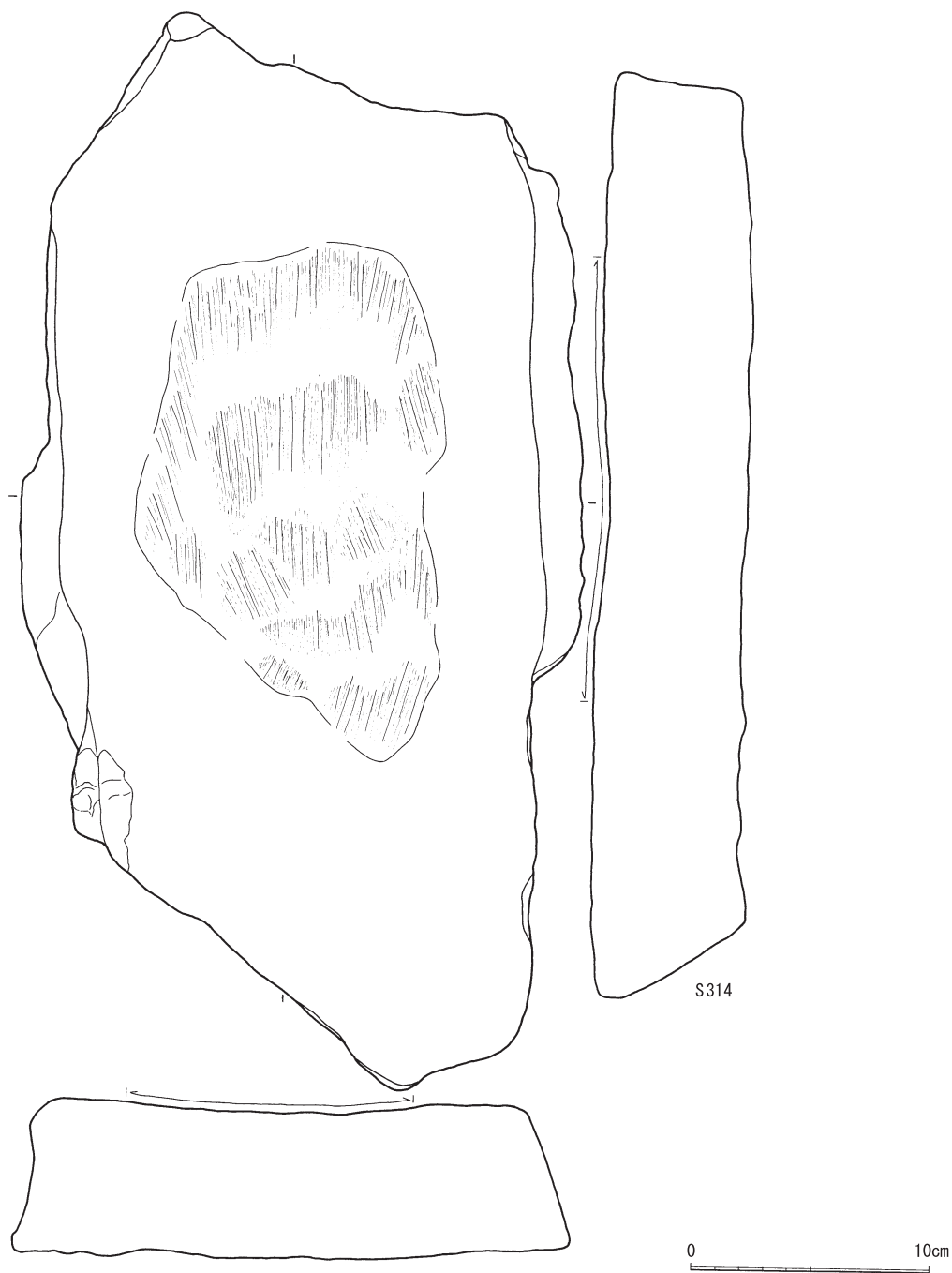


0 10cm

第164図 縄文時代の石器56（石皿2）



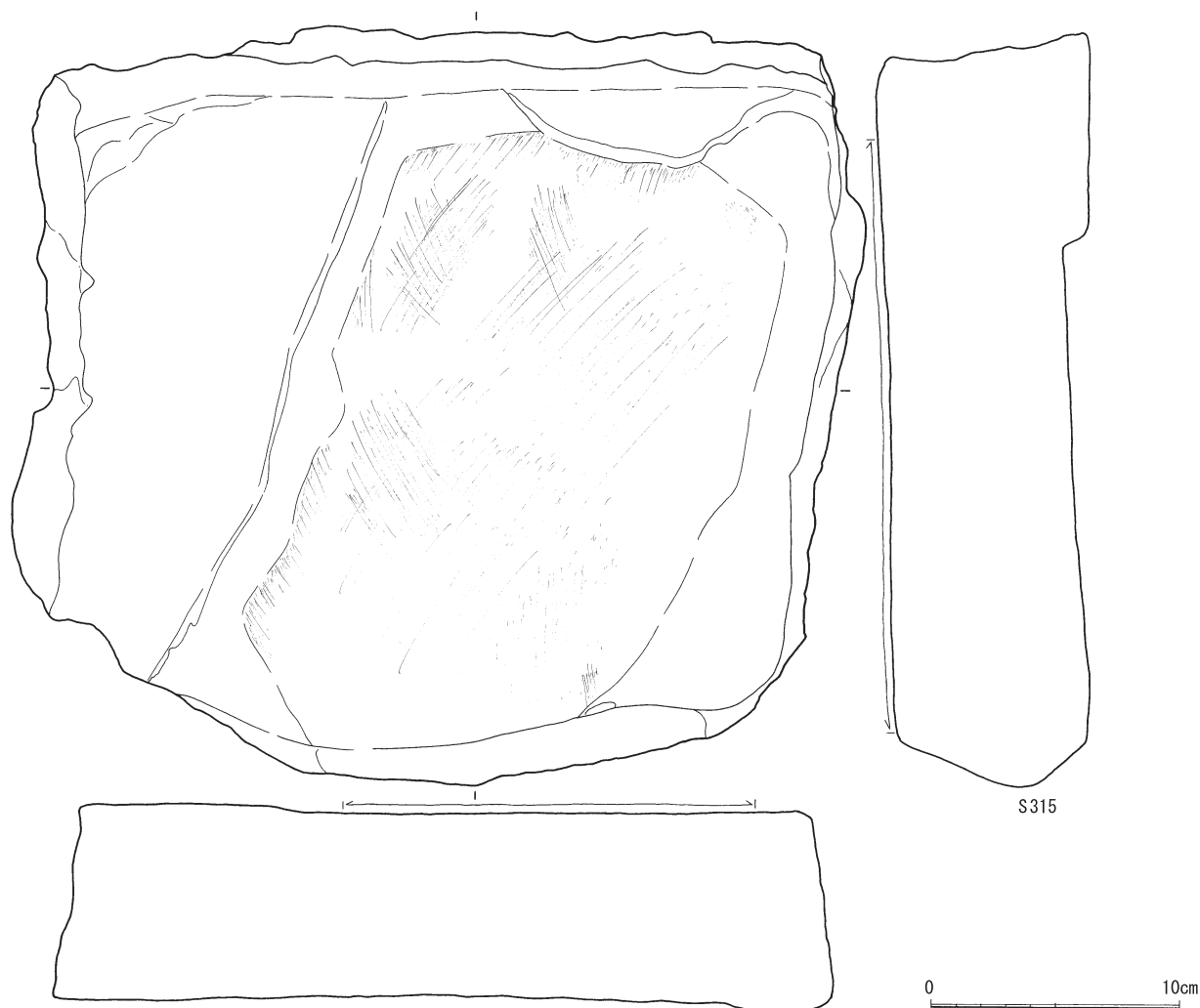
第165図 縄文時代の石器57（石皿3）



第166図 縄文時代の石器58（石皿4）

第31表 縄文時代石器観察表（14）

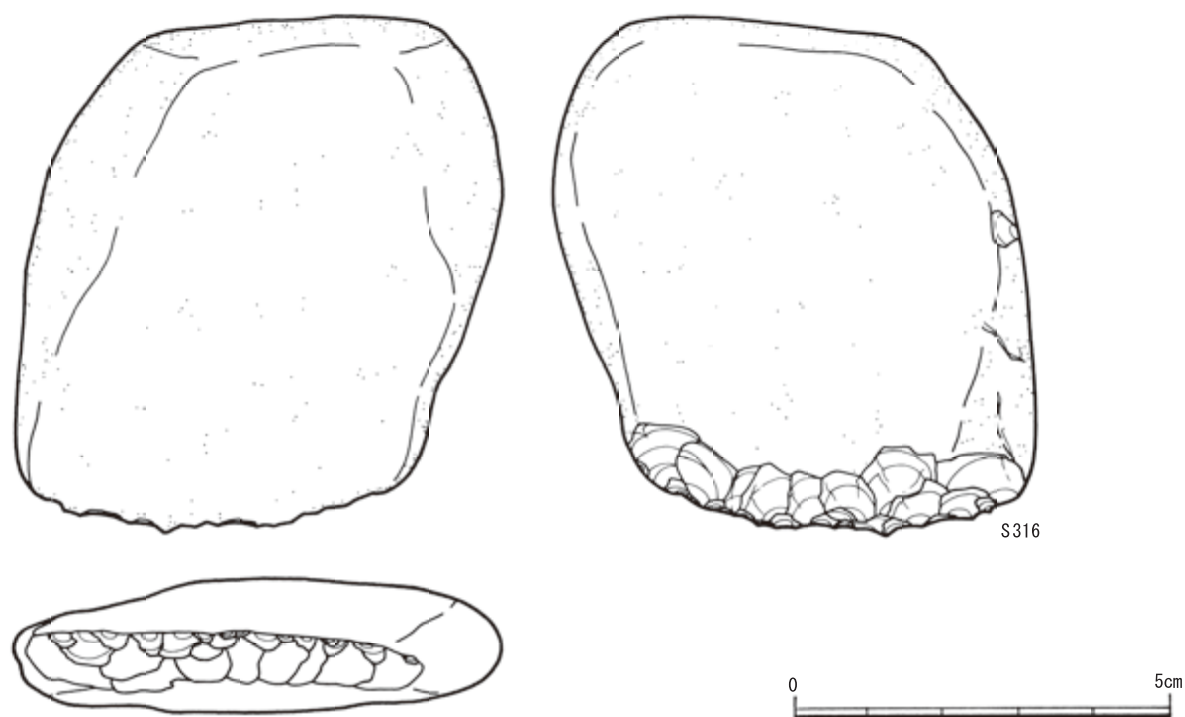
挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
162	290	磨石	—	SS	—	(62.6)	(54.1)	41.7	(109.0)	12072	—	II a	磨石集石1号7
	291	磨石	—	PA	—	89.4	85.1	47.6	558.0	12075	—	III	磨石集石1号21
	292	磨石	—	SS	—	104.4	89.2	48.8	641.0	12073	—	V	磨石集石1号19
	293	磨石	—	PA	—	102.2	92.6	43.6	640.0	12077	—	II	磨石集石2号1
	294	磨石	—	SS	—	116.6	110.4	59.6	1128.0	12078	—	III	磨石集石2号2
	295	磨石	—	SS	—	88.7	80.2	48.8	519.0	12079	—	III	磨石集石2号3
	296	磨石	—	SS	—	98.3	87.8	44.4	600.0	12080	—	II	磨石集石2号4
	297	磨石	—	SH	—	93.3	(73.3)	49.8	(432.0)	1485	C-3	V	—
163	298	石皿	—	SS	—	(81.1)	(65.0)	21.2	(168.0)	10216	ア-28	III	—



第167図 縄文時代の石器59（石皿5）

第32表 縄文時代石器観察表（15）

挿図No	報告No	分類 L1	分類 L2	石材 L1	石材 L2	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No	出土区	層位	備 考
163	299	石皿	—	SS	—	(106.2)	(66.6)	18.0	(208.0)	10303	A-28	Ⅲ	—
	300	石皿	—	SS	—	(73.7)	(50.2)	15.6	(101.0)	9187	ア-28	Ⅲ	—
	301	石皿	—	SS	—	(61.0)	(49.9)	23.7	(111.0)	8403	イ-25	Ⅲ	—
	302	石皿	—	SS	—	99.1	119.6	20.6	369.0	7550	カ-30	Ⅲ	—
	303	石皿	—	SS	—	(42.6)	(76.8)	27.1	(167.0)	7700	カ-29	Ⅲ	—
	304	石皿	—	SS	—	(53.0)	(53.2)	38.7	(135.0)	6686	エ-26	V	—
	305	石皿	—	SS	—	(94.3)	(57.4)	32.6	(259.5)	7305	エ-27	Ⅲ	—
	306	石皿	—	SS	—	(88.3)	(133.8)	35.3	(519.0)	3751	ウ-29	V	—
	307	石皿	—	SS	—	(117.0)	(127.6)	45.8	(781.0)	6881	エ-26	Ⅲ	—
	308	石皿	—	SS	—	(96.0)	(80.9)	46.2	(439.0)	1931	D-6	Ⅲ	—
	309	石皿	—	SS	—	142.8	147.5	33.8	1119.0	6877	エ-26	V	—
164	310	石皿	—	SS	—	(117.4)	(166.6)	91.8	(1224.0)	8194	オ-28	Ⅲ	—
	311	石皿	—	SS	—	(145.1)	(129.5)	86.4	(1729.0)	7086	ウ-27	Ⅲ	—
	312	石皿	—	SS	—	298.5	349.1	87.5	12500.0	12076	H-14	Ⅲ	磨石集石1号33
165	313	石皿	—	SS	—	246.0	(243.1)	77.1	(6800.0)	5464	エ-28	Ⅲ	—
166	314	石皿	—	SS	—	451.0	236.5	66.1	11700.0	8205	オ-28	Ⅲ	—
167	315	石皿	—	SS	—	307.1	343.0	86.9	16400.0	11533	ア-28	Ⅲ	—
168	316	礫石器	—	SS	—	68.1	63.5	18.0	103.90	6907	エ-26	Ⅲ	—



第168図 縄文時代の石器60（礫石器）

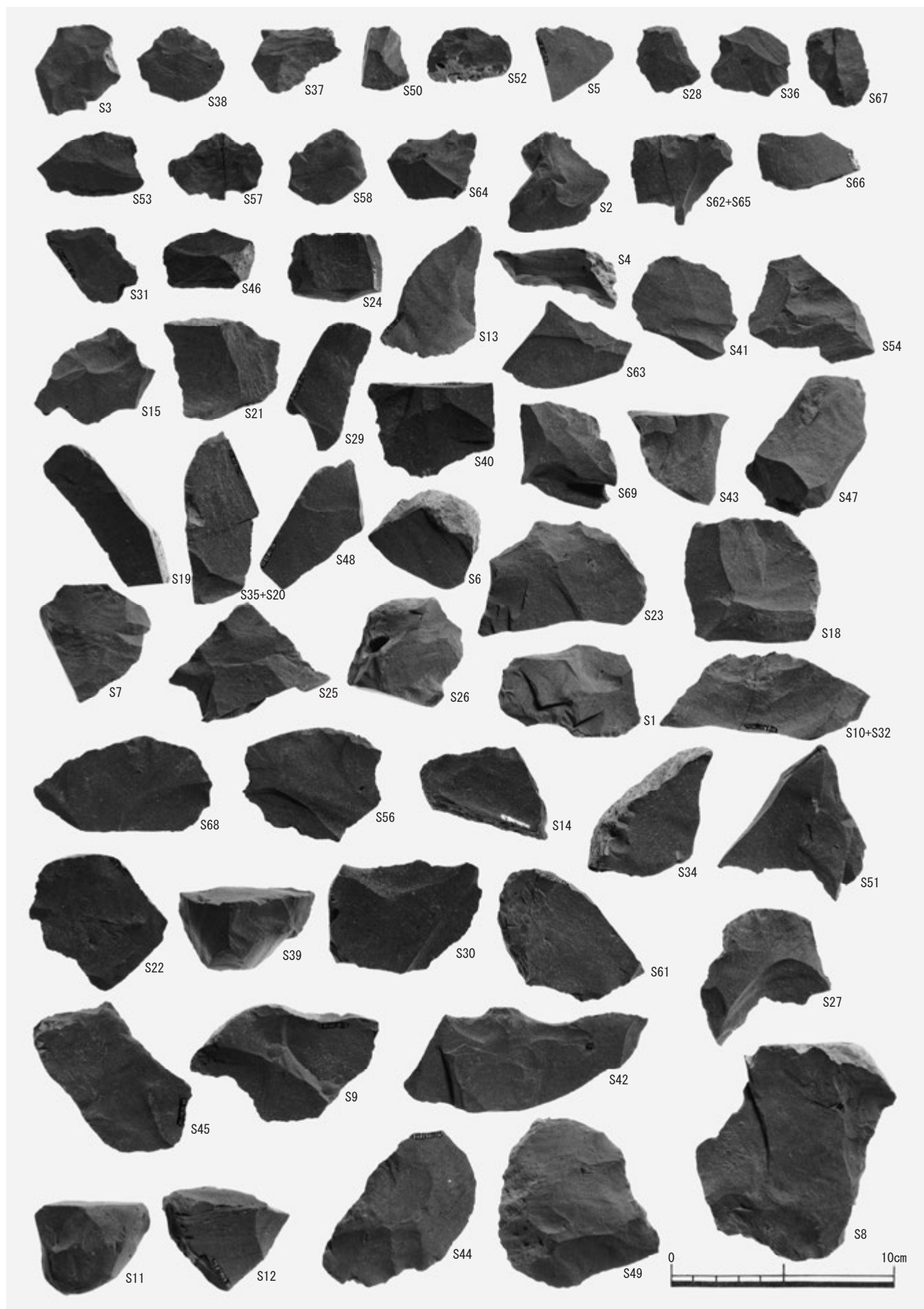
第33表 縄文時代石器観察表（16）

報告No	実測No	石器No
s002	2	a5
s063	226	a67
s003	3	a6
s018	18	a54
s074	237	a126
s008	8	a17
s030	193	a12
s022	22	a79
s006	6	a9
s010	10	a24
s075	238	a127
s014	14	a34
s017	17	a49
s073	236	a124
s024	24	a84
s047	210	a57
s048	211	a58
s046	209	a56
s068	231	a95
s041	204	a42
s050	213	a62
s033	196	a16
s061	224	a63
s051	214	a65
s065	228	a193
s028	191	a3
s044	207	a48
s027	190	a2
s039	202	a31

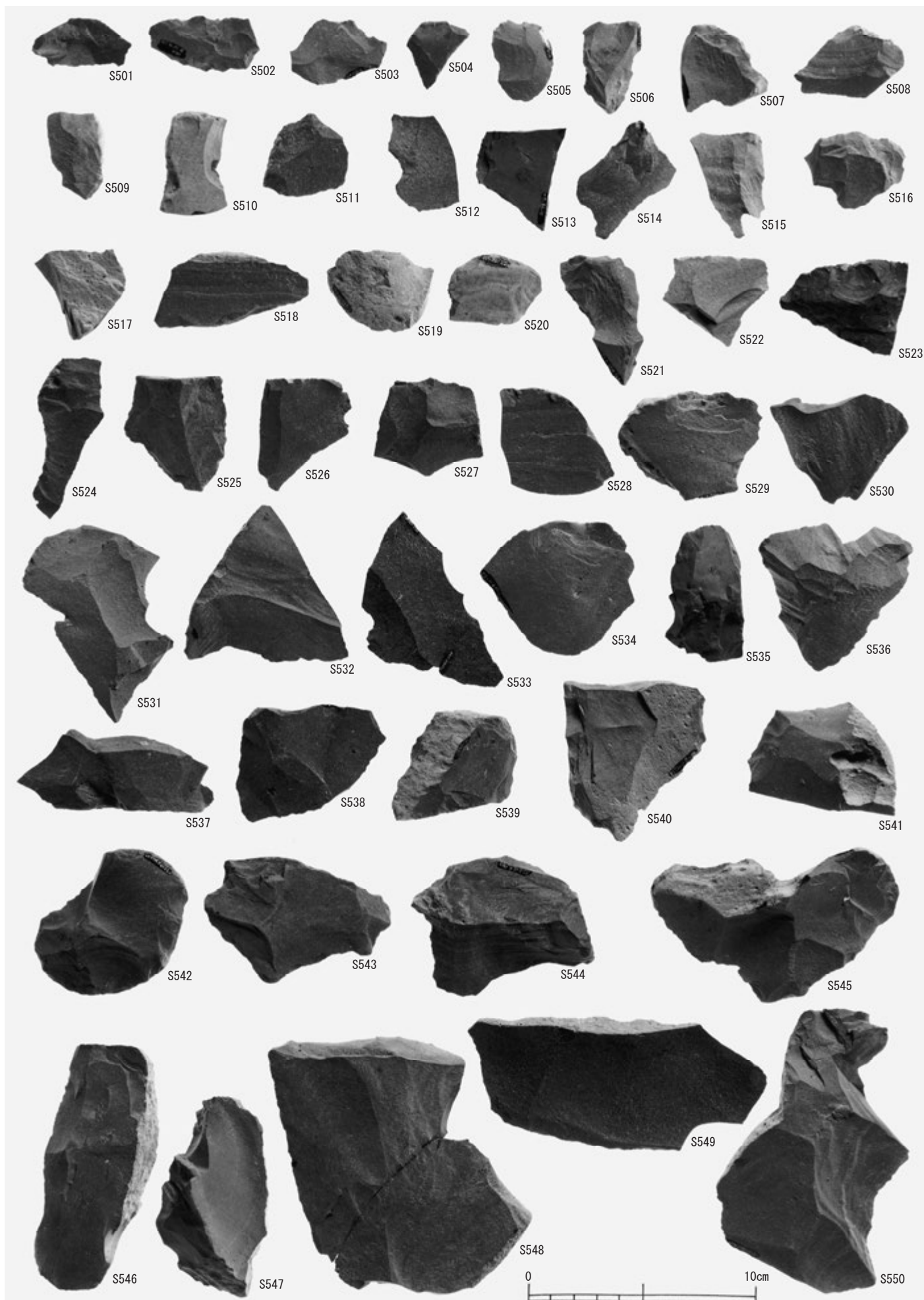
報告No	実測No	石器No
s072	235	a108
s071	234	a106
s066	229	—
s052	215	a66
s032	195	a15
s064	227	a60
s043	206	a44
s001	1	a1
s015	15	a35
s042	205	a43
s040	203	a36
s067	230	a94
s034	197	a20
s056	219	a81
s036	199	a25
s055	218	a75
s025	25	a85
s019	19	a55
s009	9	a22
s059	222	a41
s060	223	a52
s020	20	a61
s062	225	a64
s004	4	a7
s016	16	a46
s053	216	a69
s029	192	a11
s077	240	a144
s054	217	a73

報告No	実測No	石器No
s049	212	a59
s031	194	a13
s070	233	a104
s045	208	a50
s069	232	a98
s038	201	a29
s035	198	a23
s013	13	a32
s037	200	a27
s058	221	a186
s026	26	a140
s023	23	a80
s011	11	a26
s076	239	a131
s057	220	a185
s012	12	a28
s007	7	a10
s021	21	a70
s005	5	a8
s096	168	匙19
s109	181	匙38
s084	156	匙6
s082	154	匙4
s079	151	匙1
s113	185	匙52
s103	175	匙28
s094	166	匙17
s116	188	二170
s098	170	匙23

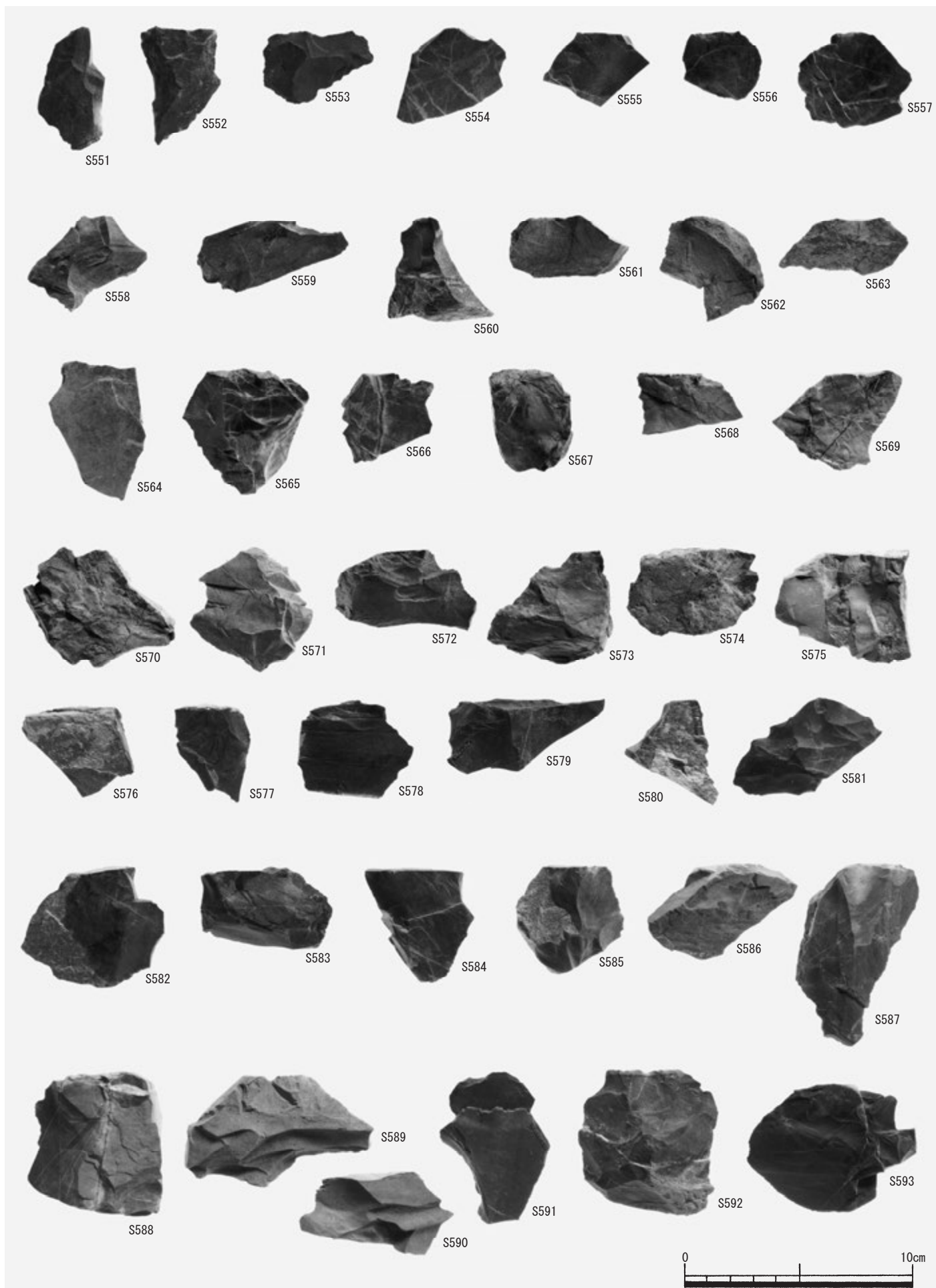
報告No	実測No	石器No
s100	172	匙25
s105	177	匙30
s106	178	匙31
s095	167	匙18
s087	159	匙10
s090	162	匙13
s108	180	匙36
s107	179	匙32
s099	171	匙24
s097	169	匙20
s110	182	匙39
s080	152	匙2
s085	157	匙8
s083	155	匙5
s081	153	匙3
s086	158	匙9
s093	165	匙16
s088	160	匙11
s101	173	匙26
s089	161	匙12
s117	189	二117
s091	163	匙14
s115	187	二155
s114	186	s64
s112	184	匙44
s104	176	匙29
s102	174	匙27
s111	183	匙41
s092	164	匙15



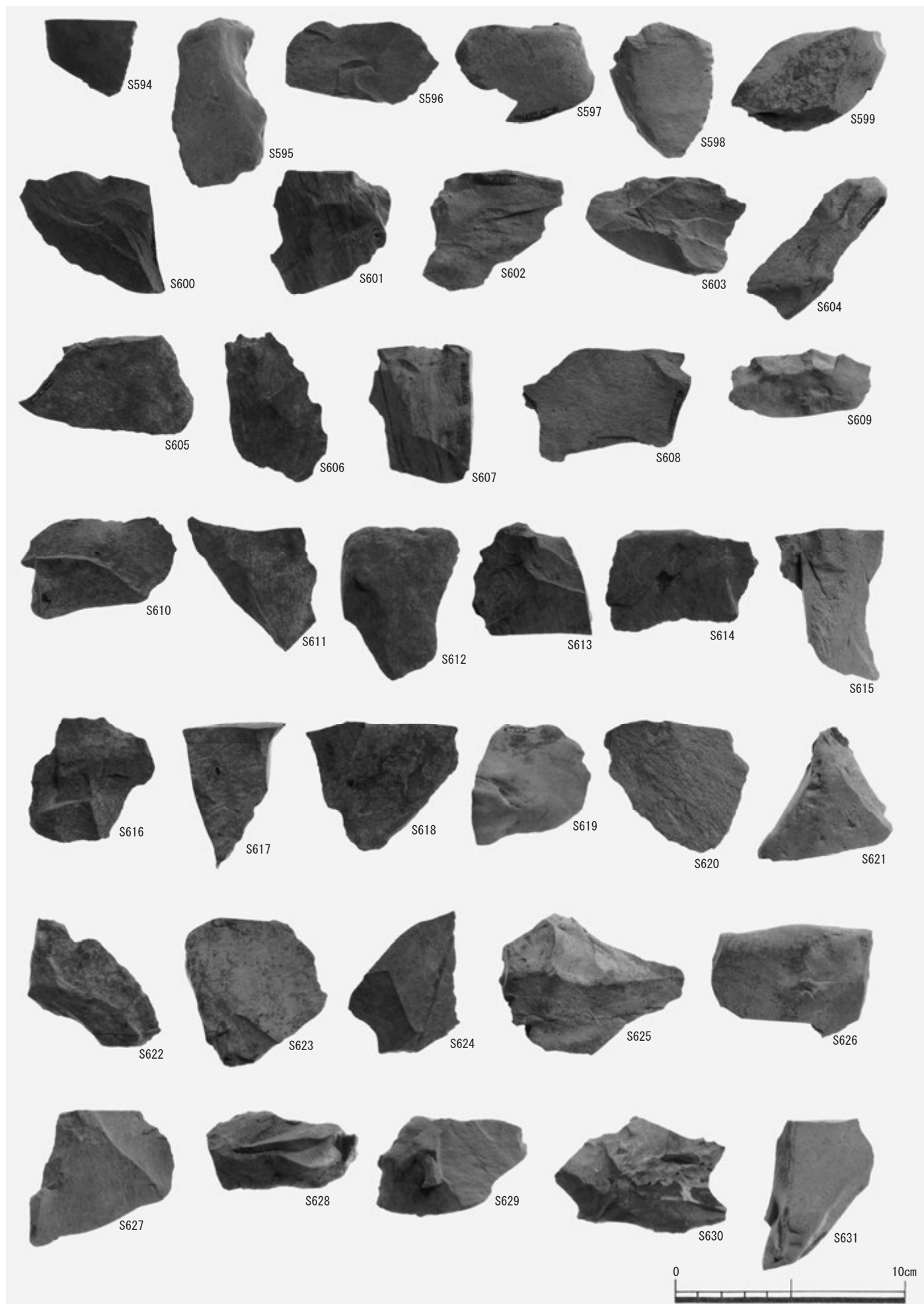
第169図 縄文時代の石器61（剥片1）



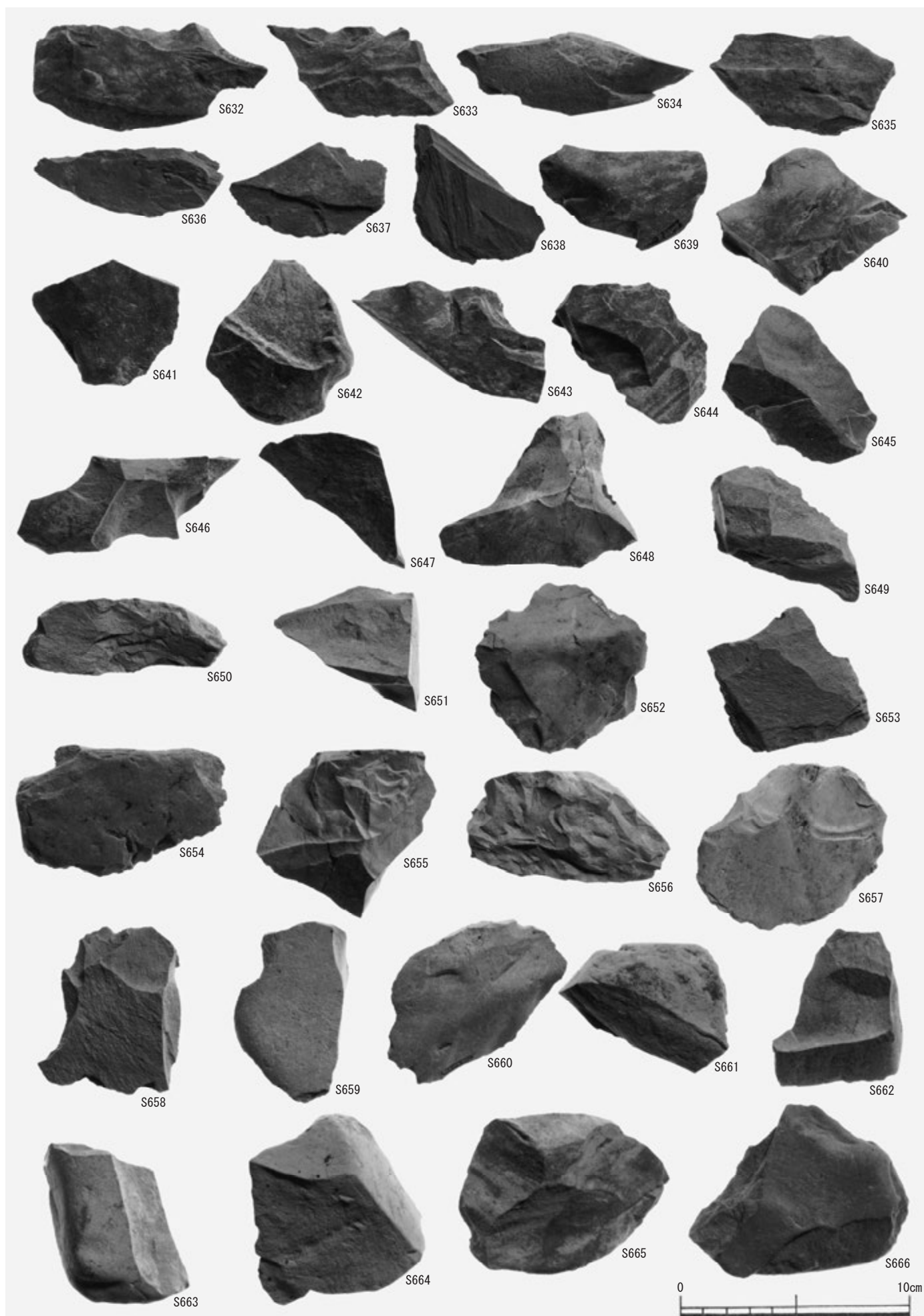
第170図 縄文時代の石器62（剥片2）



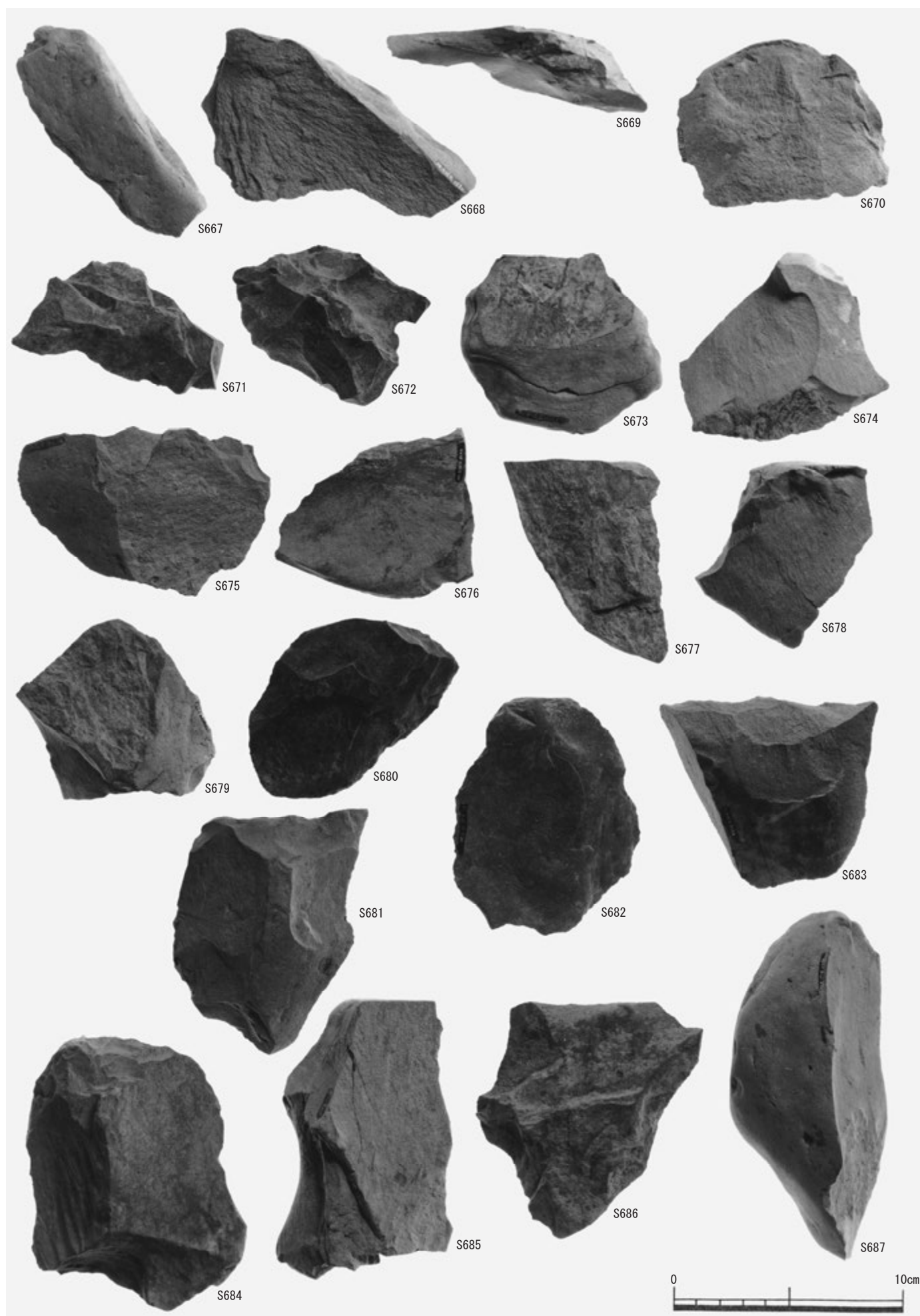
第171図 縄文時代の石器63（剥片3）



第172図 縄文時代の石器64（剥片4）



第173図 縄文時代の石器65（剥片5）



第174図 縄文時代の石器66（剥片6）

報告No	実測No	石器No
s119	103	a53
s118	102	二62
s120	104	a132
s155	89	二50
s121	105	a137
s136	41	s38
s147	52	二169
s126	31	s16
s146	51	二32
s133	38	s32
s125	30	s15
s131	36	s29
s148	53	c 145
s145	50	a76
s123	28	s4
s127	32	s17
s135	40	s37
s124	29	s7
s140	45	s48
s132	37	s31
s137	42	s39
s130	35	s27
s138	43	s40
s143	48	s52
s144	49	s55
s156	90	二82
s128	33	s21
s134	39	s35
s139	44	s43
s141	46	s50
s142	47	s51
s129	34	s24
s206	97	二86
s122	86	二3
s151	100	二19
s150	99	p7
s152	101	p5
s149	98	p4
s153	87	二6
s154	88	二16
s161	95	二186
s078	27	a197
s317	—	—
s157	91	二110
s159	93	二118
s169	113	c 15
s191	135	c 140
s188	132	c 137
s185	129	c 129
s195	139	a77
s182	126	c 106
s202	146	c 42
s203	147	c 45
s189	133	c 138
s204	148	c 50
s200	144	c 36
s174	118	c 34
s167	111	c 13

報告No	実測No	石器No
s170	114	c 17
s201	145	c 40
s194	138	c 146
s175	119	c 38
s199	143	c 121
s193	137	c 143
s171	115	c 18
s173	117	c 20
s165	109	c 6
s172	116	c 19
s198	142	c 102
s168	112	c 14
s181	125	c 103
s183	127	c 119
s164	108	c 4
s197	141	二141
s184	128	c 126
s205	149	p6
s190	134	c 139
s187	131	c 133
s196	140	s18
s186	130	c 130
s192	136	c 142
s166	110	c 10
s162	106	c 1
s180	124	c 60
s178	122	c 54
s177	121	c 53
s176	120	c 52
s163	107	c 2
s179	123	c 58
s220	82	斧36
s208	60	斧8
s213	68	斧17
s218	73	斧22
s212	64	斧13
s230	67	斧16
s221	83	斧37
s216	71	斧20
s209	61	斧10
s214	69	斧18
s217	72	斧21
s215	70	斧19
s210	62	斧11
s211	63	斧12
s219	74	斧23
s229	66	斧15
s231	75	斧24
s227	59	斧7
s236	80	斧34
s237	81	斧35
s235	79	斧33
s232	76	斧25
s238	84	斧75
s222	54	斧1
s223	55	斧2
s224	56	斧3
s225	57	斧4

報告No	実測No	石器No
s226	58	斧5
s240	150	斧4
s233	77	斧26
s239	85	二163
s234	78	斧27
s228	65	斧14
s160	94	二171
s158	92	二116
s250	99	99
s241	11	11
s242	21	21
s247	68	68
s245	41	41
s244	30	30
s243	28	28
s246	64	64
s248	87	87
s249	98	98
s257	16	16
s281	72	72
s260	22	22
s276	63	63
s261	23	23
s266	37	37
s254	6	6
s278	67	67
s259	18	18
s253	5	5
s255	8	8
s263	27	27
s268	39	39
s275	62	62
s290	92	92
s288	88	88
s251	1	1
s282	73	73
s269	44	44
s252	3	3
s294	129	129
s277	65	65
s280	71	71
s291	102	102
s270	57	57
s292	117	117
s279	69	69
s274	61	61
s267	38	38
s272	59	59
s289	91	91
s287	86	86
s264	31	31
s256	14	14
s271	58	58
s262	25	25
s265	34	34
s293	119	119
s258	17	17
s297	138	138

報告No	実測No	石器No
s295	136	136
s298	139	139
s296	137	137
s283	77	77
s284	78	78
s285	79	79
s286	80	80
s273	60	60
s315	31	31
s311	22	22
s305	8	8
s310	20	20
s303	5	5
s304	6	6
s300	2	2
s302	4	4
s299	1	1
s314	30	30
s316	32	32
s301	3	3
s306	12	12
s313	25	25
s309	18	18
s312	23	23
s307	13	13
s308	15	15
s207	96	s53

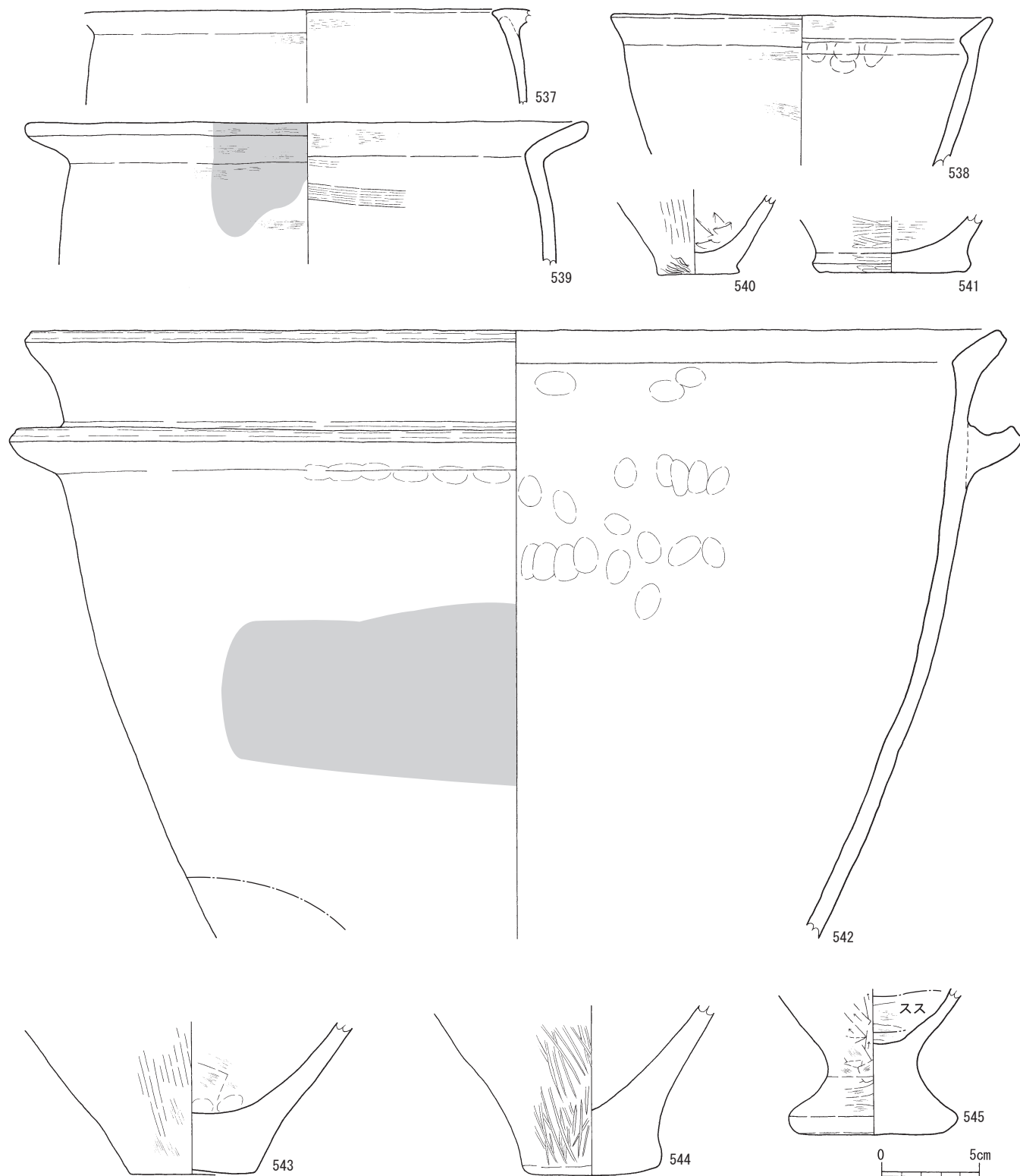
第V章 弥生時代・古墳時代の遺物

第1節 弥生時代の遺物（537～560）

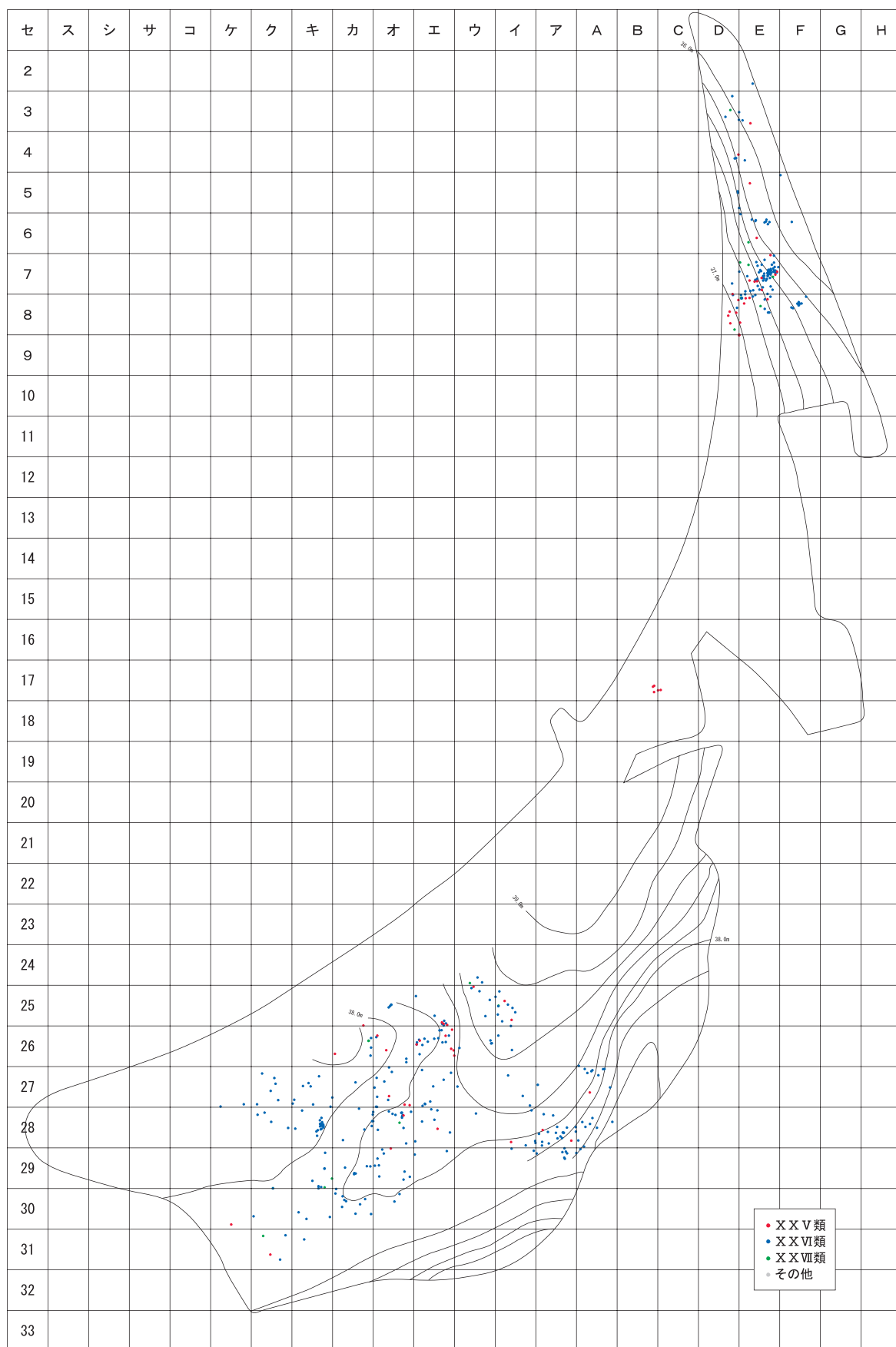
本遺跡では中期と後期の甕形土器と壺形土器と高坏が出土している。

甕形土器（537～554）

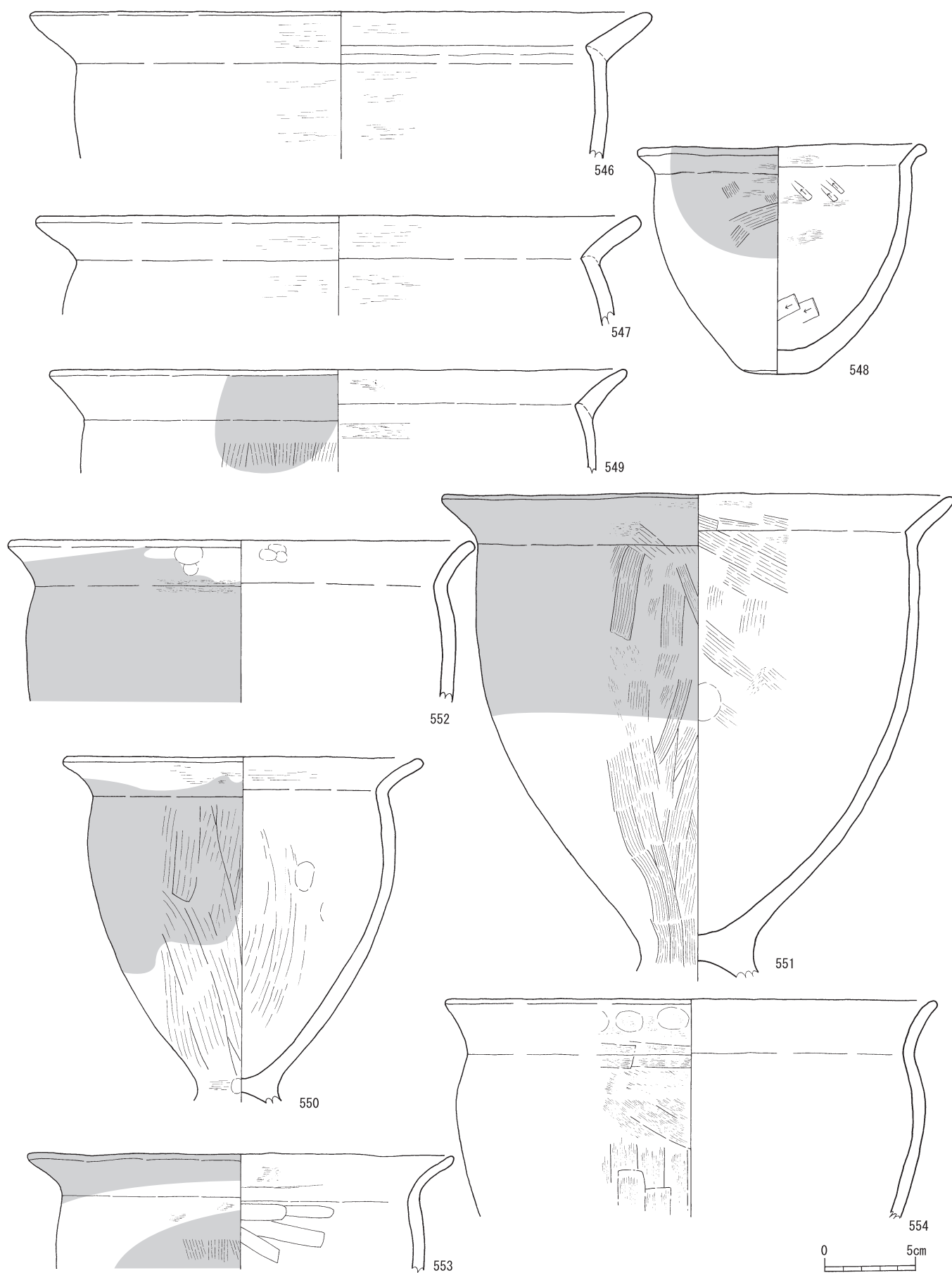
537は平坦口縁をもつもので、内側は断面三角状に張り出しがみられる。器面調整はナデ調整である。538はL字状口縁部であるが、口縁内側部の稜線はなく丸みに作られている。器面調整は外面がナデで、内面はハケメの後ナデがみられる。539は「く」の字口縁で内側に張り出しがみられる。器面はナデ調整である。540・541は



第175図 弥生時代の土器1（甕①）



第176図 出土分布図（弥生～中世）



第177図 弥生時代の土器2（甕②）

底部で平底である。器面はナデ調整である。542は口径50cmの大型甕形土器である。口縁部は「く」の字断面でその下に上を向いた大きな突帯を巡らしている。器面はナデ調整の中に指圧痕がみられる。543は厚みのある平底である。544は角がやや張り厚みのある平底である。545は充実した張り出しのある平底である。547・548は北部・中部九州系で549・542～545は南九州系の山之口式土器に比定される。

546～554は後期に位置するものである。この中で546～550は頸部の内側に強い稜線が入るため、「く」の字口縁部をもつものである。548は小型の甕形土器で平底である。これはミニチュア製品の可能性もある。550はハケメ調整痕が強く、縦方向にみられる。口縁部から胴部までは煤の付着がみられる。底部は脚台付と思われる。551は550より一回り大きい甕形土器である。器面は縦方向のハケメの後ナデ調整をしている。底部は脚台付と思われる。552から554は頸部内側に丸みがあり、ナデ調整はハケメの後強いナデ調整をしている。

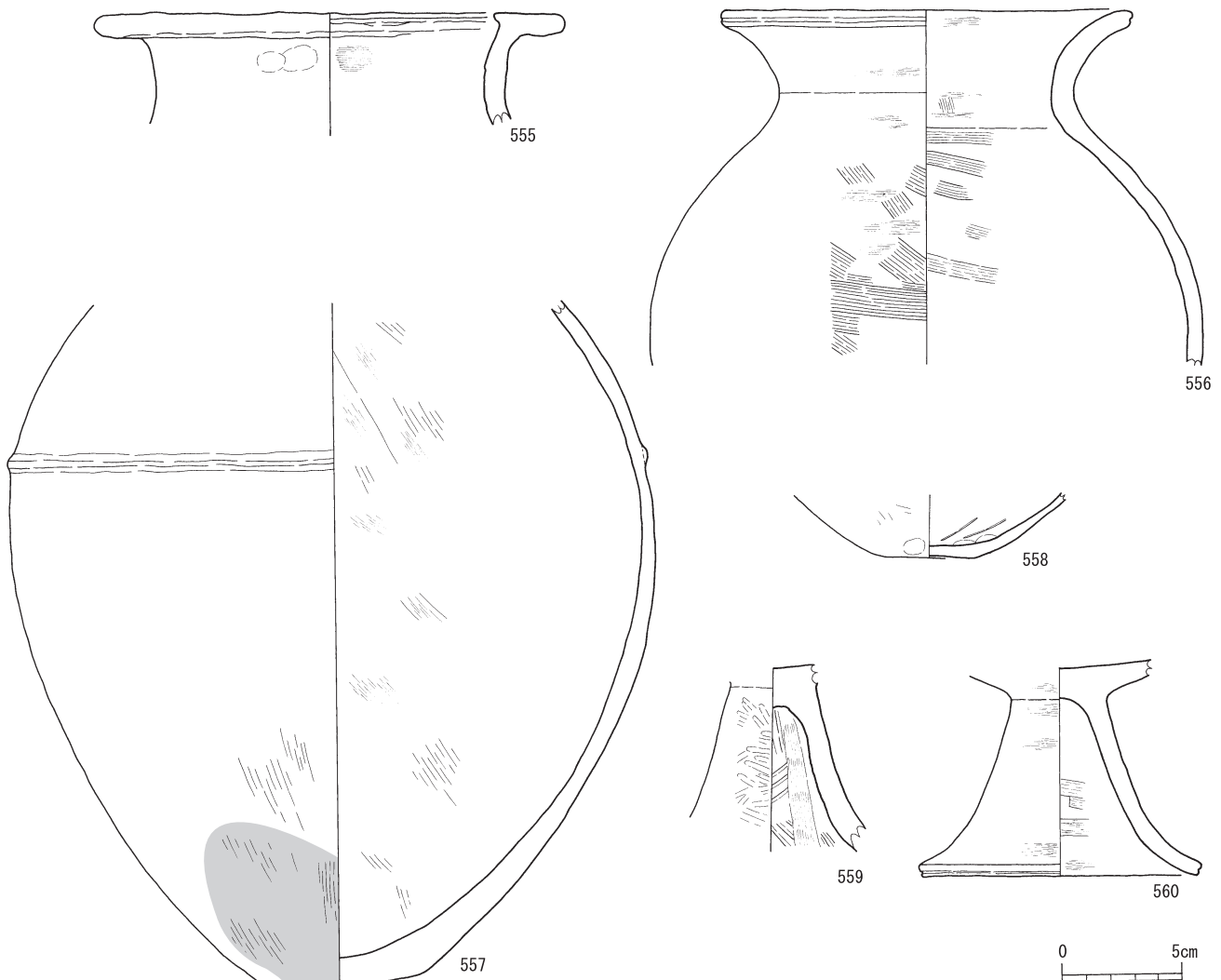
壺形土器 (555～558)

なだらかな曲線で口縁部が開く器形のグループである。555は中期の土器で、L字口縁部で内側に張り出しがみられる。器面はナデ調整である。556～558は後期の土器である。556は頸部が丸く締まり、外反する口縁部をもつ土器である。器面はハケメの後ナデ調整である。内面は摩滅している。557は丸く張った胴部をもち、肩部に断面が丸めの突帯を1本巡らしている。底部は丸底気味の平底である。558は薄手で小型のもので、器面はナデ調整をしている。

高杯 (559・560)

559は坏部に付けた脚部は広い中期の高杯と思われる。外面は丁寧な磨きをかけ、内面は土器製作時のねじり痕の後をナデ調整している。560は脚部が大きく開く器形である。外面はナデ調整を行い、内面は削りの後ナデ調整がみられる。この土器は器面調整からみて後期の時期と思われる。

以上が弥生時代のものである。



第178図 弥生時代の土器3 (壺, 高杯)

第2節 古墳時代の遺物（561～581）

この時代では甕形土器、壺形土器、小壺、蓋、高坏等が出土している。

甕形土器（561～569）

561は口径が31.5cm で大型に入る土器である。頸部がやや締まり、口縁部は外向し、胴部はやや丸く張る器形である。また、頸部には三角断面突帯を巡らしている。器面はハケメ調整を縦方向に行っている。562は561と器形が類似しているが、頸部の締まりが大きく、胴部の張りが強い。563は561と同形であるが、突帯に刻み目が付いている。器面調整は口縁部がハケメ後ナデ調整をし、肩部は縦方向のハケメである。内面はハケメ後ナデ調整をしている。564は頸部にくびれの無いもので、外に開く口縁部をもつものである。器面調整は、外面は頸部より上にハケメをしている。他は摩滅でよく分からない。565は口径が31.2cm で大型に入る土器である。頸部がやや締まり、口縁部は外向し、胴部はやや丸く張る器形である。また、頸部には刻み目三角断面突帯を巡らしている。器面はハケメ調整を縦方向と斜方向に行っている。底部は丸底であるが脚部がはずれた痕跡がある。566は頸部にくびれの無いもので、外に開く口縁部をもつものであり、器面調整は、内外面ともハケメをしている。

567～569は高い脚部である。

壺形土器（570～574）

570と571は口縁部である。571には刻み目突帯が頸部に巡っている。器面調整は570にハケメの後ナデ調整がある。572～574は底部である。572は尖り底で、573は平底で、574は丸底を呈している。

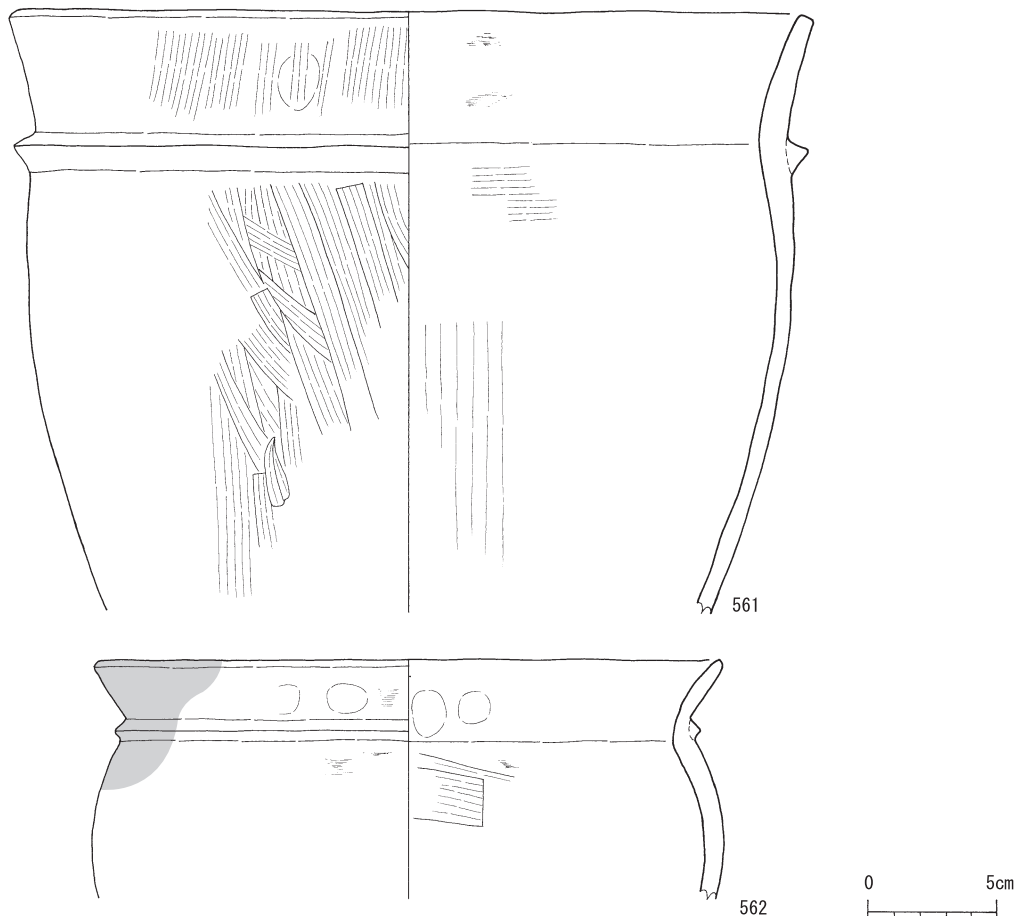
575～576は小型丸底壺である。575は短い口縁部が立ち、胴部は丸く張る器形である。器面はハケメ後ナデ調整をしている。576は短い口縁部が立ち、胴部は角張り、底部は丸底の器形である。外面はハケメ後ナデ調整をしている。内面はナデ調整である。

577は口縁部で外反する大型の蓋である。外面はナデと削りで、内面はナデとハケメ調整をしている。

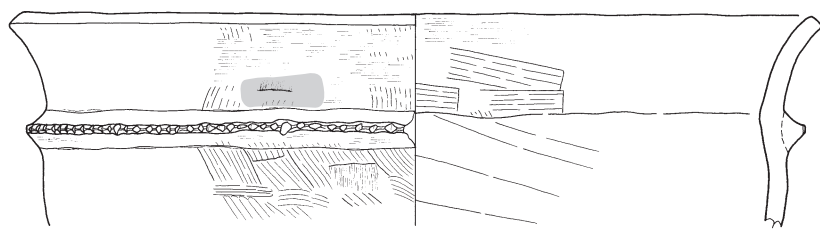
高坏（578～581）

578～580は丹塗り磨研土器の高坏である。578と579は坏部で、580は脚部である。

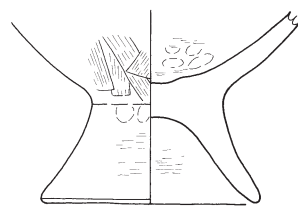
581は底部が無いが器形からみて口が狭まっているため異形の壺と考えられる。底部次第では器種が変わることも考えられる。



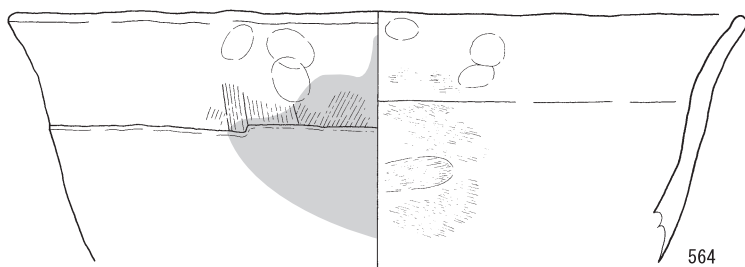
第179図 古墳時代の土器 1（甕①）



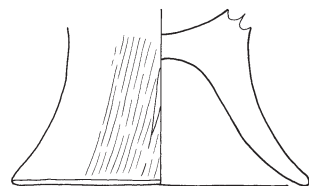
563



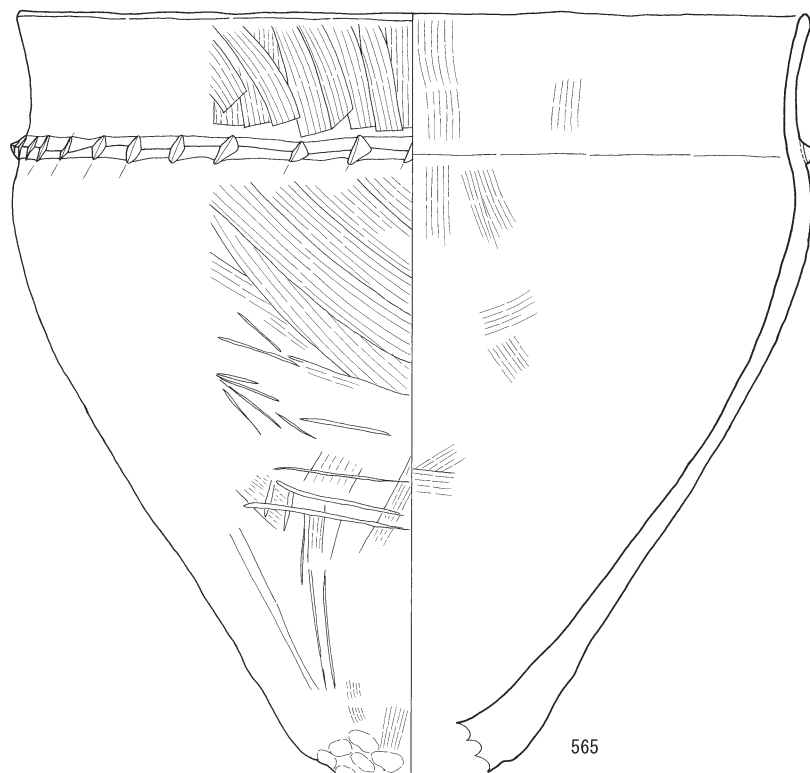
567



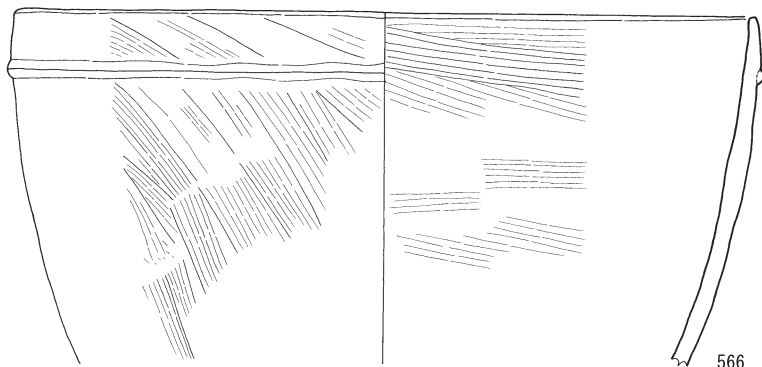
564



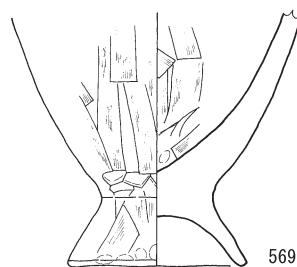
568



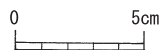
565



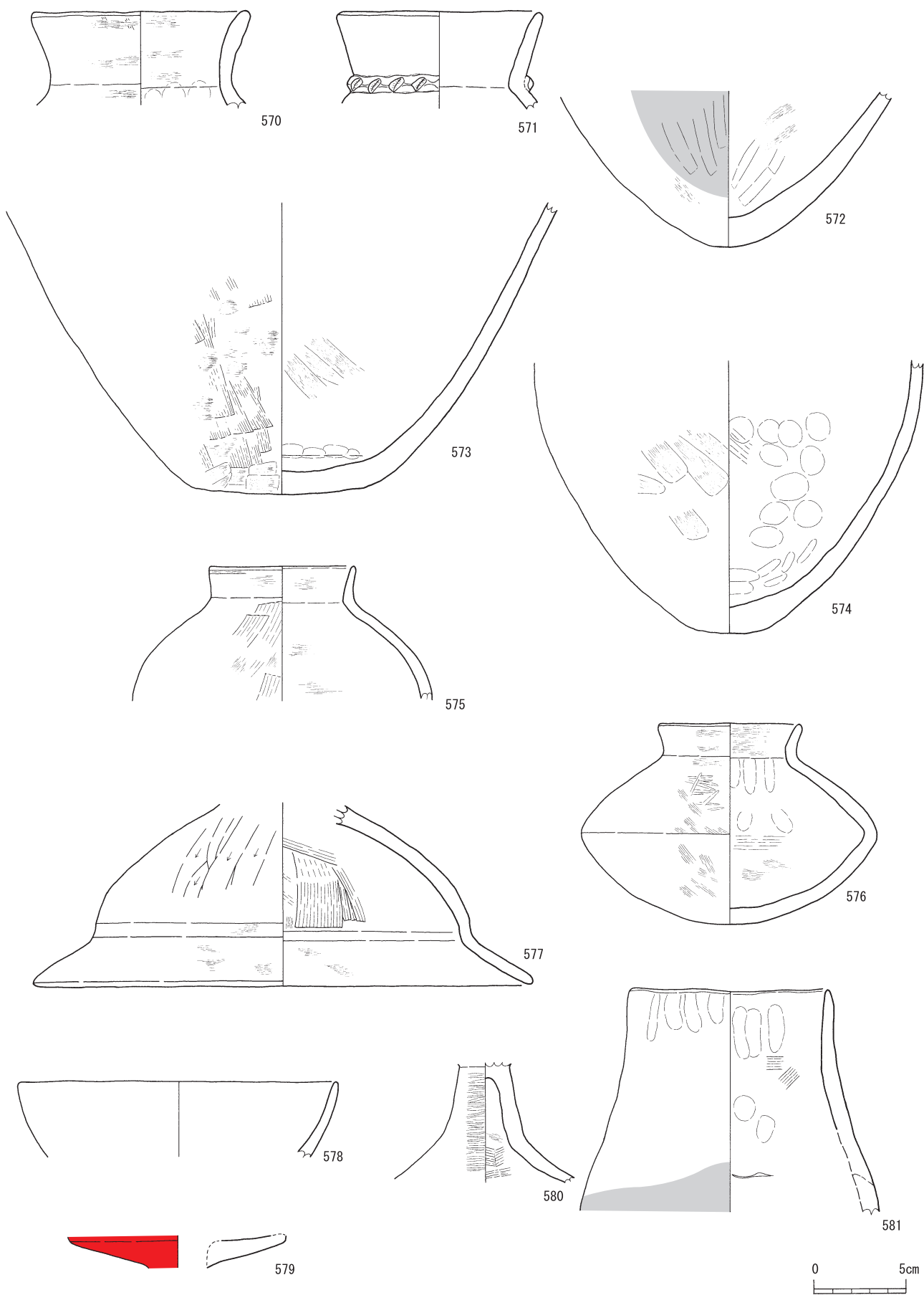
566



569



第180図 古墳時代の土器2 (甕②)



第181図 古墳時代の土器3（壺，高杯他）

第Ⅵ章 古代・中世の遺物

第1節 古代の遺物 (582～593)

582は須恵器の甕形土器である。頸部が締め、口縁部は外反し、胴部は丸く張る器形である。そして、口縁端部は肥厚している。器面は外面に敲き目がみられる。

583～585は土師器の甕形土器である。583は頸部で大きく「く」の字に折れ、口縁部が外に開く器形である。器面は、内外面ともナデ調整がされている。584は頸部で「く」の字に折れ、口縁部が外に開く器形である。器面は、内外面ともナデ調整がされている。585は頸部で「く」の字に折れ、口縁部が外に開く器形である。器面は、内面は口縁部がナデ調整され、胴部は掻き上げがみられる。外面は工具ナデが横方向にみられる。

586～590は坏である。586は口径10.3cm、底径5.8cm、器高3.3cmで丸みを取りながら立ち上がっている。底部は篋切り離しの平底である。587は底径6.6cmで篋切り離しの平底である。588は底径6.8cmで篋切り離しの平

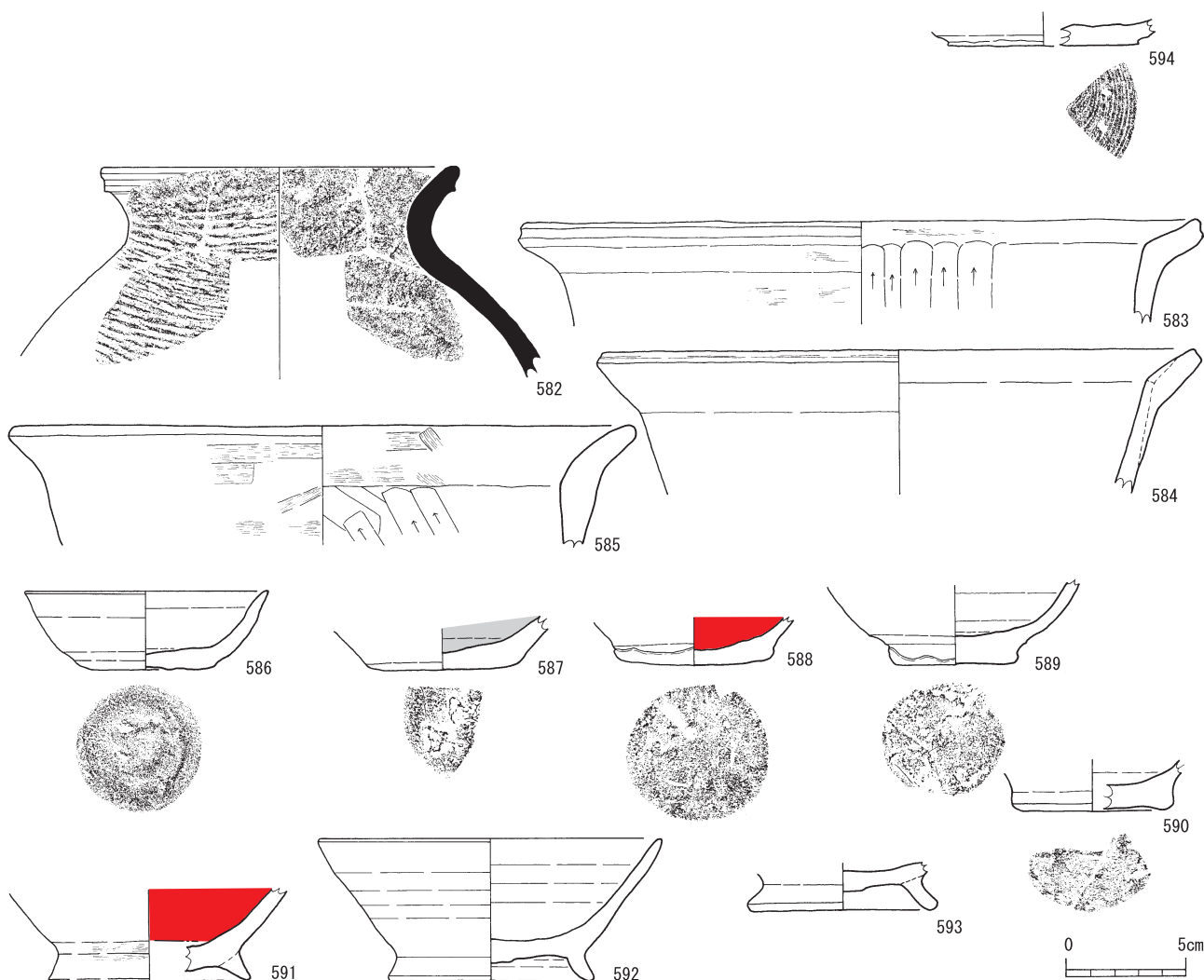
底である。589は底径5.4cmで充実平底である。590は底径6.8cmで充実平底である。

591～593は埴である。591は底径8.6cmで、脚が短く張っている。592は口径14.6cm、底径8.8cm、器高6cmである。器形は底部から口縁部へは直線状に開き、脚は開いて付けている。593は底径が8cmのものである。脚は長く大きく開いている。

これらは、口縁への立ち上がりが直線的で、脚が長く跳ねるような形であるため10世紀後半の時期と考えられる。

第2節 中世の遺物 (594)

594は底径8cmの坏である。底面には糸切り離しがみられる。



第182図 古代・中世の土器

第34表 弥生時代～中世の土器観察表 1

挿図 番号	遺物 番号	器種	部 位	分類	調 整 ・ 文 様		胎 土	色 調		焼成	法量 (cm)			備 考	出土区・層		注記 番号
					外 面	内 面		外 面	内 面		口径	底径	器高				
175	537	甕	口縁部	弥生	ナデ	ナデ 横ナデ	長石, 砂粒混	橙	赤褐	良好	—	6.3	—	器面摩減	D-8	II	—
	538	鉢	口縁～胴	弥生	ナデ	ハケメ→ナデ 指圧痕	石英	にぶい黄橙 黒褐	暗橙	良好	—	4.0	—		—	—	—
	539	甕	口縁部	弥生	ハケメ→ナデ 横ナデ	ハケメ→ナデ	石英, 長石 赤色砂粒混	灰黄褐 黒褐	浅黄橙	良好	—	—	—		C-7	II a	1390
	540	鉢	底部	弥生	ハケメ→ナデ	板ナデ, ナデ	長石, 白色砂粒 小石 (5mm) 含む	灰黄褐 浅黄橙	黄橙	良好	—	12.0	—		—	—	—
	541	鉢	底部	弥生	ミガキ	ナデ	石英, 白色砂粒	明赤褐 浅黄橙	暗赤褐	良好	24.8	—	—		E-G -15~17	III a	一括
	542	甕	口縁～胴	弥生	ハケメ→ナデ 指圧痕	板ナデ 指圧痕	石英, 長石 砂粒多混	明褐 黄橙	黄橙	良好	29.0	—	—	煤付着突帯	CD- 6, 7	II	1036 一括
	543	鉢	底部	弥生	ハケメ→ナデ	板ナデ, ナデ 指圧痕	長石, 砂粒混	黄橙	黄橙	良好	31.6	—	—		13T	II a	330
	544	大甕	底部	弥生	ミガキ	ナデ	石英, 長石 砂粒多混	明褐 灰褐	浅黄褐 黒褐	良好	27.4	—	—		C-7	II	一括
	545	甕	底部	弥生	ナデ 強い板ナデ	板ナデ→ナデ	石英, 長石, 角閃石, 砂粒混	橙 にぶい黄橙	黄褐 褐灰	良好	29.1	—	—	煤付着 充実高台	C-5	—	一括
176	546	甕	口縁部	弥生	横ナデ ハケメ→ナデ	横ナデ, ナデ	石英, 長石, 角閃石, 黒雲母	灰褐	浅黄橙	良好	—	8.6	—		D-2	II	一括
	547	甕	口縁部	弥生	横ナデ	横ナデ, ナデ	長石多混	浅黄橙	浅黄橙	良好	—	11.8	—		D-7	II	一括
	548	鉢	口縁～底	弥生	ハケメ→ナデ	板ナデ, ナデ	石英, 長石, 角閃石	浅黄橙 明褐灰	浅黄褐 褐灰	良好	—	7.0	—		C-4	III	6535
	549	甕	口縁部	弥生	ナデ ハケメ→ナデ	横ナデ	石英, 長石, 角閃石, 細粒混	浅黄橙 褐灰	黄橙 にぶい黄橙	良好	10.1	13.7	—		—	—	—
	550	甕	口縁～底	弥生	ハケメ, ナデ 横ナデ	横ナデ ハケメ→ナデ	長石, 赤色小石 白色小石	浅黄橙 黒褐	赤褐 橙	良好	12.0	—	—	煤付着脚付	—	—	—
	551	甕	口縁～底	弥生	ハケメ, ナデ 横ナデ	ハケメ→ナデ	石英, 長石 白色砂粒混	黄褐 黒褐	赤褐 黄褐	良好	11.4	—	—	脚台付	エ-26	III	6905
	552	甕	口縁～胴	弥生	ハケメ→ナデ 指圧痕	板ナデ, ナデ 指圧痕	長石, 赤色小石 砂粒混	黒褐	浅黄橙	良好	29.4	—	—		オ-27	—	一括
	553	甕	口縁部	弥生	ナデ ハケメ→ナデ	ナデ, 板ナデ	石英, 角閃石	黄褐 黒褐	黄橙	良好	—	—	—		D-7	II	—
	554	甕	口縁～胴	弥生	ハケメ→ナデ ナデ, 指圧痕	ナデ	石英, 長石, 角閃石, 白色砂粒混	黄褐 淡黄	灰黄	良好	—	9.6	—		BC- 21~28	III	—
178	555	壺	口縁部	弥生	ナデ, 指圧痕	ナデ	石英, 長石, 角閃石, 砂粒混	橙	浅黄橙	良好	—	4.0	—	器面摩減	C-2	II	一括
	556	壺	口縁～胴	弥生	ナデ, 横ナデ ハケメ→ナデ	ハケメ, ナデ	石英, 黒雲母 砂粒多混	赤褐 明赤褐	浅黄橙	良好	8.1	—	—	器面摩減	D-6	—	一括
	557	壺	胴～底	弥生	板ナデ→ナデ 指圧痕	ハケメ→ナデ	石英, 長石, 角閃石, 赤色砂粒混	橙 黒褐	浅黄褐 灰白	良好	—	—	—	黒斑あり 突帯1条	C-2	II	一括
	558	壺	底部	弥生	板ナデ→ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ 指圧痕	石英, 長石 小石 (4mm) 含む	赤褐	黄橙	良好	19.8	—	—		CD-7	III	一括
	559	高坏	脚部	弥生	ミガキ, ナデ	板ナデ, ナデ	石英, 粒多混	橙	暗赤褐	良好	29.2	—	—		エ-21	III	6618
	560	高坏	脚部	弥生	横ナデ	ケズリ→横ナデ 板ナデ	石英, 角閃石 砂粒混	橙 浅黄橙	黄橙	良好	—	4.2	—		—	—	—
179	561	甕	口縁～胴	古墳	ハケメ→ナデ ハケメ	ハケメ→ナデ	石英, 長石 赤色砂粒混	黒 褐灰	黄橙	良好	31.6	—	—	三角突帯1条	D-6	—	一括
	562	甕	口縁～胴	古墳	ハケメ, ナデ 横ナデ	ハケメ→ナデ	長石, 角閃石 白色細粒混	浅黄 黒褐	灰黄	良好	24.8	—	—	器面摩減 黒斑あり	オ-26	III	6931
180	563	甕	口縁部	古墳	ハケメ→ナデ ハケメ	ハケメ→ナデ	石英, 長石 砂粒小混	暗赤褐	黄橙	良好	27.4	—	—	刻目突帯1条	D-8	II	721
	564	甕	口縁部	古墳	ハケメ→ナデ 指圧痕	ナデ, 指圧痕	長石, 角閃石 白色細粒混	橙, 灰褐 浅黄橙	赤橙	良好	29.1	—	—	器面摩減	BC- 21~28	III	—
	565	甕	口縁～底	古墳	ハケメ→ナデ ミガキ	ハケメ→ナデ	石英, 長石, 赤色砂 粒, 砂粒少混	暗赤褐 赤褐	黄褐 黒褐	良好	31.2	—	—	刻目三角突帯 1条	ウ-27	—	—
	566	甕	口縁部	古墳	ハケメ, ナデ	ハケメ→ナデ	石英, 角閃石 小石多混	浅黄橙 黄橙	暗赤褐	良好	29.4	—	—	三角突帯1条	ク-30	III	7413

第35表 弥生時代～中世の土器観察表2

挿図 番号	遺物 番号	器種	部 位	分類	調 整 ・ 文 様		胎 土	色 調		焼成	法量 (cm)			備 考	出土区・層		注記 番号
					外 面	内 面		外 面	内 面		口径	底径	器高				
180	567	甕	脚部	古墳	ハケメ 横ナデ	ナデ, 指圧痕	長石, 角閃石 砂粒小混	黄褐	明黄褐	良好	－	8.6	－	煤付着	C - 7	Ⅲ	一括
	568	甕	脚部	古墳	ハケメ 横ナデ	横ナデ	石英, 長石 白色砂粒混	明黄褐	浅黄橙 褐灰	良好	－	11.8	－		14T	Ⅲ	－
	569	鉢	胴～脚部	古墳	板ナデ, ナデ 指圧痕	板ナデ→ナデ 指圧痕	長石, 白色小石 多混	黄橙 黄褐	赤褐	良好	－	7.0	－		A - 21～28	Ⅲ	一括
181	570	壺	口縁部	古墳	ハケメ→横ナデ	ハケメ→横ナデ	石英, 雲母	黄橙	黄橙	良好	12.0	－	－		－	－	－
	571	壺	口縁部	古墳	ハケメ→ナデ	ナデ	粗い胎土 小石多混	灰白	浅黄褐 灰白	良好	11.4	－	－	刻目突帯 1 条	キ - 28	Ⅲ	6762
	572	壺	底部	古墳	板ナデ, ナデ	板ナデ, ナデ	粗い胎土 砂粒多混	浅黄橙 黒褐	浅黄橙 黒	良好	－	0.5	－		オ - 29	Ⅲ	6437
	573	壺	底部	古墳	ハケメ→ナデ 板ナデ	ハケメ→ナデ 指圧痕	石英, 長石, 角閃石, 砂粒混	黄橙 灰褐	黄橙	良好	－	9.6	－		CD - 6	－	一括
	574	壺	胴～底	古墳	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ 指圧痕	長石, 角閃石 白色砂粒混	黄橙, 橙 褐灰	浅黄橙	良好	－	4.0	－		C - 7	Ⅱ	一括
	575	壺	口縁～胴	古墳	ハケメ→ナデ ナデ, 横ナデ	ナデ	石英, 長石 小石 (4mm) 含む	浅黄橙 橙	黄褐	良好	8.1	－	－		CD - 7	Ⅲ	6905
	576	壺	口縁～底	古墳	ハケメ→ナデ ミガキ	ナデ, 横ナデ	石英, 長石 小石 (6mm) 含む	浅黄橙 暗赤褐	浅黄褐 褐灰	良好	8.0	0.4	11.0		E ~ G -15~17	Ⅲ a	一括
	577	蓋	胴～底	古墳	ナデ, 横ナデ ケズリ	ハケメ, ナデ	粗い胎土 小石 (9mm) 含む	暗赤褐 赤褐	橙 暗褐	良好	－	27.4	－		E ~ G -15~17	Ⅲ a	一括
	578	高坏	坏部	古墳	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	精製された胎土	赤橙	にぶい黄橙	良好	17.6	－	－	赤色土器	－	－	－
	579	高坏	坏部	古墳	ミガキ	ミガキ	精製された胎土	明赤褐	赤褐 橙	良好	－	－	－	丹塗り 器面剥離	E ~ G -15~17	Ⅲ a	－
	580	高坏	脚部	古墳	ミガキ	ハケメ, ナデ	石英, 赤色砂粒 小石 (6mm) 含む	橙 浅黄橙	黄橙	良好	－	－	－	丹塗り	－	－	－
	581	壺	口縁～胴	古墳	ナデ, 指圧痕	ナデ, 指圧痕	石英, 長石, 白色小石, 砂粒多混	赤褐 黒褐	赤褐	良好	11.0	－	－	器面摩滅 黒斑あり	BC - 21～28	Ⅲ	－
	582	甕	口縁～底	古代	平行タタキ 横ナデ	ナデ, 指圧痕 格子目当て具	石英, 長石, 黒色 小石 (6mm) 含む	灰白	灰白 灰	良好	15.2	－	－		－	－	－
182	583	甕	口縁～胴	古代	横ナデ	ケズリ 横ナデ	石英, 白色砂粒 小石 (1.2cm) 含	明黄褐 黒褐	黄橙 灰褐	良好	29.0	－	－	煤付着	C - 8	Ⅱ	一括
	584	甕	口縁部	古代	ナデ, 横ナデ	ナデ, 横ナデ	石英, 長石, 角閃石	黄橙	浅黄橙	良好	25.6	－	－		ク - 31	Ⅲ	7513
	585	甕	口縁～胴	古代	ナデ, 板ナデ	ケズリ ハケメ→ナデ	石英, 小石混	赤橙 褐灰	暗赤褐	良好	26.6	－	－		－	－	－
	586	坏	口縁～底	古代	横ナデ	横ナデ	精製された胎土 細粒混	浅黄橙 褐灰	浅黄橙 灰褐黄	良好	10.3	5.8	3.3		オ - 28	Ⅲ	6266
	587	坏	底部	古代	横ナデ	ナデ	精製された胎土	灰白 褐灰	黒	良好	－	6.6	－		－	－	－
	588	坏	底部	古代	板ナデ, ナデ	ナデ	精製された胎土	淡橙	橙 淡赤橙	良好	－	6.8	－		－	－	－
	589	壺	胴～底	古代	横ナデ	横ナデ	精製された胎土	浅黄橙 灰白	灰白 黒褐	良好	－	5.4	－	充実高台	－	－	－
	590	壺	底部	古代	ナデ, 板ナデ	ナデ	精製された胎土 細粒混	浅黄橙	浅黄橙	良好	－	6.8	－		C - 7	V	2274
	591	壺	底部	古代	ナデ	ナデ	石英, 細砂混 小石 (6mm) 含む	浅黄橙	橙 浅黄褐	良好	－	8.6	－	器面摩滅 赤色顔料	C - 4	－	一括
	592	壺	口縁～底	古代	横ナデ	ナデ, 横ナデ	石英, 赤色小石 小石 (7mm) 含む	黄橙	黄橙	良好	14.6	8.8	6.0		オ - 26	Ⅲ	6622
	593	壺	脚部	古代	板ナデ 横ナデ	ナデ	石英, 長石 砂粒少混	赤橙	橙 淡橙	良好	－	8.0	－		－	－	－
	594	坏	底部	中世	ナデ	ナデ	精製された胎土	黄橙	浅黄橙	良好	－	8.0	－		E ~ G -15~17	Ⅲ a	一括

第Ⅶ章 分析・同定

南田代遺跡の放射性炭素年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

鹿児島県川辺郡川辺町に所在する南田代遺跡は、万之瀬川の右岸に立地する。発掘調査により確認された遺構・遺物より、縄文時代・古墳時代・古代・中世の遺跡と考えられている。今回の分析調査では、これらの中で、縄文時代前期・中期の遺物包含層と縄文時代晩期の遺物包含層が確認された調査区の集石遺構から出土した炭化物の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施し、年代資料を得る。

1. 試料

試料は、縄文時代前期の遺物包含層（Ⅴ層）を掘り下げて検出された、3号集石遺構から出土した炭化材1点である。本試料を対象に、放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。なお、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は加速器を用いて試料炭素の($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、標準試料PDB（白亜紀のペレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第30表に示す。試料の測定年代値は約5610年前の値を示す。

(2) 樹種同定

結果を第30表に示す。炭化材は、散孔材の道管配列を有する広葉樹材。横断面で小径の道管が高い密度で分布する。しかし、保存状態が悪く、その他の特徴が観察できなかったため、種類の同定には至らない。

4. 考察

試料の年代測定値は、キーリ・武藤（1982）らによれば、縄文時代前期中頃に相当する値を示す。これは、試料が、縄文時代前期の遺物包含層（Ⅴ層）を掘り下げて検出された3号集石遺構から採取されていることとほぼ調和的である。ただし、今回の測定点数は1点であるため、得られた年代値についてより詳細な検証を行うためには、同一遺構内や周辺遺構でより多くの分析調査を実施するとともに、試料の出土状況や由来、共伴遺物など考古学的所見と総合評価することが望まれる。

引用文献

キーリ C. T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代、「縄文文化の研究 1 縄文人とその環境」, p.246～275. 雄山閣。

第30表 南田代遺跡の放射性炭素年代測定および樹種同定結果

出土遺構	試料の質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code. No.
3号集石	炭化材	広葉樹	5610±30	-29.54±0.78	5640±30	IAAA-10921

1) 年代値の算出には、Libbyの5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

放射性炭素年代測定

山形秀樹（パレオ・ラボ）

1. はじめに

南田代遺跡より検出された土器付着物の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、オ-30区Ⅲ層から出土した土器の外側より採取した付着物1点、カ-30区Ⅲ層から出土した土器の外側より採取した付着物1点、ク-31区Ⅲ層から出土した土器の外側より採取した付着物1点の併せて3点である。

これら試料は、酸洗浄を施して不純物を除去、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

第31表に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値（yrBP）の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正

し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

¹⁴C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正值は¹⁴C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の¹⁴C年代，p.3-20.
- Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第31表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{CPDB}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-1930 (AMS)	土器付着物 オ-30区Ⅲ層 No.4287	-25.7	3935 ± 30	cal BC 2465	cal BC 2470 - 2430 (50.2%) cal BC 2425 - 2405 (25.8%) cal BC 2375 - 2350 (24.0%)
PLD-1931 (AMS)	土器付着物 カ-30区Ⅲ層 No.5076	-25.0	5835 ± 30	cal BC 4710 cal BC 4695	cal BC 4770 - 4750 (21.3%) cal BC 4725 - 4675 (63.4%) cal BC 4635 - 4620 (14.6%)
PLD-1932 (AMS)	土器付着物 ク-31区Ⅲ層 No.4383	-26.0	5475 ± 30	cal BC 4335	cal BC 4350 - 4325 (52.4%) cal BC 4280 - 4255 (47.6%)

第Ⅳ章 発掘調査のまとめ

南田代遺跡の発掘調査の結果、Ⅲ層を中心に大量の遺物が出土し、縄文時代早期から中世まで続く複合遺跡であることが明らかとなった。また、遺物のみでなく、多くの集石や石斧埋納遺構、磨石集積遺構、黒耀石原石埋納遺構、剥片集積遺構など様々な遺構も検出された。

以下、検出遺構、出土土器、出土石器について本遺跡のまとめを行う。

第1節 検出遺構

集石の多くは調査区西側の川を眺める自然堤防の丘陵上に集まっていた。同じⅢ層から検出されているが、わずかに高低差があるものもみられる。しかし、明確な時期差を特定することは難しく、遺構内出土土器から多少の時間差はあるが、縄文時代前期～中期に使用されたものと考えることができよう。

集石は、下部に掘り込みを有するものと、持たないものに分類された。掘り込みの深さは15cm 前後とやや浅めであるが、炭化物や焼土を伴い、火熱を受けたと思われる礫の赤化や割れがみられることから、調理施設として利用されたと考えられる。掘り込み周辺に赤化した破損礫が散在しているが、接合作業不十分のため、掘り込み内の礫との関係は不明である。ただし、掘り込みが浅く、石材、破損状況が似ており、位置関係等から、本来は同一のものであり、集石使用後に食材等と一緒に掻き出された可能性も否定できない。

縄文時代前期頃の石斧埋納遺構が2基検出された。どちらも掘り込みを有し、同じ方向に意図的に埋められているが、両者は少し特徴が異なる。1号には、3点の石斧と2点の剥片が立てられた状態で埋められていた。石斧と剥片が接合したように製作途中のものと考えられる。2号は6点の磨製石斧のほとんどが完成品であり、横方向に重ねられていた。袋状の入れ物に収められていた可能性も考えられるが、縦方向、横方向にどのような目的や意味があるのか明確でない。県内では同じような石斧集積が、縄文時代早期の上野原遺跡（国分市）、前畑遺跡（薩摩川内市）、大中原遺跡（根占町）、界子仏遺跡（牧園町）、縄文時代前期末の上水流遺跡（金峰町）、縄文時代晩期の鳴神遺跡（大隅町）で検出されており、縄文時代前期に該当する本遺跡のものは、石斧集積遺構の目的や意味などを研究するうえで貴重な資料であると言える。

Ⅲ層より3～4点の磨石がまとめて出土した磨石集積が2基検出された。遺構周辺より轟式土器が多く出土していることから、縄文時代前期頃のものである。倉園B遺跡（志布志町）や大中原遺跡でも同様の磨石集積が

検出されているが、同じように3～5点と比較的少ない磨石が集められており、一部重なりもみられた。なぜ磨石が集められたのか不明であるが、何らかの意図を持って集められており、規則的に並べて置かれたものなどは、単なる貯蔵目的でなく、祭祀的な意味合いも感じられるのでこれからの検討を待ちたい。

この他に、西北九州産の黒耀石、安山岩（サヌカイト）、在地産の砂岩・頁岩の集積遺構が検出された。

針尾産の黒耀石原石が15個まとまって出土した。原石の大きさは、いずれも拳よりやや小さめのもので、持ち運ぶには手頃な大きさであり、原産地のものをそのまま運び込んだものである。出土状況から籠または袋状のものに入れられて埋められたと推察される。原石の大きさから大型の石器製作用とは考えられず、石鏃や石匙など比較的小型の石器製作用と考えられる。

同じような黒耀石の集積が、安茶ヶ原遺跡（市来町）でも検出されている。ここでは、原石のままではなく、原石が大きい腰岳産のものを原地で拳大に粗割りを行い、持ち運びしやすくしてから運び込んでいる。籠または袋状のものに入れ埋められたと推察されるのは同じである。

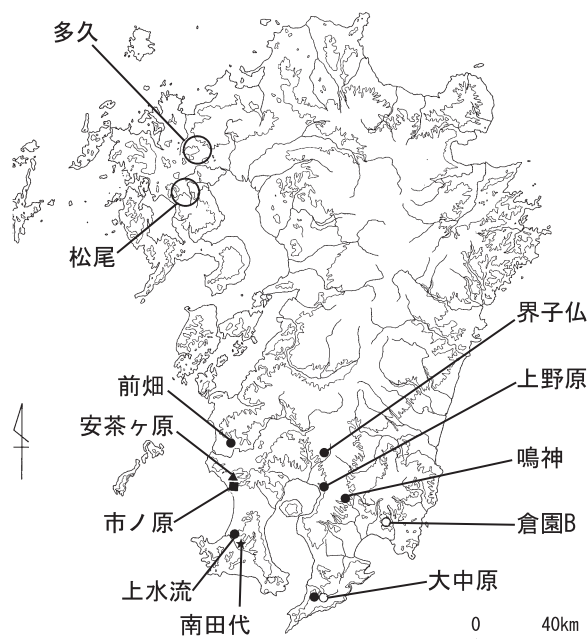
安山岩（サヌカイト）の集積は、粗割りされた剥片74点が一ヶ所から集中して出土したものである。西北九州産の安山岩（サヌカイト）を原産地近くで大きさが径10cm 以下の剥片にしてから運び込んでおり、黒耀石と同じように浅いボール状のものに収めてから埋めたと思われる。少なくとも4種類以上の原石が確認され、種類ごとに原産地が異なる可能性もある。この安山岩（サヌカイト）からさらに加工を施し、石器を製作したと思われる。大きめの剥片からはやや大型のスクレイパー、小さめの剥片からは石鏃や石匙などが作られたのではないかと推察される。

同じような安山岩（サヌカイト）の集積が、市ノ原遺跡（市来町）でも検出されている。本遺跡のものよりもやや大きい径10cm 程度の剥片が土坑から99点出土しており、同じように異なるいくつかの個体が原産地近くで粗割りされてから搬入されている。

市ノ原遺跡と本遺跡の安山岩（サヌカイト）集積は、剥片の形状や原産地、出土状況などが非常に似ている。また、両遺跡とも比較的海岸近くに立地することから、宮田栄二（2004）が述べたように、安山岩（サヌカイト）の原産地近くで多くの礫が同時に粗割りされ、手頃な大きさの剥片に形状を整え、丸木舟などの海上運搬手段により流通を手がけた集団の存在が考えられる。このようにして海岸近くの遺跡に持ち込まれたものが、河川を通じて本遺跡にも持ち込まれたと推察される。

もうひとつの剥片集積は、前述の黒耀石原石埋納遺構、剥片集積遺構が搬入品のみで構成されていたのに対

して、県外から持ち込まれた石材は確認されず、在地産の石材のみを用いた剥片集積である。砂岩3点、頁岩12点の計15点で構成されていた。搬入品と在地産との関係は不明であり、今後の周辺地域の調査に期待したい。



第183図 第1節に関連する遺跡等の位置図

第2節 出土土器

1 分布について

I～Ⅲ類

この類の時期は縄文時代早期前半に位置し、D・E・4・8区の北部（標高36～37m）とD・23～ケ・30区で南部の舌状微高地（標高38～39m）に疎ら状態で出土した。特に特徴は見あたらない。

Ⅳ～Ⅵ類

この類の時期は縄文時代早期後半に位置し、D・E・2～8区の北部（標高36～37m）とD・23～ケ・31区で南部の舌状微高地（標高38～39m）にやや纏まって出土している。特徴は南部においてア・28・29区とカ～ケ・30区に集中して出土している。

Ⅶ類

この類は縄文早期末から前期初頭の時期と考えられるもので、D・E・5～7区の北部（標高36～37m）とD・23～ケ・30区で南部の舌状微高地（標高38～39m）に出土している。特徴はカ・オ・28・29区を中心に出土している。

Ⅷ類

この類は縄文前期前葉の位置に考えられるもので、D・E・2～8区の北部（標高36～37m）とD・23～ケ・31区で南部の舌状微高地（標高38～39m）に出土している。

この類ではⅧa類とⅧb類とⅧc類に分けて分布を作成した。その結果、北部の分布は密では無く、南部に集中して出土している。特徴はア・A・27・28区にⅧa類が集中し、Ⅷb類と重なりがみられる。また、エ～キ・27～30区にも集中検出がみられる。ここではⅧc類との重なりがみられる。Ⅷb類は前述区とエ・ウ・28・29区に集中して検出している。Ⅷc類は前述区とイ・ウ・25・26区に集中して検出している。

よって、これらの類は同じ舌状微高地を生活の場に行っているが、若干のずれがみられる。

Ⅸ類

この類は縄文前期前半の位置に考えられるもので、D・23区～ケ・31区で南部の舌状微高地（標高38～39m）だけに出土している。

特徴としては遺物検出がⅧc類と重なっている状態である。

よって、Ⅸ類はⅧc類との関係が深いと思われる。

X類

この類は縄文前期前半の位置に考えられるもので、D・E・6～8区の北部（標高36～37m）とD・23～ケ・31区で南部の舌状微高地（標高38～39m）に出土している。

特徴としては、集中区がA・ア・26～29区、イ・ウ・25・26区、ウ～ケ・25～31区に分けられる。これらの分布はⅧc類、Ⅸ類に重なりがみられる。

XⅡ類・XⅢ類

この類は縄文時代前期前半に位置するもので、D・E・4～8区の北部（標高36～37m）とD・25～ケ・29区で南部の舌状微高地（標高38～39m）に出土している。

特徴は北部に多く出土している。

XⅢa類はD・25～ケ・29区で南部の舌状微高地（標高38～39m）だけに出土している。

特徴はⅦ類と重なりがみられる。

XⅢb類はD・E・3～6区の北部（標高36～37m）とイ・25～キ・30区で南部の舌状微高地（標高38～39m）に出土している。

XⅣ類

この類は縄文時代前期中葉に位置するもので、D・E・2～8区の北部（標高36～37m）とア・29～カ・30区で南部の舌状微高地（標高38～39m）に出土している。特に、D・E・6～8区に集中していることがわかる。

XⅤ類

この類は縄文時代前期後葉に位置するもので、D・E・2～8区の北部（標高36～37m）とア・28・29区で南部の舌状微高地（標高38～39m）に出土している。量としては北部が多い。

XⅥ類

この類は縄文中期前半に位置するもので、D・E・2

～8区の北部（標高36～37m）だけに出土している。

特徴はXⅥ類と同地区に出土している。

XⅦ類

この類は縄文中期前半に位置するもので、D・E-2～8区の北部（標高36～37m）だけに出土している。

特徴はXⅥ類と同地区に出土している。

XⅧ類

この類は縄文時代中期後半に位置するもので、A-28～ケ-27区南部の舌状微高地（標高38～39m）だけに出土している。集中箇所はカ-30区とク-31区にみられる。

特徴は同じ中期のXⅥ類とXⅦ類との重なりは認められないので生活時期の差が明白である。

XⅨ類・XⅩ類・XⅩⅠ類

これらの類は縄文時代後期に位置するもので、A-28区～ケ-27区で南部の舌状微高地（標高38～39m）に出土している。

XⅩⅡ類・XⅩⅢ類・XⅩⅣ類

この類は縄文時代晩期に位置するもので、D～F-2～8区の北部（標高36～37m）とC-17～ケ-30区で南部の舌状微高地（標高38～39m）に出土している。特に北部が密に出土している。

XⅩⅤ類・XⅩⅥ類・XⅩⅦ類

この類は弥生時代、古墳時代、古代で、D～F-2～8区の北部（標高36～37m）とC-17～ケ-31区の南部の舌状微高地（標高38～39m）に出土している。

2 縄文時代の土器について（1～536）

I類（1・2）

1は口唇部に刻みがあり尖り、内面は段になり、外面は貝殻刺突で文様を付けている。器面は外面が研磨状に内面が丁寧な撫で調整を横方向にしている。これは前平B式の岩本タイプに比定される。2は口唇部が尖り、外面には刻みがみられる。器面は外面が貝殻条痕で、内面は撫で調整である。これらは縄文時代早期の前平B式に位置する土器である。

Ⅱ類（3～5）

3は外面の文様が楕円押型文である。内面は丁寧な撫で調整である。4は外面の文様は縦方向の山形押型文と横方向の刻み目のある突帯である。内面は丁寧な撫で調整をしている。5は外面の文様が縦方向の山形押型文である。内面は丁寧な撫で調整をしている。これらは縄文時代早期の押型文土器で、手向山式土器に比定される。

Ⅲ類（6～9）

この類は沈線と連点の組み合わせをもつ文様の土器である。この類は器形が外反する口縁部をもつ土器で、文様は沈線と連点文の組み合わせである。これは縄文時代早期の平栴式土器に比定される。

Ⅳ類（10～17）

この類は頸部で「く」の字状に外反する口縁部で、円筒胴を呈する器形で、文様は刻目突帯と沈線と撚糸文の組み合わせである。縄文早期に位置し、塞ノ神A式に比定される。

Ⅴ類（18～38）

この類は頸部で「く」の字状に口縁部が外反する器形をもち、文様が沈線と貝殻刺突連続文の組み合わせである。また、31と32には丸い瘤と尖った瘤がみられる。これらは縄文時代早期に位置する塞ノ神B式土器に比定される。31と32は同型式のバリエーションか、地域的なものなのか、時期的なものなのか今後の研究を待ちたい。

Ⅵ類（39～42）

この類はⅥa類が貝殻条痕を波状に施す39～42と直線に施す42のⅥb類に分けられる。これらの内面は貝殻条痕の上を撫で調整をしている。これらは縄文早期に位置し、Ⅵa類が小屋原遺跡出土の条痕文土器でⅥb類が帖地遺跡の条痕文土器に類似している。

Ⅶ類（43～65）

この類は器形が逆円錐状で厚手の土器である。器面は貝殻条痕と考えられる条痕文で調整されている。文様は口縁部に凹点潰し突帯や刻目突帯を施すもので、胴部には斜状沈線で菱形文を施したものである。これは大きく文様で分けると凹点潰し突帯の43～46と狭い刻み目の47～54である。ともに43と49で代表される様に斜状沈線で菱形文が胴部に施されている。また、48・49など口唇部に刻み目が施されているものが多い。55～65は底部である。器面は粗めの条痕文で厚く作られ、56には斜状沈線がある。器形は尖底気味の丸底を呈している。これらで判断すると、この類の土器は厚手の器壁で、焼成は硬めで縄文時代早期の感触がみられる。これらの突帯は凹点潰しと刻み目があるが貼り付けている部分は口縁部に集中している。特に狭い刻み目突帯はⅧa類のミミズバレ突帯との関連を考えさせる文様として把握もできる。

この土器類は、文様の形態からみれば川辺郡大浦町西ノ藪遺跡の土器に比定される。

この類は、縄文前期前半に代表される熊本大学所管の轟式土器と比較してみると、厚みや器面調整の条痕文、焼成に違いがあり、轟式土器に先行する形態と考えられる。時期的には後述する轟B式が前期前葉とすれば早期末の可能性が考えられる。

Ⅷa類（66～95）

この類は器形が胴部から口縁部がバケツ型に開くものである。文様は条痕文の上に、ミミズバレ三角断面突帯を途切れなく口縁部に集中して貼り付けたものである。66は口唇部に刻み目を入れ、口縁部が波状になり、文様は数少なく狭く施している。69は突帯を数多く詰めて施している。70は突帯を胴部まで施している。71は突帯を

口唇部からやや離れた口縁下部から胴部にかけて横方向突帯の下に吊り下げ波状突帯を貼り付けている。86は横方向の突帯に弧状の沈線を施している。以上のようにこの類はバリエーションが多くみられる。この類のグループは、口唇部に刻み目を施しミミズバレ突帯が口縁部に集中する66・67などⅦ類との関連をもつ土器群とミミズバレ突帯が口縁部から胴部に至るまで広がるものと、ミミズバレ突帯が87～95にみられるように突帯と、突帯の重なりの間隔が広くなりⅧb類にみられる突帯がかすれたり途切れたりするものに分けられる。

これらの土器は遺跡で比定すると、最初のグループは日置郡金峰町の上焼田遺跡の出土土器にあたる。その後のグループは黒川洞窟出土土器にあたる。最後は今後の出土に期待したい。ただ、この類の器形で不明な部分は底部である。底部は器面調整からみると66～70はⅦ類の底部に近く、71～95は86で代表されるやや平底を呈する器形と考えられ、175～177の底部が想像される。

この土器は縄文前期の轟B式に比定される。

Ⅷb類 (96～141)

この類は突帯がやや細く、その突帯がかすれたり、途切れたりする部分がみられるもので、器面全体に施すものが多いグループである。器形としては106・115で代表されるように逆円錐形を想像させるものである。調整痕は条痕文で、焼成は概ね硬質である。

この類は3つのグループに分けられる。

第1グループ (96～114)

96は器形が直線状に外反したバケツ型の器形をもつⅧa類の範疇に入るが、文様はやや細目のカスレ・トギレ突帯で間隔を少し空けて胴部まで施している。97～105・107・108は口縁部がやや開き、110～114は胴部がやや丸みをもつ器形で、突帯は106を除き胴部から底部近くまで施されている。106は口縁部から胴部までは無文で底部に突帯を施している。このグループはⅧa類の器形を持ちつつ胴部の膨らみがみられる器形で、文様はカスレ・トギレ突帯をやや間隔を開けて、底部近くまで施している。

第2グループ (115～134)

115は口縁部が外反、胴部が張り、胴部から底部へ略「く」の字状に絞る形で、逆円錐形を想像させる器形である。文様は条痕文に間隔を空けた細めのカスレ・トギレ突帯を全面に施している。116～120は外反する口縁部で121～125は胴部から底部近くである。文様は条痕文にカスレ・トギレ突帯で間隔を大きく空けて施している。底部は178・179が想定される。このグループは、器形が逆円錐形を想像させるもので、文様は条痕文にカスレ・トギレ突帯で間隔を空けて、全体に施すタイプである。

第3グループ (135～141)

135は口唇部に刻み目があり突帯は口縁部の下部に集

中している。口縁部には弧状の突帯を施している。136～138は口唇部まで突帯が斜方向に口縁下部から施している。136・139には曲状突帯がみられる。140には斜方向突帯がみられる。なお、141は凹線で平行隆起を施す。以上のようにこのグループは、2本の平行カスレ・トギレ突帯を基本に曲状突帯と組み合わせ施したもので、カスレ・トギレ突帯の特殊タイプとしてここに上げた。

この類の放射性炭素測定は、取り上げNo.5076、本報告掲載No.124が $5835 \pm y r B P$ である。

Ⅷc類 (142～174)

この類は3グループに分けられる。

第1グループ (142～156)

142・144・145は鋭い三角断面突帯で間隔を空けて施している口縁部である。156は直線状に開く器形で、鋭く尖った三角断面を全面に間隔を空けて施している。160はやや胴部が張る器形で、胴部には細く尖った三角断面突帯を施している。146～152は胴部である。間隔を空けた尖り突帯が施されている。153・154は底部近くで丸底が想定される傾きである。底部は180・181が器面調整や焼成なども含めて想定される。このグループは焼成が良いため条痕文と文様の横方向の尖り突帯が明瞭にわかるタイプである。

第2グループ (157～165)

157・158・162・163は頸部から大きく口縁部が開き、縦方向に数本の尖り突帯を施している。159・160も口縁部の一部と思われる。161は頸部で縦方向の尖り突帯を施している。164・165は球状に張る胴部であり、縦方向と横方向の尖り突帯が施されている。このグループは頸部から口縁部は開き、胴部は球状に張る器形で、条痕文に縦方向と横方向の尖り突帯を施しているタイプである。

第3グループ (166～174)

166は頸部で口縁部が外に開き、肩部が張る器形である。文様は口縁部に縦方向の多条の尖り突帯を、頸部に横方向の尖り突帯を施す。167～171は縦方向の多条の尖り突帯を口縁部に施している。172・173は胴部であるが、多条の尖り突帯がみられる。174は尖り突帯である。このグループは、条痕文の器面に多条の尖り突帯を施すタイプである。

この3グループには連点が無く、三角断面である尖り突帯だけで文様を施している特徴がある。これまで出土した例は鹿屋市の神野牧遺跡出土遺物が類似している。この類の土器の放射性炭素測定結果は、取り上げNo.4383、本報告掲載No.160が $5475 \pm 30 y r B P$ である。

このⅧ類は縄文前期の轟式系の範疇に入る。

Ⅸ類 (184～230)

この類はⅨa～Ⅸeの5タイプに分けられる。

Ⅸ a 類 (184～187)

この類は直線状に開く口縁部に刺突文を施すタイプである。器面は条痕文を施している。この類例は島根県の西川津遺跡にみられる。

Ⅸ b 類 (188～200)

188～192は口縁部が内向している口縁部である。193～195は丸みをもち内湾している肩部である。196～200は丸く張った胴部である。文様は口縁端部が条痕文か撫で調整で、頸部から肩部にかけて連続に詰めた刺突文を横・斜方向に施す。そして、胴部には刺突文を付けた突帯を貼り付けている。また、底部近くは条痕文である。

この類は内湾する器形の深鉢に刺突文と刺突文を付けた横方向の突帯をもつタイプである。この類例は島根県の西川津遺跡にみられるが、上部の刺突文だけで器形と横方向の刺突文突帯は異なる。

Ⅸ c 類 (201～212)

201～203・205は口縁部が内向している口縁部である。204・206～209は丸みをもち内湾している肩・胴部で文様は口縁端部が条痕文か撫で調整で、頸部から肩部にかけて連続に詰めた複数の刺突文突帯を横・斜方向に施している。そして、201の胴部には刺突文を付けた突帯を貼り付けている。さらにこのタイプは201～205にみられる縦・斜方向の刺突文を付けた突帯がみられる。この類例は島根県の西川津遺跡にみられる。

210・211はⅨ類の口縁部に縦方向の刺突文突帯を施しているものである。Ⅸ d 類に含めても良いが、ここでは刻み目突帯であるためこの類に入れた。212は2本の刻み目突帯を施すもので、複数のわたる突帯との判断でここに含めた。

Ⅸ d 類 (213～222)

この類は213で代表されるように、口縁部はⅨ類にみられる直に向くもので、胴が丸く張る器形である。文様は口縁部が3列の刺突文で、胴部が尖り突帯を葉形に、胴下部に横方向の尖り突帯を巡らす。その中に刺突文を斜方向に詰めて施している。214・215は底部近くの胴部である。刺突文の下に微隆起の尖り突帯がみられる。216～222は曲状の突帯や渦巻き突帯と刺突文がみられる。これらは刺突文が西川津遺跡系との関連が強くみられるもので、尖り突帯はⅧ c 類との関連が考えられる。

Ⅸ e 類 (223～230)

この類は文様が押し引き文を施しているグループである。口縁部は223・228で示しているように内向している。胴部は223・229・230で示しているように丸く張っている。文様は223で示しているように幅の広い押し引き文で、230でみるように幅の狭い押し引き文がみられる。なお、223には刺突文を施した突帯が横方向に貼り付けてある。これらは、西川津遺跡系の押し引き文との関連が強いが、器形がやや変化しているほか、刺突文の突帯がみられる。

このⅨ類は縄文前期で山陰系と、山陰系に影響を受けた土器と思われる。

Ⅹ類 (231～273)

この類は口縁部に刺突文を横方向に付け、刻み目突帯を施しているグループで、Ⅸ a 類～Ⅸ c 類に分けられた。

Ⅹ a 類 (231～258)

この類は文様が刻目文と口縁部や胴部に尖り突帯と沈線を組み合わせているグループである。器形は233・235・243・253・255で示しているよう「く」の字に開き、胴部で丸く張り、底部へは丸底状に傾く深鉢と、242・257で示すように丸底をもつ浅鉢がある。文様は231・232・235がⅧ c 類第3グループにある多条尖り突帯との関連性を、236・237はⅧ c 類第2グループにある縦方向突帯に関連性をもつ。242・249・250・253はⅨ d 類の尖り突帯との繋がりが考えられる。243・253・256・258の沈線はⅨ e 類の230にみられる細い押し引き文との関連性を指摘できる。なお、242・243等にみられる胴部の突帯はⅨ b 類にみられる刺突文突帯と部位の位置は同じであるが刻み目状である。

Ⅹ b 類 (259～263)

この類は口縁部に刺突文、肩から胴部に刻目突帯文と沈線を施すグループである。器形は259が代表的で頸部から口縁部は直ないし外向する。胴部は球状に丸く張っている。文様はⅨ a 類の横方向の刻目突帯に縦方向と斜方向が加わっている。

Ⅹ c 類 (264～273)

この類は264・267・269・270でみるような刺突文ないし刻目文を口縁部に施し、268・272にみられるような微隆起の尖り突帯を施している。そして、268以外にある玉状突起を施している。以上Ⅹ c 類は条痕文の上に3ないし4種類の文様を施しているグループである。

Ⅹ類は器形や文様を総じて出水市庄貝塚より出土したものに類似している。

Ⅸ・Ⅹ類 (274～289)

ここに上げた土器は口縁部と頸部と底部である。口縁部は274～285で直線状に外向している。文様は刺突文である。頸部は286・287で外曲し、文様は刺突文である。これらはⅨ d 類とⅩ b 類に共通している。この2つはセット関係が考えられる。底部は288と289である。Ⅹ a 類の242と類似しているが、Ⅸ類にも合う器形である。

Ⅹ I 類 (290～293)

この類はⅧ c 類に刻み目を入れたものである。そして、尖り突帯を横や斜めに間隔を空けて施している。292・293がある。これは、Ⅷ c 類と刻み目を入れるⅨ類の関係で注目される土器と考えられる。時期は縄文前期である。

XⅡ類 (294～298)

この類は条痕文に沈線を施すものである。器形的には逆円錐形をなし、文様は数条の沈線を斜・横・曲状に施している。時期は縄文前期である。

XⅢ類 (299～321)

この類は器面調整が全面条痕で文様を施さないものである。この類は器形で299～311と312～321に分けられる。時期は縄文前期である。

XⅢ a類 (299～311)

この類は口縁部が内湾気味に直向する器形である。299・310は大型であるが、305～309は小型である。310は口唇部がやや膨らんでいる。311は条痕文の幅が広い。これらは轟A式に類似しているが、完形土器がないので確定はできない。

XⅢ b類 (312～321)

この類は口縁部が外反か外向する器形の土器である。器面は条痕文だけで、文様はない。順当に扱えば轟A式の範疇でも差し支えがないが、318・321は傾きがⅨ・X類の器形に類似している。Ⅸ・X類の刺突文のないものとも考えられる。また、Ⅷb類の111の例もあるのでここでは前の類と分けた。すなわちこの類は口縁部が外反ないし外向する土器類の無文土器の可能性が高い。

XⅣ類 (322～349)

この類は縄文前期の曾畑式土器に比定される。器形は口縁部が外反する322～333と直向する334～336とに分けられる。文様は外反グループが直線で直向するグループは曲線である。胴部は三角形と四角形の文様がみられる。底部は沈線を蜘蛛の巣状に施したものもある。

XⅤ類 (350～363)

XⅤ a類は器形が外反する口縁部をもち、細い沈線と連点を組み合わせた文様を構成している。細い沈線であるが深浦式土器に類似しているため、ここでは深浦式土器系に含めた。このXⅤ b類は縄文前期の深浦式土器に比定される。器形は口縁部が直に向き、胴部は筒状を呈する。全体的に薄手で、軟質の胎土である。文様は微隆起突帯に刻み目を入れ、周りは細い沈線が施されている。

XⅥ類 (364～368)

この類は縄文中期の船元式に比定される。器面には全面縄文を施している。器形は頸部で外反し、胴部が張り、底部は平底である。時期は縄文中期である。

XⅦ類 (369～374)

この類は縄文中期の春日式土器に比定される。器形は口縁部がキャリッパー状で、頸部が締まり、胴部は張るものである。底部は平底である。文様は条痕文の上に刻み目突帯と沈線、連点を施している。

XⅧ類 (375～417)

この類は縄文中期の阿高式土器である。375～384は凹

線を全面に施すグループで、385～399は凹線を口縁部にまとめて施文したグループである。400・401は沈線で文様を施し、404は渦巻き文である。403～405は無文である。また406～408は無文の鉢と底部である。409～417は平底の底部である。

この土器の放射性炭素測定では、取り上げNo4287が 3935 ± 30 y r B Pの結果が出ている。

XⅨ類 (418・419)

この類は細い沈線で施した縄文後期の出水式土器に比定される。

XX類 (420・421)

この類は三角断面口縁部と貝殻条痕を施しているため縄文後期の市来式系土器に比定される。

XXⅠ類 (422～425)

この類は灰色・黒色研磨系を施しているため縄文後期の御領式土器に類似している。

XXⅡ類 (426～437)

この類は頸部が締まり、「く」の字頸部であり、胴部も稜をもつため、縄文晩期の入佐式土器である。426～434は深鉢で、435～437は浅鉢である。

XXⅢ類 (438～486)

この類は頸部が締まらない深鉢をもつ黒川式土器に比定される。黒川式土器でも後半にあたる。438～455は深鉢で、456～469は浅鉢である。そして、470～485は内面を研磨調整したボール型浅鉢である。486は両面研磨したマリである。

XXⅣ類 (487～505)

この類は深鉢が「く」の字状肩部をもつ山ノ寺式土器である。487～498は深鉢で、499～505は浅鉢である。

その他 (506・507)

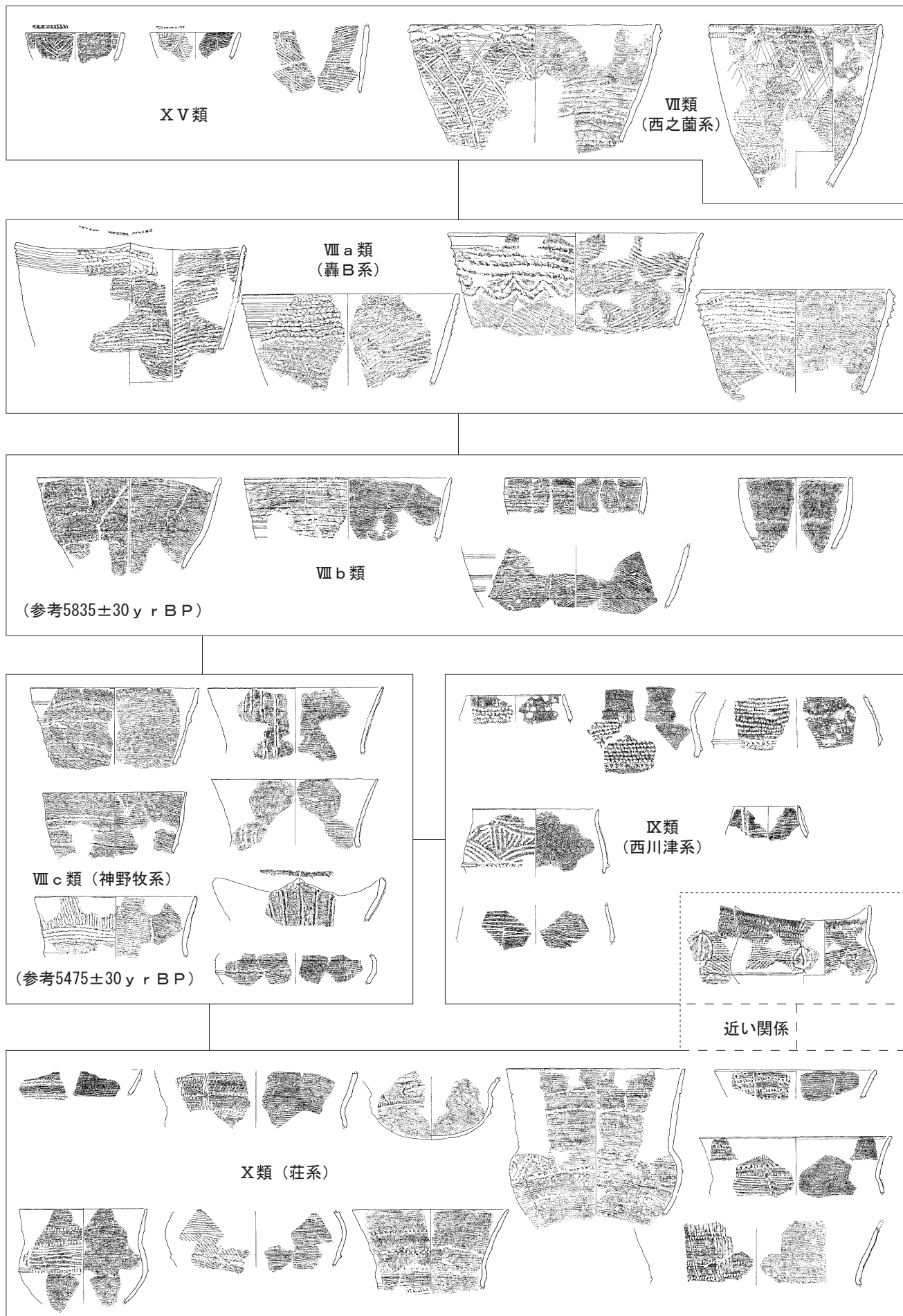
縄文晩期の土製円盤である。

遺構出土遺物 (508～536)

縄文前期の中に縄文中期の阿高式土器や縄文晩期の土器が含まれている。全体的に攪乱の可能性がみられる。

2 轟系土器と西川津系土器について

Ⅶ類は焼成・胎土が早期に類似し、文様も刻目突帯と沈線で菱形の連続文を描き、器面調整の条痕文が粗い。器形は砲弾形で底部は尖底である。よって、轟B式より先行する西之蘭式と思われる。また、XⅤ類が西之蘭遺跡の突帯を持たない類に含めることも考えられる。この砲弾形の土器は、始良郡吉松町セツ谷遺跡にも出土している。この土器は内外面とも条痕文仕上げで、文様は波状の沈線である。本遺跡ではXⅡ類にみられ、沈線と刻み目が施されている。直接アカホヤ火山灰が被さっていた報告がある。また、アカホヤ火山灰より下位の出土例は始良郡溝辺町木屋原遺跡にもみられる。本遺跡のⅦ類はアカホヤ火山灰以後と思われるが、器形や器面調整等



第184図 南田代遺跡縄文土器系統一覽表

からこれらとの関連性も考えられる。

Ⅷ類は大きな範疇で捉えると轟B式である。本遺跡ではⅧa類、Ⅷb類、及びⅧc類に分けた。

Ⅷa類が本来の轟B式である。器形は概ね底部が平底に近いバケツ型を呈している。突帯はミミズバレ状に摘み貼り付けで、口縁部の突帯間は詰まっている。このミミズバレの摘み跡はⅦ類の刻み目からの流れと思われる。また、沈線を施しているものもあり、施文の流れもみられる。器面調整はⅦ類の粗い条痕文の流れと思われる。よって、Ⅶ類の後にⅧa類の関連性としてとらえた。

Ⅷb類はⅧa類よりも文様の突帯が細くなったり太くなったりする突帯で、部分的には途切れたりする突帯を、間隔を空けて、広く施すタイプである。底部の形もⅧa類より丸底に近く、やや薄手である。なお、放射性炭素測定は 5835 ± 30 y r B P がでている。

Ⅷc類は焼成が良いため文様の突帯が鋭い三角断面突帯で突帯と突帯の間隔を空けて横方向に施されているものと、縦方向に詰めて多条に施すものがみられる。この土器の放射性炭素測定は 5475 ± 30 y r B P である。この土器は島根県の西川津遺跡にも類似したものが出土しているので山陰系との混ざりはこの時期と考えられる。

この類の一部は、鹿屋市神野牧遺跡に出土している。

Ⅸ類は刺突文と押引文を施す山陰系である。この類は文様が島根県の西川津遺跡出土に類似している。しかし、器形や施文の部分に異なる点がある。西川津遺跡の刺突文帯は概ね肥厚口縁部に施されているが、この類はそれがない。また西川津遺跡の文様帯の胴部は肥厚部の端部に多いが、本遺跡のこの類は突帯を貼り付け、その上に刺突文を施している。器形としては、肩張りのタイプが多い。文様は刺突文、押引文で組み合わせ施している。

X類はⅧ類とⅨ類の要素をもったグループである。器形は頸部に括れがみられるもので、文様は縦横の尖り突帯、多条尖り突帯、玉状貼り付け文、刺突文、沈線文などを施している。この土器は出水市荘貝塚出土の荘タイプ土器に比定されるものである。

今、この時期の編年に関しては諸説がある。今回は本遺跡での分析は、以上のようにまとめた。このまとめの関連性は一例にすぎない。

これらの関連性を図化したのが第184図である。

第3節 出土石器

本遺跡からは縄文時代の遺物包含層より919点の石器が出土し、その分布は集石や土器の平面分布と重なりがみられるが、単一の包含層からの出土であるため、帰属時期の判明にはいたっていない。

しかし、石器組成は、石鏃、石匙、石錐、削器、尖頭

状石器、楔形石器、石核、石斧、ハンマーストーン、磨石、石皿と器種も豊富である。

また、石材も県内産の黒耀石をはじめ、西北九州産の黒耀石、安山岩等豊富である。中でも佐賀県多久で産出される安山岩とホルンフェルス、頁岩は、石器も剥片も豊富に出土し、埋納遺構が検出されていることから、遺跡内での石器制作を考えることができる。

この中で石匙と削器は、安山岩、ホルンフェルス製のものが多くまた、他の石材で制作されたものよりも大型であり、前述した二つの石材の剥片とともに大型で大きさがそろっているため、この剥片から作出される石器が石匙、削器類に限定できそうである。

【参考文献】

- 宮田栄二 2004 「鹿児島県におけるサヌカイト石材について－サヌカイト流通システムの予察－」『石器原産地 研究会第4回研究会発表資料』
- 鹿児島県教育委員会 1992『西丸尾遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (64)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993『榎崎B遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (4)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001『上野原遺跡 (第10地点)』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (28)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『計志加里遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (38)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『市ノ原遺跡 (第1地点)』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (49)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『前畑遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (56)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『大原野遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (69)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大島遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (80)
- 志布志町教育委員会 1984『倉園B遺跡』 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 (7)
- 牧園町教育委員会 1989『界子仏遺跡・高天原遺跡』 牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 大隅町教育委員会 1993『鳴神遺跡』 大隅町埋蔵文化財調査概報第1集
- 金峰町教育委員会 1998『上水流遺跡』 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書 (9)
- 根占町教育委員会 2000『大中原遺跡』 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書 (9)
- 吉松町教育委員会 1999『七ッ谷遺跡』 吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)
- 鹿児島県教育委員会 1978『木屋原遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (10)
- 出水市教育委員会『荘貝塚』 1979 出水市文化財調査報告書 I
1989 出水市文化財発掘調査報告書 (3)
- 鹿児島県教育委員会 1977『上焼田遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)
- 鹿児島県教育委員会 1978『西之蘭遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (8)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997『神野牧遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (20)
- 日本考古学協会洞穴調査委員会 1970『黒川洞穴』『日本の洞穴遺跡』 平凡社
- 島根県教育委員会 1987『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ (海崎地区I)』
- 鹿児島県教育委員会 1980『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 (13)
- 大分県教育委員会 1998『かわじ池遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (8)
- 金峰町教育委員会 1978『阿多貝塚』金峰町埋蔵文化財調査報告書 (I)
- 高橋信武 2004『西川津式土器と轟式土器の関係』『山下秀樹氏追悼考古論集』
- 宮本一夫 1989『轟式土器様式』『縄文土器大観1』講談社
- 矢野健一 2002『中四国地方における縄文時代早期末前期初頭の土器編年』『環瀬戸内海の考古学』平井勝氏追悼論文集 古代古備研究会
- 桑畑光博 1994『鬼界カルデラ噴火直後の縄文文化―南九州縄文時代前期の様相』『考古学ジャーナル』378
- 熊本県教育委員会 1998『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告第166集
- 福山町教育委員会 2003『一本松遺跡』福山町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)

あとがき

南田代遺跡の発掘調査は、万之瀬川を挟んだ古市遺跡と同時進行の調査が続き、集中して調査する余裕がなかったけれども、縄文時代～中世の貴重な遺構・遺物が数多く見つかった。中でも縄文時代前期の土器や多種な石器、石斧埋納遺構や剥片集積遺構などは今後の貴重な資料となるものが多く、県内でも極めて重要な遺跡であることから、ここに調査報告書を刊行できることは、整理作業に携わった者として大変感慨深いことであり、これからも誇りに思いたい。

多くの汗を流して発掘作業に従事して下さった地元の作業員、報告書作成のために努力して下さった整理作業員さんをはじめ、鹿児島県土木部ならびに川辺町教育委員会など関係各位の方々に厚くお礼を申し上げます。

(文化財主事 平木場秀男)

○発掘作業員（確認・本調査 平成13・14・15年度）

赤峰明生・赤峰クニ子・鯨坂他賀子・有蘭ミツ子・宇都憲一・大倉野和子
大山健一・大蘭サヤ・門之園イツ子・倉狩イツ子・五反田景春・五反田義弘
酒瀬川文子・芝原節子・芝原マリ子・下蘭 操・新屋チエ・中禮アヤ子
中禮四夫・鶴田和子・轟木国夫・中島豊文・中島春美・中迎孝市・野入高美
萩原康司・原之園三男・日吉昭男・平山清巳・深野木義光・福永健一
柞木千代子・古市昭子・古市節雄・古市セツ子・牧田政任・松園節子・南田辰男
吉留美紀子・吉留ミチ子

○整理作業員（平成16年度）

浅山順子・小田原美保・落合由美子・倉持 希・児玉恭子・坂元真由美
笑喜ミチ子・末原涼子・谷村志乃恵・西川明美・羽生真理子・宮坂多美子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（88）

床上浸水対策特別緊急事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

南 田 代 遺 跡

2 0 0 5 年 3 月

発行者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175-1
印刷所 斯文堂株式会社
〒891-0122 鹿児島市南栄2-12-6